

闇の正義スパンダム

ぬこノ尻尾

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ウォーターセブン編の実質的な敵のボスポジションながら、小物で屑というスパンダムに憑依した主人公。

どうしようもないほどの力への渴望と狂気を宿し、世界を容易く滅ぼせるほどの力を得てなお、もう二度と戻らない平穏な幸せを求めらる。

己さえよければ他はどうでもいい。敵対しないのなら好きにすればいい、敵になったのなら容赦はしない。

そんな狂気に染まった闇に生きるバケモノの物語である。

目次

始まりは唐突に	1
かくして怪物は、血だまりより生まれいずる	5
時代の始まりに蠢く闇	11
武者修行	18
最強との出会い	23
親子のカンケイ	27
閑話・絶対強者	33
CP5所属と初任務	37
閑話・黒き太陽に焼かれて	42
狂信者は尾を振る	49
閑話・進化し続ける怪物	57
慢心とは余裕ある者の行いである	60
原作知識にて知りえるのは、描かれた範囲のみ	64
閑話・三者三様の狂気	68
前提が違う以上変化は起こりうる	77
CP9新司令長官	83
部下の叫び、怪物の怒り	88
自由を容認する価値とは	92
閑話・圧倒的強者の背	97
司令長官の仕事は多い	107
闇の正義の執行者たち	114
順調な時ほどトラブルは発生する	119
水の都と軽い観光	127
大きな流れは変わらずとも変化はある	132

可能性があっても掴めるとは限らない	142
閑話・長官の深謀遠慮	148
使うあてのない大金は邪魔なだけ	153
皆で楽しく休暇	158
潜伏任務の始まりと新たな狂人の影	165
利になる相手には高評価	171
閑話・個にして究極に至りうる存在	176
1%のひらめきこそが天才の境界である	182
化学反応とさらなる力への兆し	188
不要ならまともて消してしまえばいい	194
黒き太陽の審判	199
合同会議と七武海	204
海軍元帥との会話	211
謎に包まれた恐ろしき怪物	217
今後の方針と準備	222
夜明け前の前奏曲（プレリユード）	227
朝焼けの間奏曲（インタリユード）	236
昼下がりの変奏曲（ヴァリエーション）	248
モノクロの交響曲（シンフォニー）	252
夕暮れの後奏曲（ポストリユード）	263
夜の嬉遊曲（デイベルテイメント）	268
深夜の終曲（フィナーレ）	273
師弟の再会	281
去り行く友への言葉	286
関わった以上見逃す理由はない	291

忠犬の任務風景	298
新世界のレベルを教える特別教官	303
相手の強さを見抜けるのもまた強さである	309
思い出の地に届く行進曲(マーチ)	314
閑話・胃に響く哀歌(エレジー)	319
歌姫の幻想曲(ファンタジア)	327
青い鳥と妖精	333
閑話・唯一の適格者にして絶対者	339
渴望を得た獣	347
新たなる狂信者の獲得	353
閑話・海軍側の思惑	359
通達と悪魔の実	366
海軍とCPの合同訓練 前編	372
海軍とCPの合同訓練 中編	377
海軍とCPの合同訓練 後編	384
合同訓練を終えて	390
禁忌たる知恵と怪物の望み	395
そして始まりを迎える	402
魔王の奏でる歌	408
閑話・リトルガーデンでの一幕	414
狂科学者の恍惚	421
閑話・スカイピアでの一幕	427
正義の正しさを判断できるのは己のみ	433
運命の補填	442
トナカイも歩けば魔犬に出会う	448

水の都での思わぬ遭遇	456
ルフィと共にバーベキュー	463
怪物は気ままに傍観する	470
ひとつの終わりと、次の終わり	476
闇を呑む漆黒の太陽	482
エースの帰還と歌姫の手紙	490
麦わらの一味との対面	497
猫の成長	504
時代の移り変わり	510
この世界で得たもの	516
番外編・忠犬の一日	523

始まりは唐突に

生まれ変わったと、そう認識したのは唐突だった。劇的な切っ掛けがあつたわけではなく、いつも通りの朝にいつも通り朝食を食べている最中に唐突に思い出した。

少し混乱したが、前世で見たネット小説のように高熱を出したりするわけでもなく、スツと溶け込むように前世の記憶が己の頭に馴染んだ感覚だった。

奇妙な感覚だった。前世での経験分一気に精神が成熟したようでも混乱しながらも、頭は冷静に必要な情報を処理して現在の己の状況を正確に認識していく。

そしてある程度の情報の整理を終えると……正直頭を抱えたくなった。

現在の俺の状況は転生したと言って差し支えないだろう。一口に転生といっても、いくつかパターンが存在するものだ。

元居た世界への転生、異世界への転生、創作物の世界への転生……様々ではあるが、俺の場合はどうやら『創作物の世界への転生』に該当する。

さらに言えば、その創作物の世界への転生の中でも、俺は『原作キャラに転生』という形だ。なんとも二次創作的な展開ではある。

生まれ変わった世界は大人気少年漫画『ワンピース』の世界で、俺の名前は『スパンダム』……原作においては世界政府付属機関である諜報機関サイファーポールのひとつ『CP9』の司令長官を務め、いちおうエニエスロビー編での敵の組織のトップといえる立場の存在だった。

まあ、本当に立場だけで実際にエニエスロビー編のボスはロブリッチで、スパンダムは終始無能な小悪党とっていいポジションだった。

戦闘力は皆無で原作ではフクロウ調べで道力9……一般兵の数値が10とのことなので、一般人よりは強いが訓練した海兵よりは弱い

といったレベル。

一応ゾウゾウの実を食べた剣である象剣ファンクフリードを所持しているの、一般海兵よりは武器のおかげで強いのだろうが、それでも雑魚と言っていていいだろう。

性格はゲス……抵抗できないニコ・ロビンにさんざん暴力をふるい、職権乱用もしまくり、部下からの信頼はまったく無くルッチにも馬鹿呼ばわりされていた。

無理やり評価するなら、悪知恵は回るみたいで裏工作によってトムを死刑に追いやっているのと、いちおう歴史などの知識はそれなりにあつたみたいだ。

まあ、まとめると、雑魚で無能でゲスな小悪党というわけだ……最悪じゃねえか。その後の新世界編では、文字通りルッチの腰巾着となり、情けない姿を披露していた。

原作での己の行く末を確認したあとは、現在の状況だ。いまの俺の年齢は7歳……原作でのスパンダムの正確な年齢は覚えていないが40歳前後だったような気がする。となれば、まだ原作まではかなりの時間がある。

若い内に前世の記憶を得られたのは大きい。この年齢ならば原作の展開を回避すること自体は容易だろう。

より深く考えるために、そこで一度思考を打ち切って朝食を食べべきり、自分の部屋に戻る。七歳の子供のひとり部屋にしては、かなり広く家自体も世間一般では豪邸と呼べるレベル。

スパンダムの父親であるスパンダインは、スパンダム同様に無能っぽい感じではあったが、原作の22年前のオハラ時点でCP9の長官だったはずなので、30年少し前と考えられる現在もそれなりに高い地位に居ると予想できる。

さすがに世界政府直属の組織の高官ともなれば高給取りなのだろう。ただ思い返してみても、スパンダインは割と放任主義なのか、顔を合わせた機会は少ない。

原作では親子そろって出世欲と権力欲、そして己の保身ばかりの印象だったし、息子の俺に関しても己の出世や保身のための道具ぐらい

にしか考えていないのだろう。

ある程度育つたら、コネでポストを与えて出世させ、己が引退したあとは息子の稼ぎで優雅な暮らしとあったところか……まあ、原作での新世界編では病に倒れたとのことだが。

ともかく親子関係が希薄なのは幸いだ、今後動きやすくなるだろう。

さて、問題は今後どうしていくかだ。まずサイファーポールに所属することは、避けられないだろう。

親父は世界政府直属の諜報機関の高官であり、立場上表に出せないような機密に触れる機会も多いはず。その家族がサイファーポールに所属しなくなれば、無視はしてくれないだろう。

いかに無能とはいえ、あの保身ばかりしか頭がない親父が、家で機密情報を話すなどと言うへまをすることははない。

だが、実際に機密情報を知っているかどうかは関係ない。世界政府は、『知っている可能性がある人物』を野放しにしてくれるような優しい組織ではないというだけだ。

推定無罪と考えてくれるような組織なら、原作でオハラは滅んでいない。

となれば取れる選択肢は大きくふたつ、世界政府に属するか、海賊になるか……海賊は、ないなあ。いかに原作で主人公たちが陽気に描かれていようと、基本的に海賊は犯罪者である。

原作の麦わら海賊団は稀有な例で、犯罪や略奪を行わずにトレジャーハントでまともに食っていけるとも思えない。

だが犯罪者にならないというなら、選べる職業はサイファーポール一択だ。他に所属したとしても、絶対手を回されて最終的にはサイファーポールに所属することになる。

まあ、世界政府という超巨大組織の直属で親の立場的にそれなりのポストは約束されているし、生活は安定しているだろう。

後は原作の展開は出来るだけ回避したいが……まあ、さすがにいまから30年ほど先のことを考えていても仕方がない、もつと直近のことを考えるべきだ。

……力は要るな。このワンピースの世界で生きていくうえで、強さは重要だ。なにより『二度も死にたくない』という思いもある。

体を鍛えるのは当然として、やはりここはサイファールらしく六式を覚えることにしよう。覚えるための指導は……仕方ない親父を頼ることにしよう。

親父の立場なら六式の指導者ぐらい手配できるだろうし、親父にしてみても息子が有能であれば有能であるほど、本人の政府での立場も上がるだろうし断られることはないだろう。

いちおう六式も一種の機密みたいなものだとは思いますが……まあ、どうせ将来はサイファール所属が内定しているようなものだし、大目に見て欲しい。

見てもらえなかった場合は、独学で頑張るしかなさそうだが……やれやれ、先行きはなんとも不安だが、とりあえず上手く立ち回りたいものだ。

かくして怪物は、血だまりより生まれいずる

大きな屋敷の地下に作られた訓練所で無心で振るっていた拳を止め、タオルを手に取って大量の汗をぬぐう。

己がワンピースの世界に転生したと自覚して早三年、スパンダムとなった俺は現在自己鍛錬に精を出していた。自分の体を見てみれば、三年前とは桁違いに引き締まった肉体が見える。

さすがは空気にプロテインが含まれると言われるワンピース世界だ。前世の知識では普通十歳でこんなに筋肉が付くわけがないのだが、別の世界なのであまり気にしないことにしよう。

意外というか、嬉しい誤算だったのは己の才能……原作のスパンダムの有様から、才能なんて皆無だろうと勝手に思い込んでいたが、この体は鍛えれば鍛えるだけ強くなるし、技術もスポンジが水を吸うかの如く覚えることができた。

もしかしたら転生したことによる一種の特典のようなものなのかもしれないが、強くなる上では非常にありがたい。

ちなみに六式に関して親父に相談してみたが、結果としては駄目だった。六式は機密のひとつであり、基本的に許可を得た場所以外でみだりに指導することは禁じられているらしい。

なので指導者を呼ぶことはできない。というのが親父の言い分ではあったが、原作では海軍とかも使ってたし……単に親父にそっち方面のコネが無かっただけのような気がする。

まあ、代わりに地下に広い訓練施設と世界中からあらゆる武術や気功術などの資料を揃えた資料部屋を作ってくれたので、独学で訓練をしている。

それ以外はほぼ関与してこない放任主義であり、かなりありがたい。

しかし、なんというか、この肉体……本当に凄まじいというか、ハッキリ言ってしまうが……この三年の鍛錬で『独学で六式を使えるようになった』。

紙絵に関しては、実戦をする機会が無かったのでちゃんとできているか分からなかったが、剃に月歩に鉄塊に嵐脚に指銃とそれらしいことはできるようになった。

まだまだ極めたとは言いいきれないので、要鍛錬ではあるが……。

この辺りは原作知識のアドバンテージもある。そういう技術があり、ルフィやサンジがそうであったように身体能力で再現可能と知っていたので、独学でもなんとかあったというのが正しい。

しかし、覇気に関しては……いちおう練習はしてみたが、使うことができない。まあ、この辺りは六式を極めてから考えることにしよう。

そして同時に考えていたことがあった。それはこの『肉体そのものの改造』である。この体は才能に溢れてはいる。だが将来的にこの肉体を鍛えた末に、あらゆる相手と戦えるかと言われれば……首を捻ってしまう。

ワンピースには悪魔の実という特殊な力がある以上、多少の戦力差など覆されてしまう。ならばもつと、圧倒的な力が欲しいと……そう思った。

そのためには肉体そのものを更なるステージにあげる必要がある。己の肉体の筋肉……いや『細胞そのものを強靱なものに変化させる』。戦闘系の作品にはたびたび登場する異常な筋肉密度を持つ特異体質、それを再現……いや、さらに超えることができるのではないかと考えた。

理論上は可能だと思う。この世界にはクマドリやルッチが行った生命帰還……バイオフィードバックという肉体操作技術、ドレスローザ編でラオGが使用した地翁拳の戦闘保拳など、本来ならあり得ないレベルでの筋肉の圧縮や肉体の変化を行える技術は存在する。

幸いにも世界政府の諜報機関の高官である親父が用意してくれた書物には、いまは使い手がおらず廃れたものや禁忌とされているような技術が記されているものもあった。

それらを駆使すれば、肉体を変化……いや、進化させられるはずだ。正直、俺自身でもなんでこんなに強くなりたいと思っているのか、

湧き上がる焦燥感が理解できない。喉の奥が乾ききって水を求めるような力への渴望があるが、その根底が分からない。

そんなに根性のある人間ではなかったはずだが、この三年死に物狂いで鍛えられたのはそのナニカがあったからだと思う。

ともかく、これからは鍛錬に並行して特殊な気功術なども学んで、肉体を改造できる準備を進めていくつもりだ。

そう考えながら、俺は地下から出て専用の書齋へと向かった。

さらに三年の月日が流れ十三歳となったある日……俺は地下訓練場の中心で佇んでいた。自覚してから六年、鍛え上げてきた肉体、六式は我流ながらかなりの練度になったという自負があり、覇氣についても使えるようになった。

覇氣を使えるようになるコツは疑わないことと言われていたし、そういうものが存在すると知っているのはかなりのアドバンテージだった。

……いまでも十分に強いとは思うし、安定した生活ができる将来も約束されている。

だがやはり、力を渴望する思いが薄れることはなく、俺はこの日……己の肉体を作り変える決意を固めていた。

一度深呼吸をしてから生命帰還を発動し、同時に様々な気功術を併用、開始前に飲んだ秘薬なども合わせ……肉体に、細胞に、進化を促す。

「——があっ!?!」

直後に体を凄まじい痛みが襲う。まるで体内から爆発しているかのような言いようなない痛みに、口から大量の血が零れて床に落ちるのが見える。

創造と破壊はセットというべきか、いま俺の肉体はとてつもない勢いで破壊と再生を繰り返しており、それにより抗いがたい痛みが体中

を襲う。

「あぐつうう、ぐああ……ああああああ!？」

痛みに叫び、体中から血を吹き出しながら地面をのたうち回る。こんなに痛くて苦しくて……だというのに、なぜ俺はこの無謀な肉体改造を止めない？ いまもなお、苦しみながら肉体の操作を続けている？

分からない、けど……渴くんだ。喉が……心が……。

あまりの痛みに意識が遠のき、視界が白く染まっていく中で……俺の頭に思い浮かんだのは前世の記憶だった。

決して素晴らしい人生を歩んできたわけではない。良くも悪くも平凡で、それなりに幸福で、それなりに満ち足りた人生だった。

お金持ちとは言わないものの、なに不自由なく育つことができ程度には裕福な家庭に生まれ、それなりに愛情を持って育ててもらった。

家から近いという理由で地元の高校に入り、そこそこの大学に進学して、ブラックでもないホワイトでもないごくごく普通の会社に就職した。

生活に困らない程度の給料をもらい、多くはないが高校時代からの仲のいい友人も数人いた。盆と正月は実家に帰ってほどほどに親孝行して、漫画を読んだりゲームをしたり……平凡だがそれなりに充実していて、それなりに満ち足りていた。

……そう、それなりではあるが——幸せだったんだ。

けどそんな日は突然終わりを迎える。ある日の通勤途中に発生した通り魔事件で、犯人に刺されたことによって……俺の人生は終わりを迎えた。

どうしようもなく馬鹿馬鹿しくて、呆れる結末だ。テレビで死者〇名とだけ報道され、関係のない人間の記憶には欠片も残らない、そんな死に方。

親はきつと悲しんだだろう、友人もきつと同じだ。会社の同僚たちは葬式にぐらいいは出てくれただろうか？ それなりに仲の良かった上司が「惜しい人を亡くした」なんて語ったかもしれない。

——るな。

楽しみにしていた漫画やゲームもあった。やりたいこと、やってみたいことだつてまだまだあった。行ってみたいところだつてたくさんあったし……親孝行も、もつとしたかった。

漠然と、幸せな未来を思い描いていたんだ……だけど、それは突如『奪われた』。

——けるな。

犯人と面識があつたわけではない。たまたま犯行のタイミングで一番近くにいたのが俺だつたと、それだけの理由だろう。

刺されてから少しの間は、意識もあつた。体から熱が抜けていくと共に……死にたくない……そう思った。

——ふざけるな。

俺がいつたいなにをした？ 誰にも負けない努力をしたわけではないが、それなりに頑張つて生きて……充実していたんだ！ 人並ではあつても……幸せだと……そう思っていたんだ!!

「ふざけるなああつあ!!」

血を吐きながら口から叫び声が出た。ああ、理解した。俺はいま、完全に己の渴望の原点を理解した。

己の身に降りかかる理不尽が許せない。俺が積み上げてきたものを一瞬で奪い去つた不条理が許せない。身に降りかかる災厄になんの抵抗もできなかつた己が許せない。

『俺に降りかかるあらゆる理不尽が憎い』……。

いま、ハッキリと自覚した。俺は間違いなくスパンダムだ……結局俺は己の保身のことしか考えていない屑だ。屑で——いい。

ああ、だから——力がいるんだ！ あらゆる理不尽を、あらゆる不条理を跳ね除ける力が!! 何者にも『俺の未来を奪われない強さ』が!

それが得られるのなら、なんにだつて祈つてやる……神だろうと、悪魔だろうと、運命だろうと、奇跡だろうと……なんでも構わないから俺に——力をよこせ!!

海の皇帝がすべて敵に回つたとしても退けられる力を、世界を敵に

回しても跳ね除けられる——すべてを隔絶した力を——。

「……」

血だまりの中からゆっくりと立ち上がる。果たして本当にひとりの人間から出たのかと疑いたくなるような大量の血の中心で佇みながら、俺の口元には笑みが浮かんでいた。

清々しい気分だ。記憶を取り戻してからずっとあつた頭のモヤが晴れて思考がクリアになっていく……そうだ俺は——『自分さえよければあとはどうでもいい』。

原作のキャラたちがどうなろうと知ったことではない。原作通りに進もうが、原作とは違う道に進もうが、どうでもいい。

俺さえ幸せで満ち足りていれば……それで十分だ。

俺の邪魔をしないなら別にどうでもいい。幸せでも不幸でも勝手にやってくれればいい……だけど、俺の邪魔をするなら、俺の積み上げたものを崩そうとするなら……そのすべてが俺の敵だ。

俺は俺のために、あらゆる敵を始末する。

ゆっくりとした歩みで壁際に置いていた箱を取り、中から一丁の銃を取り出し……銃口を己の手に当てて、引き金を引く。

銃声と共に手には鈍い痛みを感じたが、それだけだ。銃で撃った手は少し赤く腫れてはいるが、『弾丸は皮膚を貫いていない』。

覇気も鉄塊も使っていない、それでも弾丸は俺の体を貫けなかった。

「……く、くくく、はははは！ あっははは!!」

腹の底から笑いが込み上げてきて、狂ったように笑い声をあげる。そうだ、出来ると思ったんだ。なにせ、上空1万mの空島から飛び降りても死なないキャラが居る世界だ。これぐらいできても不思議ではない。

確信がある。いま俺の肉体は確実にひとつ上のステージに到達した。あらゆる理不尽を跳ね除ける究極の肉体という理想にはまだ届かないが、それでも明らかに少し前の俺とは次元が違う。

なんだろう？ 記憶を取り戻してから六年……ようやくいま、俺は『新たに生まれ変わった』という実感を得た。

時代の始まりに蠢く闇

生命帰還や気功を用いたバイオフィードバックにより肉体を作り変えることはできた。だが、まだ理想に届いたとは言えないので、あと何回かは同じことをする必要はある。

だがそれだけでいいというわけではない。土台となる肉体は一番初めに手を加えるべきだが、同時にその肉体を活かす戦闘手段……武器も鍛えていかなければならない。

そのためにはある程度方向性というか、そういうものはしっかり決めておく必要があるだろう。そこがブレてしまつては、最終的な完成度にも差が出てくる。

今後さらに強くなるということを前提として、最初に考えるべきなのは悪魔の実についてだ。今後悪魔の実を手に入れる機会があつた際にそれを食するか否か。

うくん、悪魔の実は……正直いらぬな。能力の当たり外れもあるし、原作においてルッチはカナヅチは大したデメリットではないと言っていたが、問題はそこではない。

問題は一定量以上の水に浸かると力が抜けるということと、海楼石という『明確な弱点』ができてしまうことだ。

そしてなにより、正直個人的に悪魔の実には気持ち悪さを感じる。俺は少し前に自力で肉体を作り変えた。特殊な能力を得るためではなく、単純にいま以上に強い体に変化させたわけだが……発狂しそうなほど、いや常人なら間違いなく発狂しているほどの痛みや苦しみがあつた。

だが、『本来はそうあるべき』だと思う。いまの体を作り変えるんだぞ？ そこには巨大なリスクがあつて然るべきだ。

だというのに、悪魔の実はただ食すだけで、体を変質させたり特殊な能力を身に着けさせたりと、海に嫌われるという、たったそれだけのリスクで通常ではありえない変化……いや、進化をもたらす。

悪魔という名がしつくりくるような、まさに自然の摂理を冒瀆した

品と言えるだろう。

まあ、だが他人が食することを否定したりはしない。実際にどのような能力であっても使いようだし、手っ取り早く強くなれる手段はある。

ただ俺個人としては、自分ではない外的要因に好き勝手に体を作り変えられるということに強い嫌悪感を覚えるだけだ。

というわけで、悪魔の実は無しだ。

次に思い浮かぶのは、覇気……これはハッキリ言って最重要だと思う。というのも、悪魔の実に対してこれ以上ないほど有効な力だからだ。

ロギア系に対する攻撃手段になるのはもちろんだが、それ以外にも原作のパンクハザードにおいてドフラミンゴが、ローのオペオペの実による切断がヴェルゴに通用しない的な発言をしていた。

そして、ドフラミンゴとの決戦においてローはドフラミンゴに対して切断の能力を使っていない。あの切断や心臓抜きはホビホビの実並みの一撃必殺級の能力だと思うのだが、なぜ使わなかったのか……強大な覇気は、悪魔の実の特殊な力による影響を防ぐことも出来るのではないかと、そう予想している。

それを抜きにしても覇気は極限まで鍛えるべき力ではある……だが、そう簡単にはいかない。

というのも、俺は覇気を使えるようになったが、その後鍛錬しても……あまり覇気が強くなったように感じられないのだ。まったく成長しないというわけではないが、それでも肉体の成長に比べてあまりにも遅すぎる。

原作においてレイリーがルフィに覇気は戦いの中で磨かれる的な発言をしていたし、覇気をより強くするには実戦こそが最も効率がいいのではないかと考えられる。

なので基礎的な鍛錬はしつつも、覇気を本格的に鍛えるのは実戦を行えるようになってからだ。

悪魔の実、覇気、そのふたつに関する方針はそれでいいとして……問題はここからだ。俺の思い描く戦闘スタイルは、他を隔絶した圧倒

的な肉体による格闘戦。

そのスタイルを活かすうえで六式は相性がいいと思う。覇氣の入門編などと揶揄されることもあるが、俺は六式にはもつと上の可能性を感じている。

指銃……原作においては正直、そこまで強いという印象はなく、なんなら普通に殴る方が強そうではあった。だがこの技の神髄は、一点に力を集約することによる貫通力。それこそ、武装硬化ごと貫けるような貫通力があれば、強力な武器になりえるだろう。

剃……これはスピードをさらに上げる方向でいいだろう。あとは、音もなく瞬間移動のように動けるようになればさらにいい。

月歩……海の多いワンピース世界において、この技は極めて重要だ。空を高速で動きまわる。例えば、剃と月歩を組み合わせることができれば、飛べない相手に対しては圧倒的優位で戦えるだろう。

鉄塊……武装硬化の劣化のように認識されがちだが、武装硬化は体の外に纏う鎧で鉄塊は体の内部を硬化化させると思えば、別の力……むしろ、武装硬化と組み合わせることで最大の力を発揮できるのではないかと思うので、その方向で鍛えることにしよう。

紙絵……これは、鉄塊よりも攻撃的な防御だと考えている。回避して終わりではなく、最小限の動きで躲しつつカウンターまでをセットとして考えるべきだ。生命帰還と組み合わせることで原作でフクロウが行っていた紙絵・スライムのように本来ならあり得ない回避も可能かもしれない。

嵐脚……六式使いにとってメインウエポンとなるのは、やはり嵐脚だろう。だが、普通の剣程度の威力では意味がない。それこそ鷹の目並の斬撃を足で放つてこそ、必殺となりえる。

そして最後に、六王銃……六式使いの切り札と言っているが、溜めの動作が長すぎる上に両手打ちでは使い勝手が悪い。瞬時にかつ片手で打てるようにしたいところだ。

そうすれば、右手と左手の六王銃を同時に打ち込むなんて芸当もできるようになるだろうし、正しく切り札と言っているいい威力になるだろう。

バイオフィードバックによって進化した圧倒的な肉体で、極限まで研ぎ澄ました六式を用いて戦う。とりあえずは、その方針で鍛えていく。

それ以外にも体運びや基本的な打撃などは、山ほどある資料を見てよさそうなものを取り込んでいく。あとは実戦経験を積める機会も考えておかなければならないだろう。

・***

生まれ変わった……もとい、人間としての範疇を踏み外してから二年。前世の記憶を得てから通算で八年、十五歳となった俺は使い慣れた地下訓練場の清掃を行っていた。

ここと資料室には基本的に使用人を入れることはなく、清掃も含めて俺がひとりで行っている。というか、うちの屋敷は広さの割に使用人が少ない。

理由は言わずもがな諜報組織の高官の家だからだ。雇う相手には細心の注意を払わなくてはならないし、保身が第一の親父がそこを徹底しないわけもない。

俺自身が基本的に身の回りのことは自分でやりたがることもあり、使用人の多くは親父に付いており、俺は比較的に自由にやらせてもらっているので、いろいろやりやすく助かっている。

清掃を終えた地下訓練場を眺めてみる。しっかりと掃除はしていたつもりだったが、それでも床はすっかり赤黒く変色してしまった。よくもまあこんなになるまで、文字通り血反吐をまき散らしながらふざけた鍛錬をしたものだと思う。

実際、自分でも狂ってると思うし……実際に最初の肉体改造以来、どことなく歪んでしまった自覚もある。

しかし、なんとも矛盾したものだ。ほどほどの幸せとほどほどの充実感……平凡な幸せを願うわりには、文字通り血反吐を吐きながら圧倒的な力を求める。

怠惰を求めて勤勉に行き着くとはよく言ったものだと思う。

だが十分すぎるほど成果はあった。何度かのバイオフィードバックによる肉体改造……床を変色させるぐらい何度も血をまき散らして破壊と創造を繰り返した結果、思い描いていた理想の肉体に辿り着くことができた。

六式に関しても、目標としていたものは大体達成した。ただ、やはり覇気の成長はイマイチなので、そこは今後の課題と言えるだろう。だが、成果は上々……六式を修めたものは超人と呼ばれるらしいが、その領域はすでに遥かに飛び越え、いまの俺の肉体は『バケモノ』と表現するのが適切なレベルだ。

まあ、人間の癖に身長六百六十六cmもある白ひげとかも別の意味でバケモノではあるが……。

訓練場から外に出て、一度汗を流してから自室に戻る。大きな鏡の前で着替えつつ、やや癖のある薄紫の髪をオールバックに纏め、こげ茶色のスーツを着る。

黒いスーツでもいいのだが、黒スーツはいずれ飽きるほど着るだろうし、いまはこれでいいだろう。

うくん……しかし、顔は原作のスパンダムよりかなり引き締まっているが、隈のように見える目の周囲と、黒っぽい鼻のせいでやっぱりちよつと間抜けに見える。

バイオフィードバックでいじれば色は変えられそうな気がするが、自分の容姿にそこまで拘りは無いし親父や使用人への説明も面倒なので、別にいいか……。

そう結論付けた俺は、黒いネクタイを巻きながら部屋から出て見かけた使用人に親父が居るかを尋ねる。どうやら親父は食堂にいるらしいので、そちらに移動する。

食堂に辿り着くと、無駄にデカイテーブルで食事を行っている親父の姿を見つけたので、近づきながら声をかける。

「親父、少しいいか？」

「スパンダムか、どうした？」

「俺はいつ頃、政府の役人になる予定だ？」

「二年後を考えていたが、希望でもあるのか？」

親父にとって俺は己の地位をさらに確たるものにするための存在であり、そのためにはなにかしら出世コースのレールを引いていて根回しもしているはずだ。

大方二年後あたりにどこかのいいポストが空くから、そこに俺を就かせるような形にしたいのだろう。

それは別にいい。俺はこれでも親父には感謝している。深い情などは感じていないが、好きにいろいろやらせてもらった恩はあるし、こちらの邪魔をしないのなら出世の道具としてだろうがなんだろうが、好きに使えばいいと思っっている。

互いに利用し利用されるぐらいの関係が丁度いい。

「いや、時期に関しては親父の意向に従うが、その前に見識を広げるために軽く世界を旅したい。二年後までには戻るし、電伝虫も携帯するから有事には連絡をくれれば戻ってくる」

「……ふむ。いくら必要だ？」

こちらにさほど興味がない親父は、話がスムーズで助かる。親父にしてみれば、息子が漫遊旅行をしたいと言ってきた感覚なのだろう。

高い金さえかからなければ好きにすればいいと、そんな思いが伝わってくるようだ。

「最低限でかまわない。必要なら現地で追加調達する」

「くだらない騒ぎは起こすなよ？」

「心得ているさ、問題ない」

「ならば好きにしろ」

そう告げて親父は食事を再開する。それを確認してから食堂を出て自室に戻り、思考を巡らせる。

実戦経験を積むにはここが最善のタイミングとっていい。というのも、俺は現在ある情報によりいまが原作の何年前かを知ることができた。

もう少し遅くなると、グランドラインは異常なほど荒れるため、親父も忙しくなりこんな話どころではなくなるだろう。だから、このタイミングが最適だ。

そう考えながら、俺は机の上に置いていた新聞を手に取り、その一

面を見る。

『海賊王ゴールドロジャー逮捕!』

……そう、いまは原作の24年前。もう間もなく、ロジャーの処刑と共に大海賊時代が幕を開ける。ワンピースを求めて大量の海賊がグラウンドラインに飛び込み、世界が大きく荒れるからこそ……実戦経験を積むのに最適だ。

武者修行

——『おれの財宝か？ 欲しけりやくれてやる。探せ！ この世のすべてをそこに置いてきた！』

数ヶ月前に海賊王ゴールド・ロジャーが死に際に放った一言は人々を海に駆り立て、大海賊時代の幕が上がった。多くの者が海賊となり、数多のルーキーたちがグランドラインを目指した。

しかしもちろん、海賊王の言葉に奮起したのはなにも新しい芽ばかりではない。元々海賊だった者たちもまた海賊王の遺産を目指す。

海へ飛び出すルーキーたち、大きく動き始める古豪の海賊たち、それらを取り締まらんと奮起する海軍……幕が上がったばかりの新時代の海はまさに大混乱と言つていい状態だった。

そんな荒れるグランドライン後半の海を一隻の海賊船が進んでいた。船に乗っている人数もそれなりの規模であり、船長を務める男には中々の懸賞金がかけられていた。

よくも悪くも、海賊としては中の下あたりの存在……ロジャーや白ひげと戦えるほどではないが、だからと言つて誰かの傘下に下るにはプライドが邪魔をする。

微妙な状況の中で飛び込んできた海賊王の遺産『ひとつなぎの大秘宝』の情報は、男たちに一発逆転を夢見させるには十分だった。

ワンピースさえ手に入れば、己が次の海賊王になれると、そんななんの根拠もない夢を見ながらも、高い士気で海を進んでいた。

その日はよく晴れていて風も穏やか、グランドライン後半の海としては珍しいほどのいい天気だった。

どこかのどこかを感じる空気の中、船長である男も部下たちも少し気が緩んでいた。そんなタイミングで突如なにかが破裂するような大きな音が聞こえてきた。

「なにごとだ!？」

船長である男が叫び、部下たちが船の周囲を見渡すが、異常らしき

ものは見当たらない。そんな部下たちの様子を見ていた船長の目に、奇妙な光景が映る。

その存在は、いつの間にか慌てる部下たちの中心……甲板の真ん中あたりに佇んでいた。薄紫のウェーブがかった髪をオールバックに纏め、こげ茶色のスーツに身を包んだ目の周囲と鼻が黒い男。

少年から青年に変わりかけの幼さの残る顔立ちながら、纏う雰囲気はあまりにも異質だった。

「なんだあ、このガキ……どっから入り込みやがった？」

部下のひとりが怪訝そうに呟き、不穏な空気を感じ取った部下たちが青年の周囲に集まり始める。どうやって船にもぐりこんだのか、どこから現れたのかは分からない。

青年を取り囲むように集まった数十人の部下たち、いずれもグランドラインでいままで海賊として生き残ってきたそれなりの猛者たちだ。

そしてそんな部下たちは――。

「……刺」

一瞬青年の姿がブレたかと思っただ直後……糸の切れた操り人形のように、一斉に倒れ伏した。

「なっ!?!」

それを見て驚愕しつつも船長である男は高速で思考を巡らせる。

（いきなり倒れた？ 霸王色の覇気……いや、霸王色を放った感覚は無かった。それにうちの連中だって、並の霸王色で気を失うほどヤワじゃねえはずだ）

心に焦りが湧き上がってくるのを感じながら船長が視線を動かすと、倒れていた部下の顔が目に残った。その額には……まるで銃で撃ち抜かれたかのような穴が開いており、気絶ではなく絶命していることが理解できた。

（なんだ、コイツ……一瞬で数十人の部下を殺ったつてののか……）

背筋が冷たくなるような感覚。そして、一切の音が聞こえない静寂の中、青年の目がゆっくりと船長に向けられる。

それはまるで、暗闇の中から死神が獲物に狙いを定めるかのような

……。

「うっ、あああああ！」

反射的に上げた叫びは部下を殺された怒りからか、それとも圧倒的強者を前にした恐怖からか……。

船長は剣を抜き放ち、武装色の覇気を纏いながら跳躍、青年に向けて渾身の力で剣を振り下ろした。

「……紙絵」

振り下ろした剣が青年の体をすり抜けるように見えた。同時に周囲の景色がやけにゆっくり、鮮明に見える中でいつの間にか青年が己の真横に移動していた。

死の直前、極限に圧縮された時の中で船長は青年が右手の人差し指を立てるのを見た。

「……指銃」

そしてその次に聞こえてきた言葉が、船長が最後に聞いた音だった。

・***

俺以外に生きている者が居なくなった海賊船の甲板で、船長らしき男の死体の横でパラパラと手配書の束をめくる。

「……懸賞金は七千八百万ベリーか」

覇気も使えていたし億越えでもいいレベルだった気がするが……まあ、まだ大海賊時代が始まったばかりで、全体的に懸賞金が抑えめというのもあるし、このぐらいが妥当なところか。

いまはまだ一部の突出した実力を持つ海賊ばかりに注意が向いていて、こういった中堅レベルの海賊は意外と海軍のマークも甘かったりする。大海賊時代が本格化して、中堅の層がいま以上に厚くなってくれば注目度も高くなってくるのだろうか……まあ、こちらとしてはやりやすい。

就職して行動に制限がかかる前に武者修行のために旅に出て、早半年ほど……初めの二ヶ月ほどは前半の海で経験を積み、その後は後半

の海で活動を始めた。

もちろん面倒な海底ルートを通る理由も無いので、船を乗り捨ててレッドラインを越えるルートで来た。

結構な戦闘をこなしたし、相当の数の相手を殺した。ただ、正直なにも感じない。初めて人を殺すときは、なにかしら抵抗でもあるかと思っただが……特になんの感情も湧いてこなかったもので、やっぱり俺の頭のネジは肉体改造の際にそこそこの本数抜け落ちてしまったみたいだ。

そして、肝心の武者修行はというと、非常に順調だ。やはり実戦は覇気の成長の速度が違う。覇気を用いて戦闘を行うことで、どんどん覇気が研ぎ澄まされていく感覚がある。

一番成長幅が大きいのは相手が強い覇気使用である場合だが、そうじゃなくても普段の訓練よりは明らかに伸びる。

それに嬉しい誤算もあった。なんと俺には霸王色の覇気が備わっていたのだ。正直、スパンダムに王の資質があるとも思えなかったので使えないものだと思いついていたが、戦闘の最中それらしい出来事が起こり、検証してみた結果、霸王色の資質があることが分かった。

これは非常に大きい。俺は原作の知識で『霸王色を纏える』ということを知っており、強力な武器になつてくれるだろう。ただ纏うこと自体はできたが、維持するのに結構集中力を使うので要鍛錬といったところだ。

まあ、それはそれとして、いま殺したこの船長の七千八百万という懸賞金は正直『高すぎる』。これが1000万以下であれば、換金して旅費の足しにというのもありだったが、この額はよくない。

俺は別に賞金稼ぎとして名を上げたいわけでもない。というか将来諜報機関に属することを考えれば、己の実力はあまり知られていない方が望ましい。

とはいえ、あまり秘匿し過ぎても舐められるので適度な感じがいい。原作のルツチのように、世間には知られておらず潜入捜査も可能で、海軍の一般海兵には顔は知られていないが名前は伝わっており、中将クラスになると顔も知っているぐらいが理想的といえる。

うん、やはりこの海賊の換金は無しだな。船内にそこそこの現金があつたので、これを旅費の足しにして……船は沈めるか。

そう結論付けた俺は、目の前の死体の顔が書かれた……もはや不要な手配書を破り捨て、跳躍する。

「嵐脚」

足から放たれた斬撃がそれなりの大きさの海賊船を真っ二つに切り裂いたのを見届けてから、月歩を使用して離れた場所に泊めておいた小舟に戻る。

これでいい。俺の人生設計に大金は必要ない。それなりに十分だし、わざわざ賞金稼ぎのようなことをして稼ぐ気もない。

ここはグランドライン後半の海。夢破れた海賊が人知れず海の藻屑となり、行方不明になるなんて……よくある話だ。

さて、武者修行の猶予はあと一年半……次を狩りに行くでしょう。

最強との出会い

小舟の上で深くフードを被って顔を隠しながら、遠方で行われている海賊同士の戦いを眺める。

当たり前のことではあるが、バイオフィードバックにより目に関しても改造してあるので、十数キロ先の戦闘であっても鮮明に見える。

というよりほかに比べて目はかなり力を入れて改造した。どれだけ超速戦闘が出来る肉体を得たとしても、目がついていかなければ意味がないからだ。

原作のクロの杓死などは、俺に言わせれば欠陥品もいいところだ。自分にも見えず狙いも絞れない攻撃なんて危なっかしくて使えたものではない。

少し逸れていた思考を視線の先の海戦に戻す。見つけたのは偶然だったが、それなりの規模の海戦の中でも一際強烈な存在感を放つ大男が見える。

金色のウェーブがかった髪に、三日月のような白い髭……そう、かの『白ひげ』エドワード・ニューゲートである。なんで髪が金髪なのに、髭は白いんだ？

まあともかく、現在俺の視線の先では白ひげ海賊団が別の海賊と戦闘を行っていた。白ひげは部下たちに経験を積ませるためか、あまり手を出していないようだが、それでもただ立っているだけで戦場を支配しているかのような風格がある。

確か、白ひげは原作では七十歳前後だった覚えがあるので、いまは四十代後半、ロジャーと渡り合った経験もあり……肉体も精神も全盛期と言つていい時期だ。

ロジャー亡きいま、間違いなく世界最強と言つていい白ひげをこの目で見れたのは得難い経験だ。戦闘に参加していないのは残念ではあるが……。

そんなことを考えていると、視線の先の白ひげが『こちらを見た』。おいおい、冗談だろ？ 何キロ離れてると思つてやがる。俺のように

肉体改造をしているわけでもないのに、この距離でこちらに気付いたのか？

驚く俺の視線の先で、白ひげが大きく右手を振りかぶるのが見えた。

空間にヒビが入るような光景が見え、白ひげの右手からグラグラの実の衝撃波が放たれる。ホントにふぎけるなよ、グラグラの実。この距離まで攻撃可能とか、射程が長すぎる。

しかも、地震人間とか言いながら、実質振動を自在に操ってるし、それどころか空気を掴むような真似までしやがるし、他と比べて応用幅が広すぎるぞ。

心の中で悪態をつきながら、俺は迫りくる衝撃波にタイミングを合わせて右腕を振るう。

「六王銃」

グラグラの実の衝撃波と六王銃の衝撃波がぶつかり合い、まるで海面が爆発したかのように巨大な水飛沫があがる。こちらの衝撃波の射程はそれほどでもないのに、少々水を被ることになるが、それで済むなら安いものだ。フードが脱げないようにだけ注意する。

そしてそのまま臨戦態勢に移行しつつ水飛沫の先……白ひげを見る。追撃を仕掛けてくる気配はない。だが、霸王色の覇気を放っており、それがこちらに伝わってくる。

……挑発してやがるな。かかってこいと、原作より二十歳以上若いせいか、ずいぶんと血の気が多いじゃないか。

俺も霸王色の覇気を放ち、ふたつの霸王色がぶつかり合い海面に波が立つ。互いに牽制をしている状態といったところか……さて、どうする？ 明らかに白ひげの方は、こちらとやり合う気にいるが、応じるか、逃げるか……。

離脱は可能だ。白ひげが気付いたとは言え、十数キロ離れているし、こちらには月歩がある。

圧倒的強者で、なおかつ覇気使い……鍛錬として考えてもこれ以上ない極上の相手ではあるが、それ相応のリスクがある。

「……まだ、勝てないか」

少し迷ったが、放っていた霸王色の覇気を引つ込めながら呟く。残念ながら、やり合うにはリスクが大きすぎる。

覇気をぶつけ合った感じ、いまの俺より白ひげの方が強い。それでもそこまで圧倒的な差ではない。

やり合えば腕の一本ぐらいは取れる可能性が高いし、運がよければ相打ちに持つていける可能性もある……そう、『最高の結果で相打ち』だ。

さらにそれはあくまで白ひげと一対一で戦う場合の話だ。他の白ひげ海賊団の横槍も考えれば、待つ結果はほぼ確実に俺の敗北だろう。

ある程度戦って、痛み分けの形で撤退するという手段もあるにはあるが、顔を隠したまま戦い抜くのは不可能な上、今後を考えれば白ひげに顔が割れてマークされるのは悪手以外のなものでもない。

俺はプライドよりも我が身が大事だ。勝ち目の薄い戦いなんてする理由がない。

そう結論付けた俺は荷物を手に持ち、少し強めに小舟を踏みつける。その衝撃によって小舟が粉々に砕け、同時に大きな水飛沫が上がる。

その水飛沫に身を隠すようにして、月歩と剃の合わせ技……剃刀により高速でその場を離脱した。

気づかれたのは誤算だったが、白ひげの覇気とグラグラの一撃を体験できたのは大きな収穫だ。現時点では勝てないが、思ったほど世界最強という頂は遠くないことを確認できた。

……まあ、最終的には四皇全員が同時に襲い掛かってきても跳ね除けられる強さを身に着けるつもりなので、アレ四人分と戦える力が必要だが……さすがにそれは、かなり遠いな。

・***

「グラグラ、引きやがったか……」

「オヤジ？ いったいなにがあったんだよい」

遠方を見て笑う白ひげに、彼をオヤジと慕うマルコが声をかける。周囲の部下……白ひげの息子たちも、怪訝そうな表情を浮かべている。

それもそのはずだろう、彼らから見れば突如白ひげが海に向かってグラグラの衝撃波を放ち、それだけではなく覇気までも放って臨戦態勢に移行した……と思えば、突如覇気を収めて笑い出したのだ。

「なに、ちよつとばかり覗き見てるアホンダラにちよつかい出しただけだ。ネズミというには、ちとデカすぎたが……」

「……追うかよい？」

白ひげの発言、そして先ほどの『引きやがった』という台詞から察し、悪魔の実により飛行能力を持つマルコが尋ねる。

「放っておけ。それより、さつきとこの海戦を終わらせるぞ」

「わかったよい。さつきのオヤジの覇気で相手はかなりの数が気を失ったから、すぐ終わるよい」

白ひげの追う必要ないという言葉を受けて頷き、海戦を終わらせるために不死鳥となって敵船に向かっていくマルコを横目に見たあと、白ひげは先ほどと同じ方向を見つめる。

（何者だ？ あのレベルの奴なんぞ、世界に数えるほどしかいねえ筈だが、思い当たる相手がいねえな）

先ほどぶつけ合った覇気から、相手が凄まじい強者であることを察してはいたが……思い当たる相手がいない。少なくとも過去に戦ったことがあれば、あのレベルの覇気を忘れる筈がない。

となると導き出されるのは、白ひげが知らない未知の強者であり、その存在は白ひげに警戒を抱かせるには十分だった。

（挑発に乗ってこなかった上に、引く判断も早い。引くときには、躊躇なく船を捨てて沈めやがった。僅かでもこつちには情報を与えないってことか？ だいぶ慎重な相手だな……やり合って負ける気はしねえが、それでもこつちも無事じゃすまなかつた可能性が高い。本当に何者だ？）

なんとも言えない不気味さを感じつつ、世界最強の男はしばらくの間静かに海を見つめ続けていた。

親子のカンケイ

補給のために立ち寄った島の街にあるカフェでコーヒーを飲みつつ新聞を読む。

そこには、ダグラス・バレットが捕らえられたことが書かれていた。バレットにバスターコールが発動された時期などを考えるに、いまは原作開始の23年前辺りか。

となると、俺がサイファーポールに入る前後あたりで、オハラの一事件が起こるだろう。まあ、正直関係がないわけではないが、俺がこの件に関してどうこうする気はない。

というより、もつと正確に言えばニコ・ロビンを救う気などは一切ない。

やってできないことはないと思う。ある程度の時期は親父の動向に注意していれば分かるし、その気になればロビンだろうがオルビアだろうが救出することはできると思う。

だが、それを行う理由がない。というより、ハッキリ言っけりリスクとりターンが釣り合わない。

俺は自分が屑だという自覚はあるが、別に血も涙もない悪魔というわけではないと思っけている。人助けをすることだっけであるし、他者に同情することもある。

だが、俺は……『見返りを求める』。いや、別に見返りを求めない人助けを否定しているわけじゃない。原作のルフィたちのように、見返りなど無くても命を懸けて誰かを助けようとすることができる者も居るだろう。

それは立派だと思っけし、尊敬もするが……自分がそうする気はない。

俺は人助けに見返りを求める。例えば感謝を受けることによる優越感や、助けた相手が美人であればそれによる好意などにも期待するし、もつと直接的な金銭による見返りも欲しい。

いうならば天秤のようなものだ。人助けに伴うリスクと、期待でき

るリターンの価値が釣り合うかリターンの方が大きいなら人助けをする。だが、リスクの方が大きいなら助ける気はない。

今回のオハラの場合なんて、リスクとリターンが釣り合わない最たるものだ。世界政府と敵対する可能性、現場で後の三大将に遭遇する可能性、それどころか素性がバレれば俺が指名手配される可能性すらある。

それだけのリスクをかけて得られるものはなんだ？　ロビンからの感謝や好意か？　美人だとは思いますが、残念ながら俺にとっては将来設計が崩れるというリスクの方が遥かに大きい。

世界政府というのは間違いなく強大な……考えるまでもなく世界最大の規模と力を有する組織だ。よほどの理由がない限り敵に回すなんてのは馬鹿げている。

そういう意味では、原作のルフィたちは本当に大した度胸だと思う。元々海賊という犯罪者であるから成立するともいえるが……ともかく、そんなわけで、俺はオハラの場合には関わるつもりはない。

そんなことを考えつつ、かなり少なくなった手配書の束を取り出す。武者修行にでて一年半……事前に目を付けていた海賊。

のちの四皇などの傘下ではなく、比較的の後始末がしやすく、かつそれなりの実力を持つ海賊もかなり狩り終わった。

結局全員換金などはせず、海の底に沈んでもらったが……情報隠蔽のために部下も含めて皆殺しにできる規模かつ、それなりの強者という海賊は少なくなった。

幸いこれまでは大海賊時代の幕開けであちこちで海賊同士の戦いが起こっていたこともあり、多くの海賊が行方不明になったとしてもあまりバレる心配はなかった。

だが一年半も経つと、ある程度後半の海……新世界の勢力図も固まってくる上、海軍の警備体制も割と整ってきたので、身バレのリスクが大きくなってしまふ。

覇気も十分研ぎ澄ませることができたし、応用もほぼ習得した。俺は覇気に関して言えば、ルフィのような万能タイプというか、どれかが突出しているわけでは無いものの、すべての覇気にバランスよく適

性があつたみたいだ。

まあ、万物の声が聞こえたりとか未来が見えたりとか、そういうレベルには到達できていないが、十分と言つていいレベルにはなった。……となると正直もう、これ以上戦闘は必要ないかな？　であれば残りの期間はなにをするか。鍛錬をするなら実家に戻つた方が効率がよさそうだが、他にどこかいいところがあつたか？

そう言えばグランドラインにはC P 9のメンバーが幼少期に修行を行つていた島……グアンハオだつたかがあつたはずだが、場所が分からないな。

世界一の強国と言われる巨人族の国エルバフもいいかもしれない。あとはワノ国……は、既に百獣海賊団が居るだろうから、難しい。うーん、どうもピンとくる場所がないな……まあ、仕方がない。とりあえずは環境の酷い海域を回つて、自然相手に鍛錬でもすることにしよう。

・***

武者修行を終えて、十七歳の誕生日の一月前に家に戻ってきた。挨拶もそこそこに親父からは、俺がC P 5に配属されることを告げられた。

なんでも、現在のC P 5の主官が高齢であり、近々そのポストが空くため、そこに俺を座らせる予定とのことだ。

そういえば、原作でもスパンダムはウォーターセブンを訪れた際にはC P 5だつた気がする。

「ああそれと、以前お前が言つていた六式に関してだが、正式に政府所属となれば教官を手配することが可能だが、どうする？」

「必要な……いや、正式な指導は必要ないが一度本家本元の六式を見てみたいので、一日でかまわないから手配してもらえるか？」

「わかつた、ではそうしよう」

反射的に必要ないと言いかけたが、俺の六式は我流なので一度本当の六式を見ておきたいと思ひ手配してもらうことにした。

それほど必要だとは思えないが、一度見て俺のものと違いがあるのなら調整すればいいだろう。

「そういえば、最近とある科学者の技術を用いて、無機物に悪魔の実を食べさせるというプロジェクトが動いているのは知っているか？」

「ああ、たしか血統因子だったか？ それがどうかしたのか？」

この話が出るということはすでにベガパンクは政府に所属しているってことか？

「そのプロジェクトの上層部には付き合いの長い相手がいてな、完成品ができたら回してもらえるとこの話になったが……いるか？」

あくなるほど象剣ファンクフリードか……原作でスパンダムがファンクフリードを持っていた時期を考えると、まだ完成までに時間はかかるだろうが、研究自体はすでに始まっている感じが。

「いや、必要ない。俺は徒手空拳で十分だ。使うなら親父が使える。部下の戦闘能力が高かったとしても護身の手段はあったほうがいいだろうしな」

正直俺としては、武器に悪魔の実を食べさせる利点があったかと思う浮かばない。武器が自我なんて持っても、扱い辛くなるだけだろうし、ペットとしても……象は邪魔だ。

というか、武器が壊れたらどうなるんだ？ 死ぬのか？ そう思うと使いにくいにもほどがある。

手早く親父との話を終わらせ、配属の日程などを確認した後で部屋を出ようとしたタイミングで、ふとあることを思いついて口を開く。

「……ああ、そうだ、親父」

「なんだ？」

「最近運動不足じゃないのか？ いざという時に走って逃げられるように、最低限の運動ぐらいしておけよ」

「うん？」

近々、ウエストブルーのとある島で必死に走る必要があるのだからと、その言葉は告げずに軽く手を振って部屋を後にした。

・***

部屋を出ていく息子の背を怪訝そうに見つめながら、スパンダインは今後の展開について思考を巡らせる。

(我が倅ながら、よくわからん奴だ。まあ、年の割に大人びているし、本当かどうかは知らないが本人曰く独学で六式を使えるようになったとか……)

スパンダインは息子のスパンダムに対して、そこまで深い関心があるわけでもない。ただ、自分とはあまり似ていない性格だとは感じていた。

ストイックな気質なのか、ロクに贅沢もせずに地下訓練場で鍛錬ばかり……あれやこれやと強請ってこない分金がかからなくていいが、若干の不気味さは感じていた。

金はかからないものの、扱いにくさは感じていた。というより、スパンダインは早々にスパンダムを制御することは諦めた。

強請った地下訓練場で訓練をしているスパンダムを、一度見に行つたことがある……『狂っている』と、そう感じた。

当時の息子は七歳の子供だった。その子供が睡眠や食事の時間以外大人であつても根を上げそうな鍛錬を黙々と続けていた光景を見た時、スパンダインは背筋に寒気が走るのを感じた。

スパンダインは己の保身に関しての嗅覚は異常なほど鋭い。故に、彼は当時七歳の息子を見て確信した……『この存在は自分の手に余る怪物』であると……。

迂闊に制御しようとすれば、こちらが食い殺されると本能で感じた。故にその後は出来るだけ干渉しないように、スパンダムの自由によらせてきた。

(……飛びぬけて優秀であるのは間違いない。のちにポストを譲ることを思えば、俺の老後は安泰と言つていいな。だがまあ、怪物であるのは間違いないが……それでも、俺の息子であることも間違いないな)

互いに親子の情が無いとは言わない。いや、事実存在する。スパンダムもなんだかんだでスパンダインを親父と呼び、たまに気遣うよう

な発言を零すこともある。

スパンダインの方も、スパンダムの様子を気にすることもあるし、ひとり旅の際に大海賊時代が幕を開けた際には、無事を確認するために連絡もした。

そう、ある程度の絆はあるのだが……だが、単純にスパンダムもスパンダインも『ソレよりも己の方が大事』というだけなのだ。

世間一般の親子とは少し異なる互いに利のある関係というのが一番しつくりくる関係だ。

(……さて、六式の教官を手配するか)

スパンダムが強くなるのはスパンダインにとっても利点だ。頼めば協力してくれる程度には良好な関係は維持しておきたい。

スパンダムは金や権力に興味が薄く、そちらで御すことは難しい。ただ、恩に報いてやろうという気持ちはあるため、いまのように小さな恩を積み重ねておくのが一番有効だと感じていた。

さすが、親というべきか……スパンダインは、息子のスパンダムに關してその内に秘める狂気も合わせて、非常によく理解していた。

閑話・絶対強者

私はサイフアールの一員として長らく勤め、現場を退いたあとは教官として後続の育成に携わってきた。育て上げたエージエントは数知れず、教官としてもベテランと言っている。

そんな俺の下に、現CP9の司令長官から少し変わった仕事があった。そんな俺の下に、息子に六式を披露してほしいということらしい。初めに聞いた時は演舞と勘違いしていないかとか、見世物にするようなものではないなどと呆れた気持ちも抱いた。のちにCP9長官の座を譲るつもりである息子に、六式を実際に見せておきたいのとのだ。

まあ、コネ云々に関してはいい。そういう人事があることもよく知っているし、所詮上の立場になるにはコネや金が必要だということも知っている。

いまさら不平等だと文句を垂れるような歳でもない。むしろ六式を披露するだけで、出張費込みの特別手当がでるのなら、普段の教官の仕事より楽なぐらいだとそう感じて話を受けた。

「本日はよろしくお願いします」

「ええ、こちらこそ」

だが実際に出向いてみるとCP9長官の息子……スパンダム殿は、思ったより印象のよい相手だった。偉ぶったりすることもなく口調も丁寧で、穏やかな微笑み。そしてなにより、スーツをジャケットまでしっかり着ているせいで少し分かり辛いが、首回りなどを見る限りなかなか鍛えているように感じられた。

さすがに六式使い……後の超人候補ともいえる、生徒たちと比べれば劣るのだろうが、それでも並の海兵などよりはよっぽど鍛えているように思えた。

なるほど、おそらくかなり武芸に精通した方なのだろう。だからこそ、幹部候補という前線から遠い立場ながら、六式に興味をもってその目で見てみたいと感じたわけだ。

これならば、今日見た六式をなんらかの形で今後の糧としてくれるだろうと思えるし、こちらとしても披露のし甲斐があるというものだ。

印象が良かったことで気分も上がった私は、スパンダム殿に解説を交えつつ六式を一通り披露した。

「……といった感じになります」

「なるほど、ありがとうございます。勉強になりました」

そう告げて頭を下げるスパンダム殿……本来であれば、ここで私の仕事は終了なのだが、気分が乗っていた私はスパンダム殿にある提案をした。

「まだ時間もありますし、よろしければ軽く訓練を行ってみませんか？ スパンダム殿は相当鍛えているご様子ですし、もしかしたら習得できる可能性もあるかもしれませんよ」

「あくなるほど……お申し出はありがたいのですが……」

少し指導を行おうと提案する私に対して、スパンダム殿は少し迷うような表情を浮かべた。どうもこちらに遠慮している感じだった。

「遠慮する必要はありませんよ。これまで多くの者を育ててきましたし、指導には多少自信があります」

「ははは、なるほど……」

穏やかな会話だったと思う。その会話の中で苦笑を浮かべたスパンダム殿は、少し沈黙したあとで……ほんの僅かに目を細めた。

その直後……私は頷れ、床に両膝をついていた。

「……え？」

思わずそんな声が口から零れ落ちた。何が起きたのか理解できなかった。立てない、足に力が入らない。いや、それどころか、全身から大量の汗が噴き出している。

混乱した頭のまま前方のスパンダム殿に視線を向け目が合った瞬間——『己の首が飛んだかのように感じた』。

「——ッ!？」

理解、してしまった。ほんの一瞬、目が合っただけで……目の前にいる存在が、こちらなど遥かに超越した『理外のバケモノ』であると

いうことを。

別にスパンダム殿は臨戦態勢になったわけでもないし、ましてやこちらに殺気や覇気を飛ばしたわけでもない。ほんの少し、いままで抑えていたであろう気配を表に出したただけだ。

例えるなら穏やかに寝ころんでいた獅子が、欠伸をした程度であり、こちらに敵意など欠片も向けてはいない。だが、開いた口に生え揃った鋭利な牙を見て、こちらが理解しただけなのだ。

目の前の存在は自分など簡単に始末できるほどの、圧倒的な強者なのだ……本能で、魂で、痛いほどに理解した。

超人とは、普通の人間とはかけ離れた強大な力を持つ者を指す言葉だ。私は六式を修め、超人となった自覚と自信があった。

老いて前線を退いてもなお、己が高い場所に立っていると、そう感じていた。いや、信じていた。

ああ、そうだ。私は超人なのだろう、間違いなく超人だ。

だが、本物のバケモノから見れば超人などしょせん人の括り、少しの個体差程度の差しかないのだ。目の前のコレを強者と呼ぶのであれば、私は間違いなく弱者ではない。

ああ、駄目だ。コレは……駄目だ。なにもかもを塗りつぶすかのような、圧倒的な力の化身。なまじ私に一般人より優れた力があるからこそ、いやがおうにもこのバケモノの強大さを理解できてしまう。

ロクに呼吸も出来ずにガタガタを震えていた私を正気に戻したのは、ポンと軽く肩に置かれた手だった。

「……あつ……えっ？」

ゆつくりと視線を向けると、いつそ寒気がするほどに穏やかな微笑みを浮かべたスパンダム殿が居た。

「申し出はともありませんが、貴方もお疲れのようですよ、そのお話はまたの機会があればということでは」

「……は、はい」

「今日は本当にありがとうございました。父には私から伝えておきますので、もう帰っていただいても大丈夫ですよ」

その言葉は私にとって本当に救いであり、スパンダム殿が気配を

引っ込めたことも相まって、荒い呼吸を繰り返しながら何度も頷き、そのまま逃げるように鍛錬場を後にした。

あれ以上あの空間に居れば、私はきつと折れていた。床に頭を擦り付けながら、どうか殺さないでくださいと泣いていただろう……『相手には敵意の欠片すらないのに』……。

本当にアレはなんだったのだろうか？ いったいなにをどうすれば、あのようなバケモノが誕生する？

ただそこに存在しているだけで、周囲を押しつぶすかのようなプレッシャー。

生物としての格そのものが根底から違うような……。

理解できなかつたし、理解したくもなかつた。ただ、今日という日のことをいまずぐにでも忘れてしまいたかつた。

だが、当然忘れることなどできず、私は帰りの船の中の一室で、まるで幼子のように恐怖に震え続けていた。

CP5所属と初任務

十七歳となり茶色いスーツを黒色に変え、俺は予定通りサイファールポールへと就職した。最初に一月ほどの研修があったが、本当に基礎的なことを学ぶ座学中心なので、なかなか退屈だった。

親父は長期任務がどうか不満そうに言っていたので、このタイミングでオハラ的一件が起こったのだらうと思われる。

そういえば研修に入る前に親父が手配してくれた教官に六式を見せてもらったが、俺の我流の物との差はなかったので、俺は問題なく六式を扱えているということに安心した。

ずいぶんと面倒見のいい教官だったようで時間があるなら鍛錬を見してくれると言ってくれたが、正式に就職するまでは六式が使えることは黙っておいた方がいいだろうと、断らせてもらった。

研修を終えて俺が配属されたのはCP5……与えられたのは、数人の部下を率いる部隊長だとか小隊長だとかそんな感じのポジションだった。

いきなり部下を持つ立場だが、元々幹部候補というか指揮官側での採用なので、納得できるポジションではある。

資料を見る限り、部下には四式使いの男性と三式使いの女性がいる。他三人も諜報員としてはかなり腕に覚えがありそうな印象でなかなか優秀な部下を付けられた印象だ。

そして初めに与えられた仕事が、とある海賊の殲滅……なるほど、意図はある程度理解できた。この人事は明らかにコネ……親父の息がかかっているな。

基本的にサイファールポールは諜報機関であり、情報収集や潜入あるいは暗殺などならありがちだが、指定した海賊の殲滅などという仕事は、絶対にはいとは言わないもののほぼありえない指示だ。

よほどのことでもない限り、そういった仕事は通常サイファールポールではなく海軍が行う。おそらくこの仕事は他の部署ないし海軍からあえて回してもらったものであり、その意図は……『実績作り』だ

ろうな。

親父の話ではCP5の主官がそう遠くないうちに退職する。そして親父は俺をその後釜に据え、いずれは現在自分が就いているCP9指令長官の地位を俺に継がせる気である。

おそらく内々ではすでに俺がCP5主官になることは決定しているのだろうが、対外的にある程度の実績は必要だ。

情報収集や潜入は長期の仕事になる場合も多く、短時間で手柄を上げにくいというわけで、手っ取り早く分かりやすい実績を作れる殲滅任務を与え、優秀な部下を付ける方法を取ったのだろう。

優秀な部下が仕事をこなし、見ているだけの俺に実績が入るといふ……まあ、そういう図式だろう。

そんなことを考えつつ、俺はポケットから棒付きのキャンデーを取り出し、包装紙を取ってから啜える。この棒付きキャンデーは最近よく食べている。煙草は匂いが付くので、今後潜入などを行う際に不利になる可能性もあるし、そもそも好きではない。

ただ、漠然とした思考する時などの口寂しさを解消するために飴を舐めるようになった。別に普通の飴玉でもいいのだが、なんとなく棒付きの方が好きだ。

棒付きキャンデーを啜えつつ、俺は先日顔合わせを終えた部下のことを思い返していた。

四式使いの男はこちらに対して嫌悪感が隠しきれていなかった。まあ、俺は明らかになコネ採用だし、そんな相手が上につくというのが面白くないのは分かるが、諜報機関のエージェントがあればほど分りやすく感情を露わにしているようでは駄目だ。

見た印象としては自尊心が高いタイプで、四式が使える自分は部隊内で一番上だと思込んでいる……いや、自分を安心させている感じだな。格下にだけ威張り散らかすような典型的な小物タイプとでもいふべきか、原作の俺とは相性がよさそうな気がする。

三式使いの女は、コネ採用に不快感こそあるが「そういうものだ」と割り切っている印象だった。四式使いの男よりは優秀だと思うが、少し気になる目をしていた。

どこか劣等感と狂気が合わさっているような、不安定さのある目。資料を見る限り、孤児として世界政府に拾われ訓練施設で鍛錬を積んだ……六式を完全に習得する前に配属されているということはある程度の才能はあるが突出しているほどではないといったところだろうか？

おそらく『ふるい落としによつて落ちた側』なのだろう、見え隠れする劣等感と力を渴望するような、昔の俺に少し似た狂気の色はそれが原因だろう。

まあ、よくも悪くもどちらもCP5内で見れば優秀であることは間違いない。せいぜい任務では楽をさせてもらうことにしよう。

世の中というものは得てして想定通りにはいかないものだ。俺の目の前で海賊の船長の一撃を受けて、四式使いの男が崩れ落ちる。

死んではいけないようだが、気を失ったみたいだ。これで、四人やられて残りは三式使いの女だけだが、そちらも肩で息をしており完全に押されている。

「はーはっはは！ どうした政府の犬ども！ この程度か!!」

序盤は順調だった。さすがはコネ採用のお守を振られるだけあつて部下たちは優秀で、目標の海賊を発見するのも早かったし、戦闘でも圧倒していた。

事実として相手の海賊団は、船長以外は壊滅状態であり、あとは船長さえ始末すれば任務完了となるわけだが……この船長が部下とはまるでレベルが違っていた。

というか、正直俺も少し驚いた。まさかグランドライン前半の海を拠点にしており、懸賞金も二千万そこそこのレベルの海賊が『覇気使い』であり、それも武装硬化まで習得したレベルだとは思わなかった。

別に覇気はグランドライン後半……新世限定の技術ではないし、使えたとしてもおかしいわけではない。実際、世界の武術の中には覇気を覇気とは知らぬまま奥義としている流派もあつたりするし、独学

で覇気を使えるようになる者も居ないわけではない。

しかし、珍しいのは事実だ。武装硬化まで出来るのなら、前半の海ではさぞ無双できていただろう。だが、あまり大きな事件は起こしていなかったのか、懸賞金は低いと……なんとも不運な偶然だ。

楽できると思っていたんだが、残念なことだ。まあ、初任務でいきなり部下を失うなんて失態を犯すわけにもいかないし仕方ない。

一度溜息を吐いてから、俺は三式使いの女に向かって振り下ろされた剣を指で砕きながら船長の前に立つ。

「——なっ!?!」

「た、隊長?」

「……下がっている、あとは俺がやる」

手短かに告げて砕かれた剣を信じられないといった表情で見ている船長に視線を向けると、船長は青ざめた顔で一步後退した。

さて、サイファーポールとしての初陣なわけだし、ここはせっかくだから原作のルッチにあやかっただけでそれっぽいことでも言ってみるとするか。

「闇の正義を、執行する」

「ッ!?!」

俺の言葉にビクツと肩を大きく動かした船長は、慌てた様子で体の前で腕を交差させ覇気を纏う。なるほど、たしかに前半の海において覇気は極めて強力だ。

能力者への対抗策としてだけではなく、剣も弾丸も武装硬化で防御することができたのだろう。

だが、新世界の基準で見れば目の前の船長の練度は中の下にも満たない……本当に、話にならない。

「指銃」

武装硬化した腕ごと指銃で心臓を貫いた。

綺麗に円状の穴が貫通して絶命した船長が倒れるのを確認したあとで、三式使いの女の方を振り返って告げる。

「任務完了だ。遺体は船長のものだけあればいいだろう、それ以外は船ごと沈めて帰るぞ」

「……は、はい」

そう言いながら近くに倒れていた四式使いの男を含めた四人の部下を重ねて持ち上げると、不意にそのタイミングで三式使いの女と目が合った。

……『狂った目』をしてやるな。というか、『いま狂った』のか？
なんか少し、面倒なことになりそうな気がするな。

そんなことを考えながら部下と船長の遺体を積んで、CP5の本部への帰路についた。

かくして初任務を終えた俺だが、なんとなく感じた嫌な予感はずいぶん現実のものとなり……出勤した直後、なぜか三式使いの女が俺の前で、相手に与える社会的ダメージという点においては極めて強力な……土下座の姿勢で待機していた。

……まだ就職して一月も経ってないけど、有給とれねえかな……。

閑話・黒き太陽に焼かれて

弱者の語る正義に意味も価値もない。それは、私が幼くして理解した世界の真理だった。

私はグランドラインの小さな島で生まれ育った。立派な父と優しい母、仲のいい友達もいて幸せに日々を過ごしていた。

その島には、小さ目の海軍基地があり町で海兵を見かける機会も多かった。

幼い頃の私は海兵に対して憧れを抱いていた。「この島の人々は我々の正義にかけて守ってみせる」と語るその姿を頼もしく感じだし、掲げる正義を尊くて素晴らしいものだと思っていた。

大きくなったら私も海兵になりたいなんて、父や母に語った日のことが懐かしい。

だけど、そんな私の幸せは、漠然と思い描いていた未来は……本当にあつさりと壊れてしまった。

ある時島に海賊が攻めてきた。目的はもちろん略奪……小さいとはいえ海軍基地のある島に攻め込んでくるなんて、馬鹿な海賊たちだと……初めは町の人たちも笑っていた。

だけど、それはすぐに悲鳴に変わった。その理由は呆れるぐらいに単純だ。その攻め込んできた海賊が、この島に居る海兵たちよりずっと強かったと、ただそれだけの話だ。

町は瞬く間に火の海に変わり、私の両親を含めてほとんどの住人が殺された。私は母が咄嗟の機転で、床下の小さな保管庫に隠してくれたおかげで生き延びた。

果たしてどれぐらいの時間、暗い保管庫の中で体を小さくして震えていたのだろうか？ 海賊たちだって馬鹿じゃない。

暴れ続けていれば海軍の援軍が来ることぐらい理解しており、町をある程度破壊して略奪を終えるときさっさと引き上げていった。

音が聞こえなくなっしてから私が保管庫から外に出て最初に見たのは、切り殺された両親の死体。次に見たのは、仲の良かった友達や知

り合いの死体……フラフラと当てもなく彷徨って最後に見たのは、幼い私に「この島の人々を守る」と語った海兵の死体だった。

……結局……そうなんだ。いくら口で、立派なことを語ろうとも、そこに力が伴わなければ意味など無いのだ。

弱者の語る正義は、強者によつて踏みつぶされるだけの無価値なもの……力なき者に、正義を語る資格なんてない。

とめどなく流れる涙を拭うこともなく、幼い私は地獄と言つていい光景を見続けていた。

・***

その後私は、孤児として世界政府の施設に引き取られた。そこは一種の養成施設も兼ねており、様々な教育を受けることができた。

私は自ら希望して、戦闘訓練を積極的に行つた。幸い私には才能があつたようで、それなりに期待され、数年の後には更に高度な戦闘訓練が受けられる場所……将来の特級エージェントを育成する島に招かれるまでになった。

その頃の私の心には大きな野望があつた。弱者の語る正義に価値は無い……だから、私になつてやると、そう思つていた。

圧倒的な力を持った存在に、真なる絶対正義の体現者にと……そんな野望を……。

だけど、現実はどこまでも残酷に私を打ちのめした。たしかに私には才能があつた。それは間違いない……なんなら、天才と呼ばれてもよかつたかもしれない……そこが、世界政府という世界最大規模の組織の養成機関でなかつたのなら。

初めは順調だった。いままでより桁違いに過酷な鍛錬にもしつかりついていけたし、六式と呼ばれる技術も少しずつではあるが確実に習得の兆しは見えていた。

六式を修め超人と呼ばれるようになると……そう思つていた。だけど、このグアンハオという島に来て、数年が経つ頃には、いやがおうにも理解できてしまった。

『真に選ばれし者たちとの差』というものを……。

そう、いつしか気が付いた。明らかに、私たちとは進むペースが違
う者たちがいることに……。

私が一歩進む間に彼らは二歩も三歩も進む。私が五歩進む頃には、
その差は歴然と言っているいいレベルにまで広がる。超人になりうる者
たち、選ばれし才能、そのどれもが私の肩に重くのしかかった。

認めたくはなかった。私が彼らの領域には届かないのだと、認めたく
なかった、才能があると……しよせん程度のレベルでしかないこと
を……。

だが、そんな僅かなプライドも、真の天才によって粉々にされた。
稀代の天才と呼ばれるロブ・ルツチ……彼はまた、選ばれし者たちの
中でも別格の存在だった。

絶対に私では勝てないと、そう理解した瞬間、私の心は折れてし
まった。

弱者の語る正義に価値も意味もない……そして私は、正義を語る資
格を持たない側だった。

結局私は三式を修めたところで、振るい落としによって訓練を打ち
切られサイファールへの配属が決定した。仕方のないことだと思
う。毎年新しい候補生はやってくるのだ。半端な才能をいつまで
も鍛え続ける意味はない。

配属先が決まり、正式にCP5の一員となるころには、かつて私の
中にあったはずの野望や熱意は燃え尽き、残っていたのは僅かな燃え
カスだけだった。

CP5としての日々はそれなりに順調だった。腐つても三式使
いである私は、CP5内では十分過ぎるほどの実力があり重宝されてい
た。

戦闘力で私を越えるのは、四式使いの先輩ぐらいだ。まあ、この先
輩は自尊心が高いというか、なんというか下を見て優越感に浸るよう
なところがあるので、個人的には好感の持てない相手ではあったが
……。

まあ、そんな風にほどほどに日々を生きっていると、主官よりある指

示を言い渡された。長い話を要約するとコネ採用で入ってくる相手の小隊に所属し、任務をこなせというものだった。

早い話がコネ採用の相手の実績作りを手伝えと、そんな感じだ。主官もかなり高齢で退職が囁かれていたので、次期主官候補だろうと予想はできた。

先輩は、なんとというかコネ採用という部分に露骨に嫌悪感を抱いているようだったが、私としてはそこまで嫌とは思わなかった。

所詮世の中はそんなものだ。コネ人事である程度上の地位が約束された人物なんて、世界政府にも海軍にもいくらでもいる。私の日々に大きな影響があるわけでもない、そう思っていた。

そうしてやってきたスパンダムという名の新隊長は、思った以上に鍛えているようで、体幹はかなりしっかりしているように感じられた。

凄みのような、戦える者の雰囲気は感じないのでスポーツかなにかをやっていたのかもしれない。少なくとも、想像よりはずっと動けそうな相手だと思った。

少なくともこれだけしっかり自分の肉体を鍛えているということ、それなりに努力家ではあるのだろうし、私個人としての印象はよかった。

・***

簡単な任務のはずだった。新人の隊長の指揮下での海賊の掃討作戦。海賊の規模は小さく、それこそ私ひとりでも十分に壊滅させられる程度のレベルのはずだった。

そう、コネ採用の実績作りという側面の強い任務のはずだった。実際当初は思惑通り進んでいた。海賊の居場所は簡単に掴め、戦闘もスムーズに進んでいた。ただひとつ、その海賊団の船長の強さだけが大きな誤算だった。

「はーはっははー！ どうした政府の犬ども！ この程度か!!」

大きなダメージを負った先輩が倒れ、海賊の船長は勝利を確信した

かのような笑みを浮かべる。私も足に力が入らず片膝をついて、肩で大きく息をしていた。

この船長だけ、他の海賊とはレベルが違い過ぎる。億も越えない海賊で、これほどの力を有しているとは、予想外過ぎた。

特に、手や体が黒くなる力……おそらく悪魔の実の能力だと思いが、それがあまりにも厄介だった。その状態になると先輩の指銃も私の嵐脚もまったくダメージを与えることができなかった。

正直もう、打つ手がない……私の持ちうる手札にあの鉄壁の防御を貫く術はなく、船長の男が剣を振りかぶるのが、まるでスローモーションのように見えた。

……ああ、いままでと何も変わらない。私は弱くて、降りかかる理不尽に対してなにもできず蹂躪されるだけ。

幼い頃、海賊に町を焼かれた時から……結局、なにも変わってないじゃないか……。

心の中が絶望に染まり、私に向けて無慈悲な死の刃が振り下ろされた。

だが、その刃が私の体に届くことは無かった。スツと刃の軌道上に一本の指が差し込まれたかと思うと……男が振り下ろしていた剣は、まるでガラスでできているかのように容易く砕けた。

「——なっ!？」

男の驚愕した声が聞こえると共に、私の前に隊長が立つ。黒いスーツに包まれたその背は、最初に見た時よりもはるかに大きいような、そんな気がした。

「た、隊長?」

「……下がっている、あとは俺がやる」

眩いた私の言葉に、淡々とした声が聞こえた直後——空気が変わった。

まるで空気全てが鉛に変わったかのような、意識しなければ呼吸するのすら難しいほどの、全身が押しつぶされそうな凄まじい重圧。

それを誰が発しているのかは、すぐに理解することができた。

思った以上にしっかり鍛えている? 違う、これは、そんなレベル

じゃない。

凄みのような戦える者の雰囲気は感じない？ 違う、それはただ隊長が気配を抑えていただけ。

ほんの一瞬で理解した。私だけじゃない、青ざめた顔をしている海賊の男も……体が、本能が、魂が即座に理解した。

いまこの場において、強者と呼べる存在はただひとり、隊長だけ。私も男も、隊長がその気になれば、虫けらのように踏みつぶせる弱者ではない。

ただ立っているだけで、空間が軋んでいるのではないかと思うような、他を隔絶した圧倒的な力の化身。それが目の前に佇む隊長だ。

ほんの少し抑えていた気配を表に出しただけで空間を支配した隊長は、静かな声で告げた。

「闇の正義を、執行する」

瞬間——全身が総毛立った。まるで落雷にでも打たれたかのような衝撃が、私の体を駆け巡った。

弱者の語る正義に価値も意味もない……なら、『圧倒的な強者が語る正義』には、どれほどの価値があり、どれほどの意味があるのだろうか？

分からない。だけど、理解した。いま目の前に存在しているのが、私の夢見た理想……あらゆる理不尽を、あらゆる不条理を粉碎する絶対正義の化身。

顔が熱い、胸が高鳴り、目からは涙が流れてくる。私が辿り着けなかった頂に立つその背は、あまりにも力強く、どうしようもないほど眩しかった。

そして私の目の前で、隊長は闇の正義を執行する。

海賊の男は両手を交差させその手を黒く染める。先輩や私が齒が立たなかったあの力だ。それに対して、隊長は人差し指を立て……。

「指銃」

そう一言呟き、それですべてが終わった。

交差させた腕、男の体、その背にあった船の帆柱……そのすべてにコインのような大きさの穴が開いていた。まるで、隊長が指さした先

の空間が削り取られたかのような、そんな光景だった。

これが、指銃？　なんて、なんて、凄い……なんて圧倒的な……。ドクドクとうるさいぐらいに心臓が脈打つ。そして同時に、心の中に残った微かな理性が訴えてくる。「それ以上見てはいけない」と……。

強すぎる光は目を焼く——分かっている。私にとって、隊長という光は、あまりにも強すぎる。これ以上隊長を見続ければ、私は狂ってしまうだろう。

ソレが分かっていたからこそ私は、心の中に微かに残った理性を己の意思で消し飛ばし、隊長の背を見続けた。

そんな私の視線を受けながら、隊長はゆっくりと振り返りながら告げた。

「任務完了だ。遺体は船長のものだけあればいいだろう、それ以外は船ごと沈めて帰るぞ」

「……は、はい」

高鳴る胸の鼓動を感じながら、私の心には強い決意と渴望が宿った。強くなりたい、私が焦がれる絶対正義の化身の傍に居るために、強くなりたい。

そのためなら——なにを犠牲にしてもかまわない。私にとっての絶対は、隊長だけでいい。

その日、私の心は……昼の空を塗りつぶすほどに輝く漆黒の太陽に焼かれ——自ら望んで、心に狂気を宿した。

狂信者は尾を振る

謎の土下座を行っていた三式使いの女を立たせ、小会議室の使用許可を取ってそちらに移動して話を聞くことにした。

三式使いの女は興奮した様子で熱くいろいろと語っていたが……大半が俺に対してこれでもかというほどの絶賛であり、ゴマをすっているとかではなくどうも本心で言っているようであった。

「……それで？」

「はい！ 私は隊長のお役に立てるようになりたいんです！ なので、お願いします!! どうか、私を鍛えていただけませんかでしょうか!!」

そう言って再び床に擦り付けるように頭を下げる三式使いの女……さて、どうしたものか？

メリットは、ある。早めに鍛錬を行える相手は確保しておく必要があったし、多少時間はかかるだろうが覇気を覚えさせれば覇気の鍛錬にもなる。

問題は、この女を鍛えたとして最低限鍛錬の相手を務められるレベルにまで育つかという点だが……。

「……」

「……」

少し顔を上げてこちらを見る三式使いの女を見る……なんとまあ、狂った目をしてやがる。毎朝鏡で見ている俺の目によく似ている。

間違いなくこの女には深い狂気が宿っている。俺とは種類が違うが、イカれているのは間違いない。ならば、可能性はあるか……。

「以前にも聞いたが、もう一度聞いておこう。名前は？」

「ポーラ・チェルシーです！ どうぞ、お好きなように呼びください！」

「……じゃ、『ポチ』で」

「はー」

……嬉しそうだな。ポチでいいのか？ 首の後ろで細く一本に纏められた茶色の髪が、犬の尻尾みたいにも見えるので、適当だったが呼んでみるとわりとしっくりくるあだ名ではあった。

「……覚悟は？」

「ありますー！」

「いいだろう。とりあえず、部隊の大半が治療中でいまは時間もある……親しい相手が居るなら、遺書を用意してこい」

いくつか興味があることや実験したいこともあって丁度いいので、俺はポチを鍛えることに決めた。まあ、途中で死ぬかもしれないが、それならそこまでの相手だったという話だ。

■***■

防音性に優れた広い地下訓練場。貸し切りにしたその場所では、ひとりの女……ポチが、血反吐をまき散らしながらのたうち回っていた。

美少女と言って差し支えない容姿の女がもだえ苦しむ姿というのは、好きな者なら垂涎の光景かもしれないが、俺にとってはどうでもいいので、叫び声をBGMに本を読んでいた。

現在ポチが行っているのは、バイオフィードバックによる肉体改造だ。といっても、俺が行っているものとは大きく異なる。

というか、俺と同じものを行わせるのは現実的ではない。細胞のひとつひとつを進化させる俺の肉体改造……現在も定期的に行っているが、これにはいくつもの前提が必要になる。

複数の気功術を始めとした世界中様々な武術の技術、俺が獲得しているものだけでも50以上の流派の技術がある。まあ、あくまで必要なものを習得しただけなので、その流派を修めたというわけではないが……。

そして、物によっては法に触れる可能性もある数々の秘薬や禁術……これにはかなり希少な材料も必要であり、俺も親父の伝手が無ければ手に入れるのは難しい品も多い。

それらをポチ用に用意するのは手間などというレベルではないし、そこまでする気もない。

なので、ポチにはいくつかの気功術を教えた上で、筋肉の圧縮という形の肉体改造を行わせている。

ヒュペリオン体質や英雄体質などと呼ばれるような、常人の数倍の筋肉密度を持つ肉体。このワンピースの世界においては、ゾロを始めとして見た目の筋肉量からは想像もできないほどの力を持つ者が多いので、そもそも転生前の世界とは人間の筋肉密度が違うのではないかと考えている。

その上で、それをさらに圧縮して密度を上げさせる。ポチも三式を修めるだけであって、それなりに鍛えてはいたが……俺の訓練相手としては最低レベルにも達していない。

それこそ軽く撫でただけで肉塊と化してしまいうだろう。なのでまずは、その最低限のレベルまで上げるつもりだ。

さて、この肉体改造だが、俺の行う細胞ひとつひとつを作り変えるものよりはマシとは言え、それでも想像を絶するほどの苦痛がある。当たり前だ。生まれもった肉体を無理やり作り変えているのだから、地獄すら生ぬるい苦痛が伴うのも必然だろう。

ハッキリ言おう、これは気合や根性で耐えられるものではない。何度も肉体改造を行っているからこそ断言できるが、そういう次元ではないのだ。

よくて発狂、それを越えても途中でのショック死……現在ポチが血反吐をまき散らしているように、そもそも自然の摂理に反した行いを肉体そのものが全力で拒絶している。

では、どうすれば乗り越えられるか……必要なものはひとつ……『異常なほどの狂気』だ。

死の淵から手が離れ、地獄に落ちて業火に焼かれてもなお、無理やりにも這い上がるほどの純粹で一直線の狂気……この肉体改造は、狂い違った異常者にしか乗り越えられない。

俺は自分が狂っているという自覚がある。本来の人として大切なものは、最初に肉体改造をした際に頭のネジと共に抜け落ちた。

そんなことを考えながら本を読んでいると、いつの間にか叫び声は止み、ポチは血だまりの中でうつ伏せに倒れていた。

尋常ではない出血の量、普通に考えれば死んでいるとしか思えない光景……それを横目に見ながら、俺は本を閉じて呟いた。

「……気分はどうだ？」

「……最高です……生まれ変わった気分です」

高揚した声と共に血まみれの女は立ち上がり、こちらを振り返って恍惚とした笑みを浮かべた。

なんともまあ、狂った目だ……本当に、俺の目とよく似ている。

「まだスタートラインの手前にすら達していない。今後も、何度か肉体改造は行うが、連続して行っても意味はない。とりあえず、次は六式の基礎から鍛えなおすぞ」

「はい！ よろしくお願いします！」

「休憩は必要か？」

「いいえ!!」

強い言葉で答えるポチを見て、俺はフツと笑みをこぼした。思ったよりも役に立ちそうな拾い物で、ありがたい限りだ。

・***

CP5の職員として過ごす傍ら、俺はポチを徹底的に鍛えた。振るい落として落ちたとはいえ孤児から六式使いの候補として訓練を受けるレベルには才能があるだけあって、指導は順調だった。

ポチは俺とは違って得手不得手が極端なタイプだった。いちおう最低限六式を扱えるようにはなったが特に鉄塊が致命的に苦手であり、鉄塊の技術を応用する指銃も使わない方がマシなレベルだ。

逆に剃と嵐脚は得意であり、こちらに関しては及第点を出せるレベルに使いこなせるようになった。覇気に関しても極端であり、武装色は得意だが見聞色はまるで才能がない。

まあ、防御は紙絵と武装硬化を中心とし、攻撃は剃と嵐脚による高速戦闘のスタイルで問題はない。

あの後も何度か肉体改造を行った成果もあり、2年経つ頃には俺がギリギリまで手加減すれば組手も可能という、当初想定していた最低

値には達した。

そのころには、数度の昇進の後に予定通りCP5の主官に就任したわけだが……ひとつ予想外だったのは、ポチが『主官補佐』という新設された特殊な役職について、俺の専属補佐となったことだ。

どうも、かなりあちこちに「私は隊長の下以外では働かない」的なことを直談判して回ったみたいで、主官補佐の役職が新設されるという通達と共に、上からは遠回しに「その狂犬の手綱をしっかりと握ってけ」的なお小言を貰うことになった。

まあ、一見明るく人当たりのいい性格に見えて、ポチは頭のネジは吹き飛んでるからな、相当上の方に伝わるまでゴネまくったんだらう。

俺個人としては別に構わない。ポチの狂気はいわば狂信という部類のもので、それが俺という個に対してか強大な力に対してかまではわからないが、ポチの信仰の対象が俺であることは間違いない。

ポチにとっては俺の言葉がすべて正しく、俺の役に立つことが至上の喜びとか、そんな感じだ……一種のヤンデレというやつかもしれない。

だが、まあ、上にとって狂犬でも俺にとっては忠犬で非常に便利だ。実際にポチは優秀だし、行動原理が狂信であるため、俺の役に立つため努力を惜しまない。

俺にとって有益であるならなんの問題もない。信仰心でも狂った愛情でも好きに向けてくればいい、その程度いくらでも許容してやる。

「隊長、そろそろ島が見えてきます」

「ああ、分かった」

船室に居た俺をポチが呼びに来る。主官となった今も、ポチは俺のことを以前と同じく隊長と呼ぶが、呼び方など別になんでもいいので気にはしていない。

返事をして外に出ると、ポチが綺麗な姿勢で立っており、その後ろ髪……細く一本に纏めた茶の髪が左右に揺れていた。

バイオフィードバックを覚えさせて、いよいよ本物の尻尾みたいに

なってきたなあその後ろ髪……。

「……しかし、わざわざ隊長が出向くほどの内容なのでしようか？」

「古代文明に関わる案件だからな、上にとつては重要なんだろうさ」

ポケットから棒付きキャンディーをふたつ取り出し、ひとつをポチの方に放り投げ、もうひとつは包装を破って啜える。

現在俺は、上の指令を受けてとある島に出向いていた。内容としては、その島に残る古代文明の遺産の回収……いちおう主官に就任してからは、初めての大き目の任務と言えるかもしれない。

まあ、古代文明の遺産とは言ってもプルトンとかのような古代兵器ではなく、ましてやポーネグリフでもない。古い以外に価値もないような品だ。

しかし、どうもいちおうと頭には付くが空白の1000年の時代の品らしく、その時代にひどく過敏な世界政府としては直ちに回収を命じたわけだ。

まあ、大した仕事ではない。現場指揮という形で同行こそしてはいるが、部下たちに品を回収させて終わりだ。

・***

楽観視していると、思わぬところに落とし穴があるというのは世の常だ。辿り着いた島で、住人に世界政府の威光をチラつかせつつ部下に遺産の回収を命じたあと、俺はぼんやりと小さめの町の中で一番大きな建物に視線を向けていた。

「……せ、政府の犬ども……ここ、ここがどこだか分っているのか！」

「しゅ、主官？」

「回収を続けろ」

住人の言葉に、部下のひとりが動揺したような声で告げるが、冷たく回収を続けるように告げる。部下が動揺していたのは、現在俺の視線の先にあるものが原因だろう。

風になびく黒を基調とした大きな旗。そこには……『白い髭の付いたドクロマーク』が描かれていた。

つまり、この島は白ひげ海賊団の縄張りというわけだ。そういえば、丁度この時期は魚人島を白ひげ海賊団が縄張りにした時期だったかな？ まあ、だからどうしたという話ではある。

ここはグランドラインの前半の海にある島だ。新世界からこちらに来るのは手間だし、白ひげ本人がわざわざここまで出張ってくるなぞ、よほどのことが無い限りあり得ない。

現れたとしても傘下の海賊、それも前半の海を拠点にしているレベル……そもそも、たまたま近場に居たとかでもない限り、現れるのは回収が終わって出航したあとになるだろうし、なんの問題も……。

「主官！ 大変です!! 沖に、白ひげ海賊団の船が!!」

「……傘下の海賊か？」

やれやれ、どうやらたまたま近場に来ていた船があつたらしい。そして、うくん……部下の青ざめた表情、嫌な予感がするな。

「ち、違います! 沖に現れたのは、『モビー・ディック号』です!!」

「……はあ」

まったく、俺の運はどうなってるんだ? どうも白ひげと縁があるな……というか、そもそもなんで白ひげが前半の海に来てやがる?

魚人島にでも寄ったついでに、前半の海の縄張りを見て回ってたりとか、そんなところだろうか……なんともまあ、面倒な話だ。

「ポチ、指揮を執って回収と積み込みを続行。積み込み完了後、即出航しろ。そして、問題ない距離まで離れたら、俺の電伝虫を2コールだけ鳴らせ」

「了解しました!」

とりあえずポチに指示を出したあと、白ひげ襲来を伝えに来た部下の方を向いて口を開く。

「フード付きのマントを用意しろ」

「は、はい……主官、いったいなにを……」

「なんでもいい。お前たちは、作業を続けていろ」

フード付きのマントを受け取り、顔が見えないように深くフードを被ってから海岸へと向かう。

まあ、適当に威嚇して睨み合いになるならよし……戦闘になるな

ら、ある程度戦ったところで退けばいい。
しかし……白ひげと二度目の遭遇か、本当に妙な縁があるものだ。

閑話・進化し続ける怪物

白ひげがその島にやってきたのは本当に偶然だった。別件で前半の海に用があり、魚人島を経由して前半の海に来て、用を済ませて新世界へと帰る途中、縄張りの島に世界政府の船が近づいているという情報を得た。

海賊が縄張りで世界政府に好き勝手されては面子にも関わる。ちやうど近場にいたこともあり、そのまま進路を変えその島にやってきた。

島がハッキリと見えるようになったころ、甲板に立っていた白ひげの元にマルコが近づいてきた。

マルコは白ひげと同じように島の方に視線を向けながら呟く。

「……しかし、世界政府はあの島にいったい何の用だよい？」

「さあな、行ってみりゃ分かるだろ」

白ひげ海賊団の面々の表情に緊張などは無く、むしろリラックスしているようにも見えた。それは、己たちが強者であるという確かな自信があることもそうだが、それ以上に……今回は戦闘にはならない可能性が高かったからだ。

海軍の軍艦ですら白ひげ海賊団に手は出せないというのに、ロクな武装もしていない政府の船とさほど戦闘慣れしていない役人たちが仕掛けてくるとは思えなかった。

そんなどこか緩んだ空気の中、見張りの声が聞こえてきた。

「……誰か出てくるぞー！」

その言葉に白ひげと息子たちは島の方に視線を向ける、すると海岸に面した森からフードを深くかぶった人物がひとり海岸へと出てきた。

そしてその直後、昼の明るい空が漆黒に染まったかのような感覚と共に船が揺れ、甲板に居た者の半数以上が意識を失い倒れ伏した。

「これはっ、覇王色!？」

「なんつう、覇気だよい……」

凄まじい覇気をその身に感じ、海賊団の面々に動揺が走る中、白ひげは体に力を入れて霸王色の覇気を放った。

ふたつの覇気がぶつかりあい、海面が大きく波立つ……ビリビリと空気が震えるような感覚の中、白ひげ海賊団の面々は言葉を発することもなく覇気を放つ白ひげの背を見つめていた。

その揺るがぬ背はまさに世界最強と呼ばれるに相応しい力強さがあり、動揺していた面々も冷静さを取り戻していった。

だが……動揺していたのは、白ひげも同じだった。

(……コイツはっ、間違いねえ、あの時の……だが、馬鹿な、あの時より遙かに……。まだ、二年ほどしか経ってねえぞ……あの時ですら、すでに世界にそうはいないレベルだった。だが、ソレが、全盛期すら迎えていない発展途上の状態だったとでもいうのか!?)

白ひげは海岸に現れた人物が、二年半ほど前に海戦中に見かけて覇気をぶつけ合った相手だと悟っていた。そして同時に、その時より遙かに凄まじい力を持っていることも感じ取っていた。

あの時も確かに凄まじい力は感じた。だが、それでも、戦えば間違いなく己が勝つと確信できるだけの差があった。

……だが、いまはどうだ？ この相手と戦うなら、白ひげは相当の覚悟を決めなければならない。自身の命を懸け、息子たちの大半を失い、仮に勝って生き残ったとしても二度と戦えぬほどの傷を負う……それぐらいの覚悟が無ければ、倒すことができないほどに相手は強くなっている。

しかし、同時に数多の戦いを潜り抜け、様々な修羅場を生き残ってきた白ひげの磨き抜かれた直感が告げていた。

……これが『最後のチャンス』だと……。

たしかに、多大な犠牲は覚悟しなければならぬ。それでもまだ、いまならば……このバケモノを倒すことができる可能性は十分にある。

だが、『次は無い』……三度目に遭遇した時、この怪物はもはや白ひげが全てを捨ててもなお手に負えぬほどに進化してしまっていると、そういう確信があった。

戦うべきか、戦わざるべきか……しばし思考を巡らせた白ひげは……そのまま覇気を放つに留め、仕掛けることなく立ち続けた。

そう、白ひげは戦わないことを選んだ。リスクに対して、あまりにもリターンが無い。それでも、賭けるのが己の命だけなら、戦ったかもしれないが……息子たちの命まで賭ける気にはなれなかった。

そもそも、勝てるというのは、あくまで相手が最後まで戦いに付き合うならばという話だ。前回遭遇時のことを考えると、相手には戦士としてのプライドなどはなく、ひどく合理的……不利と見れば、即座に退く可能性が高い。

そうなれば、損害だけ受けて逃げられるという最悪の結果にすらならいえる。だからこそ、白ひげは戦わないことを選んだ。

この選択に後悔はない。後悔するとしたら、今回ではなく前回だ。いまさら言っても仕方ないことではあるが、確実に勝てたあの時に地の果てまで追いかけて仕留めておけばという思いが無いわけではない。

しかし、時計の針は過去には戻らない。いくら後悔しようとも現状が変わるわけではない。

そんな白ひげの視線の先、フードを被っていた人物はある程度時間が経過すると、ピクツと一瞬体を動かしたあと、覇気を抑え、スツと森に溶けるように消えていった。

(……次は、こっちが逃げの一手を打つしかねえな。しかし、このままってのも癪だ。幸い、前回よりは情報があるだろうし、いろいろ伝手を使って調べてみるか……)

退いたのは相手ではあるが、白ひげにとっては実質敗北と言っている結果であり、苦々しい思いはある。しかし、そこは流石大海賊、軽く目を閉じて意識を切り替えたあとは、息子たちに島の調査を命じるのだった。

慢心とは余裕ある者の行いである

油断や慢心が愚かかと問われれば、俺はこう答える……分からない、と……。

俺は油断や慢心というのは、いわば心の余裕から生まれ出るものだと考えている。油断や慢心をするということは、それだけその者の心にゆとりがあり、余裕があるのだ。

だが、生憎と俺はそんな余裕のある人間ではない。故に己が油断や慢心をするという行為が想像できない。そんな姿を見たら、自分を殺したくなるかもしれない。

そんなことを考えつつ、俺は出勤してすぐにあるファイルを確認する。そこにはCP5の構成員すべての名前が記載されていた。

ただ、あくまで名前だけであり、それ以外の情報は無い。このファイルはなにかといえば……簡単に言えば、ホビホビの実に対する対策だ。

ホビホビの実は、イカれた性能の悪魔の実である。ワンピースの世界には、一部単体でのパワーバランスがおかしい悪魔の実が存在する。ならば、ソレに対策は必須である。

まず、己がおもちゃに変えられるという部分にはほぼ心配はいらない。そこに直接触れるという工程を挟む必要がある以上……仮に原作におけるシユガーが、手を伸ばし俺の体に触れるまで残り1cmという位置からスタートしたとしても、手が俺に触れる前に10回は殺せる。

だが、ホビホビの実の真の脅威はそこではない……最大の脅威は、おもちゃにされた人間の記憶が消えるという、信じがたいほどの力だ。

世界中にかつ複数の人間の記憶に及ぶという凄まじい規模の能力だ。だが、対策が一切存在しないというわけではない。

原作においてキュロスの記憶が消えつつも名前が伝わっていたり、銅像が残っていたりと……記憶は消せても、記録は消せない。

これに関しては、まあ、当然だろう。これで記録まで消せてしまえば、それはもはや過去の改変という神の領域の力だ。

ともかく、記録は消せないという性質上、この俺しか触れていないファイルに『知らない名前』が書かれていたとしたら、俺はそれをホビホビの実際の能力の影響とみなす。

俺は、俺の領域を犯されるという行為に凄まじい嫌悪感がある。俺の記憶を消すということは、俺から記憶を盗み出したということに等しい……想像するだけでも腸が煮えくり返る思いだ。

俺は別にドフラミンゴファミリーの行動に思うところはない。ドレスローザの支配でもなんでも、俺に関係のないところであれば好きにやっていればいいと、そう思う。

だが、ホビホビの实が俺に影響を及ぼした時点で、敵対したとみなす。即座に赴きシュガーを含めたドフラミンゴファミリーを皆殺しにするつもりだ。

それで記憶が戻らない場合は、別の能力者による影響と考えられる。その際には、探し出して必ず殺す。俺は俺から理不尽になにかを奪う行為を絶対に許さない。

・***

軽い組手を終えて、訓練場に倒れ伏すポチにドリンクを投げてやる。

「……ありがとうございます」

「休憩しておけ」

ポチに軽く声をかけてから鍛錬を再開しつつ思考する。ポチは思った以上の拾い物だったが、CP5に関しては、他にめばしい者はいない。

無能だとは言わない。それなりに優秀な者も多いが、目を引く者はいない。四式使いの男は特に酷い……アレはプライドが高く、自己弁護が達者なタイプであり、なおかつ一度精神的に折れると戻らない。

事実ポチが急激に力を付け始めた当初は、ポチに対抗心を抱くような様子があり、それが向上心に繋がればとも思ったが……どんだん腕を上げるポチの戦いを見て、早々に諦めた様子だった。

CP……それもCP5という立場で、四式が使えるというのもしほど利点にはならない。むしろ、CP9のような暗殺などの荒事も多い部署の方が向いているとは思うが……仮にCP9に行こうものなら、早々に心が折れて辞めることになるだろう。

俺の評価としては表記上スペックとプライドだけが低い無能。いまいち役に立たないが、最低限与えられた仕事ぐらいいはこなせるので、適当に似たような連中と組ませて簡単な仕事をやらせている。

「……ポチ」

「はい？」

「まだ、当分先だろうが、いずれ俺は親父から譲られる形でCP9の長官になる。そのつもりで考えておけ」

「はい!!」

ついてこいとは言わない。どうせ、言わなくてもコイツは勝手についてくる。ポチは明確に優秀であると評価できる存在だ。補佐官となつてからは手広く貪欲に様々な技術を身に着けており、コイツが居ると居ないのでは仕事の効率が明確に違う。

なにが嬉しいのか、後ろ髪をブンブンと振るポチを見て苦笑する。

「あつ、そうだ。隊長、質問してもいいですか？」

「なんだ？」

「隊長はあまり鉄塊を使いませんか？」

「ああ……覚えておけ、避けても受けても変わらないのであれば避ける。ダメージが無いからと、迂闊に攻撃を受けてやる必要はない。そういう馬鹿はいずれ、予想外の威力の一撃を貰って反撃の起点にされる結末が待っている。鉄塊で受ける方が紙絵で受けるより効率がいい場面では、鉄塊を使えばいい……まあ、お前の鉄塊なら使わない方がマシだな」

「ふぐう……六王銃、打てないんですよねえ……」

「練度不足だ。アレは全ての六式の技術を使うからな……だが、まあ、お前にも決め手になる技はあったほうがいいか……他の武術の技術を応用する嵐脚の派生技をいくつか教えてやる。立って構えろ」

「はい！ よろしくお願いします!!」

先ほどまで疲れ切って倒れていたのが嘘のように、ポチは俺の立て
という言葉聞いて即座に起き上がり構える。

コイツへの指導は俺の利益にも繋がる。多少であれば鍛錬の時間
を割いて、使ってやってもいいと思える程度には、俺はポチを買って
いた。

原作知識にて知りえるのは、描かれた範囲のみ

原作知識というのは、俺が持ちうる中でも最大級と言っているほどに強力なカードだ。無論過信はできない。俺というイレギュラーがすでに存在する以上、原作との乖離は疑ってしかるべきだ。

しかし、情報というのは凄まじいアドバンテージだ。特にホビホビの実を始めとした初見殺しの能力を、そういったものがあると知れているのはかなり有利と言っている。

それを忘却などという馬鹿げた理由で失わないように、強化した記憶力を用いて定期的に物語の頭から可能な限り台詞も含めて思い出すようにしている。

能力で言えばホビホビの実、モドモドの実、ウタウタの実など、特に超人系に属する悪魔の実は特殊な効果をもたらすものも多い。ただやはり強力な能力であるがゆえに、その発動には相手に直接接触したり、歌ったりという工程を必要とする。

故に事前にそういう能力が存在すると知れていれば、いくらでも対策はできる。

それに原作を過信はできないが、時期などの指針には出来る。そして、俺というイレギュラーによる原作への影響も、おそらくはそれほど多くはないだろう。

スパンダムというキャラはウォーターセブン編以外では、ほぼ本筋に絡むことのないキャラだったからな。

ただ、懸念といえる点は存在する。それがいま俺の手元にある数年前の新聞……以前も読んだこの新聞には、ダグラス・バレットに関する記事がある。

バスターコールのことは流石に伏せられているが、間違いなくこれは劇場版のスタンピードで描かれた出来事だろう。

だが、こうなると少々困った事態になる。というのも、劇場版というのは基本的にパラレルワールド的な時空であると認識されていたからだ。

スタンピードにしてもそうだ。主人公であるルフィの懸賞金が、ビッグマムとの一件以降の15億となっていてことから、時期的にはトットランドからワノ国の間の出来事であるはずだが、そうなる矛盾が多い。

麦わらの一味が全員集合していること、モモの助や錦えもんが居ないこと、時期的にカイドウに捕らえられているはずのキッドが居ることなど挙げればきりが無い。

だからパラレルワールドであるというのには、納得できるのだが……問題は俺がいまいるこの世界は、なにを基準とした世界であるかだ。

バレットの存在が必ずしもスタンピードの世界であることを確定させるわけではない。例えば、存在はしていてもインペルダウンから脱走することが無いかもしれないし、仮に脱走してもフェスタと巡り合わなければスタンピードは始まらない。

まあ、現時点では判断できない以上、警戒しつつも考えすぎない方がいいか……、

「ポチ、コーヒーをくれ」

「はいー」

読んでいた古新聞をしまつて、仕事の資料をいくつか眺める。CP5の主官になって数年が経過した。少し前にとある島の王国にて、兵士500人が海賊の人質となり、まだ13歳の諜報員が事件を収めたという話が入ってきた。

これは原作において語られていたロブ・ルッチのエピソード……となれば、いまは原作の17年ほど前か、来年になればフレバンスで珀鉛病が発生し、さらに翌年にはフィッシュヤータータイガーによる聖地マリジョア襲撃事件が起こる。

大きな事件が多いな……。

「隊長、どうぞ」

「ああ」

一口コーヒーを飲む……店で高額で出されても納得してしまうほど美味しいコーヒー。うくん、やっぱりコイツ有能だな。秘書みたいな

ポジションだが、正直ケチの付け所はほぼ無い。若干思考が単純ではあるが、問題というほどではない。

さて、思考を戻そう。この時期になると少々考えるべきことがある。

それは原作においてのスパンダムの登場、トムとの一件の時期が近いということだった。最終的にトムが処刑されるのは原作より10年前、原作開始時期でいえば8年前なので、まだしばらく時間はあるが……さて、この件はどうしたものか？

原作においてはスパンダムが五老星に直談判をして行動、その上で陰謀……というには雑だが、ともかくスパンダムの暗躍によってトムは処刑されることとなった。

だが、俺はプルトンに興味は無いし、トムに対し思うことも一切ない。というよりはそもそも、トムが執行猶予付きとはいえ罪に問われていること自体がおかしいと思っている。この点に関しては、フランクキーと同じ意見である。

海賊王の船を作った罪……頭でも沸いてなければ、こんな馬鹿な罪を大真面目に裁判する意味などないだろう。トムはロジャー海賊団のクルーだったわけでもなく、依頼を受けて船を作っただけの船大工だ。

それが罪というのなら、ロジャーが着ていた服を売った服屋、持っていた武器を作った鍛冶師、ロジャーが食べた食材を作った農家なども根こそぎ罪に問うのだろうか？

まあ、本当に世界政府はたびたびおかしな行動をとるから理解に苦しむ。

ともかく、俺がスパンダムである以上原作のような出来事は起こりえない……筈なのだが、気になるのはここで歴史の修正力のようなものが存在するかどうかだ。

仮に俺がなにも行動を起こしていないにも関わらず、原作と似たような展開になるのなら、ある程度の修正力のようなものは存在するともていいだろう。

今後原作知識という強力なカードを使用していく中で、かなり重要

な要素となってくる可能性があるので、注意しておきたいものだ。

「……主官、新しい指令書が届きました。特殊指令みたいです」

「特殊指令？　なんだ、いったい……」

部下が持つて来た書類を受け取る。特殊指令というのは書いて字のごとく通常とは異なる内容の指令だった。封筒を開けて書類を確認すると……そこには一時所属の指示が書かれていた。

要約すると、後の幹部候補である将来有望な諜報員に経験を積ませるため、短期間だがCPR5に在籍させていくつかの任務をこなさせるというものだ。

そして、もちろん短期配属される諜報員の名前も記されていた。

『ロブ・ルッチ』

……原作知識というのは強力なカードではある。しかし、当たり前ではあるが、俺の持ちえる知識というのは原作に描かれていた内容に限る。

つまり、当然こういう予想外の事態も起こりえるわけだ。はてさて、どうしたものか……

閑話・三者三様の狂気

俺にとって上司とは、いわば世界政府の意思を俺に届けるメッセンジャーのようなものという認識だった。故に有能であるか無能であるか、そんな事にはさほど興味はない。

政府の指令さえ正しく伝えてくれるのであれば、それで十分……まあ、無能よりは有能な方がいいのかもしれないが……。

グアンハオで共に修練をしていた者たちより一足早く六式を修めた俺は、世界政府の諜報員として本格的に活動を始めた。

経験を積ませるといふ意味合いが強いのだろう、任務地や種類などは多岐にわたった。いくつかの部署に短期所属するのもその一環だ。CPの全ての部署にというわけではなく、CP2、CP5、CP8と三つの部署を経たのち、グアンハオで共に修練を行っていた者たちが正規配属されると同時にCP9に配属されることがすでに決定されている。

CP2への短期所属が終わり、次はCP5に所属することが決まった際、CP2の主官がどこか苦虫を噛み潰したような表情で告げた。

「次に君が所属するCP5の現主官の名はスパンダム……CP9長官のスパンダインの息子でもあり、コネ採用の男だ。個人的に嫌悪感はあるが、ある程度仕事はできるらしい。まあ、参考程度に聞いておいてくれ」

「……了解」

どうにもCP2主官はそのスパンダム……というよりは、親のスパンダインという男に恨みでもあるようで、ある程度偏見が入っていると思えるような話を一方的に語っていた。

それだけ恨みがあっても「仕事はできるらしい」と評するあたり、なかなか優秀な人物なのだろう……心底どうでもよかった。

多少優秀程度の間人などいくらでも見て来たし、その差異でなにかが変わると思えない。俺はただ政府の指令を遂行するだけだ。

・***

「……ハッ」

ひとつ前に所属していた部署での会話が思わず脳裏に浮かびあがり、意図せず口からは湧いた笑みがこぼれた。

それを気にした様子もなく俺が持つて来た書類を眺めつつ、今後の仕事内容などを説明している男……CP5主官スパンダムを見ながら、俺は頭の中にCP2主官の顔を思い浮かべた。

……なんだアイツは？ 目が腐っているのか？ なにをどう見たらコイツを……この、『バケモノ』をコネ採用などと評することができると？

一目見た瞬間分かった。この男は違う、存在そのものの格が違う……例えるなら、そう、天を突くほど巨大な怪物を無理やり人の体に圧縮したかのような、あり得ないほどの存在感。

コイツが居るだけで、空間が悲鳴を上げているのではないかと錯覚するほどに、異常な力を感じる。圧のようなものは感じないが、それはこの主官が完全に己の力を支配下に置いてコントロールしている証明でもある。

本当に、なんの冗談だコレは？

なんとというか、奇妙な感覚だった。俺の目の前にいる男は、その気になれば容易く世界を滅ぼせると確信できる程のバケモノだ。

だがそのバケモノが、CP5などという小さな席に行儀よく座っている光景は、なんだか可笑しさも覚えた。

「……以上だ。ここまででなにか質問は？」

短期所属に関する説明が終わり、主官が質問は無いかと尋ねてくる。さて、どうしたものか……正直俺はいま、ひどく興味を惹かれてる。

その身に宿る圧倒的な力にもそうだが、それ以上に主官の狂気を宿した目に……。

「短期所属に関しての質問はありませんが、私的な質問をお許しいただけますか？」

「ああ……それと、別に敬語じゃなくても構わないぞ、使うべき場面で使ってさえいればな」

「……では、そうさせてもらおう」

「それで、質問は？」

敬語が苦手というわけではないが、素の口調で話して構わないのならそれはそれで気が楽だ。

口調を戻しつつ、続きを促す主官に対して質問を口にする。

「……弱いことは罪だと思うか？」

なぜ、急にそんな質問をしたくなったのか、自分でも説明は難しい。ただ、なんだろうか……俺がいままで巡り合った中でも、飛び抜けた強者、いや世界最強と言っている者の意見を聞いてみたかった。

そんな質問に対し、主官は悩むことなく淡々とした口調で答える。

「立場と状況による」

「というと？」

「例えば、そうだな……ある国に、ひとりの男が居たとしよう。男は代々農家の家で生まれ、農家として生計を立てていたとする。そしてある日その国に大きな戦争が起こり、戦火は男の住む地域まで広がった。迫る戦火に男は代々受け継いだ畑を捨て、涙を流しながら逃げ出した」

そこで、主官は一度言葉を区切り、俺が持って来た書類にハンコを押しながら話を続ける。

「……その男の弱さは罪かと問われれば、罪ではない。なぜならその男は元々戦いなど身を置いてはいないし、なにも備えてなどいない。抗えなくて当然だ。無様に逃げていい、己の不幸を嘆いてもいい、神に祈ってもいい、誰か助けてくれと叫んでもかまわない。実際に助かるかは別として、それを行う権利はある。俺もそんな者を見かけ、手が空いていたなら手を差し伸べるぐらいはしてやるさ」

「……」

「では仮に、それがその国の兵士であった場合はどうか？ 自ら望んだか否かはさておき、兵士という立場に身を置いたなら戦いは覚悟すべきだし、備えるべきだ。その覚悟や備えが足りなかったからといっ

て、救ってもらって当然だと思うのは甘えだ。まあ、それでも罪とまでは言わないが……甘えるなどは、思うな」

「なるほど……」

お手本のような正論ではあるが、なぜだろうか？　そこには妙な狂気を感じた。いや、なんとなくは分かっている。分かっているからこそ、口元が緩むのを実感していた。

「……以前とある国で、兵士500人が海賊の人質になったという事件は？」

「知っている。お前が解決した事件だな」

「アンタは、どう思った？」

あの時、俺は兵士たちの弱さは罪であり悪であると判断し、人質となった兵士500人を皆殺しにした上で任務を遂行した。

そのことについて様々な言葉が聞こえてきたが、概ねやり過ぎだとか冷酷だとかといったものが多かったように感じられた。

別にそのことに関してはどうとも思っていないが、この主官はどう思うかを知りたかった。

「お前は任務遂行という目的地に向かう途中で、道に転がる石ころを全て綺麗に除去したというだけだろう。過程に対して事前になんらかの指示があったならともかく、そうでないなら目的地までの歩き方は実行者の自由だ」

「……俺が、世界政府の任務という大義名分の下に行く殺しを楽しんでいたとしたら？」

そう、一番聞きたかったのはこれだ。たしかに兵士500人を殺す理由はあったし、その判断が間違いだったとも思っていない。

だが、それ以上に……楽しかった。磨いた技で、技術で、世界政府という巨大な正義の名の下で行う殺しは、なにものにも代えがたいような甘美な快感をもたらしてくれた。

もちろん、それが世間的に異常な考えだというのは理解している。普通の相手に話したとて、理解など得られないだろうと……だが、この主官なら……。

「仕事を楽しむというのは、いい仕事を行うコツのひとつだ。任務遂

行に支障があるならともかく、そうでないなら楽しんで仕事をするこ
とはむしろいいことだろう」

「くはっ……」

ついにこらえきれなくなつて、口から笑みがこぼれた。なんて、面
白い男だ……弱さは罪ではないと、お手本のような正論を語つた口
で、兵士500人を当たり前のように道端の石ころと言つてのける。

ああ、分かる。分かるんだ……この男は狂っている。

言つてみれば主官は、誰よりも傲慢だ。この男にとつて世界は『己
かそれ以外』の二通りしか存在せず、己以外のすべてを見下している。
主官にとつて世界の中心は己であり、それ以外は己にとつて有益か
否か、それぞれ主官の独自の判断で勝手に決めつけている。

主官はいますぐにでも世界を滅ぼせる怪物だ。では、なぜそうして
いないのか……答えは単純だ。そうする理由がないから、ただそれだ
けだ。

逆に言えば、この男は理由さえあれば即座に世界を滅ぼす。それが
己のためになると判断した場合は、泣きわめく無辜の民を一切の感情
なく皆殺しにし、遺体を踏み砕き、世界を火の海に沈めるだろう。

ああ、本当に、なんて強く恐ろしく——美しいバケモノだ。

「……主官、改めてよろしく頼む」

「うん？ ああ」

こんなイカレた怪物の傍で過ごせるとは……これからの短期所属
が、本当に楽しみになってきた。

・***

顔合わせの際に感じた予感の通り、CP5での生活は非常に充実し
ていた。主官は基本的には寛容だ。

本人があまりにも圧倒的な強者かつ、基本己以外すべてを下に見て
いることもあり、部下のミスなどを厳しく咎めることもない。

傍目に見れば懐の広い人物に見えるだろう……だが、そこには他者
には分からない境界が存在し、それを踏み越えた瞬間慈悲は消える。

とある任務での出来事だった。正直いまになっても、なにが主官の逆鱗に触れたのかは分からない。

直接任務に関わりがあったわけではなく、途中で立ち寄った小さな島。そこで漁をしていたであろう漁師が、海賊に殺された。別によくあることだ。特別珍しい出来事でもなく、海賊も小物だった。

殺した理由などは無くたまたま目障りだったと、その程度のものである。あの程度の小物海賊など捨て置いて任務を続行すればいいと、そう思っていた。

だが、その直後……空間が軋むほどの凄まじい重圧を感じ、その次の瞬間海賊はこの世を去った。それこそ、肉片すら残らずに……。

主官の明確な怒りを感じたのは、あの時が初めてであり、同時に俺が他者に対して生まれて初めて恐怖という感情を強く抱いた瞬間だった。

ただ、恐怖の感情は一瞬だけだ。あまりにも理不尽で圧倒的な主官の力を見て、すぐに恐怖は歓喜の震えへと変わった。

強いものは美しいとはよく言ったもので、空間に君臨するかのようなその姿は、ただただ見惚れるものだった。

結局主官の怒りの理由はわからなかったが、なにかしら彼には基準となる境界があり、そこを一步でも踏み越え『敵』と認識した瞬間、怪物は牙をむく。

逆に言えば、一定の境界を踏み越えず敵とさえ認識されなければ、主官は誰に対してもある程度は寛容だ。まあ、その基準が主官の中になにか存在しないので、知らずに踏み越えた者に関しては哀れとしか言いようがない。

主官とある程度交流を持つようになって分かったことだが、コレだけ圧倒的な力を持ちながら主官は地位にも金にもほとんど興味が無い。

いや、まったく無いわけではない。しかし、ある程度で満足している。主官曰く「ほどほどの平凡な幸せが一番」だそうで、その話を聞いた時はつい大声で笑ってしまった。

だってそうだろう？ 主官はその気になればすぐにも世界の頂

点に立てる力があり、望めば何でも手に入れられると言っていい。

だというのにそんな理外のバケモノは、巨大な宝石には目もくれず、ワザワザ自分から小さな檻に入り、掌に乗るような小さな宝石を大切にしている。

なんとも矛盾しているようで……それでいて、どこかスパンダムという一つの個として完璧に完成しているような、そんな感じがして、なんだかそれが面白かった。

・***

主官がとてつもない存在なのはそうだが、補佐官であるチエルシーという女もなかなか狂っていた。コイツの狂気は主官よりは分かりやすい。

それは狂信。チエルシーにとって主官が世界の中心であり絶対の基準だ。主官の言葉はすべて正しく、主官に抗うものは全て間違っている、心の底からそう思っている狂信者。

チエルシーにも主官にしたのと同じ質問、「弱さは罪か？」という質問をしてみた。するとこの女は一切の迷いなく「弱さは罪ではありませんよ。ただ、それが隊長の邪魔になるなら大罪なので私が殺します」と人好きのする明るい笑顔で言ったのけた。

一見するとコイツは、人当たりもよく口調も穏やかな心優しい女に見えるだろうが、その実心の中は主官への信仰心であふれかえっており、主官とは方向性が違えど間違いなく狂人だ。それこそ、主官の邪魔になると判断すれば善良な民間人でも躊躇なく惨殺するだろう。

そして、主官には及ばぬものの、コイツも異常なほどに強い。それこそ、例えば海軍の大將クラスとやりあったとして、勝てないまでもそれなりにいい勝負ができるのではないかと思うほどだ。

話を聞いたところ、かつては俺と同じくグアンハオに居たらしいが見覚えはない。コレだけの実力者なら話に聞いていてもおかしくは無いはずだが、俺よりかなり早く配属されて見かけなかったのかも知れない。

しかし、そもそも上はなんでこれほどの実力者をCP5に配属した？ どう考えてもCP9に即配属、数年の経験の後にCP0でいい気がするが……いろいろと謎の多い女だ。

まあ、現在CP5で補佐官を務めているのは、本人が断固として主官の下を離れたがらないかららしいが……。

なにより面白いのは、主官とチエルシーの相性が抜群だったことだ。主官は世界の中心は己と確信しているある意味誰より傲慢で自己中心的な狂人。チエルシーは主官こそが世界中心で神のような存在であると信じ切っている狂人。

どちらも内面に相当な狂気を孕んでいるが、互いの狂気が奇妙に噛み合っている。

そして、そんなふたりと共に過ごすCP5での日々は、本当に心地が良かった。理由は単純だ。俺もまた狂っているからこそ、ふたりを理解できたし、ふたりも俺の異常性を理解した上で接していた。

大義名分だ世界のためだと語ったところで、俺は一種の快樂殺人者であり間違はなく狂人だ。

だからこそ、ここは酷く居心地がよかった。俺も、主官も、チエルシーも三者三様に狂っている。だからこそ、俺も自然体で過ごせた。

・***

CP5での日々はあつという間に過ぎていき、気付くと短期所属の期間が終わりに近づいていた。そのことに、言いようのない寂しさを覚えている己に気付いた。

ここでの日々が充実していたからこそ、またつまらない日々に戻るのなんとも言えない気分だったが、それが政府の意向である以上従わないという選択肢はない。

「そうだ、ルッチ。お前は確か、いずれCP9に所属するのが決まっていたな？」

「うん？ ああ、CP8にも短期所属する予定だが、その後はCP9に配属されることになる」

短期所属の終了が迫ったある日、書類仕事をしながら話しかけてきた主官。俺はその言葉の意図が分からず首を傾げながら聞き返した。

「そうか……現CP9の長官は、俺の親父だ」

「……どんなやつだ？」

「自己保身は達者で、悪知恵は働く。それ以外は、無能だ」

「……そうか」

正直すこし残念だった。CP9の司令長官が主官の親であるというのはCP2の主官からも聞いて知っていた。ただもしかすると、主官の親というのだから、主官のような存在かと僅かに期待したが、やはりこのレベルのバケモノがそうそう居るわけでは無いか……。

「親父の能力に関しては、本題とは関係ない」

「うん？」

「本題は……まだ当分は先だろうが、俺はいずれ親父に譲られる形でCP9の司令長官の座に就くことになるだろう。まあ、その時はよろしくな」

その言葉に先ほどまでとは一変して、心に歓喜が荒れ狂うのが分かった。口元に笑みが浮かぶのを止められない。

そうか、いずれ主官がCP9に来るのか……それはいい。その頃にはカクたちも訓練を終えて正式配属されているだろうし、俺たちの上に立つのにこれほど相応しい相手はいない。

「ふっ、では、その時を楽しみにさせてもらおう」

しばらく先ということとは、数年はかかるのだろうか……いまから楽しみに仕方がない。

俺はずっと上司などというものは、政府の意思を俺に届けるメツセンジャーのようなものだとして認識していた。

だが、俺より強く、俺よりも狂っている相手の下で働くというのは……存外、悪くはない。

前提が違う以上変化は起こりうる

ロブ・ルッチの短期所属はどうなるかと思っただが、問題は無かった。いや、ある意味では問題はあった。

ルッチと原作のスパンドムの仲はともいいとは言えず、ルッチはスパンドムを見下していたし、スパンドムもルッチにエニエスロビー陥落の罪を押し付けたりしていた。

少なくとも良好な関係ではなかったはずだ。

だが、まあ、俺が原作のスパンドムと違う以上変化はあって当然だが、ルッチとは短期所属期間中にかなり親しくなった。

というか、ルッチが非常によく笑みを溢していた。ルッチはなんだかんだで、カクたち仲間と認められた者の前では気楽な姿を見せたりしていたし、カクたちも海軍に追われながらルッチの治療費を稼ぐためにサーカスマがいのことをしたりと、仲間への情も存在する。

原作とは違い、ルッチにとっては俺もその枠に近い認識となったのだろう。まあ、今後CP9で上司部下の関係になる以上良好で悪いことは無いか……。

そんなことを考えつつ、机に積まれた書類の束を見てため息を吐く。ルッチの短期所属から1年ほど経ち、最近はかなり仕事が忙しい。原因はハツキリしており、1年前にあったフィツシャータイガーによるマリージョア襲撃事件で、世界政府自体が大騒ぎだからだ。

CP5の管轄ではないので直接的にフィツシャータイガーやタイヨウの海賊団に関わることは無いが、他の部署のしわ寄せも来ている感じでかなり忙しい。

まあ、定時には帰れるし休みも通常通り取れるし、部下にも絶対に休みは取らせる。休日出勤とかサービス残業とかは断固として認めない。というか、そうしなければ仕事が片付かない状態になったら上司である俺の責任なので、そうならないようにしている。

マリージョア襲撃事件が起こったということは、いまは原作の14〜15年前、原作開始時期で考えるなら12〜13年前といったところ

ろか……。

この後にある大きな出来事と言えば、海列車が完成するぐらいか？
プルトン関係がどうなるか気になる部分ではあるが、とりあえずい
まは書類仕事だな……。

・***

司令長官という高給のポジションに居ながら、基本的にあまり金を
使わない俺が、唯一惜しみなく金をつぎ込むのがウイスキーだ。

原作のスパンドムの好物がウイスキーだったように、俺もウイス
キーを好んでおり、晩酌の時間というのは至福のひと時と言ってい
い。

気分によつて飲み方は変えるが、一番多いのはロックだ。氷にもか
なり拘っているつもりだ。コレクションの中から今日の気分でウイ
スキーを選び、氷と共にグラスに注ぐ。

俺は少量をじっくり楽しむ飲み方が好きだ。グラスに注がれた美
しいウイスキーの色合いや芳醇な香り、微かに鳴る氷とグラスが当た
る音、目と鼻と耳、そして舌で楽しみ、つまみと共に一杯のウイスキー
を時間をかけてゆつくりと飲む。

日頃の忙しさを忘れ、心穏やかに時間が過ぎていく最高の癒し
……。

「ぶるぶるぶるぶる」

「……」

電伝虫の着信が聞こえる。誰だ？ 俺の至福のひと時を邪魔した
やつは……内容によっては殺す。

微かな殺意を抱きつつ、受話器をとると……親父の声が聞こえてき
た。

『スパンドムか？』

「親父……くだらない用件だったら殺すぞ」

『待て待て!? なぜ、いきなりキレている!?!』

「うるさい、さっさと用件を言え」

なんてタイミングの悪い奴だ。そんなんだから、オハラで醜態を晒すことになったんだぞ。

『……お前の今後に関して、重要な話がある。だが、電伝虫で話すような内容ではないので、実家に来られるか?』

「分かった。15分ほどで着く、高級なウイスキーを用意しておけ」

『15分? いや、別に後日でも……というか、島違うんだが……』

「15分以内に着く、準備をしておけ」

そう言っ受話器を置くと、俺はかけてあったジャケットを羽織って一階に降りる。当たり前ではあるが、CP5に所属する時点で本部の近くに家は借りている。

購入ではなく賃貸なのは、いずれCP9に異動することを見越してだ。ただそれでも、一戸建ての家なのでなかなかの広さではある。

そして、一階に降りた俺はキッチンに向かって声をかける。

「ポチ、しばらく出てくる」

「あ、はい。つまみはどうしますか?」

「冷蔵庫に入れておいてくれ、それほど時間はかからないから戻ったら食う」

「了解しました」

一階のキッチンで料理していたポチに声をかけて玄関に向かう。ちなみにポチもこの家に住んでいるというか『勝手に引越してきた』。

ある朝起きて一階に降りたら、大荷物を持って来ており、聞いたところによると私生活でも俺の役に立つために引越してきたのとだった。

鍵はどうしたのかと聞いたらピッキングで入ってきたとの返答だったので、鍵穴が傷つくから止めるように言っ合鍵を渡し、空いている部屋を好きに使っいいと伝えておいた。

まあ、世間一般的に考えればポチの行動はストーカーでヤンデレなのだが、俺は別に気にしない。家事も積極的に行うし、よほど練習したのか料理も上手い。

俺にとって利益の方が大きいのであれば、その程度の嗜好など好き

にすればいい。

あと単純にポチの狂気は信仰心なので、己の欲望云々ではなく俺に尽くしたいという感じでこちらに不利益は皆無と言っている。

家事関連も有能だし、家にいるなら仕事上の伝達もしやすいので便利である。まあ、ポチに関しては『座敷童の一種』だと認識して好きにさせている。

・***

剃刀での高速移動により、実家へは12分ほどで到着した。降りる際など、出来るだけ人目に付かないように注意したりといった行動をとらなければ、もっと早くついていただろう。

勝手知ったる家の中に入り、親父の元を目指す。見聞色の覇気を使えば容易に場所は分かるので、真っ直ぐに親父の部屋に向かった。

「親父、来たぞ」

「……本当に15分以内に来たな。どうなってるんだお前……」

「そんなことはどうでもいい。ウイスキーは？」

「ほらっ……」

「ふむ、悪くない。好みの銘柄だ……話を聞こう」

まあ、この辺りは腐っても俺の親というわけか、俺の酒の好みはしっかりと把握しているらしい。実の親を抹殺することにならなくてホッとした。

用意されていたショットグラスにウイスキーを注ぎ、一口飲んでから親父に話を促す。

「お前にCP9の司令長官の座を譲るとい話覚えてるか？」

「ああ、もちろん」

「本来はまだ5年以上はかけて譲るつもりだったのだが、その時期を早めようと考えている」

「……ふむ。理由は？」

これは少々意外な展開だ。別に俺としてはどの時期にCP9所属になったとしても構わないが、気になるのは原作とのズレだ。

とはいえ、それはいまさらか……俺自身やルツチの件も含めて、原作とのズレなどいくらでも起こっている。いまさらひとつ増えたところで、問題は無い。

「まずひとつ目は、俺が想定していた以上にお前が優秀だったということだ。いまのCP5はかなり上の覚えもよく、上もお前の昇進に乗り気でやりやすいということ。そしてもうひとつ、最近CP9に加わったロブ・ルツチを知っているか？」

「もちろん知っている。なんなら、少し前まで短期所属でウチに居た」
「そのルツチがな……三日置きぐらいに『いつ息子に地位を譲るつもりだ？』とか『そろそろ他のポストに就くべきじゃないか？』などと催促するように聞いてくるんだ」

……おい、なにやってるんだルツチ、お前そんなキャラだったか？
「一体どうやって手懐けた？」

「手懐けたつもりは無いんだがなあ」
強いていうなら気が合ったとでもいうべきか？ なんにせよ、俺が思っていた以上にルツチの中での俺の評価は高いみたいだ。

「ともかく、将来のCP0総監候補と言われる天才だけあって、圧が凄くてな……いつか暗殺でもされないかと冷や冷やしている」

「そうか、墓の場所の希望があれば早めに言っておけよ」
「やめろ！ 暗殺される方向で話を進めるんじゃない」

まあ、つまり要約すると……予定ではもう少し俺に実績を積みませてから譲るつもりだったが、現状でもそれなりに上からの評価は高く、CP9の司令長官を譲ることに文句も出にくい。そして、ルツチが三日置きに遠回しに脅しをかけてくるから、予定より早めに俺をCP9長官にしたいと、そう言うことか……。

「親父はどうする？」

「他部署ではあるが、いいポストが空いていてな。そこに就かせてもらえることになっている」

「ふむ……時期は？」

「スムーズにいけば1年ほどで譲る予定だが、構わないか？」

「好きにすればいい。俺はさほど地位に興味は無い。なんなら、CP

5 長官の地位でも高すぎるぐらいだ」

とりあえず、CP9 長官になる時期が早まることに関しては、別にどうでもいい。いずれはそうなる予定だったのだから、早まろうが遅くならうがさして問題は無い。

ただ、俺としてはもう少しほどほどの地位がいいのだが……四方の海あたりの支部長みたいなポジションが理想だが、難しいな。

……エニエスロビーが落ちたら、左遷されていい感じの場所に行けるんじゃないか？ 原作で問題だったのは、ルッチたちに罪を擦り付けようとしたからであって、そうじゃなければ責任者の俺が順当に責任を取る形になるだろう。

悪くないな。正直、悪くない……10年ほどCP9 長官を務めてれば、親父への義理も立つし、一考の余地はあるな。

「……お前は相変わらず、地位にも金にも興味は無しか？」

「ないわけでは無い。必要以上にはいらないうだけだ。ほどほどでいい……山のような金や、高すぎる地位があったところで、俺にとっては邪魔なだけだ」

「我が倅ながら、変わったやつだな」

「いまさらだ……さて、これで話は終わりだな。なら、俺は戻るぞ……このウイスキーは、出張費としてもらっていく」

シヨットグラス内の残りのウイスキーを飲み干し、溜息を吐く親父に背を向け、軽く手を振ってから部屋をでる。

まあ、至福の時間を邪魔されたのは腹が立ったが……結果としていいウイスキーも手に入ったし、戻って晩酌のやり直しといくか。

CP9新司令長官

グランドライン前半の海に位置する世界政府の直轄地。司法の島
エニエス・ロビー。

1年中夜にならない不夜島としても有名なこの島は、世界政府三大機関のひとつとして創設以来800年間に渡り、侵入も脱走も許していないという鉄壁の島。

この島は政府直轄暗躍諜報機関サイファーポールの中でも特殊であり、非協力的な市民の殺害すら闇の正義の名の下に世界政府より許可されているCP9の拠点でもある。

エニエスロビーには、常駐する海兵・法番兵を含め1万人以上の兵力が存在するが、その頂点に君臨するCP9の構成員は全体の数からみれば極めて少数である。

しかし、基本的に構成員の全員が六式を修めた超人であり、不敗神話すら語られる極めて強力な組織である。

そして現在、エニエスロビーの中心に位置する司法の塔の一室には、CP9の構成員たちが集まっていた。理由は単純で、本日CP9の新司令長官……実質的なエニエスロビーの新しい最高権力者が就任するということで、挨拶のために集まっていた。

ただし、任務等で出ている者もいるため、全員集合というわけでは無く、現在室内に居るのはカク、ジャブラ、ブルーノ、カリファの四人だった。

「新しい長官ねえ、どんな奴なんだか……前長官の息子って話だが、前の長官よりはマシだといいがな」

「さあおう。というか、わしに至っては前長官とすらほぼ話しておらんぞ。正式配属されてすぐに司令長官の交代か……やれやれ」

ソファーに座り、どこか気だるげに話すジャブラの言葉を聞き、CP9内でも最年少でありつい最近正式に配属されたばかりであるカクが呟くように告げる。

「誰であろうときほど変わらんだろう。最低限長官としての役割さえ

こなしてくれば問題はない」

「そうね……あら？　そういうえば、ルツチは？」

腕を組んだ状態でどっしりとソファアに座りながら呟いたブルーの言葉に同意しつつ、カリファは周囲を見渡し、本来ならこの場に居るはずのもうひとり……ルツチが居ないことに首を傾げた。

「ああ、ルツチなら、少し用があると行って出た。すぐ戻るとも言っておったがな」

「……用？」

「分かんが、どうも今朝から妙に上機嫌じゃったぞ」

カクの答えにカリファは首を傾げるが、カクとしてもそれ以上の情報は得ていない。むしろカクとしても不思議だった。

ルツチは普段クールであり、共にグアンハオで育った彼らの前では笑ったり穏やかな顔も見せることはあるが、それでもあれほどまでに感情を表に出すのは珍しい。

とにかく上機嫌というのが分かる雰囲気、時々なにかを思い出したように笑みを浮かべていたのが印象的だった。

そのまま少しの時間が流れると、鍛えられた彼らの耳に足音が聞こえ、入り口のドアが開くと紙袋を手を持ったルツチが入ってきた。

「おいおい、ずいぶん遅いじゃねえか。天才様は重役出勤か、ルツチ？」

「ちよつと買い物に行っていただけだ」

「買い物？」

「ふつ、そのうち分かる」

ルツチに反抗心があり、普段から積極的に絡んでくるジャブラの言葉に対しても、ルツチは煽り返すわけでもなく小さく笑みを浮かべるだけで、酷く楽しげだった。

その反応は予想外だったのか、ジャブラも一瞬キョトンとした表情を浮かべたあと、不思議そうにルツチを見ていた。上機嫌の理由を尋ねても「そのうち分かる」としか返答しない。

そんなルツチの様子を不思議そうに見ていると、部屋のドアが開きルツチを除く面々は驚愕したような表情でドアの方を向いた。

理由は単純だ『ドアが開くまで気づかなかった』から……そう、超人として鍛え上げられた彼らの耳が、入ってきた人物の足音を捉えることができなかつたのだ。

入ってきたのは黒いスーツをキツチリ着て、白いネクタイを巻いたオールバックにした薄紫の髪と目元と鼻が黒い顔が特徴の男……スパンダムと、首の後ろで細く一本に纏めた尻尾のように見える薄い茶髪の小柄な女性……チエルシーだった。

ふたりの入室を見て、ソファアーに座っていた面々は起立して司令長官用のデスクの前に一列に並ぶ。彼らも政府のエージェントだけあつて、しつかりと統率の取れた動きである。

整列した五人とデスクを挟むような位置まで歩いたあとでスパンダムは停止し、チエルシーはその少し後方に立つ。

ゆつくりとひとりひとりの顔を確認するように視線を動かしたあとで、スパンダムは静かに口を開いた。

「本日付けで司令長官に就任したスパンダムだ。よろしく頼む。後ろに控えているのは、長官補佐の役職に就くポーラ・チエルシーだ。ああ、楽な姿勢で構わない。順に簡潔な自己紹介を頼む」

スパンダムの言葉を受けて少し足を開いて休めの姿勢になりながら、最年長であるジャブラから順に簡潔な自己紹介を行いつつも、ルツチを除いた四人はスパンダムを品定めするような目で見ていた。

若干の不気味さを感じる相手の実力を慎重に探ろうとしているようなその視線に対し、スパンダムは小さく口元に笑みを浮かべた。

そして、自己紹介がひと段落したタイミングで口を開く。

「……相手を見極めようとするのはいいことだ。まず最初に情報を得ようとする姿勢はいい。だが、想像で相手を小さく見ないことだ。六式使いである自分たちよりは下だろうと考えるのは……短絡的だぞ」
「ニツ!?!」

瞬間、ルツチを残し四人は部屋の端まで飛び退いた。スパンダムから感じた凄まじい重圧を受け、ほぼ反射的といった感じだ。

素早い反応ではあるが、四人の表情は驚愕一色に染まっており、その体は小刻みに震えていた。そう、四人も理解したのだ。目の前の存

在が、あまりにも他を隔絶した強者であるという事実を……。

「くっ……ははははー！」

緊張した空気の中で楽し気な笑い声が響き、視線がそちらに向く。視線の先では、ルッチが心底楽しそうな表情で笑っていた。

「そうイジメてやらないでくれ、主公……いや、これからは長官だな。そいつらも十分に優秀だ。すぐに実力に気付けなかったのは、アンタの気配を抑える技術が高すぎるだけだ。まったく、気配だけで気の弱い人間なら殺せそうな癖に、いったいどんな分厚い羊の皮を被ったら、ああも気配を消せるものなのやら」

「俺たちは諜報機関の人間だ。当然潜入なども任務としてこなすだろう。お前も、一般人にも紛れられるように気配を抑える術は日頃から磨いておけ」

「くく、相変わらずで安心した」

スパンダム の返答に上機嫌に笑いながら、ルッチはテーブルの上に置いていた紙袋を手に取り、中から一本の瓶……ウイスキーを取り出した。

「確か、ウイスキーが好きだっただろう？ 就任祝いだ」

「なんだ、わざわざ買ってきたのか？」

「またアンタが上司になるのが楽しみでつい、な。昨日は寝付くのに苦労したほどだ……さて、提案がある。コイツらも新長官のことをもっと知りたいだろうし、長官も部下の能力は把握しておきたいだろう？ どうだ、親睦を兼ねて少し共に汗を流すというのは？」

「なるほどな……確かに、今日は顔合わせがメインで他の仕事はほぼ無い。互いの理解を深めるのも重要か……いいだろう」

戸惑う四人を置いてけぼりにして話は進み、あれよあれよという間に訓練所にて互いの実力を確認し合うということに決定した。

・***

司法の塔の地下に用意されたCP9専用の訓練場。床に倒れ伏す五人に対し、スパンダムは静かに告げる。

「……………ここまでしておこう。これから俺は引継ぎの書類等の確認作業を行う。お前たちはシャワーを浴びたのちは各々待機でかまわない。ただ、緊急の任務が入る可能性もあるから、連絡だけは付くようにしておけ」

それだけ告げると、スパンダムはチエルシーを伴って訓練場を出ていった。

「……………なんちゅう……………強さじゃ……………」

「しかも、まったく……………本気の一割も出していない感じだったわ……………」
仰向けに倒れた状態で呟くカクに、壁にもたれ掛かってぐったりとしながらカリファも同意する。

「……………信じられん……………なんだアレは……………理不尽の化身かなにかか？」

「ああ、くそつ、駄目だ……………立てねえ……………化け物じゃねえか……………」

「くくく、ははは……………」

同様に満身創痕といった様子でブルーノとジャブラが呟き、少し離れた場所で同様に倒れていたルッチは心底楽しげな様子で笑っていた。

「これだつ、この圧倒的な力……………これでこそ、長官だ」

満身創痕ながらもルッチは非常に満足げであり、己より上であると認めた相手の実力を再確認できて、心から喜んでいた。

いやむしろ、ルッチがCP5に短期所属した時よりさらに強くなっているような感じもあり、「この怪物はまだ進化するのか」と、心の中に歓喜の思いが溢れていた。

そのままひとしきり楽しそうに笑ったあとで、ルッチは上半身を起こし、他の四人に話しかけた。

「……………どうだ？ まさに、俺たちのトップに立つに相応しい男だろうか？」

その言葉に、否定は返ってこなかった。

部下の叫び、怪物の怒り

CP9の司令長官に就任して半年が経過した。それなりに順調と言えるだろう。

メンバー全員と顔合わせも終わった。原作には居なかつたメンバーも複数いたが、おそらく原作までにCPOに異動したとか、そんな感じではないかと思う。

メンバーとの関係もそれなりに良好だ。ルッチの提案で最初は一通りのメンバーと模擬戦を行ったおかげか、ある程度打ち解けられているとは思っている。

しかし、俺も手加減が上手くなったものだ。ポチを鍛えていたおかげというのもあるのだろうが、うっかり相手を重傷にしたりすることもない。

己の力というのは正確にコントロールできてこそなので、今後も己の強化と共に加減についてもしっかり磨いていくつもりだ。

さて、正直順調ではあったが、そんな時ほど弩級の厄介事が舞い込んでくるというのは、世の常である。現在長官室にいる俺の手には一枚の紙……報告書と呼ぶのも憚られるようなふざけた内容が書かれた紙が握られており、己が苛立っているのを実感できる程には不快感を覚えていた。

そして、それはその内容を知らされたCP9のメンバーも同様……というかこいつら、待機指示の時は好きな場所に居ればいいのに、わざわざ長官室に集まってくるのはなんでだ？

「だから、そんなわけがねえだろ!!」

「それを俺に言っただろう！ すでに、上が決定している以上どうにもならんだらう！」

そんな俺の目の前ではジャブラとブルーノが言い争いをしている。いや、というよりはジャブラが一方的に食って掛かっている感じだ。

いまのジャブラは傍目に見ても冷静ではなく、苛立ちと焦りで目に見えて感情的になっていた。

その原因は俺の手に持つ紙で、そこには『赤髪海賊団と内通し、手引きた罪によりフィズを投獄した』という旨の内容が書かれていた。

フィズ……そうか、コイツが原作におけるフーズ・フリーというわけか。たしかに脱獄して逃げて、顔をマスクで隠すぐらいなのだから、名前も変えるのが必然といえる。

それに気付くのが遅れたのは、フィズに対する護送任務の割り振りは引継ぎ前に親父が行っており、フィズとは出発前に軽く挨拶をした程度の関係でタイミングが悪かった。

またゴムゴムの実に関しては隠しておきたいのか、護送リストの下の方に小さく書かれており、名目も重要品の護送となっていた。

しかし、時期と東の海での任務というのを見た時点で気付くべきだった。

投獄された場所は……インペルダウン？ これは、明らかにおかしい。フーズ・フリーは確か、投獄され拷問を受けていたが、ニカの話をした看守が始末されたのを見て、我が身も危ないと思つて脱獄したはずだ。

しかし、センゴクはインペルダウンは過去金獅子のシキ以外はひとりも脱獄者を出していないと語っていたので、これでは矛盾が生じる。

……政府が脱獄の事実をもみ消した？ あるいは、原作では別の刑務所に捕らえられていた？ もしくは、政府のエージェントを投獄という恥になりかねない内容を海軍に対して隠していた可能性もあるか……どちらにせよ、俺への報告を偽る理由もないのでインペルダウンに投獄されているのは間違いないだろう。

……本当に、ふざけた話だ。すでに投獄されてから数日経過しており、直属の上司である俺に対しての報告があまりにも遅い。それだけではなく、報告書に書かれている内通の証拠とやらも、捏造にしてももう少しマシなやり方をしろと思うほど杜撰だ。

そんなことを考えていると、ジャブラがバンツとデスクに勢いよく両手を付き、俺に向かって叫ぶように告げた。

「長官！ 信じてくれ!! アイツはたしかに、嫌味つたらしくて腹立つ奴だが……海賊との内通だとか、そんなつまらねえことをするような奴じゃねえんだ!」

必死の形相でフーズ・フリー……フイズの無実を訴えるジャブラの目には涙すら浮かんでいる。ジャブラはこう見えてかなり情に厚い人物だ。

エニエスロビーから逃げる際には、カリファに上着を貸し、動けないカクを背負ったりしていた。対抗心から普段はなにかと喧嘩腰で接するルツチに対しても、ルフイとの戦いで重傷を負ったルツチの治療費を稼ぐため、大道芸のような真似をして見世物になってでも金を稼いでみせたりと非常に仲間思いなところが見て取れた。

フイズはジャブラと一歳違いであり、CP9に配属された時期が同じだったこともあって関わりが深いのだろう。そういえば、互いに給仕のギャサリンに想いを寄せていて、どちらも振られているという話もあったような……。

そんなジャブラは、目に涙を浮かべながらデスクに叩きつけるように頭を下げる。

「頼むー 長官！ なんとか、なんとか……アイツを……助けて、くれねえか?」

祈るようなその言葉を受け、俺の心に去来するのは……凄まじい怒りだった。ハッキリ言おう、今回の件は本当にふざけている。

フイズは真面目に己に割り振られた任務をこなしていただけであり、赤髪海賊団相手にも果敢に戦い重傷を負った。報告書には赤髪に用済みとして切り捨てられたと書かれていたが、事実と異なるのは明白だ。

「……ちよ、長官?」

ああ、本当に……ふざけた話だ。真面目に生きていた者が突如降りかかった理不尽によって未来を奪われる。フイズは思っているだろう……「どうして俺が?」「俺がなにをした?」「誰か助けてくれ」と……前世の苦い記憶を思い出させてくれる。

もし仮にこれがCP5時代に聞いた話であれば、よそ事として気に

も留めなかった。ああ、アイツがフーズ・フーか、くだらない責任の押し付けで優秀な人材を捨てるなんて、世界政府は馬鹿な真似をするもんだと、その程度の感想だっただろう。

だが、いまの俺はCP9司令長官であり、フイズは俺の部下だ。その部下を、俺に一切の事前報告無く、冤罪で投獄したというのは明らかに俺の領分を犯す行為だ。

俺の怒りが伝わったのか、動揺するジャブラやブルーノの前で、俺は椅子から立ち上がったって告げる。

「……当たり前だ。こんなふざけた報告を受け入れる気はない。ポチ、五老星に伝達しておけ『いまから行く』と一言だけでいい」
「了解しました」

「ちよ、長官……すまねえ……恩に着る」

ポチに指示を出し、感極まった様子で頭を下げるジャブラに返答はしないまま背を向け、部屋を出ようとする、そのタイミングでこれまで静観していたルッチが口を開いた。

「……どうする？ 単独でインペルダウンでも落とすか？」

「……相手の出方次第では、な」

「ふふ、それはそれで面白そうだ」

簡潔に答えて部屋を出る。さすがにそうはならないだろうが、場合によつては強制的にフイズを連れ帰ることぐらいはやるつもりだ。

俺の領分においてこんなふざけた話を認める気は無い……俺の領分を犯そうとするなら、それは俺の敵だ。

自由を容認する価値とは

聖地マリージョアにあるパンゲア城、そのの権力の間に居るのは、世界貴族の最高位にして世界政府の頂点たる5人の老人。

まあ、原作知識のある俺はさらに上がいることも知っているが、それは普通は知り得ないことなので、世間一般の認識としては彼らが世界の頂点である。

「急な訪問、失礼いたします」

「まったく。ロクなアポもなく会えるほど、ワシらも暇ではない」

「さよう。今回特別に時間を用意したのは、日ごろの貴様の仕事ぶりを評価してのことだ」

「それで、用件は？」

相手は上司に当たる存在なので、しっかりと敬語は使う。現在腹の中で煮えたぎっている怒りが表に出た場合は、分からないが……。

用件を言うように促す五老星たちに対し、俺は手に持っていた書類を軽く掲げる。

「このふざけた報告書についてお聞かせ願いたい。ウチの構成員であるフィズが赤髪海賊団と内通し、護送中の悪魔の力の強奪を手引きした……子供にやらせても、もう少しマシな事後報告書を書くかと思えますがね。しかも、こんな状況証拠すらまともに揃ってこない杜撰な理由で即捕縛、裁判等も一切なく即日投獄……これを納得しろという方が難しいかと思えますが？」

「ずいぶん物言いだな。それで、結局なにが言いたい？」

「こんな言いがかりを付けるようなら最低限直属の上司である俺を通してと言っているんですよ。もちろん、こんな馬鹿な通達が来たら突っ撥ねてやりますが……ともかく、このような内容は認めない。フィズは無理やりにも連れ帰らせてもらいます」

そう宣言するとピリツと空気が張り詰めるのを感じた。おそらく五老星の認識としては、俺は政府内でもそれなりの権力者であるスパンダインの息子で、そこそこ仕事はできると評価はしているのだろ

う。

最初に向こうが言った通り、だからこそ急な訪問でもこうして会ってはくれている。だが、俺の要求を許すか否かは別の話だ……さて、どうでる？

「……お前は、少し勘違いをしているようだ」

「ほう？」

五老星が呟くのと共に、『部屋の中に隠れ潜んでいた4人』のうちの3人が俺の方に動くのを感じた。深く探らず常時垂れ流してる程度の見聞色に引つかかるレベルではあるが、身のこなしは中々……CP0か？

その予想は当たりだったようで、俺を取り囲むように白いスーツを着て仮面を付けた3人のエージェントが姿を現す。

原作で見たような仮面もいるが、見覚えのないのも居るな……残る1人は、五老星の後方で、いざという時の護衛というところか……。『海軍などでもそうだが、我を通しそれを我らが見逃している者も存在する』

「だが、それは誰に対してもというわけでは無い」

「さよう。ある程度のワガママや身勝手を見逃してやるだけの価値があるともみさせる存在だからこそ、そういった振る舞いを許している」
「貴様はたしかに優秀で、貴様の親も政府の重職だ」
「しかし、所詮はその程度ということを忘れるな」

なんともまあ、五人順番に息の合ったことだ。さて、理解していないのは……いったいどちらなんだか……。

「CP0か……わざわざ、このために呼んだわけじゃないだろう？」

「無論、別件で任務を与えるために呼んだ。だが、勘違いした者に灸を据えるには丁度よからう」

「ふ、ふふふ……」

怒りと哀れみでつい敬語が崩れてしまったが、まあいいだろう。本当に……この場に居合わせたCP0の面々は、哀れなものだと同情する。

笑い出した俺に怪訝そうな表情を浮かべる五老星と、仮面で顔はわ

からないが微かに警戒を強めるように体に力を入れるCPOたち。

「……CPO。俺はお前たちに思うところは無いし、恨みもない……
ああ、だから……安心しろ、任務に支障が無いように……『優しく撫
でてやる』」

瞬間、抑えていた気配を解放する。さすがは特級のエーリエントと
いうこともあって、CPOの面々より遥かに早い速度で反応して俺か
ら距離を取ろうとバックステップをするが……悪手だ。そこは自身
の反撃の目を捨てて剃で大きく距離を取るか、耐える覚悟を決めて防
御を固めるべきだった。そうすれば一手ぐらいは凌げたかもしれない。

俺は3人がバックステップで着地するまでにそれぞれの後方に回
り込み、首に一撃ずつ入れて意識を刈り取った。

3人のCPOが床に倒れる音と共に、俺は驚愕の表情を浮かべてい
る五老星たちに向き直る。

「……それで？ 俺はアンタたちの基準で、我が儘を見逃す価値があ
る相手か？ それとも……そこに残っている、もうひとりが続きをや
るか？」

そう告げながらもうひとりが隠れ潜んでいる場所に視線を向ける
と、ビクツと気配が揺れるのを感じた。どうやら怯えさせてしまっ
らしい。

あまり怯えさせても悪いので気配を再び抑えて返答を待つと、少し
して五老星のひとりが深くため息を吐いた。

「……好きにしろ、インペルダウンにはこちらから連絡を入れておく」
「では、そうさせてもらいます」

無事に許可は得た。これでフィズを連れ出しても問題はない。こ
こからインペルダウンには……10分あれば着くな。フィズも拷問
を受けてまいっている可能性もあるし、俺の苛立ちもいい加減限界な
のでさっさと回収して帰るとしよう。

・***

スパンダムが退出したあとで、五老星のひとりが近場の柱へ視線を向けながら呟く。

「……どう見た？」

「バケモノとしか、言いようがありません」

五老星の言葉に反応し、柱の陰に身を隠していた4人目のCPOが姿を現し、先ほど見たスパンダムについての感想を述べる。

いや、ただしくはCPOである彼をもつてしても、スパンダムの動きを見ることができなかった。そしてあの押しつぶされそうなほどの重圧。力の差をこれでもかというほどに感じた。

「本当にあの方にとって、優しく撫でただけでしょう。あまりにも次元が違う。正直私も、この仕事は長く様々な強者を見てきましたが、私の中で強者という定義が揺らいでしまうほどにあの方は隔絶していました」

「……そうか、確かに凄まじい存在感だった」

「事務能力が高いとは認識していたが、それ以上に飛びぬけた戦闘能力を有していたとは……誤算だったな」

そう、誤算。実のところ、五老星は最終的にスパンダムの要求を通してやるつもりだった。スパンダムが居た際のCP5の優秀さ、CP9への着任から半年での仕事ぶりは五老星も高く評価していた。

真面目で仕事も早く、部下の扱いも上手いと極めて優秀な存在であり、へそを曲げられても面倒なのでフィズの釈放には応じる腹積もりではあった。

ただ、今後を見据えて釘を刺しつつ「今回は特別に〜」という形で話を持っていくつもりだった。それがどうだ、いままで指揮官として優秀だと認識していたが、その戦闘能力の方は掛け値なしのバケモノだったのは、誤算ではあった。

「だが、その力を知ることができたのは今後を考えればプラスだ」

「確かに、アレは絶対に手放してはならん存在だ。それをこのタイミングで知れたのは、幸運だったと思うべきだろう」

スパンダムの能力は完全な誤算ではあったが、それをこのタイミングで知ることができたのは幸運だった。とりあえず今後は、スパンダ

ムが離反したりすることが無いように、ある程度のワガママなどは認めようと、そういう話で決まりかけたタイミングでCPOの男が口を開いた。

「……あの、スパンダム殿なんですが……もしかして、ここを出て即座に月歩あたりでインペルダウンに向かったのでは？ あの能力だと、それこそ30分もかからず着きそうです……そして、気のせいでは無くかなり怒ってましたよね？」

「……至急インペルダウンに連絡を入れろ。世界政府の役人がインペルダウンを半壊させたなんてことになれば大事件どころではない。大至急だ！」

「はっ！」

そうして、いくつもの手順をすつ飛ばしてインペルダウンに電伝虫にて連絡を終えたのが、スパンダム退出から7分後……ギリギリだった。

あと3分遅ければ、最悪インペルダウンの門は破壊されていたろう。

閑話・圧倒的強者の背

……いったいどうしてこうなった。俺がなにをした？　ここに来てから何度も己に問いかけたが、答えなど返ってこない。

幼少の頃から厳しい訓練を積み、世界政府の諜報機関であるCP9に所属し、ずっと世界政府の役人として働いてきた。

天才ロブ・ルツチにも匹敵すると高い評価も受け、重要な任務も任されるようになり、順風満帆に生きていたはずだったのに……どうして？

全てが狂ったのはあの日、東の海での出来事。重要品の護送任務でのことだった。楽な仕事だと思っていた。そもそも政府の船に喧嘩を売る馬鹿なんてそうはいねえ。それに仮に海賊が仕掛けてきたとしても、最弱の海とも呼ばれる東の海に居る海賊なんて俺の相手ではないと、そう思っていた。

だが、そこに現れたのはグランドラインでも名の知れた海賊であり、あの鷹の目のライバルとも評される赤髪海賊団だった。

なぜこんな場所に？　どうして？　なんの狙いで？　問う間もなく戦いは始まり、俺も必死に応戦したが力及ばず敗れて気を失った。

そして、目覚めた俺に待ち受けていたのは任務失敗の責任……ではなく、赤髪海賊団との内通の疑いによる捕縛と投獄だった。

傷で痛む体で「違う」と何度も叫んだ。だが、その声が聞き届けられることは無かった。本来はグランドラインに居るはずの赤髪海賊団が護送のタイミングで東の海に居たのは、俺が情報を流したせいだと、そう告げられ容赦なくインペルダウンに叩き込まれた。

そして俺に待ち受けていたのは厳しい拷問だった。地獄のような痛みを、苦しみを味わった……だが、それでも、どうすることも出来ない。

俺は内通なんてしていないんだ。どれだけ痛めつけられたとしても、吐ける情報なんてそもそもも持ってない。誰にも信じてもらえず、助かる術も持たず、ただ泣き喚き救いを求めることしかできない

い。

「……ここは、まさに……地獄だった。」

インペルダウンレベル4の最奥と言っている場所にある機密性の高い特別独房。焦熱地獄と称されるレベル4ではあるが、ここは職員の生活圏と同じく耐熱壁で囲まれているため、血の池の灼熱は感じない。

ロクに窓すらなく、常に最低一人以上の看守が監視についているこの独房が、いまの俺が居る地獄だった。

すでに数日の拷問により、俺の心はすり減り切っていた。誰にもなにも信じてもらえない、逃げ出すことも出来ない、目覚めればすぐに拷問室に連れていかれて……また辛く苦しい拷問を受けることになる。

ああ、どうして、こうなってしまったんだ。俺はなにも、罪なんて犯していないのに……どうして、世界はこんなにも残酷で、これほどに理不尽なんだ。

俺の目が覚めたことに気付いた看守が独房に近づいてくる。ああ、また連れていかれて拷問が始まる。

「……誰でもいい……助けてくれ」

絞り出すように口からこぼれた言葉、弱り切った俺の姿を見て、看守はニヤニヤと楽し気な笑みを浮かべながら口を開く。

「へへへ、そんなに助かりたいなら、太——ッ!」

「必要ない。そもそもソイツは罪など犯していない」

言葉の途中で看守は横に殴り飛ばされ、そのまま壁にぶつかって気を失った。予想外の出来事に唾然とする俺の目に、見覚えのある顔が映った。

「しまったな。あまりに不快な笑い声でつい殴ってしまった。苛立っていたとはいえ、短絡的な行動は反省するべきだな」

「……スパンダム……長官?」

そこに居たのは、半年前にCP9の司令長官として就任したスパンダム長官だった。俺は丁度任務に向かうタイミングだったこともあり、本当に挨拶だけしか交わしていないが、なんとも独特の凄みのあ

る方だとは思っていた。

だが、どうしてここに長官が？ そんな疑問が頭に浮かぶのとはほぼ同時に、長官は俺の方を見て苦笑する。

「災難だったな。さあ、帰るぞ」

そういうや否や、長官は独房の扉をまるで紙のように引きちぎり、混乱している俺の下まで近づいてきて、俺の手に嵌められていた手枷に手を伸ばし、バキツという音が聞こえたと思えば手枷は粉々に……は？ いや、待って、これ海楼石……え？ 素手？ 素手で砕いた？ 「歩けるか？」

「……え？ あ、ああ……だが……」

「問題ない、話は付けてある。付いてこい」

「わ、分かった……あつ、いえ、分かりました」

「別に敬語は使わなくていい。さつ、行くぞ」

状況についていけない俺ではあったが、長官の言葉に従いその背に続く。その際にふと、不思議な安心感を覚えた。

先ほどまで、震え嘆いていたはずなのに、なぜかいまは酷く心が落ち着いているように感じられた。

そして長官に続いてレベル4のフロアを歩いていると、ふと奇妙な光景が目映る。通路の端で巨体を小さく丸めてガタガタと震えながら伏せているのは、このフロアを警邏している獄卒獣だ。そう、あの地獄の番人と畏れられる獄卒獣が、子犬のように震えていた。

それだけではない、レベル4で巨大な薪を運ぶ強制労働を行っている凶悪な囚人や、看守や牢番といった者たちも、一様に視線を俯かせ体を微かに震わせていた。

本来なら看守の怒号や囚人の叫び声が響くこのレベル4が、異常なほどの静寂に包まれていた。

その理由はすぐに察することができた。そう、『恐れている』のだ。凄まじい怒りと桁外れのプレッシャーを放ちながら、俺の前を悠然と歩く長官……そのあまりにも圧倒的な力を肌で感じて怯えている。

どうか、この絶対者の怒りの矛先が自分に向きませんようにと、視線を外し、祈るように体を震わせている。この地獄と言つていい監獄

全体がいま、ただ歩いているだけの長官に怯えていた。

「……すげえ」

思わずそんな言葉がこぼれた。そして、同時に先ほどから感じている異様な安心感の正体も理解できた。いま、前を歩く長官のあまりにも隔絶した力を肌で感じているからこそ、俺は安堵しているのだ。

前を歩く長官の堂々とした背は、天を突くほどに巨大に見える、その背の後ろに居ることがどれだけ安全であるかを、俺の本能が理解していた。

いまの俺は、長官の庇護下にあり、それがまるで世界で一番安全な場所にいるかのような安心感を俺に与えてくれていた。

……すげえ……すげえ……なんて人だ……なんて……圧倒的な存在なんだ。

ここは、インペルダウンは俺にとって間違いなく地獄だった。どうすることも出来ず、ただ泣き喚き助けを乞うことしかできない、絶望的な場所だった。

だが、どうだ？ その地獄はいま、たったひとりの男に屈服している。俺が絶望するしかなかった地獄を、長官はただ歩くだけで踏みつぶし圧倒している。

正直、憧れる。俺もこんな風になりてえと、心からそう思えるほどに、長官は強く偉大な存在に感じられた。そして、そんな長官が先ほど「ソイツは罪など犯していない」とそう断言してくれたこと、ここまで迎えに来てくれたことが……嬉しくてしようがなかった。

誰にも信じてもらえず、地獄で苦しむだけだった俺にとって、長官はまさに救世主と呼べる存在だ。俺はいつしか、体の痛みも忘れ、前を歩く長官の偉大な背を見つめ続けていた。

・***

しばらく歩き、インペルダウンの入り口まで上がってくると、そこには監獄署長であるマゼランがおり、長官の姿を見ると敬礼を行った。

「船を用意してあります。医者の手配も……この度は、失礼いたしました」

そう告げて深く頭を下げるマゼランを見て、長官は深くため息を吐く。すると、先ほどまで感じていた凄まじい怒りの気配が消えていくのを感じた。

気配を完全に抑え込んだあとで、長官は頭を下げるマゼランに声をかける。

「……いえ、今回の誤認逮捕に関しては、貴方たち監獄側に責任はありません。こちらこそ、苛立つて貴方の部下たちを威圧するような大人げない真似をして、申し訳ありませんでした。それと、特別独房の扉を壊して看守を気絶させてしまったことに関しても、重ねて謝罪します」

「いえ、部下を思えばのこととあれば責めることなど出来ません。スパンダム殿は、部下思いなのです」

「どうでしょうね？ 少なくとも、今回の件にすぐに気付いて手を打てなかったのは私の責任でしょう」

「……今回はお互いによい出会いとは言えませんでした。部署は違えど同じ世界政府に属する者として、確執などは残さず今後もよい関係でいられたらと思います」

「ええ、こちらこそ。司法の島の実質的なトップということもあり、今後お会いする機会も多いでしょう。その際は、どうかよろしくお願います」

顔を上げたマゼランと軽く微笑み合って握手を交わしたあと、長官は俺に船に乗るように促した。その言葉に従って船に乗ると、マゼランが手配していたであろう医者によって拷問などで負った傷を治療され、船室のベッドに寝かされた。

すると、緊張が抜けたせいか少し前まで眠っていたはずなのに、あつという間に睡魔が襲ってきて、俺の意識はまどろみに沈んでいった。

・***

微かな揺れを感じて目を開けると、そこは船室だった。一瞬目が覚めたらまた独房に戻っているのではないかという恐怖が湧いてきたが、すぐ近くの椅子に座り本を読んでいる長官の姿を見てホッと息を吐いた。

「……傷は痛むか？」

「いや、問題ねえ」

鈍い痛みはあるがそれでも、しっかりと治療を施されているので大した痛みは無い。ああ、俺は本当にあの地獄から脱することができたんだと、そう安堵すると共に、ほぼ無意識に長官に口を開いていた。

「長官、俺は……内通なんてしてねえ」

「ああ、そうだろうな」

「信じて、くれるんだな？」

「信じるもなにも、それが事実だ」

何の迷いもなく淡々と告げられたその言葉が、どうしようもなく嬉しくて目の奥が熱くなる。必死に無罪を訴えても、誰も聞く耳なんて持ってくれなかった。

だけど、長官は一切の迷いも疑いもなく、俺の言葉を肯定してくれた。それが嬉しくて、たまらなかった。

「……ああ、くそっ……」

「……」

どうも感情が上手くコントロールできない。長官が俺を信じてくれたことも、わざわざ俺を迎えに単身でインペルダウンまで来てくれたことも、どうしようもなく嬉しくて、安堵して……目から涙が零れ落ちて止まらなかった。

それに対して長官はなにも言うことはなく、ただ無言で本に視線を落とす。その気遣いがありがたくて、俺はしばらく声を押し殺して泣き続けた。

どのぐらいそうしていたらだろうか、しばらく泣いたおかげで頭がスツキリしたあとは、長官に対して申し訳ない気持ち湧き上がってきた。

「……長官、すまねえ」

「うん？」

「任務でヘマして、俺のせいでCP9の不敗神話にも傷が……」

「馬鹿か？」

「え？」

「お前が任務に手を抜いたりでもしたわけでないのなら、失敗の責任がお前にあるわけがないだろう。そういうのは上司の領分だ。だいたい、赤髪海賊団なんて大物がグランドラインから東の海に移動しているという情報を把握して現場に伝達できてなかった俺や上の責任によるところが大きい」

長官は相変わらず淡々とした口調で語る。お前に任務失敗の責などありはしないと、そういう責を被るのは己の役目だと、当たり前のように……。

そしてそこで言葉を区切ったあとで、苦笑しながら言葉を続ける。

「……そもそも、あらゆる備えをしていたとしても、誰でも失敗する時はある。不敗神話なんてのは、創設からいままでの間、たまたま上手くいっただけか、大方今回の件のように馬鹿げた言いがかりで揉み潰したりしてたんだろうさ」

「……アンタが失敗するところなんて、想像できねえけどな」

「俺も失敗はするぞ？　なんなら、さっきお前の目の前でしたばっかりだ」

「うん？」

「看守を殴り飛ばした。おかげで、事後報告の書類が増えたな」

そういえば、そんなことしてたな。だがそれを失敗だというのであれば、それはそもそも俺が不甲斐なかったのが原因だ。

「それは、そもそも——」

「だがまあ、笑い声がムカついたからな。仕方ないな」

「……」

「どうした？」

「いや……はは、そうだな。俺も独房で、聞きたびにイラついていたことを思い出したただけだ」

長官は俺が原因だとなんて思っていないみたいで、あの看守の笑いが悪いとあつさり言つてのけた。それがなんだかおもしろくて、つい笑つてしまった。

「……なあ、長官？ 頼みがあるんだ」

「なんだ？」

「戻つたら、俺を鍛えなおしてくれねえか？ もうこんな、情けねえ姿を晒さないようになりてえんだ」

一時期は絶望した。もう二度と諜報員として戦いたいなんて考えられなくなつても不思議ではなかつた。だが、インペルダウンで受けた苦痛や絶望以上に……俺は長官に、この人に憧れた。

恐怖なんかはいつの間にか消え去つて、この偉大な男の下で働きたいと、そういう気持ち湧き上がってきた。

そんな俺の言葉を聞いて、長官はふつと笑みを浮かべてから呟いた。

「……怪我を治してから、な」

俺はこの人のデカイ背中に付いていこうと、この瞬間本当に強く心に誓つた。

・***

エニエスロビーに戻つてくると、棧橋には見知った顔……ジャブラの姿があつた。ジャブラは俺たちを見ると、駆け寄つてきて長官に声をかける。

「長官！ フイズは……」

「問題ない。上には話を付けてある。今後同様の罪に問われるようなことはない」

「そうか……」

ジャブラは長官の言葉にホツと息を吐いたあと、俺に気付いたのか気まずそうに視線を逸らす。するとそのタイミングで長官が俺の方を向いて口を開いた。

「フィズ、お前はとりあえず傷が治るまでは出勤せず療養だ。医者か

ら完治の証明が出るまでは、職務につくことを禁じる。早く現職復帰したいのであれば、治療に専念しろ」

「ああ、了解だ」

「それと、お前には見舞金という名目で今回の件に対する慰謝料……それと、口止め料が支払われる。書類を用意しておくから、復帰したら受け取りのサインをしろ」

「いや、俺は別にそんなのは……」

「上を絶対に許せないと言っても言うわけではなければ、くだらない確執を残さないためにも受け取っておけ。上としてはそれで手打ちにしたいんだろうさ」

「……なるほど、了解だ」

正直もう上なんて割とどうでもいいと思っているので、見舞金なんてのは必要なかったが、長官が受け取れというなら俺はそれに従うだけだ。

そして長官はいくつかの伝達をしたあとで俺とジャブラに背を向けて去っていくようにして、途中で振り返って口を開いた。

「……ああ、そうだ。ジャブラにも礼を言っておけ、泣きながら俺に頭を下げてお前を助けてくれと頼み込んできていたからな」

「なっ!? おいつ、長官!!」

慌てた様子でジャブラが抗議の声を上げようとするが、その時にはもう長官は僅かな音すら出さない完璧な剃で姿を消していた。

そしてなんとも気まずそうな表情を浮かべるジャブラを見て、俺は思わず口元に笑みを浮かべた。

「ほうくジャブラ、お前、そんなことしてたのか?」

「は? うるせえ! ギャサリンに振られた上に、任務でハマまで来ました馬鹿なお前が哀れだっただけだ!」

「あ? 告白すら出来ねえ、奥手狼がなに馬鹿なことやってやがる」

「……ケツ」

「……チツ」

互いに悪態をついて顔を逸らす。コイツとは昔からそうだ。どうもしよつちゆう喧嘩になる……が、不思議と酒や女の趣味は……合う

んだよな。

なんとも言えない気まずい沈黙の中で、俺は顔を逸らしたままで小さく呟く。

「……ジャブラ」

「あん？」

「……ありがとうよ」

「……けっ……さつさと治して復帰しろよ。テメエのムカつく嫌味も、聞けねえとそれはそれで退屈だからな」

だがまあ、この関係も……悪くはないか……。

司令長官の仕事は多い

当たり前前ではあるが、CP9長官としての俺の仕事は多い。朝出勤するとまず出迎えてくれるのはデスクの上の紙のタワーだ。

なにせエニエスロビーだけで1万人を超える者が居て、俺がトップなわけで、報告書などだけでも相当の数に上るし、他のもろもろも含めれば毎日タワーが出来るのも領ける。

それに最近というか、マリージョア襲撃以降各地で革命軍の動きが活発であり、世界政府に属するCPの仕事は当然増加傾向にある。

しかし、革命軍か……正直、仮に思惑通り世界政府を倒せたとして、その後はどうするつもりなのだろうか？ 待つのは世界規模での大混乱だと思うが、それを治められるだけの人材や能力が革命軍にあるのだろうか？

ワンピースの世界においては、世界政府および海軍の影響は極めて広範囲かつ巨大だ。それが消えるとなると、本当に待つのは世紀末のような光景だろう。

国単位ならともかく、世界という規模で革命は成り立たないと思うのだが……まあ、俺が気にすることでもないか。

それにしても、相変わらず他のCPの尻拭いのような指令も多い。任務の割り当てを考えて、それぞれの休暇と被らないように調整。潜入などで予定より長引いた場合にも調整が必要だ。

CP9の構成員の経費申請などもすべて一度は俺に回ってくるし、司令長官の仕事量はかなりのものだ。原作のスパンダムや前任の親父はよくこなせていたものだ。

無能だとばかり思っていたが、アレでなかなか事務能力は優秀だったのかもしれない。

「チャパパパー！ 長官、今日も凄い量の書類だなく」

「ああ〜そびえる白き塔にはあく威圧！ 威圧感さえく感〜じい〜るうー！」

「丁度いい。フクロウ、クマドリ、次の任務の割り当てと予定だ。確認

しておけ」

「了解」

長官室に入ってきたのは、フクロウとクマドリ……現在は任務を受け持っていないふたりだった。というか、CP9のメンバーは何故か手持無沙汰だったり、待機だったりすると長官室に集まってくる。

まあ、こちらとしてもすぐに伝達ができる分メリットがあるので放置しているが、休憩室と勘違いしてないかコイツ等。

「それにしても長官、そんなに書類があつて大丈夫なのかあ？」

「今日はいつもより少ないぐらいだぞ、2時間もあれば終わる」

「チャパツ!」

「んん〜アア、さすが〜長官〜!!」

しばし、ふたりと雑談しつつ、書類を処理していく。報告書の確認と、返答が必要なものは返答を書き込んで別に分ける。

他にも要望や備品支給の申請なども、可否を判断してハンコを押して処理、任務関連はエージェントに割り振るか、地域的に他のCPが動いた方が効率がいいものは、他のCPに回す。

そんな風に処理しつつ、途中で鳴った電伝虫の受話器を取る。

「スパンダムだ」

『バスカビルです。先日の件ですが……』

「通達した通りだ。死刑囚の陪審員など意味があるか、まともな陪審員を選定しなおせ。人材の紹介が必要なら申請書類を書いて提出しろ」

『りよ、了解』

原作を読んだ時にも馬鹿かと思つたが、死刑囚で罪人の巻き添えを望んでいる公正な陪審員とは笑わせる。無駄にもほどがある。

だいたい死刑囚を覆面つけて鉄球振り回せるような状態にしているのがそもそも間違いだ。

「スパンダムだ」

『すみません、スパンダムさん。実は……』

「その件なら、対象の地域にCP3の管轄が含まれるから、事前に連絡を入れて共同で当たれ……あと、CP5の主官は俺じゃなくてお前な

んだが？」

『いやいや、私にスパンダムさんと同じ仕事量をこなせるわけがないじゃないですか……』

「はあ……とりあえず手が回らない分に関しては正規手順でこちらに回せ、以上だ」

俺の後任であるCP5の主官は、まだ慣れていないのかこうして頻繁に意見を求めて連絡を取ってくる。アドバイスくらいは構わないが、いい加減ある程度自身で判断できるようになってほしいものだ。

さて次の書類は……あく割り当てられるメンバーが居ないな。場所は前半の海の三つの島で、内容は全て暗殺か……仕方ない、この仕事は午後に俺が片付けるとしよう。

次が、他のCPの尻拭い……またCP7か、最近連続してないか？

「ポチ、CP7の主官に連絡を入れておけ、最近の任務失敗が多い件に関して話があるから、夕方に時間を作れと」

「了解です。こちらの処理済みの書類は、担当部署に送っておきますね」

「頼む。あと、戻るころには終わっているから、コーヒーを入れてきてくれ」

「はいー」

意外と、厄介な内容の書類も少なかったし、今回はかなり早く終わりそうだな。

「チャパ……いつ見ても、圧巻だぞ」

「よよいつ！ あく速過ぎてえ、手元があ、見えんく!!」

予定より早く終わるだろうし、昼食までに時間も余る。エニエスロビーで修繕申請があった個所の確認も今日中に行えそうだな……。

・***

書類仕事が終わると、ポチが淹れてくれたコーヒーを飲みながら新聞を読む。情報というのは非常に有益なものだ。諜報機関の長官ということもあって情報は多く集まる立場にあるが、性質上得やすい情

報と得にくい情報というのがるので、新聞も重要だ。

たとえば、フィツシャータイガーが死亡したり、アーロンが逮捕されたりという一般にはあまり公開されない情報などはすぐに手に入るが、この新聞に書かれている女優のビクトリア・シンドリーが舞台から転落死などという情報は、新聞等からのほうが効率よく収集できる。

「長官、なんの記事を読んでいるのですか？」

「ビクトリア・シンドリーの死亡記事」

「なるほど、セクハラです」

「お前の中で、俺は死亡記事を読んで興奮する変態という認識か？」

「いい度胸だ、次の訓練はきつくする」

「……パワハラです」

「……まあ、いい。それで？」

長官室に居たカリファが呆れるようなことを言ってくるが、彼女にとってのセクハラ指摘は一種の口癖のようなもので、適当に相手をしつつ続きを促す。

「化粧品は経費で落ちますか？」

「潜入用備品と書いて申請しておけ、衣類もそれで通る。ただ、量や金額に限度はあるからな」

「了解……あつ、チエルシー、私にもコーヒー貰えるかしら？」

「はい」

本当にコイツらは、ここを休憩室と勘違いしていないか？ あんまりにも頻繁に来るので、長官室のソファも一回り大きいものに換えたいぐらいだ。

そう思いつつ視線を向けると、カリファの向かいの席ではカクがなにやら難しそうな表情を浮かべていた。

「カク、どうした？」

「うん？ ああ、実は刀を新調しようと思うとるんじやが、なかなかいいものが見つからん」

「ウチの親父が、象になる剣を持つてるが？」

「……いや、それはいらん」

「なら、いくつかの伝手を紹介してやるから、一度見に行ってみろ……それと全額ではないが、購入費用の一部は補助金の申請ができるから、購入したら一度経理部に足を運んで聞いてみる」
「ほう、分かった。助かる」

当たり前だが、エニエスロビーのトップをやっていたれば武器商人等の伝手も山ほどできるし、売り込みのような話が来ることも多い。

しかし、法番隊のあの変な手甲剣は本当に必要なのか？ 頭ごなしに否定してやる気の低下に繋がっても問題だし、予算が過剰に必要というわけでもないで見逃しているが……あの戦闘手段なら、別に鉤爪でも同じだと思う。

・***

昼食を食べたあと、食後の運動を兼ねて回す相手が居なかった暗殺指令を三つこなし、完了書類を上を送付する。

さて、残っている仕事は修繕箇所の確認と、CP7の主官を注意するぐらいか……CP7本部には25分ほどの移動で着くので、時間はかなり余り気味だ。

鍛錬でもするか……。

「……で、なぜ、お前たちがここに居る？ CP0」

「ああ、いえ、我々も以前の一件で力不足を実感しまして……」

「スパンダム殿にご指導いただけたらなあ……」

「まあ、いいだろう。翌日に任務がある者は事前に言っておけよ」

前に五老星のところできり合ってから、CP0の連中がちよくちよくやってくるようになった。なんなら、あの時に居なかったCP0までもくる始末だ。

まあ、覇氣使いかつ実力者の訓練相手というのは便利なので、俺としてはまったく問題ないが……。

「そういうえば、スパンダム殿。部下に覇氣は教えないのですか？」

「教えてもいいが、覇氣の指導となるとある程度の期間を取る必要があるし、それだけ長期かつ継続した訓練を行えるほど余裕はない。C

P9のメンバーはまだ体も出来上がってない連中が多いし、とりあえずは保留だな。そういえば、CPOのメンバーはどのタイミングで覇気を習得するんだ？」

「我々はCPOからCPO0に上がる際に、一度専用の訓練施設に行つて、そこで覇気を習得した者からCPO0に正式所属という形ですね」
「……なるほど」

覇気の指導というのは、実際かなり難しい。個人差が大きいので、コレが正解という指導方法が無いのも原因のひとつだ。

俺の言葉を全面的に信じるが故に、図らずも覇気習得のコツを実践していたポチの習得は早かったが、それでもそれなりに時間はかかった。

CPO9のメンバーに習得させるとなると、さらに膨大な時間が必要だが……そんなに暇でもない。それに、覇気以外にも教えるべきことは多い。

のちに専用の施設で、専門の教官から教わるのであればそれを待つてもいいと思う。前半の海で覇気が必要になる場面はほぼ無い上、仮に相手が覇気使いでも暗殺するならば関係ない。自然系を相手にする状況なら、俺かポチが出れば済む話……そもそも自然系なんてそうそう居るわけじゃない。

となると、やはり急ぐ必要はないな。

「そもそも俺は基本的に独学だからな。あまり指導には向かない気がする」

「そうですか？　むしろ指導は分かりやすく、我々としても勉強になりますか……」

「……そうか、ならひとつアドバイスしてやる。マハ、お前は無意識下でも弾丸ぐらい弾けるようにしておけ」

「……いきなりハードルが高いような」

のちに、ワノ国でイズウと相打ちになる可能性が少しでも減らせるかもしれないからな。

「……というか、スパンダム殿。CPO0に来ませんか？　いまなら総監のポジションだつて用意できると思いますよ？」

「行かんし、上もおそらく俺をCPOにはしないだろう。五老星はなんだかんだで、俺の性質はよく分かっているだろう」

「と、いいますと?」

「俺が天竜人を殺す可能性が高いと思ってるんだろう。相性が最悪だしな」

「あゝ」

考えるまでもなく天竜人と俺の相性は最悪だ。そもそも、同族嫌悪というべきか自分さえよければいいという性質も似ていて不快感があるし……何の罪もない市民を衝動的に殺す場面を見たら、前世を思い出して殺してしまいそうだ。

五老星も、俺が天竜人と相性が悪いことは察しているだろうし、上げることはないだろう。そもそも、いまでさえ地位が高すぎるのに、これ以上上に行く気も無い。

「……それより、今日はマハとゲルニカだけか?」

「ええ、他の者は任務中です。来たがっていましたかね」

「なら、ポチも呼ぶか……2対1では、相手にならないだろうしな」

「……3対1でも相手になる気がしないんですが……」

その言葉に軽く苦笑しつつ、訓練が終わった後の確認作業の巡回ルートを頭に思い浮かべる。遠い場所から確認するのがいいが、西にある居住区は夕方を過ぎれば帰宅の者たちで込み合うし、そちらを先に……。

やっぱり、CP9長官の仕事は多いな。やっぱりもっと、下の地位の方が時間的な余裕がありそうだし、マジで四方の海の支部長とかにしてくれないかなあ。

闇の正義の執行者たち

CP9の司令長官としての仕事にも慣れ、メンバーとの関係もそれなりに良好だとは思いう。最近は何がで休職していたフィズが復帰し、精力的に仕事を行うようになっていた。

原作においてはロブ・ルッチに匹敵すると本人が語っていたが、実際の能力を見た限り、戦闘力に関してはルッチにやや劣る。

ジャブラやカクとルッチの間ぐらいの戦闘力といったところである。だが、それでもメンバー内で上位ではあるし、むしろフィズの真骨頂はそこではない。

フィズは指揮能力に優れており、ある程度の規模の部下を任せてもかなり上手く運用する。この点に関しては、ルッチより明確に上回る部分だろう。

特に複数人で行う任務に関しては、小隊長としての適性が高いので重宝するし、下級役人を多く連れて行う仕事も任せやすい。

他の部署との連携も問題なく、かなり優秀で使いやすい人材だ。コレだけの人材を、くだらない責任の押し付けで手放そうとしていたとは、世界政府には呆れるばかりである。

まあ、士気が高いのはいいことではあるが、どうにもやる気があり過ぎてオーバーワークになりがちなので、その辺りは上司である俺が上手くコントロールするべきだろう。

「……隊長、全員集合しました」

「ああ、分かった」

ポチの言葉を聞き、後方を振り返ると、そこにはCP9のメンバーが全員集合していた。今回はかなり大きな任務であるため、極めて珍しいことではあるが全メンバーで任務を行うことになった。

対象はとある国の反乱軍……この国は非常に豊富な資源があり裕福な国であり、世界政府にとっても重要な加盟国だ。いや、訂正しよう……裕福なものとはことん裕福で、貧困なものとはことん貧困な格差の大きい国だ。

この国の現王政に対して大規模な反乱の準備が進んでいるという情報が入り、CP9に仕事が回ってきた。

「……フクロウ、敵の規模は判明したか？」

「チャパパパ、3700だあ」

「事前の情報通りか……ブルーノ、主要人物は？」

「情報にあつた幹部と思わしき人物は全て砦内に確認できている」

崖の上から見下ろす俺たちの眼下にあるのは、大昔に大規模な戦争で使われたという砦。反乱軍の拠点であり、明日の決起を前に、ほぼ全員が集結しているとのことだ。

一網打尽にするには一番効率のいい状況と言つてもいい。こういった状況でブルーノのドアドアの実の能力による情報収集能力は非常に有効だ。

それこそ、空気さえあればどこにでも潜めるといふのは、諜報員としては最高の能力と言つていいだろう。

「で、どうするんだ、長官？ 主要人物の暗殺だけなら、俺がいつて終わらせてくるが？」

「いや、今回上からの指示は反乱軍の壊滅だ。主要人物だけでなく、戦力も反乱が不可能なレベルまでそぎ落とす必要がある」

「へえ、つまり結構派手な戦闘になるわけか……楽しみだぜ」

「別に暴れてもいいが、目撃者は全て消せよ、ジャブラ」

フィズとジャブラの言葉に答えつつ、時刻を確認する。作戦決行の時間まであと10分……砦内の多くの者が寝静まった闇深い夜。まさに暗殺集団に相応しい時間だ。

「カク、カリファ、クマドリ、ポチの四人は四方を警戒。砦から脱出したものは、全て消せ。残りは突入、指揮官から順に迅速に始末しろ……ルツチ」

「うん？」

「皆殺しでかまわない、好きにやれ」

「ふふ、そう来なくてはな」

事前に打ち合わせは念入りに行っているが、最終確認として指示を出す。大規模な戦闘は久々で、多くの殺しが出来そうということもあ

り、ルツチも上機嫌だ。

崖の上に立つ俺の後方に、綺麗に整列するメンバーに対し、軽く片腕を上げて告げる。

「時間だ……闇の正義を、執行する」

『了解』

腕を振り下ろすと、息の合った声が聞こえ、メンバーは闇に溶け込むように素早く剃で移動。殲滅作戦を開始した。

それを見送ってから、俺はポケットから棒付きキャンデーを取り出し、包装を破って啜える。

俺が出てもいいのだが、連携をしての規模の大きい戦闘の機会は貴重だし、アイツらの経験のためにも手は出さない方がいいだろう。

兵力は3700……数字だけ聞けば立派だが、その実ほとんどは戦闘経験のない素人の集まりで、武器も寄せ集めのものばかりだ。

そもそも戦争をするには少なすぎるし、王都に奇襲をかけてギリギリ成立するかどうか程度の規模だ。実際に決起して反乱を起こしていたとしても、鎮圧されていた可能性も高い……アイツらの能力を考えれば45分あれば、十分殲滅可能だろう。

俺は取りこぼしが無いように、ここで見聞色を用いて探っておけばいい。

しかしまあ、苦しむ者たちのために反乱を……か、馬鹿馬鹿しい話だ。仮に勝ったとしても、結局はいまと上下が入れ替わるだけ、苦しむ者が消えてなくなるわけでは無い。

万人が幸せな結末に終わる戦争などというものはないというのに……まあ、夢を見るのは勝手だが、相応に夢破れる可能性も考慮しておくべきだな。

・***

40分経たないぐらいの時間で、仕事を終えたメンバーが俺の元に戻ってきた。全員怪我はなく、返り血すらほぼ浴びていない。満点の仕事ぶりだ。

「隊長、任務完了しました」

「ああ、俺の予想より5分以上早い。優秀だな……ご苦労」

そう告げると、メンバーたちは綺麗に整列する。普段は自由に振舞っていてもさすがはCP9のエージェントであり、必要な場面ではしつかりと統率の取れた動きを取れる優秀さには感心する。

見聞色で探ってみても、砦内に生存者は無し……これで、任務はほぼ完了だ。

「それで、長官。死体はそのままにしておけばいいとのことだったが？」

「ああ……」ここに反乱軍はいなかったし、砦も無かった……これは、そういう筋書きだ」

ルッチの問いかけに答えながら、俺は月歩を用いて高く跳躍する。俺がわざわざ現地に来て指揮を執っていたのには理由がある。

それは主に後始末のためだ。殲滅だけなら、ポチかフィズに指揮を取らせればよかったが、3700人の死体がある砦を綺麗にするのは手間だ。

この国との交渉は終わっている。反乱が起りかけた証拠など不要、古い砦ごと消してしまえ……とまあ、そういうわけだ。

方法は一任されている……ならば跡形もなく消し飛ばしてしまつたほうが楽だ。

グツと拳を握り、そこに霸王色の覇気を纏う。赤黒い稲妻のような光が腕から迸り、俺はその力を砦に向けて振り下ろす。

「六王……覇銃」

霸王色を乗せた六王銃の衝撃は、圧倒的な破壊力をもって砦に落ち、轟音と共に大量の土煙を巻き上げる。

遠くから見ればキノコ雲でもできているかもしれないが、いまは夜で遠方から視認は不可能だし、この場所は人里からかなり離れている。音に関しても最寄りの町でも、どこかに雷が落ちた音、程度にしか思わないだろう。

CP9のメンバーがいる崖に着地し、土煙が晴れるのを待つ。土煙が晴れると……そこには隕石が落ちたかのような、巨大なクレーター

だけが残っていた。

「……任務完了だ。帰還するぞ」

「あ、ああ……長官、アンタ、アレじゃねえか？ 本名はプルトンとかウラヌスって言うんじゃない……」

「誰が古代兵器だ……」

「いやいや、こんなん古代兵器みたいなもんだろ!? 砦が跡形もなく消し飛んだぞ……」

夜でも分かるほど青ざめた顔で話しかけてくるジャブラとフィズに簡潔に答えながら、歩き出す。CP9のメンバーたちは任務完了という言葉を聞いて、ある程度自由に話して構わないと判断したのか、会話を楽しんでいるようだった。

「……チャパ……本当に、長官が敵じゃなくてよかったぞ」

「なにがどうなったら、拳振っただけであんなことになるんじゃない？」

もうある程度慣れたかと思うたが、長官のバケモノぶりには、いまだ驚かされるのう」

「く、くくく……六王銃を片手で、しかも、この威力……まったく、どこまで面白い男なんだ」

「アレを打たれたらどうなる？ エアドアで亜空間に入れば、ギリギリなんとかなるか？ いや、そもそも間に合うのか……」

「よよいっ！ なにかく赤い雷があく見えたようなあゝ！」

「さすが、隊長！ 惚れ惚れする強さです。カリファさんもそう思いませんか？ 本当に隊長は昔から凄くて……」

「え？ ええ、思うけど……チエルシー、いまは移動中だから、その話はあとにしましょう」

賑やかなことだ。しかしまあ、原作のCP9でもそこそこの仲は良かったが、こうして会話している表情や声色から察するに、なんとなく原作より仲が良いような気がするな。

特にルッチが原作と比べてかなり表情豊かで笑うことが多いのも要因かもしれない。まあ、メンバー同士の関係が友好で困ることは無いか……さて、とりあえず戻ったら、夜間勤務だったから、コイツ等には半休を与えて……俺は報告書の作成だな。

順調な時ほどトラブルは発生する

CP9の司令長官になって数年経ち、朝の長官室に積まれる紙のタワーは2倍ほどに増えたが、毎日定時上がりは問題ないし、休暇もしっかりとれているので、特に気にする必要はない。

なんなら、仕事量は増えたが処理にも慣れてきたので、以前より早く終わってのんびりできる時間が増えたぐらいだ。

いまだに定期的に繰り返している肉体改造によって、脳の処理速度や記憶力も強化しているのが大きいだろう。資料室にある資料はほぼ記憶してあるので、わざわざ調べに行く必要が無いのも大きい。

それはそれとして、俺が行っている特殊な肉体改造は、なんとも興味深い結果を及ぼした。検証するのにかなりの年月がかかったが……どうやら肉体改造を行うたびに俺の霸王色の覇気が大きくなっていることが分かった。

本来霸王色の覇気は生まれもったもので、調整こそできるが鍛えることはできない。本人の成長によってのみ磨かれると原作においてレイリーも語っていた。

なので、俺も最初は気のせいだと思っていたのだが……細かく何年もかけて検証を続けた結果、肉体改造を行うと確実に大きくなっていることが判明した。

その理由について考えてみたのだが、そもそも最初に鍛錬を行っていた数年の間に俺は己に霸王色の覇気があるとは思っていなかったし、実際それを感じるような機会も無かった。霸王色があることを知ったのは、武者修行の最中だった。

そして、今になって思ったのだが……実は『最初の時点では霸王色は無かった』のが正解で、武者修行にでるあたりになって霸王色を獲得していたということではないかという仮説を立てた。

本来霸王色の覇気というのは生まれつきの資質だ。後天的に備わるなどということはあり得ない。だが、ここで要因となりえるのが俺の肉体改造について……。

果たして、細胞すべてを作り変える肉体改造を終えたあとの俺は、行方前と同じ存在と認識すべきだろうか？ 細胞単位ですべて変わっているのだ。それはもう、生まれ変わっているといっても過言ではないのではないだろうか？

つまり肉体改造を行うことで、そこまでの俺は一度死に新しい……より強い俺に生まれ変わっていると考えれば、納得できる部分も存在する。

ワンピースの世界にはブルックがそうであるように魂という概念が存在する。肉体が生まれ変わって……つまり、脳も新しく作り替わっても記憶を維持したままなのは、魂が関係しているのか、それとも元々前世の記憶を持っている俺の魂が特別なのか分からないが、とありあえず魂が要因であると思う。

まあ、いまの俺が肉体を作り変える前の俺と同じなのか、それとも『記憶を引き継いだだけの別人』なのか、そんな哲学的なところを考える気は無い。俺が俺であると、自身で認識できているなら、その差異は関係ない。

そして、覇気の資質はいつたいどこに宿るのか？ 魂であるなら変化は無いはずだが、肉体に宿るとすれば、俺の覇王色が大きくなっていく理由にも説明が付く。

最初に鍛錬を始めたばかりの肉体、スパンダムとしての本来の肉体に王たる資質は備わっていなかった。しかし、幾度となく肉体改造を繰り返すうちに、その肉体が王の資質を持つに相応しいものへ変化した結果、覇王色の覇気が宿った……そう考えれば、ずっと覇王色に気付かなかったことにも説明が付く。

そして現在も定期的により強い肉体へと作り変えており、その度に王の資質は大きくなっていくのではないだろうか？ それを本人の成長と取るか否かは置いておいて、鍛えられない筈の覇王色を意図して鍛えることも可能ということが分かった。

……まあ、結局のところすべて推測に過ぎない。覇王色が大きくなって困ることは無いし、俺にとっては利点しかないので、必ずしも正しい理論を探る必要はないが……。

そういえば最近の事ではあるが、見聞色の覇気も成長を見せている。以前とは違い無機物の気配を察することができるようになった。万物の声を聞くという感覚ではなく、レーダーのようにどこにどういった形のものがあるかというのが探れる感覚とでもいうべきか、これはこれで非常に便利だが、これが肉体改造の影響によるものか覇気を鍛え続けた結果なのかは分からないし、検証のしようがないのが難点だ。

手持無沙汰なせいか、己に対する答えの出ない考察を続けながら新聞を読んでいると、ふとある記事に目が留まった。

トムズワーカーズによる海列車の全路線開通が目前という記事……もう、そんな時期になったか。海列車はこのエニエスロビーにも通じているので、長官である俺としても今後物資の搬入等のスピードが上がるのでありがたい。

まあ、さらに書類仕事は増えそうだが……それはそれとして、ついにこの時期が来たかという認識でもある。

「なんじゃ、長官？ 面白い記事でもあったか？」

「ああ、いや、これを見て海列車の開通が間もなくということ思い出したただけだ」

「海列車か、アレは凄いのう。発想もさることながら、実現させるのもたいしたものじゃ。わしはそこまで造船技術などに詳しいわけでは無いが、並の腕では不可能というのは分かる」

「そうだな、ウチとしても有益だ。船大工のトムにこのエニエスロビーも繋ぐように言った裁判官のおかげだな……しかし、また書類仕事が増えるな」

部屋に居たカクの言葉に答えながらコーヒーを飲む。最近時間に余裕があるせいか、10時を過ぎたらコーヒーを飲みながら新聞を読むのがすっかり日課になってしまった。

「まあ、最近手持ち無沙汰気味だったからな、多少仕事が増えるのはむしろありがたいが」

「いやいや……なんであのふざけた量の書類があつて、手持ち無沙汰なんじゃ……というか、他のCPからの仕事の相談も多いし、もう長

官が全CPの実質的なトップじゃろう」

「そうでもないぞ、CPの中にも俺を嫌っている部署はある。CP2とかCP4が代表的だな……まあ、俺というよりは、俺の親父に恨みがあるみたいだがな」

当たり前だがCPも一枚岩というわけでは無い。最近では他部署と連携して任務にあたる機会も増えて風通しは良くなったように感じるが、それでも未だに断固としてCP9なんかには頼るかというところもある。

親父はまあ、権力はそれなりにある分恨みもかなり買っていたからな……。

「……俺としては四方の海の支部長辺りが身の丈に合っていると思うんだがな。いっそ左遷でもしてくれないものか……」

「ははは、面白い冗談じゃ。上がることはあっても下がることなんぞないじゃろ」

……本気でそう思ってるんだがなあ。まっ、現状でもものんびり過ごしてはいるし、問題ないと言えば問題ないが……。

しかし、得てして、こういう時にこそ面倒な事態というのは巡ってくる、過去の経験がそう告げているような気がした。

そんな俺の下に『古代兵器プルトンの設計図の搜索』という指令が届くのは、それから10日ほど経ってからだった。

ある日の夕方……とはいえ、エニエスロビーは夜の無い島なので、時計を確認しなければ夕方であることはわからないが……。

ともかく、そろそろ定時が近い時間帯に、俺は届いた一枚の指令書をじつと眺めていた。そこには、古代兵器プルトンの設計図の搜索に関する指令の詳細が書かれており、言うまでもなくこれは原作におけるスパンダムが行っていたものと同じだ。

ただ、状況はかなり違う。まず、スパンダムである俺はCP5所属ではなくCP9長官であること、このプルトンの設計図の搜索に関し

て発起人となっているのはCP4主官であることなど、指令を行う際にCP4の役人を複数名同行させる条件など、差異は多い。

しかし……指令自体に筋は通っているのだ。というのも仮にこのCP4主官を原作におけるスパンダムポジションであると仮定しよう。そうなると、原作のスパンダムと同じように上、あるいは五老星に己が搜索を行いたいという旨を話したはずだ。

だが、こうして俺の下に指令が回っている以上、それは通らなかつた。

ウォーターセブンはエニエスロビーから近いこともあって、ウチの管轄であることは間違いないので、こうして指令が回ってくること自体は、おかしいことではない。

なぜ、俺の下に指令が回ってきたのか……CP4主官には原作のスパンダムのように強いコネが無く突っ撥ねられたのか、それとも五老星が俺に対して気を使ったのか……。

以前のフィズの一件で、五老星から見れば俺は己の縄張りというかテリトリーを大事にしている印象を得ていたとしてもおかしくない。実際は俺には俺の基準があるので、必ずしもテリトリーを侵されたからといって文句を言うわけでは無いのだが、そんなことは五老星には知りようがない。

以前のようなトラブルを避けるために、こうして俺を尊重する形で指令を回すという判断は頷ける。

CP4の役人を同行させるというのも、CP4主官が諦め切れずに捻じ込んだ形だろう。自分で調べて得た古代兵器の情報だから己で調べたいと考えるのは必然だし、そもそもCP4主官はCP2主官と同様に俺……というよりは親父を嫌っており、俺に対してもいい印象は持っていない。

そんな相手に手柄を取られるのが嫌で、せめて己の腹心たちを同行させようとした。五老星側としてもCP4主官の気持ちは理解できるし、余計な反感を買わないためその程度の譲歩は受け入れるだろう。俺でもそうする。

……つまり、こうして俺の手元にある設計図搜索の指令に関して

は、経緯も含め納得できるだけの理由は存在する。

だが、これを歴史の修正力のように感じてしまうのは、俺が原作知識を得ているからだろうか？

「……なんだ、長官。さつきから、難しい顔して……厄介な任務なら、俺が行ってやろうか？」

「いや、この任務は少々気になる部分があるから俺が行くつもりだが……」

長官室内に居たジャブラが不思議そうに尋ねてきたので、簡潔に答えつつ思考を巡らせる。そうだな、ひとりだけで考えていても思考が偏る。ある程度第三者的な意見も聞いてみたいところだ。

「……ジャブラ、赤ずきんの童話を知っているか？」

「え？　なんだ急に……もちろん知ってるが？」

「では、そうだな。赤ずきんの物語に登場するおばあさんが、ある時不意に己の未来を知ったとする。予知能力を得たとか、理由はなんでもいい。そして、そのままでは狼に食べられてしまうことを知ったおばあさんは、食べられるのを避けるために狼が家に来る前に外に出た……しかし、逃げた先の森で偶然、家に向かっていた狼に遭遇してしまった。おばあさんが狼に食べられる未来は不変だと思うか？」

「う、うん？　よく分からねえが……まだ遭遇しただけで食べられたわけじゃねえだろ？」

「ほう……では、どうする？」

「狼を倒せばいいんじゃないか？」

これはこれで面白い視点だ。言われてみればたしかに、狼と遭遇しただけであり、食べられるという未来が確定しているわけではない。実際に戦って勝てるかどうかは別として、抵抗する余地はあるか……。

「……抵抗むなしく、見た未来と同じように食べられてしまったら？」

「脱出する方法を考える！　食べられるつてのが同じでも、結末まで同じとは限らねえだろうし、試せるだけいろいろやってみりゃいいじゃねえか」

「……ふ、ふふ、ははは」

「長官？」

「なるほど、興味深い意見だ。過程が同じであっても、たどり着く結末が同じとは限らない。逆に結末が同じであったとしても、その過程まで同じとは限らない……深く考えすぎるのも時として悪癖か……」

これはジャブラに教えられた気分だ。樂觀的な考えがいいとも思わないが、深く考えすぎるのもそれはそれで問題だ。

歴史の修正力なんてものが存在するか否かを証明するすべなどない。証明する方法が無いならば、深く考える意味もない。

そもそも、根本的に俺は原作通りに進んでも進まなくてもどうでもいい。進んでエニエスロビーが崩壊するなら、それはそれで左遷に期待してのんびりすればいいし、そうでないのならいまままで通りで問題ない。

どちらにしても俺には得があるので、どちらに転んだとしても問題ない。なら、ある程度は行き当たりばったりでもいいだろう。

「……さて、定時だ。上がるとしよう……ジャブラ、俺はこれから軽く飲んで帰るつもりだが、付き合うか？」

「おっ、おごりか？」

「部下を誘っておいて金なんぞ出させるか……」

「さすが長官！ よっしや！ 飲むぞ〜！」

「ポチ、店の予約を頼む」

「はい！」

今後の方針を決め、心なしか少し軽い足取りで長官室から出て廊下を歩く。とりあえずは、普通に俺のやり方でプルトンの設計図を真つ当に探る。原作のような陰謀は巡らせない……だがそれでも、トムが原作と同じような道を辿るなら、原作のエニエスロビー編は起こりうると考えて行動しよう。

ルファイたちに関してはどうするか、俺はロビンにも古代兵器にも思い入れは無いし、どっちでもいいと思っっているので、シンプルに行こう。

原作のように進んだ方が俺にとっていいと思えば、手出しはせずに静観しよう。原作を変えたほうが俺にとって都合がいいのなら……俺には先ほどのたとえ話のおばあさんとは違い、狼を殺す力がある。

エニエスロビーに辿り着く前に、ロケットマンを迎え撃って海の上で全員殺せば、それで終わりだ。

あくまですべての基準は俺にとつてどれだけの利になるか……どちらに転んだとしても、都合のいいように準備をしておけばいい。やはり、時にはシンプルな方がいいな。

そう考え口元に笑みを浮かべつつ、ジャブラに声をかける。

「ああ、ジャブラ。好きだけ飲めばいいが、酔い潰れた場合は覚悟することだ……酔いつぶれた結果、お前にどんな未来が訪れるか、あらかじめ知っておきたいか？」

「い、いや、いい……未来なんて知らねえ方がいい」

「ふふ、そうか……なら、その未来を知らないままで済むように、己の限界は見定めて飲むことだ」

まずはトムの一件……はてさて、どう転ぶか……楽しみだ。

水の都と軽い観光

水の都と呼ばれるウォーターセブン。造船業が非常に盛んな島ではあるが、年々の地盤沈下や周辺の島への難解な航路や海賊の影響もあり、一時は島全体が悲観的な空気に包まれていた。

しかし、トムズワーカーズが開通させた海列車により、少しずつではあるが島は活気を取り戻しつつあった。

かつて海賊王ゴールドロジャーの船を作ったとして、死刑を言い渡されるも、海列車の構想を説明して交渉し、開発に必要な10年という期間を執行猶予として勝ち取った船大工のトム。見事裁判での宣言通りに海列車を開通させた彼への判決は、3日後に訪れる司法船の中で決まることになっている。

そんな中廃船島と呼ばれる区画では、船大工トムとその弟子のアイスバーグが造船に勤しみながら言葉を交わしていた。

他の島との交流が難航していることに對し、それでも町は変わらな
いのかと問うアイスバーグに、トムが笑いながらそれでも人には活気がある。結果はすぐには付いてこないと、そう返答したタイミングで、複数の足音が聞こえてきた。

黒いスーツを着こなし先頭を歩く目の周りと鼻の黒い男、その後方に付き従う黒いスーツの茶髪の小柄な女性と、白いスーツを着た複数の男たち……。

「突然の来訪、失礼。私は……」

それに気付いたトムに、先頭を歩く男性……スパンダムが自己紹介をしようとしたタイミングで、彼らの下に大砲の弾が飛来してきた。

「ス、スパンダムさん……」

「お前たちは離れていろ」

慌てる部下らしき者たちに指示を出したあと、スパンダムは飛来してきた砲弾を素手で掴み、握りつぶして砕いた。

「おう！ わりい、祝砲がそっちに飛んじまった！」

あまり悪びれた様子もなく登場したのは、トムのもうひとりの弟子

であるカティ・フラム……通称フランキーと呼ばれる人物だった。

「ん〜スーパー！ バトルフランキー35号帰還！ 海王類を仕留めたぜ！！」

「……あの馬鹿はまた、性懲りもなく」

彼は己が作り出した戦艦バトルフランキー35号によって海王類を仕留めたことを誇るように語り、それを見たアイスバーグは、額に青筋を浮かべハンマーを持ってフランキーの下へ向かった。

そして海王類を仕留めれるほどの兵器を作り出したことを責め、反発するフランキーと喧嘩を始め、それを見たトムが大笑いする。

トムズワーカースにとってはいつも通りの光景といえる状況に、静かな声が響いた。

「……まあ、確かにそちらの彼の言う通りだ。人を殺傷しうる兵器なら、最低限見ず知らずの者が使えないようにしておくべきだ」

「「ッ!?!」」

3人は驚愕した。いつの間にかバトルフランキー35号の目の前に居たスパンダムが、いったいどうやってそこに移動したのか、分からなかったからだ。

そんな3人の反応を気にした様子もなく、スパンダムはトムの方を向いて口を開く。

「初めまして、船大工のトムさん。私の名前はスパンダム……見ての通り、世界政府の役人です」

「政府の人間……裁判の件か？」

「いえ、まあ、それもウチの管轄ではありませんが、今回は別件です……船の設計図について、と言えば、お判りいただけますか？」

「っ……」

「出来れば、少し話をさせていただきたいと思いましたが。都合が悪ければ、出直しますが？」

あくまで丁寧な口調で語るスパンダムの雰囲気、対峙するトムだけではなく、アイスバーグやフランキーも息を飲んだ。

トムは話をすることを了承し、ふたりきりで話すとアイスバーグとフランキーを戻らせ、レンガ倉庫にてスパンダムと向かい合う形に

なった。

スパンダムの方も部下たちは外に待機させ、倉庫の中でトムとふたりにで会話を行う。

「……それでは、心当たりはないと？」

「たつはつはつ……ああ、そんなものの設計図は持ってねえ」

「なるほど、結構。お時間をいただきありがとうございます」

「……うん？ もういいのか？」

プルトンの設計図を所持しているかというスパンダムの質問に対し、そんなものは知らないし持つてもないと返答したトムだが、正直スパンダムが簡単に引き下がるのは予想外だった。

首を傾げるトムの前で、座っていた椅子から立ち上がりドアの方に向かいつつ、スパンダムは静かに告げた。

「別に長く話したとて、返事が変わるわけでもないでしょう？ ただ、ひとつだけ、忠告を……私がこうしてここにきているということの意味を、考えておいた方がいい」

「……」

「ああ、そうそう、もしかしたら、それがプルトンとは知らないという可能性もあるので、不審な設計図に心当たりがあれば、ぜひご一報を……失礼します」

そう言つて去っていくスパンダムの背を、トムは言いようのない不気味さを感じながら見送った。

・***

ウォーターセブンの一角、事前に予約しておいた宿の部屋で椅子に座ると、俺は不満げな表情を浮かべているCP4の役人たちに声をかける。

「それで？ なにか気になることでも？」

「なぜ、ああも簡単に引いたのですか!? もっと問い詰めれば……」

「馬鹿か……所持していれば死刑確定の設計図を、持っているかと思われて、はい私が持っているんですなんて返答する奴が居るとでも思つて

いるのか？ アレは単なる探りだ」

「探り？」

ポチが用意してくれたコーヒを飲みつつ、新聞を読む。どうにもCP4の主官からかなりキツくプルトンの設計図を手に入れると言われたみたいで、役人たちの表情には焦りが見える。

急いたところで、どうにかなるものでもないと思うがな……。

「こちらが設計図の存在に気付いていると思わせれば、なにかしらの動きがあるだろう……まあ、本当に持っているなら、な」

「そんな、悠長な……」

「なら、どうする？ 彼は執行猶予中ではあるが、犯罪者ではない。3日後の裁判で免罪がほぼ確定している。俺たちに彼を取り調べる権限はない……いいか、現時点では『プルトンの設計図があるかもしれない』という段階であることを忘れるな。この段階で、一般人を取り調べることなんて不可能だ。最低限、設計図が存在するという確実な証拠でもないとな……まあ、その辺りは、地道な調査だろう」

プルトンの設計図はウオーターセブンの職人たちに代々受け継がれているものだ。探せば、記録などがあるかもしれない。

まあ、もちろん俺は原作知識で設計図が存在することも、それが今夜アイスバーグたちに託されることも知っているが、どうこうする気は無い。

「分かったら地道に聞き込みでもすることだな。強硬調査は設計図の存在が確定してからだ」

「……」

不満げではあったが、反論する余地も無いのか役人たちは退出していく。さて、どう動くか……このままジツと大人しくしているなら、個人的には高評価だ。CP4主官がなにかを言ってきたりも庇うぐらいはしてやろう。

だが、短絡的な行動をとるというなら……まあ、もしかしたらCP4の主官が変わることになるかもしれないな。

そう思いながら見聞色で探してみると、宿を出た役人たちが電伝虫でどこかに連絡を取っているのが分かった。おそらくCP4主官だ

ろうが、さて、どんな手を打ってくるのやら……。

まあ、しかし結局のところ、トムに関しては遅かれ早かれではある
とは思う。事実として設計図が存在する以上、仮に3日後に免罪を言
い渡されたとしても、どこかしらのタイミングで暗殺が濃厚だろう。

原作のアイスバーグのようにガレーラカンパニーを作り上げ、政府
が手を出しにくい存在となれるとは思えない。そして、トムが存命で
あれば、アイスバーグもすぐにガレーラカンパニーを作ることとはな
い。

そうならば、トムズワーカーズ揃って暗殺というシナリオもあり得
るか……そういう意味では、原作のようにならないとトムズワーカー
ズは詰みと言っていていいかもしれないな。

「ポチ」

「はい？」

「しばらくは暇になるだろうし、なにか食べに行くか、この島には特産
品も多いみたいだしな」

「はい！」

俺が声をかけて立ち上がると、ポチは尻尾……もとい髪をブンブン
と振りながら付いてくる。

「隊長！ 隊長！ 水水肉が売ってますよ！」

「とろけるような味わいらしいな、いくつか買っていくか……ああ、あ
と、釣竿を売っている店があれば教えてくれ、午後は釣りでもすると
しよう」

「はい！ じゃあ、釣った魚は私が調理しますね」

「ああ、頼む」

エニエスロビーからほど近いが、あまり来たことが無かったしな。
ポチもはしゃいでいるし、しばらくは散歩して、午後は釣りだな。

明日の朝に書類仕事だけにエニエスロビーに戻って……まあ、事
態が動くにせよ、動かないにせよ、まだ時間はあるし……とりあえず
いまは、観光を楽しむとしよう。

大きな流れは変わらずとも変化はある

よく晴れた日、今日は船大工トムに有罪か免罪かを告げるために司法船がウォーターセブンに来ている。司法船が港に入るのを、ウォーターセブン特有の高い位置にある中央街から見下ろす。

ポケットから棒付きの飴を取り出し、ひとつをポチに放り投げて、もうひとつの包装を破って啜える。CP4から同行してきた役人たちは、朝からココソコと出かけておりこの場には居ない。

さて、ここで原作の流れをさらっておこう。トムは海列車を完成させた功績により、海賊王の船を作った罪を免罪とされることがほぼ確定していた。つまり、この日免罪を言い渡されるとトムの保留となっていた罪は消え、一般人に戻るわけだ。

しかし、原作のスパンダムはソレが気に入らなかった。トムがプルトンの設計図を所持していると思っていたからこそ、なんとか容疑者としてトムの取り調べを行いたかった。だが、ここで免罪が決定すればトムは一般人となり、強硬な取り調べなどは行えない。

つまりは手が出しにくくなるわけだ。まあ、あくまで出しにくいだけなので、やろうと思えば方法なんていくらでもあるのだが……。

ともかく焦った原作のスパンダムは、廃船島に放置されていたフランキーのバトルフランキー号を利用して司法船を襲撃、その襲撃の罪をトムズワーカーズに擦り付けた。

穴だらけの理論ではあるが、実際に使われた船がフランキーが制作したものであり、政府側のスパンダムが糸を引いている以上覆すのは難しく、トムたちの罪はほぼ確定……だが、そこでトムが海列車を作った功績を用いて、司法船襲撃の罪を免罪してほしいと願ったことでアイスバーグとフランキーは解放される。

トムには海賊王の船を作った罪が残り連行されて処刑されることとなったとまあ、ザックリ言えばそんな流れだ。

まずこの一件には本来原作におけるスパンダム……つまり俺が大きく関わっている。つまり、俺が動かなければ事件は起こりえない筈

なのだが、運命とはかくも皮肉なものか、そうはならなさそうだ。

見聞色で感じる気配、廃船島から司法船に向かって動く小型戦艦を眺めながら、俺は静かにポチに問う。

「なあ、ポチ……俺、あんな指示を出したか？」

「いいえ」

「そうか……ポチ、よく聞け、アイツらが廃船島に戻って船を捨てて逃げたら、全員捕まえて拘束の上で海列車に放り込んでおけ、多少痛めつけてもかまわないが殺さずにな」

「了解」

俺の言葉を聞いて、ポチの目からスツとハイライトが消えた。いや正しくは、俺の指示ではないと返答したあたりから、切れてるような雰囲気はあった。

コイツにとって、俺の邪魔になる行動をとる連中は処刑対象なので、あいつら役人への慈悲は完全に消えただろう。

ポチはそのまま刺で移動しようとしたが、その前に俺が軽く手を上げて止めた。

「……ポチ、念のために言っておくが『四肢がすべて無くても生きている状態』は、多少の範囲に含まない。目を抉ったり耳を切り落としたりもだ……全員身体の欠損なく拘束しておけよ」

「……はい」

……やる気だったなコイツ。俺が釘を刺さなければ、全員ダルマにして傷口焼いた状態で海列車に放り込んでたな。役人どもはCP4主官の命令で動いているだけなのだから、そこまでの目に合わせるのは流石に哀れである。

「では、行っていい」

「了解！」

さて、どう転ぶかはさておいて、俺は俺で動くとするか……。

■***■

司法船を襲う小型戦艦の船団。そこから放たれた砲弾が何発か司

法船に着弾し、人々が逃げ惑う中……俺は丁度中の裁判所から出てきた裁判長の目の前に着地して、飛んできた砲弾を素手で弾く。

「お、おお、スパンダム長官!」

「たまたま別件で近くについてな……」

そう告げながら船団に視線を向けると、船団は俺に気付いたのか攻撃を止めて反転して逃げていった。まあ、さすがに俺に気付いたうえで砲撃を続行する度胸があるなら、もっと強硬にトムの連行を主張しているか……。

「あ、あの船団はいったい……」

「さあな。それで、裁判長、怪我は？」

「私は問題ありません。船の方には何発か当たったみたいですが……」

「そうか。乗船している市民を誘導して港へ、怪我人の確認も忘れるな。浸水の可能性もある。乗組員も一度降りて、司法船の被害状況を確認しておけ。全区画の点検完了までは利用しないように……俺はあの船団が逃げた先を確認してくる」

海兵や下級役員に指示を出したあとで、混乱する市民の間を縫うようにして移動する。その際にチラツと船の状況を見たが、原作よりかなり早いタイミングで捌いたため司法船はほぼ問題ないが、マストに一発当たっていたみたいなので、修理には多少時間がかかるだろう。

怪我人に関しても、逃げる際に数名の市民が怪我をしているようだが、それ以外はほぼ無し……海兵に任せておけばいい。

さて、廃船島の方はどうなったか……。

・***

廃船島に辿り着くと、こちらもどうやら原作と同じような展開になったらしい。鋸が刺さり倒れ伏すトムと、アイスバーグにバトルフランキー号について厳しく責められ意気消沈しているフランキー……原作で見た通りの展開だ。

ポチは……見聞色で探れば、海列車の付近に居るな。ああ、もう全

員捕まえてるのか、さすがに仕事が早いな……両手両足が変な方向に曲がってるやつばかりだが、とりあえず、指示通り四肢の欠損はないみたいだ。アイツらにはあとで詳しい話を聞くとして……とりあえずはこちらだ。

「……忠告は聞き入れてもらえなかったようで、残念だ」

「てめえ……スパンダム!!」

「スパンダムだ。さて、市民たちも集まってきた。ここでこれ以上の会話をするのではなく、港に移動するでしょう」

敵意ある目でこちらを見るアイスバーグとフランキー……まあ、そうだな。コイツ等にしてみれば、俺は敵の親玉で、この一件は全て俺が仕組んだように見えているだろう。

分かっただけで傍観したという意味では、俺が仕組んだと言っても過言ではないがな。

そんなことを考えている間に海兵たちが到着したので、三人を拘束する指示を出す。

「……痛みで証言が難しいようなら、鎮痛剤を用意しようか?」

「……はあ……いらん……やってくれたな……」

「忠告はしたし、考えられるだけの時間も与えたつもりだが……まあ、いいさ、話は港で聞こう」

拘束されつつ告げるトムに苦笑を返してから歩き出す。とりあえずは、このまま原作の流れで問題なさそうだ。CP4 主官にはあとで話をするでしょう。

しかし馬鹿な話だ。あのまま放置して探っておけば、切れ者であるアイスバーグはともかくとして、この時点では危機感の足りないフランキーの方からは、プルトンの設計図に関する発言を引き出せたかもしれないのに……こんな強硬策に出たら、逆効果だと分からないものなのか……。

港に辿り着くと、裁判長が居たので、近づいていくと向こうから声をかけてきた。

「長官、〴〵苦労様です」

「いや……それで、怪我人と船の被害状況は?」

「市民に軽傷者が数名、乗組員に怪我はありません。船の方は、マストのダメージが大きく、修理には少々時間がかかるかと……」

「そうか。まあ、ここは造船会社の多い島だ。修理する場所はいくらでもある……とりあえず、あんな一件があった後だ。司法船内の裁判所は使わず、裁判はこの港で行うように」

海兵からの報告を受け、軽く指示を出しつつ裁判長の近くに立つ。すると後方にスツとポチが現れ、俺の近くに来て周囲には聞こえない声で話しかけてきた。

「全て指示通りに」

「ご苦労」

周囲の雰囲気としては、トムズワーカーズが拘束されていることもあって、トムたちが司法船を襲撃したことをほぼ確信しているような雰囲気だった。

いや、まだ容疑者の段階なんだが……原作でもたびたび思ったが、ウォーターセブンの市民の民度の低さである……まあ、ワンピース世界の市民は割と民度低いのはかりだが……。

「まずは海列車の件……見事という他に言葉はない。これから先、このウォーターセブンの発展に深く貢献することだろう。それによって前科ゴールド・ロジャーの海賊船製造の罪は、免罪となることがほぼ確定していたというのに……なぜ罪を重ねた？」

「ふざけんな!」

裁判長の言葉に強く反発するのは、もちろんフランキーだ。拘束されたままで、憎悪に染まった目でこちらを見ている。

己の船を利用してトムを傷つけられたことが、許せないと、そういう表情だ。

「司法船の襲撃犯は俺たちじゃねえ!　そこに居るスパンダムって馬鹿野郎だ!!」

「……なにを愚かな。このお方はエニエスロビーのトップで、私たちの上司に当たる方だぞ?」

呆れたような裁判長の言葉に、周囲の市民からも笑い声が響く。周囲の市民は不快だな……いつそ霸王色で気絶させたいものだ。

そんなことを考えつつ、俺はフランキーの方を向いて口を開く。

「カティ・フラムだったかな？　ひとつ聞こう。仮に君の主張通り俺が犯人だったとして……司法船を襲撃することについていっただんなメリットがあるのかな？」

「ああ!?　そんなもんお前が——」

「フランキー!!」

「——うっ!?!」

なにかを言いかけたフランキーだったが、アイスバーグの叫び声を聞いて口をつぐんだ。さすがと称賛しておくべきだろうか……あのまま、フランキーが設計図について口を滑らせてくれれば、それを理由に調査に乗り出せたのだが……上手くはいかないものだ。

なにも言えなくなったフランキーに対し、周囲の市民から「大体あの船はお前が作ったもんじゃないか」と、そんな言葉が飛ぶ。

それに対しフランキーは恩人を傷つけるような船は自分の船ではないと叫び、その瞬間にトムは手錠を引きちぎってフランキーを殴り飛ばした。

突然の凶行に市民が叫んで逃げ出し、海兵たちが銃を構えるが、トムは気にする様子もなく銛を力ずくで引き抜きフランキーに告げる。

どんな船でも作り出すことに善悪はない。たとえ生み出した船が世界を滅ぼそうとも、生みの親だけはそいつを愛さなくてはいけないと……。

「造った船にー　男はドンと胸を張れ!!」

力強く宣言するトムの言葉に周囲が言葉を失う中、トムはアイスバーグとフランキーに「これから起こることに口を出すな」を告げ、鋭い目でこちらを睨んできた。

そして一気に駆け出し、俺に向けて拳を振るう。

「なっ……」

「……海兵は市民の警護に回れ、こちらには必要ない」

トムの拳を片手で受け止めつつ、周囲の海兵に指示を出す。拳を受け止められたことに驚愕しているトムに対し、俺は静かに告げる。

「いいのか？　これは、言い逃れができないぞ?」

「ッ!? お前に!! アイツの痛みが分かるか!!」

「分かんない。生憎と俺はアイツとやらではないのでな」

退く気はないようで腕を振り上げ殴りかかってこようとするとトムに対し、俺はスツと手を伸ばし、その体に軽くデコピンをする。

「ぐっはあっ!?!」

「トムさあん!!」

アイスバーグとフランキーの叫びが響く中、トムの巨体は数メートル宙を舞って地面に落ちた。

「……あまり暴れるな。殺さないように小さな魚を摘まむのは、力加減に気を使う」

司法船襲撃に関して、トムズワーカーズの面々は容疑者の段階だった。だが、政府の高官である俺に対して殴りかかったことに関しては、言い訳はできない。

まあ、あのトムの表情を見る限り、もうすでに言い逃れは不可能と見て己が罪を被る決意を固めているのだろうがな。

倒れたトムに対し「やはりアイツは海賊に魂を売った」とか「戦艦を作ってこの機会を待っていた」とか口々に言う市民には正直呆れ果てる。アクアラグナのせいで頭に海水でも入ってるんじゃないのか？

そう思っていると、荒い息を吐きながら起き上がったトムが静かに告げる。

「……裁判長。司法船襲撃の罪を、認める」

「……」

やはりというべきか、原作と同じようにトムは司法船襲撃の罪を認め、海列車を作った功績として今日のことを免罪としてほしいと告げる。

それに対し、そうなれば極刑となる海賊王の船製造の罪が残るぞと告げる裁判長に対し、ロジャーに船を作ったことを誇りに思っていると叫ぶトム……その覚悟を見た裁判長はチラリと俺の方に視線を向ける。

「好きにすればいい。この件の責任者はお前だ」

「分かりました……それでは判決を下す。海賊王ゴールド・ロジャーの海賊船製造の罪により造船技師トム一名をエニエスロビーに連行する。以上だ。弟子ふたりは免罪とし、拘束を解いて解放するように」

結果として、俺が何もせずとも原作通りの展開というわけか……まあ、それはそれでいいだろう。

「トムに関しては怪我もある。海列車で護送を行う……医者の手配をしておけ」

「はっ！」

「……裁判長、お前は司法船の修理を待つて帰還しろ」

「了解しました」

そしてトムを連行して、CP4の主官をアレコレしてこの件は終わり……となればよかったのだが……。

そう思いつつ、海兵のひとりから銃を奪ってこちらに向かってくるフランキーを見る。

「よせっ！ フランキー!!」

「トムさんを返せえええ!!」

原作とは違いトムは麻酔銃を撃たれておらず意識があるため叫ぶが、もちろんフランキーが止まるわけがない。

「……手は出さなくていい」

周囲にそう告げつつ、怒りの形相でこちらに向かって飛び掛かってくるフランキーに対し、親指を軽く弾くように動かす。

指銃・撥をギリギリまで加減したものだ。

「——ッ!？」

「フランキー!!」

「だから、何度も言わせるな……殺さないように手加減するのも大変なんだ」

当たったフランキーはまるで弾かれるように遙か遠方に吹き飛んでいく。まあ、海列車に轢かれても生きているような頑丈なやつだし、アレで死ぬことはないだろう。

「アレは放っておいていい……トムを連行しろ」

「はっー」

まあ、しかし原作と違って海兵100人単位で重軽傷を負わせたわけじゃないから、俺が問題にしなければフランキーが罪に問われることはないだろう。

だからと言って、なにかが変わるわけでもないかもしれないがな……。

・***

海列車の一室には、CP4から派遣された役人と追加で呼びよせたであろう役人あわせて10名ほどがおり、一様にボロボロの体で怯え切った顔でこちらを見ていた。

……やったなあ、ポチ。相当痛めつけたな……俺以上にポチを見る目が完全に絶望した目になっている。まあ、それでも、俺の指示を守ってちゃんと四肢も繋がってるし目とかも扱られてはないので、ポチにしては加減した方か……。

「さて、見覚えのない者もいるが……確認しておこう」

俺の声を聞いて、全員がビクツツと体を動かすが、俺はこれ以上コイツ等になにもする気は無い……そう、コイツ等には……。

「この件の指揮官は俺だ。そして俺はお前たちに地道に調査しろ、強硬調査は設計図の存在が確定してから……そう言ったな？ それを無視した上で、さらに政府所有の船である司法船に砲撃……これが、どれほど問題か、分からないほどの馬鹿は、さすがに居ないと思いたいな」

抑えていた気配を解放したことにより、役人たちは生まれたての小鹿のように震える。それを見て、俺は口元に笑みを浮かべた。

俺はそもそも原作通りに話が進んでも、進まなくてもよかった。だが、どちらかといえば……原作に近い展開を望んでいた。

今後の展開が読みやすいというのもひとつだが、せっかくだからいろいろ試してみようと思ったのだ。過程をどこまで変えれば本筋に影響が起こりうるのか、いろいろ試してみたかった。

結果として、俺がロクに指示を出さないどころか、勝手に動くなどいったにもかかわらず原作と同じような司法船襲撃は起きた。これはこれで、今後に対して参考になる材料だ。むしろ勝手をやったコイツ等を褒めてやりたいぐらいだ。

そして、次に役割を演じる者が退場した場合の影響も実験してみたいと、そう思ってたんだ。

「……だが、まあ、安心しろ。俺は、お前たちはそこまで無能な存在ではないと思っっている。今回の件に関しても、やりたかったわけじゃないんじゃないか？ そう、例えば、どこから指示を受けて逆らえなかったとか……その辺りに関して、詳しく話を聞きたいものだ」

そう、例えば俺が行動を起こさなかった結果として、原作におけるスパンダムポジションと言っつていい立ち位置に居るCP4高官……『そいつが居なくなったら』……どうなるのだろうか？

そのままCP9に引き継がれる形で、原作通りの潜入任務が来るのか、それともそれ自体が無くなるのか……試してみるのも、いいだろう。

いい加減こちらに非協力的な相手というのも……俺の利にならない相手というのも邪魔なものだ。丁度いい機会だから、排除することにして……平和的にな。

さて、それはともかくとして、せっかく好きにやると決めただ。まだまだ、原作のエニエスロビーまで8年もあるわけだし、いろいろ試してみることにしよう。

とりあえずトムに関して、もう一手……サイコロを転がしてみることにしよう。

可能性があっても掴めるとは限らない

海列車の発車準備が整い、エニエスロビーに向けての発車を指示したあとで、俺はトムが拘束されている車両に向かった。

トムは医者によって治療されて体に包帯を巻いており、腕に手枷こそ付いてはいるが椅子に座っている姿を見る限り、大きなダメージはなさそうだ。

「傷は痛むか？」

「殺す相手をわざわざ治療とは……何度聞かれても、ワシの返答は変わらないぞ」

「尋問だけが目的ではないさ。このあとエニエスロビーに着いたあとで、お前はもう一度エニエスロビーの裁判所で裁判……まあ、これは結論ありきの裁判だがな。そのあとで処刑となるわけだが……いちおう、まだ、それを覆せる交渉カードがあるんじゃないかと思うが？」

「くだい。ワシはそんな設計図は知らんし、持ってもいない」
「……そうか」

まあ、俺もこれでトムが口を割るとは思っていない。それで喋るようなら、原作のスパンダムは設計図を手に入れられていただろう。

そもそも、俺はプルトンに興味は無いし、搜索指令自体もCP4主官が居なくなれば消えるかもしれない。

「……逃げていいぞ」
「は？ なにを——っ」

呟くように告げたあとで、トムの前に手枷の鍵を置いてやる。

「俺はお前の尋問を行っている際に偶然手枷の鍵を落としてしまった。そして、本来この車両に配置するはずだった役人は不慮の事故……犬に噛まれて怪我をしたため、残念ながらこの車両に人は配置できていない。もうすでに海列車は発車しているが、魚人なら泳いでウォーターセブンに戻れるだろう。手配される可能性はあるだろうが、名前を変えるなりなんなり、方法はいくらでもある」

「……どういう……つもりだ？」

「さてな？　それでは、俺は少し外の空気を吸ってくる……だから、好きにしろ」

俺の思惑が理解できないと言いたげな表情を浮かべるトムに対し、俺は軽く笑みを浮かべてから車両を後にした。

・***

海列車の屋根の上に立ち、ポケットから棒付きキャンデーを取り出して、包装を破って啜える。そのタイミングで、後方にポチが来たのを感じたので、もうひとつ取り出してポチに渡してやる。

ポチは包装を破って飴を啜え、好きな味だと分かったのかへにやと緩んだ笑顔を浮かべたが、すぐに気を取り直してキリツとした表情で立つ。

ポチは非常にできたやつなので、俺が考え事をしている際には基本的に緊急の用件以外で話しかけてくることはなく待機している。まあ、俺から話しかけた場合は例外だが……。

「……ポチ、お前はプルトンの設計図に関して、どう思う？」

「私ですか？　うーん、隊長はプルトンそのものにはあまり興味がなさそうなので、私も別になんとも……ただ、設計図の方には興味があるみたいなきがしました」

「さすが、よく見ているな」

ポチの考察は正しい。俺はプルトンそのものには全く興味が無いが、プルトンの設計図に関しては一度見てみたいとは感じていた。

ただそれは、古代兵器を手にしたという理由ではなく、単なる好奇心からだった。

「妙だと思わないか？　プルトンは、伝わっている話では島ひとつを消し飛ばす力を持つ『戦艦』であるということだが、その話が事実なら古代兵器と呼ぶべきなのは、プルトンではなく乗せている兵器の方じゃないか？　船が体当たりして島を消し飛ばすわけでもあるまいに……」

「仮に体当たりするとしたら、どんなサイズなんでしょうね？　どうか、そんなサイズのものを作ることができるとはでしょうか？」

「そう、そこだ。もし仮にこれが、古代にしか存在しない製法で作られた、あるいは現在は存在しない素材を使って作られた再現不可能なオーパーツのような代物であるなら納得できる。だが、設計図が存在し、それをウォーターセブンの職人たちが必死に守り受け継いでいるという話が事実であれば、プルトンは現在の技法及び材料で建造可能ということになる」

もし、製造が不可能であれば頑なに政府に渡したがるという理由もない。渡したところで作れないのであれば、それはただの紙きれだ。

トムが命を賭しても渡す気が無いという姿勢でいる以上、それを政府が手に入ればプルトンを製造することができると考えているからに他ならないだろう。

「だが……プルトンが存在したという空白の100年から現代まで800年。その間に発展してきた造船技術や兵器開発……さらに、ベガパンクは500年先の技術を持つというが……それでもなお開発されておらず、現存する技術と材料で再現可能な超兵器なんてものが、存在し得るのかという疑問はある。だから、一度見てみたいとは思うがな……まあ、実物は必要ない。あつても邪魔だ」

「隊長は別に古代兵器なんて使わなくても、島ぐらい消せますしね。そういえば、六王覇銃はいまもたまに使われていますが……アレはもう長いこと見てませんね」

「アレはなあ、六王覇銃に比べて威力のコントロールがな……前の砦もかなり加減してあの威力だから、アレは本当に島ごと消すような指令でもない限り、使うことはないだろう」

「またいつか見たいですね。隊長の……『十二真衝』」

「……そんな任務が来れば、な」

他愛のない話をしつつ海を眺めていると、海列車を動かしている部下のひとりが線路の先にカティ・フラム……フランキーが居ると伝えしてきた。

さすが、頑丈だな。加減したとはいえ撥を受けても原作通り海列車

を正面から迎え撃つつもりか……。

「隊長、どうしますか？」

「自殺がしたいのなら好きにやらせてやれ……それで死ぬるなら、あの意味では幸せだろうしな」

それから数発の砲撃の音の後、人影が宙を舞った。果たして贖罪の思いを抱えたまま、恩人のために戦い死ぬことが幸せか否かは分からないが……強化した視力が遠方に廃船を見つけたので、どうやら原作通りフランキーはサイボーグとなりそうだ。

しかし、まあ、本当に……海列車にひかれて吹き飛ばされたあと、己の体を改造できる程の余力があるのだから、大した頑丈さだ。

「……さて」

「戻りますか？」

「ああ、振ったサイコロの出目を確認してくる」

ポチの言葉にそう答えたあと、俺は海列車の車内へと戻った。

・***

トムが居る車両のドアを開けて中に入ると、俺が車両を出た時のままの姿勢でトムは椅子に座っていた。手枷を外した様子もなく、鍵も俺が置いたままの状態だ。

「……逃げなかったんだな」

「ああ、お前の考えは分からん。心残りが無いといえは嘘になる。しかし、ワシは自分で選んだ……ならば最後の瞬間まで、ドンと胸を張るだけだ」

「そうか……後悔がないなら結構。しかし……くくく」

「うん？」

「いや、運命とは皮肉なもんだと……そう思っただけだ。それじゃあ、エニエスロビーに着くまではゆっくりしているといい」

首を傾げるトムの前で鍵を回収し、俺は別の車両に移動する。本当に皮肉な話だ。トムは己の誇りを、生き様を貫いた。それは立派なことだろう……だがそのせいで、トムはフランキーを救えなかった。

逃げ出していれば、海列車にひかれたフランキーを助けることができただろう。

この車両は先頭から離れていて、汽笛の音もあつた。砲撃の音などに気付けなかつたのは仕方ないだろう。しかし、もしトムが逃げ出さないまでも窓にかかつたカーテンを開けていれば、吹き飛ぶフランキーが見えたかもしれない。窓を少しでも開けていたなら、フランキーの声が聞こえたかもしれない。

そうなれば、また違った未来があつたかもしれないが……そうはならなかつた。可能性は与えたが掴みとることはできなかつた……ならばまあ、ここから先は俺の好きなようにやらせてもらおうとしよう。

別の車両に移つた俺は、椅子に座りつつ近くに來たポチに声をかける。

「なあポチ？　俺つてそこそこ偉いよな？」

「そこそこどころか、世界政府でもかなり上の方と言つていいと思いますが？」

「そうだな……個人的には高すぎる地位だと思つているが……まあ、たまには使つてみるか、権力つてやつを……」

「ううん？」

せつかくなのだから、もうひとつサイコロを振つてみることにしよう。このサイコロの目がどう転ぶか分かるのは『8年後』だろうが、それはそれで先の楽しみが増えたと思えばいい。

「よく分かりませんが、隊長が楽しそうならよかつたです」

「いろいろ検証してみるの面白いものだ……まあ、それはそれとして、観光はなかなか楽しかつたな。次はCP9メンバー全員でどこかに出かけるのもいいかもしれないな。一日か二日程度なら上手く調整すれば休みも取れるだろう」

「いいですね。今回釣竿を買いましたし、釣りの出来る場所なんかいいかもしれませんね」

「なるほど、いい考えだ。別に観光地に行く必要もないし、緑豊かな無人島とかでバーベキューと釣りなんてのがいいかもしれない」

思い付きでの発言だったが、これはこれでなかなか楽しそうだ。任

務の調整は割り振っているのは俺なのだから、問題なく調整できる。

上もまあ、数日程度なら休みをくれといっても拒否したりはしないだろう。ウチに回ってくる早期対応が求められる任務はほぼ暗殺だし、調整が難しければ俺がまとめてこなしてしまうのも手だ。

せつかくだし、そういう方向でいろいろ考えてみるか……

閑話・長官の深謀遠慮

世界政府三大機関のひとつ、司法の島エニエスロビー。その中央にある司法の塔にあるCP9の持つ部屋のひとつには、CP9メンバーが集合していた。

長官であるスパンダムが居る際は、長官室に集まることが多いが、現在スパンダムは出かけているので別の部屋に集合している状態だった。

室内の空気はピリピリとしており、CP9メンバーのひとりであるフィズが苛立ったように貧乏ゆすりをしていた。表情も険しく、明らかに怒っている様子なのは伝わってきた。

他のメンバーも、チエルシーとルツチを除き険しい表情を浮かべている。

「チツ……チエルシーが始末付けたんなら、間違いはねえだろうが、イラつくな。その馬鹿どものせいで、長官が任務を完遂出来なかったんだろ?」

フィズが、もといCP9メンバーのほとんどが苛立っている理由は、チエルシーからウォーターセブンのCP4役人たちの行動を聞いたからだだった。

特にフィズはスパンダムを慕っているので、そのスパンダムの足を引つ張ったCP4役人は許せないという気持ちがある。

しかし、すでにチエルシーが制裁は行っているので、それ以上なにかをするわけにもいかないのが怒りを向ける先が無くて苛立っていた。

他のメンバーも大なり小なり不快そうな表情を浮かべていたが、その中でルツチだけは楽し気な笑みを浮かべていた。

「……くくく」

「なんじやルツチ? なにがおかしい?」

「いや、お前らの見当違いの反応が面白くてな」

「あ? なんだと?」

カクの質問に答えたルッチに対し、ジャブラが額に青筋を浮かべるが、ルッチはあくまで楽しそうに口を開く。

「チエルシーも説明が足りないが、お前らも考えが浅い……よく考えてみる、あの抜け目ない長官がそんな馬鹿どもの動きを予想できないとでも思っているのか？」

「……確かに、言われてみれば長官ならその程度は当たり前のように読んでいたはずだ」

「つまり、あえて泳がせた……と？」

ルッチの説明にブルーノとカリファが納得した様子で頷く。たしかに彼らの知るスパンダムという人物は、その圧倒的な戦闘力だけでなく、抜け目ない深謀巡らせる卓越した頭脳も持つ存在だ。

「そういうことだろ？ チエルシー」

「はい。隊長は間違いなくCP4の行動を読んできました。というより、誘導していました。トムが免罪になれば調査が難しいと焦らせるようなことを言った上で、あえて地道に調査するようにと指示を出していました」

「チャパ……つまり、長官はワザとCP4を暴走させたってことか？」
「だがあ、なぜえ〜そのようなあ〜ことを〜？」

その話を聞いてCP9メンバーの表情は怒りから戸惑いへと変わる。なぜスパンダムはそのような行動をとったのか、そんな疑問に答えるようにルッチが口を開く。

「結果として、焦ったCP4は暴走し明らかな失態……チエルシーの話では、本人たちから主官の指示という言葉も取った。そして、長官はいまどこに行っている？ CP4本部だろ？」

「ええ、平和的な話し合いをしてくるそうです」

「ははは、それはいい。さぞ、平和的な話し合いになることだろうな。すぐにでも隠居したくなるような……」

心底楽しげに笑うルッチを見て、その言葉を聞いて、他のメンバーも理解した。スパンダムはCP4主官を排除するために、あえてCP4役人の暴走を見逃した。いや、誘導して暴走させたと……。

「人間というのは愚かなもので、味方が居ると思えば態度もデカくな

る。現CPの中で長官に反抗的なのはCP2とCP4だろう？」

「ああ、長官もそう言っておったな。長官の父親に恨みがあるとか……」

「だが、おそらくCP4主官は今回の責任を取る形で交代となる。上も長官の反感は買いたくない筈だ。次は、長官に肯定的な人物が据えられるだろう。そうなれば、CP2も孤立状態で果たして今まで通りの態度を取れるかな？ 無理だろうな」

そこまで語ったところで、ルッチは立ち上がり部屋に備え付けられている冷蔵庫の中から飲み物を取り出す。任務はないとはいえ待機中なのでノンアルコールではあるが、上機嫌で喉を潤してから話を続けた。

「……長官にとってCP2とCP4の主官は己の利にならない邪魔な存在だ。どこかしらのタイミングで、どちらかを排除する気だったんだろうさ。そうすれば、軽く睨むだけでもう片方も怯えて尻尾を振るからな……そうなればCPは実質全て長官に従う状態となる」

「実質的に長官がCPのトップつてわけか……そりゃいいな」

その説明を聞いて、フィズも最初の怒りはどこへ消えたのか、ニヤリと楽し気な笑みを浮かべる。

「ジャブラ、たしか前に言っていただろう？ 今回の任務に関して、珍しく長官が考えるような表情を浮かべていたと……」

「ああ、気になることがあるから自分が行くつもりだって……おいおい、つてことはまさか……」

「おそらく指令書が来た時点で、長官はそれを利用してCP4主官を排除するシナリオを組んでいたんだろうさ」

「間違いないと思いますよ。隊長は司法船の襲撃も予想していたみたいですし、本当に全部隊長の掌の上という感じでした……まあ、それはそれとして隊長の指示に従わなかった奴らは大罪人なので、罰を与えましたけどね」

ルッチの意見にはチェルシーも同感であり、スパンダムは最初からすべての展開を読み切っているように見えた。その類まれなる頭脳から組み上げられた策略には惚れ惚れすると、そう思っている。

ただ、全部スパンダムの子ナリオであるとは分かっていても、スパンダムの指示に従わない連中はムカついたのでボコボコにしていたのだが……。

「まったく、我らが長官ながら……恐ろしいのう。あれほど化け物じみた戦闘力がありながら、油断も慢心も一切なく深謀を張り巡らせるとは、恐れ入る」

カクと同じく他のCP9メンバーたちも、自分たちのトップの凄まじさを再認識して感嘆した表情を浮かべていた。なお、一部誤解といえる。

ルッチやチェルシーの読み通り、確かにスパンダムはCP4主官の排除も考えていた。ただ最初からその目的で動いていたわけでは無く、様々なことを検証する中のプランのひとつという程度だった。

とはいえ、原作知識……未来の展開を知った上でアレコレ動いていたスパンダムの思考を読むのは、さすがにルッチやチェルシーをもつてしても不可能であり、結果として最初からすべて計算だったと解釈したのであった。

すると少しして、部屋のドアが開きスパンダムが入ってきた。ここは長官室ではなく、現在CP9メンバーは待機中なので、なんらかの伝達があつて来たのだろうと、CP9メンバーは即座に起立して整列する。

「報告は二点。一点目は、今回の任務に関しては一時保留となった。それに伴い俺も明日から通常業務に戻る。もう一点は、直接的な関係はないが近々CP4主官が交代となるから、そのつもりで……質問は？」

「CP4主官との平和的な話し合いとやらはどうなったか知りたいな」

「特に問題なく終わったぞ。今回はお互いの連絡の不備もあつたということで大きな問題にはしない……ただ、CP4主官は、今回の件で『多大な精神的負荷』を感じたようだな、退職して療養するそうだ。皆もストレスには気を付けろよ」

「くはっ、ははは……なるほど、なるほど、それはさぞ楽しい話し合い

だっただんだろうな……」

いまの会話だけで、ルッチだけでなく他のメンバーもおおよその理由は察した。おそらくスパンダムは普段抑えている気配を解放した上で話し合いをしたのだろう。

近くにいるだけで押しつぶされそうな異常な重圧、CP9のメンバーですらかなり気合を入れなければキツイ程のプレッシャーを、上へのゴマすりが上手いだけのCP4主官が受ければどうなるか……話が終わるころには、スパンダムへ逆らう気力など根こそぎ無くなっ

てしまっているだろうと容易に想像できた。
まったくもって自分たちの長官は恐ろしく……なにより頼もしいと、CP9メンバーたちはそう感じていた。

使うあてのない大金は邪魔なだけ

トムの一件も終わり、これで原作通りに進むとしても数年。潜入調査が始まるまではこれと言って大きな事件はなさそうだ。

もちろん世界的にという意味では事件はある、ドフラミンゴの七武海入りの際の天上金の輸送船襲撃事件。シツケアール王国が内乱で滅ぶのもこの時期だったかな？ ミホークがいつ住み着いたかまではわからないが……。

あとはゼファー関連の演習船襲撃事件もこの辺りだったはずだが……正確な時期が分かれば劇場版関連の動きの参考になるが……犯人は自称白ひげの息子エドワード・ウィーブルではないかと予想されていたが、劇場版はパラレル要素が強いため実際のところは分からない。

俺に関係のある内容は少ないな。天上金事件は、ドフラミンゴがなにかマリージョアの秘密を握っており、政府も手が出しにくい相手ということもあり、話が回ってくる可能性は低い。

いよいよ我慢しかねるようなことになれば、五老星から俺にドフラミンゴを消すようにと指令が来るかもしれないが、良くも悪くも慎重な五老星が初手でそんな手段に出るとも思えない。

天竜人関連は基本的にCPOの管轄だし、対処に動くとしてもCPOだろう。

シツケアール王国に関しては、「国が亡ぶほどの内乱とはなんだ？」という思いはある。止まりどころを見失った結果なのかもしれないが……まあ、あと1年ほどで滅ぶレベルであればすでに末期だろうし、ここから介入という事態は考えにくい。

となるとやはり、大きく俺に関わる事態はないな。というか、ここから原作開始までは小さな事件こそいくつか起こるが、大きな事件は少ない。

問題は、原作が始まってからだ。そこからほんの1年の間に事件が大量に発生する。

東の海関連は置いておくとして、ドラム王国が新しくサクラ王国に変わり、アラバスタ王国の反乱が収まり、バロックワークスが崩壊、七武海のクロコダイルの称号剥奪。こちらには関係ないが空の上ではエネルギーの体制が崩壊。

そして俺が大きく関わるであろうウオーターセブンの一件。原作通りなら、エニエスロビー崩壊。エースが黒ひげによって捕まり、黒ひげが七武海入り。モリアのスリラーバークが壊滅。

そして、シャボンディ諸島で天竜人への暴行、インペルダウンでの暴動及び大量脱獄、マリントフォードでの頂上決戦に白ひげの死。

これが1年以内という短い期間で発生するんだから、悪夢のようである。そりゃ、原作の五老星もさぞ頭を抱えたことだろう。

まあ、とりあえず俺に大きく関わるのはウオーターセブン及びエニエスロビーで、あとは書類仕事とかが爆増しそうではあるが、直接的な関わりはない……と思いたい。

エニエスロビー崩壊で左遷されれば、その後のインペルダウン、マリントフォードの一件で忙殺されることはないのだから……本当にありかもしれない。

「隊長、島が見えましたよ」

「そうか、近場とは言ってもやはり時間がかかるな……帰りは全員剃刀で帰るか？」

「いや、さすがにこの距離を剃刀で移動するのは体力がもたん気がする」

俺の呟きにカクが首を横に振りながら告げる。視線を動かしてみると、他のメンバーも一部は青ざめているので、現実的ではないか……。

ポチ、ルッチ、フィズ、ジャブラ辺りは大丈夫だろうが、他はたしかにスタミナが足りないかもしれない。

「しかし、小さい島だなあ」

「まっ、なにもねえ無人島だしな。目的は慰労を兼ねたバーベキューなんだし問題ねえだろ」

ジャブラとフィズが話しながら見る先には、ポツンと小さな島があ

り、そこが今回の目的地だった。

以前にポチと話した通り、CP9全員で休みを取り慰労を兼ねて近場の島に出かけてきたわけだ。申請は思った以上にアッサリ通った。

いや、それどころか……。

「まあ、酒も肉も山ほどあるから、好きなだけ飲んで食べ」

「……しかし、長官。高級食材や高級酒をあれほど大量に用意して、金銭面は問題ないのか？」

「いや、アレは俺が用意したわけじゃなくて上が送ってきたんだよ」

「うん？」

ブルーノの質問に答えつつ、ポケットから飴を取り出して啜る。するとそのタイミングで、事情を知っていてお喋り好きなフクロウが口を開いた。

「チャパパパ、日ごろの仕事ぶりに対する褒美らしいぞ。というか、普段から長官には定期的に臨時ボーナスとして、大金が支払われているらしいが、長官が拒否してるとか」

「初めは受け取っていたんだが……本当に頻度が多くて、いちいち受け取るのも面倒で最近は必要ないと拒否してたな」

「なんでだ？ 別に金なんざあって困るもんでもねえだろ？」

「いいか、ジャブラ、俺にとつて使いもしない大金なんぞ邪魔なだけだ。通常の給料だけでも多すぎるぐらいなのに、なんであもことあるごとに金を渡そうとするのか……」

「いや、それ長官が仕事し過ぎなだけじゃねえのか……」

CP9司令長官というだけで、月々の給料は凄まじい額だ。それもそうだろう、世界政府という名実ともに世界最大の組織で高い役職についていれば、相応に給料は凄まじい額になる。

その時点でまず俺の普段の生活で使い切るような額ではない。なんならCP5主官の頃から金はかなり余っていた。

その上なにかと理由を付けて大金を渡して来ようとするのは正直鬱陶しい。前世のようにATMなどがあって全国どこでも金を出し入れできるというわけでもないのだから、大金は物理的に邪魔にさえなることもある。

「まあ、それで突っ撥ねていたんだが、今回の休暇を申請した際に、バーベキューに対し特別ボーナスの代わりに食材や酒を提供すると言ってきたので、それぐらいならいいかと思つて了承したら……呆れるほどの量を送つてきやがったというわけだ。だから、各自今日の余つた食材や酒は好きに持つて帰れ」

「ふふ、まあ、上の苦勞が伺えるな。働きに対する正当な報酬を支払いたいのには、本人が望まないのだからな」

そう呟きながら私服姿のルツチが苦笑しながら肩のハットリに豆をやる。今日は休暇ともあつてハットリもリラックスマード……ネクタイの色が普段と違うな？ 休暇だから付け替えたのか？

「……まあ、それでも最近はいいい消費先ができたから、金は使うようになった」

「意外ですね。長官が大金を使う姿が想像できませんが、なんに使つてるんですか？」

「服だな。特注で作らせてる……いまのこの服もそうだな」

「いくらぐらいですか？」

「この服は6500万ベリーだな。普段のスーツは、8000万ほどだ」

「……は？ え？」

カリファの質問に答えてやると、目を白黒させ思考が追い付いていないと言いたげな表情を浮かべる。そして、同様に明らかに驚いた様子のジャブラが会話に入つてきた。

「おいおい、6500万!? なんでだ？ 普通の服にしか見えねえぞ……」

「普通の服だが、お前らが支給されているものの上位版といったところか……簡単に説明しよう。『俺が本気で動いても破れない伸縮性と丈夫さを兼ね備えた服』だから高価なんだ」

「……滅茶苦茶納得できた。というか、すげえな。長官の動きに耐えられる服なんて……」

実際ワンピース世界の服は異様に丈夫だ。漫画的な表現と言つてしまえばそこまでだが、炎が直撃してもちよつと焦げるぐらいとか、

動物系の悪魔の实の能力者が変身してもあわせて伸縮する。

「というか、悪魔の实に関しては服も体の一部とかいうガバガバな判定をしている気がするが……自然系とか、服も能力の対象内だしな。」

「スモーカーが十手を煙にはできていなかったのは武器は対象外なのか、海楼石の影響か……エースの腰の短剣とかは問題なく炎に出来ていたのだから、海楼石が有力か……。」

「まあ、そんなわけで悪魔の实は除外するとして、この世界の服というのは異様に丈夫で、さらに政府が支給するスーツとかは最新の技術が使われてるとかでさらに上だ。」

「しかし、それでも俺が本気で動くときさすがに耐えられなかったので、特注で作らせている。おかげで移動で服が破れたりということはない。」

「手で少し強めに引っ張れば破れるが……。」

すると、ブルーノがなにか疑問に思うことがあったのか不思議そうに首を傾げつつ尋ねてきた。

「金額は納得したが、そんな服を作れる服屋が存在するのか？」

「ああ、まあ、服屋じゃなくて科学者だな……『ベガパンク』という」

「……あの有名な天才科学者か？ 知り合いだったのか？」

「いや、直接会ったことはない。親父がベガパンクの近いところに伝手を持っていて、それを通じて依頼した。向こうも万年研究資金不足とのことで、喜んで応じてくれたよ」

「俺としては使い道のない大金を処分する先として有益だが、人間的には面倒臭そうなので正直直接会いたとは思わない。」

「できれば、今後も親父を窓口にして、あくまで服屋としての付き合いに留めておきたいところだ。」

皆で楽しく休暇

適度な大きさの岩に腰を掛け、釣りをする。すぐ近くには退屈そうな顔をしているルッチがおり、俺と同じように釣竿を手に持っている。

少し離れた場所では、釣りに興味のない者が遊んでおり、ポチはバーベキューの用意をしている。料理に関してはポチに任せておけば問題ないので、俺はのんびりと休暇を満喫することにする。

「……ルッチ」

「うん？」

「退屈な時間を退屈という言葉で思考停止をするのは無駄だ。こういったのんびりした時間も、有効に使えるものだぞ」

「ふむ……例えば？」

「俺とお前の釣果がかなり違うのはなぜだと思う？ 腕はほぼ変わらない、では要因となるのはなにか……答えは気配だ」

ルッチは原作でそういう部分はあったが、退屈な時間を嫌う傾向にある。ただ、普段を見ているとハットリの世話をしていたりする時などは、割とのんびりリラックスしていたりもするので、少し心の持ち方をアドバイスしておこう。

そうすれば、ガレーラカンパニーに潜入する際にもある程度退屈をコントロールできるだろう。

「自然界の生物というのは、人以上に気配に敏感だ。人間相手であれば問題なくとも、動物には気づかれるというのはよくあることだ」

「……どうすればいい？」

「気配の消し方はそれぞれだが、なにかしらのイメージを持つのがコツだな。俺の場合は皮膚の上に薄い膜を作り、気配を外に出さないようなイメージで抑える」

「こんな感じか？」

ルッチは天才と呼ばれるだけあって類まれなるセンスがある。故に、簡単なアドバイスであってもすぐに自分のものにすることができ

る。

さっそく俺のアドバイスを聞いて実行したルッチから僅かに漏れていた気配が消え、直後に竿にかかった魚を釣り上げ、俺の方を見て軽く笑みを浮かべた。

「悪くない。あとはそれを、意識せず自然に行えるようになれば合格だ」

「なるほど、遊びのように見えることの中からも学べることはあるか……」

「その辺りは思考の持ちよう次第だ。学べるものが何もなかったとしても、後の楽しみ……お前の場合だと殺しだな。それを楽しむための前菜と思えばいい。退屈の一言で切り捨てて思考停止するよりは、有益だろう?」

「ふっ、確かに……前菜は、少し物足りないぐらいがちょうどいいか……なるほど、そう考えてみると、次の任務が楽しみになるな」

原作とは違いルッチと俺の関係が良好ということも影響してか、ルッチは基本的に俺の言葉は素直に聞く。今回も、アドバイスを自分なりに納得する形で消化できたみたいで、先程までよりはリラックスした表情を浮かべていた。

「……まあ、フクロウとクマドリはこちらに近づくな。お前らは気配以前にうるさくて魚が逃げる」

「チャパ!」

「ああ〜突然のお〜流れ弾あ〜」

「く、ふふふ……なるほど、たまにはこういう時間も、悪くは無いか……」

楽しげに笑うルッチを見て、この分ならガレーラへの潜入も原作よりは退屈を感じずに済みそうな、そんな予感がした。

・***

スパンダムたちが釣りをしている際、釣りに興味がないジャブラとフィズは持って来たボードゲームを挟んで真剣な表情を浮かべてい

た。

「どうかよ、ジャブラ……テメエ、結果が分かり切ってるとはいえ、いつになったらギャサリンに告白するんだよ」

「ば、馬鹿お前、そういうのはいろいろタイミングとか、雰囲気ってもんがだな……」

「はっ、何年言っただけやがる。どうせ振られるんだから、さっさと言えばいいものを」

「あ？ テメエが振られたからって、勝手なこと言いやがって、俺はお前と違って可能性ありに決まってるだろ！ な、カクもそう思うだろ？」

「知らん。わしに話を振るな、興味ない」

「かあ、これだからお子様は……」

「……なんじゃと？」

思いを寄せるギャサリンの話になりヒートアップするジャブラと、たまたま近くに居たという理由で話に巻き込まれつつ挑発に乗ってジャブラを睨むカク。フィズは、すでに告白して振られているためか、どこか楽し気に睨み合うジャブラとカクを眺めていた。

そんな三人を眺めつつ、バーベキューの準備をしていたチエルシーは、カリファに小声で問いかける。

「……でも、たしかギャサリンさんって、ルツチさんが好きって言ってませんでしたっけ？」

「あの子は面食いだからね。なんにせよ、確かにジャブラに可能性はなさそうね」

「ですねえ……ああ、カリファさん。この食材の下処理はこうして……」

「なるほど、貴女は相変わらず料理が上手いわね。せっかくの機会だし、いろいろ教えてちょうだい」

「もちろんです。まあ、今回はバーベキューなのであまり教えることもないですが……あつ、ホイール焼きでも作りますか？ 基本的な作り方を教えたあとで、隊長好みの調整の仕方をみっちり教えますね！」

「……基本的な作り方だけにしてもらえるかしら……いや、ほら、初心

者だから、まずは基本からね」

カリファにとってチエルシーは親友と呼んでいい間柄の存在である。年下のカリファに対しても敬語を崩さない礼儀正しくも明るく人当たりのいい性格であり、少ない女性メンバー同士ということもあつて話す機会は非常に多い。

ただ、基本的には本当にいい子だと思っているし、最高の親友だとも感じているが……唯一の欠点として、ともかく隊長と呼ぶスパンダムへの忠誠心と愛が凄すぎるのが問題だった。

今回のようにたびたびスパンダムの話に移行しかける時があり、そこで曖昧な返事をしたら最後、テンションの上がったチエルシーは数時間に渡りスパンダムの話を続ける。

なのでスパンダム関連の話を迂闊に拾ってはいけない。やんわりと、しかしてハッキリと「また今度」という風に伝えなければならぬ。

「……そろそろいいですね。隊長たちを呼びましょうか」

「ええ、火は私が見ておくわ」

「ありがとうございます。じゃあ、行ってきますね」

犬の尻尾のように後ろ髪を揺らしつつ、笑顔でスパンダムの下にむかうチエルシーを見て、カリファはふつと笑みを浮かべた。

年上のはずなのだが、見た目が幼げなこともあつて妙に年下っぽく見えてしまうなあとそんな風に考えながら……。

・***

準備が完了し、スパンダムとルツチが釣ってきた魚をチエルシーが手早く下処理したあとで、予定通りバーベキューは開始され、皆思い思いに楽しむ。

美味しい肉を食べ美味しい酒を飲むというシンプルながら素晴らしい娯楽により、テンションの上がったメンバーたちはワイワイと楽しげに騒いでいる。

「……よっしゃっ！ 参ったか、ブルーノ！」

「ぐっ……」

切っ掛けが何だったかは分からないが、いつの間にか腕相撲勝負のようなことが始まり、激戦の末にブルーノを下したジャブラがガッツポーズを取る。

現在ジャブラは、フクロウ、クマドリ、ブルーノ、と三連勝中でありどこか余裕ある表情で笑う。

「さあ、次はどいつだ？ 誰でもかかってこい！」

「じゃあ、次は私が……」

「おいおい、カリファかよ。お前が、腕相撲で俺に勝てると思ってるのか？」

「難しいでしょうね。だから、代理を立てるわ」

「……代理？」

不敵な笑みを浮かべながら現れたカリファに、ジャブラが挑発的な発言をするが……その直後にジャブラの表情から笑みは消え、顔は青ざめることになる。

「じゃ、よろしく、チエルシー」

「はい！ というわけで、次の相手は私ですよ、ジャブラさん！」

「おいおいおい！ やめる馬鹿、ふざけんな!! カリファ、お前、それはやっちゃ駄目なやつだろうが!! 俺の腕をへし折る気か！」

ニコニコと笑顔を浮かべで腕まくりをするチエルシーを見て、ジャブラは明らかに動揺している。それもそのはずだろう、チエルシーはスパンダムに教わった肉体改造により常人を遥かに上回る力を持っており、その中でも筋力に関しては桁違いである。

その小柄な体からは想像もできないほどの怪力の持ち主であるということは、CP9メンバー全員が知っている。

「よかったな、ジャブラ。歯ごたえのある相手だぞ」

「おいこら、フィズ、テメエ馬鹿か！ 岩山を片手で持ち上げるような怪力女と腕相撲なんてできるか！ 俺はおり——なっ!!」

負けが濃厚というか、下手すれば腕が折れかねないチエルシーとはとても勝負できないと、ジャブラが逃げるために座っていた椅子から立ち上がろうとするが、それより早くその肩に手が置かれ、ジャブラ

を囲むようにブルーノ、フクロウ、クマドリの三人が立つ。

「ジャブラ、ここで逃げては男が廢る。当然受けるのだろうか？」

「チャパパパ、連勝中だもんなく」

「ああ〜男なああ〜男ならあ〜勝負に、背を向けては〜逃げられぬう」

「て、テメエら、や、やめろ、お前らだつてこの女がどれだけ馬鹿げた腕力してるか知ってるだろ！　そしておい！　ルツチ！　テメエはなに笑ってやがる！　つて……やめろ！　俺はまだ死にたくない！！

死にたくないいいいい！！」

三人によつて強制的に勝負の場……死地へと放り込まれたジャブラの悲鳴が無人島へと木霊した。

・***

チエルシーによつて象に踏みつぶされるアリの如く敗北を叩きつけられ、腕を抑えて蹲っていたジャブラの下に酒瓶をふたつ持ったフィズが近づいてきた。

「よう、腕はちゃんとしててよかったな」

「……くそつ、あの怪力女……マジで千切れたかと思つたぜ。なんかそういう悪魔の実の能力者じゃねえのか、アイツ……」

ジャブラはフィズが差し出してきた酒瓶を受け取り、蓋を開けて一口飲みながら告げる。それを見て苦笑しつつ隣に座り、フィズは指でとある方向を指し示す。

「だが、ほら、そんな怪力女が、両手で全力で力を込めてもピクリとも動かず、余裕過ぎて空いた手で本を読み始めているのが我らが長官だ」

「あの光景だけ見ると、チエルシーが非力に見えちまうから異常だよな」

ふたりの視線の先には、腕相撲勝負の決勝戦……という名目のじやれ合いが行われており、顔を赤くして全力で力を籠めるチエルシー……さらに周囲に居る者たちも、どんどん加わつてチエルシーと共に

力を籠めるが、微動だにせず、暇なのか空いた手で本を読んでいるスパンダムの姿があった。

なんとも平和なその光景を見て、ジャブラとフィズが顔を見合わせ、笑みを浮かべ、ほぼ同時に持っていた酒を飲み干した。

「よしっ、じゃあ俺たちも加わるか！」

「おうっ、せめて長官の手を少しぐらいは動かしてやろうぜ！」

そうしてふたりも加わり、CP9メンバー全員対スパンダムでの腕相撲勝負の形になった。そんな、なんともノリがいい面々を見て、スパンダムは苦笑を浮かべるが……その表情は普段より少し優しく見えた。

……なお、結局腕は1ミリも動くことは無かった。

潜伏任務の始まりと新たなる狂人の影

ウォーターセブンでの1件から3年ほどが経過したある日の午後。エニエスロビーの司法の塔にある長官室、座り慣れた椅子で俺は一枚の指令書を眺めていた。そして俺の前にはCP9のメンバーが綺麗に整列している。

届いてから何度も見た指令書の内容に軽いため息を吐きつつ、俺は集まったメンバーに告げる。

「3年前にあった古代兵器プルトンの設計図の搜索を覚えているか？
一時保留とはなっていたが、その後の調査でやはりウォーターセブンの職人に代々引き継がれている可能性が高いと判明したことで、正式にウチが引き継いで調査することになった。そして今回の任務は長期潜伏調査任務となる」

「長期潜伏……どこかに潜入する形か？」

「ああ、トムの弟子であり、プルトンの設計図を所持している可能性が最も高いアイスバーグが、ウォーターセブンの7大造船会社を統合し、ガレーラカンパニーという会社にした。今後の仕事規模の拡大を考えているようで、発足と同時に大々的に人を雇おうという動きがあり、そこに潜入してもらうことになる」

まあ、予想していたことではあるがやはり古代兵器の設計図という要素を放置することはできないみたいで、原作とほぼ同じと言っていいタイミングで指令が回ってきた。

そして潜伏するメンバーに関しては、ある程度上の希望もあるが選定は俺に一任されている。ただ、いろいろ考えてみてもやはり、原作のメンバーが適切といえた。

「先にメンバーを伝えておく。潜入任務のリーダーとしてルッチ。指揮下で動く者としてカク、カリファ、ブルーノの三人だ。ルッチ、カク、カリファにはガレーラカンパニーの募集に応募する形で潜入してもらう。ブルーノはウォーターセブンの街……現在は酒場を考えているが、概ねガレーラカンパニーの外の情報収集がメインになるだろ

う」

そう告げながらメンバーを見るが、特に異論があるような雰囲気ではなかった。まあ、上からの正式な指令なわけだし、異論を言うやつも居ないだろうが……ただまあ、潜伏期間に関してルツチたちは長くても1年ぐらいだろうと予想しているのではないかと思うが、原作通りなら5年かかる。

「ちなみにメンバー選定の理由だが、ルツチ、カク、カリファに関して上への意向が大きい。現在は世界的な規模でいえば情勢がある程度安定していて平和といえる。まあ、細かい事件は起きてるが……上としては、いまのうちに若いメンバーに長期潜伏を経験してもらいたいとのことだ。CPOなどになれば諜報員としての顔以外に表の顔を持つ場合もあるからな」

「……俺は？」

「ブルーノに関しては、伝達要員としての意味合いが大きい。こちらからの指示を潜伏メンバーに、潜伏メンバーの報告をこちらにといった中継の役割をこなす上で、お前の能力は有用だからな」

まあ、ブルーノは年齢という意味でもフクロウを除外すれば、下から4番目なので若い中でも候補に入るのだが……ドアドアの実での中継及びサポートとしての役割を期待しての選定だ。

「この役割はフィズでもいいんだが、フィズには別の任務を任せたい。なにせ一時的とはいえメンバーが4人減るわけだしな。少々忙しくなるが、指揮能力の高いお前には下級役人などを連れての規模の大きい任務を中心に任せたい」

「ああ、任せてくれ。アンタの期待を裏切らない働きを約束するぜ」
「頼む。そして、フクロウ、クマドリ、ジャブラ……お前たちは致命的に潜伏任務には向かない。だから外した……以上だ」

「おおおい!!? ちょっと待て、長官!!」

丁寧にメンバー選定の理由を説明すると、ジャブラが猛然と食って掛かってきた。

「メンバーの選定はいい。そこは長官の意向に従う……だけど、俺がこのふたりと同じ枠ってのは、納得いかねえ!!」

「ふっ、どうみても同じ枠だろうが」

「ああ、こら、ルツチてめえ……」

嘲笑うルツチに例によって噛み付くジャブラだが、その両肩にフクロウとクマドリの手が置かれる。

「チャパ、仕方ないぞ、ジャブラ……」

「よよいっ！ 日頃のく行いいく」

「おいこら、なに『俺たちは仲間だよ』みたいな顔してやがる。俺は認めねえからな!!」

そのまましばらくワイワイと言い争いをしていたが、俺が軽く咳ばらいをすると全員喋るのを止めて再び綺麗な姿勢で立つ。

「それぞれの生い立ちなどを含めた設定を渡しておくから、任務開始までに完璧に記憶しておくように……ああ、あと、ルツチ。お前は、別の島に家族がいる設定にしてある。定期的に家族からという体で手紙を送るが、返事の手紙等にはくれぐれも任務に関わることは書かないように」

「なぜ、わざわざそんな設定に?」

「最低でも年に1度程度は里帰りという名目で、外に出させてやるためだ。今回の任務、俺はそれなりの長期になると踏んでいる。その間殺しができないのはストレスだろう? 帰郷という名目でそういった息抜きができる任務を回してやる」

「ふむ、長官は短期では終わらないと見ているのか……」

確かにこの任務はプルトンの設計図を発見できた時点で終了となるため、それこそ1月で発見できたならそこで終了だ。

だがまあ、間違いなくそうはならないだろう。

「アイスバーグは相当の切れ者だ。そうそう隙は見せない。そして、この短期間で競争していた7つの会社をまとめ上げる手腕も大したものだ。そしておそらく、ここからアイスバーグは政府にとつてさらに手を出しにくい相手になるだろう」

元々トムズワーカーズの評判などを考えると、3年でそこまで上り詰めるのは並大抵ではない。知力、交渉力、経営手腕、全てにおいて高い次元であることは疑う余地もない。

原作知識云々を抜きにしても、簡単に行く相手ではない。

「これからガレーラは政府の仕事をさらに増やし、無くなつては困る会社に成長するだろう。元々ウォーターセブンの造船技術は最高峰だし、政府にとって欠かせない存在となるのも時間の問題だ。反発するのではなく懐に潜り込む……この選択肢を選べるだけでもアイスバーグの有能さは伝わってくる」

「アンタがそれほど評価する相手というわけか……なるほど、厄介そうだ」

「しかも、今回の大規模な募集……アイスバーグとしても、当然政府の諜報員の存在は警戒するだろう。信用を得るにはそれなりに長い期間が必要だ」

トムの一件があるからこそともいえるが、政府に対する強い警戒と、様々な手段を考えられるだけの頭脳。原作でルッチたちが高く評価していたように、探る側になると厄介さがよく分かる。

「まあ、もちろんこちらもいくつか手は講じる。お前たち以外に他のCPから数名諜報員を派遣するが、こちらの諜報員はお前たちが潜入していることを知らないし、お前たちにも諜報員については教えない。理由は単純、困だからだ」

「つまり、アイスバーグにワザと気付かせると？」

「わざとしくなくても気付くさ……そして、頭の切れる奴ほど相手のハンド……手の内を見てコントロールしたいと考える。まず間違いなく気付いたうえで泳がせてくるだろう。他にもいくつか策は用意しているが、ある程度の目は逸らせるだろう」

そこで説明を打ち切り、俺はルッチ、カク、カリファ、ブルーノにそれぞれ設定となる資料を渡す。名前は偽名を名乗らせようかとも思ったが……まあ、原作通り進むことを願って同じにすることにした。

「任務開始は20日後、それまでに必要な準備は終わらせておけ……先に言った通り、プルトンの設計図が発見できればその時点で終了。そうでない場合は、5年後を目安に打ち切りを検討する」

『了解』

ガレーラカンパニーへの潜伏任務……事態が動くのは5年後、麦わらの一味が訪れてからか……。

幸いなのは、ソレが発生する時期は比較的読みやすいという点だ。特にアラバスタの一件があったあとは時期が近いと思つて備えておけばいい。

他のメンバーたちにも割り振つた任務を渡し、CP9メンバーが退出した。さて書類仕事は終わっているし、少しコーヒーでも飲んで休憩を……と、そう思つたタイミングで、狙いすましたかのように電伝虫が着信を知らせた。

「……スパンダムだ」

『俺だ』

「死ね。切るぞ……」

『待て待て！　なんで、連絡する度に辛辣になつていんだお前は!!』
出ると親父だった。なんでこいつはいつも間が悪いんだ？　即切ろうかと思つたが……まあ、最低限用件ぐらひは聞いてもいいだろう。

「それで、用件はなんだ？」

『あ、ああ……実は、お前が新しいスーツを発注しただろ？　古いものが破れたからと……』

「それがどうした？」

『ベガパンクが、そんな簡単に破れる服ではない。どんな使い方をしているか問い質したいと……というわけで、少し時間を作つて会つてやつてくれないか？』

ベガパンクに服の作成を依頼して数年。たしかに見事な耐久力の服だが、それでもいまも年々俺の力は上昇していることもあつて、たびたび破損するようになった。

特に腕周りが全力で覇気を纏うと耐えられないことが多い。幸い金は余り過ぎるほどあるので、破れるたびに製作を依頼していたのだが……最近は頻度が高すぎて、ついに生産者の方から使い方に関するクレームが入つたわけだ。

「……パンクハザードまで出向けと？」

海軍の特殊科学班、ベガパンクが率いるSSGの拠点はパンクハザードだ。緑豊かで資源豊富な島……まあ、あと数年でシーザー・クラウンの毒ガス兵器爆発事故が起こって人の住めない島となり、エツグヘッドに拠点を移すのだが……現時点ではパンクハザードが拠点だ。

どちらにせよ新世界の島なので少々面倒だ。いや、大して時間がかかるわけでもないが、面倒そうな相手に会うために出向くのは気が乗らない。

『いや、お前はベガパンクの猫サテライトについて知っているか？』

「ああ、知っている」

『そのうちの一体が現在グランドライン前半の海で収集作業をしているらしく、そいつに会えばいいらしい。ソイツもベガパンクには違いないからな』

「……はあ、仕方ない。場所と日程を連絡しろ……」

まあ、いいか直接会って交渉ができるなら、もうさらに丈夫な服を作るよう交渉してみるか……しかし猫サテライトねえ、6体いるはずだが……どいつなんだか。

利になる相手には高評価

グランドライン前半の海、とある島にある海軍所有の研究所以、その研究所の応接室では、世界最高の頭脳を持つと言われるベガパンク……あまりにも天才すぎて時間も手も足りず、猫の手も借りたという言葉通りに自分を6人に分散させた結果である猫サテライトのひとりであり、ベガパンク自身でもあるPUNK-02・悪リス。彼女は苛立った様子でブツブツと呟いていた。

「確かにこちらの要求した金額はキッチリ払っておるし、くだらない値下げ交渉などもしてこないのは高評価じゃ。取引相手としてはいい相手といえる……じゃが、いくら万年研究費に困っているとはいえ、わしにも科学者としての矜持がある。己の作ったものを、何度も何度も壊されていると腹も立つじゃろ？」

「は、はあ……」

「そもそも普通の使い方をして破れるわけが無かろう。どれだけの強度があると思ってるんじゃ、銃で撃たれても穴もあかんぞ！ 絶対変な耐久力テストとかして、遊んどるじゃろ！」

不満げに告げるベガパンク……リスに対し、護衛として付いている海兵たちはなんとも返答に困ったような表情を浮かべる。

実際そうだろう。彼女……ベガパンクは非常に重要な人物で下手に機嫌を損ねさせるわけにはいかないが、これから来る相手もエニエスロビーのトップであり相当の地位を持つ相手なわけで、その発言に同意するのは難しい。

結果として曖昧な返答しかできず、それが余計リスを苛立たせる結果に繋がっていた。

「正シヤカのやつは、放っておけばいいとか言っておったが……そうはいかん。一言文句を言ってやる。まあ、それで取引止められても困るから、控えめにじゃが……」

苛立ってはいいても相手がいい取引相手というのは認めているらしく、文句は言うつもりだがあくまで苦言程度に留めておくつもりだ。

「まあ、ともかく最初じゃな。出会い頭に一回ガツーンと言ってやるわ」

そんな風に話していると、相手が到着したようで海兵たちは緊張した表情を浮かべる。主にベガパンクが相手に失礼な態度を取らないかどうかという点で……。

さすがに殴りかかったりはしないだろうが、それでも世界政府の重職持ち相手にこじれるような絡み方はしないで欲しいと、そう願いつつ相手の到着を待った。

少しして海兵に案内されて、黒いスーツを着た目元と鼻の黒い男……CP9司令長官であるスパンダムが到着した。

落ち着いた佇まいと鋭い目に海兵たちが気圧される中、スパンダムはリリスの向かいの席に座る。最初にガツンと言うと言っていた、リリスの第一声に注目が集まる中、リリスは……。

「……急に呼び出して申し訳ありません」

『滅茶苦茶丁重に謝った!』

先ほどまでの苛立ちはどこにというレベルで、机に両手を付いて深々と頭を下げており、思わず海兵たちが叫ぶほどの急変だった。

「あ、あの……Drベガパンク？ ガツンと言うんじゃ……」

「馬鹿かお前！ お前、どんだけ墓の近くで生きとるんじゃ！ コイツ見て、そんな台詞出てくるとか、ドン引きするぞ……なんじゃこのバケモノ!?! え？ これ本当に人類？ いやいや、ありえん。どうなったら、こんな異常なつ……」

流石というべきか、リリスは一目でスパンダムの異質さを見抜いた。どのような過程を経たらたどり着けるのか、彼女の頭脳ですら理解できなかつたが、それでも目の前にいる存在が異常進化の果てに君臨する理外の怪物であることを即座に理解した。

「Drベガパンク……初めまして、CP9長官スパンダムだ。今回は仕事の席というわけでは無いので、互いに砕けた口調でいきたいと思うが、いかがだろうか？」

「あ、ああ、了解した。わしはベガパンク……といっても猫サテライトのうちのひとりじゃ。個体としては悪リリスという名がある。好きなように呼んで

くれて構わん。改めて、今日は呼び出してすまんかった」

「いや、かまわない。いつもいい品を提供してくれて助かっている……それで、今回はなにか話がしたいということだったか?」

「……本来なら、服の扱いについて苦言を呈するつもりじゃったが……百聞は一見に如かずとは、よく言ったものじゃ……そうか、あの強度でも……足りんのじゃな?」

「ああ」

「脳が破壊されそうな気分じゃが、確かにわしの目から見ても、あの服では強度不足……なんという存在じゃ……」

そう呟いたあとでリリースは沈黙して顔を伏せ、プルプルと体を震わせる。その奇妙な行動に海兵たちが心配した様子で近くに寄った瞬間、リリースは叫びながら立ち上がった。

「んあああああ! くそおおお、地獄じゃああああ!!」

「ド、ドクター?」

「目の前にこんな、涎が止まらないほどの相手……進化の極致みたいな存在がおる! 研究したい!! 皮膚細胞とか、髪の毛とか体液とか欲しい! 欲しいが……駄目じゃ、コイツ、己のテリトリーに踏み込まれるのを極端に嫌うタイプじゃ! 踏み込んだら殺される。わしのもつ全戦力を使っても3分もかからず本体ごと皆殺しステラにされる……こんな魅力的過ぎる相手がおるのに、手が出せんなんて生き地獄じゃろうが!!」

ベガパンクもある意味では狂人……マッドサイエンティストと呼ばれる存在だ。故に彼女は一目見て、スパندانムという存在を理解した。

研究したくてたまらない存在ではあるが、研究しようと手を伸ばせば即殺されると理解しているからこそ、なにもできずに頭を抱えていた。

その様子に呆れたような「やっぱり面倒な相手だった」と言いたげな視線を向けるスパندانムの前で、リリースはしばらく悶えたあとでピタッと停止する。

「……仕方ない。プランBで行こう」

しかし、天才には切り替えの早さも必要ではある。不可能を認め、別のアプローチを試す。トライ&エラーこそ科学の本質である。

「……プランB?」

「うむ。今後お前からの依頼は最優先で受けるし、要望にも可能な限り答える。金額も必要最低限でいい……わしはお前を研究したいが、普通に申し込んでも殺されるだけじゃから、お前との間に信頼関係を構築することから始める」

「……ふむ」

「そしてある程度お前の信頼を得られたら、実験への協力を依頼する。もちろん事前に実験内容は全て話した上で、お前が納得しないなら一切の無理強いはしない。お前が、協力してやってもいいかなあと思った時にだけ協力してくればよい……どうじゃ?」

リリースの言葉を聞いて、スパンダムは感心したような表情を浮かべた。さすがは天才と呼ばれるだけあって、リリースはスパンダムに対して己の有益性を示すことが一番有効な手段であると瞬時に理解していた。

それは正解だ。スパンダムは己の利になると認めた相手にはある程度寛容だ。踏み込んではいけないラインさえしっかり見極められれば、ある程度の譲歩を引き出せる可能性がある。

「……いま以上に強度の高い服は作れるか?」

「いまの3倍程度の強度であれば10日で出来る。それ以上じやと、もう少し時間が欲しい」

「なるほど……その3倍の強度の服を5日で作れるなら、内容次第だが少し付き合ってもいい。今日は休暇で時間もあるしな」

「え? マジで!? 分かった! 任せろ!! 海軍の仕事なんぞ全部後回しにして、速攻とりかかる!!」

『ちよ、ドクター!?!』

「あく無理無理、わしの頭はいまコイツのことしか考えられんぐらい夢中じゃから、他のことなんぞ手につかん!!」

堂々と悪びれる様子もなく海軍の仕事は後回しにすると宣言するリリースを見て、スパンダムは若干呆れたような表情をしつつも……

「これはこれで利になりそうだ」と、彼にしてはそれなりに高い評価を
与えていた。

閑話・個にして究極に至りうる存在

その依頼を他の猫サテライトではなく、わしが担当することになった理由はひどく単純で、たまたまその時に多少手が空いていたのがわしだったというだけだ。

特殊科学班の上役と関わりの深い政府高官を通じての依頼で断りにくかったというのもあり、わしが担当することになった。

依頼主はCP9司令長官のスパンダムという男で、内容は支給品より遥かに強度の高い服の作成。その依頼を見た時は、呆れたのを覚えている。

司令官が現場の者より丈夫な服を着る意味なんぞないじゃろうと、命を守りたいなら服ではなく鎧を着るべきじゃし、見栄を張るにしても他にいくらでも方法はあるだろうに、権力者の考えることは分からんと、そう思った。

正直、依頼の内容自体は簡単だった。元々支給品の服は量産を前提として性能は落としてあるのだから、支給品のものより遥かに強度の高い服なんてのは材料さえあれば簡単に作れる。

しかし、ただでさえ研究の時間や予算が足りてない状況で権力者の道楽に付き合わされるといいうのも苛立ったので、最初はかなり吹っ掛けた金額を提示してやった。

無論それが通るなんて思ってはおらんかった。値段の交渉が入って提示額の半額程度で決着すると、そう予想しておったが……先方はアツサリこちらの提示した金額を了承した。

さすがに罪悪感を覚えたので、慌てて金額を下げるようになったが……そういう意味で言えば、最初から振り回されるような依頼だった。

スパンダムという男は依頼相手としては、ほぼ文句なしの相手だった。変に細かい注文を付けるわけでもなく求めるのは強度と大まかなデザインぐらい。金額はこちらの提示した金額をゴネることなく支払い、納品までの期間も長めにとってくれていた。

なんだいい取引相手じゃないかと……そう思ったのは、最初だけだった。

一番初めの服を作り、以降何着か作って送ったあと、数ヶ月経った辺りで「服が破れたので再度製作してほしい」という話が来た。

その時点で少しイラツとはした。数ヶ月で破れるような柔な物は制作していない。数千万ベリという金額を受け取って作った代物……それこそ何十年使っても穴のひとつも空くことなどないような品を作ったつもりじゃ。

だから、ソレが破れたと聞いた時は、どんな雑な扱いをしたのだと憤りかけたが……相手に悪意があると決めつけるのは早計だと思いつ留まった。

たしかにあの服は強固で、それこそ銃で撃たれても穴など空かない。だが、短期間に同じ個所に連続して衝撃を受けたり、強力な酸のような素材を溶かしうるものに当たったなら穴が空いたり破れたりすることもある。

所詮は形あるもの、絶対不変などというのが不可能であるのは科学者であるわしが一番よく知っている。だから特に文句を言うことなく前回と同じ金額で請け負って製作した。

……だが、その後も破れたという理由での服の制作依頼は何度も届いた。しかもどんどん間隔が短くなって……最初は半年だったのが、次は5ヶ月後に、その次は4ヶ月後に……そしてついには月に1度とというような頻度で服が破れたと依頼が来るようになり、拳句にもっと強度の高い服は作れないのかなどと伺いまで届いた時には、さすがに堪忍袋の緒が切れた。

明らかに頻度がおかしい。完全にワザと破っているとしたか思えない。大方耐久力テストみたいなのをして遊んでいるのじゃろうと、人の作品をおもちゃにしている光景が頭に浮かび腸が煮えたぎる思いだった。

たしかに指定した金額を支払って取引が成立している以上、その品はもうスパンダムとかいう男のものじゃ。どう扱おうと文句を言われる筋合いはないと、そう思うかもしれん。

しかし、こちらとしては材料さえあれば簡単に作れるとはいえ、己の作品を何度も何度も壊されているわけで、さすがに我慢の限度がある。

正は、物の扱い方は人それぞれで、他者が口をはさむようなことではないから放っておけばいいと言っていたが、わしは我慢できず直接文句を言ってやろうとスパンダムを呼び出すことにした。

丁度グラウンドライン前半の海にいくつかのサンプルを収集に行く用があつたので、そのついでに苦言を呈そうとそう思った。

……まあ、研究資金のことを思えばいい取引相手なのも事実なので、そこまでキツク言うつもりは無かつたが……。

・***

苛立つように護衛の海兵に愚痴をこぼしつつ、スパンダムを待つ。八つ当たりのようで海兵には悪いと思うが、さすがにCP9長官に怒鳴り散らすわけにはいかないので、直接対面した時に落ち着いて対応できるように多少の発散は必要じゃ。

とりあえず、最初にガツンと苦言を呈して、その後には多少フォローを入れる形で話して……最終的にこちらが下手に出る形で、今後はもう少し品物を大事にしてほしいとお願いする。その流れでいいだろう。

そう思いつつ、ゆっくりと開いたドアから現れたスパンダムを見た瞬間——世界が変わったように感じた。

なん、じゃ……こいつは……馬鹿な、ありえん!? この異様な存在感、全身から感じる次元の違う力……なんで、どうして、この存在はこれほどの力を持ちながら人の形を保っていられるのじゃ!!

そんな小さな器に収まるような力ではない。分からない……分かるのはひとつ、この存在は埒外の怪物だということだけだ。

そのスパンダムが向かいの席に座った。ただそれだけで空間全てが押しつぶされたかのような錯覚を覚えるほど、あまりにもその存在はデカすぎた。

「……急に呼び出して申し訳ありません」

『滅茶苦茶丁重に謝った!』

飛び出したのは謝罪の言葉。スパンダムを目にして、即座にわしは己の過ちを察した。この男はわしの作品を雑になど扱っていない。むしろ出来るだけ、破つたりしないように大切に扱ってくれていた。なぜならわしの目から見ても、明らかにあの服では強度が足りない。この存在の力を受け止められるわけがない。

むしろ、このバケモノが使用して、1ヶ月も使えているという時点で、かなり気を使って扱ってくれていたのは明白だった。

「あ、あの……Drベガパンク？ ガツンと言うんじゃない……」

海兵のひとりが話しかけてきた。眩暈がするような言葉、理解できていないのか？ いくら気配を抑えているからと言って、このバケモノの強大さを感じ取れていないのか？ 早死にするぞ……いや、マジで。

その後スパンダムと簡単な自己紹介を行うが……わしの目はずっと、スパンダムの肉体に釘付けじゃった。

なんじゃ、この肉体は……信じられん。こうして目の前で見ているのに、まるで理解ができない。異常な進化の果てとでも呼ぶべきか、これを人間などと呼んでいいわけがない。

なにもかもが次元が違い過ぎる……し、知りたい。なぜ、どうやってこんな異常な力を身に着けた？ この男のことがもっと、もっと知りたい。

だが、駄目じゃ。わしの直感が告げておる。これ以上迂闊に踏み込めばラインを越える……そうすれば、このバケモノはわしに牙を剥くと……。

例えるなら太陽のような……その光に目を焼かれ、迂闊に手を伸ばせば身を焼かれてしまう。至高の存在が目の前にいるのに手が届かないのは、まさに地獄じゃった。

だからこそ、その後に告げられた少しなら付き合っという言葉に歓喜し、わしの頭からは一時的にスパンダム以外のことは全て消え去った。

・***

強度を3倍にした服を5日以内に用意する約束をして、スパンダムに簡単な体力テストのような実験に付き合ってもらった。

あくまで測定であり、だからこそスパンダムも了承してくれたのだろう。これ以上は、ラインを踏み越える可能性があるのです、惜しくはあるが今回はこれで満足しておくことにした。

パンクハザードに戻り、手元にあるデータ表を眺めていると、正シヤカから通信が入る。

『悪リスあのふざけた報告はなんだ!?!』

「なんじゃ? 正確に報告したぞ」

『全ての数値が《測定不能》ではないか』

「事実として測定不能なんじゃから仕方なからう。お前や他の猫サテライトもアイツを一目見れば、すぐに分かるわ……あくじゃが、待て、やっぱりわし以外が会うのは、やめておいた方がいいな。迂闊にアイツを見てしまえば、お前や本体ステラも全員わしのように当分他のことなんぞ考えられなくなる。研究が遅れまくるからな……まあ、ともかく、追加の情報は追々じゃ」

そう言つて通信を切り、再びデータ表……全て測定不能と書かれた紙を、うっとり見つめる。

「はああああ……」

思わずため息が零れる。スパンダム……あの男は、異常な存在だ。

世界政府の連中はわしの研究を禁忌などというが、アイツの方がよっぽど禁忌じゃろうて……アレは、数多の生命に対する冒涇じゃ。本来なら決して存在してはいけない筈の、個で究極という領域に至りうる存在。普通の生命がいかように進化したとしてああはならない。本来の道を踏み外し、闇の獄を進み抜いた先に君臨するかのような、あり得ざる絶対者……。

ああ、なんて——なんて美しい。

ただただ純然たる強さに特化して進化し続けた結果と言えるよう

な、生命の粹組みを外れた埒外の怪物。全てが異様なほどに洗練され
研ぎ澄まされた究極とすら呼べる肉体。

分からない、どれだけ考えても分からない。どんな過程を経たらあ
の領域に到達できるのか、なぜあの領域に至りながら自我を保ててい
るのか……スパンダムという男は、あまりにも未知な存在だった。

そして未知とは……科学者にとっては大好物だ。

「はあ、駄目じゃ……これは相当重症じゃぞ。本当にしばらく、他のこ
とは手につかん。アイツのこと以外考えられない」

知りたい、知りたい。もつとアイツのことが知りたい……いまはも
う頭の全てがスパンダムのことで埋め尽くされ、他のことを考える余
裕が一切ない。

あの至高の姿を思い浮かべるだけで口元がにやける。データ表を
見るだけで脳が蕩ける。

「はあああ……とりあえず、服を大急ぎで作って、それを渡すという名
目でまた会いにいこう。わしをここまで虜にした罪は重いぞ……絶
対にお前のことを、もつと知ってみせるからな……くふ、くふふふ」

静かな研究室の中で、わしの笑い声だけが響いていた。

1%のひらめきこそが天才の境界である

ベガパンクの猫のひとりであるリリスと関わりを持ち数ヶ月。アレ以後、リリスはなにかと理由を付けてグランドライン前半の海に来ており、3度ほど会っているが、どうも会うたびに面倒さが増している気がする。

しかし、さすがに世界最大の頭脳といわれるベガパンクのひとりだけあって、その面倒さを差し引いても大幅にプラスに傾くほどに有能だ。

服の改良も提示した通り5日で3倍の強度に仕上げてみせたり、さらにそこから30日足らずでさらに改良し、以前の服の10倍を超える強度の服を作ってしまった。

衝撃を吸収したりすることはできないことを除けば、防具としても極めて優秀だし、伸縮性も素晴らしく俺の動きにも付いてこられるという完璧な仕事にはケチのつけようもない。

そんなわけで俺としてはリリスに対してかなり高評価なのだが、そんなリリスから名指しでの護衛依頼が届いた。

正式に上を通じて届いたものであり、政府にとっても要人と言つていいリリスの警護を行うというのは、CPの管轄でもあるといえばその通りだ。

まあ、どちらかと言えば他のCPが担当すべき案件ではあるが、俺を指名してきて上がそれを了承しているのなら、出向くことは問題ない。

そんなわけで、指定された場所に剃刀で辿り着くと、一隻の船がありそのデッキでリリスが手を振っていたので、目の前に着地する。

「来たな、パンダ。さすがに早い到着じゃ」

「仕事だからな。それで、グランドライン前半の海でなにをするんだ？」

リリスはいつの間にか俺のことを「パンダ」と呼ぶようになったが、別に呼び方などどうでもいいので好きにさせている。

俺の質問に対し、リリスはニツと笑みを浮かべて告げる。

「簡単に言えば、お前に最初に会った時の研究の続きじゃな。いや、ここ数ヶ月お前の依頼の品を作成する以外、お前のデータを見てニヤニヤと過ごしていたら、いい加減にしろとしかたま怒られてな」

「……だろうな。むしろ、よく数ヶ月も見逃してもらえたものだ」

「それで、遅れまくっていた研究を再開することにしたのじゃが、研究に必要な品をいくつか収集しなければならん。さすがに、無から素材が湧いてくるわけでもなく、あちこち回って集めなければならないというわけじゃ」

「……それで？」

「ここまでの説明自体は問題ないが、わざわざ俺を指名してきた理由にはなっていない。そんなものは、海軍の護衛でも付けて回ればいいだけの話だ。

「じゃが、当たり前のことではあるが、あちこちの島を回ると時間がかかる。移動だけで何日も何日もかけるのは時間の浪費でしかないわけじゃ。ただでさえ、研究資金も時間も人手も足りないというのに……」

「数ヶ月サボっていた奴の台詞ではないな」

「それは、わしをそこまで夢中にさせたお前が悪い。それはともかくとして、わしはなんとか研究を効率よく進める方法を考え、思い付いたわけじゃ！ 陸海空すべてに対応して超速移動できる高機動パンダが居るじゃないかと——あだだだだだ、痛い痛い！」

とりあえず、魂胆は読めたが、それ以上にドヤ顔がウザかったので絶妙に力加減したアイアンクローを決めて、リリスの体を軽く持ち上げる。

「待て待て!? 弾ける！ 頭が熟れたトマトみたいに弾ける!! わしの頭がパーンってなったら、世界にとって大きな損失じゃぞ!？」

「……6体もいるんだからいいだろ」

「残機制じゃないから!? 6体居るから1体パーンしてもいいとか、そういうことじゃないから!!」

そのまま適当に締め上げたあとで解放してやると、リリスは痛む頭

を両手で押さえつつしゃがみ込みながら呟く。

「……お前が力加減を間違うとは思わんが、それでも0.1%でも間違ったら頭が物理的に弾けるかもしれないってのは、マジで怖い」

「というか、初めに会った時とずいぶん態度が変わったなお前……」

呆れながら告げると、リリスは軽く頭を振りながら立ち上がると、至極当たり前のような表情で口を開く。

「最初は、お前の許容するラインが分からなかったからな。じゃが、いまはもうほぼ完璧に把握した。こうやっておふざけ交じりで絡もうが、パンダ呼びしようが、お前はわしを殺したりせず許容するじゃろ？ 少なくとも、わしがお前にとって有益な存在であり続ける限りはな……」

なんだかんだで、やつぱりコイツは天才であり、その頭脳は認めざるを得ない。たしかに、リリスは短期間でほぼ完全に俺のラインを把握しており、逆鱗に触れる……俺が、リリスを殺そうと判断する領域には絶対踏み込んでこない。

時々ワザと逆鱗のすぐ近くを撫でることはあるが、逆鱗に触れることは無いと言いつけるレベルであり、まったくもって大したものだ。

「……それで、他に護衛は？」

「パンダがおるのに、足手まとい連れていく必要なんざないじゃろ。わしひとり連れて行ってくれればいいぞ」

「目的地は？」

「3ヶ所ほど、エターナルポースも用意してあるぞ」

そう言つて俺に三つのエターナルポースを渡してくるリリス……はあ、仕方ない。まあ、三つの島程度ならそれほど時間もかからず終わるだろう。

「なら、準備をして出発するぞ」

「ああ……おっと、そういえば、前にお前に頼まれた物も完成しているが、先に受け取るか？」

「もうできたのか？」

「元々わしらも似たようなものは使っておったしな……ほれ、これじゃ」

リリースが取り出したのは片手で持てるぐらいのサイズの長方形の箱であり、それを開けてみると俺の注文通りの品が入っていた。

「それひとつで500体の電伝虫の電波を登録できるし、電波の範囲も電伝虫と同じぐらいはある。登録した番号を押せばかけることも出来るし、強度もちゃんとお前が扱うことを考慮して作っておるから、無茶をしなければ壊れんじやろ」

「電源は？」

「内部で生成しているから、普通に使う分には充電のようなことは必要ないぞ。さすがに、連続通話していると3時間ほどで切れるが、1時間おけば再使用可能になる」

「……なるほど、注文以上だ」

リリースに頼んでいたのは、いわゆる携帯電話のようなものを作れないかという内容だった。この世界では電伝虫が主流なのだが、持ち歩くのにはあまり適さない。

子電伝虫はサイズこそ小さいが、電波の届く距離が短い。通常の電伝虫は電波は遠くまで届くが、持ち運ぶにはサイズがでかいし、生物なので高速移動するときなどに気を使う。

なので、携帯電話のような通信機があれば普段の仕事が楽になると、前回会った時に告げたところ、「そのぐらいすぐ作れるぞ？」との返答だった。

そして言葉通り、今回作って持って来たというわけか……マジで有能だなコイツ。

俺も脳を改造しており、思考速度や計算速度であれば負けないのだろうが、積み重ねた知識量……そしてなにより発明のセンスとでもいうべきか、発想力は遠く及ばない。

エジソンは「天才とは1%のひらめきと99%の努力である」と語ったというが、その1%のひらめきを持ちうるからこそその天才か……。

「うん？　もうひとつあるな」

「ああ、それはチエルシーの分じや。アイツもお前の補佐なのじやから、同じものを持ってた方がいいじやろうと思うてな……そういえば

今日はチエルシーがおらん」

「今回は、留守を任せているからな。まあ、あとで渡しておく」

二度目に会った際に、ポチとリリスは会っており、かなり気が合っていたというか……俺の話でやたら盛り上がっており、すぐに仲良くなった感じだった。

リリスはポチの筋肉繊維に興味津々で、ポチも基本人がいいのでいろいろ協力していたみたいなので、この通信機はその礼も兼ねてなのだろう。

「……ポチのデータは参考になったのか？」

「かなりな。チエルシーの方はかなり難しいが再現性があると言えるし、参考にすればいろいろな研究が進みそうじゃ」

「俺は？」

「お前の方はいまだにさっぱり分からん。データ見るたびに脳が破壊される思いじゃ。そんな異常変異しまくったお前を人間と区分していいかすら疑問じゃし……そもそも、お前、本当に少ししかデータ取らしてくれんじやろ。まあ、その少量のデータですら、数ヶ月駄目になったことを考えると、大量に取れたら年単位でサボってしまいそうじゃが……」

そう言つて苦笑するリリスを見て、俺も呆れつつ苦笑する。本当にマッドサイエンティストという言葉が似合う奴ではあるが、極めて優秀であり最初に会った時の言葉通り俺の注文は最優先で取り掛かってくれるので、俺にとっての利益は非常に大きい。

それを思えば、こうしてタクシー代わりにされるのも許容範囲だ。まあ、リリスもそれを分かっていた上で指名してきたんだろうがな……。

「それじゃあ、出発するか？」

「ああ……しかし、少し待って防護服を着る」

「防護服？」

「ゴリゴリのモンスターのお前と一緒にするな。わしは頭脳労働専門なんじゃから、生身で超速移動に耐えられるわけが無かろう。風圧とかもろもろに対する対策じゃ……」

「そうか、ならついでに耐久テストをしてやろう」

「……お前、マジで加減しろよ？ 本当じゃぞ？ 風圧で首がへし折れるとか嫌じゃからな……」

そう呟きながら宇宙服のような防護服を着たりリスを片手で担ぎ上げ、エターナルポースをひとつ見て、俺は船のデッキを蹴って跳躍、剃刀で移動を開始した。

化学反応とさらなる力への兆し

ふたつの島でいくつかの素材を収集し、最後となる三つ目の島に辿り着いた。この島は無人島のように、目的の品がある場所に向けてリリースと共に歩く。

いちおう名目上は護衛であるので見聞色で警戒はしているが、多少猛獣が居る程度で大した問題ではない。

「なにか危険なのはおるか？」

「いや、10mほどの獅子のような動物がいる程度で大した猛獣は居ない。俺の気配を察して島の奥に逃げたし、周囲は安全だ」

「……物凄い猛獣が居るって聞こえるんじゃないが、お前が護衛と思うと全く危険に感じんから感覚が狂いそうじゃな。それにしても、三つの島を回るのに半日もかかるとは……これを体験すると、船での移動が馬鹿らしくなるな」

まあ、あくまでリリースを風圧等で潰さないように加減した速度であり、俺ひとりならもっと早いのだが……。

「しかし、まだ目的の場所まで少し距離があるし、ここいらで休憩でもせんか？」

「今回の件の主導はお前なんだから、好きに決めればいい」

「じゃ、休憩で、ささ、パンダも座ってくれ。コーヒーを用意しているから、これでも飲むといい」

俺が了承するとリリースは満面の笑顔でどこからともなく取り出した水筒を取り出し、俺の方に差し出してきた。なんとも胡散臭い笑顔を浮かべながら……まあ、そもそも隠す気は無いらだろうが……。

俺は水筒を受け取りつつ、リリースに尋ねる。

「それで、なにが入ってるんだ？」

「その量で海王類でも眠らせる、超強力な即効性睡眠薬じゃ。しかも、無味無臭で、飲んでもまったく気づかんレベルの自信作と言っている」

「なるほど……確かに、飲んでも分からないな」

ドヤ顔で語るリリスの言葉を聞きつつ、水筒の中のコーヒーを飲む。ポチの淹れた物には劣るが、なかなか悪くない味だ。

そして感想を述べる俺に対して、リリスは明らかに不満そうな表情を浮かべる。

「……」

「なんだ？ いちおう言っておくが、睡眠薬やしびれ薬、毒などといったものは俺には効かんぞ。特に毒はマゼラン署長にも協力してもらって検証したから、現存するあらゆる毒が効かないことは確認済みだ」

「……いや、わしもそんな簡単にいくとは思っておらんかったが、多少は効いてくれよ、人として……」

「いかに肉体が強固でも、毒などで死んでは意味がないからな。その辺りは徹底的に対策している」

当たり前だが、肉体改造の際に毒や薬品に対する耐性は強化しまくっている。究極の肉体を得たとしても、そういった耐性の面で付ける隙があつては意味がない。

「はあああ、上手いかなのう」

「実際俺が眠つてたとして、どうする気だつたんだ？」

「どうもせんが？ 要望があるなら先に言っておいてくれれば、膝枕ぐらいしたぞ？」

「……」

「ああ……寝ている間にサンプル採ったりつてことか？ それやらたら、お前わしを殺すじゃろ？ 睡眠薬飲ませて眠らせるまでなら、『今後の課題が見えた』とかで見逃してくれるからセーフじゃが、そこより先に踏み込んだらライン越えるしな」

本当にコイツは、正確に俺のラインを把握している。事前に睡眠薬であると告げたのもそうだ。俺が聞かなくても、飲む前に告げるつもりだったのだろう。

その上で飲んで眠つたのなら、俺の感覚としては自身で了承して飲んで睡眠薬が効いたのだから、俺自身の対策不足であり、そのことでリリスを始末したりはしない。

だが、眠っている間に許可なくサンプルを採ったりというのは、俺にとつては極めて不快な行為だ。リリスはその辺りも完璧に理解している。

「しかし、予想はしていたが、薬品類は効かぬか……相変わらずふざけたやつじゃな」

「躊躇なく俺に対してそれを試そうとするお前も十分ふざけているがな……」

折り畳み式の椅子を出して座るリリスの前で、俺は水筒のコーヒーをもう一口飲みながら呟く。それはそれとして、この睡眠薬が海王類にも効くレベルなら、任務とかでも使い道があるだろうから、覚えておいて必要になったらリリスに譲ってもらおう。

そのまま休憩ということでも他愛のない雑談を続けていると、ふと覇気についての話になった。

「……わしではなく他の猫サテライトが覇気について研究したのじゃが、覇気には指紋のように個人個人に微妙に波長の違いがある。まあ、見聞色は個々の感覚によるものが大きく測定が難しいし、霸王色はそもそも所持者が少なすぎてデータが足りないので、武装色の話ではあるがな」

「ふむ、興味深いな……覇気と言えば最近若干伸び悩んでいるな。覇気は鍛錬では伸び辛く、実戦で磨かれるものだが、相手の覇気が大きいほど成長しやすい」

「お前の覇気を成長させられるレベルの使い手が少ないわけか……自分の覇気をぶつけるのでは駄目なのか？ 右手と左手に覇気を纏わせて打ち合わせるとか……」

「試したことはあるが意味は無かったな。己の覇気同士をぶつけても成長するような感じはない」

俺の覇気が大きくなりすぎており、身近で俺に次いで覇気が大きいポチ相手でもいまいち伸びが悪くなってきた。かといつてかつてのように武者修行をするわけにもいかないし、そもそもいまの俺の覇気を成長させられるレベルとなれば、本当に世界に数えるほどしかない。

リリスは俺の話聞いたあとで考えるような表情を浮かべ、右手の

中指で己の眉間をコンコンと二度叩く。それはリリスがなにかを思考している時の癖のような動きであり、少しするとリリスは思考をまとめたのか口を開く。

「先の話覚えてるのか？ 覇気には波長が存在する。これはいまザツと考えただけの推測ではあるが、その波長の違い、ズレと言つていいものがぶつかり合うことで刃を砥石で研ぐように覇気が磨かれる。覇気の成長のメカニズムをそうと仮定するのであれば……右手と左手の波長をズラせれば、己の覇気だけで覇気を大きくすることができるのではないか？」

「面白い仮説だな。たしかにソレが出来るのなら……極論、常に同格の覇気で鍛えられるということになるか」

リリスの仮説は面白い。同じように見えても覇気には個人の波長があり同じではないため、ぶつけ合うことで磨かれていく。自分の覇気を右手と左手でぶつけたところで、波長は同じであるため成長することはない。

だからその波長をズラせれば、己の覇気同士をぶつけても覇気を磨くことができる……。

「……なんなら道具を作ってやるから試してみるか？ 要は少しでも波長をズラせばいいんじゃない？ ……なら、別に複雑な仕組みは必要ない。動きを邪魔しない形状、そうじやな手首に着けるリングのような形状で作れば、右手と左手の波長を意図してズラせる」

「出来るのか？」

「覇気の研究に関してのデータは共有しておるし、波長を乱すだけなら大して手間もいらん。いま設計図も思い付いたし、頭の中で仮組もしてみた。問題は強度じゃが、幸いお前用の服を作った時の素材を流用できるし……割と簡単に作れるな。わしは覇気が使えんし、自分で検証できんが、試作品を作って渡してやるから、それで試して覇気が成長するようなら、強度を上げた正式な物を作ればいい。成長しないのであれば、覇気の成長要因は波長のズレには無いことが判明するから、別アプローチを試すという形じゃな」

もし、リリスの仮説が正解で、その道具を使うことで右手と左手の

覇気をぶつけて磨くことができるなら、いままで伸びが悪く効率が良くなかった実戦以外での武装色の鍛錬が現実的になる。

そうなれば見聞色以外は意図して鍛えることができるようになるわけか……素晴らしいな。

「頼めるか？」

「任せろ……その代わりに、また今度実験に付き合ってくれ」

「内容次第だが、いいだろう」

「よしっ、約束じゃからな！」

コイツと交流を持てたのは正解だったな。そういう意味では、親父にも感謝か……。

・***

リリースが求める素材は島の奥の洞窟にあったので、それを回収し終えて今回の収集は終わり……と、そう思ったタイミングでリリースが洞窟の壁を見て、首を傾げる。

そして、壁をコンコンと手で叩いたりしてなにかを調べているような動きを始めた。

「……ふむ、音で分かるほど薄くは無いか……」

「どうした？」

「いや、この部分に補強したような跡があつてな。奥に隠し部屋でもあるのかと思うたのじゃが、よく分からんな。いまは機材も持って来ておらんし……」

「ふむ、少し待て」

リリースの言葉を聞いて、俺は見聞色を深く研ぎ澄ます。すると、周囲の形状、周辺の小さな石ころの形まで手に取るように分かり、壁の先になにかがあるかも把握できた。

「空洞のようなものがあり、複数の箱などがあるな」

「リーダーみたいで便利じゃな……ふむふむ、興味があるな。よし、パンダ。やってくれ！」

「やれやれ、好奇心は猫を殺すと言うぞ？」

「猫じやからか？ ははは、よい言葉じやが好奇心が殺すと言っても
サテライト
解釈は様々じやろ。果たして好奇心に身を委ねた結果に死ぬのか、好
奇心から目を逸らした結果死ぬのか……科学者がどちらを選ぶかは
分かり切った話じやがな」

「ふっ……確かにな」

ドヤ顔で語るリリスを見て苦笑しつつ、壁に軽くデコピンを当て
る。すると大きな音と共に壁が割れ、その先にあったものが見えた。
「おおおお、財宝じやないか！ かなりの量じやな……昔の海賊辺り
が残したものか？ くふふふ、コレはかなり研究費用の足しになりそ
うじや、運がいいのう……パンダ、分け前は？」

「いらん。お前の好きにしろ」

「さすが、パンダじや！ そう言ってくれおと思っておったわ！」

「……それは別にいいが、その量をどうやって運ぶつもりだ」

「スーパ―運送パンダが居るから大丈夫——あだだだだだ!? や、や
めろ、頭を攻撃するな、馬鹿になったらどうする……痛い痛い!」

ドヤ顔がウザかったので、もう一度アイアンクローをして持ち上げ
ておいた。

不要ならまとめて消してしまえばいい

大海を進む船の上……普段は剃刀での移動が多いので、何気にこうして船に乗って移動するのは新鮮な気分である。

それにしても、メンバーが長期潜伏で減っているせいか、現場に出ることが増えてきた気がするな。まあ、今回の件に関しては、ルッチたちが居たとしても俺が出向くことになっただろうが……。

「……そもそも、新世界は俺の管轄じゃなくて、お前たちの管轄のはずなんだが……」

「ははは、五老星から直々の指名ですし仕方がないですよ」

「それにスパンダム殿は、実質的にCPの長みたいな感じだと、うちの総監も言っていましたしね」

俺の呟きにCPOのマハとゲルニカが答える。そう、俺は現在ポチを連れて新世界のとある島に向かっていた。理由はマハが語った通り、五老星からの直々の指名任務だ。

どうも場合によっては広範囲での破壊活動が必要になるため、俺が呼ばれたらしい……俺は司令官であって、解体業者ではないんだが……。

「それにしても、わざわざパドルシップで行くということは、特殊な場所なのか？」

「ええ、複数の強い海流に囲まれている関係で普通の帆船ではたどり着けない島です。元々は小さな国のある普通の島だったみたいですが、地殻変動の影響で一種の結界状態となり、そのまま衰退して無人島になったとのことですよ」

「なるほどな……こうしてCPOと俺が駆り出される辺り、空白の100年に関わる島ということか」

いま乗っているパドルシップもそうだが、様々な技術の発展でいままで見つからなかった島が見つかることにもなり、政府が毛嫌いする空白の100年に関わる島もたまに発見される。

それを調査して、報告……五老星の判断如何によっては、情報にな

りえるものを処分……つまるところ徹底的に破壊というわけだ。

「まあ、判断は五老星が行うんだろ？　破壊が決定するまで、俺にはさほど出番はなさそうだな」

「スパンダム殿なら、その辺の決定権持つててもおかしくない気がするがね」

「空白の100年に関しては、資料なんかもないから判断のしようがない。資料室にある資料はすべて記憶しているが、その辺は意図的に綺麗に消されているからな。無いものは知りようがないし、興味もない」

冗談っぽく告げるゲルニカに淡々と返答する。俺が空白の100年に関して独自判断出来たら、それはそれで問題だと思うが……。

「……スパンダム殿？　聞き間違いだと思いたいんですが、いま、資料室の資料をすべて記憶してるって言いませんでしたか？」

「しているが？　わざわざ調べものをしに資料室に行くのも面倒なのでな。エニエスロビーに存在するものは全て記憶しているし、追加する情報に関しても一度すべて目を通して記憶している」

「……だから、毎日あんな山のような書類があるんですね」

「書類が多いのは、お前たちほかのCPがいろいろ回しまくってくるせいでもあるんだがな……」

「ちなみに今日の書類仕事は？」

「終わらせてから来たが？」

「……やっぱりなあ、この人に新しい役職作ってCPのトップに据えるべきだと思っただよなあ……」

そう呟き遠い目をするマハを横目に見つつ、海風が心地いいのか尻尾もとい髪を揺らしているポチに声をかける。

「ポチ、コーヒーを頼む」

「はいー」

まあ、島に到着するまでしばらく時間はあまるし、のんびりするとしよう。

・***

たどり着いた島は、なるほどかつては小国があったという通り、それなりの規模の廃墟があった。それに戦争にでも使われたのか、大きな目の砦もあり、コレを全て調査というのは中々骨が折れそうだ。

「スパンダム殿、どうしますか?」

「……なぜ俺に振る?」

「スパンダム殿は司令官ですからね」

「CP9のな……とりあえず、廃墟を全て見る必要はない。重要なものがありそうなのは古城と砦……人員を分けて調査だな。文献なども含め古代文字が書かれているものを発見したら連絡。ある程度の情報が集まったら五老星に映像電伝虫で報告して判断を仰ぐ」

「了解!」

どちらかと言えば、協力者として来ているはずの俺がなぜ指揮を執っているのかという疑問はあるが、CP0に不満は無いよう指示通りに素早く動き始めた。

今回は空白の100年に関わる調査かつ、場合によっては処分が必要ということもあり下級役人を大量に導入して調査は難しい。

情報を得る人員も絞らなければならぬので、船員も最低限で、殆どの船員は船の中で待機である。

なのでマハとゲルニカが古城を、俺とポチが砦を調べることにして調査を開始した。

「……砦の位置を考えるに、島内での戦争を想定というよりは、外部から来る敵を迎え撃つためと思えるな」

「他の島と戦争していたのかもしれないね。ただ、砦自体に戦いによるものと思えるような傷はほぼ見当たりませんね」

「造りはしたが、使う機会は無かったのかもしれない……紙などは流石に残ってはいないだろうし、石碑あるいは壁画のようなものがあるかどうかだな」

ポチと軽く言葉を交わしつつ、草木に覆われた砦に向かって歩き出した。

・***

2時間ほど調査をして、いくつかの古代文字が書かれた品を発見し持ち帰り、CPOのふたりと合流地点で落ち合う。

古城は砦に比べて怪しげなものが複数あつたみたいで、俺たちよりもマハたちの集めた品の方が明らかに多い。さらに運び出すのが困難な石碑や壁画も城にはあつたみたいだ。

『……………苦勞だった』

映像電伝虫により確認をした五老星の声が聞こえる。五老星が古代文字を読むことができるかどうかはわからないが、文字が読めなくとも壁画などでも判断できる。

そして、やや重々しい声色……………これは処分だな。

『どうやらその島の文明は、存在すべきではないもの……………我々はそう判断した。よって可能な限り古城や砦を含め抹消しろ』

やはり処分に決めたらしい言葉を聞きつつ、俺は近くに居たゲルニカに声をかける。

「ゲルニカ、処分の方法は決まっているのか？」

「はい。あの船には爆薬や弾薬を大量に積んでいますので、それを用いて……………さすがにすべては無理でしょうし、古城と砦を破壊する形ですな」

「……………なるほどな」

ゲルニカの返答を聞いて、俺はチラリとポチに視線を向ける。理由は単純だ。数年前にポチと交わした会話を思い出したから……………。

まあ、ポチは日頃からよく俺に仕えてくれているし、機会が巡ってきたなら要望に応じてやるのもいいか……………。

「マハ、少し通信を代わってくれ」

「え？ あ、はい。どうぞ」

マハに一声かけて電伝虫の受話器を受け取る。

「スパンダムです」

『どうした？』

「城や砦以外にも可能な限りすべて処分、という認識で構わないので

「しょうか？」

『構わんが？』

「では……島ごと消してもかまいませんか？」

『……………は？』

元々海流の関係でパドルシップなどでなければたどり着けない島。見聞色で探ってみても人間が住んでいる気配はない。

大量に用意しているとはいえ、所詮船に積める程度の爆薬などでは、破壊できる範囲にも限界がある。そしてなにより、時間もかかる……なら、島ごと消してしまっただろうが手っ取り早いだろう。

「爆薬などでは破壊できる範囲にも限界がある。この島が政府にとって重要な島ならともかく、そうでないなら島ごと消してしまっただろうが、予想外の場所になにかが残っていたなどという事態も防げていいでしょう」

『それは、その通りだが……か、可能なのか？』

「ええ、このぐらいの大きさの島であれば問題なく」

『そ、そそ、そうか……では、お前に一任する』

「了解」

五老星の許可も得たので、俺は受話器をマハに返したあとでポチの方を向いて指示を出す。

「ポチ……アレをやる。だが、お前も知っている通りアレは細かな調整が辛い。船を出航させ、お前の判断で問題ないと思える位置まで離れたら通信を入れろ」

「はい！ 了解です！」

ポチは俺がなにをしようとしているのか理解しており、ひどく嬉しそうに尻尾……髪の毛を振りながら、戸惑っているマハとゲルニカを連れて船の方へ移動していった。

さて……しかし、本当に久しぶりに使うな。くれぐれも力加減を間違えないように気を付けなければ……。

黒き太陽の審判

チエルシーの指示を受けスパンダムひとり島に残して出航したパドルシップ。そのデッキに立つチエルシーにマハが話しかける。

「チエルシー殿……こんなに離れるのですか？」

「はい。もう少し……このぐらいで大丈夫だと思います。錨を下ろしてください。波が立ちますので……予想より大きい場合は、私が船を持ち上げて月歩で上空に移動するので安心してください」

「……は、はい」

チエルシーの言葉に戸惑いながらマハはスパンダムの居る無人島に視線を向ける。すでにかなり島からは離れており、スパンダムの姿は見えない。

果たしてこれほど離れる必要があるのかと、そんな風にマハが考えたタイミングでチエルシーは通信機を取り出しスパンダムに連絡を入れる。

「隊長。こちらは問題ありません」

『分かった』

五老星に繋がった映像電伝虫を持つゲルニカもマハの隣に並び、無人島の方向に視線を向ける。これから、起こるであろうことを一瞬たりとも見逃さないために……。

そうして通信を終えて、ふたりの近くに來たチエルシーにマハが問いかける。

「……チエルシー殿、アレというのは……」

「すぐにわかりますよ」

そう言つてチエルシーが微笑むのとほぼ同時に、無人島からスパンダムが月歩を使って高く跳躍する。そして上空で拳を握り締めた瞬間——世界が変わった。

「……これはっ!？」

「覇気？……これが……こんな凄まじいものが……」

スパンダムから放たれる圧倒的な覇気に雲は消し飛び、大気は王者

のために退く。両腕に迸る覇気はあまりにも強大で、腕だけにとどまらずまるで漆黒の翼のように広がり、空を黒く塗りつぶす。

まるで世界が揺れているかのような錯覚を覚えた。空気が震えている。まるで、スパンダムあまりに強大すぎる力に、空間そのものが悲鳴を上げるかのように……。

「右手の六王覇銃……左手の六王覇銃……」

静かにチエルシーの声が響く。その声は美しく、まるで敬虔なる信者が神への賛美歌を歌っているかのようなようだった。

視界の先ではスパンダムの腕に世界の終わりのような覇気が収束し、すべてを塗りつぶす漆黒の輝きを放つ。

やがて迸る力は臨界点を迎え——黒天は落ちる。

「放たれたふたつの衝撃は、交差点でぶつかり……」

スパンダムが腕を振るうと、その腕から膨大な覇気を纏った球体状の衝撃がふたつ放たれた。本来ならそれはとてつもない速度で飛来しているはずだが、その光景を見ているゲルニカやマハにはまるでスローモーションのように見えた。

その理由は単純だ。両者ともそれをただ瞳に映しただけで、死を強く意識した……いま、ふたりの……いや、デツキに居る全ての者と映像を通してみている五老星たちもまた、等しく死を強烈に感じ、死の直前の如く引き延ばされた時間の中にあつた。

「……そして、その力を何倍にも高めながら強烈に反発し合い、すべてを消し去る衝撃となって——空間に炸裂する」

「あ、ああ……」

それは誰からこぼれたのか、まるで祈るような、継るような声が聞こえた。上空から落ちるふたつの漆黒の球体は、まるで神が下す審判のように神々しく見えた。

ふたつの漆黒の球体は島の上空でぶつかり、凄まじい反発で周囲に黒い稲光をまき散らす。

「……アレが……隊長の——じゅうにしんしやう十二真衝です」

そしてすべてが収束するかのようない瞬の静寂のあと、空間は爆ぜ——全てを消し去る漆黒の太陽が顕現する。生命も無機物も、すべて

を等しく無に帰す破滅の光は、瞬く間に広がり、無人島を呑み込んだ。遅れて響く轟音と、相当の距離があるにも関わらず船を大きく揺らす衝撃……破滅の光が消えたあと、そこにはもう……なにも無かった。

島の痕跡など欠片もなく、ただ海に黒い大穴が空き、そこへ周囲の海水が流れ込んでいた。

「……………あ……………あ……………」

「……………こんな……………これを……………個人で……………」

マハとゲルニカは目にしたあまりにも凄まじい一撃に体を震わせ、上手く言葉を紡ぐことさえできていなかった。

他の船員たちも同様であり、震えている者、気を失っている者、両手を合わせ狂ったように祈っている者と、様々だった。

そんな中で、ひとり、チエルシーだけはうつとりとした幸せそうな表情を浮かべていた。

「……………やっぱり、隊長の十二真衝は、すごく綺麗ですね」

彼女にとっては絶対の信仰を捧げるスパンダムの大なる力の一端を目にできるのは、心からの幸せでありしみじみと噛みしめるように笑みを浮かべていた。

そんなチエルシーの前に、スパンダムが着地する。

「……………完了だ。やはり、これは加減が難しいな。ポチ、船に被害は？」
「衝撃で多少揺れましたが問題ないと思います。それに前よりかなり加減できてたように思えますよ」

「まあ、今回は抑えめだったからな。もう少し島のサイズが大きかったら、加減はより難しかったかもしれない」

チエルシーに軽く確認したあとで、スパンダムは呆然としているゲルニカとマハを見て首を傾げつつ、ゲルニカが手に持つ映像電伝虫の受話器を持った。

「五老星、島の処理完了しました。念のため、波が完全に引くまで見届けてから帰還します」

『……………』

「……………五老星？」

『……あ、ああ、ぐっ、ぐっ、ぐっ苦労だった』

「ぐくぐく自然に任務完了報告を行うスパンダムだが、五老星たちは映像電伝虫の先で腰を抜かしており、かなり動揺しながらの返答だった。」

それでも、さすがは世界政府の頂点に立つだけあって、すぐに動揺を鎮めながらスパンダムに尋ねる。

『……スパンダム。いま、お前は抑えて撃つたと言ったな？』

「ええ、言いましたか？」

『あの一撃は、本気ならどのぐらいの規模になる？』

『……いまの5倍ぐらいですね』

『ぐぼっ……そ、そうか……今後いまの一撃を撃つ際には、可能な限り事前に我々に連絡をとり、我々の許可を得てから行うようにしてくれ』

「了解」

その後いくつか確認をしたあとで、通信は終わりスパンダムは受話器を置く。

「聞いての通りだ。確認を終えたら帰還するぞ」

『……あの、スパンダム殿？ 実は本名はプルトンって言いませんか？』

「ウチの部下と同じようなことを……誰が古代兵器だ」

「いやいや！ むしろ、古代兵器ですって言ってくれた方が納得できますよ!! 我々、いま起こったことを脳が全然受け入れてないんですけど、なんならいまだに夢だと思ってますけど!?!」

必死の形相で訴えるマハだが、スパンダムは特に気にした様子もない。なにせ、スパンダムにとっては別に本気の一撃というわけでもなく、今回撃つたのも以前にチェルシーが「また見たい」と言っていたのを思い出したという、ただそれだけの理由だったから……。

「ポチ、コーヒーを頼む」

「はいー!」

「なんでそんな日常みたいな空気出してるんですか！ 寿命縮みましたからね、私たち!!」

「……あれが……神の審判……神は実在したのか……」

「ほらっ、ゲルニカなんてまだこっちに戻ってこれてないんですからね!？」

まったく気にした様子もなくチエルシーの淹れたコーヒーを飲みながら新聞を読むスパンダムに対し、しばしまハの悲痛な叫びがデツキに響いていた。

合同会議と七武海

エニエスロビーの長官室でいつものように大量の書類を処理する。数多の報告書、任務の割り振りに各種要望……食堂のメニューにタコライス？ 予算内であれば許可、割り振った予算内なら好きにすればいい。

「長官、戻ったぜ」

「……任務完了だ」

「ああ、ジャブラとフィズか、ご苦労。報告書の提出が済んだら指定時間までは自由待機でかまわない」

「了解」

任務を終えて長官室に来たジャブラとフィズに、引き出しから報告用の用紙を取り出して渡す。なぜかCP9のメンバーは長官室で報告書を書くので、専用のデスクも用意したぐらいだ。

まあ、提出が早いのはメリットなので俺としては問題ないが。

「それにしても、最近は革命軍に関わる任務が多いな。今回も革命軍支部長の暗殺だったしな」

「活動が活発になつているともいえるし、革命軍以外の事件が少ないともいえる……まあ、俺も、午後からは海軍本部で合同会議だがな」書類を処理しながらジャブラの言葉に答える。革命軍は年々規模を広げており、必然的にソレに関する任務も多くなる。

原作においてもジャブラが革命軍の支部長の暗殺数を自慢げに語っていたりもしたし、事実として世界的に拡大しているのだろう。

「革命軍ねえ……長官は、どう思う？」

「興味はないな。どんな組織でも国でも、完全な一枚岩などということがあり得ない以上争いは起こりうる。思想なんてのは、立ち位置が変わればいくらでも変わる。是非など考えるだけ無駄だ」

フィズの言葉にも簡潔に返答する。俺は革命軍にもその思想にも興味はない。ただ、立ち位置で言えば俺は革命軍にとつて倒すべき敵か……まあ、好きにすればいい。俺の前に刃を持って立つなら殺すだ

けだ。

そんなことを考えていると、書類の処理は全て終わったので、俺はデスクから立ち上がりジャブラとフィズに声をかける。

「俺は少し出てくる。ふたりとも、報告書が完成したらポチに渡しておけ」

「どこいくんだ？」

「割り振り切れない任務があるからな……いまから、革命軍の支部長を3人ほど抹殺してくる。昼前には戻るから、なにかあればその時に言え」

「昼前……あと2時間もねえぞ？」

「スムーズにいけば1時間もかからん……ポチ、留守は任せるぞ」

「はい！」

俺がデスクから立ち上がると同時に、ポチは衣装掛けに掛けておいたジャケットを用意しており、それを受け取って外に出る。

幸い三つともそれほど距離は無い。午後からの合同会議もあるし、さっさと終わらせるか……。

・***・

剃刀で雲の上を高速移動して10分ほど、最初の島に到着したので降下はせずに見聞色の範囲を広げる。島の地形、建物……支部の場所を確認。

報告にあつた暗殺対象の支部長は建物の屋上に居るようなので、早く終わらせられそうだ。

そのまま俺は空中で指に覇気を纏わせ、デコピンをする要領で弾く。

「指銃・飛撥」

別になんと言うことは無い超遠距離用の撥だ。飛んだ指銃が、支部長の眉間を正確に撃ち抜いたのを見聞色で読み取る。数秒待つて確実に死亡したのを確認して、次の島に向かう。

飛撥は便利だが、威力に難があつて壁などがあると仕留めきれない

場合がある。今回は建物の屋上に居たので使ったが、建物内の場合ももう少し時間がかかっただろう。

すぐに剃刀で移動を開始して、次の島へ向かう。この距離なら……7分で着くな。

ふたつ目の島のターゲットは、どうやら支部内にはおらず近くにある街に居るみたいだったので、さすがに狙撃するわけにはいかない。誤差程度に照準がズレれば一般市民に当たる可能性もある。

島に降下した俺は、ターゲットの居る街に入る。しかし、この黒スーツは目立つな。政府の人間ですって宣言してるようなもんじゃないか……まあ、ジャケットを脱ぐだけで分かりにくくはなる。

見聞色でターゲットを見つけ、人ごみに紛れて接近……すれ違い様に相手が知覚できない速度で、指銃で心臓を撃ち抜いて終わり。

ターゲットは少しの間己の異常に気付かず歩き続けてから、血を吹き出して倒れた。上がる悲鳴、倒れたターゲットに周囲の視線が集まる中で、俺は気配を消して剃で離脱。街からある程度離れ、再度見聞色でターゲットの死亡を確認してから剃刀で次の島に向かった。

三つ目の島の革命軍支部は……地下か、面倒だな。かなり広い作りな上、ターゲットも奥に居る。

残念だ……俺はルッチとは違い殺人を楽しみたいわけでもない。ターゲットだけを速やかに殺せるなら、他を殺す気は無い。

だが、別に……ターゲット以外を巻き込まないという信念があるわけでもない。

ターゲットが居る部屋の直上となる場所に移動した俺は、地面に軽く震脚を放つ。大きな揺れと共に地面には亀裂が入り、見聞色ではターゲットの居た部屋を含めた複数の部屋で崩落が起こり、多くの間が押しつぶされるのを確認できた。

ターゲットは……押しつぶされて死んでるな。まあ、地下に施設を作る以上、地震で崩落することも……巻き込まれて死んだ奴は、運が悪かったということだ。

時計を確認するとまだ45分しか経っていない。思った以上に早く終わったな。午後の会議以外にこれといって急ぐ仕事もない。

……近くに町があるみたいだし、ポチたちに土産でも買って帰るとするか……。

近くの町に移動してみると、なるほど……革命軍がそれなりの規模の地下施設を持つだけあって、なかなか貧困の厳しそうな町だ。

ただ、町の中で富と貧の差が大きいという感じではなく、町が全体的に貧困という印象だった。裕福な者は別の町に住んでいるのだろう。

「そういや、お客さん。さっき地震があったのを知ってるかい？」

「ああ、そういえば少し揺れたな」

「そうそう、この辺じや珍しいからビックリしちゃったよ。まあ、大した揺れじゃなかったからよかったが」

菓子などを取り扱っている店を見かけて、店主と軽く雑談をしつつ土産の購入をする。だがそこでふと、視線を感じて振り返ってみる。

離れたところから物欲しそうな顔でこちらを見ている複数の子供たち……浮浪児というほど身なりは悪くないが、菓子を買って与えられるほど裕福ではないのだろう。

「……あと十箱追加でくれ」

「十箱？　大量だね。ウチとしてはありがたいけどね……はいよ」

土産とは別に菓子を十箱受け取った俺は、遠巻きに見ていた子供たちの下に近づく。俺の見た目のせいが一瞬ビクツとした子供たちだったが、目の前に菓子の入った箱を置いてやるとそちらに視線が集中した。分かりやすいものだ。

「……分けて食べるといい」

「……え？　い、いいの？」

「ああ、単なる気まぐれだ」

「あ、ありがとう……」

簡潔に告げたあと、軽く手を振ってその場から去る。実際口にした通り単なる気まぐれだ。たまたま目に付いた相手に施しをして、多少の自己満足を獲得する。俺にとっての善行なんてのは、それだけで十分だ。

・***

エニエスロビーに戻ってポチたちに土産を渡したあと、昼飯を食べながらマリنفォードにある海軍本部へやってきた。

今回は革命軍に対する合同会議であり、世界政府三大機関のトップのひとりでもある俺も出席する形だ。とはいっても、基本的には海軍が主導となるため、ほぼ話を聞くだけではあるが……。

マリنفォードの港に到着すると、同じように着いた船から顔見知りが下りてくるのを見かけたので、そちらに移動して声をかける。

「マゼラン署長、ご無沙汰しています」

「おお、スパンダム殿。久しぶりですな」

「以前は検証に協力していただき、ありがとうございました」

「いえいえ、私としても非常に勉強になりました。まさか、私の毒が一切効かないとは……」

マゼラン署長もインペルダウンのトップであり、俺と同じように合同会議のためにやってきたのだろう。以前毒耐性の検証に付き合ってもらったお礼を告げたあと、軽く雑談しつつ大会議室へ向けて海軍本部内の廊下を歩く。

「ドクドクの実は確かに強力ですが、物理的なダメージは発生しにくいですし……例えば鉄の壁のようなもので遮断されてしまった場合、相手に毒が届かないという事態が発生しかねませんし、そういった対策は必要かと思えます」

「確かに、機動力という点にはあまり自信がありませんし、地形によっては逃げられてしまう可能性もありますね。立場的に実戦を行うことが少なく、お恥ずかしながら盲点でした」

「強力な能力であつても相性というのには存在しますからね。可能かどうかはわかりませんが、毒を硬く凝固させて物理的な武器として利用したりできたりすると、いい武器になりそうですね。切り札を使えば別でしょうが、アレはマゼラン署長の消耗も大きいでしょうしね」

「そうですね。毒の巨兵は、消耗の大きさもありますが、それ以上に周辺への被害が大きいので、気軽に使うわけにもいきませんしね」

マゼラン署長のドクドクの実は確かに強力だが、原作においてドルドルの実との相性の悪さで足止めを喰らったりもしていた。

毒の性質上貫通性が無く、壁に阻まれてしまうのが弱点と言えるだろう。ただ切り札のベノムデーモンは、無機物も汚染し侵食する性質を持つので、別ではあるが……。

「ベノムデーモンの毒を、コントロールして少量で行使できるようにするのが一番いい気もしますね」

「能力の鍛錬に力を入れてみますか……：スパندانム殿には効きませんでしたかね。なかなかの絶望感でしたよ」

「ははは」

マゼラン署長とは互いに司法の島と監獄のトップということもあって、日ごろから電伝虫などでやり取りする機会も多いので、それなりに関係は良好だ。

対して海軍の元帥であるセンゴクとは、あまり関わる機会が無い。意外と連携しないというか、連携して当たるような仕事が少ないのも要因のひとつだ。

まあ、海軍は海軍という組織としてある程度完結しているというのでも要因ではあるが……。

「そういえば、ご存知ですか？　今回は王下七武海にも召集がかかっているとか……まあ、こちらは我々とは別の場所で会議を行い、センゴク元帥が対応するらしいですが……」

「ああ、小耳には挟みました。時間もズレていますし、会う可能性は低いでしょうが……まあ、そもそも、素直に召集に応じるのかどうか……」

マゼラン署長が口にした内容は俺も耳に挟んでいた。今日俺たちの会議のあとで七武海も同様に会議を行うらしい。

尤も、気まぐれな七武海が素直に召集に応じるわけでもなく、何人来るかは不明だが……おそらく、くまは来るだろう。革命軍と繋がりがあのだし、政府側の動向は気になるはずだ。

後は分からないな。ミホークは原作で来ているのが珍しいみたいだな発言があつたので来ない可能性が高い。逆にドフラミンゴは割と、

招集に応じているような雰囲気があった。

普通に考えれば時間がズレているので遭遇することは無いはずだが……過去の経験的に、こういう場合は……遭遇しそうだな。

海軍元帥との会話

海軍本部にある大会議室。さすがに海軍という巨大組織の本部にある会議室だけあって相当の広さであり、中にはすでに大勢の将校などの姿が見えた。

今回の会議は海軍主導なので当然海軍側の出席者が大多数である。ただ、もちろん合同と冠して俺やマゼラン署長が呼ばれているように、海軍所属ではない者もそれなりに居る。

俺に軽く断りを入れたあと、マゼラン署長はインペルダウンとは別の監獄を預かる者や監獄関係の役人が居る席に向かい。俺もサイファーポール関係の者が集まっている席に移動する。

「ご苦労様です。スパンダム殿……どうぞ、こちらの席に」

「いや、そこはお前が座るべきじゃないのか？」

「ははは、スパンダム殿を差し置いて私が座るわけにはいきませんよ」
そこには各CPの主官とCPOの総監が居て、俺が近づくとCPO総監が席を勧めてきた……ど真ん中の席をだ。普通そこは、CPの代表的な位置の者が座るべき場所であり、最も立場が上のCPO総監が座るべきなのだが……CPO総監は、俺に席を勧めて自分はさっさと他の席に座ってしまった。

他のCP主官を見ても、俺がそこに座ることに異論は無い様子だったので、軽くため息を吐いて席に座り、ポチも当然の権利とばかりに俺の隣の席に座った。

元々2席空けてあったので、CPO総監あたりがあらかじめポチも込みで準備していたのだろう。

「スパンダムさん、いくつか相談したいことがあるんですが、会議後に時間って作れますか？」

「ああ、今日は他の仕事もない。ほかにも希望する者が居れば時間は用意する」

「では、ウチも」

「私も、少々任務の件で」

「いちらも……」

……多いな。まあ、電伝虫による通信では盗聴等を警戒して相談しにくいこともある。盗聴防止が出来る白電伝虫は希少なので、すべての部署にあるわけではないしな。

「まあ、CP内での意見のすり合わせも必要か……ポチ、合同会議が終わったあとで、別の会議室を借りられるように要請しておいてくれ」「了解です」

うむ。しかしこれ、合同会議が終わったあとでCPの会議を行って……終わるタイミングが、七武海が来る時間にかち合いそうな気がするな。

あくまで七武海が時間を守って招集に出てきたらという話ではあるが……いちおう、本来は七武海が招集に応じるのは義務のはずなのだが、我が強い連中ばかりだからなにかと理由を付けて不参加も多いみたいだ。

そうこうしているうちに、センゴク元帥を始めとした海軍でも立場の高い者たちが入室してきた。こことは離れているが、三大将は……黄猿だけ参加みたいだ。

センゴク元帥たちが席に着くと、司会進行を行う者が正面にあるスクリーン前に立ち、合同会議が始まった。

・***

合同会議自体は、非常に退屈なものだった。新しい情報は殆どなく、基本的に革命軍やドラゴンに対してのおさらいといった感じの内容だった。

他部署も含めて認識の均一化というか、そういうものを目的とした会議なのだろうが、既知の情報ばかりなのは思いのほか退屈だった。

……まあ、会議とは概ねどれも退屈なものだと言ってしまえばそれまでではあるが……。

合同会議が終わった後は、別室に移動してCPでの会議も行う。まあ、これに関しては会議というよりは各CP主官の相談を聞く感じ

ではあったが……。

やはり革命軍の動きが活発化していることもあって、CPも忙しくなっているの、それぞれなかなか苦労しているらしい。

こちらの会議も終わり、CP主官などを先に帰らせる。ポチには船を手配しておくように伝え、俺は急遽会議室を貸してもらったことをセンゴク元帥に一言礼を言うために元帥の部屋に向かった。

七武海との会議が始まっていた場合は後日書面で礼を送るつもりだったが、まだ大丈夫なようだったので、直接会って礼を言うことにした。

快く部屋に迎え入れてくれたセンゴク元帥に、軽く頭を下げた礼を伝える。

「センゴク元帥、今回は急な申し出にも関わらず会議室を貸していただき、ありがとうございます」

「いえ、お力になれたようならなによりです。そういえば、スパンダム長官とはあまり話したことがありませんでしたな」

「そうですね。意外とCPと海軍が合同で事に当たる機会が少ないですからね」

「せっかくの機会ですし、時間があるようならお茶でも一杯いかがですかな?」

「そうですね……では、お言葉に甘えさせていただきます」

遠回しにこの機会に少し話をしないかと提案されたので了承する。こちらとしても断る理由は無いので、ポチに軽く連絡を入れてからセンゴク元帥を向かい合うようにして座る。

「……さて、スパンダム長官は革命軍についてどう対処すべきだと考えますか?」

茶を一口飲み静かに告げるセンゴク元帥……その瞳の奥には油断ならない光があり、こちらを試しているような空気を感じた。

センゴク元帥にしてみれば、俺は世界三大機関トップであり、先の会議の席でも実質CPの代表のような位置に座っていた存在ということもあり、どんな相手か量ろうとしているのだろう。

「……危険視するべきなのは、革命軍そのものよりも拡大する思想の

方だと思えますね。果たして革命軍に参加ないし反乱軍として国と戦う者たちの中で、真に世界や国をよく知った上で加わっている者がどれだけいるか……組織でも国でも、管理する側の視点と現場の視点は同じでない。同じものを見ていたとしても見え方は変わってきます」

「我々のような管理側の立場としても、現場との認識の相違には気を使う必要がありますね」

「ええ、視点が違えば白いものでも黒く見えるでしょう。一部の者の思想に煽られているだけの者が大多数ですらある。我々が真に行うべきなのは、革命そのものを悪と断ずることではなく、熱に浮かされる者たちに冷や水をかけ、考える時間を与えることかもしれません」

「……消すべきは革命軍ではなく、扇動している者というわけですか？」

「反乱や革命は、ある程度は起こりうるものでしょう。それを全て否定する意味は無い。問題は、本来各国という範囲で終わるはずのそれを、世界規模に広げている者がいる……まあ、結果として私の意見は、海軍や世界政府の見解と変わりませんよ。討つべきは革命家ドラゴンと、そう言うことです」

俺個人として興味はほぼ無いが、革命軍を終わらせる方法がドラゴンを倒すことであるというのは分かりやすい。

結局のところドラゴンが居なければ、世界規模の革命軍という歪な組織は機能しえない。俺の知る限りで、ドラゴン以外に革命軍をまとめられるカリスマを持つ存在は居ない。

「……まあ、シンプルながらそれが一番難しいのですけどね」

「そうですね」

「逆に問わせていただきますが、センゴク元帥にとって革命軍は……悪と呼ぶべき存在ですか？」

「……難しい質問ですな。すべてが悪であるとは、断言できないかもしれないですね」

多くのものが頭を悩ませているのはそこだろう。海賊のように明確な犯罪者というわけでもなく、革命軍という言葉で括るには事情も

背景も違い過ぎる。

望んでそうなった者と、そうなるしかなかった者とはまた違ってくる。だが、戦場に立てばそれらは革命軍という同じ括りだ。

「立場が違えば正義も違う。いかな善政を敷いていたとしても、全ての人間を幸せにできるわけではない。結局のところ、どこにも真の意味での正義なんてものは存在しないのかもしれないね」

「ははは、それは絶対正義を背負う者としては、耳の痛い言葉ですね」「万人が納得する正解なんてないからこそ、正義なんてのは各々の基準でいいのでしょうか。少なくとも私はそうしているつもりです」

「……闇の正義、ですか？」

「綺麗事だけで成立する世界など、おとぎ話でも果たして存在するのか……私は私の基準で進むだけです。通り道にある花を踏み潰したとしてもね」

そこまで告げたあと、俺は出されていた茶を飲み干して立ち上がる。互いに探り合うような哲学的な会話にはなってしまったが、ある程度の義理は通せただろう。

俺の言葉をどう受け取るかは、センゴク元帥次第……好きにすればいいし、特に興味もない。

「ごちそうさまでした。長居しても失礼ですし、私はこれで……」

「ええ、お時間をいただきありがとうございました。今後も互いに立場は違えど平和を願う者として、共に頑張りましょう」

「ええ、それでは……」

平和を願う者か……ある意味では間違っではない。もつとも俺が願うのは俺自身の平和ではあるが……そんなことをいちいち口にすることもない。

俺はセンゴク元帥に一礼して部屋から出た。

・***

スパンダムが退室して静寂が訪れた部屋の中で、センゴクは静かに呟いた。

「……アレが、『漆黒の太陽』や『不夜の怪物』と呼ばれるスパンダム長官か……」

それはいつからか政府や海軍内で囁かれ始めた噂話。夜の無い不夜島エニエスロビー……その島に夜が訪れないのは、すべての闇を、それ以上の闇をもって滅ぼす怪物が島に君臨しているからであり、夜の闇すらその怪物を恐れて島に寄り付かないと、そんな与太話だ。

冷静に考えてみれば、エニエスロビーができたのは800年前であり、その時から夜のない島であったことは調べればすぐにわかる。

だが、火のないところに煙は立たない……そういつた噂が流れるからには、なにかしら、そうと思わせるような存在が居るのだと、センゴクは予てより考えていた。

ソレがおそらくCP9司令長官であるスパンダムだということも予想していた。海軍とCPでは異なるため、情報はそれほど多く手にできてはいなかったが……実質的にスパンダムがCPの頂点と呼べる存在であるというのは察していたし、今日の会議でも実際にCPの代表のような位置に座っていた。

「……凄まじいな」

だからこそ、この機会に少し見極めようと言葉を交わしてみた。対峙して見なければ分からないこともあると……結果は想像以上だった。

センゴクは静かに己の手を見る。その手は微かに震えていた。歴戦の猛者であるセンゴクが、僅かな時間対峙しただけで……いや、歴戦の猛者だからこそだろう。

だからこそ、スパンダムという怪物の力を短い会話から感じ取ることができた。

……まるで全てを破滅に誘うかのような、光も闇も根こそぎ喰らいつくす怪物と対峙しているような、そんな錯覚を覚えた。

「幸いなのは、理性無き怪物ではなく、理性を持つ怪物だったことか……だが、だからこそ、より恐ろしいとも言えるが……」

誰もいない部屋の中で、呟くような言葉が静かに響いていた。

謎に包まれた恐ろしき怪物

マリルフォードにある海軍本部の廊下をふたりの大柄の男が歩いていた。ひとりはピンクのファーコートとサングラスが特徴的な金髪の大男……天夜叉ドンキホーテ・ドフラミンゴ。

もうひとりはフォーマルスーツの上に黒いロングコートを羽織り、片腕の金色のフックが目を引く鋭い目をした黒髪の大男……砂漠の王サー・クロコダイル。

共に王下七武海に属する名の知れた海賊であり、今回は招集を受けて海軍本部へやってきていた。

「フツフツ……なあ、世の中行動が裏目に出るってのが、よくあるよな？ 例えば、鬱陶しい連中と港で鉢合わせするのが嫌で早めに来たら、よりにもよって一番鬱陶しい奴と顔を合わせてしまうって感じになあ」

「同感だな。初っ端から最悪の気分だ。おい、フラミンゴ野郎、離れて歩きやがれ、邪魔だ」

ドフラミンゴとクロコダイル。このふたりはどこか似たもの同士であり、同時に七武海の中でも特にウマが合わないふたりだった。

どちらも裏で狡猾に動くタイプであり、片や世界最大とも言われる闇のブローカー。片や秘密犯罪結社の社長。細かい衝突は数えきれないほどしてきた。

「おいおい、グラントライン前半の海に引きこもってる臆病者のワニが、ずいぶんと生意気な言葉を口にするじゃねえか」

「ハッ、場所しか誇れるものがねえのか？ 程度が知れるな……重要なのはそれがどこにあるかじゃなく、どれだけの価値を持つかだ」

「ほう、じゃあ、テメエがご執心のあの国にはそれだけの価値があると？」

「それを俺が親切に教えてやると思ってるのか？」

互いに鋭い目で睨み合い牽制をする。ここが海軍本部という場所でなければ、どちらかがすでに仕掛けていたであろう険悪な空気を纏

いながら両者は足を進める。

クロコダイルは現在アラバスタを手にするために、革命軍の思想を利用して反乱軍を焚きつける計画を慎重に進めており、今後のためにも革命軍の動き……そして海軍の対応は把握しておきたかったこともあり招集に応じてこの場に居る。

ドフラミンゴもまたドレスローザを支配する王でもあり、同時に闇のブローカーである。彼にとっては、戦火が広がること……すなわち、あちこちの国で反乱や革命が起こることは利益につながるため、革命軍や海軍の動きは可能な限り詳細に把握しておきたかった。

先に気付いたのはドフラミンゴとクロコダイルのどちらだったか……険悪な雰囲気で歩くふたりの前方、廊下の先から歩いてくる者が居た。

黒いスーツに身を包んだ目の周りと鼻の黒い男……スパンダムだった。

真つ直ぐに歩いてくるスパンダムを見て、ドフラミンゴもクロコダイルも明らかに不快そうな表情を浮かべた。単純に政府の役人を嫌っているというのものもあるが、それ以上に自分たちを見ながら道を譲ることもなく堂々と歩いてくる余裕な姿が癪に障った。

「フッフッフッフ……ずいぶん、態度のでけえ犬が居るじゃねえか」
含むような笑い声を上げつつ、ドフラミンゴはスツと片手を上げ……歩いてくるスパンダムと目が合った。

「……………」

ドフラミンゴもクロコダイルも、ほぼ同時に歩いてきた足を止めて立ち尽くしていた。そんなふたりの間を、カツカツと規則正しい足音を響かせ、スパンダムが悠々と通過していった。

それを止めるでもなく、しばし足を止めたまま誰もいない前方の廊下を見続けていた……そして、少しの時間が経ち、額に青筋を浮かべながらドフラミンゴが絞り出すように告げる。

「…………ふざけるな…………この、俺が……すれ違っただけで……………」

「…………なんだ……アイツは……………」

ドフラミンゴの呟きに、クロコダイルも信じられないと言いたげな

様子で言葉を零す。その頬には汗が伝っていた。

ただ目が合いですれ違っただけだった。本当にたったそれだけのことで、ドフラミンゴもクロコダイルも……己の死を幻視した。

「……おい、クソワニ。俺とテメエはウマが合わねえ。だが、それでも協力できることはある……そう思わねえか？」

「ああ、俺も同じことを考えていた。アイツは……ヤバすぎる。いまの野郎に関してのみ、互いに得た情報は共有するってことでいいな？」

「……ああ」

互いにウマが合わないと自覚しながらも、それでも両者は一瞬で一部手を結ぶことを決めた。いや、決めるしかなかった。

それほどまでに先ほどすれ違ったスパンダム存在は強烈であり、両者の思考はあのバケモノの情報を早急に集めなければならぬという考えで完全に一致した。

・***

海軍本部での会議からしばらく経ち、犯罪結社バロックワークスの拠点のひとつで、クロコダイルは副社長である女性に声をかける。

「ミス・オールサンデー……テメエは、長らく政府に追われてたんだろ？ CP9にも追われたことはあるか？」

「突然なに？ CP9……政府の誇る暗殺集団。知識として知っているけど、さすがに追われたことは無いわ」

「そうか……なら、スパンダムって男を知っているか？」
「スパンダム？ ……いいえ、知らないわ。スパンダムインという男なら知っているけど……名前が似てるから関係者かしら？」

クロコダイルの言葉にミス・オールサンデー……もとい、ニコ・ロビンが淡々と言葉を返す。だが、その内心は穏やかとは言えなかった。

クロコダイルに答えた通りCP9に追われたことは無い。だが、己の故郷であるオハラを焼き払うバスターコールを発令した相手の名

は、いまでも覚えているし、情報を探ったこともある。

関係まではわからないが、その男に近い名前がクロコダイルの口から出たことに驚いていた。

「……現CP9の司令長官らしいが、政府がかなり情報を厳しく規制しているみたいでな、殆ど情報は得られなかった」

「その男がどうかしたの？」

「ミス・オールサンデー……いや、ニコ・ロビン。俺とお前はビジネスで結ばれた関係、そうだな？」

「ええ」

ロビンと会話しつつクロコダイルは葉巻に火を付け、軽く煙を吐いてから真剣な表情で告げる。

「だからこそ、テメエにだけは伝えておく。仮にそのスパンダムつてやつが、アラバスタの一件に関わってきたら……俺はこの国から手を引く」

「……え？」

その言葉は心底意外なものだった。クロコダイルはアラバスタに眠るポーネグリフを解読し、古代兵器プルトンを手に入れ政府すら凌ぐ軍事国家を作り上げる野望を持っている。

そのために入念に下準備を続けてきていたし、今後の計画でも年単位で時間をかけ、徹底した策を練り、じつくりと王家の信用を奪い己が国王の座に就くための計画をまもなく実行するという段階まで来ている。

ロビンと協定を結んだのもそのためであり、犯罪結社バロックワークスを立ち上げたのもすべてはその野望のためだ。

その野望を、クロコダイルは場合によっては捨てるか宣言した。

「もしプルトンをすでに手に入れていたのなら別だが、その前であれば……たとえどんなにプルトンを手にする直前であっても、俺は全面的に手を引く」

「本気なの？」

「ああ、死んだら野望もなにもねえからな。その時は引いて次の手段を考える。その際のお前との協定についてだが、スパンダムがお前を

狙っているのだとしたら協定を破棄して、お前を切り捨てる。そうでないのなら協定は維持だ」

「……それほどの相手なの？」

クロコダイルは取引に対しては誠実だ。故に協定を結んだ相手であるロビンに対し、その協定が破棄になる場合のパターンを予め伝えた。

それはすなわち、スパンダムが現ればクロコダイルは全力で逃げの一手を打つと宣言しているようなものであり、スパンダムはクロコダイルがプライドも野望も捨てて逃げるしかない相手と認識する存在であるという証明だった。

「……協定を一方的に破棄する可能性があるからな、詫びとして話してやるが……誰かに漏らせば殺す。たまたま海軍本部に行った時にすれ違った。すれ違ったただけだ……それだけで俺が死を覚悟した。そのレベルの相手だ」

「……」

それ以上は話す気が無いのか、視線を外すクロコダイルに対し、ロビンは神妙な表情で沈黙していた。この時の会話は彼女の心の片隅に残っており、ここで聞いた名……スパンダムと彼女が対峙するのは、これより数年先のことだった。

今後の方針と準備

司法の塔にある長官室で、俺はポチが淹れたコーヒーを飲みながら新聞を読んでいた。そこには赤髪のシャンクスを加え、海の皇帝として四皇の記事が書かれていた。

シャンクスが四皇と呼ばれるようになったのは原作開始の3〜4年前、時期としてはそろそろエースが旅に出てスペード海賊団を立ち上げるころか……。

ウォーターセブンに関しても、原作通りアイスバーグが市長となり……また、解体屋フランキー一家ができたという情報もブルーノからの報告で確認している。

原作知識とのズレは無い。ほぼ俺の知る通りの展開で進行していると考えていいだろう。

さて、そうなつてくるといい加減原作開始も近くなつてきたし、俺もそろそろウォーターセブン編の方針を決めるべきだろう。

すなわち、原作通りの形になるように麦わらの一味によるロビン奪還を見逃すか、連中の冒険をここで終わらせるか……。

まずそれぞれのメリットとデメリットを考えてみよう。麦わらの一味を全滅させる場合に関して、コレは大した手間は必要ない。少なくともウォーターセブン編時点の麦わらの一味のレベルであれば、10秒かからず全員殺せる。なんなら、ポチに任せてもすぐに終わるレベルだろう。

例えばなんらかの奇跡が起こり、ルフィの悪魔の実が覚醒、他の者たちも覇気に目覚めて使いこなせたとしても、全滅までの時間が10秒から15秒に変わる程度でしかない。

実行自体は問題ないわけだが……得られるメリットは、現状の維持。飛び切りいいわけでもないが、悪くもない無難な結果だ。

ただ、デメリットが大きい。ここで麦わらの一味が全滅ということ、俺の持つ原作知識はその先ほぼ意味をなさなくなる。未来の情報というアドバンテージを失うのは少々惜しく感じる。

次に原作通りにロビンを奪還し、エニエスロビーが崩壊した場合について……こちらでも実行は問題ないだろう。ポチと俺が手出ししなければ概ね原作通りの展開になると想定できる。フィズに関しては、遠方の任務を割り当てておけば、エニエスロビー編の際に不在ということも可能だろう。

CP9のメンバーも原作と比べれば腕は上がっているが、それでも大きな要因があるのでおそらく戦えば原作通りに負ける可能性が高い。

というのも、若干どうするべきかと悩んではいたが……CP9メンバーには『驕り』が見える。まあ、ある意味、必然かもしれない。CP9のメンバーはグアンハオから出て配属されてから、未だに無敗だ。ロクに苦戦したことすらないほどに勝ち続けている。

それが本人たちも気付かないうちに心の驕りを生んでおり、成長を妨げている。つまり心のどこかで現状でも十分だと思っており、強くなることへの貪欲さが欠けている。

ここで問題なのはCP9メンバーにとって、俺やポチは『負けて当然の相手』と認識されていることだ。だから訓練等で、いかに俺が叩き伏せたとしても悔しき等を感じず当然の結果と受け入れてしまう。

敗北を知るといえるのはCP9にとつて非常にいい経験になり、今後の飛躍が期待できる……が、普段の任務において敗北とはすなわち死に直結する可能性が高いので、通常の任務でそれを経験させるのは難しい。

そう考えるとエニエスロビーの一件は破格だ。同レベルの相手と戦い敗北した上で生き残るなどというのは、極めて貴重な経験といえる。アイツらの今後を考えるなら、非常に価値の大きい戦いと言えるだろう。

ただ、例外も居る……フィズだ。フィズは、シャンクスに敗北してインペルダウンに囚われていたこともあり、強くなることに対するハングリーさを獲得している。

復帰当初では戦闘力はルッチに劣っていたが、他のメンバーと比べて明らかに伸びがいいので、原作のエニエスロビーのタイミングでは

ルツチと互角ないし超えているだろう。

そして敗北を経験していることで、驕りや慢心もなく堅実に任務をこなすのも高評価だ。遠方での任務や難しい任務も安心して任せられるだけの安定感がある。

CP9メンバーで順を付けるなら、俺個人の評価としてはポチに次いで高い。

まあ、メンバーの経験という意味では大きなメリットがある。それ以外だと……左遷コースに入れる可能性も、ほんの僅かにあるのではないかと思いたい。

……正直、かつてならともかくいまは本当にエニエスロビーを壊滅させても左遷にはなりそうにない気がするのだが、微かな希望は持っておきたいのでこれもメリットとして考える。

あとは……エニエスロビーの建て替えもできるか？ 800年も前からある島ということもあって、正直建物の中には老朽化が酷いものや、いまはもう使っていない建物もそれなりにある。

個別に修繕手配したりしていたが、かなり壊れる頻度も高いので……いつそ全部壊してクラッシュ&ビルドした方がいいのではないだろうか？

ああ、それにエニエスロビーが崩壊したらしばらくCP9メンバーには時間ができるから、その時に覇気を教えるのもいいかもしれない。

今後必ず必要になってくる技術だし、習得に時間がかかるので長い期間を取って集中できるなら、全員に習得させるのも不可能ではない。

後は当然今後の展開が原作通りに進むというのもメリット……困ったな、メリットが多いぞエニエスロビー崩壊。

「うん？ どうした、パンダ？ なにか面白い記事でもあったか？」
「……お前はなんで、さも当然の権利のようにここに居るんだろうと、考えていたところだ」

「ちゃんと正規の滞在手続きとって遊びに来たんじゃから、別にいいじゃろ？ ああ、今回は2泊ぐらいの予定じゃからよろしく。それ

と、チエルシーに頼まれていた調理器具も作ってきたぞ」

「本当ですか、ありがとうございますー！」

俺に話しかけてきたのは、スーツっぽい服の上に白衣を羽織った研究者スタイルのリリスであり、先ほどまでさも当然のように長官室のソファーに座って、ポチが淹れたカフェオレを飲んでいた。

リリスはたまに今回のように滞在許可を取って数日エニエスロビーに来ることがあり、その際は勝手に俺の家に泊まっている。

部屋は余っていたので好きにしろと言った結果、その部屋はリリスの簡易研究室みたいになっているのだが……便利は便利だから、好きにさせている。

「……リリス、お前に作ってもらいたいものがある」

「うん？ なんじゃ？」

「別に急ぐ内容ではなく、『3年以内』に完成すればいい。作って欲しいのは——」

「……うん。いや、別に作るのはいいんじゃないか？……お前、エニエスロビーを吹き飛ばす気か？」

俺が依頼した品について、リリスは不思議そうに首を傾げる。まあ、確かにそう取られてもおかしくない品ではあるし、実際その方向で進めるつもりでいる。

「……吹き飛ばしたら四方の海に左遷でもされないものか」

「無理じゃろ。わしが上でも絶対お前を切るなんて選択は取らんぞ」

「やっぱりそうか……まあ、それはそれでいいさ、とにかく頼んだ」

「任せろ……それはそうと、パンダ。家に地下室つくってもええか？」

リリスが口にした要望……あたり前だが、自分の家だという意味ではなく、この場合は俺の家の地下にという意味である。

「俺の家ということか？」

「うむ。部屋のサイズじゃちよつと手狭でな、もう少し広い研究所が欲しいのじゃ」

「……好きにしろ」

「よしっ、さすがパンダじゃ！ 話が分かる」

いちおう許可を取るだけマシではあるし、先ほど少々面倒な依頼を

したばかりということもあって、リリースの要望は聞いてやることにした。

まあ、コイツがここで作れるものが増えるというのは利益にもなるし、問題は無い。

そう思っていると、リリースが椅子に座る俺の近くまで来て、しなだれかかるようにしながら、甘えた声で話しかけてきた。

「……なあ、パンダ。十二真衝つての……見せて?」

「却下だ」

「えええ、いいじゃないか減るもんじゃあるまいに! 凄いやつなんじゃろ? 話聞いただけで脳汁が出そうなほどに凄まじいやつなんじゃろ? わしも見たい! なつ、なつ? ほんのちよつと、先っちよだけで——あだだだだだだ!」

ポチから十二真衝について聞いてから、ことあるごとにこうして強請ってくるようになったが……ホイホイ打てる威力の技ではないので却下した。

まあ、それで諦めるようなリリースではなく、なおも強請ってきていたので、とりあえずアイアンクローを決めて黙らせる。

「ポチ、おかわりを頼む」

「はい!」

「いだだだだ!?! ちよ、わ、わしが悪かったから、いい加減離し——いきい!?!」

俺は、やかましいBGMを聞きつつポケットから取り出した棒付きキャンデーの包装を片手で破って啜え、再び新聞を手に取った。

夜明け前の前奏曲（プレリユード）

まだ夜が明ける前の暗闇の中で、俺は棒付きキャンディを啜える。普段の夜の無いエニエスロビーに居ると、どうも夜には少し新鮮さを感じるものだ。

そんなことを考えつつ、近くで大岩にもたれ掛かっている相手に声をかける。

「……どうだ、ルッチ。潜伏任務は？」

「順調ではあるが……やはり、退屈さはあるな。それを表に出して任務に支障をきたすような真似はしないが……長官がこうして、息抜きをの機会を作ってくれていて助かった」

現在ルッチは里帰りという名目で一時ウオーターセブンを離れており、やはり殺しを行えない環境というのはフラストレーションが溜まるらしい。

まあ、ルッチ自身も言うようにプロのエージェントとしてそれを表に出すようなことはしないだろうが、それでもこの息抜きではテンションが少し高い気もする。

「カクは、かなり楽しそうにしているがな」

「ああ、そういえばカクは船が好きだったな。ある意味では適任だったかもしれないな」

カクは船好きであり、ガレーラカンパニーへの潜入もなんだかんだで楽しくやれているようだ。

「……さて、今回の任務だが、殲滅だ。俺は基本的に取りこぼしのフォロワーだけをするから、お前は好きに暴れるといい」

「ふふ、それは楽しみだ」

今回はルッチの息抜きも兼ねてということなので、暗殺ではなく殲滅任務を用意した。人員は俺とルッチのふたりだけ……以前の砦の時ほど大人数というわけでもないの、俺はフォローに回ってルッチに好きにやらせるつもりだ。

久々に殺しが出来るとあってルッチも楽しそうだと、そう考えなが

から見聞色の覇気を広げる。

「事前に渡した資料の通りの数だ」

「……前々から思っていたんだが、長官のその気配を感じ取る技はなんなんだ？」

「うん？ ああ、見聞色の覇気のことか？」

「覇気？ ああ……噂程度では聞いたことがあるな。なんでも、高度な技術だとか……」

ルッチの言葉通り覇気はかなり高度な技術といえる。原作でインフレが進んだ結果ホイホイ使うやつが多くて印象が低いけど、たとえば元海軍大将のゼファーでも覇気を習得したのは30代と言われるほどに習得の難しい技術だ。

世界規模で言うとなら使えるのは本当に限られた存在といえる。

「いずれお前にも必要になる技術だから、教えるつもりではあるが習得には時間がかかるから……潜伏任務が終わった後だな」

「……どんなことができるんだ？」

「多岐にわたるが、例えば見聞色であれば周囲の気配を鋭敏に感じ取る。練度を高めることで未来を見ることが可能だ……まあ、正しくは周囲の情報を得た結果の未来予測のようなものだがな。実演するなら……48秒後に右前方1300mの位置で、野犬が遠吠えを上げる」

俺がそう告げると、ルッチは懐から時計を取り出して確認、きつちり48秒後に犬の遠吠えが聞こえてきた。

「……はは、なんだそれは、殆ど反則じゃないか」

「まあ、未来予測なんて過信するものではない。様々な要因でズレることもあるから……」

「どうした？」

「いや、なんでもない。見聞色に関してコツ程度は軽く教えておいてやる。以前の釣りの話を覚えているか？ 野生の生物は微かな気配を鋭敏に感じ取ると……人間も同じものを感じ取れる。目だけで見るのではなく五感全てで見るといこうのを意識して見ろ……まあ、それでも時間はかかるだろうから、詳しくは潜入任務が終わった後だ」

「ふふ、任務完了後の楽しみが、またひとつ増えたな」

さわりだけ教えてやったが、ルツチなら数年かければ独学で見聞色に目覚めたとしても不思議ではない。元々諜報員なのだから、気配を読む術には長けている。

ただまあ、やはり強さに対する食欲さは足りないので、ポチよりは時間がかかるだろうが……。

「さて、話はここまでだ。そろそろ動くぞ……全員殺すんだから、別にコソコソ行く必要はない。正面から乗り込んで皆殺しにしろ、逃げた相手はこちらで処理する」

「……長官に仕事は無いかもしれないがな」

「それならそれで構わないさ……せいぜい楽しめ」
「了解」

ニヤリと笑みを浮かべて剃で向かうルツチを見送り、俺は見聞色で拠点から逃げ出すものが居ないかを探りつつ持って来ていた箱から、リリースに作らせた機械を取り出して設置する。

これはツノ電伝虫に似た機能を持つ機械で、電伝虫の念波を妨害し通信を不可能にするものだ。これで見聞色でひとりも逃がさなければ、情報が外に漏れることは無い。

ポケットから新しく取り出した棒付きのキャンデーを啜えながら、俺は静かに思考を巡らせる。好みの味のはずなのだが、いまいち美味しく感じない。

その原因は、抑えてはいるが、ずっと燻っているかのような……フツフツと腹の奥から沸き上がるような怒りのせいなのかもしれない……。

この怒りにルツチは関係ない。俺自身の問題だし、仮にルツチに話したとしても理解できないだろう。だが、不快感は消えてなくならなのまま、もう数年が経つ。いい加減我慢も限界に近い。

初めに違和感を覚えたのは……そう、オハラの際だ。俺は自分で考え、あの結論を出した。すなわちオハラの際には関わらないと……だが、後になって思えばそれは最善の一手ではない。

あの時に俺がするべきだった。最も俺の利になる行動とは……古

代文字の情報の獲得だったはずだ。ロビンは別にどうでもいい。問題は資料の方だ。

ポーネグリフを始めとした空白の100年に関わる資料は、政府が厳しく規制しておりエニエスロビーにすらまともなものが存在しない。

だが、オハラには少なくともロビンが天才であることを差し引いても、能力で覗き見て解読可能になれるだけの古代文字に関する情報があつたはずだ。

当時の俺にとっては、ポーネグリフを読むことができれば、古代兵器などのちに俺を脅かしかねない未知の物の情報を得る手段を獲得できる破格のチャンスだったはずだ。

場所は分かっているのだし、オハラの一件よりもっと前……武者修行の際に余った半年。あそこでオハラに行き、夜にでも忍び込んで強化した記憶力で資料を記憶していれば、使う使わないは別にしても、俺は大きなアドバンテージを獲得できたはずだ。

だが、あの時の俺はオハラに向かうという考えさえ思い浮かびはしなかった。後になってその考えに至った時は、少々後悔もしたが……後悔先に立たずという言葉もあるように、得てしてそういうのは過ぎから思い至るのだと、納得していた。

……二度目に違和感を覚えたのはフィズの件が解決したあとだ。あの時、俺はなぜ詳しくフィズに与えられた任務を確認していなかった？ 親父が割り振った。引き継いだばかりで忙しかった……言い訳がましい理由ならいくらでも思い浮かぶ。

だが、たかだか重要品護送の任務のリストを確認するだけに、そこまで時間などかからない。俺は知っていたはずだ。あの年に赤髪のシヤンクスによりゴムゴムの実……ヒトヒトの実・幻獣種「モデル・太陽神ニカ」が奪われるということ……つまり、阻止もできたはずだ。

なのに、なぜか俺は、東の海での任務というこれ以上ないほどのヒントがありながら、それを見落とした？ 原作知識によるアドバンテージを極めて重要視していたはずの俺が、実際に事が終わった後に

なつてようやく思い至り、それまで忘れていたのかのように気付かなかった。

ここで、疑惑は生まれていた。ほかにも細かい部分はいくつかあった。原作の主要人物を抹殺するような思考をした時なども、後になつて違和感を覚えたりもしたが……疑惑が確信に変わったのは、ウォーターセブンでのトムの一事件があつた際だ。

あの時もそうだ。わざわざ原作の強制力に関しての検証も兼ねて自分で行くとしたにもかかわらず、あの一件の最中、俺はどうにも終始やる気が起こらなかった。

プルトンの設計図自体にはたしかに興味は無かつた。だが、それをトムが所持していることも知っていたし、弟子に受け継がれるタイミングも知っていた。

事実、ウォーターセブンでも何度もそのことは頭に思い浮かんだ。だが、どうしても行動を起こす気にならなかった。

これに関しても理由はいくらでも付けられる。設計図に興味が無かつた。CP4主官の失脚を狙っていたなど、理由はあつたし、あの時はそれが最善だと考えていた。

だが、違う。あの時の最善手はそうじゃない。CP4主官を失脚させるのは司法船襲撃の失態だけで十分だった。だから、そのあとでなにかいくらでも行動を起こせば済むはずだ。

たとえば、トムを連行。線路の先に現れることが分かっているフランキーを捕らえ、フランキーに……あるいは、そこにアイスバーグを加えてふたりに対して、トムの無罪と引き換えにプルトンの設計図を差し出すように言えばよかった。

アイスバーグはそれでも突っ撥ねたかもしれないが、フランキーはトムの命の方を優先したはずだ。最悪そこで言質さえ取れば押し入つて奪つてもよかった。それどころか、俺はトムたちの懸念であるロビンに関しても事情を知っているし、プルトンがワノ国にあることも知っている。

交渉次第ではあるが話を成立させられていた可能性は十分にあつた。そうすれば、ウォーターセブンの件は全てそこで終わっていた。

だが、その考えに至ったのは、全て終わってから……そう、オハラ
の件も、フィズの件も、トムの件も……真に打つべきだった最善手に
気付いたのは、いつも『終わってから』だった。

別にどれも思い付くのが難しい方法じゃない。なんなら、真っ先に
思い浮かんでいてもいい筈の手だった。

しかし、そのどれにも気付くことさえできなかった。

だから、確信した……俺には一種の『楔』が打ち込まれていると
……。

そう考えた瞬間、つい力が入ったのか啞えていた飴を噛み砕いてし
まった。飴は最後まで舐める派なんだが……怒りが表に出てしまっ
たか。

ルツチの前では出さないように気を付けないとな……。

さて、思考を戻すとして、俺の行動を縛る楔。表現するなら、運命
とでも呼ぶべきもの……それは確実に存在する。

この先の展開についてもそうだ。俺は数年熟考した上で、俺にとつ
て最も利になる形を選んだはずだ。他の考えが割り入ったりしてい
ないし、ちゃんと俺自身が考えて出した結論だ。いまもそう思ってい
るし、これ以上の最善手も思い浮かばないし、他の手段を取ろうとい
う考えも浮かんでこない。

だが、心に付き纏う不快感が消えない。これでいいと最善の道を選
んだはずが、定められた枠組みを越えていないような、そんな感覚が
ある。

だが、何度考え直しても同じ結論にしかないし、他のことをし
てみようという気にもならない。

仮説は立てている。対策も考え、違和感が確信に変わった時から準
備も進めてきた。そろそろ実行してもいい頃合いだとは思っている。

いわばこれは呪いのようなものだろうか？ 少なくともいままで
の方法ではどうすることも出来ない。だから、楔を抜くにはいまは持
ち得ていない、もっと別の要因が必要になる。

例えるならそう、どれほど力を付けたとしてもいまの俺はあくまで
スパンダムという登場人物キャラクターの延長でしかなく、楔を抜くにはその枠を

踏み越えられるナニカが必要だと……そう表現すべきかもしれない。そのナニカに目星は付けているが……果たしてこの仮説が正解なのか……それとも間違っているのか……。

なんとも言えない気持ちのまま、俺は三つ目のキャンディーを取り出して啜えた。

・***

朝焼けが差し込み始めた頃、満足げな表情を浮かべたルッチが戻ってきた。結局俺が動くことは無く、全てルッチひとりで殲滅は完了した。

「任務完了だ」

「そのようだな……取りこぼしもない。死体は放置でかまわないらしいからな、このまま帰還する」

「了解」

「どうだ、気分転換になったか？」

「ああ、久しぶりに思いつきり体を動かせて満足だ」

どうやら無事息抜きはできたらしい。俺は妨害用の機械を箱にし、まっぴからゆつくり歩きだす。後ろにはルッチが続き、朝の日差しが俺たちの背を照らす。

後ろには死体だけとなった革命軍の拠点……なんともまあ、静かで清々しい朝だ。

「……そういえば近くにある街は、土地柄なのか早朝から店などが開き夕方にはすべて閉まるらしい。いまの時間でも開いている店が多いだろう。せっかくだし、どこかで朝食でも食べて帰るか？」

「ふむ、そうだな。当然ここは上司が部下に奢ってくれる場面だろうから、ありがたただ飯にありつくとしよう」

「ふっ、まあ……好きに食え」

ニヤリと笑って冗談っぽく話すルッチに対し、俺も軽く笑みを浮かべて言葉を返す。

「……そういえば、ルッチ。言った通り、アイスバーグはなかなか尻尾

を出さないだろう?」

「うん? ああ、アンタが評価するだけあってなかなかの手強さだ。ボロも出さないし、厄介な限りだ」

「まあ、そうだな。アドバイスをするなら、ガレーラだけでなくもつと広く調べてみることもだな。意外なところにヒントが転がっているかもしれないからな」

おそらくもうすでにアイスバーグからフランキーに設計図は渡っており、いくらアイスバーグを探ったところで設計図を見つけることはできない。

フランキーが死んだと思われていたカティ・フラムであり、アイスバーグと共にトムズワーカーズにいたことを突き止めない限りは……。

まあ、いま突き止められてしまったら、それはそれで俺の予定から逸れてしまうので、それを教える気は無いが……ただ、俺の仮説が全て上手くいけば、割とすぐに教えることができるかもしれない。

「……それも見聞色の未来視つてやつなのか?」

「いや、これはただの予想だ。だが、時に直感は理屈を凌駕することもある。覚えておくといい」

そう、現状の俺の仮説もほぼ直感で成り立っているようなものだ。さて、果たして俺の立てた仮説は当たっているのか……俺は楔を抜くことができるのか、全てはあの存在にかかっている。

可能なはずなんだ。いまの楔がある状態で本編という大きな流れを変えるのは難しくとも……劇場版の物語であれば、起こるかどうか『未来が不安定』であるからこそ、干渉して大きく変えることも出来る筈だ。

できればもつと早く実行したかった。だが、準備に時間がかかったし、検証できてないことも複数あるから、まずはそちらの検証を先に行う必要がある。

それが全て上手くいったなら……いよいよ本命だ。悪魔の実とも覇気とも違う……概念すら破壊しうる魔力とでも呼ぶべき俺には無い力。この世界においても異質といえる力……。

俺はそれが……………欲しい。
もうすぐ、すべての準備を整えて会いに行つてやる。待っている―
―魔王トットムジカ。

朝焼けの間奏曲（インタリユード）

暗い空、炎に照らされる夜のエレジア。響く大砲の音、宝を積み、笑いながら去っていく赤髪海賊団の背。

——シャンクス!! 置いていかないで! なんて……なんでだよおお!!

ハツと目を覚ませば、もうすっかり見慣れた部屋の天井がある。ああ、またあの夢、もう何度も見ている8年前の……本当の父親のように思っていたシャンクスに捨てられ、赤髪海賊団の皆に置いて行かれ、私がすべてを失ったあの日の夢。

信じていたのに裏切られた。恨んでる。シャンクスのことなんて嫌いに……嫌いに……本当に嫌いになれたら、私の気持ちも少しは楽になるのかな?

鬱屈とした気持ちでベッドから起きて、洗面所で顔を洗う。毎日見てるけど、酷い顔だ。まるで魂が抜け落ちちゃったみたい……もう、笑い方も忘れちゃったよ。

軽く身だしなみを整えてから食堂に向かうと、ゴードンがテーブルに料理を並べていた。ゴードンは私に気付くと手を止め、軽く微笑みを浮かべて口を開く。

「おはよう、ウタ。丁度朝食の用意ができたところだよ」

「……おはよう、ゴードン」

8年前のあの日から、私はゴードンとふたりでこの国、滅んだエレジアに住んでいる。ゴードンは私のためにいろいろなことをしてくれた。立派な歌手になれるようにと、音楽のこともいっぱい教えてくれた。

苦手だつて言ってた料理もいっぱい練習して、凄い料理だつて作れるようになった。本当に私のためにたくさんのことをしてくれている。

だから、そんなゴードンが作ってくれた朝食、いっぱいいっぱい練習して腕を上げたその料理が美味しくないはずがないのに……あん

まり味は感じなくて、いつも半分ぐらいは残してしまう。

「…………ごめん、ゴードン。もうお腹いっぱい…………私、少し…………風に当たってくるね」

「ああ、気を付けて行ってらっしゃい」

少し悲しそうな表情を浮かべながら私を見送ってくれるゴードンに背を向け、私は外に出て廃墟となった町並みを眺めながら歩く。

朝の日差しが差し込む道を歩き…………海岸に辿り着く。これは私の日課と言っている。毎朝海岸に来て、シャンクスたちとの思い出の歌を小さく口ずさむ。

そういえば、エレジアに残ってもいいんだぞって言った時、シャンクスは「世界一の歌姫になったら迎えに来る」って言った。私が世界一の歌手になったら、シャンクスは会いに来てくれるのかな？

シャンクス…………どうして、私を置いていったの？ 一緒に出航しようって約束したのに、本当に私を騙して利用してたの？ 分からない。もうなにも分からない。嫌いになりたくて、でもなれなくて。会いたくなくて、それでも凄く会いたくて…………自分の気持ちさえ、分からなくなってきた。

歌い終わって海を見ても、そこに望んだ船の姿は見えない。視線を空に向ける。朝日に照らされる空は、明るいはずなのになんだか暗くて、黒い人が飛んで——え？

急に空を飛ぶ人影が見えたかと思うと、大きな箱のような物を持ったその人は、私の少し前に降りてきた。真っ黒な服を着た男の人で、鼻と目元が黒いちよつとパンダっぽい色合いの顔だけど、鋭い目をしていた。

な、なんだろう、この人…………ていうか、いま空飛んでた？ 人って、空飛ぶんだっけ？

戸惑っている私の前でその人は、穏やかな笑みを浮かべながら口を開いた。

「初めまして、俺はスパンダムという者だ。君は、ウタという子で間違いないかな？」

「…………どうして、私の名前を？」

「まあ、いろいろと事情があつてね。俺は君とゴードンという人があつてきたんだが、可能なら3人で話をさせてもらえないだろうか？」

そう告げるスパンダムさんの声は優し気で、悪い人つて感じには思えなかつた。ゴードン以外の人と会つたのが8年ぶりでかなり戸惑つたけど、スパンダムさんの言葉に頷いてゴードンの居る場所と一緒に向かう。

スパンダムさんは大きな箱を軽々と持ち上げながら規則正しい歩幅で歩いている。海賊つて感じの人じゃない。けど、海軍ともなんか違う感じで、どういう人なのかよく分からないというのが私の印象だった。

スパンダムさん連れて帰ると、ゴードンは凄く驚いたような表情を浮かべていた。

「……貴方は、世界政府の……」

「確かに、世界政府に属する者ではあるが、今回はプライベートで来ているので、政府はなにも関係ない。この服装は、一種の身元の保証になるかとも思つて着て来ただけだ。無論貴方やウタに危害を加えるつもりも一切ないので、安心してほしい」

「……分かつた。どちらにせよ、いまは貴方の言葉を信じるしか無いようだ。それで、今日はいったい何の用だろうか？」

スパンダムさんとゴードンが簡単に自己紹介を終えたあと、私を合わせて三人で話をする事になった。私とゴードンが隣同士に座つて、机を挟んでスパンダムさんが座る。

話があるつて言つてたけど、いったい何なのだろうと……そんな風にぼんやり考えていた。スパンダムさんの次の言葉を聞くまでは……。

「単刀直入に言おう。いまから、お前たちふたりを『赤髪のシャンクスの下へ連れていく』」

「ツ!？」

なんて言つた？ シャンクスの下へ……連れていく？ 会える……シャンクスに、会える。あつ、でも、シャンクスは私を捨てて、私

を騙して……。

「な、なにを馬鹿な……」

「お前やシャンクスがなにを考えて、その選択を選んだのかは理解している。だが、いまその子の姿が……生気が抜け落ちたかのようなその姿が、お前たちが望んでいたものなのか？」

「そ、それは……だが……しかし……」

「真実を隠し続けることが、必ずしもその者のためになるわけではない」

スパンダムさんの言葉にゴードンが凄く狼狽えている。真実を隠すってなに？ スパンダムさんは、なにを知ってるの？ 私は、なにを知らないの？

「……ゴードン……し、真実ってなに？ なにを、隠してるの？」

「……ウタ……私は……」

私の問いかけにゴードンは苦しむような表情を浮かべ、なにかを言い淀む。スパンダムさんの言う通り、なにかを隠していると感じた。それも、私に関わるなにか、すごく重大なことを……。

そんな中で、スパンダムさんが淡々と告げた言葉に、私は再び大きな衝撃を受けることになった。

「8年前エレジアを壊滅させたのは、赤髪海賊団ではない」

「……うそっ……だって……」

「その先は、本人に直接聞くんだな。さあ、ウタ。選択権は他の誰でもない、お前にある。だから……シャンクスの下に行き、真実を知るかどうか、決めるのは……お前だ」

スパンダムさんの言葉を受け、私はチラリとゴードンを見る。ゴードンは全てを諦めたかのような、それでいて重いなにかが外れたような表情で軽く頷いた。私の選択に全てを委ねると言いたげに……。

スパンダムさんに視線を向ければ、こちらも静かに私の言葉を守っていた。決めるのは私だと、そう告げた通りに……私の答えは……決まっていた。

「……知りたい。真実を……スパンダムさん！ 私を、シャンクスの下につ、連れて行って!!」

「……分かった」

叫ぶように告げた私の言葉を聞いて、スパンダムさんは静かに頷いたあとで置いてあった大きな箱を開け、中から……えっと、なんか変な服？ を取り出して、私とゴードンの前に置いた。

「その防護服を着ろ」

「……え？ うん、うん」

なんか予想してたのとちよつと違うんだけど……これ、船とかで行くんじやない感じなのかな？

・***

スパンダムさんは凄かった。防護服を着た私とゴードンを軽々と抱えて、空を飛んで移動しはじめた。しかも、もの凄く早く景色が吹き飛ぶように流れていく。

そのまましばらく流れる景色を見てみると、速度が落ちてきて……見間違えるはずもないレッドフォース号が、シャンクスの船が見えてきた。

「……さて、本人に出てきてもらうために少し威圧するか」

スパンダムさんがそう呟いた直後、強風が吹いたようにレッドフォース号が揺れ甲板に慌ただしく船員たちが出てくるのが見えた。

そこには見覚えのある顔も多くて、顔も全部覆っている防護服の中で懐かしさで目の奥が熱くなった。

そしてスパンダムさんが甲板に着地すると、警戒する船員たちを割ってシャンクスがゆつくりと歩いてきた。

「……おいおい、ずいぶんふざけた挨拶じゃないか。政府の役人が、俺たちに戦争を仕掛けようつてののか？」

「いや、配達にきたただけだ。お前の娘をな……」

「……なに？」

シャンクスだ！ 本物のシャンクスだ！！

いろいろ考えていたはずだった。ここに辿り着くまでシャンクスに会ったら最初になにを言おうとか、どうしようとか、いっぱい考え

ていたはずだった。

私を置いていったこととかいろいろ言いたいことはあった。でも、本人を目の前にしたらそんな感情は全部吹き飛んでしまった。

気付いた時には、私は防護服のヘルメットを投げ捨てるように脱いで、シャンクスに向かって駆けだしていた。

「シャンクス!!」

「……ウ……タ……」

驚愕に目を見開いたシャンクスは、それでも飛びついた私を右手で抱き留めてくれた。頭の中がぐちゃぐちゃで、自分がなにを考えているのか分からなくて、それでもシャンクスに会えて嬉しいって気持ちだけは確かで、私の目からは大量の涙が流れる。

「シャンクス！ シャンクスウウウ！ うわあああああ!!」

「……どうして……ウタが……それに……ゴードンも……なぜ、ここに?」

胸にしがみついて泣きじやくる私に対し、信じられないといった様子で呟くシャンクス。それでもシャンクスは、私を突き放したりすることは無く、私の涙が止まるまでずっと抱きしめ続けてくれた。

どのぐらい泣いていたかは分からないが、爆発していた感情が収まってくると、甲板に少しの静けさが訪れていた。

シャンクスだけじゃなくて、他の赤髪海賊団の皆も状況が分からないといったげな表情で、いつも落ち着いてるベックマンさんやホンゴウさんも戸惑っているのが見て分かった。

そんな戸惑いが強い空気の中で、スパンダムさんの声が鋭く響く。「赤髪のシャンクス、そしてゴードン……お前たちに言っておいてやる。大きな悲劇というのは得てして善意のすれ違いから生まれるものだ。そういつた連中は、取り返しが付かなくなってからこう言うんだ。『そんなつもりじゃなかった』とな……泥を被り、真実を隠し続けることが必ずしも相手を幸せにするわけでは無い。いまの子の涙を見てもなお、なにも知らせないことがその子のためだと、本当に言えるのか?」

『……』

シャンクスとゴードンだけじゃなくて、私の知る赤髪海賊団の皆もスパンダムさんの言葉になにか思うところがあるような表情を浮かべていて、それがスパンダムさんの言う真実に関わることだって理解できた。

「本当にその子を想い、愛しているのなら……明らかにしてやることだ。8年前の真実と、トットムジカについてをな……あとは、お前たちで決めろ」

そう告げると、スパンダムさんはレッドフォース号のマストにもたれ掛かり、ポケットから取り出した飴を啜えて腕を組む。それ以上話すことは無いと言いたげに……。

シャンクスの顔を見上げれば、シャンクスは苦しそうに……なにかを悩む表情を浮かべていた。

「……シャンクス……教えて」

「ウタ……」

「本当のことを……あの日の真実を……」

私は覚悟を決めた。スパンダムさんの言う真実、それはきっと私にとって辛いものなんだと思う。だからこそ、シャンクスもゴードンも苦しそうな表情を浮かべているんだ。

「分かるんだ。たぶん、それは、私にとって辛いことなんだよね？」

シャンクスやゴードンの顔を見れば分かるよ。だけど……知りたいんだ。シャンクスたちのこと……好きでいたいから」

8年間たくさん考えた。何度も、何度も、海賊をシャンクスたちを嫌いになろうとした。だけど、やっぱり嫌いになんてなれなくて、毎日毎日海岸まで足を運んだ。

いつも、皆との思い出の歌を口ずさんだ。そしてこうして再会して、やっぱり私はシャンクスが大好きなんだって、改めて分かった。だからこそ、全てを知りたかった。

「……大きくなったな、ウタ」

私の思いが伝わったのか、シャンクスはフツと優しい表情を浮かべて、そのあとでゴードンと共にあの日の真実を話してくれた。

あの日、エレジアが滅んでしまった日……ゴードンやエレジアの皆

が開いてくれたパーティで、私の歌が太古に封印されていた呪われた楽譜を呼び覚ましてしまったこと。

ウタウタの力を持つ私とその楽譜『Tot Musica』を歌ってしまったことで、魔王トットムジカがエレジアに顕現してしまったこと。

シャンクスたちが立ち向かったにも関わらず、トットムジカは倒せず、エレジアの国民はゴードンを除いて皆殺しとなり、国が滅亡したことを。

そして、私にその罪を背負わせないためにシャンクスとゴードンが話し合い。ゴードンに私を託して、シャンクスがエレジアを崩壊させた罪を背負った。

私を利用してエレジアに潜り込み私利私欲のままに滅ぼしたなんて、そんな大嘘を吐いて……私を守ろうとしてくれていた。

「……そう……だったんだ。エレジアは……私のせいで」

「違う！ お前のせいじゃない!! 俺が、俺たちがあの時にエレジアを守れていれば……」

「いや、そもそも、エレジアの国王だった私は、太古から国に伝わる『Tot Musica』の存在を知らながら、なんの対処もせずに放置していた。罪があるというならウタではなく私だ」

私も、シャンクスも、ゴードンも皆自分のせいだと、そう告げる中……呆れたような声が聞こえてきた。

「揃いも揃って馬鹿か？ エレジアを滅ぼしたのも、国民を皆殺しにしたのもトットムジカであって、お前らではない。ウタがトットムジカを知った上で顕現させたならともかく、そうでないなら、罪なんてあるわけがないだろうが。太古の怨念を庇って罪を被るなんて酔狂は止めておくんだな」

思わずポカンとしてしまった。あんまりにもあんまりな言い方ではあったが、スパンダムさんは罪はあくまでトットムジカにあって、私たちの誰にも罪なんて無いって、そう言ってくれてるのは理解できた。

そのぶつきらばうな優しさが、なんだか嬉しくてまた少し涙がこぼ

れた。

「……すまなかった、ウタ。お前のためを思って行動したはずが、逆にお前を苦しめてしまっていた」

「ううん。ありがとう……ねえ、シャンクス？　いまでも、私のこと……その……」

「ああ、何年離れていようが変わるわけがない。お前は俺の娘だ……ウタ」

「っ……シャンクス!!」

嬉しかった。どうしようもないほど嬉しくて、止まっただはずの涙が再び流れ出した。暗く曇っていたような心が晴れていくみたいで、泣きながら……それでも、口元には笑みが浮かぶ。

ああ、そうだ。思い出した……笑うって、笑顔って、こうするんだっただ。やつと、やつと……思い出せたよ。涙でよく見えない視界で見上げたシャンクスの目にも……涙が浮かんでいるのがハッキリと見えた。

・***

いままでの8年間を取り戻すようにシャンクスや皆と言葉を交わした。シャンクスの片腕が無くなってることや、麦わら帽子を被つてないことなど、私が居ない間の話を一杯聞いた。すごく幸せな気分を感じながら、私は静かに腕を組んで沈黙している恩人に声をかける。

「スパンダムさん！　本当にありがとう!!　私をシャンクスの下に連れてきてくれて……」

「……無事に和解できたようならなによりだ。ところで、俺に感謝する気があるのならひとつ、頼みを聞いてくれないだろうか？」

「頼み？　うん、私にできることなら」

「歌を聞かせて欲しい。ウタウタの実の力を使った……歌い手と観客が夢を共有できる世界一の歌を……」

本当にスパンダムさんには感謝してもしきれないぐらいだったんだけど、スパンダムさんが私に頼んできたのは、歌を一曲歌ってほし

いというものだった。

そんな事でいいのだろうかと首を傾げつつシャンクスの方に視線を向けると、シャンクスも微笑みながら頷く。

「……そうだな。俺も久しぶりにお前の歌を聞きたい」

「うん！ 任せて！」

パアッと心が温かくなるような感覚と共に、どこか懐かしさを覚える。レッドフォース号に乗っていた頃、樽を簡易的なステージに見立てたりして、よく歌っていた。

いまは流石に樽をステージにはできないけど、赤髪海賊団の皆が居るこの甲板は最高のステージだ。

ウタウタの力でウタワールドを創り出すのはかなり体力がいるから、昔は一曲歌いきる前に眠ってしまったし、いまも成長したとはいえ普通に歌えば三曲ぐらいが限界。

いまは沢山泣いて結構疲れてるから、感覚的に一曲歌えば眠っちゃうと思う。だけど、一曲歌えるなら十分だ。

8年ぶりに再会できたシャンクスや赤髪海賊団の皆、8年間ずっと私を守りながら育ててくれたゴードン、シャンクスと再会させてくれたスパンダムさん……皆に向けて、全身全霊でいまの私に歌える最高の歌を贈る。

スウッと息を吸い込み、私は歌い始めた。歌うのはもちろん、赤髪海賊団の皆との思い出の歌、『風のゆくえ』だ。

私の想い、私の夢……ウタウタの実の力を乗せて紡ぐ歌は、現実世界の皆の心を一時的にウタワールドに連れていく。

そこは、私にとって本当に幸せな思い出の空間……8年前のフーシャ村、マキノさんの酒場の前に皆が並んでいる。

シャンクス、ベックマンさん、ルウさん、ヤソップさん、ガブさん、スネイクさん、ライムジュースさん、ホンゴウさん、ボンクパンチとモンスター。

ルフィやマキノさんは居ないけど、代わりにゴードンが居て……また涙が出そうな幸せな世界で歌い続ける。

そして歌が終盤に差し掛かると、私は体力が限界に近いことを感じ

ていた。ああ、悔しいなあ。もつとずっと、いつまでも歌っていたいの……そろそろ夢の世界は閉幕になってしまう。

歌が終わると瞼が重くなってくる。まだまだ、シャンクスに成長した私の歌を聞いて欲しかったのに……寂しいな。

そんな風に考えていると、シャンクスがフツと優しい笑みを浮かべながら口を開く。

「……やっぱり、お前の歌は世界一だな。また、聞かせてくれ」

「……っ、うん！ 任せて……だって私は、赤髪海賊団の……音楽家だから……」

そうだ。これで終わりじゃないんだ。また、これから先もあるんだ。ああ、嬉しいなあ、本当に幸せだなあ……ありがとう、スパンダムさん。私とシャンクスを仲直りさせてくれて……。

……あれ？

なんで……スパンダムさんが……ウタワールドに居ないの？ どこか、建物の陰に隠れているの？

まどろみに沈んでいく意識の中で、現実世界の方のスパンダムさんを見る。スパンダムさんはマスクにもたれかかった姿勢のままに笑っていた。

あれ？ おかしいな……？ スパンダムさんは、私の大恩人だよ？

その大恩人が私の歌を聞いて笑ってくれてるんだよ？

なのになんで、いま一瞬……その笑顔が凄く怖くて……『底知れない闇』のように見えたのかな？

答えは出ないまま、私は眠りに落ちた。

・***

目覚めると、スパンダムさんは居なくなっていて、シャンクスが言うには「3日後にまた来るから、その時までには今後どうするかを決めておけ」って言い残して去っていったみたい。

眠る前になんか変な感じがしたような気がしたけど、気のせいだね。それより、私とゴードンは3日間レッドフォース号でお世話にな

ることになって、その間に今後どうするかを話し合うことに決まった。

少なくともこれから3日はシャンクスたちと一緒に居られる嬉しさでいっぱい、いつの間にか微かに感じていた疑問は忘れてしまっていた。

昼下がりの変奏曲（ヴァリエーション）

明るい日差しに照らされた廃墟を歩く。口元に浮かぶ笑みは抑えきれない。ウタをシャンクスと再会させ、ウタウタの実の能力を使ってもらったことで、俺は全ての準備が整ったことを確信した。

俺の仮説を検証するためにウタウタの実の力は必須だったが、本人が歌うという発動条件があるため、それを満たすには歌うことを了承してもらった必要があった。

それにこれからやることのために、一時ウタとゴードンにはエレジアから離れていて欲しかったこともあり、結果的にああいう形に落ち着いた。

それに気付けたのは、楔について考えていた時ではなく、ウタウタの実に対する対策を考えていた時の話だ。ウタウタの実は、作中でもかなり異質な能力であり、仮想世界を創り出すという反則級の能力ではある。

だが、そのなによりの脅威はおそらくウタウタの能力は、『覇気では防げない』という点だ。過剰な覇気で能力を無効化できるなら F I L M R E D に於いて、ビッグマムや海軍大将といった存在が登場したのだしその誰かが行えてもよかつたはずだ。

だが、海軍がとつたのは耳栓という対策であり、ビッグマムも映像電伝虫の音声を切っていた。つまりウタウタの実の能力は歌を聞かないという対策以外では、防ぎようが無いというわけだ。

では、なぜ防げないのか……それを考えた結果、ある仮説に辿り着いた。ウタウタの実の能力は肉体ではなく『魂』に対して効果を発揮する力なのではないかと。

ワンピースの世界に魂が存在するのは、ヨミヨミの実やソルソルの実によって証明されており、そこに関しては間違いない。

俺は細胞単位で肉体改造を行っても記憶などを保持している要因に魂の存在が関わっていると考えたこともある。だが、重要なのは同じタイミングで立てたもう一つの仮説……覇気は肉体に宿る力とい

うものだ。

肉体改造によって成長する覇気は肉体に宿る能力であり、シクシクの実やオオオペの実といった肉体に干渉する能力は、過剰な覇気によって防ぐことができる。

だが、ウタウタの実の力が肉体ではなく魂に対して干渉する能力であるのなら……肉体の力である覇気で防ぐことができないのも道理だ。ウタウタの実の能力を防ぐには肉体ではなく『魂の力』が必要になってくるのだと考えた。

この魂の力に関して、ブルックが黄泉の冷氣などといったヨミヨミの実の能力範囲で本当に行えるのか疑問な力を使っていたりした様子から、存在はすると確信はできた。

だが、その魂の輪郭とでもいふべきものを掴むまでが大変だった。なにせ完全に手探り状態だったので、魂らしきものの存在を己の中に感じ取れるようになるまでもかなりの年月がかかった。

そして魂の力を鍛えるというのにも、かなり苦労した。なにせ覇気と違ってどんなものか全く想像ができないので、全て手探りだった。結論から言えばブルックのような特殊な冷氣を扱ったりという現象を起こすことはできなかったが、魂を強く肉体に繋ぎ止めるようなことはできる気がするまでにはなった。

俺が魔王トットムジカの力を得るためには、この魂の力が重要であると思いかかなり慎重に磨き続けてきたが、困ったことに検証の術が限られていた。

直接攻撃的なアクションを起こせないのも、果たして本当に魂を鍛え、魂に干渉できる能力へ対抗できるのか不安は残っていたが……ウタウタの実の力によるウタワールドの誘いを把握して跳ね除けられた時点で、仮説が正しかったことを確信した。

さらにもうひとつ、いままで原作という大きな流れを変えることはできなかった。なにかをしようとしても直前で思い留まったり、やる気が急に無くなったり……だが、やはり劇場版に関しては未来が不確定ということもあり、大きく変えることが可能だったとウタとシャンクスとのやり取りを見て確信できた。本当にウタには感謝しかない。

これで、すべての検証は終わり、準備は整った。あとは実行するだけだ。

廃墟となったエレジアを歩き、小高い丘の上にあるエレジア城まで辿り着くと、海がよく見える場所にあった瓦礫に腰かける。

さあ、来たぞ。お前も俺を感じているだろう？ トットムジカ……お前を求める俺の心を、そこに渦巻く狂気と闇を……。

トットムジカは禁忌の楽曲と言われているが、その本質は表現するなら『心の闇』『負の感情の集合体』のような存在だ。

寂しい、認められたい、誰かに見つけて欲しい、そんな太古から存在する怨念のような感情の集合体であり、ワンピースの世界では珍しく呪術的な力を持つ存在。

強いて上げるのなら、能力の規模こそ違うものの性質的には呪われし聖剣に出てきた七星剣に近いと言っている。

だからこそトットムジカは、俺の感情……トットムジカを強烈に求める想いに反応するだろう。

ほどなくして、俺の目の前に浮遊する楽譜が現れた。見るだけで分かる。覇気とも悪魔の実とも違う異質で異様な気配。ああ、これこそ俺の求めていたものだ。

「……初めまして、トットムジカ。お前に会いたかった」

楽譜に話しかけるが、当然のことながら言葉が返ってくるわけがない。それでも楽譜はどこに行くわけでもなく、俺の眼前に浮遊し続けているので、トットムジカがこちらに対してなんらかの関心を持っているのは間違いない。

「いま、この島に他の邪魔者はいない。時間もたつぷりとある」

長かった。楔があると自覚してから、感じていた不快感。小さな流れは変えられる。だが、大きな流れを変えようとするとは行動を起こすことができない。

後から思えば言い訳のような考えが頭に浮かび、なんだかんだでその時には納得して行動を止めてしまう。無理やりレールの上に戻され、全てが終わるまで己がおかしい行動をとっていたことにすら気付けない。

不快だ、どうしようもなく……だから、楔を、運命を、捻じ曲げる力が欲しい。

バリアという概念そのものを作り出すため、作中でも屈指の実力者であるおでんですら破れないバリバリの実のバリアという概念を破壊し、オペオペの実によって定められたルームという空間の指定をも破壊する力。

魔力とでも呼称すべきいまの俺にとっては完全に未知の力……それが欲しい。

「だから……じっくり話し合おうじゃないか、トットムジカ……俺は、お前が欲しい」

そう告げて手を差し出すと、楽譜はひとりで俺の手に乗った。どうやらトットムジカも話し合いに応じてくれるつもりらしい。

心の中でトットムジカに感謝しつつ、俺は楽譜を握り締め、存在を理解した己の魂の中にトットムジカを招き入れる。

ウタウタの実を体感したおかげで、魂を引き寄せられるという感覚を理解することができた。だからその逆、魂の中に引き寄せるということも出来るはずだ。

禍々しい闇が俺の体に吸い込まれ、俺の意識は闇に溶けるように沈んでいった。

さあ、始めよう——トットムジカ。

モノクロの交響曲（シンフォニー）

そこはモノクロの世界だった。灰色の地面と白い空だけが果てしなく続く空間。この空間に居るのは俺ともうひとつの存在だけ……。

軽く手を握って具合を確かめる。問題なく現実と同じような動きが出来そうであると確認した俺は、前方に佇む存在シルクハットを被り左目が×の形の赤く道化の仮面のような顔、ピアノの鍵盤のように見える腕を持つ遠目に見れば案山子のようにも見える存在……トットムジカに視線を向ける。

不気味な色合いの炎に包まれた三つのガイコツを首元に浮遊させながら、トットムジカはジツとこちらを見つめていた。まるで俺を品定めするかのように……。

「調子はどうだ、トットムジカ？ 悪くはないだろうか？ 生憎俺はウタウタの実の能力者ではないのでな、お前を現世に顕現させてやることはできない。代わりに俺の魂にお前を招き入れることで、疑似的な……俺とお前ふたりだけのためのウタワールドを形成した。上手くいったようだなによりだ」

トットムジカはこちらの言葉を理解しているのか、牙の生え揃った口を歪め笑みを浮かべる。俺の言わんとすることは大体伝わったようだ。

「……さて、本題に入ろう。ここでお前が俺に敗ればお前は俺の魂に取り込まれる。つまり、お前の力は俺のものになるわけだ……だが、お前も提案に応じた以上気付いているだろうが、ここでお前が俺を殺せば……お前は俺の魂を乗っ取れるわけだ。つまりお前は、俺の肉体を得て顕現できる。自分で言うのもなんだが、俺の肉体は十分に世界を滅ぼしうる力を持っている……どうだ？ お前に提示するメリットとしては十分だろうか？」

「……」

「異論は無さそうだな。では……始めようか」

俺の誘いに応じた以上トットムジカもある程度は察していたのだ

ろう、俺の言葉を聞いて静かに頷いた。その了承を見て笑みを浮かべつつ、俺はスーツのジャケットを脱いで放り投げる。

それと同時に、トットムジカにも変化が起こる。顔が赤から青に変わり、首のガイコツが4つに増える。被っていた帽子に竜の顔のような意匠が現れ、鍵盤の脚が現れて巨大化する。

見上げるようなサイズになったトットムジカ……確かトットムジカの形態変化は『楽章』という形で表現されていた。

最初の赤い顔でガイコツが3つなのが第一楽章、そしていまの青い顔でガイコツが4つなのが第二楽章……。

「……おいおい、トットムジカ。教えておいてやる。小手調べなんてのは、訓練でやるものだ」

「っ……」

「六王覇銃」

映画FILM REDにおいてはさらにもうひとつ上、第三楽章までであったはずだ。わざわざ始めようと宣言して準備の時間をやったにもかかわらず、第二楽章というのは舐め過ぎだ。

俺が振るった拳から放たれた赤黒い衝撃がトットムジカに直撃し、その巨体を大きく吹き飛ばす。同時に剃刀で空に駆け上がり、吹き飛んでいるトットムジカの上空に移動し、再び拳を振るう。

「もう一発だ」

再び放った六王覇銃がトットムジカを地面に叩きつける。そのまま少し離れた場所に着地し、トットムジカに対して告げる。

「……全力でこい、トットムジカ」

その言葉に反応するようにガバツと体を起こしたトットムジカからどす黒いオーラが放たれる。顔は白色に変わり、首の骸骨は5つに、手は四本に増え背中に巨大な黒翼が現れる。

トットムジカ第三楽章……映画において数多の強者たちの連合軍を相手に渡り合ったトットムジカの最強形態。

トットムジカの左目が光り、赤い光線が放たれる。その攻撃に対し、正面から覇気を纏った拳を振る。現在のトットムジカの巨大な体軀から放たれる光線は優に俺の体を超える大きさではあるが、その光

線が俺に届くことはない。

「……この程度なのか？」

迫る四本の巨腕……月歩で空中に駆け上がり、足を振るう。

「嵐脚・天刃」

放った斬撃が一本の腕を切り落とし、それによって生まれた隙を突いて、一気にトットムジカに肉薄して、その仮面のような顔を蹴り上げる。

トットムジカの体が弾かれるように上空に吹き飛ぶのを視界に収めながら、両腕に覇気を込める。

「十二真衝」

放たれたふたつの衝撃がトットムジカの眼前でぶつかり合い、巨大な衝撃となつてその体を呑み込んだ。

黒い衝撃波の球体が消えると、ボロボロになったトットムジカが落下し大きな音を響かせる。相当のダメージを受け起き上がれない様子の子のトットムジカの顔の前に立つ。

「……なあ、トットムジカ？　あまり失望させないでくれ。俺が求め続けた力が、この程度でしかないなんて思いたくないんだ。それともなにか？　所詮、ウタウタの実によるウタワールドと現実への同時顕現による防御が無ければ、お前はどの程度でしかないのか？」

トットムジカはウタウタの能力者が歌うことで、ウタワールドと現実と同時に顕現し、両方に同時に攻撃しなければダメージが通らないという強固な防御能力がある。

だが、現状はウタウタの力によって顕現したわけでは無く、俺が魂に取り込む形で疑似的に顕現させているだけ……現実の空間にトットムジカは顕現してない。故に、双方同時攻撃必須の防御能力はない。

「……違うだろ？　トットムジカ……お前が太古から蓄えてきた怨念は、長らく封印されて表に出れなかったことによつて高まった想いは……こんな程度じゃ、無いはずだろう？　お前のすべてを絞り出せ、ウタウタの力など無くても魔王に相応しい力を有していると、俺に証明してくれ……」

さて、果たしてこの言葉は届くのかと、そんな風に考えた瞬間——世界が大きく脈動した。そして、同時に歌が聞こえてきた。「T o t M u s i c a」の歌が……。

どこからだと視線を動かしてみると、トットムジカの首にある青白い炎を纏った骸骨が歌っていた。そのただならぬ気配に少し後退して、様子を見る。

首から離れた骸骨が6つに増えて宙に浮かび、紫色に変わった炎を纏いながら歌い続ける。そして、トットムジカ本体が禍々しさを感じる黒い霧に包まれていく。

そうだ。見せてくれ、邪魔なんてしない。俺の求めた力……運命すら粉碎する力が、あんな程度のはずがない。魔王の真の力を……俺に見せてくれ。

霧が晴れると、そこには異質な存在が居た。先ほどまでの巨体からは想像できない俺と変わらない程度の体躯。藁のようにボサボサだった髪は、膝辺りまでの長さの美しく輝く金のストレートヘアに変わった。

鍵盤と音符の描かれたドレスを身に纏った人型の姿ではあったが、足は細長い三角錐を逆さにしたような形状で、肩に腕は付いておらず、空中に人形の手のようなものが浮遊している。

左目が×の道化を模した仮面を被ったその姿は人形のようにでありながら女性的で、プリマドンナという言葉が頭に浮かび上がった。

例えるのならそう……ここまでのトットムジカは、ウタウタの実の能力者によって現れる一種の舞台装置であり、あくまで舞台の中心はウタウタの実の能力者だった。

だがそれが、自ら歌いながらステージの中央に立ち『主役』へと変貌したかのような。

「……美しいな」

空中に浮かぶ6つの骸骨が称えるかのように歌い続ける中で逆三角錐の足で立つその姿には、圧倒的な存在感があった。

ああ、分かる。体躯こそ俺と変わらぬ程度に小さくなったが、その力は先ほどまでとは次元が違う。それこそ、気の弱い者であればいま

のトットムジカを目にただけで、その命を終わらせるだろう。それほどどの次元に立つ姿は、まさに魔王と呼ぶに相応しい。

『トットムジカ最終楽章』とでも称すべきだろう。舞台装置から主役プリマドンナに変貌した力は、いったいどれほどなのか……。

期待に笑みを浮かべた俺の視線の先からトットムジカが消え、俺は直後に腕に武装硬化を纏って反転、後方から横なぎに放たれた蹴りを受け止めた。

だが、その蹴りは重たく、しっかりと防御したにもかかわらず勢いに押されて体が横に飛ぶ。とはいっても、ふんばりが利かなかつただけで、ダメージは無い。と、そう考えた瞬間トットムジカが眼前に居て、空中に浮かぶ人形の腕が振るわれる。

腕を交差して受け止めるが、やはり完全には堪え切れず、体が浮く。三度トットムジカの姿が消える。直後に後頭部に逆三角錐の脚での刺突、頭を傾けてかわす。今度は前方から腹下への掌底、武装硬化と鉄塊の同時使用で防ぐ。右方向からの蹴り、片拳を当てて軌道を逸らす。後方からの拳、正面からのアッパー、左からの足払いと続けざまに攻撃が放たれる。

凄いな……予備動作もタイムラグも一切ない瞬間移動か。移動速度において、理論上これ以上はあり得ない。エネルギーも黄猿よりも速いゼロ秒での移動。さらにそれだけではない。その攻撃の威力たるや、俺でさえもしつかりと防御しなければダメージを免れないほどだ。

その上、止めとばかりに最終楽章になったトットムジカは……『見聞色が効かない存在』へと変わっていた。

おそらくこれは、霸王色の覇気によって可能になる見聞殺しと同質のものだと予想できる。未来予知にトットムジカは映らず、その攻撃も見聞色で察知することができない。

理論上最速の移動速度、圧倒的な攻撃力がステルスの如く察知できない。なんとも凶悪な組み合わせだ。

「……ふっ、ふふふ、ああ、そう来なくちゃな！」

正面から、後方から、左右から、上下から、迫りくる攻撃を捌き続

ける。なるほど、確かにゼロ秒移動は最速だ。確実に俺より速い上に、一切予兆が無く未来予知もできないので発動タイミングがわからない。だが……攻撃までもゼロ秒というわけでは無い。

必ず出現して攻撃するという工程を踏む以上、移動の瞬間は分からずとも対処できる。

見聞色が効かないことに関しても……俺はそもそも戦闘において、見聞色を当てにしたことなど一度もない。見聞殺しという技術が存在する以上、当然見聞色が通用しないという状況は想定していた。

だから他のあらゆる感覚も極限まで研ぎ澄ませて鍛錬している。見聞色など使わなくても俺の体は、超高性能レーダーのようなものだ。

しばらくそのまま攻撃を捌き続けていると、罅が明かないと判断したのかトットムジカは攻め手を変えてきた。瞬間移動するのではなく正面から、空中に浮かぶ人形の腕を同時に振り被る。

するとその腕の数が左右10本ずつに増え、右腕は紫色の炎を、左腕は青白い冷気を纏う。ブルツクの黄泉の冷気に近い技か、防御されても熱や冷気でダメージをとというわけか……。

「……紙絵」

俺の前で軽く跳躍し、振り下ろすように放たれる計20本の腕による乱打。それはまるで拳の豪雨……いや、迷路だった。降り注ぐ拳を回避する順番、回避する方向、そのひとつでも間違えてしまえば、一気に捕らえられ膨大な数の拳を叩き込まれるだろう。

事実、その速度は俺の拳と比較しても差はほぼ無いほどに速い。先ほどまでよりは速度を重視しているとはいえ、威力も相応にあるだろう。迂闊に受けるわけにはいかない。

紙絵で拳の雨を掻い潜っていると、不意に左右10ずつの手が融合し巨大な掌となって、俺を挟み込むように迫ってきた。

回避されるならできない大きさで……合理的な上に、速い。回避は無理か……。

「金剛鉄塊」

鉄塊と武装硬化を同時に使い、左右から迫る掌を受け止める。その

瞬間、体に凄まじい電撃が走る。炎に冷気に電気までもか……だが。「舐めるな。電撃に対する耐性ぐらい、持っている」

当たり前だが、肉体の強度がいかに高かろうが熱や冷気、電気といったものを相手にするなら、強度だけでは意味がない。

悪魔の実の能力がある以上、当然予想して対策しており、幾度となく行った肉体改造によりそういったものに対する耐性も十分に獲得している。

力を込めて、掌を弾く——直後、トットムジカの左目が光るのが見え、咄嗟に顔を逸らすと、赤い閃光が頬をかすめた。

第三楽章の時に放っていた光線を圧縮したものか？ 大した速度と威力だ。

頬を微かに指で触れてみると、ぬるりとした感触があった……いつ以来だろうか、戦いで血を流したのは……武者修行以来か？

そんなことを考えていると、トットムジカは人形の腕を黒く染め、掴みかかるように手を伸ばしてきた。一見覇気のようにも見えるが、今度はなにをするつもりか……避けれないわけでは無いが、これはそういう戦いではない。受けて立つか……。

こちらも手を伸ばし、トットムジカと手を掴み合い、力比べのような姿勢に移行する。瞬間、黒い人形の腕が膨張し凄まじい圧力が襲い掛かってくる。

「ぐっ……」

ズルズルと、滑るように体が後退する……初めての経験、だな。俺が誰かに力負けするなんて……。

しかし、こうして手を組んで触れ合うとよく分かる。トットムジカの持つ桁外れな負の感情が濁流のように流れ込んでくるようだ。凄まじい怨念、凄まじい負の感情……なるほど、さすがは魔王だ。

骸骨たちの歌も勢いづく、俺という贅を舞台の主演が喰らう様を賞賛するかのように……。

「ふ、ふふ、ふふふ……」

思わず口元から笑みがこぼれた。ああ、思っていた通り……いや、思っていた以上に凄まじい力だ。速度、膂力も次元が違う上、相手の

出方に合わせて切り替える多彩な攻撃手段。

「いったいどれだけ引き出しがあるのか、もしかしたら底など無いのかもしれないほどだ。幾度となく行った肉体改造により、もはや世界すべてを敵に回しても問題なく勝てる」と確信できる程に力を付けていたはずの俺が、いまは確実に押されている。

「やっぱり思っていた通り、お前は最高だ……トットムジカ」
「ッ?」

グツと更なる力を入れると、押されていた体が止まり、力が拮抗する。ここがもし現実世界であれば、俺とトットムジカの力比べの余波だけでエレジアの町は吹き飛んでいたかもしれない。それほどの力が俺たちの間には流れている。

「なあ、トットムジカ……こうして魂の中に招き、お前がこれほどまでに抱えていた怨念を、負の感情を爆発させてくれてるんだ。なら、俺も応えるのが礼儀というものだな」

更なる力を籠める。少しずつトットムジカの手を俺の手が押し返す。

ああ、せっかくの機会だ。この魂の中で互いのすべてを曝け出して、全霊で戦うことにしよう。

「だから、お前に教えよう。親父にもポチにも、誰にも話したことはない。俺の心の深奥……一番深い、狂気の根底ともいえる闇を……」

ミシミシと黒い人形の腕にヒビが入り始める。

「……渴くんだ。心が、魂が——いまもなお、満たされることなく、渴き続けているんだ」

直後に俺は黒い腕を握り潰す。トットムジカは一瞬驚愕したようにピクリと体を動かし、バツクステップで距離を取る。

破壊した腕は即座に黒い霧に変わり、再び白い人形の腕としてトットムジカの肩の横に浮遊する。どうやら、再生能力も持ち合わせているらしい。

だが、トットムジカは攻撃を仕掛けては来ず停止しており、歌っていたはずの骸骨たちもいつの間にか沈黙していた。

「どうやら、俺の話聞いてくれるつもりらしい……ありがたいこと

だ。

「トットムジカ、俺はよくこう口にするんだ。平凡な幸せが欲しい。平凡でありきたりな幸せを手に入れるのが目的だと……ああ、もちろん嘘を言っているわけじゃない。心からの言葉だ。だがな、この言葉には……頭に付く文字が欠けているんだ」

結局最初からそうなんだ。ずっと、ずっと、なにひとつ変わっていない。俺の心の一番奥、狂気の源となっているのは、その想いだ。

「……『前世の』とな。笑える話だろ？俺が求めているのは、未来はおろかこの世界にすら存在しないもの……失ったことで初めて、どれだけ大切だったかに気付き、いつしか神聖視すらしてしまっているかつての日々……俺が奪われたもの……ああ、もちろん分かっている。それはこの世界のどこにもない、どれだけ手を伸ばそうとも手に入らないものなのだ……理解は、しているさ」

そこで一度言葉を区切り、静かに心の奥……ずっと感情を抑え込んでいた蓋を外す。

「……だが、俺の心は、魂は！ たしかにソレが『有った』と確信しているのに!! それが、この世界のどこにも存在しないなどと、どうして納得できる!!」

「……!?!」

「何度も受け入れようとしたさ、この世界でも得たものは多い。大切と呼べるものだって存在する。それで妥協すればいい。もう無くしてしまったものを追いつける必要なんてない……だが、その度に心の奥底で叫ぶんだ！ まだ『あらゆる可能性の果て』を見てなどいないのに、なぜ諦められるのかと……渴くんだ、心が……魂が……」

ああ、そうだ。たしかに無理だ。どれほど考えても前世の幸せをこの手に取り戻す方法など思い付きはしなかった。

だが、それでも思ってしまうんだ。いまはまだ俺が知らないだけで、なにか方法があるのではないのかと……諦めきれない心が叫び続けている。

「人は過去には戻れない。いや、仮に戻れたとしても、この世界の過去に俺の求めるものは無い……だから、進むしかないんだ。狂った心で

ブレーキを壊し、暴走するように力を求めて進み続ける。可能性の果てに行きつくまでな。その渴きこそが……俺の全ての根底だ」

理解はしていても納得はできず、この世界には存在しない前世の幸福……決して手に入らないものに向けて手を伸ばし続け、力を求めて前に進み続ける。

もちろん力を求めるのには他にもいろいろ理由はある。もう二度と奪われないためとか、いろいろ……だが、結局俺の心の奥底を掘り下げれば、最後に到達するのは……失った前世への渴望。それが、俺の狂気の根底だ。

「……ふふ、やっぱり溜まっていたのもあるのか、感情を爆発させるとスッキリするな」

「……」

「聞いてくれてありがとう、トットムジカ……」

そう呟くと共に、俺の体から膨大な覇気が溢れ出す。ああ、今日は初めての経験が多い一日だ……これも、いつ以来……いや、その時からさらに幾度もの改造を経ているので、初めてというべきだろう。

初めて——『本気で戦う』。

武装色と霸王色を……同時に纏う。俺の体が漆黒に染まり、それでもなお収まりきらない覇気は、俺の体の外に溢れ出し外殻を形成する。

全身漆黒の鎧……いや、鎧なんて綺麗に整ったものではないか、もっと禍々しい甲殻のようなもので全身が覆われる。

おそらくいまの俺は、漆黒の化け物のような姿をしているのだと思う。世界を滅ぼす怪物のような姿を……ああ、だから、この姿をこう呼ぼう。

「——『アポカリプス終末の獣』」

「……」

トットムジカが一步後ずさるのが見えた。俺のただならぬ気配を感じてのことだろう。だが、本当に一步だけであり、それ以上下がることは無く堂々と立つ姿には風格と気品を感じた。

本当に……魔王という名に相応しい姿だ。

そんなトットムジカに対し、俺は膨大な覇気で覆われた両手を広げるようにして告げる。

「……再開しよう。トットムジカ……歌え、そして踊れ……お前のすべてを俺にぶつけてこい。俺がお前の全てを受け止めてやる。寂しさも憎しみも、怨念も……すべてを認め、すべてを受け止めてやる」手を合わせて感じたトットムジカの根源。数多の感情の中……認められたい、受け入れて欲しい、寂しいという強烈な感情。

だから、俺は退かない。トットムジカのあらゆる攻撃を、あらゆる力を正面から受け止める。お前の負の感情を全て……だから、ああ、だから……。

「代わりにお前のすべてを、新たな可能性を——俺によこせ!!」

夕暮れの後奏曲（ポストリユード）

モノクロの世界。果てなく続く灰色の大地で、俺とトットムジカの戦いはようやく終わりを迎えた。魂の中の疑似ウタワールドでなければ、世界が10度は滅んでいそうな、そんな規模の戦いだっただ。

トットムジカは本当に強かった。本気を出した俺を相手にしても一歩も引かず、相当の時間戦い続けていた。

だが最終的に、勝利を掴んだのは俺であり、仮面も体もヒビだらけになり宙に浮いていた骸骨もすべて地に落ちぐったりとするトットムジカの首を掴む。

「……すべてを吐き出して、ぶつけて、スッキリしたか、トットムジカ……俺もだ。こんなに、全力を出し尽くしたのは初めての経験だったよ」

「……」

首を掴む俺に対して、トットムジカは抵抗する様子を見せない。もうトットムジカに戦う力は残っておらず、俺がもう少し首を持つ手に力を加えれば、トットムジカの体は砕け散るだろう。

ひび割れた仮面でこちらを見るトットムジカは、敗北を受け入れているかのように感じられた。

「このままお前を破壊して、俺の魂に取り込み、お前の力を俺のものにする……つもりだった。だが、なんだろうな？　少し、惜しくなったよ」

全ての感情をぶつけ合って戦ったトットムジカに対し、情のようなものを抱いているとでも表現すべきだろうか、このまま消してしまうのは惜しいような気がした。

だから、当初の予定とは少し変わるが……俺はトットムジカに告げる。

「トットムジカ……俺と共にこい。お前は、長らく封印されていて、世界を知らないだろう？　どうしても、世界を滅ぼしたいというのであれば話は別だが、そうでないのなら……一緒に行こう。俺がお前に世

界を見せてやる」

「……」

「例えるなら、俺とお前の魂が混ざり合うようなものか……お前は俺を通して世界を見る。俺は、お前の力を得る……悪くない提案だと思うが、どうだ？」

静かに告げる俺の言葉を聞き、トットムジカはしばしの思考の後で頷いた。そして直後にトットムジカの仮面が縦に割れ、中から禍々しい気配を放つ漆黒の球体が姿を現した。

いわばそれは、トットムジカのコア……魂というべきものであり、それを差し出すということは、トットムジカにとって俺の提案を了承した証でもあるのだろう。

深い怨念を感じるその球体に手を伸ばして触れると、急激に意識が浮上していく感覚があった。

・***

気が付くと、空は茜色に染まっており、瓦礫に座っている俺の眼前に広がる海も夕焼けに染まっていた。

俺がエレジアに來た時間を考えると、数時間が経過……いや、待てよ？ 疑似世界での戦いはもつと長くやってた気がする。

ポケットから日付も確認できる時計を取り出すと……丸一日が経過していた。どうやらトットムジカとの戦いが楽しくて、丸一日以上全力で戦っていたみたいだ。

苦笑しつつ右手を見る。トットムジカの楽譜を握っていたはずのその手に楽譜は無く、代わりに仮面が握られていた。

トットムジカの顔を模したような……口元だけ、微笑みの形に変わった仮面。そういえば、CPのエージェントは仮面を付けて活動することもあったが、俺は自分の仮面は持ってなかったな。

ゆつくりとその仮面を被り、仮面越しに夕日を見つめる。

「……なあ、トットムジカ。たぶんなんだが、俺に訪れる結末は二通りだと思うんだ。ひとつはどれだけ足掻いても、どれだけ可能性の果て

に辿り着いても望むものは得られず、世界に絶望して……この世界を滅ぼす未来」

頭では理解しているんだ。本当にあらゆる可能性に辿り着いたとしても、俺が望むかつての平凡な幸せがこの手に戻ってくることはないと……だが、それでもまだ、いまは夢を見ていられる。

微かな可能性があるかもしれないと、そう思っていられる。だが、そう思えなくなった時……世界に絶望したなら、俺は八つ当たりのように世界を滅ぼすだろう。

「もうひとつは……失ったことと思い出による補正で、神聖視すらしている前世の幸せ……それを、この世界で得たものが上回り、かつての世界よりこの世界が大切になり……ようやく渇きが癒える未来。俺に待つのはおそらく、そのどちらかの未来だろう」

こちらにも可能性は感じている。最初は自分以外のなにかを大切に思うつもりは無かった。だが、それでも、少しずつ情が移っている存在は居る。少しずつこの世界で得たものが、占める心の割合が大きくなりつつあるようにも感じている。

だからもしかしたらいつか、渇きが癒える未来も……あるのかもしれない。

「……トットムジカ、俺が世界を滅ぼすと決めた時、お前も同じ気持ちなら一緒に世界を滅ぼそう。その時お前がこの世界になにかを感じていたなら、俺の前に立ちはだかってもいい。あるいは俺がこの世界を大切に思った時、お前もなにかを得ていたなら共に世界を見続けよう。逆にその時にお前が世界を滅ぼしたいと考えていたなら……俺が今度こそ、お前を終わらせてやる」

そう呟きながら仮面を外し、夕日にかざしながら笑みを浮かべる。「いま挙げただけでも、お前には4つの未来があるな。俺より多くていいじゃないか……まあ、俺もお前も、まだまだ知らないものも、見たことが無いものも、体験したことが無いものもいくらでもある。世界に絶望するには早すぎる……だから、しばらく付き合え」

俺の言葉に呼応するように仮面の左目が赤く点滅し、それを見てフツと笑みを溢したあとでその仮面を己の胸に当てる。

すると仮面は吸い込まれるように俺の体に溶け込んでいき、俺はゆつくりと瓦礫から立ち上がる。

感覚的に理解できる。イメージとしては地図に点を打つような感じか……。

そう考えた直後、俺はエレジア城の屋根の上に立っていた。なるほど、コレがゼロ秒での移動か……感覚に早めに慣れる必要があるな。だが、それよりも……。

「……く、くくく、はははは！ あっははは!!」

笑い声が零れる。とても清々しい気分だ。こんな気分は初めて肉体改造により進化した時以来とっていい。

果たしてトットムジカの魔力を手に入れたのが要因か、それともトットムジカと一種の融合をしたことで、俺の魂がスパンダムでもトットムジカでもない別のナニカに変貌したせいか……理由は定かではないが、確信できることがひとつ。

俺の楔は——いま、外れた。

頭に濁流のように思考が巡る。いままでは思い付かなかった考えが次々と……俺は、懐から通信機を取り出して連絡を行う。

すると1コールでポチがでた……そういえばコイツ、いつかけても絶対1コールで出るな……。

『はい。どうしましたか、隊長?』

「ポチ、ルッチたちに連絡を入れておけ。お前たちや他のCPの情報でプルトンの設計図のありが分かった。5日後に俺が直接現地に行つてこの一件は終わらせると……ああ、それとその前日に五老星にアポを取つておいてくれ、いくつか得ておきたい許可がある」

『分かりました……隊長、すぐく上機嫌ですな』

「ああ、久しぶりに清々しい気分だ。自由だなんだと叫ぶ連中の気持ちも、分かる気がする」

煩わしかった楔は抜け、望んでいた力も手に入れた。気分は最高と言つていい。別に声などはいつも通りのつもりではあったが、ポチは気付いたみたいだ。

まあ、ポチなら気付くか……。

「……ポチ、とりあえずいまから一度家に戻るつもりだ。食事の用意をしておいてくれ」

『はい！… なにか希望はありますか？』

「任せ……いや、お前の得意な料理でいい」

『了解です』

「では、またあとでな」

そう言っただけで通信を切る。思わず口元に小さく笑みがこぼれる。そういえば、ポチが要因だったな……俺が己の結末が、ひとつではなくふたつあると思うようになったきつかけは……。

たどり着く果てが絶望のみではなく、小さな希望を感じ始めたのは……まあ、どう転ぶかはいまだ俺にもよく分からないが、期待はしておくとしよう。

視界の先、夕日に染まる茜色の海は……いままで見たどんな夕日よりも、美しく見えた気がした。

夜の嬉遊曲（デイベルテイメント）

トットムジカとの戦いから2日経った日の夜。俺は再び新世界のレッドフォース号の甲板にいた。理由は宣言していた通りウタとゴードンの迎えだったのだが……そのふたりを盛大に見送るという名目の宴会に巻き込まれた形になる。

コイツら、俺が一応世界政府所属の人間だつて分かつてるのか？
そう呆れつつも、いまの俺は過去最高に気分がいいこともあつて参加していた。

まあ、バカ騒ぎする趣味は無いのでウイスキーをゆつくり飲んでくれるだけだが……。

「……ところで、本当にその選択でいいんだな？」

「うん。シャンクスもゴードンもスパンダムさんも、皆私のせいじゃないって言ってくれた。けど、エレジアをあのままにしたままで、シャンクスの船に戻るのは私自身が納得できない。だから、赤髪海賊団の音楽家は一旦休業！ 私の歌で、もう一度エレジアを音楽の国として復活させて見せる!!」

3日間しっかりと話し合った結果。ウタはエレジアに戻ることを決めたらしい。8年生活してきたエレジアにも愛着があり、負い目もあるのだろう。だが、それ以上にやる気に満ち溢れているように感じた。

最初の魂が抜け落ちたかのような顔ではなく、目標を決めそこに進んでいこうという強い意志が宿っていた。

「そうか、まあ、乗り掛かった舟だ。俺もある程度は協力しよう」

「本当っ!? ありがとう、凄く心強いよ!」

俺はウタとシャンクス、そしてゴードンには本当に感謝している。コイツらが居てくれたおかげで、俺はトットムジカという力を手に入れた、楔を抜くことができた。大きな恩があると云っていい。

当面のウタの目標はエレジアの復興になるわけだから、協力しやすいだろう。劇場版において、シャンクスがフィガールランド家に関係し

ていると考えている五老星は、その娘であるウタに対しても対処を躊躇するような節もあったので、そちら方面も問題はない。

そしてウタウタの実に関しては、シャンクスやゴードンも含めて話し合った結果、眠ることによる強制解除ではなく、己の意思で解除できるようになるまでは、一般人相手には使わないという形で纏まったらしい。

とりあえず、近いうちにリリースをエレジアに引っ張っていくとしよう。歌手としてデビューするなら、必要になるだろう。

「……ああ、それと、ゴードン」

「うん？」

「トットムジカの楽譜については、俺が処理しておいた。お前では、たぶんどきなかつただろう」

「……そうか……ああ、私は音楽を愛するものとして、楽譜を捨てるという選択がどうしても取れなかった。ありがとう、感謝する」

嘘は言っていない。処理したのは間違いない……処分したとは言っていない。まあ、トットムジカに関しては既に俺の魂の中に居るので、いま仮にあの楽譜で「Tot Musica」を歌ったとしても、トットムジカが顕現することはない。まあ、それに関してはあるものを用意しているの、後で話すとしよう。

トットムジカは俺にとつて一種の切り札といえる存在なので、俺と融合していることは出来るだけ隠しておくつもりだ。必要な時には使うが、そもそも説明が面倒だというのもある。

そんなことを考えつつ、軽く雑談をしていると……シャンクスがこちらに近づいてきた。

「……少し話せるか？」

「ああ、いいだろう」

どこかしらのタイミングで来るだろうとは思っていたので、すぐに了承し、賑わう甲板から離れて船の裏手に回る。

シャンクスはしばし沈黙したあと、俺に向かって頭を下げた。

「……まずは礼を言わせてくれ、ありがとう。おかげで、娘と仲直りすることができた」

「大海賊が世界政府の役人に頭を下げていいのか？」

「かまわないさ。海賊としてではなく、父親として下げているのだからな……」

「そうか」

少しして頭を上げたシャンクスは、真剣な表情で俺を見つめながら告げる。

「お前には感謝している。大きな恩ができたと思っっている。だが、その上で聞きたい……ウタを、俺の娘をこれからなにかに利用するつもりは？」

「無いな」

利用という意味ならもう終わっているし、今後ウタになにかするつもりかと言われたら、特になにもない。むしろ、ウタには感謝しているので、場合によっては助けるつもりですらいる。

シャンクスは鋭い目のままでジッと俺を見つめている。その思惑を探ろうとするかのように……。

「……信じる信じないは好きにしろ」

「いや、信じるさ。だが、覚えておいてくれ、裏切った場合は……容赦はしない」

「お前が、俺に勝てるか？」

「無理だろうな。お前は強すぎる……死力を尽くしてもかすり傷すら負わせられないかもしれない。だが、それでも、ウタを傷つけたなら俺はお前に刃を向ける」

「……そうか」

「まつ、あくまでもしものことだ。たしかに底知れなさはあるが、それでもお前が根っからの悪人とは思えないしな……そんな未来が来ないことを祈る」

なかなかいい覚悟だと、素直に感心した。シャンクスは俺を低く見ているわけでは無く、正確に俺の実力を理解した上で、それでも俺がウタを理不尽に利用することがあれば許さないと宣言した。

俺自身がシャンクスに感謝しているのも影響しているが、個人的にはいい印象だ。

「……まあ、ウタのことを想うのであれば、たまには顔を見せてやることだ。少なくとも8年も置き去りだったのだからな」

「うっ、それを言われると痛いな……」

真剣な話は終わった様子で、シャンクスは苦笑しながら頭をかく。それを見て俺も微かに笑みを浮かべ、賑わう甲板に戻っていった。

甲板に戻り再びマストに寄りかかると、ウタが少し戸惑いがちに話しかけてきた。

「……スパンダムさん、シャンクスと何を話してたの？」

「ああ、どうも放任癖が酷いようだったからな。今後はもう少し定期的に娘に連絡を取れと、そう忠告しておいただけだ」

「ふふ、そうなんだ……けど、うん。それなら、私も嬉しいな」

「まあ、お前が心配するような話はしていないさ。俺個人として赤髪海賊団をどうこうする気もないし……それよりほら、ステージが歌姫を呼んでいるみたいだぞ」

俺の言葉を聞いてウタは安心したような表情を浮かべたあと、赤髪海賊団の船員たちに呼ばれて簡易ステージに向かって、楽し気に歌い始めた。

それをぼんやりと見つめながら、近くに居たゴードンに話しかける。

「それはそれとして、ゴードン……あの子に、音楽だけでなく一般常識もちゃんと教えてやれ、世間知らずにもほどがあるぞ。最低限の知識は無いと、偏った思想に流される可能性もある。せめて、新聞ぐらいは読ませてやれ」

「た、確かに音楽のことばかり教えてたな。しかし、エレジアにはニュースクーも来なくて、外の情報を得る機会が少ないんだ」

「それは俺の方で手配してやる。歌手としてデビューする前に、ある程度世界の常識は知っておくべきだ」

実際FILM REDにおいて、ウタは外の世界のことをほぼ知らない感じだった。ファンから聞かされる愚痴や不満を、外の世界の形と思い込み、新時代を作ろうとしたりと極端な思考に偏りがちだったので、その辺りは矯正しておくべきだ。恩返しも兼ねて、その辺りも

多少世話を焼いてやることにしよう。

そう思いながら俺は懐から数枚の真新しい楽譜を取り出し、一曲歌い終わったウタに近づく。

「……ウタ、これを」

「スパンダムさん、これは？」

『Tot Musica』の楽譜だ」

『な、なにー!?!』

俺の言葉を聞いて、ゴードンや赤髪海賊団の面々が驚愕したように叫ぶ。

「ああ、勘違いするな。コレは俺が書き写した楽譜で、トットムジカの怨念は宿っていない。仮にこれをウタウタの実の力を使って歌ったとしても、トットムジカが顕現することはない。歌に罪は無い、そうだろう？」

「……スパンダムさん……うん！　そうだよ。曲に、音楽に罪は無いよね。この曲も、きつと……誰にも歌ってもらえなくて、寂しかったんだよ」

「そうかもしれないな……とりあえず、お前に渡しておく。好きにしろ」

「うん！」

俺から楽譜を受け取ったウタはしばらく真剣な表情で楽譜を見つめ、シャンクスとゴードンに視線を送る。

そしてふたりが頷いたのを見て、ゆっくりと「Tot Musica」を歌い始めた。ウタウタの実の力は使わずに紡がれるその歌、当たり前だがトットムジカが顕現することは無い。

口元に笑みを浮かべながら再びマストにもたれ掛かりウタの歌を聞く。

いい歌だな……トットムジカ。

ようやく歌ってもらえたからだろうか？　俺の魂の中のトットムジカが喜んでるように感じられた。

深夜の終曲（フィナーレ）

深夜のウォーターセブンの一角。橋の下にある解体屋フランキーの秘密基地……かつてトムズワーカースがあつた場所にフランキーとアイスバーグの姿があつた。

両者とも後ろ手に拘束されており、その周囲を囲むように仮面を被り白いローブで身を隠した4人のエージェントらしき者たちとひとりの女性が居た。

「てめえら……なんのつもりだ！　こんな鎖程度で俺を……」

「よせ、フランキー！」

「……アイスバーグ」

「迂闊に暴れるな……他はどうにかなつても、その女だけは無理だ」

「チイツ……」

誘拐同然にこの場に連れてこられ、暴れかけるフランキーではあつたがアイスバーグによつて制される。たしかにフランキーは強い。荒くれ者たちもまとめ上げる力もあり、体の半分をサイボーグ化していることもあつて、相当の実力者と言つていい。

だが、そもそも、現在そのフランキーは拘束されている。ほぼ無傷……その理由は単純だ。フランキーをここに連れてきた相手は、実力者であるフランキーをほぼ無傷で捕らえられるほどの圧倒的実力者だということ……。

「そうですね。暴れないことをお勧めします。処遇に関して、隊長から具体的な指示はありませんし……五月蠅いようなら、黙っていたらくことになります」

ふたりの正面に立ち、静かに告げるチエルシー……その小柄な体軀からは想像もできないほどの威圧感があり、戦闘に疎いアイスバーグですら、圧倒的な力を感じていた。

フランキーもさすがに力量差は分かっているのか、アイスバーグの言葉を聞いて舌打ちをする。

そんな橋下倉庫の中に規則正しい足音が響き、CP9司令長官のス

パンダムが姿を現した。

「……久しぶり、五年ぶりか？　俺を覚えているか、トムズワーカースのふたり」

「て、てめえ……スパンダム!!」

「覚えてくれてたようで幸いだ。自己紹介する手間が無くていい」

現れたのはアイスバーグとフランキーにとっては因縁の相手。5年前にトムを罠に嵌め連れ去った世界政府の役人であり、フランキーは叫びアイスバーグも表情を強張らせる。

それを気にした様子もなく、スパンダムはチェルシーが用意した椅子に座る。

「ポチ、椅子をあとふたつ……あと、そいつらの拘束を解いてやれ、別に必要ない」

「ツ!?!」

瞬間、スパンダムが少し抑えていた気配を解放したことで、アイスバーグとフランキーは押しつぶされそうなプレッシャーを感じた。

少なくとも絶対に勝てない相手だと確信できる程の、凄まじい実力差を感じさせられた。

その後、拘束を解かれて椅子に座らされたふたりに対し、スパンダムは静かに告げる。

「さて、俺の用件はわざわざ言わなくてもわかるところが……プルトンの設計図を渡してもらおうか」

「ンマー。生憎だがそんなもんは知らねえな」

「仮に知ってたとしても、テメエらなんかに渡すわけがねえだろ」

険しい表情で返すフランキーとアイスバーグに対し、スパンダムはその返答は予想通りと言いたげに落ち着いた表情で言葉を続ける。

「残念だが、そういうった問答の段階は過ぎている。俺がここに出向いてきているということは、設計図の存在も所在も分かっただ上で来ているわけだ。いまさらとぼけたところで、意味は無い」

「ンマー……なら、どうする？　俺たちを殺すか？　俺もフランキーも、たとえ殺されたとしてもお前たちに従うことは無い」

それでもあくまで設計図を持っているとは口にしないアイスバー

グに、スパンダムは少し感心したような表情を浮かべる。

たしかに、アイスバーグにもフランキーにも強い意志があった。亡き師の意思を継ぎ、設計図を守り抜くという……だが、それは次のスパンダムの言葉で脆くも歪むことになった。

「もし、素直に設計図を渡すなら……トムをお前たちに返してやってもいい」

「……な、なにを言ってる……トムさんは——」

「生きているが？」

「——なっ!？」

先ほどまでの強い表情は消え去り、明らかに動揺を露わにするふたり。声を震わせながら話すフランキーの言葉を遮り、スパンダムはふたりの前に真実を提示する。

「船大工のトムは、海列車を作った功績により『ゴールドロジャーの海賊船製造の罪を免罪』。しかし、司法船襲撃に関わったことが本人の口から明かされたため、犯人として連行した。司法船襲撃は重罪ではある……だが、別に一発死刑というレベルの話ではない。懲役刑となり現在は服役中だ。ああ、もちろん拷問などをしているわけでもなく、普通に服役しているだけだ」

「……馬鹿な……だが、あの時、裁判で……」

「なんだ、アイスバーグ、知らなかったのか？ 俺は司法の島工二エスロビーのトップだぞ。その程度のことを捻じ曲げられるぐらいの権力は持っている」

そう5年前のウォーターセブンの一件のあと、スパンダムは権力を使いエニエスロビーでの再裁判においてトムの罪を変更。極刑ではなく懲役刑とした。

現在のトムはインペルダウンでもなく、ごくごく普通の刑務所にて服役中だ。

「とはいえ、司法船襲撃も重罪だ。それなりに刑期は長い……だが、お前たちがプルトンの設計図を渡すのであれば、すぐに釈放するように手を回してやろう」

「……」

スパンダムという言葉に、アイスバーグとフランキーの表情には強い困惑が生まれる。そう、先ほどまではよかった。彼らはある意味背水の陣であり、亡き師と同じように命を賭して設計図を守ると覚悟を決められた。

だが、いま、ふたりは別の選択肢を知ってしまった。プルトンの設計図を差し出せば、トムを救うことができる……そんな、甘い希望が目の前に提示された。

そしてそれは同時に、スパンダムがその気になれば服役中のトムを処刑できるということでもある。スパンダムほどの権力があれば獄中死などいくらでも可能だろう。

彼らの前には悪魔の選択肢が現れた。トムの意味を継いで設計図を守り、結果トムを見捨てるか……トムの意思を踏みにじってでも、トムを助けるか……その二択だ。

「せっかくだ。ついでにお前たちの懸念であるニコ・ロビンについても話してやろう」

「……なぜ、それを？」

「諜報機関の重役にそれを聞くか？ まあ、せっかくだから少し聞いていけ、オハラでの出来事を……ああ、念のために忠告しておくが、聞いた話を他に漏らせば場合によっては暗殺もあり得るから、注意しておくんだな」

自分たちとトムしか知らないはずの懸念、ニコ・ロビンについてアツサリ言及するスパンダムの底知れなさに戦慄するアイスバーグを無視して、スパンダムはかつてオハラであった出来事を語っている。

ニコ・ロビンという存在に訪れた悲劇と、世界政府と海軍によるオハラの壊滅……そのすべてを聞き終えると、フランキーが吐き捨てるように口を開いた。

「……屑どもが」

「オハラの件に俺は関わってないので、俺に言われても困るが……ニコ・ロビンはたしかに政府の基準では大罪人ではあるが、積極的に古代兵器を復活させるような存在ではないというわけだ。その後の逃

亡生活で精神的に変貌していれば分からないが、それを言い出したらキリが無いからな……さあ、これで一応と頭には付くが、お前たちの懸念にも答えが出たわけだ」

苦笑を浮かべつつ、スパンダムが告げたあと、軽く手を動かすとチエルシーがそれに反応して、映像電伝虫を取り出した。

「……そして、ここからが最後にして最大の譲歩だ。それでもお前たちは俺に設計図を渡すことに抵抗があるだろう？ だから、こうしてやる……いま、俺の目の前で設計図を燃やして処分しろ。それで、渡したことにしてやろう」

「……なんだと？」

「要は、世界政府以外の人間が古代兵器を手にする可能性があるのが問題であって、こちらとしては設計図にもプルトンにもさほど興味は無い。だから、いますぐに処分するなら、それで終わりにしてやろうという話だ。こちらのトップにも許可を取っている」

三度戸惑いを浮かべるふたりに、スパンダムは淡々と説明する。するとそのタイミングでチエルシーが五老星に繋がった映像電伝虫を持ってスパンダムの横に立つ。その映像電伝虫に映るように燃やせという意味だというのは、ふたりにもすぐに理解できた。

「……ああ、それと、誤解しないように伝えておく。これは、慈悲だ。ガレラカンパニーは政府にとつても重要な会社だからな。今後の取引も考えて、特別に譲歩している形だ。だから、勘違いをするな？俺は言ったぞ……設計図の所在も分かっていると。どちらが持っていて、どこに隠しているかも含めてすべて分かった上で言っている」

「……」

「この話にはふたつの結末しかない。素直に設計図を燃やしてトムを取り戻し、この件を終わりとするか……力尽くで設計図を奪われ、全てを失う結末か……30秒待ってやろう。好きな方を選べ」

スパンダムの言葉を受け、アイスバーグもフランキーもガツクリと肩を落とした。もはや逃げることも誤魔化すことも不可能であり、スパンダムの言う通りふたりに選択肢はふたつしかない。

どちらを選ぶかは……考えるまでもないことだった。

敗北感に唇を噛みながら、フランキーがサイボーグの体の中からプルトンの設計図を取り出す。

「全てを確認するようなことはしない。表紙を一枚めくって、映像電伝虫に映せ」

「……わかった」

「どうです?」

『ああ、間違いない。本物のようだ』

スパンダムの問いかけに映像電伝虫の先の五老星が答え、スパンダムは軽く頷いてから指を動かす。すると、チエルシーがフランキーの前に灰皿とマッチを置いた。

「燃やせ」

スパンダムの言葉に従ってフランキーは設計図を燃やし、プルトンの設計図は消え去った。

「確かに、これでプルトンの設計図は消滅しました。写しなどの可能性が無いわけでは無いですが、それを言い出すと本当にキリがないので、この件はこれで終わりで構いませんか?」

『ああ、(苦笑)苦労だった』

簡単なやり取りで通信が切れると、スパンダムは軽く笑みを浮かべながら口を開く。

「……さて、では、最後の仕事といこうか」

「……俺たちを……殺すのか?」

笑みを浮かべるスパンダムに対し、アイスバーグがやはりと言いたげな表情を浮かべる。スパンダムにしてみれば、原作……運命を大きく変えられたことで笑みを浮かべていたのだが、それを知らないふたりにしてみれば、不要になった相手を始末する笑みに見えたのかもしれない。

「うん? いや、トムの身元引き渡しの書類にサインしてもらっただけだが?」

「……………は?」

「身元引受人はある程度の社会的地位は必要だから、アイスバーグの

方にしてもらおうことになる。その後には手続をして、数日で釈放できるだろう。引き渡しはエニエスロビーになるから、追って日程を伝える。海列車で迎えにこい。ポチ、テーブルと書類を」

「はいー」

スパンダムへの指示を受け、チエルシーが少し離れた場所にあつたテーブルをスパンダムとアイスバーグたちの間に置き、その上に封筒を置いた。

「内容を確認して署名しろ」

「……ンマー……えつと……本当にトムさんを返してくれるのか？」

「そういう約束だろう？ お前たちが俺をどういう極悪人と思いつているのかは知らないが、俺はあくまで仕事でやっているだけで、お前たちにもトムにも個人的な悪感情は一切ない」

アイスバーグとフランキーの認識では、スパンダムはトムを卑劣な罠に嵌めた悪党なので……正直戸惑いは隠せなかったが、それでも書類の内容が問題ないことを確認して、サインをする。

その書類を受け取ったあとで、スパンダムはエージェントたちを連れて去っていった。

・***

深夜のウォーターセブン。人気のない廃船島に移動してから、仮面を被っているルッチたちに告げる。

「これで、ウォーターセブンでの一件は完了だ。これからお前たちは、ある程度時期をずらしつつ、退職して戻ってきてもらう」

「一斉に退職するわけでは無いのか？」

「それだと、我々がスパイでしたと宣言するようなものだろう。別にそれでもいいが、お前たちも数年の潜入で得た人間関係があるだろう。そういうものは大切にしておけ、どこで役に立つかわかんからなら。可能ならある程度円満に退職しておくべきだ」

ルッチはともかくとして、人当たりのいいカクなどは親しくなった相手も多いだろう。原作でもガレーラカンパニーでの日々にも思うも

のがあるような描写があつたしな。

「順番などは改めて連絡する。とりあえず深夜にご苦労、それぞれ指示があるまではこれまで通り行動するように……では、解散」

『了解』

俺の指示を受けてルツチたちは姿を消し、廃船島には俺とポチだけが残る。俺はポケットから棒付き飴をふたつ取り出し、ひとつをポチに渡してもうひとつの包装を破って啜える。

思わず口元がにやけてしまいそうになる。少なくともこれで、原作の流れは大きく変わった。ロビンに関して興味は無いので、これでエニエスロビー編が起ることは無いはずだ。

いままでどうあつても変えられなかった大きな流れをアツサリ変えられたことで、完全に楔が抜けていることを確信できた。

「……ポチ、思い通りに事を動かせるのはいいものだな」

「よく分かりませんが、隊長が嬉しそうなら私も嬉しいです」

「ふっ、さてそれでは俺たちもエニエスロビーに戻るか……帰ったら軽く晩酌でもするか……」

「はいー」

尻尾……もとい髪を振るポチに微笑みを返してから、剃刀でエニエスロビーに向かって空を駆けて帰還した。

師弟の再会

プルトンの設計図を燃やして任務完了となったことで、原作におけるエニエスロビー編は発生しないことがほぼ決定したようなものだ。仮にロビンを捕獲するような依頼が上から来たとして、海賊の捕縛は海軍の仕事だからそちらに回せと突っ撥ねれば問題ない。

しかし、楔が抜け原作を変えられるようになったからこそ思うことではあるが……正直俺個人としては、ルフィを含めた麦わらの一味を応援したい気持ちでいる。

ルフィは原作の主人公であり、いわば運命に愛された存在だ。エニエスロビー編が発生しなくても、なんだかんだで代替えとなる事件が起こり、ギア2やギア3も習得するのではないかと思っている。

そして俺が特に手出しをしなければ、運命に導かれるまま進んでいくだろう……というか、そもそも麦わらの一味は積極的に政府に敵対するような連中ではない。戦えば勝てる海軍船などにも大抵逃げることを選ぶ。

例えば、エニエスロビー編、インペルダウン編、頂上戦争編……これらを除けば、直接政府とやり合っているようなことは少ない。

エニエスロビー編を潰して、あとはインペルダウン編と頂上戦争編も、エースが海軍に捕らえられなければ発生しない。あとは割と国とかを救っているパターンが多いのは、物語の主人公だからだろう。

俺に直接関係ありそうなその三つは潰すつもりなので、そうすると俺がルフィたちに関わることはほぼ無い気がする。

その三つが発生していない状態だと、俺の下に暗殺任務が届く可能性もほぼ無いだろう。原作においても悪魔の実が覚醒しながらも、全力で潰すという感じでもなく、ワノ国編以後にCPOに下されたのはベガパンクの暗殺任務だった。そういう部分も含めて運命に愛された主人公といえる。

まあ、その辺りはどうでもいい。俺が麦わらの一味を応援したいという気持ちでいる理由は単純で……ひとつなぎの大秘宝の正体を知

りたいからだ。

俺はワンプリースの物語が完結する前に死んだので、ひとつなぎの大秘宝がなにかを知らない。例えばこの世界と別世界を繋ぐようなシロモノだったり、ドラゴンボールのような願いを叶える品だったりしないものか……ロジャー一味が大笑いするところとは、そういうものである可能性は低そうだが、未知である以上絶対に無いとも言いきれない。

ロジャー海賊団以外が何百年も辿り着いていない以上、普通に見つかるものではないのだろう。そもそも俺は古代文字を読めない、ポーネグリフを辿れない。

いや、仮に古代文字が読めたとしてもそもそも四つ目のロードポーングリフのありかを知らない。さすがにひとつなぎの大秘宝を探し始めたりすれば、世界政府も俺を放っておくことはできないだろうし、そうなるのはほぼ確定で世界と敵対する道になる。

ひとつなぎの大秘宝を手に入れば、確実に俺の願いが叶うというなら世界を滅ぼしてでも見つけ出すが……むしろ期待値としては低めだ。

世界にほぼほぼ絶望して滅ぼす気で最後の希望として探すならともかく、そうじゃない状態で自ら探す気にはならない。

なので、最終的には高確率で辿り着くであろう、麦わらの一味にひとつなぎの大秘宝を見つけてもらって正体を知るといいのはいい方法だと思う。

……まあ、だからと言って別になにをするでもないが……そもそも、本当にエニスロビー編以外で麦わらの一味と接点が無い。

運命に導かれて俺とは関係ない場所で頑張った結果、ひとつなぎの大秘宝に辿り着くならよし。俺が考えているほど運命は絶対ではなく、俺が手出ししなくても夢破れてしまうなら、それはそれで別にいいか……いよいよ世界に絶望しかけたタイミングで、探してみることにしよう。

せめて四つ目のロードポーングリフの場所を知っていれば、他に打てる手もあったのだが……まあ、いいか。

そこまで考えたところで時計を見ると、そろそろトムの引き渡しの時間だったので、立ち上がって移動する。

・***

指定の場所に移動すると、身元引受人のアイスバーグと同行してきたであろうフランキーの姿があった。おそらくは、最初はアイスバーグひとりである気だったのだろうが、フランキーが強引についてきたといったところか。

俺を見て表情を強張らせたふたりだったが、俺に続いて歩いてくる人物を見て、感極まったように涙を浮かべる。

「たっはっ!! アイスバーグ、フランキー……ドンと逞しくなったな」「トムさん!?!」

獄中生活で少し以前よりは痩せているが、それ以外は変わりない様子の子のトムを見て、ふたりは堪え切れないとばかりに駆け出して、トムにしがみつく。

「トムさんっ、俺はっ……俺はっ!!」

「泣くなフランキー。お前には、ずいぶん辛い思いをさせた。もちろん、アイスバーグにも……」

「トムさん……すまねえ、俺たちはトムさんに託されたものを……」
「話は聞いた。かまやしねえさ。むしろ、もっと早く処分しとくべきだったもんだ。なんにせよ、こうして立派に成長したお前たちと再会できて、嬉しいぞ」

まだ引き渡しは終わってないんだが……まあ、さすがに感動の再会を邪魔するほど野暮でもないので、泣きじゃくりながらトムと話すふたりが落ち着くのを待ったため、俺は飴を取り出して啜えた。

その後しばらく経って落ち着いたアイスバーグに正式な身元引受の書類にサインをさせる。

「確かに……それじゃあ、これでトムは正式に釈放だ」

「……お前さんの考えは、結局最後まで分からなかった。いったい、なにが目的だ」

「……だから、お前らは揃いも揃って、俺をどんな極悪人だと思ってるんだ。あくまで仕事だ。ああ、仕事ついでにもうひとつ……」

せつかく主要となる面々が揃っているのです、ついでにこの話もしてしまおうと書類を取り出す。

「確認だが、トムはガレーラカンパニーで雇う形になるのか？」

「ンマー当面はそういう形になるだろうな。トムさんへの風当たりもある。しばらくは我慢してもらうことになる」

「そうか、では……仕事の依頼だ」

「……は？」

「数年後を目処にエニエスロビーを建て替える計画を立てているのだが、そうなると当然物資の運び込みも多くなる。そこで、海列車の線路をもうひとつ増やして、海列車自体も増やす形で、行きと帰りの列車が同時に走れるようにしてくれ。ああ、これは政府からの正式な依頼だから、報酬などもしっかり用意する」

原作においては、エニエスロビー編の2年後にガレーラカンパニーは海列車の新車両「パツフィング・アイス」を完成させているが、トムが居るなら5年待つ必要もない。

線路を増やしてもらったほうがいいし、ガレーラカンパニーにとっても海列車の技術を職人たちに学ばせるチャンスだし、悪くは無い話だと思う。

「ンマー……この流れで、いきなり仕事の依頼か……」

「まあ、正式な書類は後日用意してガレーラカンパニーに持っていくが……話だけは先にしておいた方がいいだろう。現時点では、海列車を作るのはトムだけなのだし、本人が居る場面で言ったほうがいい」

呆れたような表情を浮かべるアイスバーグだが、トムはなにか真剣な表情で腕を組み考えていた。そのまま少し沈黙したあとで、一度頷いて口を開く。

「……その話、ドンと引き受けてもかまわねえ。ただ、ひとつ条件がある」

「ほう？　いいぞ、言ってみろ」

「可能かどうか分かんが、もし可能なら——」

「……いいだろう。それならこういう方法はどうか？」

トムが仕事を受ける代わりに出した条件を聞いて、俺は軽いため息を吐いた。さすが海列車を作るだけあって、突拍子もない発想をするものだ。

少し感心しつつも、提示された条件に合った方法を回答してやる。

「ただし、永遠に行うわけでは無い。ある程度で打ち切るつもりだから、根本的な対策を考えておくことだ」

「おう、分かった。それじゃあ、海列車に関してはドンと任せておけ」

「てめえ、スパンダム……そんな約束して本当にできるんだろうな？」

「問題ない。そもそもだ……」

いぶかし気な表情を浮かべるフランキーに答えつつ、俺が軽く手を振ると遥か遠方で巨大な水柱が上がり、三人は目を見開く。

「——俺にとっては、島を破壊するのに古代兵器なんて必要ないんだよ。興味が無い理由が分かるだろ？」

そう言つて、啞然とする三人に背を向け、俺は司法の塔への道を歩き出した。

しかしまあ、海列車の増線を引き受ける代わりに「アクアラグナによる被害をなんとかしてほしい」という話だったので、当面の間は毎年アクアラグナの時期に俺がアクアラグナを吹き飛ばすという形で話をまとめた。

さすがにこれは俺がやるしかないか……まあ、海列車が増えることの利益を考えれば、年に一度程度の高潮の対処ぐらい安いものだ。

去り行く友への言葉

家の地下にリリスが研究所を作る際に、ついでに一緒に作らせた部屋……軽い訓練と肉体改造を行う際に使うための部屋で、現在俺はポチの肉体改造を見ていた。

普通の物であれば、注視する必要はないのだが……今回は少し勝手が違った。というのも、今回ポチには筋肉の圧縮による肉体改造ではなく、俺が行っているものに近い細胞単位での改造を行わせている。いままでであれば、いかにポチであつてもこちらの改造には耐えられない。あるいは魂に影響があるのではと行わせてなかったものだ。俺がトットムジカの力を手に入れたことと、魂の輪郭とでもいうべきものを認識できるようになったことで、魔力を用いた魂の保護が可能になり、細胞単位の肉体改造の負荷をある程度軽減できるようになった。

そのため必要な材料を集めて秘薬を作り、いままで教えていなかった気功等も習得させて、ポチに俺と同じ肉体改造を行わせていた。材料に関しては、すでに俺のコネは親父を上回るレベルまで広がっている。問題は無く、改造の負荷もポチならば耐えられるだろう。だが、魔力での保護を行うのはまだ慣れていないので、ある程度集中して行っている。くだらない油断で失うには、ポチはあまりにも惜しすぎるので、その辺りは細心の注意を払っている。

しばらくして、無事に肉体改造を終えたポチに問いかける。

「……気分はどうだ？」

「凄いです！ なんとというか、ほんの少しだけですが隊長に近付けた気がするというか……いままでよりもっとずっと強くなれた気がします！！」

「そうか……問題はなさそうだな。この改造は特殊だから、必ず俺がいる時にだけ行う」

「はいー」

まあ、秘薬の材料が希少過ぎるので、自力で行うのは難しいだろう

が……。

しかし、さすが細胞単位の肉体改造の効果はすさまじく、ポチは明らかに改造前より一つ上の次元に上がったと言っている。

ポチの能力が上がることはそのまま俺の利益に繋がるし、希少な秘薬を使うのも惜しくはない。

それになにより、この細胞単位の肉体改造には極めて大きなメリットがある。それは細胞単位で一新することによる疑似的な若返りでもいうべきものだ。

老化は生物に等しく仕掛けられた時限爆弾のようなもので、白ひげを始めとした強者も老いには抗えず弱体化した。だが、細胞を新しく作り変えることで、常に全盛期と言えるような肉体を維持できる。

ポチにはこれから先も役に立ってもらおうつもりなので、事実上の不老となることは極めて大きいメリットだ。

実際こうして見てみると分かりやすいが、ポチも若返り……。

「どうしました？ 隊長？」

そういえば、コイツ……最初に会った時から一切見た目が変わっていない気がする。元々童顔で幼く見えるとはいえ、コイツは俺の1歳下だぞ？ 既に30代も折り返している。

だが、細胞単位の改造前から10代と言われても納得するような見た目だったし、なんならカリファの方が年上に見えるレベルだ。

改造前の段階から、小皺すら見た覚えもなく肌も瑞々しかった……コイツ、なんか不老系の悪魔の実の能力者じゃないのか？

「??」

顔を覗き込んだまま沈黙する俺に対し、ポチは首を傾げつつも尻尾……もとい髪を振る。まあ、いいか、ポチはポチだし……。

そう思った俺は苦笑しつつ、ポチの頭をポンポンと軽く撫でる。

「いや、なんでもない。食事にするか」

「はーん！」

嬉しかったのか、後ろ髪をぶんぶん振りながら俺に続くポチを見て、再び苦笑を浮かべた。

・***

ウオーターセブンの一角にある酒場では、荒くれ者たちをまとめるフランキー一家の棟梁であるフランキーが、モズとキウイを連れてカウンターに座り、店主であるブルーノと話していた。

「……そうか、辞めちゃうのか」

「へへへ……両親がもう年だからね。故郷に帰って店をやるつもりだ。この店自体は引き継ぐ相手が見つかったから、そっちに任せることに決まったよ」

「残念だわいな」

「寂しくなるわいな」

フランキーたちはこの酒場の常連と言っただけでいい存在であり、ブルーノとの関わりも多かった。グラスを拭きながら告げるブルーノの言葉に、モズとキウイも残念そうに呟く。

そんな三人に向けて、穏やかに笑みを浮かべたあとでブルーノはフランキーの好物であるコーラと、モズとキウイの好むドリンクを持ってくる。

「そんなわけだから、常連だったアンタらには一杯ずつサービスだ」

「おう、気が利くじゃねえか……テメエも、なかなかスーパードライなマスターだったぜ。おい、ほかに客は居ねえんだから、一杯付き合え。世話になったからな、俺の奢りだ」

「へへへ、そいつはどうも……それじゃ、お言葉に甘えて」

グツとサムズアップしながら告げるフランキーを見て笑いつつ、ブルーノは小さめのグラスに酒を注ぎ、カウンター越しに三人と乾杯した。

・***

ガレーラカンパニーの社長室から出て、ポケットに手を入れて廊下を歩いていったルッチだったが、途中で見知った顔を見かけて足を止めた。

『ポッポー……パウリーか?』

「おう……辞めて故郷に帰るらしいな」

『ああ、丁度いまアイスバーグさんにも挨拶をしてきたところだ』

腹話術で話すルッチに対し、どこか神妙そうな表情を浮かべるパウリー。その表情にはいろいろな感情が見え隠れしており、軽く頭をかきながら告げる。

「そういや、元々出稼ぎとか言ってたな。やっぱりその関係か?」

『そうだ。実際もつと短期間の予定だったが、予想していた以上に長く勤めることになった。クルッポー』

「そうか、定期的に手紙送ったりしてたもんな……」

短いやり取りのあとで、沈黙が流れ……パウリーはゆっくりと、思い返すように喋りだした。

「……お前は腹話術で話す変な奴だし、なに考えてるか分かんねえことも多くて、意見がぶつかったりで喧嘩になることも多かったな」

『……そうだな』

「だが、職人としての腕は確かで、プライベートでも誘えば飲みにも付き合ってくれたし、俺のくだらねえ話もなんだかんた文句言いつつも最後まで聞いてくれた」

そこまで話したところでパウリーは真剣な表情を浮かべ、握手を求めるようにルッチに手を出しながら告げる。

「……お前は、間違いなく頼れる仲間だったし、俺にとって最高のダチだ……達者でやれよ」

様々な思いを込めたパウリーの言葉を聞き、ルッチは小さく笑みを浮かべたあと……握手には応じることなく歩き出した。

そして、すれ違い様にパウリーの肩を軽く叩きながら、腹話術ではなく肉声で告げる。

「……ギャンブルはほどほどにしておけよ、パウリー」
「ッ!」

ルッチの言葉に驚愕したように目を見開いたあと、パウリーは微かに目を潤ませ、少しうつむき気味になりながら告げる。

「……てめえ、ちゃんと喋れるじゃねえかよ……バカにしやがつて」

震える声でそう零しながらも、パウリーの口元には小さく笑みが浮かんでおり、少し嬉しそうに見えた。パウリーにとってルツチは、いまいち本心の読めない相手だった。

だが少なくともいまの一言は『友としての自分』に対しての言葉であり、己が感じていた友情が決して一方通行では無かったと確信でき、それが嬉しかった。

パウリーは零れそうになる涙を手で拭きながら振り返り、廊下を歩いていくルツチの背に向けて叫んだ。

「おい、ルツチ！ またいつか、ウォーターセブンに来たら声かけろよ！ そんな時は奢ってやるから、また一緒に飲みに行こうぜ!!」

叫ぶパウリーの言葉に、ルツチは振り返ることは無く……軽く手を振って去っていった。

関わった以上見逃す理由は無い

エニエスロビーがグランドライン前半の海に位置することもあって、俺が新世界に赴く機会はそれほど多くない。まあ、基本的に司令長官なわけだし、エニエスロビーでの仕事が多いのが当然ではあるが、回される仕事の多さも相まって割と現場に出ている気もする。

ともあれ現在俺は新世界の島のひとつ……パンクハザードに来ていた。

『パンダ、準備はいいか?』

「ああ、好きなタイミングで始めろ」

通信を通して聞こえてきたリリスの言葉に頷く。俺が今回パンクハザードに来ているのは、言ってみればリリスの実験に付き合うためだ。

まあ、最近いろいろ動いてもらうことが多かったのですが、多少は実験にも付き合っただろうと、そんな感じではある。

今回の名目としては、新開発の兵器の実験……事前に概要は説明されているが、大将黄猿の能力を参考にして作られた兵器らしい。

つまり、簡単に言えば、のちにパシフィスタに搭載されるレーザーである。

『ではいくぞ、かなり強力な改良型じゃからな……』

「ふむ」

リリスの声と共にレーザーが飛んできたので、手で弾く。

『……お前ふざけるなよ。レーザーじゃぞ……あつ、こらペチンは止めろ、通じるとは思っておらんかったが、そんな飛んできた虫を払うように防ぐな。もうちよつと防御した感じを出してくれ、心が折れる。いいのか? 泣くぞ、ギャン泣きするぞ? 滅茶苦茶鬱陶しいぞ?』

「……どういう脅しだ。どうして欲しいかもっと具体的に言え」

『ならば、防御じゃなくて回避してくれ……』

その言葉と共に前方の壁がスライドし、大量のレーザー兵器が現れ

て、次々にレーザーを放ってくる。それをしばらく回避していると、再びリリースの声が聞こえてくる。

『……割と泣きそうじゃが、それで、感想的にはどうじゃ?』

「威力自体はそれなりだと思うが、やはり光という性質上軌道が直線だからな、発射のタイミングさえ分かれば俺でなくとも余裕でかわせる。見聞色が使えぬ相手には通用しないレベルだろうな」

『うくん、やはりそうか。さすがになんの準備もなく途中で軌道を変えるのは難しいな……最後にフルパワーで撃つていいか?』

「好きにしろ」

俺がそう返答すると、大量のレーザー兵器の角度が変わり、光を収束させて極太のレーザーを放ってきた。実験に付き合っているわけだし、避けるよりは受けたほうがいいだろうと、手をパーにして前に出す。

「……それなりの熱量だが、質量が無いから物理的な圧が無い。高熱に耐えられる者なら、普通に受けれるレベルだろう」

『いや、お前、それだけの光量を束ねたレーザー……いったい何度あると思つとるんじゃ……理不尽の擬人化か、お前……』

呆れたような声が聞こえてきたが、とりあえずはこれで一通りの実験には付き合ったので実験室を出て、リリースの下に移動する。

そしてデータを纏める、リリースをチラリと見たあとで、用意してくれたコーヒーを飲みつつ窓の外を見る。様々な木々が見える緑豊かな島、原作のパンクハザードとは大違いだ。

「……こんなもんじゃろ。後は知ピタゴラスに回してインプットじゃな」

「完全に分業しているというわけでは無いんだな」

「まあ、ある程度は各々でやっておるな。共同で取り掛かってるようなものは別じゃが……それをいうと、わしのメインの仕事は研究費の調達じゃしな」

「なるほど……それで、参考になったか?」

「ああ、助かった。わしの脳はまた破壊されそうじゃが、いいデータが採れた」

そう言うとりリリースは自分用のコーヒーを淹れ、俺の向かいの席に座

る。そして、一口コーヒーを飲んでから、ニヤツと笑みを浮かべて口を開く。

「ところで、パンダ。せっかく来たんじゃし、他の実験にも付き合ってくれたりせんか？　ちよつと、ほんの少しでいいからっ……」

「はあ……まあ、いいだろう。今日は時間もあるしな」

「え？　マジ!?　来たか、パンダのデレ期——いだっ!?　お前やめろ、その空気弾いて飛ばすやつ……なんでそんな軽い動作で、仰け反るほどの威力なんじゃ……」

相変わらず頭はいいはずなのに馬鹿みたいなことを言うリリスに呆れつつ、コーヒーを飲む。リリスはおでこを押さえながらも、俺に協力してほしい実験をピックアップしはじめた。すると、そのタイミングで微かな揺れを感じた。

「これは——おいっ、いまの揺れは？　はあ!?　なんじゃと!!　あの馬鹿がっ、だから、わしはあんな奴を研究に関わらせるなど……」

通信機に怒鳴るリリスを横目に、見聞色の覇気を広げる。パンクハザードぐらいの島ならすべてを覆うことも可能だ。

……中央付近で爆発のような跡、広がる煙とそれから逃げる大勢……ああ、なるほど、シーザー・クラウンによる毒ガス兵器の爆発事故か……なんともまあ、絶妙なタイミングだ。

仕方ない。リリスにまでなんらかの被害が及ぶと大きな損失だ。

「リリス、状況を教えろ」

「馬鹿が毒ガス兵器を中央研究所で爆発させた。毒ガスはかなりの量で、島全体を覆えるほど、広がる速度はそれほど速くない」

「……職員たちを一時屋内に避難させろ、毒ガスを散らせてやる」
「っ、分かった!」

俺の言葉を聞いたリリスは即座に通信機に向かって指示を飛ばしながら、屋外に向かう俺についてくる。

俺が居た研究所は島の外周付近なので、中央まではそれなりに距離があるが、それはまあ……大した問題じゃない。

「パンダ、屋内退避完了じゃ」

「わかった……風で散らしても問題ないな」

「あ、ああ、毒ガスの性質上ある程度の量があつてこそ効果が出る。広域に風で拡散させるのは有効じゃが……島を覆うほどの量じゃぞ？」
「問題ない」

リリースに軽く確認をしたあとで、島の中央方向に向けて掌底を放つ。もちろん建物などが倒壊しないように加減はしているが、押し出された空気が突風となつて毒ガスを押す。

見聞色で毒ガスの規模を確認しながら、何度か掌底を放つことで、毒ガスの大部分を遠ざけることに成功した。

「ある程度は散らした」

「……お前科学に喧嘩売り過ぎじゃろ……まあ、いい」

呆れたように告げたリリースだったが、直後に俺の背中におぶさるよ
うに飛び乗ってくる。

「全体を見たい。頼む、パンダ」

「しつかり掴まっつていろ」

リリースが求めていることは分かったので、リリースをおぶる形で月歩
を行つて島の全体が見える位置まで上昇する。

リリースは懐から双眼鏡らしきものを取り出して、島の中央付近に視
線を向ける。

「……中央研究所はもう駄目じゃな。第二研究所は半壊しているが、
大半は爆発の熱によるもの、内部に毒ガスの残留は無い。毒ガス兵器
の大本は中央研究所跡で未だ毒ガスを発生中……研究資料は惜しい
が、島全体を死の世界にするわけにもいかんか……正シヤカ！ 中央研究
所跡から半径1 km以内に人は？ 全員避難済み……囚人も含めて
か？ 間違いないな？」

たしかに広がっていた大部分のガスは飛ばしたが、中央研究所内に
残っているガスも多く、毒ガスを発生させている兵器……見聞色で見
ると、形状的にスマイリーっぽいな……この時点ではH₂Sは、ただ
の毒ガス爆弾だったような気もするが、まあどちらでもやることは変
わらない。

即座に考えをまとめたであろうリリースは、通信で確認したあとで俺
に告げる。

「パンダ！ 頼む、中央研究所から半径1kmほどを、どうにかしてくれ。研究所は破棄で構わんし、人は残っていない。あと、十二真衝見たい!!」

「……いい性格してるな、お前」

こんな状況でも最後に己の要望を付け加えたりリスに呆れつつ、リスを近場の建物に降ろしてから剃刀で中央研究所の上空に移動する。

「嵐脚・輪」

上空から円状の嵐脚で地面に切れ目を入れてから着地、現地にはまだ毒ガスも残っており爆発の影響で周囲も高熱化しているが、俺には全く影響はない。そのまま切れ目に手を入れ、武器に武装色の覇気を纏わせる要領で俺の力でも砕けないように一時保護した上で、半径1kmの大地を中央研究所ごと持ち上げて、斜め上空に放り投げる。

投げた大地が十分にパンクハザードから距離が離れたタイミングを見計らって、覇気を込めた拳を振るう。

「十二真衝」

放たれたふたつの衝撃が空中でぶつかり、巨大な黒球の衝撃となって毒ガス兵器ごと研究所のあった大地を消し飛ばした。

多少のガスは残っているし、ある程度環境の調査は必要だろうが……とりあえず、パンクハザードが荒野になることはなさそうだ。

それを確認して、リスの元に戻ると……リスは涎を垂らしながら口を開けて、呆けたように上空を見ていた。

「……おい、リス。終わったぞ?」

「……お前……アレ、凄すぎるじやろ……あんなの人間が単独で撃つていい威力じゃないぞ。はあああ……もう本当に脳が蕩けるううう」

「蕩ける前に、事後確認とかをすませておけよ。俺はお前の実験室に戻しておく」

「ああ……助かった。お前が居てくれてよかったぞ、パンダ」

リスに軽く手を振って、実験室に向かって歩きながら考える。パンクハザード編に手を出すつもりではなかったのだが、タイミングが悪かったというべきか……まあ、万が一リスになにかあっても大変

なので、問題なく解決できたのならそれでいいか。

・***

世界政府特殊化学班No.2だった科学者シーザー・クラウンによつて引き起こされたパンクハザード毒ガス兵器爆破事故は、たまたま現地に居合わせたCP9司令長官スパンダムの手によつて最小限の被害に留められた。

人体実験に用いられていた囚人たちも、毒ガスの対処が早かつたこともあり後遺症等は無かつた。一部混乱に乗じて逃げ出そうとした囚人もいたが、全てスパンダムの手で捕らえられた。

だがそれでも、三つの大型研究所のうち二つがほぼ壊滅、大量の研究成果が無に帰すこととなり、パンクハザードの研究施設は一時閉鎖されることに決定した。

その際の精神的なショックからかベガパンクの猫サテライトの一部が、一時呆けたように作業が手に付かなくなる事態も起こつたが、一月ほどで立ち直つた様子だった。

なおその際に、猫サテライトのひとりである悪はリリス「だから脳を焼かれるから、見るなど言うたのに……」と呟いていたという。

今回の事件を対応したスパンダムには世界政府からその功績に見合っただけの報酬が支払われる流れだったが、本人が「そんな金があるなら被害を受けた化学班に回してやれ」と拒否。報酬にする予定だった金は特殊化学班の再建に使われることとなり、スパンダムは化学班に英雄視されることになった。

そんな流れの中で、事件の主犯であるシーザーは、海軍に捕らえられ連行されていたが、その途中で必死に脱走し、小さな島に逃げ延びていた。

「シュロロロ……お、俺が……こんなところでくたばつてたまるか……ベガパンクなんかより、俺の方が多くの人間を殺せる。俺こそが世界一の科学者だ！ 見てろ、いずれ世界が俺を必要とする。それまで、力を蓄えて……」

誰よりも多くの相手を殺せる兵器を作ることこそが偉大であり、世界を兵器まみれにして死の国の王になるという野望をもつマッドサイエンティストであるシーザーは、己の再起を夢見て笑みを浮かべる。

だが、人の夢と書いて儂いと読むように、彼の夢はここで儂く散ることになる。

「……運が悪かったな」

「な、なんだ……お、お前は……」

誰もいない筈の海岸で突如聞こえてきた声の方向に視線を向けると、そこには道化を模した仮面を着け、竜の意匠が施された帽子を被り、黒いローブで体を隠した……まるで死神のような格好の存在が居た。

「最初は特にお前をどうするつもりは無かったんだが、タイミングが悪かった。結果として、関わって一部を変えてしまったからな……なら、最後まで処理しておいた方がいいだろう？」

「ッ……あつ……ああ……」

仮面の男から凄まじいプレッシャーが放たれる。それはシーザーが己の結末を理解するには十分すぎるほどだった。

「ま、待て……そ、そうだ！ 手を組もう！ 俺とアンタが手を結べば世界だって……」

ガタガタと震えながら必死に言葉を紡ぐシーザーに対して、男が返した言葉は一言だけだった。

「——闇の正義を、執行する」

忠犬の任務風景

ウォーターセブンに潜伏させていた四人に関しては、先にルツチとブルーノを帰還させた。カクとカリファに関しても、もう少し時期を空けてから帰還してもらう予定だ。

そしてCPメンバーが全員揃ったら、覇気に關しての指導を始めようと思ひ、いろいろと下準備は始めている。覇気は個人差が大きいので確実とは言えないが、今の時点から行えば原作開始までには全員覇気を習得できているだろう。

鍛錬に力を入れる関係上、ある程度任務は絞る必要があるが……まあ、その辺は最近時間に余裕がある俺が多めに受け持ってもいいわけだし、いくらでも方法はある。

そんなことを考えながら書類仕事をしていると、ふと珍しい任務が目に留まった。海賊の殲滅任務である。通常であれば、海賊への対応は海軍が受け持つことが多くCPに回ってくることは少ない。CPに多いのはやはり革命軍関連だ。

それが回ってくるということは、なにか政府の逆鱗に触れるような……ああ、政府所有の島でいくつかの施設を破壊したのか……なるほど。

海賊団の船長の懸賞金は2億4千万ベリ、ルーキーとしては世代No.1であり、天狗になっているのかもしれない。

まあ、ただ、麦わらの一味のように運命に愛されているわけでもない存在が、世界政府という巨大組織に喧嘩を売るのは、無謀を通り越してただの自殺だ。

「……ポチ、昼までに片付けてこい」
「了解！」

この任務はポチに回すことにした。ポチは基本俺の補佐で任務なども俺に同行していることが多いが、たまにこうして任務を回している。鍛錬は十分に行っているとはいえ、実戦も定期的に経験しておかなければ腕が鈍る。

昼までは3時間ほどあるが……海賊団の現在地を考えるとポチであれば、移動も含めて2時間もかからないだろう。

■***■

グランドラインのとある島で、海賊たちは朝から宴会を行っていた。先日世界政府所有の島で暴れまわったことで船長の懸賞金が2億を超えたため、その祝いを兼ねてである。

男たちはグランドラインで順調に勝ち続け、成り上がっていた。いまや世代ナンバーワンルキーとすら呼ばれ、注目を得ている。

船長の男もまた。このまま己が海賊王まで上り詰められると、そう思いながら上機嫌で酒をあおる。

ふとそのタイミングで、パンツと風船の割れるような音が聞こえ、直後に宴会の中心に黒いスーツを身に纏った少女が降り立った。

幼げな顔立ちに小柄な体、首の後ろで細く一本に纏められた茶髪が特徴的な少女……チエルシーは、ぐるりと視線を動かして海賊団の面々を確認したあとで、船長の男を見る。

「……てめえ、世界政府の犬か？」

「全員揃っているようで安心しました。すぐに戻って隊長のお手伝いが出来そうです」

「おい、嬢ちゃん。俺らが誰か分かってんのか？」

船員たちの言葉など聞いていないとばかりにひとり告げたチエルシーは、ニツコリと穏やかな笑顔を浮かべて言葉を続ける。

「指令は殲滅。では——闇の正義を執行します」

「……殺せ」

あまりにも余裕なその態度に苛立った船長が告げると、複数の船員が剣を抜いて構える。彼らの海賊団もここまでそれなりの場数を踏んできた強者たちだ。

ただ、まあ、今回に限って言えば……相手が悪すぎた。

「ご存知ですか？ 春の風は穏やかなものです。切られたことに気付かないほど——嵐脚・春風」

チエルシーがそう呟いた直後、複数の船員が血を吹き出して倒れ伏した。まるで鋭利な刃物で切り裂かれたような傷……誰がそれを行ったか考えるまでもない。だが、誰の目にもチエルシーはその場から動いていないように見えた。

その得体の知れなさに、何人かの船員が鉄製の盾を持つ、どうやって斬撃を放ったか分からないがこれで防げるはずだと……。

「ご存知ですか？ 夏の風は熱いものです。時に身を焼くほど——嵐脚・夏風」

直後チエルシーの片足が黒く染まり、その足で地面を擦るように振るう。凄まじい速度により引き起こされる摩擦によりその足が真紅に染まり、赤く燃える斬撃が放たれ、盾ごと複数の船員を真つ二つに切り裂いた。

そこに来てようやく驕りのあつた海賊団たちに焦りの表情が浮かびはじめ、船長の男も慌てて構える。撤退という言葉が頭に浮かぶ中、チエルシーの姿が消え、再び現れたかと思うと膨大な数の船員たちが切り裂かれながら空に舞い上がっていく。

まるで斬撃の竜巻に飲み込まれるかのように……。

「ご存知ですか？ 秋の風は荒れやすいものです。時に竜巻が起こるほど——嵐脚・秋風」

それは本当にあつという間の出来事だった。チエルシーがその場に現れてから、まだほんの数分しか経っていない。それで、大勢いたはずの船員は船長を残して、大量の死体へと変わってしまった。

船長である男は青ざめた表情を浮かべながら、愛刀を抜いて構える。

「て、てめえ……な、なんなんだ……いい、いったい……」

「ご存知ですか？ 冬の風は美しいものです。日に照らされてキラキラ輝くほど——嵐脚・冬風」

震えながら告げる船長の言葉にもチエルシーはやはり答えず、淡々と告げながら足を振る。直後に船長であつた男の目に映ったのは、キラキラと輝く光……ダイヤモンドダストのような美しい光景ではあつたが、それは大量に放たれた極小の斬撃。

男は声すら上げる暇は無く、全身を摩り下ろされるように切り刻まれて、その生を終えた。

「ご存知でしたか？ 隊長が貴方たちを消すと判断した時点で、貴方達が生存する未来などあり得ないことを……来世では、ちゃんと覚えておいてくださいね」

そう言つてニツコリと笑つたチエルシーは見聞色で島を探り、生存者がいないことを確認してから時計を確認する。

「えっと、いまから戻つて隊長のお昼ご飯の支度をして、食後のコーヒーをご用意したあとで……」

もう彼女の頭にいま殺した相手たちのことなど欠片も残つておらず。敬愛するスパンダムのために今日行うことを再確認するので忙しかった。

そのまま跳躍し、海岸にあつた海賊団の船に向かつて嵐脚を放ち、真つ二つに切り裂いて沈めたあとで、敬愛する主の待つエニエスロビーに向けて帰還した。

・***

昼食を食べ終えたあと、ポチの淹れてくれたコーヒーを飲みながら一息つく。午前中にポチに回した任務は、既に完了しており報告書も完璧な形で提出されている。

流石というべきか、やっぱり優秀だなコイツは……。

「今日は任務も少ないし、午後からは手持無沙汰だな……エニエスロビーの建て替えの計画書の作成を進めるか……ポチ、お前はなにか要望があるか？」

「要望ですか？ うーん、もう少し店で売っている食材の種類が増えればとは思いますが……」

「なるほどな。居住区にある店舗も簡素なものが多いし……海列車の本数が増えれば物流もいま以上によくなるし、そういった部分も検討するか……」

後はある程度の娯楽もあつた方がいいな。酒場ぐらゐはあるが、1

万人という町ぐらゐの規模があるくせに、それでは少なすぎる。

予算的な面もあるのいろいろな考える必要はあるが、もう少し広く意見を集めるのもいいだろう。要望書を配って出させるか……。

「ポチ、エニエスロビーの建て替えに関する要望書を配ろうと思う」

「分かりました。今日中には仮のものを用意しておきます」

「ああ、頼む……これを飲み終わったら少し鍛錬でもして体を動かすか」

「はい！」

パタパタと笑顔で後ろ髪を振るポチを見て、その相変わらずな様子に苦笑しつつコーヒーを飲む。こういうのんびりした日もいいものだ。

新世界のレベルを教える特別教官

ウォーターセブンのガレーラカンパニーの社長室では、秘書であるカリファがアイスバーグに深く頭を下げていた。

「アイスバーグさん……いままで、大変お世話になりました」

「ンマー。それはこっちの台詞だ。お前は優秀で頼りになる秘書だった。いままでよく仕えてくれた。礼を言う」

「いえ、アイスバーグさんこそ仕えがいのある優秀な社長でした」

アイスバーグの秘書を務めていたカリファだったが、一身上の都合により退職することになり、今日が最後の勤務日となっていた。

すでに後任の秘書の選定は終わっており、引継ぎもすべて完了している。

「まあ、まだ今日いっぱい秘書ですので、お飲み物でもいかがですか？」

「そうだな……ではせっかくだし、紅茶でも」

「用意しております」

「ンマー！ さすがだな、カリファ」

「恐れ入ります」

テキパキと紅茶を用意してアイスバーグの前に置くカリファを見て、アイスバーグは感心したように頷く。そのあとで、なにかを思いついたような表情を浮かべ、自分の向かいの席を指しながら告げる。

「せっかくだ。今日はもう仕事も大してねえんだろうし、一緒に紅茶でも飲みながら思い出話でもしねえか？」

「なるほど、アイスバーグさん……セクハラです」

「ンマー!? あれ? そうなっちゃまうか?」

「ふふ、冗談です。そうですね。せっかくの機会ですし、ご一緒させていただきます」

アイスバーグの反応を見て楽しそうに笑みを浮かべたあとで、カリファは自分用の紅茶を用意して、アイスバーグの向かいの席に座った。

そのままふたりは、しばしこれまでの思い出話を交えながら雑談に花を咲かせた。

・***

「うおおお!! カク、寂しくなるぜえ!!」

「タイルストーン、声がデカイぞ……」

大きな声で叫ぶタイルストーンに呆れたように告げるカク。彼もまた近々退職することになっており、仲間たちとの別れを惜しんでいた。

そんなふたりの会話を腕を組みながら見ていたルルも、惜しむように口を開く。

「しかし、惜しいな。カクならすぐに職長にも成れただろうに……まあ、家庭の事情では仕方ないが」

「ああ、わしもまだ勤めていたかったのが本音じゃが、こればかりはどうしようもない。じゃが、故郷に戻ってもガレーラで学んだことは生かしていくつもりじゃ」

人当たりがよく船好きのカクは交友も広く、多くの職人たちから別れを惜しまれていた。カク自身も、ガレーラでの日々は非常に充実していたこともあり、惜しむ気持ちも心の中にあっただ。

ワイワイと話す三人の下に、他の職人たちもあつまり、口々にカクに話しかける。

「……しかし、ルツチに続いてカクもか、残念だな」

「泣くんじゃないぞ、パウリー」

「誰が泣いてんだよ! 適当なことやってんじゃねえぞ、ルル!!」

からかうようなルルの言葉に食って掛かるパウリーだが、その人情が厚い性格を考えると、ルルの指摘はあながち間違いでもなさそうだった。

そんな空気を割るように、タイルストーンが大声で叫ぶ。

「カクっ!! また、遊びに来いよ!!」

「わはは、そうじゃな……パウリーに貸してる金も回収しなければな

らんし、また遊びに来るとしよう」

「うぐつ、カ、カク……別にそれは忘れてくれても、いいんだぜ……」

「駄目じゃ、1ベリーも忘れんわい。利子を付けんだけ、ありがたく思
うんじやな」

「うぐぐぐ……」

「よかったな、パウリー。また会えるぞ、取り立てで……」

借金の多いパウリーを揶揄う者、カクとの別れを惜しむ者……多くの職人たちが集まり、しばしの間1番ドックの作業が止まっていたが、それはそれだけカクが職人たちに愛されている証明でもあった。

■***■

エニエスロビーにある司法の塔の長官室には、久々にCP9メンバーが勢ぞろいしていた。先に戻ったルッチとブルーノに続き、カクとカリファも先日帰還して、これで完全にウォーターセブンの潜伏任務は終了したことになる。

整列するメンバーに姿勢を楽にしていると指示を出したあとで、俺は椅子に座って口を開く。

「ルッチ、ブルーノ、カク、カリファの四名は長期の潜伏任務ご苦労だった。さて、こうして全員が再集結したところで、今後の予定について通達しておく。これからしばらくの間は、任務の割り当てを減らしてそれぞれ研鑽を積んでもらうことになる。具体的に言うと……お前たち全員に覇気を習得してもらおうつもりだ。ああ、ポチは既に習得しているのでそれ以外だな」

おそらく、俺がいままでCPメンバーに覇気を教えていなかったのは、エニエスロビー編でルフィたちが勝てる状態になるために、運命によって無意識にそうしていたのだろう。

だが、もういまとなつてはその辺りの影響はないので、コイツ等は徹底的に鍛えるつもりだ。

「お前たちも、情報を扱う諜報機関の人間だ。覇気という言葉は多少なりとも聞いたことはあるだろう。これについてはまた、実際に指導

する際に詳しく説明を受ける形になる。そして、指導に関してだが……覇気というのは習得に個人差が大きく、確実に正解という教え方もない。ただ、政府には覇気を専門に指導する訓練施設が存在するので、ローテーションを組んでそこに行ってもらおうことになる」

CP0のメンバーたちが覇気の習得を行う施設に関しては既に押さえてある。だが、さすがに全員まとめてというほど仕事に余裕はないので、2〜3人単位でローテーションする形を想定している。

「イメージとしては、1ヶ月訓練施設で学び交代という形だな。覇気を習得した時点でローテーションから外す。また、訓練施設に行つてないメンバーについては任務の合間に俺が指導も行う。それ以外にも体術などを含め、多くの部分を教えるつもりだが……とりあえずその前にやる必要がある。いまから全員訓練場へ移動しろ」

大まかな予定は伝え終えたので、もうひとつ大事な工程をこなす必要があるので、全員に指示を出して訓練場に移動する。

不思議そうな表情を浮かべるメンバーたちを連れて訓練場に辿り着くと、そこにはマハとゲルニカの姿があった。

「ふたりとも、呼び出して悪かったな」

「いえいえ、スパンダム殿の要請とあればいつでも参りますよ」

今回の件のために向いてもらつたふたりに軽く声をかけたあと、ルッチたちの方を振り返つて告げる。

「このふたりは、CP0に所属するエージェントで、お前たちの先輩にあたる。今回ある目的のために来てもらつた」

「ある目的？」

「ああ、そもそも何故大々的にお前たちを鍛えるのかというところ……お前たちが現時点では弱いからだ」

『ッ!?!』

ハッキリと告げた俺の言葉を聞き、CP9のメンバーたちの表情に驚きが浮かぶ。唯一フィズだけは納得するような表情を浮かべていた。

「お前たちはグランドライン前半の基準で言えばそれなりに上位だが、後半の海……新世界の基準で言えば、中の下にも届かないレベル

だ」

覇気を習得していないということもあるが、それを抜きにしても甘さが目立つ部分が多い。特に原作に於いて道力2000を下回っていた連中に関しては、現時点では新世界ではまるで通用しないだろう。

いちおうCP9にも新世界の任務が来ることもあるが、それらは現在俺かポチが担当している。コイツ等のうち何人がCP0に上がるかは分からないが、それを抜きにしても今後を考えて新世界の任務もこなせるレベルにはなつてもらう必要がある。

「……だが、まあ、お前たちにも六式使いとしての矜持などがあり、素直に受け入れるのも難しいだろう。だから、マハとゲルニカを呼んだ。このふたりは政府の誇る特級のエージェントで、新世界でも通用する実力がある。そうだな……中の上ぐらいの実力と思えばいい。今回はこのふたりに特別に時間を作ってもらった……しっかりと、未熟さと敗北の味というのを教えてもらえ」

「おいおい、長官……俺たちがそんなに簡単にやられるつてのかわ？」
「チャパパ、ジャブラと同じく、俺たちもそう簡単にやられるとは思っていないぞお」

強さにプライドを持つのはいいことだ。だが井の中の蛙でいてもらつては困るので、早い段階で上の次元の戦闘を言うのを体験してもらうことにした。

マハとゲルニカは原作の時間軸になれば上の下から中ぐらいの実力は有するだろうが、現時点では四皇幹部相手だと分が悪いレベルだ。それでも十分に優秀な戦闘力を持っているのだが……。

「ハツキリ言つてしまえば、多少なりとも戦いになるのはルッチとフィズぐらいだ。それ以外は、全員でかかっても相手にならないだろう。まあ、試してみればわかる……では、マハ、ゲルニカ、頼んだぞ」
「ええ、可愛い後輩のためですからね」

「……しっかりと、敗北という経験を積ませてあげますよ」

マハとゲルニカに任せて、俺はポチと共に壁際に移動する。CP9メンバーが躍進するために驕りを消すのは必須だ。

時間をかけて論すよりも、手っ取り早く新世界レベルの相手と戦わせた方が効率がいい。これで、それぞれが向上心に火を付けてくれれば、今後の指導もやりやすくなる。

あまり参考にはならない数値ではあるが、道力という数値で表すなら……とりあえず原作開始までの2年半ほどで、全員最低でも5000以上にはなってほしいものだ。

相手の強さを見抜けるのもまた強さである

マハとゲルニカとの戦いは、予想通りCP9メンバーにとっては上を知るいい機会となったみたいだった。特に負けず嫌いなジャブラ辺りはかなり奮起している様子で、訓練にも力が入っている。

少し驚いたのは、ルッチがすでに見聞色の感覚を掴みかけているということだ。どうやら俺がコツを教えたあと、独自に鍛錬していたようで、マハとの戦いで見聞色を使っているような動きを見せることが度々あった。

まだ意識して使えるほどではないが、この辺りのセンスは流石というべきか……CP9メンバーで一番早く覇気を習得するのはルッチになりそうな気がする。

まあ、それはそれとして現在の俺は背中にリリースを背負って、天空に向けて飛んでいた。目的は空島……スカイピアに行くことだ。

エネルギーを始末しに……とか、そういう話ではなく、ウタ関連である。ウタがデビューするにあたりTD……音^{トイン}貝^{ダイアル}の存在は重要だ。

だがTDは原作開始時期から2年後までの間に養殖方法が確立され流行したもので、現時点では流通していない。

ただ存在自体は知っている者は知っており、リリースから空島の貝^{ダイアル}をいくつか仕入れたいという依頼を受けて向かっている途中だ。

まあ、ウタには出来るだけ力になると約束したので、このぐらいの手間はいいだろう。別に買い物をして帰るだけなので、問題ない。

「……だが、なんでお前が付いてくる？」

「ええじやろ、わしも空島行きたいし……普通に行くには手間がかかり過ぎる。その点パンダはいいな、上空まで一直線じゃ」

まったく、相変わらずいい性格をしている奴だと呆れながら雲をいくつか通り過ぎると、空に浮かぶ島……スカイピアが見えてきた。

天国の門を経由せずにきたが……そもそも下の白海から順当に上がってきたわけでは無いので、どこに天国の門があるか分からない。

とりあえずエンジェル島の人が少ない場所に降りて、背中からリリ

スを降ろす。エンジェル島には繁華街があるはずなので、そこで買えばいいだろう。

空島の通貨であるエクストルを持つていないが、物々交換やベリ―を両替もできるとのことなので問題は無いだろう。

「ほうほう、ここが空島か……資料では見たが、実際に来るのは初めてじゃな。これが島雲……どれ、少し採取するか」

「まったく、本来の目的を忘れるなよ」

科学者としての本能か、興味深そうにあちこちを見たりしているリスに呆れていると、不意にこちらに近づいてくる気配を感じて振り返る。

すると振り返った先に一瞬の雷光が見え、直後にエネルギーが姿を現した。わざわざ出向いてくるとは……。

「ヤハハハ、我が国に随分と大胆な侵入をする不屈き者の顔を俺が直々に……」

笑みを浮かべてなにかを言いかけたエネルギーだったが、話の途中でなにやらルフィに電撃が効かなかった時のような顔になった。

なんでいきなりそんな顔をしているんだと、疑問に感じつつ言葉を返そうと口を開く。別に俺はエネルギーに関心は無いので、穏便に済むならそれに越したことはない。

「ああ、すまない。天国の門の場所が分からなかった。入場料が必要なら、いまから払おうか？」

「……いい、いい、いや、別に構わない。そ、そうだな。青海人となれば、スカイピアの地理に疎いのも必然。来訪を祝して、今回の入場料に関しては俺の判断で免除する」

「そうか、悪いな」

「と、ところで、貴さ——貴方たちは、スカイピアになにをしに来たのかな？」

どうやらエネルギーの方も事を構える気は無いようで、原作で見たよりも穏やかな様子で微笑みを浮かべながら友好的に話しかけてきた。

原作時期よりまだ2年前だからなのか、それとも俺の力を察して戦わないことを選んで丁重に対応しているのか……そういえば、優秀な

見聞色使いだったな。それで、俺の実力をある程度読み取ったのかもしれない。

その上で戦うべきでないかと判断したのなら、思ったほど驕ってはおらず冷静な判断ができる奴なのかもしれない。

「音 貝と、他にいくつか空島の貝を仕入れたくてな。それが終わったらすぐ帰るつもりだ」

「えくパンダ、もつと探索せんのか？」

「お前だけ、置いて帰ろうか？」

「むう、それは困る……はあ、探索は諦めるか」

実際に俺たちの目的は音 貝であり、それさえ手に入ればすぐに帰るつもりではある。そのことを話すと、エネルギーは明るい表情に変わった。

「そ、そうか、では、しばし待たれよ！」

そう言っただけで雷になって姿を消したかと思うと、少しすると両手に大量の貝を抱えて戻ってきた。

「では、せっかくの客人だ。この貝を進呈しよう！ 音 貝もある」

「おお、こんなに大量に、いいのか？」

かなりの量の貝を進呈するというエネルギーに、リリースが目を輝かせる。

「もちろんだ。ただ、その、代わりといっってはなんだが……スカイピアの民は、青海人に慣れていない。騒ぎになってしまうのでその、出来れば……」

「ああ、分かった。それを受け取ったらすぐに帰ることにする」

「そ、そうか！ すまないな……では、こちらは貴方たちに進呈しよう」

俺の返答に目に見えて明るい顔になったエネルギーは大量の貝を渡してきた。よっぽど俺たちに帰ってほしいようなので、素直に受け取りリリースが持っていたケースに収納したあとで宣言通り空島から帰ることにした。

笑顔で手を振るエネルギーの視線を背中に受けながら、手っ取り早く飛び降りて青海に戻ることにした。

・***

スパンダムたちが去った後で、エネルギーは振っていた手を止め……青ざめた表情で呟いた。

「……な、なな、なんだあのバケモノは……確か、パンダと言っていたな？ 聞いたことがあるぞ、たしか青海の……種族のひとつだったか？ しかし、パンダとは、あれほどまでに恐ろしい生物なのか……」

そもそもエネルギーは当初、暇を持て余していたこともあり無礼な侵入者と少し遊んでやるかと、そんなつもりでこの場に来ていた。

だが、スパンダムを一目見て、そのあまりの強さを感じ取り、即座に戦うことは諦めた。むしろ自分を討伐するのが目的だったらどうしよう、冷や汗を流していたのだが……スパンダムの目的が^{ダイアル}貝で、それさえ入手すれば帰ると聞いて、心の底から安堵した。

「神官たちにも厳命しておかねば……青海のパンダには決して手を出してはならぬと……」

自らを全能なる神と自称し、己の力に絶対的な自信を持っていたエネルギーだったが……そのプライドが粉々に砕かれた思いだった。

なにせ、神である己が必死に媚びて機嫌を損ねないようにしなければならぬと、そう感じるほどにあまりにも圧倒的な強者であり、災害そのものである己すら容易く粉砕する怪物だと理解した。

それはエネルギーの見聞色……空島では^{マントラ}心網と呼ぶそれを高いレベルで習得しているからこそだったかもしれないが、ともかくエネルギーはスパンダムの強大さを即座に理解して心の底から恐れた。

そしてその後、エネルギーは己の部下である神官たちに語った「青海には神をも喰らう恐ろしき怪物が生息している」「青海のパンダには決して手を出してはいけない」「パンダの怒りに触れればスカイピアは終焉を迎える」と、強く言い聞かせた。

絶対の神であるエネルギーがそこまで語るほどの怪物の存在に、神官たちもおののき……その日より、空島には神を喰らい世界を滅ぼす魔獣……パンダの存在が、深い畏怖を込めて語り継がれていくこととなっ

た。

思い出の地に届く行進曲（マーチ）

空島から持ち帰ったTDはリリースがあつという間に養殖設備を整えて、大々的に世界中に広まるようになった。いままでも録音技術というものは存在したが、ある程度大掛かりな機械などが必要だったが、それが貝ひとつで可能になったのは大きな発展といえる。

実際リリースは貝ダイアル養殖の功績で世界政府からかなりの額の報酬……もとい研究費を手に入れたらしく、ホクホク顔だった。返答は分かっているのに俺に対し「分け前はいるか？」と確認してくる辺りは、なんだかんだで律儀なやつだと思う。

ともあれTDが広まったことで世界的に音楽ブームの波が来ており、ウタも正式に歌手としてデビューすることになった。

その歌は多くの歌手の中でも頭一つか二つは抜けている印象で、TDの売り上げもどんどん右肩上がりに増えていっており、ウタもかなり有名になってきている。

元々ブルツクが別次元と称するほどウタには才能があり、劇場版とは違いシャンクスとの関係が修復されていることでもかなり生き生きと歌っているため、すでに「歌の新時代」だとか「稀代の歌姫」だとかといった高い評価を得ている。

エレジアの復興を目指しているということも公言しており、それも含めて世間ではかなりの好印象といえる。

そろそろエレジアでのファーストライブも近くなっており、世間の注目度はナンバーワンと言えるだろう。実際、いま俺が読んでいる新聞でも大々的に特集を組まれてライブの宣伝がされており、抽選倍率も凄まじいことになっているらしい。

「長官、なんの記事読んでるんだ？」

「うん？ ああ、ウタのファーストライブの特集だ」

「おっ！ UTAか、あの子はいいよな！」

「なんだ、フィズ、知ってるのか？」

話しかけてきたフィズに答えると、長官室内に居た。CP9メン

バーも俺とフィズの方を向く。この話題には興味のある者も多いみたいで、ジャブラもなにやら楽しそうに口を開く。

「俺もTD持つてるぜ。なんかこう、歌の新時代を作ってやろうって感じの熱意ある歌がいいよな」

「確かに、彼女は素晴らしい歌手だ。いまや人気爆発中と言っている」「滅んだエレジアの復興のために頑張ってるってのも、健気で応援したくなるわよね」

ジャブラだけでなく、ブルーノやカリファもウタのファンらしく、なにやら楽しげな様子で会話に参加してきた。

しかし、そんな中でひとり怪訝そうな表情を浮かべている者がいた……ルッチである。

「……知らん俺がおかしいのか？」

「お前は、もう少し世間に興味を持たんか、ルッチ。ここ半年ほど一番注目度の高い人物じゃぞ」

まあ、確かにルッチはあまり興味がなさそうなイメージではある。ジャブラは割とミーハー気質などところがあるので、この手の話題は好きそうだ。

そのままCP9メンバーたちはウタの話題で盛り上がっており、話は次第にファーストライブに移っていく。

「……抽選落ちたんだよなあ、俺」

「俺もだ。倍率あげつないからな」

「大抵の者は落ちておるじやろ。初開催で人数は控えめにするらしいしのう」

ファーストライブの抽選に落ちたらしいジャブラが肩を落として呟き、フィズも同じく落ちたらしい。そしてそれに同意するカクも……どうやら、応募して落ちたというわけか。

というより、表情を見る限りブルーノやカリファも落ちてるな。

「お前ら、ライブに行きたいんだったら、連れて行ってやろうか？」

『え?』

俺が呟いた言葉に驚きながら振り返るメンバーたちの前で、俺は引き出しから一枚のチケットを取り出してデスクの上に置いた。

「何人連れてきてもいいと言われてるしな」

「え？ ちよつ、長官!? おいおい、これ、特別招待席のチケット!?」
「な、なんでそんなもの持ってんだ……権力ってやつか?」

もの凄い食い付きである。目を大きく見開いてチケットを凝視するジャブラと、啞然とした様子で呟くフィズ。俺がそのチケットを持ってるのが、不思議でたまらないらしい。

「いや、元々デビュー前から知り合いだからな。ついでに言えば、いろいろ支援している立場だ」

実際TD関連もそうだが、ファーストライブ開催に当たったの警備等の伝手を紹介したり、リリースに協力させたりと、割といろいろ支援はしている。

「休暇の調整も問題ないだろうし、なんなら全員で見に行くか?」

「……面白そうだな。俺だけよく知らないというのも、どうも収まりが悪いし、世界に注目される歌姫とやらを見てみたいな」

ここまで話についてこれていなかったルッチが俺の言葉に賛成し、他の者たちも異論は無さそうだったので、ウタのファーストライブに關しては休暇を調整して全員で見に行くことに決定した。

念のためあとでウタには人数の連絡を入れておこう。

・***

東の海にあるドーン島。ゴア王国が存在するその島の僻地にある小さな村……フーシャ村。その村唯一の酒場に麦わら帽子を被った青年……ルファイが訪れていた。

1年ほど前に兄であるエースが航海に出て、現在は山賊ダダンの下で自身も2年後の出発に向けて鍛錬を続けていた。

そんな中、酒場の店主であり昔から姉代わりのような存在であるマキノに呼ばれて、酒場にやってきた。

「マキノく来たぞ」

「ああ、ルファイ。急に呼んでごめんね」

「いいぞ。けど、まだ宝は見つけてねえから、宝払いは無理だぞ?」

「ふふふ、呼んだのはそのこととは関係ないわよ」

用件が分からず首を傾げるルフィに対し、マキノはどこか楽し気な様子でひとつの貝を取り出した。

「なんだそれ、貝か？」

「これは、最近流行り出したTDって言って、音を保存しておける貝なのよ」

「うん？……不思議貝ってことか？」

「ええ、そんな感じね。まあ、説明するより聞いてもらったほうが早いかしら……」

そう言ってマキノはTDをカウンターの上に置き、再生を始める。するとTDからは美しい歌声が聞こえてきて、最初は怪訝そうな表情を浮かべていたルフィだったが、ある程度聞いているとなにか思い当たる部分があったのか、驚いたような表情を浮かべた。

「……ウタの……歌だ」

「ええ、そうよ。ウタちゃんの歌。最近歌手としてデビューして、いま凄い人気なんだって」

「……そうか」

幼馴染であるウタの存在を思い出し、ルフィは少し複雑そうな表情を浮かべていた。彼はまだウタがシャンクスの船を降りたという話に完全には納得できていない。

シャンクスからそのことを聞かされた時は、ずいぶんと食って掛かったものだ。そんなルフィの複雑な心境を見抜いているかのようには、マキノは一通の手紙を取り出してルフィに渡す。

「このTDはね。この手紙と一緒に送られてきたのよ。貴方に渡して欲しいって……ウタちゃんからね」

「ウタが？」

「ええ、それを読めば……ルフィの疑問も解決するかもね」

そう言って微笑むマキノの前で、ルフィは手紙を開けて読み始めた。

『ルフィへ。ちゃんと挨拶もなく居なくなつてごめんね。ちよつといろいろあつてさ……ああけど、勘違いしないように、私は赤髪海賊団

の音楽家を辞めたわけじゃないからね。あくまで休業中だよ。先に世界一の歌姫になって、それからシャンクスの船に戻るつもりだよ』手紙を呼んでいるとルフィの記憶に残るウタの姿が思い浮かび、確かにこんなことを言いそうだと、そんな風に感じられた。

『この前にシャンクスに会って、ルフィのこともいろいろ聞いたよ。悪魔の実を食べたとか、シャンクスから帽子を預かったとか……その帽子はシャンクスのなんだからね？ 大事にしなきゃ駄目だよ。まあ、いろいろ心配かけちゃったかもしれないけど、私はいま頑張ってるよ。ルフィがうかうかしてたら、私が先に新時代を作っちゃうからね。それじゃ、また、いつか会えるのを楽しみにしてる。その時は、シャンクスの麦わら帽子が似合うぐらいのカッコいい男になるんだぞ！ じゃ、またね！ ウタより』

そうして締めくくられた手紙の最後には、見覚えのある絵が描かれていた。かつてルフィが描いたいびつな形の麦わら帽子の絵。ウタに「新時代のマークにしよう」とプレゼントした思い出の絵。

その歪な麦わら帽子に「UTA」と刻まれたマークの記された手紙を見て、ルフィはニヤリと笑みを浮かべた。

「ししし、そうか……アイツ、頑張ってるんだな。知れてよかった」「ルフィも負けないようにしないとね」

「おう！ 負けねえ……海賊王に、俺はなる！」

優しい気微笑むマキノに力強く宣言したあと、ルフィはマキノからTDを手渡され、使い方を教えてもらった。マキノの方には別に手紙とTDが送られてきていたらしく、あくまでそのTDはウタからルフィに贈られたものだ……。

その説明を聞いてTDを受け取ったルフィは、酒場から出てすぐにダダンのアジトには帰らず、かつてウタとよく一緒に過ごしていた海岸に向かった。

懐かしむようにTDから流れる歌を聞きながら、軽く麦わら帽子を押さえつつ、ひとり小さく呟いた。

「……やっぱり、歌うめえな……ウタ」

閑話・胃に響く哀歌（エレジー）

聖地マリージョアにあるパンゲア城内の権力の間。そこでは世界の頂点たる天竜人の最高位であり、世界政府最高権力者である五老星がおり、五老星たちの前には2名のCPOが居た。

CPOのうちのひとり、CPO総監の報告を聞きながら、五老星は真剣な表情を浮かべる。

「……ウタウタの実の能力者にして、歌手か……危険な存在ではある」
「だが、ウタウタの力を使用している様子はない」

「それに赤髪の娘……ファイガーランド家の血筋ともあれば、迂闊に手も出し辛い」

「魔王に関してはどうだ？ スパンドムから処理したと報告があったが……」

「そもそもあれは、人の手で処分などできるものなのか？」

話し合う五老星の前にある新聞には、いまや世界に知名度を広げているウタの姿があり、かつてのエレジアの一件を知る五老星にとっては警戒すべき相手という認識だった。

なお魔王トットムジカに関しては、スパンドムから「楽譜を処理したので、今後T o t M u s i c aを歌っても魔王が顕現することはない」と報告を受けている。

「……スパンドム殿でしたら出来ても驚きませんが」

「まあ、確かなに……現状は、反政府的な思想などは持っているのか？」

五老星の言葉に反応して呟くように告げた総監の言葉に、五老星も納得した様子で頷く。確かに彼らの知るスパンドムであれば、魔王の宿った楽譜を処理することも可能かもしれないと……。

五老星からの質問を受け、総監は手元の資料を確認しながら告げる。

「いえ、そういった思想はないようです。海賊、海軍、政府、特定の団体を強く支持するようなこともなく、己の歌を聞いている間だけは、

皆観客として平等であるというようなスタンスみたいです」

「なるほど……しかし、世間的な影響力は侮れんぞ。今後なにかの影響を受けて意見が傾けば、民衆を大きく扇動する可能性もある。警戒はすべきだろう」

「そうですね。たしかに——うえっ!？」

手元の資料を何枚か捲った総監は驚愕したような声を出して硬直し、五老星は不思議そうに首を傾げる。その様子が気になったのか、控えていたもうひとりのCPOの男が資料を覗き込み、総監と同じく驚愕したようにビクツと体を動かした。そして少し沈黙したあとで、総監に声をかけた。

「……資料を作ったものを厳しく叱っておきます」

「そうしてくれ、順番を考えると……この資料を一番頭に持つてくるべきだろうと、しっかりと指導しておいてくれ」

「どうした?」

奇妙なやり取りに五老星のひとりが問いかけると、総監はどこか諦めの籠った表情で告げる。

「えっと、ですね。資料によりますと、該当のウタに関してですが……スパンダム殿がかなり親しくしており、いろいろ積極的に支援をしているとか……」

『……』

その一言を聞いて、五老星は全員遠い目をして天を仰いだ。そして、しばし権力の間の中に重い沈黙が流れたあとで、五老星のひとりが口を開く。

「……まあ、最悪の事態を想定することは必要だが、だからと言って憶測ばかりを積み重ねても仕方ないな」

「左様。現時点で反政府的な思想はなく、民衆を扇動したりもしていないわけだ」

「ああ、むしろ民衆に活気が出るのはよいことといえる」

「それに、目的はエレジアの復興と聞く。政府にとっても有益な目的だ」

「そうだな。むしろ世界政府として、積極的にエレジア復興を支援す

べきだろう」

総監の一言を聞き、この件に関する方針は固まりつつあった。主にウタの目的であるエレジア復興を支援しつつ、様子を見るという方向に……。

しばらくその方向で話し合ったあと、五老星はCPO総監に告げる。

「……念のため天竜人全員に通達しておけ。歌姫ウタは世界政府が認め、支援している歌手であり、いかな理由であっても手を出すことは許さないと……守らなければ、

場合によっては天竜人の地位の剥奪もあり得ると、年齢問わず必ずすべての天竜人が理解するまで通達せよ」

「分かりました。五老星からの最重要通達と銘打ってお伝えしても？」

「許す。とにかく、必ず全員に理解させる。分かっていたいなかった、知らなかった、などという言い訳は聞かんと、伝えておけ」

「はっ！」

珍しくかなり強い口調で指示を出したあと、五老星たちは少し疲れた様子で椅子に座る。

「……まあ、とりあえずウタに関してはこれで終わりとしよう」

「そうだな。ほかにも議論すべきことは山のようにある」

「では、次は……」

そうして、五老星たちは痛む胃を押さえながら世界についての会議を進めていった。

・***

権力の間から退出し、廊下を歩くCPOのふたり、十分に離れたことを確認してからCPOの男が総監に向けてボソリと呟くように告げる。

「……よっぽど、スパンダム殿の機嫌を損ねたくないようですね」

「そりゃそうだよ。私だって五老星と同じ判断をするよ」

「まあ、確かに場合によってはマリージョアが消し飛びますからね」
「それどころか、世界が滅ぶかもしれないしね……なにが怖いって、スパンダムさんって仕事に対して真面目だから誤解されがちだけど、世界政府への忠誠心とか欠片もないからね」

権力の間から離れたことで総監はある程度砕けた口調で答える。

ふたりもまたCP9司令長官にして、実質的なCPの長とも言われているスパンダムとは関わりが深い。そのため、ある程度スパンダムについては理解していた。

世界政府に忠誠心を持って仕えているわけでは無く、あくまで敵対する理由がないから従っているだけで、理由さえあればいつでも敵対する可能性がある人物だと理解していた。

「金や権力でもコントロールできない……けど、基本的に誠意に対しては誠意で応えてくれる方だから、コツコツと信頼を高めるのが有効だね。信頼関係さえしつかり結んでおけば、よほど無茶なこと言わない限りは指示に従ってくれるし、五老星としては変なところで機嫌は損ねたくはないだろうね」

「なるほど……実際とんでもない方ですからね」

「本当にね。戦闘力は異常の一言で、事務能力も異次元だし歩く資料室レベルに知識も深い。部下の育成も出来て、仕事も滅茶苦茶早い。あの人ひとりで何人分の仕事をこなしてるか、考えるのも馬鹿らしくなるレベルだよ」

「実質CPの長とか言われてますしね」

本来CP内で一番立場が高いCPO総監に対しての言葉でもないが、総監は苦笑を浮かべつつ頷く。

「いや、事実トップだと思うよ。CPO総監の私が言うぐらいだから、あの人の名実ともにCPのトップでいいと思う。というか本場に新役職でも作って、トップに立ってくれないかなあ……私は、あの人の下なら異議なしなんだけどね」

「本人がいま以上の立場は面倒だって拒否してますしね」

「本当に欲の無い方だねえ。ちよつと前にもパンクハザードで英雄的な活躍したつてのに、報酬全部科学班に譲ったみたいだしね」

「ははは、なんとというか、相変わらずですよね」

総監はスパンダムのことを明確に己より上の存在だと認めており、実際合同会議などの場でもスパンダムを積極的に中心に据えている。

CPOの男も同意の様子で、苦笑を浮かべながら頷いていた。

「まあ、ともかく五老星としてはいまのうちに慎重にスパンダムさんのご機嫌を取って、いい関係を築いておきたいんだよ。一番必要な時に、最強のジョーカーを切れるようにね」

「というと？」

「単純な話だよ。いま世界政府……ひいては五老星にとって一番邪魔なのは革命軍なわけだしね。革命軍の本拠地が判明した時に、スパンダムさんっていう最強のカードを切りたいんだよ。そうすれば勝ち確定だしね」

「……自分が革命軍なら、全力で逃げますね」

「私も全力で逃げるよ。なんなら、即刻革命軍辞めて転職するよ」

苦笑しながら告げたあとで、総監はしみじみとした口調で言葉を続ける。

「まあ、本当に凄い人だよ、スパンダムさんは……私は、心は男だけど惚れそうになっちゃうしね」

「……あくまでしたっけ？ 悪魔の実を食べて女性になったんですっけ？ たびたび言ってますけど、それって冗談なのか本気なのかどっちなんですか？」

「さあどっちだろうね」

「というか食べると性転換する悪魔の実って、なんですか……？」

胡散臭そうに聞き返すCPOの男に対し、総監はゆるい調子で曖昧な言葉を返す。

「うーん、なんだろうね？ いや、懐かしいね。そう、アレはまだ後の海賊王ゴールドロジャーがルーキーと呼ばれてた頃だったかな？」

「そこからスタートだとしたら、総監っていったい何歳なんですか？」

「女性に年齢を聞くものじゃないと思うね」

「結局男なのか女なのか……」

「その時に都合がいい方かな」

「無茶苦茶言ってますね」

相変わらずどこまで真実で、どこまで嘘なのかよく分からない喋り方をする総監に対して、CPOの男は溜息を吐く。

仕事をしている時は極めて丁重でまさに役人といった感じの総監だが、それ以外は浮雲のように掴みどころのない人物だった。

「まあ、私はアレだよ。悪魔の实の影響で不老になってるから、見た目は若いままなんだよ」

「……若いまま不老ってわりには、それなりに見た目は……」

「どうやら、厳しい任務がしたいみたいだね」

「す、すみません」

若いまま不老というには、総監の顔はそれなりの年齢に見える。40代から50代ほどの、あまり特徴のない年齢相応の地味な女性とといった感じの顔立ちだ。

「アレだよ。普段は諜報機関のエージェントとして、悪魔の实の力で顔を変えてるからね」

「……へえ……いろいろな効果がある悪魔の实なんですね」

「部下の目から信じる心が失われていつてる気がするなあ……自慢するわけじゃないけど、これでも昔はサイファーポールにその人ありつて言われるぐらいのエージェントだったんだよ。海軍の拳骨のガープと仏のセンゴク、そしてサイファーポールは私って感じの世界政府の三本柱だったね」

どこか懐かし気な様子で話す総監に対して、CPOの男はなんとも胡散臭そうな様子で聞き返す。

「ガープ中将やセンゴク元帥の武勇伝はよく聞きますが、総監のものは聞いたことが無いんですが……本当にそんな風に呼ばれてたんですか?」

「……ちよつと……気持ち……大袈裟に言ったかな? 割と見栄張ってたね……うん」

「……やっぱり」

「あくでも、ロジャーと戦ったこともあるよ」

問い詰めると総監はあっさり和三本柱なんて呼ばれてはいなかつ

たと告白した。苦笑しながらさして悪びれた様子もない総監にCPOの男が再びため息を吐くと、ふと思いついたように総監が告げた。「海賊王と？ それは本当ですか？」

「これは本当。ほら、ロジャーが鬼って呼ばれるようになった一件。一国の軍隊を叩き潰したって話は知ってる？」

「ええ、有名な一件ですね。仲間を侮辱されて怒った海賊王によって、国の軍が壊滅した事件」

「そう、その一件で世界政府としてもロジャーを野放しにはできなくてね。当時CPでバリバリのトップエージェントだった私にロジャー抹殺の指令が来て、戦ったわけなんだよ」

「なるほど、それで海賊王と激戦を繰り広げたと……」

総監の言葉を聞きCPOの男は感心したように呟く。勝敗は海賊王が死んでいない時点で、引き分けないし総監の敗北となったのだろうが、数々の武勇を持つロジャーと渡り合ったとなると、見直すに足る偉業といえる。なんだかんだ胡散臭そうに見えても、やはりCPOのトップを任されるだけの實力はあるのだと……。

「……いや、ボッコボコにやられて半泣きで逃げたね」

「駄目じゃないですか!？」

「無理無理、アイツ強すぎ……」

「むしろよく逃げられましたね？」

「そこはほら、悪魔の實の力を使ってね」

「……性転換して、不老になって、顔を変えられて、海賊王から逃げられる悪魔の實ですか？ 大丈夫ですか？ だいたい設定が山盛りになっけてますよ」

「本当だ。凄いね、私の悪魔の實」

のほほんとした様子で話す総監を見て、真面目に聞いた自分が馬鹿だったと言いたげにCPOの男は頭を抱えた。

そのまましばし頭痛を抑えるように頭に手を当てていたが、ふと思いついたように顔を上げて口を開く。

「……というか、そもそも、総監って本当に悪魔の實の能力者なんですか？ 何度か任務をご一緒したこともあります、一度も能力を使っ

てるのを見たことが無いんですが?」

「あくほら、私の能力は戦闘向きじゃないからね」

「また設定が増えた……じゃあ、悪魔の実の名前は?」

「さあ、スパンダムさんぐらい強くなったら教えてあげるよ」

「それ絶対教えないって言ってるのと同じですよね!」

「はは……まあ、雑談はこの辺にしておいて、とりあえず役人らしく真面目に仕事をしようか」

「……了解」

あまり納得していない様子のCPOの男に対し苦笑を浮かべつつ、結局総監は肝心なことはなにひとつ口にするのではなく、仕事モードに戻り真面目な顔で歩き始めた。

相変わらず掴みどころのない上司に大きいため息を吐いたあとで、CPOの男は気持ちを切り替えて総監の後に続いた。

「……あの人は、私には眩しすぎるんだよなあ。力不足に嘆いた経験があればあるほど、どうしようもなく強く惹き付けられる。私はもう、諦めることに慣れちゃったからなあ……チエルシーちゃんが、ちよつと羨ましいよ」

「なにか言いました?」

「ううん。なにも……さて、天竜人への伝達を頑張ろうかね」

歌姫の幻想曲（ファンタジア）

エレジアの一角に新設されたコンサートエリア。劇場版のFILM R E Dでウタがライブを行った会場と同じ場所ではあるが、映画に比べ俺やリリスの支援があつた影響か、観客席なども含めて映画よりしつかり作り込まれている。

俺が居る特別招待席も、映画では小舟で席に移動していた様子だったが、専用の橋が作られているのでそこを通過して移動できるようになっている。

観客席も芝生の坂に座る形ではなく、ちゃんと席になっているが、その影響で映画よりは観客を抑えめにしている……それでも十分多いが。

「いや〜最高の席だな、ステージがよく見えるし」

「ああ、長官に感謝だな」

明るく話すジャブラとフィズは、背中にウタのマークが入った半被を着ており、手にはサイリウムを握っていて準備万端という様子だ。このふたりだけ、他と比べてミーハー度が高いな。

今日にいたってはフクロウより騒いでるので、よっぽどである。あと、なんだかんだでやっぱりこのふたりは趣味などの気が合うようで、かなり仲がいい。

「……大した人数だな。そのウタという歌手は、お前らの言うようによほど人気のようにだ」

「TDの普及でかなりの歌手が台頭してきたが、その中でも一番勢いがあると言っている歌手じゃからな」

ルッチはそもそもウタに関してあまり知らない上に、こういったライブ会場に来るの自体初めての経験なのだろう、なにやら物珍し気にしており、なんだかんだで楽しんでいるように見えた。

ガレーラでの潜伏任務の経験のおかげで、ある程度こういったイベントをつまらないと切り捨てたりはせず楽しめるようになっていたのはいい傾向だ。

他のCPメンバーたちもライブ開始が楽しみという様子でワイワイと話をしており、それを横目に見ながら視線を動かして……こことは別の特別招待席を見て、思わずため息が出た。

……もう少しマシな変装をしろ、親バカ海賊団。

視線の先には変装こそしているが、明らかに赤髪海賊団と思わしき集団が居た。シャンクスはいい、特徴的な赤髪をバンダナで隠しているの、最低限のところは抑えている。

だが、ラツキールウに変装は無理だろう。体形で丸わかりなのだが……いや、だが、まあ、ワンピースの世界はこういうガバガバな変装に周囲が気付かないパターンも多い。というか、実際騒ぎになつてないので気づかれてないのだろう。

まあ、偽麦わらの一味を海軍や政府まで本物と勘違いするような節穴具合だからな……。

「ポチ、ウタとゴードンに軽く挨拶をしてくる。ここは任せた……ジャブラとフィズがあまりに五月蠅いようなら、海に投げ込んでもいいぞ」

「了解です！」

「おいおい、ちよつと待て長官!? 最後の余計な指示!!」

「ははは、いいじゃないか……チエルシー、もう投げ込んでもいいぞ」
「おいこら、ルツチてめえ……」

騒ぐCPメンバーの声を聞きながら移動し、ライブ会場の裏手にある控室に移動する。今回のライブの警備は俺が紹介したとはいえ民間会社なので、顔パスというわけにはいかず取り次いでもらつて通行の許可を得てから控室のある建物に入る。

しばらく移動して、控室に辿り着き、ノックして入室の許可を得てから中に入ると、室内にはウタとゴードンの姿があった。

「スパンダムさん! 来てくれたんだ!」

「ああ、開催前に顔見せにな……なんだその服は?」

「えへへ、いいでしょ? 今日のために新調したんだ」

「……なかなか、个性的で目立つデザインだな」

そう言つてウタが嬉しそうに見せてきたのはFILM REDで

も来ていたパーカー……なのだが、映画と微妙にデザインが違う。

まず、全体的な色合いがピンク主体ではなく、赤色をふんだんに使ったデザインになっており、さらには映画では熊を模したフードだったはずだが、目元が黒い……パンダモチーフになっている。

赤色が多いのは、シャンクスと和解した影響だろうが、デザインがパンダなのは……俺か？ いや俺は動物のパンダとは関係ない——配色的にあまり否定もできないな。

「さつき、シャンクスたちも会いに来てくれてね。今日のライブを楽しみにしてくれてるんだって……私もしっかり頑張らないとね」

「意気込みがあるのはいいが、空回りをしないようにな。これが終わりではなく、むしろスタートのようなものだろ？ 気楽に楽しむぐらいのつもりでやれ」

「うん！ あつ、ありがとう！」

気合十分といった様子 of ウタに苦笑しつつ、ポケットから棒付きのキャンディーをひとつ取り出して渡してやる。

簡単な挨拶は済んだので、あまりライブ前に長居するものでもない。

「それでは、俺は客席で楽しませてもらう。ゴードン……いくら才能があるからとはいえ、ウタにとっては初めての大規模なライブだからな。お前がしっかりと支えてやれ」

「ああ、任せてくれ」

「頑張れよ」

「うん！ ありがとう、スパンダムさん！」

手を振るウタに軽く手を振り返してから控室を後にする。建物から出てライブ会場に向かいながら棒付きキャンディーを啜る。

そういうえば、映画ではウタを誘拐しようとしていた海賊崩れのような者も居たな。まあ、今回は映画と違ってしっかりと警備もあるし、なんなら先日エレジア復興に世界政府が全面的に協力すると声明も出した。

ウタ個人を支援と言っているわけでは無いが、遠回しにその行動を支持していると言っているようなものなので、そんな状態で喧嘩を売

るような真似をする馬鹿が居るとも思えないが……。

そう思いつつ、俺は見聞色で感じた気配の場所に剃で移動する。そこはエレジアの町の廃墟のひとつであり、そこにはなんとガラノ悪そうな連中が集まっていた。

「……いいか、狙いはライブが終わった後、建物から出てきたタイミングだ」

……居るんだなあ、馬鹿つて……赤髪海賊団や俺たち、さらに休暇と思わしき名の知れた海兵もそこそこ来ているライブで事を起こそうというのは、自殺みたいなものだ。

・***

特別招待席に戻つてくると、ジャブラたちが声をかけてきた。

「なんだ、長官。結構遅かったな？　もうそろそろ始まるぜ」

「ああ、生ゴミは海に捨てる臭いなどの問題もあるし、埋めて処理することにしたせいで、少々時間がかかった」

「うん？」

「まあ、それはいいとして、ジャブラとフィズは投げ込まれていないみたいだな」

「……残念ながらな」

「おい、ルッチ」

どうやらタイミング的には丁度よかったみたいで、まもなくライブが開始する様子だった。そのままステージのほうに視線を向ける。

それから数分の後、ウタのファーストライブは開始された。ウタウタの実の力は使っていないが、それでもリリスが協力していることもあって、ライブの演出はかなり見事なものだ。大型のモニターや音響などかなりレベルが高い。

ウタもライブを楽しんでいる様子で、大きなトラブルもなくライブは進行していく。途中でウタは *T o t M u s i c a* も歌っており、俺の魂の中に居るトットムジカが喜んでるのを感じた。

というより元が元だからか、トットムジカは音楽好きであり、ライ

ブも楽しんでるのだろう。

あつと言う間に時間は過ぎていき、いよいよ次がラストの曲となるタイミングでウタは観客たちに向けて口を開く。

『皆々楽しんでくれてるかな？ 名残惜しいけど、次が最後の曲になる。今日会場に来てくれた人たちも、映像電伝虫で見えてくれている人たちも、それぞれがいろんな事情を抱えてると思うんだ。毎日が苦しいって思ってる人もいるんじゃないかって、そう思う。なんて言えばいいのかな、私の歌を聞いている間は、そういう辛さとか苦しきとかを忘れてくれたら嬉しいな』

そこまで話したところで、ウタは一度言葉を区切り、強い想いの籠った目で言葉を続ける。

『……でも、それは決して辛い現実から逃げるためじゃない。一時の休憩のあとで、また前を向いて歩くため。ずっと止まることなく前に歩き続けられる人は、本当に少ないと思う。辛くて、苦しくて、歩けなくなることであってある。私自身そういう経験があって、いろんな人に助けてもらえて、背中を押してもらえたからいまこの場所に立ててるんだ』

ウタの表情を見て、俺は少し感心した。映画においてはフアンの想いや願いに若干振り回されている部分もあった彼女だが、シャンクスとの和解で前向きになったことや、世間の常識などを学んだことでしっかりと己の意思を持っていてるように感じた。

『だから、私は、私の歌でフアンの皆の背中を押せたらいいなって思う。何度立ち止まっても、また前を向いて歩けるように、何度でも皆を力いっぱい応援するよ！ 歩く先に世界は続いていくから！』

そう宣言したあとで、ウタは最後の曲となる『世界のつづき』を歌い始めた。映画においてはいわば民衆たちの偶像であろうとして、それに振り回されて苦しんでいた彼女だが……いまは、己の心に確かな芯を得て、その生き方で人を導けるように成長した。

「……なるほど、多くの者を惹き付けるだけのことはある。堂々としたいい歌手だ」

「そうだな」

眩くように話すルツチの言葉に同意する。これなら、彼女が目標とするエレジアの復興にも、それほど長い年月は必要ではないかもしれないと、そう思うほど彼女のファーストライブは大成功だった。

青い鳥と妖精

原作開始の時期まで1年を切り、CP9メンバーの鍛錬はかなり順調だ。やはり敗北を経験したことで非常に伸びがよく、そろそろ新世界の任務を回して実戦経験を積ませてもいいレベルになってきた。

ルッチは既に覇気を武装色、見聞色ともに習得しており、今後は覇気の練度を上げていくことになる。これに関してはリリスに、左右の腕の覇気の波長をズラす腕輪を複数作ってもらったので、それを使つて鍛錬を行えばいい。

フィズも武装色は習得済み、見聞色がやや苦手のように苦戦しているが、すぐにものにするだろう。次いでジャブラとカクも武装色は使えるようになったが、見聞色はさっぱり。カリファとフクロウは武装色より先に見聞色を掴みかけており、もう一歩といったところか。ブルーノとクマドリは苦戦していてやや遅れ気味だが、習得の速度イコール覇気の才能というわけでもない。

習得速度は本当に個人差が大きいので、なんなら一つ習得したらもうひとつもすぐに習得する可能性もあるので、この辺りは問題ない。

特にルッチは、天才と呼ばれて明確な敗北を俺やポチ以外から経験していなかったこともあり、マハとゲルニカに敵わなかったことは、かなり屈辱だった様子で瞳に籠った熱意が違う。

あの様子と持ち前の狂気があれば、以前ポチに行わせていた筋肉圧縮の肉体改造には耐えれそうな気がするので、時機を見て行わせてみようと思う。

そんなことを考えつつ時計を見ると、そろそろ定時だった。明日は休暇だし、今日の夜はいいウイスキーを開けて晩酌を楽しむのがいいか……。

どの世界であつても休日前の仕事終わりというのはいい気分だと、そう思った瞬間懐に入れていた通信機が着信を知らせる。

「……スパンダムだ」

『俺だ』

「……よほど死にたいらしいな親父。望みなら、10分以内にそちらに行つて首と胴を切り離してやるが?」

『なんでお前は連絡する度に殺意が上がってるんだ!?』

連絡してきたのは親父だった。コイツは本当にいつも間の悪い奴である。よりにもよつて定時直前にかけてくるとは、肉親でなければ物理的に平らになるまで叩き潰していたレベルである。

まあ、親父の間の悪さはいまに始まったことではないかと、そう己に言い聞かせてため息を吐いたあとで口を開く。

「……それで、なんの用だ?」

『あ、ああ、実はちよつとお前の力を貸してほしくてな……』

「内容次第だな……お前が明日の朝日を拝めるかどうかは」

『内容次第つて、力を貸すかどうかじゃなくて、そつちなのか!?』

親父のツツコミは無視しつつ、内容を話すように促す。

話を要約すると、親父は現在外交を主に行う部署に居て、政府の加盟国や非加盟国との交渉が主な業務なのだが、ある非加盟国と交渉を行つた際に問題が発生した。

その国は大規模な反乱軍に頭を悩ませており、親父はその反乱軍を政府が対処するという条件で非加盟国に世界政府への加盟を求めた。

交渉の結果その国は親父の申し出に応じた訳なのだが、そこでさあ反乱軍を始末しようと思つたタイミングで……その反乱軍が、親父が想定していた数倍の規模だったことが判明した。

「……それで、あまりの規模の大きさに海軍等にも洩られて、鎮圧できるぐらいの兵を確保できなかった。そもその話、あくまで加盟は鎮圧完了後の話なので、現時点では非加盟国であり大々的に兵を送るのは難しく、荒事専門のCP9に依頼したいと、そういうわけか? 相変わらず詰めが甘いな、反乱軍の規模も事前に精査しておけ」

『うぐつ、返す言葉もない』

「……はあ、仕方ない。正式に上を通して書類を回せ、俺が直接行つてやる」

『ほ、本当か!? 助かる!』

なんだかんだで親父には借りも多いし、仕方がないだろう。それに

加盟国が増えるというのは政府にとっても大きな利益となるだろうし、協力する許可自体はすぐに下りるだろう。

CP9メンバーは鍛錬を中心に行っているの、あまり人員に空きはないが……俺が行けばいい話だ。規模にもよるが、一日あれば十分終わるだろう。

「……ただ、ひとつ言っておく」

『なんだ？』

「次に、定時直前にかけてきたら、本気で殺すぞ」

『……は、はい。すみません』

・***

予想通りというべきか、俺が反乱軍に対して対応する許可はアツサリと下りた。政府としても加盟国が増えるのは歓迎なのだろう。

ただ、それはそれとして、正式に回ってきた指令には一ヶ所奇妙な点があり、『補佐として1名同行者を付ける』となっていた。

どういった意図かは現時点では測りかねるが、別に拒否する意味もないので留守をポチに任せて、目的の国がある島に剃刀で移動。

指定された場所で補佐とやらと落ち合うことになった。

目的の場所に着いてみると、そこに居たのは黒いスーツを着た女性だった。薄い青髪に金色の目、顔立ちは整っており身長や体形はスレンダーな印象。なにより特徴的だったのは、細く尖がった形状の耳……まるでエルフのような珍しい耳をしていた。

女性は俺の姿を見ると、綺麗な動作で敬礼をして口を開く。

「お疲れ様です、司令長官殿！ 初めまして、私は今回の補佐を務めます。コードネームは、ブルーバードです！」

「……」

「……えっと……あの？」

自己紹介してくる女性に対して、俺は呆れたような目で応える。初めましてとは、いったいなんの冗談だ？ ボケで、ツツコミ待ちなのか？

「……CP0の総監が、こんなところでなにをしている」

「……逆になんで分かるんですか？ 顔も声も違うと思うんですけど……」

「背骨や脊髄、骨格も人それぞれ違う。ある程度訓練すれば、そういう部分で個人を判別できる。まあ、コレはある程度知っている相手にしか使えないので、小技程度の技術だな」

「スパンダムさん、ただでさえ異次元の戦闘力があるんですから、もうちよつと油断とか慢心してくださいよ……隙無さ過ぎです」

目の前の女性CP0総監はどこか呆れたような表情で苦笑を浮かべる。しかし、大した変装技術だ。顔も声もいつもの総監としてのものではなく完全に別人。諜報員向きの能力である。

「とりあえず……そうだな、まずはなんと呼べばいい？ 顔や口調も変えているということは総監としての名を呼ぶべきではないのだろうか？」

「変えてるといふか顔も口調も、これが素なんですけど……けど、そうです。私名前って仕事の都度変わるので、本名とかも覚えてないんですよ。コードネームも呼びにくいでしょうし……せつかくですから、チエルシーちゃんみたいにスパンダムさんが適当に愛称を付けてくれてもいいですよ？」

「そうか、なら……『タマ』で」

「……おつかしいなあ、私コードネームはブルーバードって名乗ったのに、青も鳥も関係ない猫っぽい愛称つけられちゃったぞ？ まあ、いいです。では、この姿の時はタマということで、以後よろしくお願います」

本当に適当に付けたのだが、どうやらそれで構わないらしく、タマはどこか気の抜けた笑顔を浮かべた。

総監として話すときは丁寧で固い印象ではあったが、素はどこかのほほんとしている印象を受ける。だがまあ、目は割と狂ってるので、いろいろありそうではあるが……。

「それで？ 改めて、なぜお前がここに居る？」

「簡単に言うと上の指示で見学ですね。ほら、訓練の時と実戦の時

じや、また戦い方も違うでしょ？ スパندانダムさんが異次元の強さつてのは知ってますが、実際どのぐらいかみたいなのを私視点で見て上に報告するんですよ」

「なるほど、諜報機関の役人らしい仕事だ」

「ははは……まあ、最低限邪魔にならない程度の腕はあると思いますので、スパندانダムさんは好きなようにやってください」

まあ、CPO総監を務めるほどのだから特級エージェントなのは間違いないだろう。実際にパッと見た印象ではあるが、かなり鍛えているようで覇気の練度次第では海軍大將にも勝てそうな気がする。

とりあえず、タマと一緒に目的の場所に向かって歩きながら雑談をする。

「ところで、普段は顔と声を変えていると言ったな。それはそういう技術か？ それとも特殊な能力か？」

「能力イコール悪魔の実って思考停止して断定しないところがスパندانダムさんらしいですね。まあ、私に関して言えば悪魔の実の力です。ヒトヒトの実幻獣種『モデル：ニンフ』。それが私の食べた実の名前です。あつ、部下には内緒にしといてくださいね。ミステリアスな女上司で通っているの……」

「ニンフ……神話に出てくる若い女性の姿をした妖精だったか？」

「ええ、おかげで悪魔の実を食べて変化してから、ずくとこの姿のままですよ。しかもこの実、形態変化しても耳の長さが変わるだけですね」

「どんなことができるんだ？」

自然系よりレアと言われる動物系幻獣種。センゴクを除けば、実際に食べたやつに会ったのは初めてだ。

「いろいろできますけど……割と中途半端ですね。たとえば……妖精のイタズラ」

タマが小さな硬貨を取り出して一言告げると、その硬貨が離れた場所にあった石と入れ替わっていた。チェンジリング……本来は子供の入れ替えを意味する言葉だが、タマの能力としては単純に入れ替えの力のようなだ。

閑話・唯一の適格者にして絶対者

それは、大海賊時代の始まりよりしばらく前。当時強力な海賊団として名が知れ始めていたロジャー海賊団。その船長であるゴール・D・ロジャーが鬼と呼ばれ始めた頃、とある島で宴会を行っていたロジャー海賊団を世界政府のエージェントが襲撃し、船長であるロジャーと激しい戦いを繰り広げた。

「……はあ、強いなあ。駄目だこれ、勝てないや」

片膝をつき呟くのは、黒いスーツを着た金の長髪に赤い瞳の女性。対して戦闘していたロジャーは手傷こそあるもののまだ余裕があり、戦いはロジャーが優勢であることを示していた。

「いや、お前も大した強さだぜ。アレだろ？ お前、ピクシーとか呼ばれてるエージェントだろ？」

「ピクシー？ ああ、いまはそう呼ばれてるんだね」

「あん？」

「ピクシー、シルキー、バッドフェアリー、グレムリン、ナイトメア、ミストファントム……いろんな通称で呼ばれるから、いまいち自分でもよく分からないんだよねえ。私もガーブやセンゴクみたいに分かりやすい二つ名が欲しいなあ……まあ、とりあえずいまはピクシーでいいよ」

ロジャーが告げた言葉に、女性は一瞬キョトンとしたあとで言葉を返した。彼女は長らく世界政府に仕える存在であり、顔も名前も数えきれないほど変えている。

いまの金髪赤目の姿も、悪魔の実の能力によって変えている顔であり、素顔というわけでは無い。

「しかし、もったいねえな。そんなに強えのに、政府の飼犬で満足か？ もっと自由に生きりゃいいのによ。ああ、そうだ！ どうだ、ピクシーお前、俺たちの仲間にならねえか？」

「おい、ロジャー!? 世界政府の役人だぞ！」

「わははは、いいじゃねえか、面白そうだしよ」

強襲してきた世界政府のエージェントを仲間に誘うロジャーに、副船長であるレイリーが慌てて突っ込むが、ロジャーは気にした様子もなく笑っている。

そんな様子を見て、ピクシーも楽し気に笑顔を浮かべる。

「はは、確かに、それは面白そうだね」

「だろ？ 海賊は面白えぞ」

「うくん、魅力的だから一考したいところだけど、その前にひとつ質問」

「なんだ？」

首を傾げるロジャーの前で立ち上がりながら、ピクシーは指を一本立てて問いかける。

「ロジャー、君は自由を語ったり、自由に生きることに関係が必要だと思おう？」

「あん？ 要るわけねえだろ。ソイツが思うがままに生きりゃ、それが自由だ」

「うんうん、なるほど、なるほど……」

ロジャーの返答にピクシーは笑顔で何度か頷いたあとで、明るい笑顔を浮かべたままで口を開く。

「じゃあ、残念ながら私と君の価値観は致命的に噛み合わない。だから、せつかくの誘いだけど断らせてもらおうね」

「そうか、そいつは残念だな。てことは、テメエは資格がいるって考えてるってわけか？」

「自由を語ることに、自由に生きること、資格なんていらぬ。思うがままに生きればいい？ ……ロジャー、それはね『強者の理屈』だよ。まあ、そもそも君が真の意味で自由かどうかは置いておくとして、自由を語れるのはそれに見合うだけの強さがある者だけで……世の中の大半は、自由に生きることはおろか、自由という言葉語る資格すら持たない弱者ばかりなんだよ」

ピクシーはどこか楽し気に手を広げながら告げる。お前たちが自由を語れるのは、お前たちが強者だからであり、そうじゃないものなど山ほどいると……。

「自由であれ支配であれ、一番最初に嘆くのはいつだって本当の弱者だ。覚えておくといい、檻の中でしか生きられない者たちも居るってね。そしてどんな世界でも犠牲となる者は生まれる。ゼロにすることなんて不可能。できるのは、それを減らすことだけってね」

「……それで、君たち世界政府が犠牲となるものを選定すると？ 傲慢だな」

まるで歌うように告げるピクシーに対し、レイリーが静かに告げると、ピクシーは笑みをさらに深くしながら言葉を返す。

「強者はいつだって傲慢だよ。君たちだってそうだろう？ 一般人は殺さない。だけど、海賊は殺す？ ほら、君たちも君たちの勝手な基準で選定してるじゃないか、生かす相手と殺す相手を……けどまあ、それは仕方ないことだよ。それが世界つてもものの在り方だ」

踊るように動きながら、ピクシーという名の残酷な妖精は告げる。世界政府とお前たちにいったい何の違いがあるのかと、結局お前たちも選定する側であり、選定される側の気持ちなど分かりはしないだろうと……その赤い瞳には、狂気の色が見え隠れしていた。

「……例えば、そうだね……ある時、新興勢力が現れたとする。世界政府の支配から民衆を解放するぞ……って感じにね。そして実際に成し遂げたでしょう。その勢力が世界政府を倒したと仮定する。これで民衆は世界政府という檻から解放されたって自由になった。それで、世界が変わる？ ……いいや、なにも変わらないよ」

「……」

「上澄みが変わるだけで、世界の土台はなにひとつ変わりやしない。勝者が、新しい強者が次の選定を始めるだけだよ。この醜く歪んだ世界は弱者の嘆きの上に成り立つようにできてるんだよ」

「ずいぶん面白い草だな。その言い方はまるで……」

あまりにも楽しそうに話すピクシーに若干の不気味さを感じながら、レイリーがなにかを口にしようにとしたタイミングで、ピクシーはピタッと動きを止めた。

「うん？ わざわざ、口にして言わないと分からない？」

『ッ!?!』

その表情にロジャー海賊団の面々は、思わず気圧された。感情の全てが抜け落ちたかのような表情、虚無だけが詰め込まれたような光のない瞳、妖精は感情の欠片も籠っていない抑揚のない声で告げる。

「私はこの歪で醜い世界が死ぬほど嫌いだよ。強者が己の振るう暴威に、自由だ支配だ正義だと、御大層な冠を付けて語るのが、反吐が出るほど不快だよ」

世界そのものが死ぬほど嫌いだと告げるピクシーに、あまりにも虚無なその表情に気圧される者たちの中で、ただひとりロジャーは静かに頷いて告げる。

「……なるほど、確かに俺たちの価値観は致命的に合わないみたいだな。勧誘は諦めるか」

「うんうん。分かってもらえたなら、なによりだよ」

ロジャーの言葉を聞いて、ピクシーは表情を笑顔に戻して頷いた。「まあ、コレはあくまで私の考えっただけだよ。考え方や価値観なんて人それぞれだしね。そもそも、私の基準で言えば、ロジャー……君は真の意味で自由じゃないしね」

「ほう、そいつは興味深いな。是非詳しく聞いてみたいもんだぜ」

「うくん。いい加減諜報員としてはお喋りし過ぎだし、これ以上の価値観の押し付けは止めとくよ。とりあえず、勝てそうにないから逃げることにするね——妖精のイタズラ^{チェンジリング}」

「あつ、おい！　そこまで言ったなら説明していけよ!!」

叫ぶロジャーの言葉もむなしく、ピクシーの姿が消え代わりに大きな箱が現れた。予め能力で入れ替わるために用意していたのだろう。まんまと逃走を許したことに頭をかきつつ、ロジャーは近くに居たレイリーに問いかける。

「……ただの箱だと思うか？」

「私なら時限式の爆弾を詰めてるね。そう考えると、ペラペラ喋っていたのは、時間調整か……」

「よし、野郎ども！　酒持って逃げろ！　爆発するぞ!!」

ロジャーの掛け声に、船員たちが無駄に素早い動きで酒を確保して逃走した直後、大きな爆発が起こった。

・***

東の海のローグタウン。高めの建物の屋根の上に立ちながら、私は眼下の広場を見下ろす。ついさつきまで晴れていたはずなのに急に振り出した雨……まるで、彼の死を空が嘆いているようにも感じられる雨の中で、能力で変えた緑色の髪を触る。

視線の先には処刑台があり、そこには笑みを浮かべたまま死んだ海賊王ゴールドロジャーの首が見える。だが、それ以上に広場からは凄まじい熱気を感じる。

ロジャーが死に際に放った一言は、間違いなく世界に一つの転機をもたらした。これから世界は変化するだろうと、そんな期待や不安に興奮といった感情が民衆たちに広がっていくのが分かる。

だけど、私の心にはなにひとつ響くことはなかった。たしかに変化は起こるだろう。だけど、それだけだ。この世界が醜いのは変わることはない。

ねえ、ロジャー？ 君が語った自由の先にあつたのがこの結果？

私の基準では君もロジャー海賊団も真の意味で自由なんかじゃなくて『自由になりたがっている存在』だって、そう感じたよ。そしてきつとそれは私も同じだろう。だけど、それは不可能だ。

あの時は語らなかつたけど……私はこう思うんだよ、ロジャー。真の意味で自由な存在は、自由だ不自由だといちいち語ったりしないんじゃないかって……そして、真に自由たる存在は世界でたったひとりしか存在しえないって、そう思うんだ。

それは『最強』の存在。比類するものなどにひとつ存在しない絶対的な頂点にして、究極の強者……たとえ己以外の世界すべてを敵に回したとしても容易く勝利できる程の絶対者。

その存在こそ、この世界で唯一、真の意味で自由も支配も正義も好きに語る資格があるって思うんだ。だけど、そんな存在はあり得ない。

だからこそ、唯一正しくすべてを行使する資格を持つ存在というの

が、あり得ない以上。この世界に自由も支配も正義も——なにもありやしないんだよ。

ぼんやりと暗い空を見上げる……ああ、やっぱり、私は……この世界が嫌いだなあ。

・***

「……存在するはずがないって、思ってたんだけどなあ」

「なにがだ？」

「ああ、いえ、なんでもありません。スパンダムさんの理不尽すぎる戦闘力を見て、思考がどっかいつてただけです」

不思議そうにする紫の髪をオールバックにした目の周りと鼻の黒い男性……CP9司令長官であるスパンダムさんに、私は苦笑を浮かべて答える。

私の視線の先には、生者はひとりもいない。ただ死体の山がある。この国の反乱軍の規模は国が頭を悩ませ、海軍が兵の派遣を躊躇するほどの規模だった。確実に革命軍が裏に関わっているだろうと思う。

国と十分に戦える数万という規模の軍隊は……ほんの数分でただの死体の山に変わった。本当になんて出鱈目な人なんだろうか。反乱軍は装備もしつかりしていたし、強者と呼べるレベルの者も居た。普通であれば上もコレだけの軍隊相手に殲滅なんて指示は出さない。革命軍の兵が紛れ込んでいて、生き延びた兵を扇動して革命軍に流れるのも覚悟のうえで、指揮官狙いの暗殺がせいぜいだろう。

だけど今回の上の指示は完全殲滅。理由は単純で、この人ならそれができると理解しているから……そして事実としてこの人は容易くそれを成してしまった。ただそれでも、これほどの短時間でというのは、予想外という他ない。

信じられない話だけど、以前ですら最強という言葉が相応しい絶対者だったのに、この人はまだ強くなっている。その強さに果てなど存在しないのではないかと思うほど……。

ああ……やっぱり、眩しいなあ。目がくらくらするよ。存在するわけがないと思っていた絶対者……この世界で唯一、真の意味で自由に生きる資格を持つ、最強の存在。

正直私の考えはチエルシーちゃんと似ている。チエルシーちゃんみたいに大つぴらに語るには、長く生き過ぎて感情を表に出さないことに慣れ過ぎたけど……考えは基本的に同じだ。

スパンダムさんはこの世界で唯一あらゆることを成す資格を得た存在で、この人の行動こそが唯一絶対の正解であると……スパンダムさんが、これが自由だと語ればそれが正しい自由だし、これが正義だと告げればそれが絶対正義だ。

「……残存は居ないですね。お疲れ様です。今回の件は、あくまでスパンダムさんは救援なので、事後処理などは担当部署にやらせますよ」

「ああ、任せた。馬鹿正直に一ヶ所に固まっていたおかげで早く終わったな」

「まあ、そりゃ、普通は思いませんからね。想定もしてなかったでしょう。これからいよいよ進軍して王国軍と睨み合いになると思ってるタイミングで、開けた平原で突然空から現れたひとりの存在に数分で文字通りの全滅させられるなんて……」

本当はもう……そろそろ終わりにするつもりだった。呆れるほど長く世界政府に仕えてきたけど、いい加減醜い世界を見続けるのに嫌気が差していた。

立場的にC P Oの総監まで務め、多くの機密を知っている私が隠居できるわけもないことは理解していたし、そもそも隠居しようが私の目に映るのは大嫌いな世界……うんざりだった。

だから、スパンダムさんに巡り合う前は、近いうちに死のうと思ってた。私は歯車のひとつでしかないし、死んだところで代わりなんていくらでもいる。

新しい総監が選定されて、私が担っていた役割を引き継ぐだけ……そう思っていた。

だけど、本当に皮肉な話だ。そんなタイミングで私は巡り合っ

まった。この醜い世界で唯一美しいと感じられる存在に、あり得ざる絶対者に……。

本当に困ったものだ。いつ死のうかとそればかり考えていたはずなのに、スパンダムさんの行く先を見たいと思ってしまった。

スパンダムさんは世界をどうするのだろうか？ 滅ぼすのならそれでもいいと思う。その時は、私の嫌いな世界が滅ぶ姿が見たいので、最後の方に殺してもらえるようにお願いしてみよう。

この世界を許容するのならそれもいい。スパンダムさんが価値があると認めた世界なら、私も考えを改めよう。

「連絡も完了しましたし、スパンダムさん。予定よりかなり早いので、ご飯でも食べに行きましょう。上司として奢ってください」

「……だから、本来はお前の立場の方が上だと……」

呆れたように眩きながらも駄目だと言わないスパンダムさんを見て笑みが浮かぶのを自覚する。この人は、私にとって導であり、醜い世界を美しく照らす漆黒の太陽だ。

長く勤めた世界政府に未練など欠片も感じない。スパンダムさんが世界政府に所属し続けるなら私も所属する。スパンダムさんが世界政府を切り捨てるなら、私はスパンダムさんについていく。

スパンダムさんがこれからなにをするか、考えるだけでも本当に楽しい。とんでもなさきに頭を抱えている五老星には悪いけど、報告書を見るたび笑みが零れそうになるのを我慢するのが大変だ。

私の進む道は、スパンダムさんの示すものしかありえないと、本気でそう思っている。だからこそ、こうやって、いままで誰にも見せたことが無かった素顔で会いに来たし、名前も貰った。

死ぬほど嫌いな世界が、少しだけ色付いたように……そう感じた。

渴望を得た獣

エニエスロビーにある訓練施設で、俺は地面に倒れて荒い息を吐く三人のCP9メンバーに告げる。

「水分はしっかり補給しろ……さて、まずはジャブラ」

「お、おう」

「鉄塊拳法はお前の長所だしそれを伸ばすのはいいが、基本的にその戦術は相手がお前の鉄塊を貫ける場合には使いにくい。相手の攻撃によって防御と回避を使い分けられるように、見聞色を集中して磨くことだ。ただ、過信はするなよ。いまやって見せたように見聞殺しという、見聞色を欺く技術も存在するからな」

「了解」

ジャブラは覇気の習得速度はなかなか早く、武装色と見聞色を共に使えるようにはなっている。ただ、見聞色を覚えてからその感覚に頼りがちになっている部分があつたので、矯正するために見聞殺しというものがあることを体験させた。

攻撃察知能力や判断力を磨いて、鉄塊と紙絵を的確に切り替えて戦えるようになれば、さらに成長が期待できるだろう。

「次にカク。全体的に練度は高くなってはいるが、お前は決定力に欠けるな。勝負を決められるような強いカードが不足している」

「ぬう、確かに同格以上が相手となると、短期で勝負を決めれるような札が無いのう」

「技をいくつか教えるのもいいが……いつそ悪魔の実でも食べるか？

上に申請すればいくつか回してもらえらと思うしな」

カクは現時点では悪魔の実の能力者ではない。原作においてはウシウシの実「モデル：麒麟^{シラフ}」を食べていたが、それは原作のスパンダムが用意したものであり、俺が用意していない以上能力者になつていないのも必然だ。ついでに言えばカリファも能力者ではない。

まあ、そもそもまだ原作の時期にはなっていないが……。

ともかく、原作と同じ実が来るかどうかはわからないが、悪魔の実

を用意してやるのはそれほど難しくはない。そのぐらい手配できる権力は持っている。

「悪魔の実か……ふと疑問なんじゃが、長官は悪魔の実を食べんのか？」

「なぜわざわざ付け入る隙を作ってやらないといけない？」

「ははは、悪魔の実が隙か……確かに、長官レベルになるとむしろ海という弱点ができるのはデメリットでしかないか……」

「まあ、食べたところで必ずしも戦闘向きの能力が手に入るとは限らんが、一考しておけ」

急かすことでもないので、カクに考えさせることにする。現状でカクと抜きつ抜かれつなジャブラが、原作のように説得をしているが、あの感じだと食べることを希望しそうだ。

後は、ポチは何度か聞いたが俺が指示するなら食べるが、そうじゃないなら食べないというスタンスなので除外。

カリファにもカクと同じことを聞くとして……フクロウとクマドリにも聞くことにするかな。原作のスパンダムと現在の俺の権力は比較にならないレベルなので、悪魔の実を4つであっても手配できるので、ポチと俺以外全員能力者というのも面白いかもしれない。

「さて話を戻して、フィズ……いい成長だ。武装色と見聞色共に基本は問題ない。今後は武装色の内部破壊等も含めた応用技を習得してもらおう。お前は戦闘技術などの基礎よりも、今後は覇気の練度の向上に集中しろ。強力な覇気は多くの悪魔の実に対する対策にもなるからな」

「了解だ。応用技も結構種類があるんだな、覇気つてのは奥が深いぜ……だが、自然系相手にも有効打を持てるってのはいいな。鍛えがいがあるぜ」

フィズは非常に伸びがいい。武装色も見聞色もしつかり習得しているし、戦闘技術なども及第点。やや練度の甘い部分はあるが、コイツに関してはもう新世界でも十分に戦えるレベルに到達している。

悪魔の実も身体能力が上がる動物系だし、全体的にかなりバランスがいい。

「お前たち三人は、かなり伸びがいいからな。近く覇気を使える訓練相手を手配して、経験を積んだあとは新世界の任務も回すようにするから、そのつもりでいろ」

「了解！」

「それでは、各自クールダウンはしつかりしておけよ」

今回の訓練はジャブラ、カク、フィズの三人が新世界での任務をこなせるだけの実力が身に付いたかの確認でもあったが、かなりいい感じだ。

これなら原作開始時期になるころには、それなりに新世界での任務経験も積ませて特級と呼んで問題ないレベルのエージェントに成長出来ているだろう。

そう考えつつ、俺はもうひとりを待たせてある別の特別訓練場に向かった。

・***

特別訓練場に辿り着くと、そこではルッチが静かに目を閉じて瞑想をしていた。俺が教えた気功術のひとつを実践しているみたいだ。

「待たせたな」

「いや、アイツらは？」

「及第点といったところだ。あのレベルなら、新世界でもそうそう死ぬことはないだろう」

「それはなによりだ」

ルッチは飛びぬけて伸びがいい。元々ルッチが稀代の天才と称される才能の持ち主であることもそうだが、それ以上にルッチに力への渴望が生まれていることが大きかった。

ルッチは元々強い狂気は宿していたし、いまもそれは消えていない。静かに待つことを覚えただけで、殺人衝動とでもいうべき狂気も強く持ち合わせたままだ。

「……事前には説明したが、場合によっては命を落とす可能性もあるが、どうする？」

「やる。長官が言ったように気功術を学びながらいろいろ考えたさ。たしかに、殺しがしたいという俺の欲求を満たすだけなら現状でも十分だと思っていた。いや……言い訳は止めよう。悔しかった。長官やチエルシーがいる場所まで、これほど大きな距離があるとは思っていなかった。なかなかどうして、体感しなければ実感できないものだな」

どうもマハとゲルニカに敗北したことは、ルツチに対して俺の想像以上にいい変化をもたらしたようだ。ルツチは昔からの知り合いで格上だった俺やポチのことは、自分より強いと素直に認めて受け入れていた。

だが、己が想像していた以上に自分より格上が多かった事実を知って、強い屈辱を覚えると同時に力への渴望を手にした。

「そしてなにより……心底その背についていきたいと思えた相手に、これ以上置いて行かれるのは、俺が俺自身を許せなくなりそうだ」
「……なるほどな」

いい目だ。強い狂気が宿り、同時にそれが力への渴望と結びついている。同類と感じた俺とポチにこれ以上、置いて行かれたくないという思いが、元々持ち合わせていた狂気と合わさり強い渴望に変化している。

そもそもルツチは狂気という意味では十分に資質はあった。だが、俺がルツチにポチと同じような肉体改造を施さなかった理由……原作という運命の楔が抜けていなかったが故に、勝手に理屈をつけて止めてしまっていたというのものもある。

だが、それ以上にルツチには力への渴望が足りていなかった。天才と呼ばれるだけの才能を持っていたが故に、どこか現状に満足してしまっている節があった。

だがそれは十分に改善されている。いまのルツチなら十分肉体改造に耐えうるだろう……その上、現在の俺にはトットムジカの力もあり、肉体改造の負荷をある程度抑えてやれるのは己やポチで実証済みだ。

「……では、始めるぞ」

「了解」

ルツチには死ぬ危険もあると説明をしたが、この世に絶対はないとしても99%は問題ない。そんなわけで、ルツチにもひとつ上のステージに上がってもらおうとしよう。

……まあ、ある程度負荷を軽減できるとはいえ、それでも想像を絶する痛みではあるし、他のCP9メンバーにこれに耐えられそうな狂気を持つ者はいないので、他には施せないか……リリースに話せば、もつと負荷を落として行う方法が見つかる可能性もあるな……反応が確実に面倒なので、熟考する必要があるが……。

■***■

魔力によつてルツチの負荷をある程度軽減しつつ、経過を見守ると数十分。本来のものよりはある程度負荷が落ちているとはいえ、相変わらず床は血まみれになっている。

あのクールなルツチが叫んでいたほどに痛みもありはしたが、やはり予想通り問題なく完了した様子で、ゆっくりとルツチが立ち上がる。

「……気分はどうだ？」

「……ズルいじゃないか、そりゃ、チエルシーにも大きく置いて行かれるわけだ。ああ、分かる。実行前の俺とは、明らかに立っている場所が違う。ふふふ、ははは……最高の気分だ」

「そうか、まあ、ここまでの積み上げが多かった分効果も大きいだろう。だが、短時間で繰り返し返しても意味がない。概ね1年に1度を目安に行う。そして、俺がいない時に勝手に行うことは禁止だ。いいな？」

「ああ、了解だ。すべてアンタに従う」

大きく成長した己の力に興奮しているのか、深い笑みを浮かべて喋るルツチ。まあ、気持ちは分かる。俺もポチも初めての肉体改造を終えたときは、なんとも言えない全能感があったものだ。

心底楽しそうな様子ルツチの前で、俺は軽く笑みを浮かべて告げ

る。

「さて、話はここまでだ。暴れたい気分だろ？ 相手をしてやる」

「ああ、やっぱアンタは……最高だ！」

口角を上げたままで叫ぶように告げ、獣人形態に変わって一直線にこちらに向かってくるルツチに対し、俺は自然体で構える。

動物系ゾンということもあって、この肉体改造の効果は非常に大きくスピードパワー共に、少し前のルツチとは別次元だろう。

まあ、なんにせよ……楽しそうだなによりだと、そんな風に思いながらしばらくルツチの能力確認に付き合った。

新たなる狂信者の獲得

ある日の昼下がり、いくつかの書類をポチに各所に割り振るように指示を出したあと、俺は長官室でエニエスロビーの改修計画書の作成を進めていた。

要望書は集まって吟味も終えた。流石にすべてを叶えるには予算が足りないが、ある程度の要望には応えられるだろう。

予算確保もすでに終わっておりあとは実際の作業計画だ。当たり前だが建て替えを行っている間にその建物は使えないので、エニエスロビー全体を建て替えるのなら、順番もしつかりと考える必要がある。

全体の業務が滞ったりしないように、バランスを考えて着手する順番を決めていると、ふと気配を感じて視線を上げる。

するとそのタイミングでペランダにタマが降り立ち、ペコつと一礼したあとで窓をすり抜けて室内に入ってきた。

「どもども、失礼しますね」

「せめてドアから入ってこい」

「……前向きに検討して善処します」

それは、改善しない場合の返答な気がするが……。

「まあ、いい。というか、すり抜けもできるのか?」

「すり抜け先が見えてないといけないので、窓か檻ぐらいしか無理ですけどね」

「便利は便利だが、やはり使いどころを選ぶ能力だな」

実際タマの能力は多岐にわたり、なかなか便利なものも多いのだが、本人が小技が多いというように使える場面が限られる能力が殆どだ。

まあ、特定の場面ではかなり有用ではあるが……。

「それで、なんの用だ?」

「ちよつと報告に……どうも、センゴクが海軍とCPの合同訓練を計画しているみたいです」

「……ほう、珍しいな……というか、ほぼ前代未聞か」

「ですね。海軍とCPって割と昔から仲悪いですしね」

CPと海軍が協力することは少ない。険悪とまではいかないものの互いにある程度距離を置いている現状だ。だが、それを改善できるならそれにこしたことはない。

CPと海軍ではそれぞれ得手不得手が違うのだから、状況によって手を取り合えるならそれはかなり有益だ。

「……メリットは分かるが、センゴクの目的はなんだ？」

「恐らくですけど、CP9とスパンダムさんに関しての情報が欲しいんだと思いますよ。そこに関しては上の指示もありまして、私がいろいろ隠蔽してますしね」

「……ふむ。タマ、お前は情報系に強いのか？」

「そうですね。かなり長くやっていますので、情報収集や操作、それに隠蔽は得意中の得意ですよ」

なんとというか、コイツ……いままで見た中で、一番真つ当に諜報員として優秀な気がする。いや、性質的に諜報機関であるCPが情報戦に強いのは当然なのだが、CP9が割と荒事専門なところがあるせいか、そこそこ新鮮に感じるから不思議だ。

「まあ、そんなわけで、近いうちに話が来ると思いますけど、どうしますか？」

「内容次第ではあるがCP9メンバーに経験豊富な覇気使いとの戦闘経験を積ませてやれるかもしれない。それに、CPと海軍の関係が改善されるなら有益だ。受ける方向で考えておくか」

「了解です。じゃあ、こちらに話が来たらその方向で調整します」

「ああ、任せる」

立場を考えればむしろ決定権はタマの方にある気がするが、コイツが俺を上司扱いするのはいまさらなので、いちいちツツコム気にもならない。

そう考えて、手元の書類に視線を戻しながら、ふとあることを思い付いて問いかける。

「………そういえば、タマ」

「はいはい、貴方のタマですよ。どうしました？」

「……お前は世界が憎いのか？」

「はて、唐突にどうしました？」

「お前の狂気は、世界への憎悪や嫌悪だろ？ 単に聞いてみただけだ」

タマも相当な狂気をその身に宿しており、その狂気の形は世界そのものへの嫌悪や憎悪といった感情なのは間違いない。まあ、もうひとつポチに似た狂気もある様子だが、こっちはいまは関係ない。

「スパンダムさんののは、自己愛的なやつですよ〜」

「そうだな……」

「……う〜ん、憎悪ってまで言うとはよく分かりませんが、私はこの世界が大っ嫌いですよ。強者も弱者もそれ以外も、私自身も含めて心底嫌いですね」

「そうか」

ニコニコと笑顔で語るタマは、なかなか闇が深そうな感じではある。だが、まあ、本当に単なる興味本位での問いかけだったので、アレコレ詮索する気は無い。

そう思っていると、しばし沈黙したあとで、タマがポツリと呟くように口を開いた。

「……昔は、違っただはずなんですよ。もう完全に忘れちゃった、本当の名前を憶えていた頃は……私の目に映る世界は色が付いてて、綺麗だったと思うんです……もう、どんな景色か思い出せなくなっちゃいましたけどね」

懐かしむようにそう告げたあと、タマは視線を窓の方に向け、青空を見上げるように顔を上げてから独り言のように話を続ける。

「……長い年月で、いろんなことを忘れちゃいましたけど、自分の感情の変化だけは覚えてます。少なくとも、かつては違っただけです。私に世界を変えるほどの力はないけど、私の立場で救える人もいるんだって……嘆く人たちをゼロにはできないけど、数を減らすことはできる筈なんだって……そんな風に思っていましたし、実際できました。もう完全に時効なんですよ。バレなかつただけでバレてたら政府に粛清されてたようなことはいっぱいありました。天竜人のと

ころからこつそり奴隷を逃がしたりとか……」

「……」

「綱渡りみたいに危ないこともありましたけど、充実してたと思います。そうして己が行動した先にある景色が尊いものだって……その時は、確かに思えていたはずなんです」

タマは窓に向けていた視線をこちらに戻して、どこか悲し気な微笑みを浮かべた。

「……長く生きるって、いいことじゃないですね。知らないままならよかったことを知ったり、気付かなければ幸せだったことに気付いたり……少しずつ、本当に少しずつ、瞳に映る景色が色を失っていったんです」

タマが不老としてどれぐらいの年月を生きて来たかは知らないが、少なくとも俺よりは遥かに上だろう。なぜならこいつはおそらく、一度すべてに絶望している。

俺やポチのように狂気に身を委ねた結果として頭のネジが抜けたタイプではない。コイツは、心が壊れた結果、狂気しか残らなかつたタイプの狂人だ。

「そして、ある時フツと思っちゃったんです。『なんで私は、こんな醜い奴らを必死に守ろうとしていたんだろう?』って……そこからは、早かつたです。どんどん世界から色が消え、歪んでいって……大切だったはずのものがそうじゃなくなって、いつの間にか私の目に映る景色は吐き気がするほど気持ち悪いものへ変わってしまった」

「……」

「それでも、縫ろうとしたんです。かつて感じていた尊い景色を思い出しながら、足掻いてみました……でも、いつしか、かつて見えていた光景も、尊いと思っていたものも、己の名前も……全部忘れてしまいました。残ったのは、歪で醜い世界への嫌悪感だけでした」

「そうか、まあ、長く生きてればそんなこともあるだろう」

話を聞き終えて、書類を見ながら告げた俺の言葉を聞き、タマは一瞬キョトンとした表情を浮かべたあとで、どこか楽しそうに笑った。

「……ふふふ、私、スパンダムさんのそういうところ、好きだなあ。そう

ですか、そんなこともありますかね?」

「ああ、俺もいずれ同じような考えになる可能性だってあるわけだしな」

「あはは、スパンダムさんが私と同じ思考になったら世界は滅んじやいますね。私に世界を滅ぼせる力があつたら、滅ぼしてたと思いますしね」

「そうだな……だが、まあ、お前に世界を滅ぼす力は無く、現在も世界が続いてお前も生きているなら……一度は変わったんだから、また考えが変わる可能性もあるだろう」

「そうですね。最近実感してたりします」

なにがそんなに楽しいのか、タマはニコニコと満面の笑顔を浮かべており、先ほどまでの壊れたような笑顔とはまるで質が違うような印象だった。

なんだかんだで、コイツは現状を楽しんでいるような……そういう強かさを感じるので、個人的には高評価ではある。

そう思っていると、ノックの音が聞こえてポチが戻ってきた。

「隊長、ただいま戻りました」

「ああ、ご苦労」

俺がポチに返答すると、タマが楽し気な笑顔を浮かべながらポチに近づく。

「あつ、チエルシーちゃん! お邪魔してるよ」

「え? あ、はい。えっと……初めまして?」

「あつ、この姿じゃ分からないか、私だよ。CPO総監の MARIA だよ」「MARIA 総監!」

「うん。あつ、だけど、この姿の時はスパンダムさんにタマって名前貰ったから、そっちで呼んで欲しいな」

当たり前だが、俺の補佐であるポチはタマ……CPO総監の時の顔ではあり、交流もある。ちなみにタマは総監としては MARIA という名があるが、偽名とのことだ。

ポチはタマの言葉に納得したように頷いたあと、ジッとタマの目を見つめながら、どこか楽し気に後ろ髪を左右に揺らしながら口を開い

た。

「……な、なんでしよう、タマさんとはいままであんまり話したことが無かったですけど……いまこうして、目の前にしていると、不思議と凄く仲良くなれる気がするんです！」

「奇遇だね。私もチエルシーちゃんとは絶対に話が合うって、前々から思ってたんだよね」

なにやら通じ合うものがあつたのか、ふたりは楽しそうな様子である。まあ、どこがとは言われないが似ている部分があるのかもしれない。

そんなことを考えつつ、手に持った書類をしまってから口を開く。

「……タマ、時間があるようなら夕食を食べていくといい。ポチ、夕食は3人分用意できるか？」

「大丈夫です！ 普段からリリスさんがフラツと来るので、食材や食器には余裕を持たせてますからね」

「え？ 家に伺ってもいいんですか、スパンダムさん？」

「ああ……ところで聞いておきたいが、タマ……お前は世界政府に所属して長いんだろ？ 俺が知らないような機密情報は？」

「いっぱい知ってると思いますけど？」

「もし、教えろといったら？」

「仰せのままにご主人様って感じですね」

おどける様に笑うタマを見て、俺も口元に笑みを浮かべる。情報戦に強く、世界政府が隠しているような情報も多く知っている。

そして、見え隠れするポチと同種の狂気……こちらを信仰しているかのような感情……これは思った以上に有益な相手を見つけたかもしれない。

閑話・海軍側の思惑

マリソフオードにある海軍本部の廊下を歩いていた女性……CP
O総監は、ふと進行方向の先に見知った顔を見つけて笑顔を浮かべた。

「やあ、つる。久しぶりだね。元気だった？ 最近あんまり会えてなかったけど、こんなところで会えるなんて奇遇だね。それとも、なにか私に用があったのかな？」

「ああ、元気にやってるよ。アンタが海軍本部に来てるって聞いてね。ちよつと顔でも見てやろうと、足を運んだんだよ」

海軍本部大参謀つるは、総監……マリアと軽く挨拶をしたあと、即本題だと言わんばかりの鋭い目を向ける。数多の修羅場を潜り抜け大参謀の地位まで上り詰めたつるの眼光は、並みの相手を怯ませるだけの凄みを帯びていたが、マリアはニコニコと笑顔を浮かべたままで怯む様子もない。

「……アンタの仕業だろ、バッドフェアリー」

「はて？ さすがに主語がないとこまるなあ」

「とある国でかなりの規模の反乱軍が一夜にして壊滅したらしいじゃないか、それも生存者はひとりもないってレベルで……」

「それは痛ましいね。まあでも、武器持って戦争しようとしたんだし、死ぬことも覚悟しておかないとね」

変わらぬ笑顔のままでも思ってもないようなことを口にするマリアを見て、つるは「相変わらず胡散臭い奴だ」とそんなことを考えつつ、言葉を続ける。

「推定で数万と言われるような規模の反乱軍が壊滅。相当の事件だよ……だけど、どんなに調べても情報がまったく出てこない。これでも伊達に大参謀なんて呼ばれちゃいないさ、あちこちに伝手は持っている。それを全部使っても、欠片も情報が得られない。こんなこと出来るのは……アンタぐらいだろ？」

「そうだね。私が情報を隠蔽したよ。それで？ なにか知りたいこと

でもあるのかな？」

「ああ、知りたいね。いったいどんなふぎけた方法を使えば、一夜で数万人をひとりも逃がすことなく殺し尽くすことができるのかをね」

「正義感に溢れる目だね。うんうん、海軍らしくてカッコいいね」

鋭い眼光のつるに対して、マリアはあくまで飄々とした様子で頷く。つるとしても、答えが得られるとは思っていなかった。CPO総監であるマリアが隠蔽を行っているのであれば、それが世界政府の意思だ。そこに異を唱えるほど愚かではない。

だから、これは一種の探りのようなものだった。マリアの反応からなにか得られないかと……しかし、そんなつるに対してマリアは、真剣な表情で周囲を見渡し小声で告げる。

「……内緒だよ。機密だけど、昔馴染みのつる相手だから特別に教えるね……実は、Dr. ベガパンクの開発した新兵器の実験があったんだよ」

「……なんだって？」

「とある悪魔の実際の能力を科学的に再現したもので、量産体制もある程度整って半年から1年ほどで海軍に配備される予定の新兵器だよ。その最終調整って名の実験があったんだ。海賊に対しての強力なカードになりうることに期待されて、規模の大きい相手との戦闘データが欲しかったみたいだね」

「なるほどね。まだ開発段階の兵器、そして人道的とは言えない実験……だからこそ、上からアンタに隠蔽の指示が出たってわけだね」

「そうそう、万が一にもモルガンズとかに嗅ぎつけられたら面倒だから、私が直接やることになったんだよ」

そう告げるマリアの目を見て、つるはなんとも言えない表情を浮かべた。筋は通っているし、納得もできるが……いつも通りのことではあるが、どうにもマリアは胡散臭い。

だがそれでも、こちらが質問し解答されてしまった以上。これ以上深く踏み込んで質問を続けるのも難しい。なにせ、機密と頭に付けられてしまえば根掘り葉掘り聞かすわけにもいかない。

「……そうかい。アンタも忙しいね」

「まあ、これでもCPO総監だからね。さてさて、このまま楽しいお喋りを続けたいところだけど、私も次の仕事があるからね」

「ああ、引き留めて悪かったね」

「気にしないで、それじゃ、ガープやセンゴクにもよろしくね」

軽く手を振って去っていくマリアを見送り軽くため息を吐いてからつるは移動する。しばらく歩いて目的の場所……元帥であるセンゴクの執務室に辿り着くと、中からセンゴクの怒鳴り声が聞こえた。

そしてその内容から、他に誰が部屋の中にいるかも察したつるは呆れたような表情を浮かべながら部屋に入る。

「まったく、アンタたち、いつも飽きもせずによくやるね」

「おお、おつるちゃん！ いや、センゴクがうるさくてのう」

「誰のせいだと思つとるんだ、ガープ!!」

室内に居たのはガープとセンゴクのふたりであり、いつも通りのことではあるがガープがなにかをして、センゴクが叱っていた様子だった。

それを見て苦笑しつつも、つるは少し疲れたようにため息を吐き、センゴクが軽く首を傾げる。

「どうした？ 疲れた表情をしているが……」

「ああ、なに、さつきちよつとマリアと会って楽しくお喋りしてきたからね」

「……うげつ、わしアイツ嫌いじゃ……嘘ばっかり吐くからな」

「まあ、馬鹿正直が服着てるようなアンタとは、正反対な奴だね」

マリアの名前を聞いてガープは露骨に嫌そうな表情を浮かべ、センゴクはなにかを察したように頷いた。

「……あの件か？」

「ああ、アンタはどうだい？ なにか情報は得られたかい？」

「いや、私の方もアレコレ探ってはみたが、情報はサッパリだ。完璧に隠蔽されている……やはり、彼女の仕業か、厄介だな」

「ふむ……で、おつるちゃん、なんか情報が手に入ったのか？」

つるとセンゴクの会話を眺め、腕を組んで首を傾げつつガープが問う。マリアと話してみてもなにか情報を得ることができたのかと……。

すると、つるは微妙な表情を浮かべた。

「アイツの厄介なところはそこさ。ひた隠しにするなら探りようもあつたんだが、アツサリと情報を渡してきたね。しかも、筋の通つたそれっぽい情報を……」

「ならそれが正解、とはならないか……」

「ああ、おそらく調べればそれなりに裏も取れるだろう。だけどね、最後の一押しが不明なままいくら調べても確信を得られないってのは、あの性悪のよくやるパターンさね」

センゴクもマリアのことはそれなりによく知っており、こと情報戦においては極めて手強いということも理解していた。

「じゃ、いつもみたいに嘘つてことなんじゃないか？」

「そう思うだろ、ガープ。でもね、そう思つて無視すると実は正解を言つていたり、半分だけ正解で半分間違いだつたりつて、巧みにこつちの心理を突いて煙に巻いてくるんだよ。だから裏取りをしないわけにもいかなくて、結局時間がかかる。バッドフェアリーなんて、よく言つたもんだね」

「おつるちゃんでも、情報戦では分が悪いか……」

「そりゃ、年季が違うからね。あつちはいつから世界政府に居るか分からないような妖怪だよ。この手の騙し合いは完全にアイツの土俵だよ」

結局得られたようで本当に情報を得ているのかどうかも分からない現状に、つるは難しい表情を浮かべており、それに対してセンゴクが真剣な表情で口を開く。

「なあ、おつるちゃん。最近というかここ10年ほどでCPつて組織自体が変化しているように感じないか？」

「……そうかあ？」

「アンタは黙つてな、ガープ。私もセンゴクと同じものを感じているね。前よりずっと厄介になつたとしてもいうべきか、情報が手に入りにくくなつてる」

イマイチピンときていないガープは別として、つるには思うところがあつたようで、センゴクの言葉に頷く。

「そう、海軍も決して一枚岩ではないが、それ以上にCPは内部争いの多い組織だった」

「CP0〜9まで、それぞれバラバラに動いていたイメージだね。そりゃ任務とあらば協力するだろうが、仲がいいとはお世辞にも言えないような感じだったね」

「ああ、だが、それが変化している。この10年ほどでCPは組織として連携が取れ強固に完成しつつある。そしてその中心にいるのは間違いなく……」

「……不夜の怪物つてわけかい。アタシは直接会ったことが無いんだけど、そんなにとんでもない相手なのかい？」

「わしも会ったことはないな。どうなんじゃ、センゴク？」

つるもガープも不夜の怪物と呼ばれるスパンダムの存在自体は知っていた。だが、極めて優秀な人物とは聞いていても、その情報は驚くほどに少なく詳細は分からない。

海軍とCPでは関わる機会も少ないため、少なくとも直接顔を合わせたことがあるのはこの中ではセンゴクだけだった。

「……あくまで、私の感想だということ念頭においてくれ。化け物としか、表現のしようがない。彼を見たあとでは、かのロックスやロジャーが可愛く思えたといえ、伝わるか？」

「それほど、なのか？」

センゴクの言葉にガープも神秘的な表情を浮かべた。彼もセンゴクと共に多くの修羅場をくぐっており、ロックスやロジャーといった伝説の海賊とも戦った経験がある。

だからこそ、センゴクの言葉が冗談でも誇張でもないことは理解できた。

「戦闘能力という意味で言えば、全盛期の私でも果たして1分持つかどうかというレベル。知識や事務能力も極めて優秀……その上、私との会話は常に丁寧な口調を崩さず穏やかに対応していた。監獄署長であるマゼランも彼を高く評価して親しくしていると聞く」

「……そりゃ、とんでもないね」

「ああ、実際にそういう役職などがあるわけでは無いが、現在のCPは

彼を長としてまとまっているような印象を受ける。実質的なCPのトップと考えていいだろう。だが、彼もCP9も本当に情報が少なくてな……なんとか少しでも情報が欲しいと、海軍とCPの合同訓練を計画しているところだ」

「合同訓練……なるほど有効だね。海軍とCPの連携を高めるのはメリットが強いし、その上で自然に情報を得られる。以前のCPであれば難しかったが、その男を中心に纏まっている今のCPならいい関係を築ける可能性もあるってわけだね」

センゴクが口にした合同訓練に関してはメリットが多く、デメリットといえることも少ない。感心した様子で頷くつるに微笑みを浮かべたあとで、センゴクは話を続ける。

「さすがに、司令長官である彼が直接訓練に参加することはないだろうが、CP9メンバーについての情報も得られるし……大将もひとり参加させるつもりだから、運が良ければ、腹心である『^{ヘルハウンド}魔犬』の戦闘を見れる可能性はある」

「そうでなくとも、訓練自体は今後の糧になる。いい考えだね。いつやるんだい？」

「近いうちに行えるように案をまとめているところだ。相手は諜報機関だから、情報漏洩などにも配慮する必要があるしな」

そう告げるセンゴクを見て、ガープはニツと豪快な笑みを浮かべて頷く。

「なるほど！ 面白そうじゃなー！」

「お前は不参加だ」

「えく!? なんでじゃ!!」

「問題を起こしそうだからに決まっているだろうが！ 海軍の内輪での訓練じゃなくて、他との合同だ。お前に好き勝手に動かれてはたまらん」

「えくケチツ！」

「大体この前も、仕事ついとか言って勝手に東の海に行きやがって!!」

「げえつ、そこをまた蒸し返すんか……だから仕方ないじゃろ、孫の顔

見たかったんだから、いい面構えになっとった。流石わしの孫じゃ
！」

「なにも仕方ないだろうが、この馬鹿がっ!!」

ガープの胸倉を掴みながら叫ぶセンゴクと、イタズラがバレた子供
のような表情を浮かべて開き直るガープ。そのふたりのやり取りを
見て、つるは呆れたように深いため息を吐いた。

通達と悪魔の実

エニエスロビーの長官室で、俺は集合したCP9メンバーに近く行われる海軍との合同訓練についてを通達した。

タマからの情報通り、正式に合同訓練の提案が届きそれを了承した形になる。内容としては、ある程度の規模と人数で行う連携訓練。CPが情報を得て海軍が実働するという訓練の、複数のチームに分かれて競い合う形で行う。

それぞれのチームにCPと海兵が振り分けられるので、協力と連携が重要になってくる訓練だ。

そして次に大規模災害を想定した協力しての救助及び避難訓練だ。世界政府も海賊や革命軍と戦うだけが仕事ではないので、有事の際には当然市民を護るための災害救助もありえる。

これは市民役と救助役に分かれて行い、CPは主に情報収集や避難先の手配などを、海軍は実際の救助などを担当する形になる。

そして最後に行われるのがCPと海軍による模擬戦。こちらはあの程度の機密性を考慮して、海軍側の見学者は大佐以上のみ、CP側も事前に選定したメンバーのみとなる。

それ以外の面々は大規模な意見交換会……という名の打ち上げで親睦を深める予定だ。

「……だが、当然ながらメンバー全員が順に戦う時間はない。ある程度は代表者を決めることになる。海軍側は、モモンガ中将、ギオン中将、キャンサー中将、ヤマカジ中将……そして、青雫こと、クザン大将の計5人だ」

モモンガ中将は原作でも出番の多い中将で確かな実力者。ギオン中将は大将候補にも名が挙がったと原作で語られていた女中将。キャンサー中将はよく知らないな、原作で戦闘は行っていなかった気がする。ヤマカジ中将はたしか、エニエスロビー編のバスターコールで呼ばれた中将のひとりだったな。

「対してこちらは、モモンガ中将とは……ルッチ、お前が戦え」

「ああ、了解だ」

「総合的にはお前が上だ。だから、お前には今回の戦いにおいてひとつ課題を出しておく……相手は戦闘経験豊富な中将だ。制限のある戦いは、いい経験になるだろう」

堅実な実力者であるモモンガ中将にはルツチを当てる。覇気を使う強者としてはお手本のような堅実な戦い方を得意とするモモンガ中将との戦いは、ルツチのさらなる成長にも役立つだろう。

「ギオン中将に関しては、フィズ……相手は桃兔という通称も持つ中将内でも上位の実力者だ。胸を借りるつもりで戦ってこい」

「了解だ。不甲斐ない戦いはしねえ」

フィズは格上との戦いになるが、いまのフィズの実力であれば十分善戦できるだろう。強者との戦いというのは貴重な機会だし、経験という意味では最高の相手といえる。

「次にキャンサー中将に関しては、ジャブラ、お前が行け。相手も徒手空拳を得意とするらしいが、情報は少ない。油断せずに行け」

「ああ、任せとけ！」

手元を集めた情報では、キャンサー中将の実力は中将内では真ん中よりやや下ぐらい。総合的に見ればジャブラがやや上回っており、油断が無ければ堅実に勝ちを拾えるだろう。

「ヤマカジ中将にはカクを当てる。刀を武器とするヤマカジ中将だが、その堅牢な防御力が高く評価されている」

「なるほど、決め手に課題を抱えるワシにとって、いい経験になる相手というわけじゃな」

「そういうことだ。まあ、その対策に関してひとつ手となるものがあるが、それはあとだ」

カクの言う通り耐久力がある相手との戦いを経験させるのが目的だが、もうひとつこの後で食べさせる予定の悪魔の実の習熟も兼ねてという感じだ。

「そして最後に、クザン大将に関してだが、別にこれはCPと海軍の勝負というわけでは無い。とはいえ、見くびられる結果になっても問題だろう……ポチ、倒してこい」

「了解ですー！」

青雉には悪いが、ポチにやらせることにした。まあ、ポチも大将レベルの相手との戦闘はいい経験になるだろう。実力的に考えて、ポチが負ける要素はない。むしろ心配なのは、会場を破壊しないかどうか……。

とりあえず、合同訓練についての通達は終わったのだが、他にも用件がある。

「さて次の要件だが、カク、カリファ、フクロウ、クマドリ、前に出る。ポチ、アレを持ってこい」

「はー！」

俺の指示に従い4人が一歩前に進む。そしてポチに指示を出して運ばせてきた箱の中から、悪魔の実を4つ取り出してデスクの上に並べる。

「以前個別に質問したが、お前たち用に悪魔の実を手配した」

「うおっ、すげえな長官。マジで4つ手配しちゃったのか、最低でも4億だろ……」

「むしろ、申請したら嬉々として渡してきた……」

驚くジャブラに答える。実際、食い気味にすぐに用意するとかって返答が来て、ものの数日で悪魔の実が4つ手元に届いた。

「なんだ？　また直近でなにかやったのか？　上が褒美を渡したがるようなことを……」

「最近だと数万人規模の反乱軍を皆殺しにしたぐらいか……」

『確実にそれだ!?!』

まあ、確かに親父の要請を受けてのものとはいえ、功績としては俺になるわけか……。革命軍が戦力協力していたらしいし、そういう意味では革命軍の戦力を削いだとも言えるわけか。

たしかにソレなら、上としても褒美のひとつでも渡したくなるか……。

「まあ、いい。この悪魔の実に関してだが、まずこれはウシウシの実モデル：麒麟。そして、こっちはアワアワの実……あとふたつは、凶鑑には載っていなかったので不明だ」

ウシウシの実とかも凶鑑には載っていないなかったのだが、原作で見ているので先に説明しておく。なんでもいいと言ったが、予想通り原作にでた実はふたつ来たか……これに関しては別に変えようともしていないので問題ない。

「とりあえず禍根が残らないように、どれを誰に与えるかはくじで決めようと思うが、どうしてもこれを食べたいという希望はあるか？」
「……」

「無いようだな。では、この四枚の紙から好きな物を選び、悪魔の実に張っているのと同じ番号が書いてある」

四つ折りにした紙を4つ置き、選ばせる。まあ、たぶんではあるが特に俺が意識して変えようとしないうちは、概ね原作に近くなるように運命が働くだろうし……結果はやはり、カクがウシウシの実を、カリファがアワアワの実を引き当てた。

「それでは、それぞれ悪魔の実を食べて訓練場に集合して能力確認だ。他の者も見学したいなら好きにしろ」

・***

「ぎやはははは、カ、カク、お前っ……最高過ぎるだろ！」

「く、くくく……なかなかイカすじゃねえか……」

「なにがおかしい！ ワシは気に入った!!」

キリン人間となったカクを見て、ジャブラとフィズが大うけしている。ジャブラとカクのやりとりは原作でも有ったものだ。

「まあ、シンプルに膂力ソオンの上がる動物系は六式と相性がいい。笑っているが、ジャブラ……カクが能力者となったことで、いま総合力は前を抜いたぞ」

「なにいつ!?!」

「能力を使いこなせるようになれば、さらに上がる。置いて行かれたくなければ、気合を入れて鍛えろよ」

「ははは、だそうじゃ。ジャブラ、悪いのう。差を広げてしまうかもしれんな」

「ああつ、テメエ調子に乗るなよ。すぐに抜き返してやるから覚悟しとけ!!」

睨み合うふたりに対して、ジャブラに能力の確認に付き合つてやれと指示を出してから、他のメンバーの能力を確認する。

「どうだ、ある程度はつかめたか？」

「はい。アワアワの実は、いわゆる石鹼人間になる能力のようです。他者に使えば力を削げたりと、応用の幅はかなり広そうですね」

「なるほどな。だが、泡という性質上水が弱点になりうる可能性が高いのは注意しておけ。あと過剰な覇気によつて能力は防がれる点にも注意だが、覇気は無限ではない。あえて能力を防がせて覇気を消耗させるという手もある。まあ、いろいろ試してみろ」

「了解です」

パラミシア
超人系は使い方次第で応用の幅が広い。練度次第で強力な能力に成長する可能性もある。実際覚醒して周囲にも影響を及ぼせるようになれば、ロギアに近い戦い方も出来そうだ。

さて、ここまではいい。原作と同じ能力だ……問題は原作では能力者ではなかったフクロウとクマドリに関して、食べた実がいったい何か……。

「……なんだ、フクロウ。その姿は……達磨か？」

「チャパ!? フクロウだぞ! トリトリの実『モデル：ワシミミズク』だ!」

「いや、それを分かった上で達磨にしか見えんと言っているんだ」

羽根の生えた達磨のような見た目になっているフクロウに、ルツチは呆れた様子でツツコミを入れている。なんともそのままの能力に当たったものだ。

フクロウがフクロウの実を食べるといふ、一種のギャグのような状態だ。

「……まあ、ソオン動物系なら能力は上がるだろう。それに性質上夜目なども利くようになった可能性がある。夜間での行動なども含めて、能力の検証をしておけ」

「チャパパ、了解だ」

フクロウに声をかけたあとで、最後にクマドリの方を見る。するとクマドリはなにやら壁の方を向いて、大きく見栄を切りつつ叫んだ。

「よよいっ!!」

とんでもない大音量の叫びと共に、クマドリの口から衝撃波が放たれて壁をへこませる。コレはまさか……ゴエゴエの実か？ 劇場版一作目でエルドラゴが食べていた大声を衝撃波として攻撃に用いれるようになる能力。

劇場版のキャラは存在していても劇場版とは違う人生を生きているパターンもあるとのことだが、この世界においてエルドラゴは悪魔の実を食べていないか、すでに死んでいるかのどちらかというわけか。

近くにいたブルーノが青ざめた顔で耳を抑えているので、能力によつて増幅された声は相当だったようだ。

「な、なんという大声だ……耳が痛い」

「クマドリ、その能力をしっかりと制御できるようにしておけ、不意に衝撃波を放つて司法の塔を破壊したりしてみろ……分かるな」

「よ、よよい……りよ、了解い」

とりあえず、あちこちで見栄を切るたび衝撃波を放たれてはかなわないので、事前にしっかりと釘は指しておく。

なんでただでさえフクロウと並んでやかましい奴が、さらにやかましくなる能力を得ているのか……派手過ぎるな。いや、クマドリの体躯と見た目も元々派手か……そう思えば、似合った能力かもしれない。

まあ、とりあえずこれで俺とポチを除き全員能力者となったわけだ。習熟はしっかりと行う必要があるが、戦力としては大幅に上がったとみていい。

全員が新世界の任務を行える日も近い気がするな。

海軍とCPの合同訓練 前編

世界政府の所有するとある島では、本日海軍とサイファーポールによる大規模合同訓練が執り行われる予定となっており、会場となる島には多くの海兵や役人の姿があった。

海軍とCPはそれぞれある程度固まって待機しており、海軍側で2本の葉巻を啜えて不機嫌そうな表情を浮かべる男……海軍本部大佐スモーカーと同じく海軍本部大佐のヒナが近づき声をかける。

「……スモーカーくんが来てるなんて驚いたわ。ヒナ驚愕。こういう訓練とか興味なさそうなのにね」

「ああ、興味ねえよ。だが、クザン大将から参加しろと言われてな……わざわざ東の海から出向いてきたわけだ」

「そうやって、素直に上の言うことを聞いておけば、東の海に行かされることもなかったのに……」

「知るか、俺は俺だ」

同期でもあり腐れ縁のふたりは、共に愛煙家ということもありなんだかんだで気が合う部分も多い。素行の悪いスモーカーが海軍をクビになりかけた際に、ヒナが庇ったという話もあり、なんだかんだで仲のいいふたりは、そのまま他愛のない雑談を行いつつ、訓練の時間を待つ。

そのふたりから少し離れた場所には大将青雉ことクザンが……なんとも言えない呆れたような表情で、目の前の人物に声をかけていた。

「……あくその、アレだ。ガープさん？ アンタたしか、センゴクさんに不参加って言われてなかったですか？」

「わっはっは！ 言われたな！ じゃから、訓練には参加せんで、見にきただけじゃ！ ぶわっはっはっはっ!!」

「ああ……ほら、向こうでセンゴクさんがものすげえ顔で睨んでるじゃないっすか。勘弁してくださいよお、俺まで怒られるじゃないっすか」

「げえっ！　なぜバレた!？」

「そりや、そんな大声で笑ってりやバレるでしようよ」

センゴクに合同訓練に参加しないようにと言われたガープだったが、訓練には参加しないが見学ならいいだろうと勝手にこの場に来ており、その自由奔放っぷりにクザンも頭を抱える。

センゴクもガープが来ていることには気づいており、後で説教が行われるのはほぼ確定と言っていい状態になっていた。

開始時間まではまだそれなりに時間があり、どこか緩さを感じる空気が流れていた会場だったが、直後に会場に居る者たちは……空が黒く塗りつぶされたかのような錯覚を覚え、一斉に振り返った。

視線の先CPたちが集まっている場所では、役人たちが綺麗に整列して道を開けており、その開いた道を歩いてくる者たちがいた。

先頭を歩くのは紫色の髪をオールバックに纏めた目の周りと鼻の黒い男……CP9司令長官スパンダム。そして、後方に続くCP9のメンバーたち。

「……あ、あれが……不夜の怪物……」

「なんて存在感だ。見てるだけで、体が押しつぶされそうだっ……」

スパンダムの圧倒的な存在感にヒナが青ざめた表情で呟き、スモーカーも冷や汗を流す。CPの面々に緊張感を持たせる意味もあり、普段は抑えている気配を表に出して歩くスパンダムの存在感は凄まじく、本能で感じる桁外れの力を初体験した海兵たちは大きく動揺していた。

「おいおいおい……冗談キツイぜ、なんだあのバケモノ……怖すぎだろ」

「……センゴクの言葉に偽りはなかったか、覇気も使わず気配だけでこれほどの重圧……ありやもう、人の枠組みを踏み越えておるじやろ」

大将であり相当の実力者であるクザンでさえ、震える体を止めることができないほど圧倒的な存在。その姿を見て、ガープは以前にセンゴクが言っていた言葉に一切の偽りが無かったことを察した。

そのまま少し歩いたあとで、スパンダムは気配を抑え周囲に居た者

たちは重圧から解放されて、一息つく。そのままスパンダムは海軍側の代表であるセンゴクの下に挨拶に向かいCP9メンバーたちはその場にとどまる。

「……アイツらが、政府最強の暗殺集団CP9か……確かにどいつも強そうだな」

「そうね。パツと見た印象でしかないけど、全員最低でも中將レベルはありそうね。ヒナ戦慄」

「……特にあの背の低い女はヤベエな」

「おそらく彼女が不夜の怪物の腹心中の腹心と言われる魔^{ヘルハウンド}犬でしようね」

スパンダムのインパクトが凄まじく、そちらに視線が集中していたがCP9メンバーも、それぞれが相当の実力者であると感じる佇まいであり、その姿にはどこか余裕すら感じられた。

「ほれ、クザン。たぶんあの女じゃぞ、お前の相手は」

「おいおい、勘弁してくださいよ。可愛らしい顔して、すっげえ強そうなんですけど……」

「アレも相当じゃな。全盛期のわしでも厳しいかもしれん」

「はあ、こりゃ、本腰入れてやらねえと、瞬殺されちゃうな……怖い怖い」

佇むCP9メンバーの中でも明らかに頭ひとつ以上抜けて強そうなチエルシーを見て、それが己が模擬戦で戦う相手だと理解したクザンは頭に手を当てて天を仰いだ。

・***

合同訓練はかなりの規模であり、CPからも役人の参加者は多い。俺は、センゴクに軽く挨拶をしたあと、綺麗に整列した役人たちの前に立つ。島に到着した際には若干緩んだ空気を感じたので、引き締めるために気配を表に出して少し歩いたが、どうやら効果はてきめんだったようだ。

程よい緊張感が見える顔の者が多く、これなら実りある訓練になる

ことだろうと、そう思っているとCPO総監の姿でタマが拡声機のマイクを差し出してきた。

「それでは、スパンダム殿。代表として一言お願いします」
「……」

何度も言うが、正式な立場としてはCPO総監であるタマの方が上のはずである。だがまあ、いつものことなので軽くため息を吐いてマイクを受け取り、役人たちに向けて告げる。

『CPと海軍は険悪とまではいかないものの、これまでは手を取り合う機会は少なかった。だから、いきなり仲良くしろなどと言うつもりは無い。だが、この貴重な機会になにも得ずに終わると言うことは無いようにしろ。今後海軍と連携して任務にあたる機会も増えてくる。その際に今日の経験は役に立つはずだ』

CPも海軍も、それぞれ相手を見下すとまではいかないものの、微妙に壁がある状態なのは多くの者が知る事実である。

関係は改善していくべきだとは思うが、だからと言って一朝一夕でどうこうなるものでもない。まずは互いの仕事ぶりや能力を知って、理解するところから始めるべきだろう。

『己の仕事にプライドを持つのはいい。だが、相手の能力を貶め、認めないのは愚かな行為だ。海軍には海軍のCPにはCPの得手不得手というものがある。すぐに仲良くはできずとも、互いの長所を認め協力し合う。ここに集まっている者たちは、それができるだけの度量と能力を持っていると思うている。次の機会はいつになるか分からない、貴重な合同訓練だ。各員しっかりと己の糧にするように……それでは、準備にかかれ』

訓練前に代表の一言なんて、長々と話しても仕方がないので簡潔にまとめて話を切り上げ、それぞれ訓練の準備にかからせる。

中々に統率の取れた動きであり、悪くない。

「お前たちは模擬戦までは自由だが、興味があるなら参加してもいい。お前たちも役人を連れて任務に当たる機会もあるしな……」

「なるほど、じゃあ、俺はちよつと参加してみるかな」

「そうだな、フィズ。お前の指揮能力は高い。ここで海軍とCPが入

り混じった状態での指揮も経験しておくのもいいだろう。海軍側には俺から話しておく、参加してみろ」

「了解だ」

フィズの指揮能力は俺も高く評価しており、確かに今回の訓練に参加する意義は十分にあるだろう。それに自分から考えて行動できるのは非常にいい傾向というか、フィズの向上心が感じられる。

「お前たちもいろいろ見学してみろ。情報収集や伝達方法なども、いろいろ種類がある。また、どこで失敗しやすいか、トラブルになり得るのか、そういった部分を見て学んでおけ」

『了解！』

戦闘経験以外にも情報収集能力や指揮能力なども、今回の訓練で向上すれば非常に有益といえる。CPメンバーたちもなかなか意欲がある様子だし、なかなか期待できるな。

そう思って軽く笑みを浮かべつつ、俺はCP代表の立場として訓練全体を見る場である本部テントへ向かった。

海軍とCPの合同訓練 中編

海軍とCPの合同訓練は多少のトラブルはあるものの問題なく進
行していった。もちろんいきなり完璧な連携が取れるわけでは無い
が、互いにそれなりに協力する姿勢ということもあって、意外と役割
分担などもしっかり行えていた。

この訓練を通して、ある程度海軍とCPの間にあつた壁は薄くなつ
たと言つていい。

そしてスケジュール通りに進行して一通りの訓練が終わつた後、そ
れぞれ事前に決められた者以外は大規模意見交換会が行われる場所
へ移動する。

会場に残つたのは大佐以上の海兵と、事前に決められたCPの役人
のみであり、この大規模合同訓練のメインともいえる代表者による模
擬戦が開始された。

初戦は海軍側がキャンサー中将、CP側がジャブラという対戦カー
ドだった。互いに徒手空拳での戦いではあつたが、最初にスパンダム
が見立てた通り総合力ではジャブラが上回っており、鉄塊拳法を中心
に終始有利に戦いを進行させた。

武装色と鉄塊を複合させたジャブラの鉄塊拳法は非常に堅牢で、悪
魔の実の力も相まって放たれる重い攻撃は戦っていたキャンサー中
将にかなりのプレッシャーとなつたようで、食らい付こうとするキャ
ンサー中将を圧倒する形で初戦はCP側の勝利となつた。

2戦目は、海軍側がギオン中将、CP側がフィズ。この組み合わせ
は、スパンダムが事前に言つた通りフィズが格上であるギオン中将に
挑む形となつた。総合力において明らかに上回つていたのはギオン
中将であり、終始フィズを押ししている印象ではあつた。

だが、フィズは相手を格上としっかり認めた上で、防御と回避を主
軸に置いた戦いを繰り広げた。押されてはいたものの、決定打を貰う
ことは無くギオン中将の攻撃をしのぎ切り、時間切れまで粘つて見
せ、引き分けという結果を勝ち取つた。

これはかつて赤髪のシャンクスという格上との戦い、そして日々のスパンダムの指導により、格上との戦いに慣れていたが故の大健闘と言っている結果であり、想定以上のフィズ的能力にスパンダムも満足気な表情を浮かべていた。

3戦目は海軍側がヤマカジ中将、CP側がカク……六式と四刀流を用いて嵐のように攻めたてるカクに対し、どっしりと構えたヤマカジ中将が迎え撃つという形で戦いは進行した。

手数では圧倒的にカクが上だったが、ヤマカジ中将もさすがは歴戦の海兵であり、見事にすべての攻撃を捌き、隙を突いて反撃も行った。

だが中盤にカクが悪魔の実の力を解放してからは形勢が一気にカクの側に傾く。キリンの膂力で放たれる攻撃はそれまでとは桁違いの火力であり、原作のエニエスロビーのように付け焼刃ではなくスパンダムの指導の下今日まで行った訓練で、しっかりと悪魔の実の能力を使いこなしたカクがヤマカジ中将を下しCPが勝利を勝ち取った。

そして4戦目は、海軍側のモモンガ中将と、海軍にも天才として名が知られるルッチがぶつかることとなる。

特別に設置された闘技場を模した特別会場の中央で、覇気を纏ったルッチの拳と、モモンガの剣がぶつかり合う。

「ぐっ……なるほど、相当の練度」

「そちらも、いい覇気だ」

軽く言葉を交わしながら、放たれたルッチの蹴りを軽く跳躍して回避しつつ、斬撃を放つモモンガ。その動きに派手さは無いが、数多の戦闘経験を感じる洗練された一撃だった。

だが、ルッチは軽く体を反らして、次々に放たれる斬撃を回避。開始から数分経過したが、数発攻撃を喰らっているモモンガに対し、ルッチはここまで一撃も攻撃を受けてはいなかった。

(武装色もかなりの練度だが、それ以上に見聞色が凄まじい……最小の動きでこちらの攻撃を回避し、的確に反撃を放ってくる)

ここまでのモモンガとルッチの戦闘を振り返ると、武装色の覇気に関しては互角、スピードやパワーといった基礎能力もほぼ互角と言っている状態だった。

だが、戦闘は終始モモンガが押されている。その理由は単純であり、見聞色の覇気においてルッチが上回っており、その差が形勢に現れていた。

（これが、天才ロブ・ルッチ……なんという強さだ。しかも彼はまだ『六式すら使っていない』……）

戦いを繰り広げるモモンガの頬に一筋の汗が流れる。そう、ここまでの戦いにおいてルッチは悪魔の実の力はおろか、六式すら使っておらず覇気と純粹な体術のみでモモンガを上回っていた。

それだけでも驚きではあるが、それ以上にモモンガを驚愕させているのは、ルッチの才能だった。

「……なるほど、さうか」

「ぐおっ!？」

振り下ろされた斬撃を武装硬化した手の甲の上を滑らせるようにいなして放たれたカウンターは拳が、モモンガの腹部に突き刺さる。

ルッチはこの模擬戦の中でも加速度的に成長しており、少し前までは打ち合っていたモモンガの剣を見切り、カウンターを合わせ始めてきていた。

たまたま大きく距離を取って息を整えるモモンガ……致命的なダメージは受けていないが、それでも徐々にダメージは蓄積してきていた。

（天才の二つ名に偽りなし……。なんと、凄まじい戦闘センスだ。このままでは、決定打となる一撃を受けるのも時間の問題か……。だが、こちらも海軍中將として、そうやすやすとやられてしまうつもりはない）

徐々にルッチに圧倒されているということを自覚しながらも、モモンガの闘志は消えていなかった。戦闘力はルッチが上回り、戦いのセンスにおいても大きく負けている。だが、モモンガにはこれまでに数多の戦場を潜り抜けてきた経験がある。

剣を握る手に力を込め、モモンガは勇ましくルッチに向かって駆ける。

斬撃を放つ、回避される。追撃してカウンターを受ける。もはや完

全に対応されていると言っている状況であり、ルッチの手数が増え、モモンガは防戦一方となった。

激しい攻撃の合間になんとか反撃を試みようとするも、それにも力ウンターを合され……そしてついに、武装硬化したルッチの蹴りが完璧にモモンガの顔を捉えた。

だが、その瞬間にモモンガの目に強い光が宿る。

(……だっ！)

それは、まさに芸術と言えるような体捌きだった。蹴りを受けたモモンガは流れるように体を捻り、完璧に近い形で衝撃を受け流しつつ、その動きを使用してスリりと滑り込むようにルッチの後方に回り込んだ。

ルッチが勝負を決めに来る一撃……それまでよりは確実に大振りとなるであろう攻撃のみに狙いを絞り耐え続けたからこそ、ルッチが体勢を立て直すのが間に合わない速度で背後を取ることができた。

見聞色で察知しようと回避が間に合わないタイミングで放つ最速の刺突。それこそモモンガの起死回生の一撃だった。

「……なっ!?! 馬鹿な——がっ!?!」

だが、放たれた刺突をルッチは振り返ることなく背後に回した手……親指と人差し指で剣先を挟むようにして受け止めていた。まるでそこに刺突が来るといのが分かっていたかのように……。

逆転の一手を潰されて硬直するモモンガの体に、ルッチの回し蹴りが叩き込まれ、モモンガは地面に倒れた。そして同時に、勝負ありとの声が聞こえる。

今回はあくまで模擬戦であり、戦闘不能になるまでの戦いではない。決定的といえる一撃が入ればそこで勝負は終わりだ。

そして結果は言うまでもなく、ルッチが一撃も攻撃を受けることなく完勝するという形になった。

勝敗を告げる声を聞き、ルッチはゆっくりとモモンガに近づくとスツと手を差し出す。

「……いい戦いだっ。勉強になった」

「……私の完敗だ。結局六式のひとつすら使わせることが叶わぬと

は、己の未熟さが恨めしい」

悔しそうな表情を浮かべながら差し出された手を取るモモンガを起き上がらせつつ、ルツチは軽く苦笑を浮かべる。

「いや、六式を使わなかったのは、別にアンタを見くびったからじゃないさ。ウチの長官からの課題だね。悪魔の実も六式も使わず、覇気と体術だけで戦えと言われていたんだ。そうじゃなければ使っていた」
「なるほど……」

「長官はアンタを高く評価していた。派手さは無いが、経験と鍛錬に裏打ちされた優秀な覇気使いであり、基本に忠実ながら洗練された戦いは、学ぶことが多いだろうとな……実際、体捌きや覇気の運用などかなり学ばせてもらった」

「確かに戦いの最中でどんどん洗練されていくのを感じた……やれやれ、そのような感想を言われてしまえば、精神面においても完敗と言わざるをえない。また一から鍛えなおしだな」

実際ルツチの目から見てもモモンガはかなりの実力者だった。覇気を覚える前の己であれば敗北は確実だったと思えるほどに……。

強い向上心を感じさせるルツチの言葉を聞き、モモンガは頭をかきながら苦笑を浮かべてルツチと軽く握手を交わす。

そのあとで、ふと思いついたように尋ねた。

「……最後の一撃だが、アレは読んでいたのか？」

「いや、読めてなかった。あれほど上手く背後を取られるとは、ヒヤリとさせられた」

「では、どうして防げた？」

「本当にヒヤリとした……なにせ俺の『未来視』は、まだ1秒程度しか先が見えない上に、かなり集中しなければ使えないのでな。気を抜いていたら危なかった」

なんでも無いように語るルツチの言葉に、モモンガは驚愕した表情を浮かべた。未来視と言えば、見聞色を極めたと言えるような一種の奥義であり、そのレベルにまで至っていないながら、まだまだ己は未熟であるそんな表情を浮かべるルツチを見て、心底感嘆した。

(……)の精神は見習わなければならないな。私にとっても、実りの

多い戦いだっただ)

そしてそんなモモンガの前で、ルッチは今回の合同訓練の前にスパンダムと行った会話を思い出して、口元に深く笑みを浮かべた。

そもそもルッチは未来視が可能とはいえ、かなり集中して行わなければできず、普段は使用していない。モモンガの最後の一撃を未来視で読むことができたのは、そこを警戒すべきと事前に分かっていたからだった。

——いいか、ルッチ。勝負を決めに行くときこそ、最大の警戒をして備えておけ。

——どういうことだ？

——今回のカードはお前が格上側だ。だが、相手には経験があり格上との戦いも心得ているだろう。ならば、おのずと格下が格上を打ち破れる手というのは限られる。特に勝利を確信する攻撃を当てた時ほど、人は油断するものだ。

——なるほど。

——とある国には窮鼠猫を噛むという言葉もある。油断して足元を掬われないようにな。

まるでこうなることが分かっていたかのようなспанダムとの会話を思い出し、ルッチは心底楽しそうな表情を浮かべつつ呟いた。

「……まったく恐ろしく面白い男だ。いったい、どこまで読んでいるのだろうか」

「うん？」

「ああ、いや、なんでもない」

首を傾げるモモンガに軽く答えたあと、ルッチはポケットに手を入れ悠然と歩いてCPメンバーたちが待機している場に移動していった。

ルッチの勝利により、ここまでの戦績はCP側が3勝、引き分けが1つ……海軍側はまだ一戦も勝利することができていなかった。

あくまで今回は勝敗が目的ではないとはいえ、海軍にも面子があり、このままというわけにはいかない。故に見学する海兵たちの期待は次の大将青雉の戦いに注がれる。

迎え撃つのが、先ほど圧倒的な戦いを見せたルツチすら歯牙にもか
けぬほどの力を持つ魔犬とは知らぬまま……。

海軍とCPの合同訓練 後編

海軍とCPによる大規模合同訓練。その終盤に行われた代表者による模擬戦……その最後を締めくくるのは、海軍の誇る最高戦力の一角である大将のひとり青雉クザン。

対するは、CP9司令長官補佐、不夜の怪物の腹心中の腹心と呼ばれる魔^{ヘルハウンド}犬ポーラ・チエルシー。

特設された訓練場の中央で向かい合う両者。150cmほどの小柄なチエルシーと3m近いクザンでは身長は倍近く違い。向かい合えばまるで大人と子供のようにだった。

だが、その身長差でチエルシーを見くびるほど、観戦している者たちは愚かではない。海軍側は最低でも大佐以上の地位を持つ者であり、チエルシーの放つただならぬ気配を感じていた。

「CP9司令長官補佐ポーラ・チエルシーです。今回は、よろしく願います」

「あくアレだ。海軍本部大将クザンだ。こちらこそ、まあ、なんだ？ えっと、アレだ……お手柔らかに頼むわ」

軽く挨拶を交わしたあと、距離を取って立つ両者。しばらくして、模擬戦開始が告げられた瞬間……クザンの体が斜めに切り裂かれて砕けた。

なにが起こったか分からず驚愕するものが多い観客の視線の先で、崩れた体が氷に変わり、冷気と共にクザンの体を再構築する。

「嵐脚・春風……なるほど、さすが大将です。覇気と身体のコントロールで対応しましたか」

「おいおい、なんて早い斬撃だよ。あく言つとくと、完璧に対応できてなんかねえよ」

高度な見聞色ロギアと自然系の身体コントロールで超速の嵐脚に対応してみせたかのように見えたが、クザンの肩には微かな切り傷があり、若干ではあるがダメージを受けたことを示していた。

それでも、ダメージは僅かなものであり、クザンは今度はこちらの

番とばかりに地面に手を付ける。

アイス・エイジ
「氷河時代」

ヒエヒエの実の力による氷結。全力で放てば見渡す限りを凍てつかせる技。凍りついていく大地に対して、チエルシーは素早く拳を握って叩きつける。

するとその凄まじい力の拳によりクレーターを作りながら大地が砕け、大きな土煙を巻き上げる。そして土煙の中から赤く燃える斬撃が飛来した。

「嵐脚・夏風」

ブロック フェザントベック
「アイス塊・暴雉嘴！」

迫る燃える斬撃に対し、クザンも巨大な氷の雉を作り出してぶつける。炎と氷がぶつかり合い、大量の水蒸気を発生させる中、クザンは素早く見聞色を用いてチエルシーを捕捉し両手を体の前で組むように構え、膨大な冷気を放つ。

「アイスBALL」

それは本来巨大な球状の氷塊となり相手を閉じ込める技ではあるが、チエルシーの体から黒い稲光が放たれ、直後になにごともなかったかのようにチエルシーはクザンに向かって駆ける。

（覇気強すぎだろ!? まったく能力が通らねえぞ……こりゃ、まずは覇気を削らねえと話にならねえな）

チエルシーの凄まじい覇気に驚愕しつつもクザンは冷静に己の前に巨大な氷壁を出現させる。

アイスウォール
「氷壁」

その氷壁はチエルシーの腕の一振りですく散るが、その一瞬の動作の際にクザンは剃を用いて距離を取りつつ、構える。

ブロック パルチザン
「アイス塊・両棘矛」

「嵐脚・冬風」

氷で作りに出した槍と極小の嵐脚がぶつかり合って相殺し、空中にキラキラと氷の結晶が煌めく中で、一旦両者は手を止めた。

「……剃を使えるんですね。しかも、相当の練度です」

「あくまあ、六式はCPの専売特許じゃねえからな。特に移動に便利

な剃や月歩は習得してるやつも多い。俺の教官をしてくれた人も六式を使えてたしな」

「なるほど……」

納得したように頷くチエルシーの前で、クザンは気持ちを整えるように長めに息を吐く。そして両者は示し合わせたように戦闘を再開し、いくつもの技がぶつかり合う。そのあまりの激しい戦闘に観戦者たちが唾然とした表情を浮かべる。

激しい攻防を繰り広げながら、クザンは真剣な表情で思考を巡らせていた。

（分かっただけだが、やっぱり完全に格上か……圧倒的な身体能力に、異常なパワー、化け物じみた覇気……ヤベエぐらいに強い。僅かでも気を抜いたら、一瞬で形勢が決まる……だが、付け入る隙が無いわけじゃねえ）

チエルシーはたしかに凄まじい強さであり、事前にクザンが予想していた通り確実に戦闘能力ではクザンを上回っている。

だが、クザンもこれまで多くの修羅場を潜り抜けてきた歴戦の強者であり、戦いながらも分析を進めていた。

（恐ろしいほどの練度の武装色に比べて、見聞色はそこまでじゃねえ。見聞色が苦手なタイプ……見聞色に関しては確実に俺の方が上……じゃなきゃ、もうとつくに捉えられて負けてる。厄介なのはあの出が異常に早くて読みづらい春風と違って嵐脚だが、あれは速度の分威力は低めだ。あの技に関しちや仕方ねえ、多少のダメージは必要経費と見る。他の嵐脚に関しては、見聞色で察知してから十分身体のコントロールが間に合う）

超速の斬撃である春風に関しては、完全に回避することはクザンをもつてしても不可能ではあるが、ある程度は対応が間に合うことと、春風自体が威力が低いこともあって負つてもかすり傷程度。

他の危険な嵐脚は、防御に専念して集中しておけば、見聞色で察知してから十分に対応できるレベルといえた。

そんなクザンに向けチエルシーが剃で迫るが、クザンは即座に己とチエルシーの間に氷壁を出現させて剃で大きく距離を取る。

(ヤバいのは、あの覇気とパワーを用いた近接戦だ。地面を砕いたパンチ……アレに関しちや、一撃でも受けたら即アウト。少しでも接近して来たら全力で逃げて距離を開ける。ここまでの戦闘を見る限り、中遠距離の攻撃で対応が間に合わず一撃アウトになるような攻撃はねえ)

クザンは非常に冷静に戦いを展開していた。チエルシーの攻撃の中で、絶対に受けてはいけない攻撃と許容できる攻撃を分析し、場合によっては全力で逃げを打ってでも、とにかく近接戦には持ち込まないように立ち回っていた。

(中遠距離を維持しつつ回避と防御主体で戦って、隙を突いて攻撃……いくら化け物じみてるって言っても、覇気は無限じゃねえ。とにかくまずは覇気を消耗させねえと勝ち筋がない。物理的な攻撃は最小限にして、冷気をぶつけて覇気で防御させることで消耗させる。時間をかけてでも最低限のダメージが通るレベルまで覇気を削らねえとな……あらら、なんとも泥くせえ戦いだ……仕方ねえさ。根競べといこう)

最終戦でもあるこの戦いに制限時間は無い。故にクザンは長期戦の覚悟を決めた。極限までの集中と見聞色を維持したままで、チエルシーの攻撃を凌ぎ続けるのはかなり困難だが、それでもその先にある細い勝利の可能性に賭ける。

だが、そんな僅かな希望は……激戦の繰り広げられる訓練場に静かに響いた声によって粉碎されることになった。

「……ポチ、使っつていいぞ」

「はいー」

それは決して大きな声ではなかったが、極限まで集中していたクザンの耳には確かに届いた。そして、スパンダムの言葉にチエルシーは嬉しそうな表情を浮かべて足を止め、グッと右拳を握って構えた。

(なんだ？ なにをしてくる?! 使っつていい……悪魔の実の能力?)

それとも特殊な技か？ 分からんが、集中力を極限まで研ぎ澄ませる……)

クザンも動きを止めて、極限まで見聞色を研ぎ澄ませる。どんな攻

撃が来ても対応してみせると……そのまま少しの静寂が訪れたあと、チエルシーの体から威圧感を伴う強大な覇気が放たれる。

「霸王色っ!？」

「最近使えるようになりましたので、練度はまだまだですが……。それでも『コレ』が出来るようになったのは嬉しいです。まあ、私は隊長と違って、かなり溜めに時間が必要ですが……」

そう呟いた直後チエルシーは月歩を用いて高く跳躍し、拳を構えた。その直後、クザンの直感が最大級の警戒を伝え、クザンはありつたけの力で氷の防壁を幾重にも作り出した。

チエルシーの姿が見えなくなることも気にせず、ドーム状に分厚い氷をいくつも作り出し、さらに己自身も全身を武装硬化して攻撃に備えた。

「……六王覇銃!」

そして、そんな全力の防御をあざ笑うかのように、暴虐の衝撃が天から降り落ち、轟音と共に会場が大きく揺れた。

巻き上がった土煙が晴れたあと、訓練場には巨大なクレーターがあり、いまの一撃の威力がいかに凄まじいものであったかを物語っていた。

センゴクも、ガープも、おつるも……他の観戦者たちも戦慄したような表情で硬直しており、何人かの頭にクザンが死んだのでは? とそんな考えが過る中、着地したチエルシーの前で冷気が渦巻きクザンの姿に変わった。

「……ふうふう……まいった。俺の負けだ」

ボロボロと言つていい様子のクザンは深く息を吐いたあとで、降参すると告げて両手を上げた。

「よろしいんですか?」

「……ああ、気合と根性で立ってはいいるが、いまにも気を失いそうだ。あんなとんでもねえ攻撃があったとは……」

「六王覇銃ですか? 隊長は普通のパンチぐらいの感覚で打ちますよ。私と違って溜めが無いので、連打も出来ます」

「え? アレ、連打できるの? 怖すぎだろ……アンタのこの長官

……はあ、こんなに徹底的にやられたのは新兵の時以来だなあ。こりや、俺も鍛えなおさないといけないかもなあ〜」

アレだけの攻撃をして自身を打倒しても、まだまだ余裕が見えるチエルシーよりもスパンダムはさらに遥かに上と知り、クザンは青ざめたような表情で天を仰いで呟いた。

「なるほど、では暇な際にエニスロビーにどうぞ。隊長は、強者の訓練相手はいつでも歓迎すると仰っていましたので！」

「……あゝ考えとく……それとまあ……アレだ。その……そろそろ……限界」

そう告げたあとで、クザンは仰向けに倒れた。本人が言ったように気合と根性で立っていただけで、ダメージは限界だったため気絶した。

倒れたクザン……己の倍以上の体を、チエルシーはヒョイツと片手で持ち上げて救護班の下に運んだ。

こうして、海軍とCPにて行われた代表者の模擬戦がCPが4勝1分けという形になり、これがのちに海軍という組織全体の大幅な成長に繋がることになった。

合同訓練を終えて

合同訓練が終わった後には、模擬戦に参加しない者たちは既に行っている意見交換会という名目の親睦会に加わることとなる。

今回の訓練を通じて親しくなった相手などがいれば、仕事上のみではなく個人としても友好関係を築ければいいだろう。

実際それなりにいい雰囲気で行進しているようで、ワイワイと楽し気な様子ではあった。CP9メンバーたちにも自由に過ごすように指示を出す。

しかしまあ、こういうった場において一般兵や役人はともかくとして、CPの代表のような立ち位置に居る俺がのんびり楽しめるかと言えば、そうはならない。

こうした場で上の人間が忙しいのは世の常。むしろ上の人間が率先してバカ騒ぎをしていては問題である。

「今回は我々の立場としても学ぶことが多かった。手痛い敗戦を経験しましたが、これもまた必要なことだったのかもしれないね」

「そうですね。海軍は言うまでもなく戦力の規模としては世界最大です。だからどうしても、無意識下に自分たちが負けるはずがないというような驕りが多少はあるのかもしれないね」

「市民たちの安全を守る立場として、強いということはよいことです。同時に慢心や腐敗にも気を配らなければならないのが辛いところですね」

現在俺はセンゴクと会話をしており、互いに海軍とCPの代表として今日の感想や今後についてを話し合う。本来はタマの仕事ではあるが、タマは別の場所でするの相手をしている様子だ。

今回の模擬戦は結果としてCP側の4勝1分け……圧勝と言っていい結果だった。

それぞれを思い返してみれば、まず初戦のジャブラ。ジャブラの最大の長所は実力にムラが無いところだ。鉄塊拳法と覇気、そしてCP9内でも年長ということもあってか己の本来の実力を発揮するのが

上手い。

調子によってムラっ気が大きい者と比べて抜群の安定感を誇るの
で、指揮する側としてはかなり使いやすい有能な存在といえる。今回
もすっかりと十全に己の力を発揮して勝利を収めた。

次にフィズ……本人はひとりだけ引き分けだったことを気にして
おり、その際に本人にも直接言ったが、今回の模擬戦において俺の想
定を大きく超える力を発揮したのはフィズのみだ。

事前の情報や本人を見た感想として、ギオン中将はフィズより2段
階ほどは格上だった。実力だけで考えるなら、瞬殺されてもおかし
くないだけの差があった。引き分けという結果は大金星と言っていい。

戦いを見ていて思ったがフィズは攻撃の見極めと対応が上手い。
避けられる攻撃は避け、避けられない攻撃は最小のダメージに……口
にするのは簡単だが、それを実戦でしかも格上相手に行える者がどれ
だけいるか……今後はその部分を伸ばす鍛錬をするのもいいかもし
れない。

カクはなかなか能力を使いこなせていたと思う。少なくとも原作
のエニエスロビー編のように、パスタマシンのといった戦いの最中
で己の想定していなかった状態になるようなことは無かった。原作
ではギャグテイストで描かれていたが、戦いの場で己の能力を把握で
きていないのは問題なので、その辺りはしっかり鍛えた。

結果としてキリンの膂力を生かしつつ、持ち前の機動力もあるパ
ワーとスピードを両立したいいい戦いが出来ていた。

その後のルツチは、さすがの一言だ。力への渴望を得たことでルツ
チの成長は著しく、中將の中でもそれなりの実力者であるモモンガを
まったく寄せ付けなかった。

相手にもよるが既に四皇幹部相手でも問題なく勝利できるレベル
に達しており、まだまだ発展途上といった感じで日々成長しているの
で今後が楽しみである。性格的にも原作より穏やかになっており、今
回のような合同訓練でも友好的に接することが出来るだけの度量を
得ているのも高評価点だ。

ポチに関しては、わざわざいまさら語ることもない。アイツは既

に四皇と1対1で戦ったとしても勝てるであろうレベルまで到達している。だいたいCP5時代の俺ぐらいの力であり、タイマンなら四皇にも勝てるが、部下込みではやや分が悪い領域だ。

そもそも基礎能力にも覇気にも大きく差があり過ぎる中でクザンはよく戦ったと思う。流石大将まで上り詰めるだけあって、状況判断なども含めて能力は高い次元で纏まっており、強者と呼ぶに相応しい存在だ。

「海兵たちにとっても多くの印象が変わる機会となりましたし、今後もこういったことを行いたいものですね」

「確かに、特に海軍とCPが入り交じったの訓練は学ぶ部分や課題も多い。こちらとしても定期的開催できればと思いますね。流石に今回のような規模で、毎回行うのは厳しいでしょうが……」

「そうですね、ある程度規模を縮小して年1度の開催ぐらいに落とし込んでみたいところですね」

センゴクの合同訓練を定期化しようという提案は悪くないものだ。実際今回の訓練で海軍に対して認識が変わったCP役人は多い。同じ世界政府所属の組織なのだから、連携が高まることは大きなメリットだ。

今回のように中將を複数に大将や元帥まで来るとするのは難しいが、規模を縮小すれば十分に年1開催は可能だろう。

「話は変わりますが、スパンダム殿は指導能力も優れているんですね。特にCP9メンバーの覇気の練度には驚かされました。聞けば、大半が覇気を習得して2年に満たないとか……コツがあれば是非ご教授いただきたいものです」

「ああ、それに関してはある道具の存在が大きいですね。私は個人的にDrベガパンクと交流があるのですが、その際に自身の覇気同士をぶつけて練度を上げられる道具を作ってもらって、それを用いて鍛錬を行わせました。この道具で自身の覇気同士をぶつけると消費が大きいので、必ずしも実戦より優れているとは言えませんが、個人でも鍛錬できるのは極めて有益です」

「なんとっ……そのような道具があったとは……」

「恐らくベガパンクが私に気を使って他には伝えていなかったのでしょうかね。もしよろしければ、私の方から連絡して、海軍に対しても支給できる形にするように伝えましょうか？」

リリースが作り出した覇気の波長を変えるリストバンドは非常に便利だ。覇気の成長だけなら、己より大きな覇気を持つ相手との戦闘の方が上ではあるが、ひとりでも鍛錬できるのは大きい。そして俺に関しては、もはや俺より巨大な覇気を持つ相手は存在しないので、リストバンドが最高効率だ。

センゴクが知らなかったのは、おそらくリリースにとってリストバンドは俺との個人的な依頼で作ったもので、政府に依頼された研究品ではないので報告はしていなかったのだろう。

「それは願ってもないことですが、よろしいのですか？」

「ええ、別にこちらが独占する意味は無いでしょう。それにソレがあるからと言って、劇的に覇気が強化されるわけではありません、あくまで鍛錬がしやすくなるといった効果です」

「なるほど、それでも極めて有用な品……スパンダム殿のお心遣いに感謝します」

別にリストバンドについては秘匿する必要はない。むしろこれを用いて海軍が更に強化されればこちらのCP9メンバーなどにとっても競争相手がいるという刺激になるだろう。

リリースとしても海軍からの正式な依頼であれば、多額の報酬……研究費も期待できる。

隠すとしたら、その内リリースに研究させてみようと思っている生命帰還と複数の気功を用いた筋肉圧縮による肉体改造に関してだ。

その後もしばらくセンゴクと雑談をしたあと、他のCP主官や海軍の重鎮とも一通り挨拶と雑談を行う。それが終わった頃には、もう意見交換会も終わりというようなタイミングだった。

ポケットから取り出した飴を啜え、あちこちで騒ぐ海兵と役人を見て、軽く笑みを溢しつつ飴をひとつ振り返らないまま後ろに放り投げて小声で呟く。

「……ちゃんと指示通り、ある程度クザン大将にも見せ場を与えたな。

ポチ、よくやった
「はい！」

禁忌たる知恵と怪物の望み

個人的に酒の楽しみ方は人それぞれだとは思いますが、俺個人としては静かにゆっくりと飲むのが好きだ。俺が晩酌をするのは基本的に翌日が休みの日。時間などを気にせずゆっくりと楽しむのが最高の贅沢だと思っている。

ウイスキーは味、香りだけでなく色合いや氷とのコントラストによる視覚、氷がグラスに当たる澄んだ音による聴覚、グラスを持つ手に感じる温度の触覚など、五感全てで楽しむものだ。

今回はグラスの中には丸氷を入れている。グラントラインのとある冬島で採れる透き通るような透明度の氷を入れたグラスに、好みのウイスキーを注ぐ一瞬は何物にも代えがたい……。

「こんな横暴があつていいわけないじゃろ！　これは、権力による科学の弾圧に等しい行為じゃ——あだだだだだだ!?!」

至福のひと時を邪魔する奴の頭をアイアンクローで持ち上げて、テーブルを挟んで反対のソファアに放り投げる。人の晩酌タイムにいきなり押しかけてきて喚き散らしている相手に対しては、優しい対応である。

「……ほう、このハムの味はいいな」

「あつ、それはかなりうまく熟成できたんですよ。隊長に気に入ってもらえてよかったです」

「いや、スルーせずには反応してくれ!?!」

ポチが用意したつまみを口に運びウイスキーを飲む。俺の好みに合わせた料理を作らせたならポチの右に出る者はいないので、つまみも最高の味わいだ。

あとは対面の五月蠅いのさえどうにかなれば、文句は無いのだが……。

「……むしろ俺の晩酌を邪魔しておいて、頭を握り潰してないだけ、優しい対応をしている」

「……パンダア……お土産も持ってきたから、話聞いてくれ」

「……ふむ」

リリースが差し出してきた品を確認するとウイスキーだった。ほう、17年ものか……素晴らしいチョイスだ。当たり前の話ではあるが、ウイスキーもワインなどと同じく年代物というのは存在する。

市場に出回るのは12年などが主流ではあるが、俺に言わせると12年は少々若い。ウイスキーのまろやかな味わい個性が出てくるのが17年ものぐらいからで、その辺りからウイスキーの深みがグッと増す。そしてこの17年というのは、かなり絶妙なタイミングで、20年ものなどにはないまろやかさと深みの繊細なバランスによる魅力が詰まっている。

個人的には17年もののウイスキーこそが至高だと考えている。さすが、リリースは俺の好みをよく理解しているようだ。

「ポチ、リリースの分のグラスも用意してやれ」
「了解です」

このウイスキーによってリリースの処遇は決まった。なんの愚痴かは知らないが、付き合つてやろう。とりあえずグラスを空けてさっそこのウイスキーを飲むとしよう。

さすが17年もの、いい香りだ。この銘柄は西の海のものか、ならやはりロックだな。ロックで飲む際のいいところは、氷の解け方で味が変わるので、それに合わせたつまみを楽しめるといふ点だ。

最初のストレートに近い状態では、ドライフルーツやナッツ類の軽いつまみが合う。中盤以降は燻製などのややしつかりしたものもいい。終盤は水割りに近い味わいになってくるので、塩分が強めのつまみがベストだ。

ウイスキーを楽しんでいると、ポチがグラスと自分用の酒を持ってきて、席に座る。基本的に晩酌する時にはポチも付き合う……まあ、ポチは子供舌でカクテルしか飲めないのです、ウイスキーではなく自分で作ったカクテルだ。

リリースは別になんでも飲むが、毎回少量だけだ。なんでも酔つて一時でも思考が鈍るのが嫌らしい。

「……それで、リリースさんはなにが不満なんですか？」

俺が話を聞く姿勢になったのを察して、席に座ったポチが話を切り出す。その言葉を聞いたリリスはグツと拳を握り、悔し気な表情で口を開く。

「わしは、今回ほど上層部の無理解と横暴さを感じたことは無い！」

「……そういう前置きはいいから、内容を話せ」

「パンダが冷たい……まあ、端的に言うところある絶滅した鳥を血統因子を用いて復活させるというプロジェクトがあったんじゃ。ただ元々かなり希少な鳥で……完全な状態での血統因子は存在せず、何とか残っていた血統因子の欠片や、近縁種と思われる鳥類の血統因子を組み合わせて再現しようとした」

感想的なものを聞いていると長くなりそうだったので、手早く本題に移らせる。

物凄くざつくりとリリスの話を纏めると、化石から恐竜を再生させようとするようなプロジェクトがあったらしい。

「……7年かかったプロジェクトじゃったが、残念ながら結果は失敗じゃ。やはり、再現した血統因子では、同じ鳥を作り出すことはできず、出来たのは似て非なる別の生物じゃった」

ああ、もう話が読めた気がする。リリスはいまハッキリとそのプロジェクトは失敗だったと口にした。その上で先ほどまで言っていた上層部の無理解や横暴という感想を当てはめると……まあ、そういうことだろう。

「だが、上はその失敗作を『成功』としよった！ いや、上だけではなく、化学班の者たちの大半も成功だといった。こんな屈辱があるか？

失敗作を成功などと……」

「う、うーん。その本物と、再現した鳥では、実際にどのぐらい差があったんですか？」

「これを見てみよ！ こつちがその本来の鳥の写真で、こつちの10羽映ってる方がプロジェクトによって生み出された鳥じゃ!!」

「……」

興奮気味にリリスが取り出した写真を見て、ポチは明らかに困った表情で写真と写真に目を動かしていた。基本的に人のいいやつだか

ら、なんとかリリスの怒りに同意したいとは思っているのだろうが、この感じだと……。

「……すみません、リリスさん。私には違いが分かりません」

「なっ!? そ、そんな……こ、こんなに違うんじゃない?！」

「同じ鳥のようにしか……」

「パ、パンダア……」

ポチの言葉にショックを受けたリリスは、半泣きになりながら俺の方に写真を見せてくる。俺はつまみを取っていた手を一瞬止めてチラリと写真を見る。

「羽根の生え方が微妙に違う。新しい方10羽は同じ生え方で、過去の写真だけ違う。確かに個体差ではなく、明らかに再生の過程でズレた血統因子によるものだ。そういう意味では似て非なる別種と言ってもいいかもしれない」

「……パンダ好き、愛してる。そうじゃよな! 違うじゃろ? これはまだ完全に別種じゃよな! な!!」

「確かに違うが、その鳥の専門家ならともかく専門外のやつに気付けと言う方が無理な話だ」

「ぐ、ぐぬぬ……天才というのは、いつの世も理解されないものなのか……」

リリスは……というかベガパンクは完璧主義者というか、常人であればどうでもいいようなことを失敗の要因ととらえる。

今回の件だって、鳥は99%再現できている。だが、唯一羽根の生え方……その角度が数度違うというだけの話だ。よっぽどその鳥に詳しい専門家か、俺のように視力や思考力を改造してるような者でもなければまず分からない。

上も別に悪気があったわけでは無く、普通に見て問題なく再現できると判断したのだろう。だが、頑固な天才は1%の差異に納得できず愚痴りに来たわけだ……想像の10倍ぐらいくだらない理由だったな。

「くそう、いつだって世界は天才に厳しい。脳に溢れるアイデアを形にするのに資金も時間も足りなさすぎる。ひとつ形にするうちに

新たに5つのアイディアが浮かぶ……はあ、いろいろと齒がゆい
のう」

「その無駄に細かい拘りを捨てればある程度やれる範囲も増えるとは思
うが……まあ、科学者なんてのはそんなものか」

完全に愚痴モードに入ったのか、その後も研究などへの不満を口に
するリリスに適当に言葉を返しつつ酒を飲む。

律儀なポチは真面目にリリスの話を聞いているのだが、内容の半分
も理解していないようで、頭には大量のハテナマークが浮かんでいる
ように感じられる。

しばらく愚痴を続けたあと、リリスは不意に沈黙し……チラリと俺
の方を見て口を開いた。

「……なあ、パンダ。知ることが禁じられているものを知りたいと追
い求めることは、罪じゃと思うか？」

「罪か否かを決めるのは好奇心ではなく法だ。法によって罪と定めら
れているなら罪だろう。それを分かって追い求めるなら、相応の覚悟
はしておくべきだな」

「追い求めるな……とは言わんのじゃな」

「それを言って止まるような奴はそもそも法を犯してまで追い求めた
りしないだろう」

遠回しではあるがリリスが言わんとしているのはオハラ的一件だ
ろう。クローバー博士とベガパンクには交流があったようだからな。

そういえば、オハラ資料はエルバフにあるんだっか？ ……い
よいよワンピースを探すとなったら、最初はエルバフに行つて古代文
字を読めるようにするべきだな。

「……例えばじゃが、パンダ。お前がどうしても知りたいものがあり、
それを知ろうとすることは世界に禁じられているとしたら、どうする
？」

「どうする？ 俺が止まる理由があるのか？」

「世界全てがお前を止めようとしてきたら？」

「世界が滅ぶだけだ」

「ふっ、ははは……確かに、お前ならそうなるな」

リリースは楽しげに笑いながら、グラスの酒を飲む。そして空になったグラスを真剣な表情で見つめて沈黙する。そのまましばらくの間が経ち、俺もいま飲んで一杯で晩酌を終わろうと考え始めた夕イミングで、ポツリと呟くような声が聞こえた。

「……なあ、パンダ。もし、もしじゃぞ……わしが法を犯して知識を追い求めていて、世界政府がわしを消すと決めることがあったとしたら……お前は……わしを殺すか？」

「それは俺の下にお前を抹殺する指令が来た場合の話か？」

「……ああ」

まあ、実際に原作においてはCPOに指令が出ていたな。しかし、少し意外だったのはそれを俺に対して口にした点だ。

おそらく長く沈黙している間にいろいろ考えていたのだろう……ぼかしているとはいえ、この言い方では己がなにか禁忌となることをしている、遠回しに告白しているようなものだ。

場合によってはここで殺される覚悟すら決めたような目で真っ直ぐこちらを見るリリースを見て、俺は軽く笑みを浮かべてウィスキーを一口飲んで言葉を返す。

「……お前にジョーカーとなる言葉を教えておいてやろう。だが、これを仮に他に漏らせば殺す」

「う、うん？」

「……『いつか必ず別世界及び上位世界に渡航できる装置を作り出すことを誓う』……その一言を口にすれば、たとえ世界全てが敵に回ったとしても、お前は生存できる」

「ど、どういうことじゃ？ 別世界？ 上位世界？ それが、お前の欲しいものなのか……」

「さあ、それ以上を教えてやるつもりは無い……まあ、記憶の片隅にでも置いておくことだ」

例えばこの世界に願望機のような願いを叶える秘宝が存在しえない場合。俺が神の如き全能に至る以外の方法で、俺の最大の望みを叶えるものを作り出す可能性があるとしたら、現存する存在ではリリース……ベガパンクだけだろう。ならそれは俺にとって大きな価値に

なり得る。

そんなことを考えて軽く笑みを浮かべたあと、サツパリ話についていけず頭にハテナマークを大量に浮かべているポチの頭を軽く撫でた。

そして始まりを迎える

エニエスロビーにある特別訓練場。エニエスロビーの建て替え計画の中で一番初めに建て替え、リリスの協力を得てかなり強固に作ったその場所で、俺は仰向けに倒れる人物に向かって口を開いた。

相手もそれなりの立場の存在ではあるが、本人から敬語は無く構わないと言われているので、普通に話す。

「……お前に限った話ではないが、強力な能力を持った者は、どうしてもその能力に頼りがちになる。無論、能力は長所ではあるし、それを伸ばすのは間違っていないが……そういうタイプ程、いざ能力が通じない相手を前にすると攻め手が極端に狭くなるものだ」

「……あーいや……まあ、もの凄く自然に解説に入ってるみたいですが、その前に一言……アンタ、強すぎだろお。俺もいちおうその、アレだ、大将としてのプライドとかそういうのがあったわけなんですよ。強い強いとは分かっちゃいたけど、それでも多少は戦えるかもとか思ってたんだが……軽く親指弾いただけでこっちの攻撃全部吹き飛ばされるとか、絶望しかないんですか……」

仰向けに倒れたままで話すのは、大将青雉ことクザンである。以前の合同訓練のあとのポチの誘いに応じて己を鍛えなおすという意味で、特訓にきたらしいので軽く相手をした。

なるほど、大将というだけあって能力以外もそれなりに鍛えられていたし、様々な面が高水準に纏まっではいるが……それでも、その程度だ。

「まあ、基本的な能力は一通り身につけているし、悪魔の実際の練度も高い。世界的に見れば上位の実力者で間違いないだろう。ただ、課題が無いわけでは無い。お前の場合は、悪魔の実際の練度は十分だから、身体を鍛えるべきだな。ああそれと、俺に対して敬語は使わなくていいぞ、適切な場では使ってもらおうが……」

「……そりゃどうも。しかしまあ、確かにチエルシーの時もおたくの時も、能力が効かない相手かつ身体能力で上回られると、攻め手が殆

どなくなっちゃうな。覇気はもちろんだが、戦闘技術とかも磨き直し
かあ……」

俺としても訓練相手にバリエーションが増えるのはいい。クザン
は間違いなく強者だし、何気に自然系の能力を持つ訓練相手というの
も初だ。

能力範囲の大きい自然との戦い方の再確認なども含めて、利点は多
い。

「六式はある程度使えるんだっただな……なら、話は早い。そちらの方
面で鍛えてやろう」

「……えっと……その……お手柔らかに頼むわ」

「安心しろ、こう見えて殺さないように手加減をするのは得意なんだ」
「いやいや!? それ殺す寸前まで痛めつけるって言ってるようなもん
なんですけどお!?!」

「そう言っているが?」

「……あらら、俺、選択を間違えたんじゃないやねえの? 前の敗北とかで、
昔の熱い気持ち思い出して少しやる気になって、テンションのまま
に行動して失敗だった……これめっちゃ扱かれるパターンじゃねえ
か……」

「よし、立て。再開だ」

「……教官より容赦ねえ」

クザンは絶望したような表情を浮かべていたが、それでも立ち上
がって構える。なんだかんだでポチに完敗したことで、思うところが
あったのだろう。口ではどうこう言いつつも、目には熱意が宿ってい
る。

まあ、とりあえず初日ということもある……優しく撫でてやるか
……。

・***

クザンがたまに特訓に来るようになり、訓練相手のバリエーション
も増えたし、CP9メンバーの仕上がりも上々だ。

新世界の任務もいくつか回してみたが、どれも問題なくこなせている。そのこともあって、上からはかなり遠回しにはあるが「CPOに所属する意思がある者がいるか確認してほしい」という連絡が来て、全員に確認してみたが……満場一致で「一切ない」との返答だった。

原作ではルッチやカクといったメンバーはCPOに所属していた気がするが……まあ、原作と違って……主にタマが俺を自分より上扱いする影響もあって、いつの間にかCPのトップはCP9という空気になりつつあるし、本人たちが希望しないなら現状のままでもいいだろうとは思う。

そんなことを考えながら書類仕事をしていると、予てより申請していた品が届いたので、それを持ってエニエスロビーの門に向かった。門に辿り着くと、門番であるオイモとカーシーが居たので声をかける。

「オイモ、カーシー、ちょっといいか？」

「長官じゃねえか、オイたちになんか用か？」

「少し話があつてな……お前たちは50年前に世界政府とかつての巨人海賊団の船長ふたりの解放と引き換えに100年門番を務める契約を結んだんだつたな？」

用があつたのはオイモとカーシーだった。このふたりは原作におけるリトルガーデン編に出てきたドリーとブロギーが船長を務めていた巨人海賊団の一員であり、100年前に決闘を始めたドリーとブロギーを迎えに行く途中で捕らえられ、世界政府にふたりが捕らえられインペルダウンに幽閉されているという嘘を教えられた。

そして、ドリーとブロギーを解放する条件として100年間政府に仕える契約を結んだわけだ。原作においてはウソップにより政府の嘘を教えられ、麦わら側に付いたという経緯があつた。

「ああ、最初は信じられなかったが……」

「アンタみたいなの、とんでもない強さの人間が存在するのなら、あんなに強いお頭ふたりも捕まるかもしれねえ」

「そのことなんだが、調べてみたところ……お前たちがお頭と呼ぶ、赤

鬼のブロギーと青鬼のドリーがインペルダウンに収容されているという事実は確認できなかった」

「なっ!？」

寝返る可能性がある門番をそのまま置いておくのも問題だと、コイツらふたりに関しては真実を教えて解放してやるつもりだったのだが……他にも似たような条件で海軍等に雇われている巨人族が居ないか調べたり、あるものを手配していたりして今日までかかってしまった。

「……どうやら、50年前に交渉した者がお前たちという戦力欲しさに嘘をついたようだ。すまなかった」

「そうだったのか……ああ、だが、長官が謝ることじゃねえ!」

「そうとも、悪いのは俺たちを騙した奴だ! 長官に恨みなんてねえ。むしろ、いろいろ世話になったと思ってる」

ちなみに、コイツ等に関しては給料すらまともに支払われていなかったもので、それに関しては着任して早々に変更して給料や休暇も正當に用意するように調整していたが、そのおかげかふたりは俺に対して憤ったりすることは無かった。

これなら話も早そうだと、俺は用意した品を取り出す。

「……そうか、そう言ってももらえると幸いだ。それで、現状のドリーとブロギーに関しても調べてみたが、リトルガーデンと呼ばれている島で目撃情報があった。お前たちが話していた決闘の舞台となった島とみて間違いないだろう。そしてこれがその島へのエターナルポースだ」

手配していたのはリトルガーデンへのエターナルポースだったのだが、人の手が殆ど入っていない上にログが溜まるまで1年もかかるあの島へのエターナルポースは少なく、探すのにそれなりに時間がかかってしまった。

「お前たち用の船も用意した。今後どうするというのがを話し合う前に、一度ふたりで行ってみるといい」

「……いいのか?」

「ああ、そこにふたりが居たなら、今後について相談してこい。その後

はそのままエルバフに帰ってもいいし、ここに門番として戻ってきてもいい。その際には正式に雇用という形で契約を結ぶ。なんにせよ、一度会って話してこい」

「いろいろすまねえ、長官」

「いや、もとはと言えば世界政府の馬鹿な嘘が原因だ。このぐらいのフオローは当然だ」

というわけでふたりに対して、巨人族でも利用できる大型の船とエターナルポースを騙っていた詫び代わりに渡し、ドリーとブロギーを訪ねるように提案した。

その後は戻ってきてもいいし、戻らなくても問題は無い。しかしまあ、世界政府にも困ったもんだ。目的は分かるが、こういった騙すような手段はバレた時のリスクが大きい。

実際原作ではふたりが敵側に付いたことで敵側の大きな戦力になったわけだし……本当に時々呆れるような行動をとるので困ったものだ。

・***

オイモとカーシーへの話を終えて、長官室に戻った後は書類仕事を手早く片付け、いつものようにポチの淹れたコーヒーを飲みながら新聞を読む。

ついでに新しく発行された手配書なども合わせて確認をしていると……一枚の手配書を見て手が止まった。

『モンキー・D・ルフィ 3000万ベリー』

そうか……ついに原作の開始時期になったのか。なんとも感慨深いものがあるな。手配書が出たタイミングはアーロン戦後のはずなので、まだグランドラインに入ってもいない状態ではある。

だが、ここからは怒涛のペースだ。ウォーターセブンに来るのは、アラバスタ、空島を経た後ではあるが、シャボンディ諸島まで1年以内と考えると、とんでもないペースでの進行である。

エニエスロビー編は起こりえないので、会う可能性は低いが……俺

がエニエスロビー編を潰した結果、補填イベントのようなものが起こるかどうかは気になるところだ。

まあ、なんにせよ。いろいろと……世間が賑やかになりそうだ。

魔王の奏でる歌

原作主人公であるルフィが本格的に動き出したとはいえ、別に俺の生活に大きな影響はない。エニエスロビー編、インペルダウン編、頂上戦争編が発生しなければ、本当に関わる機会はない。

一瞬ローグタウンに赴けばドラゴンを始末できるかとも思ったが、ルフィがローグタウンに現れるピンポイントの日にはいかなければ意味がないし、そもそもさほど革命軍に興味もない。

立場的にCPの俺と革命軍のドラゴンでは敵だが、俺は仕事でやってるだけなので革命軍に対し思うところは無い。なんなら、最近割と大人し目だなあとか思ってるぐらいだ。

……革命軍側にしてみれば、俺は不倶戴天の敵かもしれないが、まあどうでもいいことだ。

唯一俺と麦わら一味が遭遇する可能性があるのは、ウオーターセブンだろう。アクアラグナの時期なのでタイミングは分かりやすい。だが仮に遭遇したとしても……特になんの用もないな。まさか一応世界政府の役人である俺が「ワンピースを頑張っ見てくれ」などと応援するわけにもいかないな。

とりあえず、エニエスロビー編が無くなったことによる影響だけは知りたいので、ウオーターセブンに潜伏させている役人からの情報には注意しておこう。

そう考えつつ、書類仕事を終えてペンを置く。

「……最近は革命軍が大人しいせいか、仕事が少なくて手持無沙汰だな」

「大人しいのはウチに手酷くやられてるからだと思うが……まあ、退屈というのには同意だ。それなりの規模の戦闘がしたいところだな」俺が書類を終わらせたことを察して絶妙なタイミングでポチが持ってきたコーヒーを受け取りつつ呟くと、ソファアに座っていたルッチが反応する。

最近CP9では新世界の任務もかなりの頻度で請け負っているの

だが、以前に比べて割と暇である。さんざん支部長などを暗殺されているせいか、革命軍側もかなり警戒して動きが慎重になっているので、任務自体少なくなっているというのも要因のひとつだ。

「チャパパパ、そういえば、最近だとアラバスタで反乱活動が活発みたいぞぞお」

「じゃが、アラバスタの反乱には革命軍は関わっておらんのかな？ ならただの内乱、国からの要請でもない限りわしらが動くことは無いじゃろ」

まあ、革命軍は関わってなくとも別の組織は関わっているのだが……しかし、「VIVRE CARD」における情報だと、ルフィがウィスキーピークに行く際に作った雪だるまの製造日が2月18日、サウザンド・サニー号製造が3月25日であり、その間にリトルガーデン編、ドラム編、アラバスタ編、空島編とこなすわけだ。

仮にアニメオリジナルも入るなら、ここにロストアイランド編、ヤギの島編、虹の霧編、ナバロン要塞編、オーシャンズドリーム編まで加わるのだが……いや、無理だろ。

パラレルである可能性が高く発生しないとは思うのだが、ここに劇場版も加えると珍獣島、デッドエンド、呪われた聖剣、オマツリ男爵、カラクリ城も时期的にはグランドライン突入〜エニエスロビー編の間である。

諸説あるがルフィの旅立ちからシャボンディ諸島までを参考資料を基に計算すると、およそ3ヶ月ほどといわれているが、あまりにも無茶苦茶だ。

本当にどんな過密スケジュールにすれば成立するのやら……。

こちらは暇だというのに、原作主人公はずいぶんと忙しそうだ。

「隊長、新しい指令書です」

「うん？ ああ」

ちょうどそのタイミングでポチが指令書を持ってやってきたので、受け取って内容を確認する。久しぶりに革命軍絡みの仕事であり、あの島に潜入して活動しているそれなりの規模の革命軍を殲滅せよとの内容だった。

「……革命軍の殲滅任務か、暇も持て余し気味だから、空いているメンバー全員でいくか？」

「面白そうだな、久しぶりにある程度暴れられそうだな」

「よし、フィズ、どっちが多く殺れるか勝負しねえか？」

「はっ、テメエが俺に勝てるかよジャブラ」

もちろんルツチは真つ先に反応したが、それ以外の面々も最近暇だったせいか乗り気な様子である。先ほどまでより賑やかになった会話を聞きつつ、俺は指令書の内容を確認して思考する。

任務のある島の場所、時期、報告書に上がっていた内容……。

「……ただし、全員仮面とマントを着用するように、それと戦闘においては悪魔の実の能力の使用は禁止だ」

「うん？ なぜだ？」

「最近の慎重さなどを考えると、革命軍はこちらの情報欲しいのだろう。別に囮とかいうわけでは無いだろうが、いざ俺たちが現れた時のために、遠方に観測を行う者を配置している可能性が高い。最近この島関連で上がっていた報告書に、行動している革命軍とは別に何名か派遣されたと思わしき痕跡がある」

「革命軍にとって私たちは目の上のタンコブ、少しでも情報を得ようと観測する……セクハラですね」

「そうだな。まあ、あくまで本命の動きのついで、保険程度だろうか」

情報を得たいと思っている相手にわざわざ情報を与えてやる必要もない。全員覇気と六式のみで戦わせて、悪魔の実の情報などは与えない。

・***

夜の暗闇の中、岩陰からひとりの男が特殊な双眼鏡を覗きながら、電伝虫で通信を行っていた。

「……っ!? し、信じられない強さです。あれが、CP9……本隊がどんだん、やられて……」

『そうか、辛いだろーうが、出来るだけ詳細に情報を伝えてくれ』
「はい」

その男は革命軍に属するものであり、今回の作戦において本隊からは離れて観測を行っていた。理由は単純であり、最近革命軍を悩ませている存在でもある世界政府最強の暗殺集団CP9が現れる可能性があったからだ。

CP9は極めて残忍で危険な存在であり、ここ数年で革命軍がどれだけの被害を受けたか考えるのも嫌になるほどだ。

さらに厄介なことに、基本的に暗殺か殲滅を行うため情報がほとんど得られない。気づけば大切な同志たちが壊滅しているという事態も多く、ここ最近革命軍が慎重にならざるをえない原因だった。

しかしだからと言って、革命軍としての行動をしないわけにはいかない。だからこそ、最低限同志たちの死を無駄にしないために、作戦行動中には男のような観測者が複数付いており、情報を得て対策を練ろうと考えていた。

特に男はダチョウの力を持つ動物系悪魔ゾオンの実の能力者であり、ダチョウの力による視力は推定で25……40m以上先のアリの動きすら正確に見ることができるところで、観測者たちのリーダーを務めており、革命軍内でもそれなりに地位のある存在だった。

男は少しでも正確な情報を得ようと、その圧倒的な視力で観測を続けていたが、その折に本部から通信が聞こえてくる。

『……観測者の一部から通信が途絶えた』

「なんですつて!? 確認します」

本部からの通信に慌てて視線を動かし、自分以外の観測者が居る場所を確認すると……倒れた観測者の姿が目映った。

己以外の全ての観測者の場所を確認するも、そのいずれも倒れており……生きているとは思えなかった。

「本部! 自分以外のメンバーは全滅です! 指示を乞う!!」

『……』

「本部? 本部!?!」

『……』

「なんだこれ……歌？」

電伝虫で本部に呼びかけるも返答は無い。それだけでなく、受話器からは不気味な、魂を凍えさすかのような歌声が聞こえてきていた。

言いようのない恐怖を感じながら男が顔を上げると、視線の先にある存在を見つけた。岩山の上で月を背負うように立つ存在。

左目が×の形の仮面を被り、竜の意匠が施された帽子を被ったその存在を見た瞬間、男の心は握り潰されるかのような恐怖に支配された。

「……あ……ああ……」

体が震え逃げることも、その存在から目を離すことも出来ない。ただやけに、受話器から聞こえてくる不気味な歌声が大きく聞こえた気がした。

そしてその直後、仮面の左目が一瞬赤く輝いたあと、男は胸に熱さを感じた。

「……あ？ ……え？」

己の体を見ると、そこには×の形の穴があり、それを認識するとともに、不気味な歌声を聞きながら男の意識は闇に沈んでいった。

・***・

ルツチたちに革命軍を襲撃させ、俺はその間に観測兵を全て抹殺し電伝虫の機械を破壊して野に帰した。いろいろと実験的なこともしてみたが上手くいった。

劇場版においてトットムジカが出現した際に、電伝虫の音声が切れなくなったりと影響を及ぼしていたので、似たようなことができるかと試してみたのだが、問題なく電伝虫の通信を妨害することができた。

そしてもうひとつ、トットムジカが使っていた光線も問題なく使うことができる。最終楽章時の光線は、俺でも回避しきれず頬を掠った程の速度かつ、覇気を纏った俺の皮膚を傷付けるほどの威力なので相当だ。

しかもこれは魔力を用いての閃光なので、普通のレーザーのように熱を持っていて着弾点で爆発したりなどがないので暗殺向きだ。体感的だが射程もその気になれば数十から数百kmは余裕で届く。狙いが付けられるかは別として……。

さて、最後にもうひとつ実験をしてみるか……出来るというのはトットムジカから感じる意思で分かるので、結果が楽しみではある。仮面の下で笑みを浮かべつつ胸に穴が開いて倒れた男の下に近づくと俺の周囲にトットムジカ最終楽章の人形の腕が現れ、その手が男の体を掴み禍々しい光が男の体を包む、そのまま少し経ってから人形の手は男を離し、男の体は再び地面に横たわる。

そして俺の目の前には紫色の炎に包まれたしゃれこうべが浮かんでいた。そのしゃれこうべは感覚的に俺の意思で動かすことができた。

そして軽く指を動かすと、そのしゃれこうべが……ダチヨウの形をした骸骨に変化した。

なにをしたかと言えば、一種の能力コピーのようなものだ。トットムジカは最終楽章で魔力を用いて炎や雷といった様々な能力を使っていた。

他にもできることを増やせるかどうか考えてみたら、魂の中にいるトットムジカが俺に『サンプルとなる魂に触れれば再現できる』と返答してきたので今回試してみた。

なにもかもとはいかないだろうが、魂に触れることで悪魔の実の力を疑似的に再現できるというのは、面白い。あくまで魔力による再現なので必ずしも同じ能力ではないが、極めて有用だ。

さらにあくまで再現なので、悪魔の実によるデメリットなどを得ることもない……やっぱり、コイツの力は最高だな。

パチンと指を弾いてダチヨウの骸骨を消したあとで、目の前の死体を見る。他の死体はともかく、胸にバツ字の穴が開いてるこの死体は消しておいた方がいいな。

そう考えつつ、俺は指先に黒い音符を出現させて、死体に落とした。

閑話・リトルガーデンでの一幕

グランドライン前半の海にある島。恐竜などの太古の生物がそのままの姿で生きるリトルガーデン。その島はかつて世界を震撼させた巨人海賊団のふたりの船長、赤鬼のブロギーと青鬼のドリーが10年以上に渡り7万戦を超える決闘を続けている島だった。

だがその誇り高き巨人族の決闘は、賞金を目当てとしたMr. 3の策略によって汚され、それに憤った麦わらの一味とMr. 3一行の戦いが繰り広げられていた。

ゾロ、ナミ、ビビの三人が捕らえられMr. 3のドルドルの実の能力による巨大キャンドルサービスセットによって、倒れ伏すふたりの巨人もろとも生きたまま蟻人形にされようとする中、ルフィとウソップ、そしてカルーとMr. 3とミス・ゴールデンウィークのペア、Mr. 5とミス・バレンタインのペアが戦いを繰り広げていたが、人数差もありルフィとウソップは劣勢だった。

Mr. 3こそ能力を逆手にとって一時遠距離まで吹き飛ばしたものの、ルフィがミス・ゴールデンウィークのカラーズトラップに嵌りゾロたちを助けることが出来ず、ウソップとカルーもMr. 5ペアから必死に逃げるのが精一杯の状況だった。

そして本来の原作より早く戦場にMr. 3が復帰し、ルフィは未だカラーズトラップで動けない。ゾロたちもいよいよ全身が蟻に包まれるという絶体絶命の状況で、突如横なぎに振るわれた巨大こん棒によってキャンドルサービスセットが破壊され、Mr. 3の表情は驚愕に染まることとなった。

「……ば、馬鹿な!? あ、新たな巨人だと!？」

現れたのは、ウソップとカルーを掌に乗せ、怒りに染まった表情を浮かべるふたりの巨人族……オイモとカーシーだった。

「……この人間から話は聞いた」

「よくも、誇り高き頭たちの決闘を汚してくれたな……」

「……お前たち……ま、まさか……オイモとカーシーか……」

現れたふたりの巨人を見て、ブロギーもまた驚愕したような表情を浮かべる。

そう、スパンダムによって船とエターナルポースを与えられ、ドリーとブロギーの元を訪ねてきたオイモとカーシーは、たまたまMr. 5ペアから逃げていたウソツプとカルーと出会い簡単に事情を聞いた。

そして、敬愛するふたりの頭の神聖な決闘を汚したMr. 3に凄まじい怒りを抱き、ウソツプとカルーと共にこの場にやってきたのだった。

「ああ、ブロギーの頭！ オイたちだ!!」

「少し待っててくれ、ブロギーの頭、ドリーの頭……アンタたちの決闘を汚した愚か者には、俺たちが罰を与える！」

ウソツプとカルーを掌から降ろし、仲間たちを助けるように告げたあとでオイモとカーシーはそれぞれ武器を構えて怒りの籠った叫びを上げる。

その威圧感に気圧されながらもMr. 3もまた必死の形相で叫ぶ。
「み、Mr. 5たちは、なにをしているだガネ！」

その叫びに呼応するかのようにオイモとカーシーの後方で爆発が起こり、カーシーの頭上にフワリとミス・バレンタインが悪魔の実の能力で浮かび上がる。

「喰らいなさい！ 一万キロプレス!!」

「……」

キロキロの実の力により自身の体重を10000kgに変化させた一撃。死角を突いた完璧な一撃だったが……カーシーは、その巨体からは想像もできないほど流麗な動きでその一撃を回避する。

「えっ？ ……あっ……」

そのまま地面に落下し、必殺の一撃が回避されたことに驚愕しながら上を見たミス・バレンタインの目に映ったのは、天から降り注ぐかのようなカーシーの巨大な拳であり、叫ぶ間もなくすさまじい一撃を喰らって意識を手放した。

「……『死角からの攻撃は常に警戒しておけ』」

「ミス・バレンタイン！ この、巨人野郎が!! 鼻空想——なっ!?!」
一瞬でミス・バレンタインがやられたことに驚愕しつつ、Mr. 5
がボムボムの実の能力を用いてカーシーを攻撃しようとしたが、ソレ
よりも早くオイモが投擲したこん棒がMr. 5に向かって飛んでき
た。

巨人族の使うこん棒は、Mr. 5から見ればあまりにも巨大であ
り、鼻空想砲では破壊は不可能。他の技を使う時間もない。

完全に不意を突かれた形になったが、Mr. 5とてバロツクワーク
スのオフィサーエージェントであり、戦闘経験は豊富だ。状況を素早
く判断して即座に回避行動を行い、飛来する巨大こん棒をかわす。

だが、その回避した先にはすでに、拳を振りかぶっているオイモの
姿があつた。

「ば、馬鹿な——ッ!」

「……『攻撃は常に対応されることを想定して次の手を用意して動け』
……長官の教えだ」

巨人族とは思えぬほど俊敏かつ効率的な動きで振るわれた拳は、M
r. 5を捉えて吹き飛ばした。

そう、実はオイモもカーシーもここ数年で大きく実力を上げてお
り、原作におけるふたりよりかなり強くなっていた。

理由は単純で、彼らが門番を務めていたエニエスロビーの長官であ
るスパンダムが、「たまには体を動かさないと鈍るだろう」と、時折オ
イモとカーシーを指導してくれていたからだ。

数多の武術の知識も持つスパンダムにより、ふたりはそれぞれに
合った効率的な体の動かし方も学んでおり、暇な時や休暇にはふたり
で自己鍛錬も行っていたため、大きく実力を伸ばしていた。

「……な、なな……なんだガネ、コイツらの強さは……ここ、このままで
は……」

「さあ、次はお前だ。覚悟は——」

「待て!」

「——うん?」

Mr. 5ペアを瞬殺したオイモとカーシーがMr. 3に迫ろうと

したタイミングで、ウソツプの手によりカラーズトラップから解放されたルフィが制止の声を上げた。

「ソイツは、俺がぶっ飛ばすって決めてるんだ。邪魔すんな」

「……なるほど、戦士の目だ。既に戦士が戦っている最中なら、オイチが横槍を入れるわけには行かねえな」

「分かった。俺たちは頭たちの治療をする。だから、頭たちの決闘を汚した愚か者たちには、必ず相応しい罰を与えろ」

「……ああ！^{たたかい} 決闘を汚すやつは、許さねえ!!」

一瞬怪訝そうな表情を浮かべたオイモとカーシーだったが、ルフィの覚悟の籠った目を見たふたりは、Mr. 3に関してはルフィに任せることを決め、倒れているドリーと両手両足を蟻の剣で貫かれて怪我を負っているブロギーの治療を行うことにした。

・***

Mr. 3はルフィによつて倒され、ブロギーに切られて死んだかと思っていたドリーも、100年戦い続けて武器が劣化していたことにより一命を取り留めた。

喜びに涙を零しながら、ブロギーはドリーに抱き着く。

「よくぞ生きてくれていた親友よ！ ガババババ」

「ゲギャギャギャ……」

100年決闘を続けていても、親友同士であることには違いは無く、互いに涙を流して喜び合うのも一瞬、再び喧嘩を始めかけるふたりをオイモとカーシーが止める。

「落ち着いてくれ頭たち」

「あん？ 邪魔を……お前たち、まさか、オイモとカーシーか？」

気絶していたためにオイモとカーシーの存在に気付いていなかったドリーが驚きを浮かべ、その後オイモとカーシーはふたりの治療をしながらこの経緯を説明した。

その後ルフィたちの下に合流したサンジが、アラバスタへのエターナルポースを手に入れており、アラバスタへ急ぐ旅ということもあつ

て、すぐに出航しようとした。

その際に、ふとオイモとカーシーがルフィたちに話しかけた。

「……お前たちには頭の誇りを守るために戦ってくれたことへの恩がある。だから、ひとつ忠告をしておく」

「これからの航海の途中で、司法の島エニエスロビーの長官に出会うことがあれば絶対に戦うんじゃないやねえ」

「エニエスロビー？ 長官？ なんだそれ？」

「詳細は言えねえ。オイたちはあの人にも恩があるからな、みだりに情報は教えられねえ……だが、決して戦ってはならないことだけは覚えておけ」

真剣な表情で話すオイモとカーシーの言葉に、自然と麦わらの一味の表情にも力が籠る。

「別にお前たちが弱いと思ってるわけじゃねえ。むしろオイたちより、強いとすら思ってる。だが、それでも……あの人だけは、格が違い過ぎる」

「仮にお前らが、全員で挑んだとしても1秒かからず皆殺しにされる。あの人は、俺たちが知る誰よりも圧倒的に強い」

「……我らよりも、か？」

重々しく話すオイモとカーシーにドリーが問いかける。すると、ふたりは真剣な表情を浮かべたまま首を縦に振った。

「ああ、頭たちには悪いが、俺たちもエルバフの戦士として嘘は言えねえ」

「頭たちでも、長官に片腕すら使わせることはできねえと、そう思う」「ゲギヤギヤギヤ、そりや相当だ！」

「ガババババ！ 100年のうちにそんな化け物が生まれてたとはな！」

途方もない話ではあったが、エルバフの戦士としてと口にしたオイモとカーシーの言葉に嘘は無いと判断したドリーとブロギーは、どこか楽し気な様子で笑っていた。

その様子にオイモとカーシーも少し笑みを浮かべたあとで、再びルフィたちに告げる。

「……基本的には温厚な人だ。海賊だからという理由で襲ってくるよ
うな人じゃねえ」

「ただ、敵対すれば容赦はしねえ人だ。絶対に敵に回さねえことだ」

真剣な表情で語られる言葉は、ルフィたちの心にたしかに刻まれた。そして、彼らが再びその存在の名を聞くのは、これよりも先、考古学者の仲間を加えてからのことだった。

・***

島食いと呼ばれる巨大金魚を巨人族最強の槍、覇国にて打ち破り、
麦わらの一味を見送ったドリーとブロギーは、オイモとカーシーが
持ってきた酒を飲みながら会話を行っていった。

「ガバババ、今日は素晴らしき日だ！ 新しき友を見送り、古き仲間にも
再会できた！ エルバフの神に感謝だな!!」

「ゲギャギャギャ、確かに酒が美味い。腹が焼けてなけりやもつと美味
かったが……それで、オイモ、カーシー、お前たちはこれからどう
するんだ？」

「ああ、頭たちの決闘が続いているのなら、邪魔するわけには行か
ねえ。オイたちはエニエスロビーに帰ることにする」

「世界政府に騙されたのには腹が立つが、長官は俺たちにいろいろよ
くしてくれたし、今回の件も含めて恩があると思っている。しばらく
は門番として恩を返すつもりだ」

ドリーとブロギーの決闘が終わっていたのなら、一度エニエスロ
ビーに顔を出してスパンダムに挨拶をしたあとで共にエルバフに帰
るつもりだったが、決闘が終わっていないというのであれば話は別
だ。

エルバフの戦士にとって決闘は神聖な物であり、それを知るオイモ
とカーシーも両者の戦いに決着が付くまでは一切の邪魔をするつも
りは無い。

スパンダムへの恩もあるので、またしばらくはエニエスロビーで門
番をしながら、ふたりの決闘が終わる日を待つつもりである。

「そうだな、誇り高きエルバフの戦士は恩を忘れてはならない。世話になった分はしっかりと働きで返せ」

「おう！」

ブロギーがそう告げ、オイモとカーシーが返事をしたタイミングで、島の中央の火山が噴火する。それは、ドリーとブロギーの決闘が始まる合図でもある。

「おっ、真ん中山、よし決着を付けるぞドリー！」

「ああ、いくぞ、ブロギー！」

「頭たち、俺たちは邪魔にならねえように帰るとする」

「ふたりとも武器が壊れただろ。俺とオイモの武器を置いていくから使ってくれ」

「オオ！ またいずれ！」

「必ず再会しようぞ！」

それぞれの武器を、ドリーとブロギーに手渡し、後の再会を約束してオイモとカーシーは笑顔でエニエスロビーへと戻っていった。

狂科学者の恍惚

エニエスロビーの建て替えは順調に進んでおり、既に半分近くは終了している。ついでにちやつかり俺に許可を取り、俺の家の地下に作ったリリス用研究所も、最近さらに拡張したみたいで広くなっている。

「……しかし、お前は本当にいい性格をしているな。毎度毎度人に運搬させるとは……」

「いや、だって、普通にエッグヘッドからここまで来たらだいぶかかるし、パンダ運搬ならすぐじゃし、効率的に考えたら一択じゃろ」

「二度剃刀中に海に叩き落としてみるか……」

「やめろ、あのスピードで落ちたら普通に死ぬ。人類はお前みたいな異常な耐久しておらんのだじゃ」

リリス及びベガパンクと猫は、サテライトすでに活動の拠点をエッグヘッドに移している。原作とは違いパンクハザードも普通にまだ稼働しており、そちらでも研究などは行っているが、拠点自体は中央研究所が消滅したことで移したらしい。

まあ、俺にしてみればパンクハザードもエッグヘッドも移動時間的にさして違いはないので、問題は無いが……。

「それで、パンダ？　今回はなんで呼び出したんじゃ？」

「ああ、お前に俺と……最近ほポチも行っている肉体改造の詳細について教えておこうと思つてな」

「なるほど、それは……ええええええ!」

俺のリリスに対する評価は極めて高い。これまでの付き合いの長さだとか、いろいろと要因はあるが……一番大きいのは、以前に己の死に直結するような情報をこちらに対して話してきたことだ。

遠回しでぼかしつつとはいえ、禁忌の国に関する研究についてほめかすような台詞。すべてではないにせよリリスは俺に対して、腹の内を見せた。

だからこそ、こちらとしても以前よりリリスを信頼しており、肉体

改造についていい加減教えてやろうと思った。

「な、ま、マジで!? ついにパンダ好感度が溜まったのか!! いや〜コツ積み上げた結果があったというものじゃな……そ、それで!? どんな秘密が!! 早く、早く教えてくれ!!」

「……分かったから落ち着け、この紙に詳細や使った品を記載しているから確認してみろ」

目が完全に血走っており少し鼻血が出るほどに興奮しているリリスに呆れつつ、手に持っていた紙を渡してやると、それはもう物凄い勢いで読みはじめた。

まあ、紙に書いてあるのは秘薬の種類や効果、気功術の種類や効果などといったものなので、読むのにはそれほど時間もかからないだろう。

少しすると、リリスは満面の笑みを浮かべて顔を上げた。

「……いや〜なるほど、パンダはこうやって自己進化を……いや……お前……なんでこれやって……生きてるんじや? これただの『豪快な自殺プラン』じゃろ?」

「俺に関しては概ね年2回、ポチは現在年1回行っている」

「いやいや、死ぬって!! 天才のわしの目から見てこれ、100%死ぬからな!! 99%じゃなくて100%死ぬから……え? 逆になんでお前ら生きてるんじや……怖いわ」

実際普通なら確実に死ぬだろう。俺に関しては前世が存在するが故だろうが魂が特別強固であり、それが耐えられた要因。ポチに関してはトットムジカの魔力による負荷軽減のおかげだから、それらが無ければ死んでいるだろう。

当たり前ではあるがこの肉体改造は最初の1回目がりスクが一番大きい。だから俺もポチの改造にはかなり慎重になったし、俺自身が1回目を乗り越えられたのは本当に奇跡か神や悪魔の仕業と言ってもいいかもしれないレベルだ。

ただ1回目さえ乗り越えてしまえば、2回目以降はある程度安定する。それでも常人は普通に死ぬだろうが……。

「無理やり納得は……できる。無理やり言語化するのであれば……つ

まるところ、生命の危機による本能的な自己進化を、それこそ細胞単位で強制的に引き起こすことで、生物としてのステージを力尽くで一段登るようなもの……じゃが、これは、精神力などでどうこうなるようなものでは……いや、本当に訳が分からん!! 脳が爆発しそうじゃ!?!」

「まあ、それはいいとして次はこれだ。コレは、以前までポチにやらせていた、負荷を落として筋力の強化のみに絞ったものだ」

「……なるほど〜これなら負荷は落ちて生存率が——いや、100%死ぬのが90%死ぬになったところで異常なのは変わらないんじゃないけど?! これは、実物を見んことには……チエルシー……お願いじゃから、ほんの一滴でいいから、血液採取させてくれんか?」

珍しく本当に思考が追い付いていない様子で頭を抱えながら俺の後方に居たポチに尋ねるリリス。その言葉を聞いてポチは俺の方に確認するように視線を動かしてきた。

「……まあ、いいだろう。ただし、クローン等を作った場合は殺す。いいな?」

「いいのか!?! ああ、絶対にせんと約束する!」

「ポチ、協力してやれ」

「了解です」

リリスはマッドサイエンティストではあるが、信用できる相手でもある。少なくともコイツは、最初に会った時に己で宣言した俺の要望を最優先にすることや、実験などに付き合う際に最初に詳細を全て説明して一切無理強いをしないなどの条件に関して、いままでずっと守り続けている。

俺の指示を受けたポチから血液を採取し、研究用の設備で確認したリリスの顔は……まあ、大分イカれた顔をしていた。

「……はああああ、しゅ、しゅごい……もう細胞が、人間のそれとは完全に違う」

心底興奮した様子で告げたあと、リリスは俺の方を見て媚びるような目を向けてきた。

「……パンダの細胞も……ちよつと……ほんのちよつとだけ、見たい

なあつて……駄目？」

「……はあ……一滴だけだぞ」

「マジで!? パンダ、愛してる!!」

「その状態で飛びつくな、鼻血が付く」

この流れになることはあらかじめ予想できたし、少しだけ要望に応えてやるつもりではあった。そういう心境になったのは、やはりトツムジカの存在が大きい。少なくとも仮に現時点で俺とまったく同じ力を持ったクローンを作り出せたとしても、そちらにトツムジカが居ない以上実際の俺に比べれば数段劣る。

それに俺は現在も半年周期で肉体改造を行っており、明日にも行う予定なので、細胞に関してはまた明日にも変化している。

いちおう見た目は女性のはずなのだが、尊厳などはどこに捨てたのかと思うほど大量の涎と鼻血を垂らすリリースの用意した検査用のガラス皿に血を一滴落としてやる。

するとリリースは、過去一番俊敏な動きで即座に顕微鏡のような機械に向かった。

「……な、なな、なんじゃこれ、あわわわ……チエルシーの方は、まだかろうじて人間の細胞が進化したものじゃと理解できたし、名残もあつた。じゃがこれは……なんじゃ? まるで意味が分からん。これ本当に細胞か……こんなのが存在してもいいのか……あらゆる生命に対する冒瀆じゃろ……はわわわ……しゅ、しゅごすぎ……駄目これ、もう脳蕩ける……もう当分パンダのこと以外考えられにやい……」

ヤバい顔してるなコイツ……仮にも見た目が女の奴がしていい顔じゃないぞ。いちおう今回の要件としては、筋肉の圧縮による肉体改造の負荷をもつと落として現実的に行えるレベルにできないかという相談も兼ねていたのだが、これはそれを話すのは相当後になりそうだ。

「まあ、分かっているとは思いますが、クローンなどを作ったら殺す」

「いや、そもそも作れんと思う。この細胞? 本当に細胞かこれ?

なんでこの細胞で、人の形保ててるんじゃないやお前……まあ、ともかくこ

れを培養するのがそもそも出来る気がせんし、仮に血統因子を使ってクローンを作ったとしても、出来るのは肉体改造前のパンダじやろうしな」

「ふむ」

「生まれたクローンに同じ肉体改造をさせても100%死ぬ。いや、本当に、サツパリ分らん！ 血を一滴貰って細胞を見て、これまでより遥かに多く情報を得たはずなのに、より分からなくなったんじゃないが……本当に、お前どうなってんの？ 魔王かなにかか？」

まあ、魔王というのに関しては後付けではあるが間違いではない気がする。トットムジカと融合しているわけだし……。

「はあああ、本当にお前と居ると退屈せんわ。脳が滅茶苦茶になりそうじゃけど、これほどの存在と巡り合えるのも幸せじゃな……パンダ、お前本当に未知過ぎる。マジで好き、愛してる!!」

そう言って恍惚とした笑みを浮かべるリリスはなかなかの狂人っぷりだった。というか、なんでコイツが肉体改造終えたあとみたいに血まみれになっているのやら。

そう思っただけだと、リリスは俺とポチの血液が入ったガラス皿を嚴重に保管したあとで、なにやら柵から取り出した。

「……リリスさん、なんですかそれ？」

「輸血用の機械じゃな、こうしてセットして……」

「なんでベッドに横になってるんですか？」

「……ああ、もう無理、脳の処理限界超える。これでよしっ、じゃ、しばらく気絶するから、またあとで——」

そう言っただけで宣言したあと、リリスは自己申告通りに気絶した。やっぱコイツはコイツで相当狂ってるな……。しかも結局本題は言えなかった。

まあ、仕方がない。それは後にするか……。

「……ポチ、とりあえず鼻血だけは拭いておいてやれ」

「はい。リリスさん、これ大丈夫なんですかね？」

「頭がイカレてるのは元からだ」

「……それもそうですね。けど、この感じだと、今回は相当長く居そう

ですね」

「……そうだな」

ちなみに本人の自己申告通りなら、俺の細胞を見たら年単位で他のことは考えられなくなるらしい。

閑話・スカイピアでの一幕

グランドラインを旅する麦わらの一味は、アラバスタにて王下七武海の一角であるクロコダイルを打ち破り、アラバスタでの内乱を解決に導いた。

そしてアラバスタにてビビと別れ、次に辿り着いたジャヤにてモンブラン・クリケットと猿山連合軍の協力を経て伝説の空島スカイピアへとやってきた。

その際に通りがかった天国の門にて入国料として、ひとり10億エクストルを求められたが、麦わらの一行は空島の通貨を有しておらず払うことができなかった。

実際はベリーでの支払いも出来るのだが、監視官であるアマゾンが聞かれていないのにそれを教えることは無い。

結果支払わないままでも通つていいということ、天国の門を通過することになった一行だが、その際にアマゾンが一言尋ねた。

「……お前たちの中に……『パンダ』はいるかい？」

「パンダ？ いや、いねえぞ」

「そうかい」

「う、うん？」

謎の質問であり、ルフィたちは首を傾げることになったが、それ以上アマゾンがなにかを教えることは無く、麦わらの一味は特急エビにてスカイピアへ向かうこととなった。

その後スカイピアにて偶然知り合ったコニスとパガヤに連れられて、ふたりの住む家に招待されることとなった。

親切的なコニスとパガヤに、麦わらの一味は空島の特産である貝ダイアルに關して説明を受ける。

「……うん？ 俺これ持つてるぞ？ 不思議貝だろ？」

「おや？ トーンダイアル音 貝をどこ存知で？」

コニスの説明を受けてルフィがポケットからTDを取り出し、コニスに不思議そうに首を傾げる。すると、他の麦わらの面々も反応し

た。

「TDか……ここ数年で広まったものだが、元は空島のものだったのか」

「なんだそりゃ?」

TDについて知るウソップが納得した様子で頷き、知らないゾロは首を傾げる。

「音を保存しておける貝だ。俺としては、むしろルフィがTDを持っていたことに驚きだけだな」

「ああ、貫つたんだ……」

「でもこれがダイアルなら、これでウェイバーが動くとは思えないけど」

ウソップの言葉に、ルフィがどこか懐かし気に呟いたあと、ロビンがコニスに尋ねて話は他のダイアルについてのものへ移り変わっていった。

その後、神の大地。絶対に足を踏み入れてはいけないと言われるアッパードについて警告を受けた際、コニスがチョッパーを見て真剣な表情で尋ねた。

「……あの、貴方は他の方と姿が違いますが……もしかして、パンダとこののでは?」

「いや、俺はトナカイだぞ!」

「そ、そうでしたか、すみません」

「……なんだ、あの門でもそんな話を聞いたが、なんでパンダなんだ?」

天国の門に続き、ここでもなぜかパンダという言葉聞くことになって首を傾げるゾロに対し、お茶を一口飲んだあとでパガヤが説明するために口を開く。

「……アッパードの神兵から伝わったと言われていますが、正確には分かりません。神の大地であるアッパードには、ある伝説が存在すると……青海に住み、神すら滅ぼす伝説の魔獣パンダ。パンダの怒りに触れた時、このスカイピアは滅びを迎えると……そう言われています」

『いや、なんでだよ!!』

パガヤの説明に一斉に突っ込む麦わらの一味。彼らにしてみれば、なぜパンダが伝説の魔獣と呼ばれているのか意味不明だった。

ただそこに居たメンバーの中でひとり、ロビンだけはなにか腑に落ちないような……なにかが引つかかる様子の表情を浮かべていた。

・***

天国の門で入国料を支払わなかったことで不法入国者の扱いとなり、神の島アツパーヤードにて四神官の試練を受けることになる。

その際に、アツパーヤードがかつてのジャヤの一部であり黄金郷が存在することを確信し、黄金を目指す麦わらの一味。それを察知したエネルギーと四神官率いる軍団。その混乱に乗じてアツパーヤード奪還を目論む先住民シャンディアの戦士たち……三つ巴のサバイバルが始まった。

壮絶な戦いに多くの者たちが倒れる中、アツパーヤードの中核にてゾロ、ロビン、ナミの麦わらの一味。シャンディアの戦士であるワイパー。そして先代の神でもあるガン・フォール。

戦場に立つ5人の前についてに神であるエネルギーが姿を現した。神らしく余裕な態度のエネルギーに対し、ワイパーは武器である^{バインバスターカ}燃烧砲を構えながら宣言する。

「ようやく、ここに……シャンドラにたどり着いた。シャンディアの誇りを胸に……覚悟しろ神エネルギー。俺が、俺たちシャンディアの戦士が、貴様にとつての『パンダ』だ!」

「……いや、なに言ってるんだお前!」

勇ましく宣言するワイパーに思わずといった様子でゾロがツッコミを入れる。それに対し、エネルギーは心底楽し気な様子で笑みを浮かべた。

「ヤハハハ、お前がパンダだと? 愚かな……貴様らはパンダというもの、どのような存在かまるで理解しておらんとみえる。貴様ら程度の力でパンダを名乗るなど、呆れを通り越して笑えてくるわ!」

「いや、こっちもこっちで、なんであたり前みたいに普通に返してんだ!？」

ワイパーのパンダ宣言だけでも驚愕だったのに、さらには神であるエネルギーも神妙な表情を浮かべており、ガン・フォールもまた何か思い至るかのような表情……ゾロ、ナミ、ロビンの3人は、なんとも言いえない気持ちを感じていた。

「なんだこれ、俺がおかしいのか……」

「安心して、剣士さん。私と航海士さんも付いていけないわ」

「……いまばかりは、すげえ心強い」

なんでこいつらはこんなにも真剣な顔でパンダについて話しているのかと、完全に置いてけぼり状態の3人をよそに、エネルギーは静かに語り始めた。

「私はかつて一度、パンダに会ったことがある。恐ろしかった……心の底から恐怖した。神であるこの私が、必死に媚び諂うことしかできなかった。だが、それを恥だとも感じないほど……パンダとは圧倒的な存在なのだ。人の形をしてもアレは完全に別種……まさに、全てを滅ぼす魔獣よ」

「……人の形……」

重々しく告げるエネルギーの言葉……そこに含まれていた「人の形」という一言に、ロビンが考えるような表情を浮かべる。

そしてエネルギーは、ゾロたちの方に視線を向け、どこか穏やかな表情で笑みを浮かべた。

「……実はな、これでも私は不安だったし、少々恐怖もしていたのだ。青海人が来たと聞いて、あれほどの怪物が住む青海の者は、もしかして私が想像している以上に強大な力を持っているのではないかと……あのパンダが別格としても、その100分の1の力でも持った者が居れば、私は負けてしまうのではないかな……ああ、だから、本当に安心した」

「……どういう意味だ？」

「貴様たちが弱くて心から安堵したと言っているのだ。やはり、あのパンダが特別凄まじいだけで、他の青海人は、神たる私に抗えるよう

な存在ではないと確信できた。おかげで予定通り計画を進められそうだ」

そう言って笑いながら己の計画、空島を無に帰し己が限フエアーリーヴァースりない大地に辿り着き、新たな神の国を作り出す計画を語った。

そしてエネルギーは、もはや己に障害は無いと余裕な表情で、立ち向かってくる4人をその圧倒的な力で粉碎していった。

・***

スカイピアすべてを無に帰そうとする神エネルギーとの戦いは、麦わらのルフィの活躍により決着した。エネルギーは倒れ、400年の時を経て黄金の鐘は鳴り響いた。

その夜は島を上げての盛大な宴が行われ、ルフィたち麦わらの一味は早朝に大蛇の腹の中から黄金を回収して旅立った。

世話になったコニスとパガヤと共にスカイピアの下層である白海を行くゴーイングメリー号の上で、ゾロは怪訝そうな表情を浮かべて呟いた。

「いろいろ謎は解けたが……結局、あのパンダに関する謎だけは残ったな」

「そうね。単なる冗談だと思いたいけど……あの天敵であるルフィ以外には、ほぼ無敵とも言えたエネルギーが、心底恐れているように見えた。本当にそんなパンダが存在するのかしら？」

ゾロの言葉に、同様にワイパーとエネルギーの会話を聞いていたナミも釈然としない様子で呟く。そのふたりを見て、ロビンは静かに口を開いた。

「ねえ、剣士さん、航海士さん。あの時、パンダについての話の中で……人の形をしても別種と言っていたのを覚えている？」

「え？ ああ、そういうえば、そんなことを言ってたような……」
「うん？ なんの話だ？ パンダは人の形なんてしてねえぞ？」

ロビンの呟きにナミもあの時の会話を思い出し、そこにサンジや黄金にはしゃいでいた他の面々も近づいてくる。

「これは、あくまで私の推測なんだけど……もしかしてパンダっていうのは、種族のことじゃなくて……名前なんじゃないかしら？」

「……ん？　つまりアレか、ロビンちゃん。伝説の魔獣ってのは、俺たちがよく知る動物のパンダじゃなくて、パンダって名前の誰かだったことか？」

「……あくまで推測でしかないし、結局詳細は分からないままだけだね」

そう言っつて話を締めくくった後、ロビンは再び黄金についての話で盛り上がる面々を横目に、視線を空に向ける。

「……パンダ……名前……恐ろしい存在」

そこまで呟いたところで、ロビンの頭にはかつてクロコダイルと交わした言葉が思い浮かんだ。あのクロコダイルが心底恐れている様子だった相手。司法の島エニエスロビーに君臨するCP9司令長官の名……。

「……スパンダム？」

「え？　どうしたの、ロビン？」

「ああ、いえ、なんでもないわ……」

強張った表情を浮かべていたロビンにナミが不思議そうに問いかけるが、ロビンはなんでもないと苦笑しつつ首を横に振った。

(……CP9の司令長官が空島に来る理由があるとも思えないし……考えすぎ、よね)

正義の正しさを判断できるのは己のみ

エニエスロビーの特殊訓練場で、地面に座り込んで荒く息を吐くクザンにドリリンクを放り投げてやる。

「今日はここまでしておくか」

「……はあ……毎度ながら、ボッコボコ……しばらく立てねえな」

「だが、実力は確実に上がっている。いい成長だ」

「おかげさまでな……」

「ダラけきった正義」を掲げてこそいるが、クザンの本質はこれでも中々能力とは裏腹に熱い男だ。実際正義に対して疑問を抱く前は、「燃え上がる正義」を掲げていたという経緯もある。

だからだろうか……最近結構な頻度でここに来て鍛えており、グングン実力を伸ばしていると言っている。元々能力は強力で練度も高かったので、フィジカルを強化していけばさらに伸びるのも必然だろう。

そんなことを考えつつポケットから棒付きキャンデーを取り出して、包装を破って啜えると、そのタイミングで休んでいたクザンが呟くように告げた。

「……なあ、スパンダムさん。正義って、なんだと思う？」

「ずいぶん抽象的な質問だな」

「いや、なんだ……その、アレだ。こう見えて俺は昔、燃え上がる正義とかつてのを掲げてたりしたんだよ。けどなあ、なんか……分かんなくなっちゃってな。海軍大将の俺が言うことじゃねえが、海軍の、世界政府の掲げる正義が本当に正しいのか……」

おそらくクザンがいま思っているのは、かつてのオハラでの一件だろう。親友であったサウロを敵として凍らせ、サカズキによって民間人が乗った避難船が撃たれる様を見たからこそ、クザンにとっての正義は揺らいでしまった。

実際原作でもクザンは緩いように見えて、結構思い悩んだり繊細な面が見え隠れしていた。表現するのなら、ガープのような奔放さに憧

れつつも、持って生まれた気真面目さが邪魔をしている感じとでも言うべきだろう。

「まず大前提として、正義の反対が悪だと思っているなら、考えは改めることだな」

「正義の反対は、別の正義ってか……まあ、実際そうなのかもな」

「そもそも、正義なんだと仰々しい呼び方をするからややこしいだけだ。正義なんてのは、個人の持つ思想や信念の一環でしかない」

それも含めてクザンが真面目な証拠でもあるが、だからこそコイツには足りないものがあるとも思う。その辺りが、ガープとの大きな違いだろう。

「その上で、世界政府の掲げる正義が正しいかどうかという話だが、悩んだところでお前にも俺にも分かるわけがないし、考えるだけ無駄だ」

「……へ？」

「個人の思想を100%理解できるのなんて、本人以外にあり得ない。世界政府の正義も、つまるところそれを考えたやつにとつての正義だ。ある程度の共感はできたとしても、完全に理解することなんて本人以外には不可能だ。なら当然、100%理解できないものの正否の判断もできないだろう」

「……」

「そもそも、正義正義というがな。絶対正義を掲げる海軍ですら、その正義の形なんてものは曖昧だぞ？ お前がダラけきった正義を掲げるように、他の連中も好き勝手に掲げているだろう」

絶対正義を掲げつつ、個人個人で別の正義を掲げるというのもなかなか矛盾した話だが……結局は個々の解釈の問題だ。

基準となるものはあるだろうが、そこに個人の思想が入り込む以上バラバラで然るべきだ。

「……まあ、哲学的な話を語っても仕方ないか、具体的にお前に足りないものを教えてやる」

「俺に、足りないものか……聞いてみたいな」

「それは、相手の思想を尊重したうえで、それでも己の思想のために踏

みつぶす覚悟……強い我とでもいうべきものだ。例えばお前にとって心から共感できる思想を掲げる相手が居たとする。だが、いかに共感し尊重できたとしても、進む道が向かい合っているのならそれは敵だ。逆にお前にとって全く噛み合わない思想の相手であっても、進む方向が同じなら手を取り合える場面はあるだろう」

「……噛み合わなくても、進む方向が同じなら手は取り合える……か……」

なにか思うところがあるのか考えるような表情を浮かべるクザンに対し、俺はフツと笑みを浮かべつつ言葉を続ける。

「好きなように尊重すればいい。海賊の思想でも、革命軍の思想でも、それを共感して尊重するかどうかはお前の自由だ。その上で、他者からなにを言われようが、間違っていると評価されようが、これこそが俺の思想だと貫き通す強引さを持って。ガープにあってお前に無いのはその迷いない強引さだ」

「……はあ、なんつうか、ガープさんもアンタも……迷いのない人の背つてのは、妙にでっかく見えるんだよなあ」

「なら、お前もそうすればいい。ガープや俺のようになれというわけでは無い。己の思想が間違っているかもなどと考える暇があるなら、自分は正しいのだと結論付けろ。お前の思想を100%理解できるのはお前自身だけだ。つまり、思想の正否もお前自身だけが決められる……まあ、いろいろ考えて、思考に折り合いをつけてみるんだな」
「難しいなあ……けどまあ、その、アレだ。なんか少し、頭がスツキリした気がしますよ。くだらねえ話に付き合ってもらって、どうも」

どうやらクザンにとって俺の言葉はある程度自分なりの形で消化できたみたいで、先ほどより少し晴れやかな表情を浮かべていた。

そしてそのまま一気にドリンクを飲んでから立ち上がる。その目には、力強い光が宿っていた。

「……ついでに、アレだ。結構やる気出てきたんで……もうちょつとしごいてくれ」

「いいだろう。なかなか熱い目だ。燃え上がる正義に戻すか？」

「ははは、いやその辺は緩めでいいかなあと……緩さも含めて、俺なわ

けだし……それにアレだ。まあ、なんだ………忘れた。とりあえず、またいつちよよろしく」

「ああ………ならそのやる気に応えるために、もう少し力を入れて鍛えてやるか」

「………ああ………いやあ………それはちよつとお………」

「構えろ」

「ひえっ………また余計なこと言ったかもしれねえ………」

コレだけしつかりとしたやる気があるのなら、もう一段ぐらいキツくしてもいいだろう。

・***

ゴーイングメリー号の修理を行うために船大工を求めて航海を続けていた麦わらの一味は途中ロングリングランドにて、とある因縁からフォクシー海賊団とデービーバックファイトを行うこととなった。辛くも勝利を収めた麦わらの一味は、この島で知り合ったトンジツトの元に戻り、そこで海軍大将青雉こと、クザンと遭遇することになった。

大海を一瞬で凍りつかせ、遊牧民であり移動する村に置いて行かれたトンジツトを送り出したあとで、クザンは静かに麦わらの一味に牙を向いた。

挑発するようにロビンの過去を話しながら煽る。麦わらの一味に關しても所詮一時の隠れ家として利用しているだけだと………麦わらの一味にいままでは無かったものを感じていたロビンはその言葉に激昂し、ハナハナの実の能力を用いてクザンを攻撃した。

「トレインタフルール三十輪咲き!!」

「ああら、ずいぶんムキになるじゃないか。今回の隠れ家はそんなに大切か?」

「クラッ——ッ!」

「………悪いな、全体は間に合ってるのよ」

「………そんなっ………」

ハナハナの力で関節技を決めたはずだった。だが、クザンの体はまるで鋼鉄の塊の如くピクリとも動かない。ヒエヒエの実の力で防がれることは予想していたロビンだったが、まさか悪魔の実の能力無しの身体能力だけで跳ね除けられるとは思っておらず、能力を解除して怯えた様子で後ずさる。

「……別に殺す気は無かったんだが……ん〜」

そのままゆつくりとロビンに近付こうとしたクザンに向け、ゾロがロビンを守るために刀に手を伸ばしながら駆け出した……が……。

「あらら、ずいぶん威勢がいいな」

「なにっ!？」

次の瞬間、一瞬でクザンはゾロの前に移動しており、驚愕して反応が遅れたゾロを殴り飛ばす。

「ぐあっ!？」

「くそっ、あの巨体で何てスピードしてやがる……切肉シュート!」スライス

ゾロが殴り飛ばされたのを見て、瞬時にサンジが渾身の蹴りを放つが、クザンは無造作な蹴りでそれを迎え撃つ。

「ウツ、ぐおお!？」

雑な蹴りではあったが、その威力はサンジの一撃を上回っており、サンジは弾き飛ばされる。だが、その隙に駆けてきたルフィが腕を伸ばしながらクザンの懐に入り込む。

「ゴムゴムの銃弾!!」ブレット

「……やれやれ、揃いも揃って元気なことだ」

「なっ……うおっ!？」

ルフィの放った渾身の一撃をクザンは片手で軽く受け止めていた。そしてもう片方の腕を振るい、ルフィをいともたやすく殴り飛ばす。

「……そんなっ、能力も使わずに……あの3人を簡単に……」

ヒエヒエの実を使わずに一味でも戦闘力に優れる3人を軽くあしらうクザンを見て、ナミが戦慄したように呟く。

「うん? 使った方がよかったか……なら、そうするか」

そう呟きながらクザンは体勢を立て直し再び仕掛けてこようとする3人に向け、掌の上に冷気の球体を作り出して放り投げ同時に武装

硬化した片足で地面を擦りながら、炎の嵐脚を放った。

「膨大な冷気と炎——だめっ、逃げて!？」

ソレがなにを意味するか察したナミが叫ぶが、時すでに遅くルフィたち3人の前で冷気の球体が凍てつかせた空気中の水分に炎の嵐脚がぶつかり、凄まじい水蒸気爆発を引き起こした。

「冷気爆発……あの人も、面白い技を考えてくれるもんだ」

少しして水蒸気が晴れると、ボロボロになって横たわる3人の姿があり、クザンのあまりの強さに他の面々が戦慄した表情を浮かべる。

そんな中で、クザンは悠然とロビンに接近する。

「……いい仲間に巡り合ったな。だが、お前の方はどうかな？ ニコ・ロビン」

「わ、私は……」

「アイツらを本当に仲間と思ってるのか？ 名前も呼びやしねえような間柄で……結局、お前はお前ってことだろ」

「ち、違う……私はもう……」

怯えるロビンに対してクザンがゆつくりと手を伸ばそうとする。

「必殺！ 火薬星!!」

「おっと……」

そんなクザンにウソップが放った火薬星が迫るが、クザンはそれを軽く体を逸らして回避する。するとそこへ、クリマ・タクトを構えたナミと人型になったチョップパーが迫る。

「重量ゴングー！」

「……俺に勝てると思ってるわけでも、無いだろうに……分からねえな。そんなにこの女が大事か？」

「当然でしょ!」

チョップパーの拳とナミのクリマタクトを軽々と受け止めながら啖くクザンに対し、ナミがロビンを庇うように立ちながら力強く宣言する。

それだけではなく、冷気爆発アイスノヴァで倒れていた3人も、ボロボロの体で立ち上がりクザンを囲むようにして構えていた。

「……忠告しておくぞ。お前たちはこの先、この女を……ニコ・ロビン

を持て余す。いまだってそうだ。この女が居なけりや、俺はお前たちを見逃してたんだ。結果、お前ら一味はこの女のせいで全滅しかけているわけだ。比喻じゃねえぞ？ 分かっているだろ？ 俺はまだちつとも本気を出してねえ。お前ら全員がかりでも、俺には勝てねえと……それでも、この女を守るために戦うか？」

「当たり前だろうがっ!!」

「……ほう。どいつもこいつも、迷いが無い目をしてやがる。それなら……」

クザンの問いかけにルファイが叫び、他の面々もルファイに同意するように力強い目でクザンを睨みつける。重い緊迫感が流れる中で、クザンはルファイたちの目を見てフツと笑みを溢したあとで、軽く両手を上げた。

「……まあ、今日は止めにしとくか」

『……………はっ?』

「俺も別に仕事で来てるわけじゃねえしな。これ以上は、その、アレだ……面倒だ」

そう呟いたクザンから完全に殺気が消える。クザンに戦闘の意思が無いことを悟った面々も戸惑いつつ、武器を降ろし、ロビンが混乱した表情で呟く。

「どういう……つもり？」

「いや、別にちよつと確認したかったから仕掛けてみただけで、そもそも最初っからお前らを捕まえる気は無かったしな。まあ、アレだ。お前らの一味にはクロコダイルの件で海軍の尻拭いをしてもらったみたいなものだからな。その借りを返すつてことで、今回は見逃すことにするさ」

軽く告げたあと麦わらの一味に背を向けて歩き出し、途中でクザンはルファイの方を振り返りながら真剣な表情で告げる。

「……だがな、モンキー・D・ルファイ……俺が言ったことは脅しじゃねえぞ？ 今後もその女は災いと呼び込む。それでも、そいつを仲間だと呼ぶつもりなら……せいぜい強くなることだな」

「……」

「言われるまでもねえってか？ あの人に似たいい面だ……じゃあな」

ルフィの表情からガープの面影を感じて軽く微笑みながら、歩き出ししつづ懐から紙を取り出して呟く。

「このログを辿ると、次は……んん？ あららら……こりや……」

そして、なにかを呟いたと思つたらUターンして、ルフィたちの元に戻ってきた。その不思議な様子に首を傾げる面々に対して、クザンは真剣な表情で告げる。

「……いいか、ひとつ忠告しとく。お前たちが次に行く島は、司法の島 エニエスロビーに近い位置にある島だ。まあ、遭遇することはねえとは思うが……間違つても、エニエスロビーの長官には喧嘩売るんじやねえぞ？」

「……CP9司令長官……スパンダム？」

「んん？ なんだ、知ってんのか、ニコ・ロビン」

「名前だけは……」

「そうか……いいか！ マジで手を出すんじやねえぞ!! 勝ち目がねえとかってレベルじゃねえからな」

先ほどまでのゆるい様子から一変して、本気でルフィたちを心配するような表情で告げるクザンを見て、チョッパーが恐る恐るといった様子で尋ねる。

「……そ、そんなに、強いやつなのか？」

「そりやもう、完全に次元が違う。お前らがいま全員がかりで歯が立たなかった俺が、全く手も足も出ずにボコボコにされる相手だ。いや、もう、本当に……マジで毎回毎回、ボッコボコにされるわけよ。俺も大将としてのプライドがあるし、最近鍛えてて我ながらグングン実力も伸びてるから、今度こそ少しは行けるんじやないかって思うと……想像の3倍ぐらいボコボコにされて泣きそうになるからな」

「大将が手も足も出ないって、どんだけヤバイやつなのよ……」

「しかも、この口ぶり……相当痛めつけられてるぞ……」

迫真の表情で告げるクザンの言葉を聞いて、ナミとウソップが青ざめる。圧倒的に強かったクザンが、ボコボコにされるほどの相手……

絶対に遭遇したくないという気持ちでいっぱいだった。

「まあ、お前らの方から仕掛けない限りはそうそう手を出してくるよ
うな人じゃねえから、とにかくまあ喧嘩だけは売らないようにな。忠
告はしたぞ……それじゃ、改めて俺はこれで……」

最後になんとも不安になるような情報を残し、一味に苦い敗戦の記
憶を刻みつつクザンは去っていった。

運命の補填

道中で見た海列車の凄まじさに驚きつつ水の都ウォーターセブンに辿り着いた麦わらの一味。住民に教えてもらった岬へと船を停泊させた。

その際にゴーイングメリー号に想像以上にガタが来ていることを感じつつ、造船所がどこにあり、船大工をどうやって探せばいいのかを相談する。

「とりあえず、手分けして造船所を探す組と、黄金を換金してくれるところを探す組に分かれて……」

ナミが方針を決めるために話をしていると、突如岬に大音量の音楽が流れ始めた。

「なんだあ、この音楽？」

「へい、お前たち、海賊か？　アウ!!」

音楽に乗ってリズムを取りながら現れたのは、後方にふたりの女性を従えた海水パンツにアロハシャツを着た青髪の男。

「ここで会ったのは偶然だがあ、もしも、この島で略奪をしようってんなら、この島のスーパーな男が黙っちゃいねえぞ！　そうだ、俺は人呼んで、ワアオ！　んースーパー……フランキー!!」

「……なんだこの変態……」

フランキーの登場に思わずといった様子でルフィが呟き、他の面々も啞然とした表情を浮かべていた。そんな視線を気にした様子もなく、フランキーはサングラスを指で軽く押し上げながら口を開く。

「おう兄ちゃんたち、別に俺は海賊って理由だけでぶちのめそうとか考えてるわけじゃねえぞ。あくまでテメエらの目的が知りたいってだけさ」

「アニキは解体屋フランキー一家の棟梁にして、賞金稼ぎだわいなー！　」
「いわば、この島の裏の顔と言っただわいなー！　」

フランキーの言葉にモズとキウイも追随する。賞金稼ぎという言葉葉を聞いて、ゾロやサンジの表情が鋭くなり、いつでも戦闘を開始で

きるように臨戦態勢に移行する。

「おい、ルフィ。なんかヤバそうだぞ」

フランキーのただならぬ気配を感じてウソツプが青ざめながら呟く中、ルフィは静かにフランキーを見つめる。

「……それで、なにをしにきた？」

「船の修理」

「そうか、なら問題ないな」

『いいのかよ!?!』

ルフィの返答であっさり警戒を解いた様子のフランキーに他の面々がツツコミを入れるが、フランキーは特に気にした様子もなく、ゴーイングメリー号を眺める。

「……ほう、なかなかスパーな船だな。いろいろな航海をくぐり抜けて来たって面構えしてやがる。だが、修理がよくねえな、完全な素人仕事だ」

「なんだお前、分かるのか？ 船大工か？」

「ああいや、俺は解体屋だ……だがまあ、多少は造船の知識もある」

「そっか、じゃあお前造船所の場所を知らねえか？ 船を直してもらいてえんだ」

フランキーから敵意が消えたのを感じたのか、ルフィが笑顔で話しかけると、フランキーは少し複雑そうな表情を浮かべたあとでルフィの質問に答える。

「この島で造船所って言えば、ガレーラカンパニーだが……この船を修理か……ん〜どうも、船体のバランスがなあ……こいつはもしかすると……兄ちゃんたち、船底に浸水したことはあったか？」

「え？ ああ、それなら何度か……」

「やっぱりか……」

フランキーの問いかけにサンジが答えると、フランキーはなにかを考えるような表情を浮かべたあとで、突然海に飛び込んだ。

その行動に一味が首を傾げていると、少ししてフランキーは海から上がり、髪を整えてから首を横に振る。

「……駄目だ。残念だが、この船はもう修理できねえ」

「なっ!? いきなりなにを……メリー号を修理できねえって、そんな……金はちやんと……」

「そういう問題じゃねえんだ……海に潜れる奴は一度入って船底を確認してみる。船底に船首から船尾までを貫き支える竜骨って木材がある。船の中核と言っているいい木材だが、それが酷く損傷しちまっている」

慌てるウソツプに冷静に告げ、フランキーが船底を確認するように促すと麦わらの一味で泳げるものは海に入り、船底を確認した。

ルフィやチョッパーも、無理やりゾロやサンジに抱えてもらう形で船底の竜骨を目で見確認した。

「……見たな? 竜骨ってのは船の命と言っている重要なものだ。極端な話、竜骨さえ無事なら船を直すことはできる。だが、そこが駄目になればもう修理は不可能、造り直すしかねえ。つまり、この船は既に致命傷を負ってしまったんだよ」

「そんなっ……」

地面に胡坐をかいて座りながら告げるフランキーの言葉を聞いて、一味の表情が曇る。真剣な表情で語るフランキーの表情は嘘をついているようなものではなく、嫌が応にも言葉が事実であると感じることができた。

当然それで納得できるわけもなく、ルフィがフランキーを問い詰める。修理が不可能なら同じ船を造り直せないのかとも尋ねるが、フランキーの返答は非情なものだった。

「……造り直す? どれだけ似ていても、それはもう同じ船じゃねえ、別の船だ。それをやって傷つくのは、誰でもねえお前ら自身だぞ」

『……』

重い沈黙が流れる中、船長であるルフィはグツと拳を握り叫ぶように告げる。

「……信じられるか!! 今日だって快適に……お前は、ゴイングメリー号がどれだけ頑丈か知らねえから……」

「そ、そうだ! お前は解体屋なんだろう、だからワザとそんなこと言ってるんだろ!!」

「ちよつと、アンタたち……」

信じられないと叫ぶルフィと同意するウソップ……ナミがふたりを窘めようとしたが、それをフランキーが手で制した。

「いや、いい。受け入れられねえ、受け入れたくねえ気持ちは分かる。お前たちがこの船を大事に想ってることは伝わってるし、船みりや分かる。そりや、いきなり現れた解体屋の俺に、船はもう寿命だなんて言われても、納得なんてできねえだろうさ」

責めるようなルフィとウソップの言葉にも冷静に返すフランキーを見て、ルフィとウソップもバツが悪くなつて俯く。

そんなふたりと見て、フツと笑みを浮かべたあとでフランキーが口を開く。

「……だから、お前たちにひとつ提案がある。俺の見た限りではその船はもう無理だし、修理も不可能だつて意見だ。だが、お前たちもそれじゃ納得できねえだろ？ だから、俺の知り合いにこの島……いや、世界一の船大工が居るから、その人にこの船を見てもらおうつてのはどうだ。もしかしたら、なにか方法が見つかるかもしれねえ」

「世界一の船大工？」

「海列車は見たか？」

「ああ、凄かった」

「アレを最初に作り出した人つて言えば凄さも伝わるだろ」

海列車を凄かったと評するルフィの言葉に対し、どこか嬉しそうな笑みを浮かべながらフランキーは説明する。

「あの海列車パツフィン・トムを作ったのは、トムさんつて船大工でな。いまはガレーラカンパニーで、若い連中に造船技術を教えてる人だ。その人ならもしかして、俺に思いつかねえ方法を知っているかもしれねえ……だが、期待はするなよ。俺もそれなりに知識はあるが、もう修理は不可能だと思ってる。ほぼ確実に返答は変わらねえと、そう思っておけ」

「……そうか、分かった。じゃあ、その世界一の船大工に見てもらおう。ウソップもそれでいいか？」

「……ああ、その……感情的になつて、すまなかつた」

「気にすんな。船を見りやわかる。お前たちにとってこの船は、ただの船じゃなくて仲間なんだろ？ なら、その仲間がもう駄目だつて言われて、簡単には納得なんてできねえだろ」

人のいい笑みを浮かべてウソツップの肩をポンと叩きながらフランクキーは立ち上がり、ルフィたちの前でグツとポーズを決める。

「ここで会ったのもなにかの縁だ。このフランクキー様がいろいろと面倒を見てやるぜ！ お前ら、水の都は初めてだろ？ 辛気臭え面のまじや、なにもいい結果にはならねえし、ガレーラへの道すがら街も軽く案内してやるよ！」

「この街はアニキの庭みたいなものだわいな！」

・***

エニエスロビーの司法の塔で、俺はコーヒーを飲みながら一枚の報告書を見ていた。それは情報戦に強いタマから届いた情報であり、ウォーターセブン付近の海賊の動きについて記されていた。

「……海賊連合ねえ」

その報告書によると、グランドライン前半では珍しい億越えの海賊団3つが同盟を結んで、この近くに來ているらしい。

そしてその中で一番懸賞金が高い海賊は2億4千万、この付近では破格の金額と言っている存在だろう。しかも、その海賊は元海軍少将であり、真っ赤に染まった正義のコートを着て海賊活動を行っていることから、血濡れの海兵やら、レッドマリーンやらと呼ばれる存在だった。

そしてどうやら、海賊連合の目的は古代兵器の復活らしい。実力では四皇などには勝てないと理解しているため、古代兵器を用いて海賊王になろうとしているのだろうか……。

しかし、なるほど……元海軍少将であれば六式を使ってもおかしくないし、現状のルフィにとってはキツイ相手でもある。

他の2つの海賊団もそれぞれ船長は億越えであり、おそらくだがゾロやサンジが戦うことになるのではないかと思う。

そして海賊連合の狙いが古代兵器の復活と来れば、ロビンを巡る戦いになるわけで、さらにウオーターセブンには、俺から聞いてロビンの過去を知っているフランキーやアイスバーグが存在している。

つまり、これがいわゆる運命の補填ともいえる要素であり、原作におけるCP9の代わりとなる敵というわけか……。

なるほどな……正直少しほっとした。ルフィたちにワンピースを見つけて欲しい。そうじゃなくとも、ワンピースがなんなのかという情報を得たいと思っている俺にとっては、少し懸念だった。

ウオーターセブンでフランキーが仲間に入らず、サウザンドサニー号を入手できないとなると、どこかで詰むんじゃないかと少し心配していたが、これなら俺が余計な手を回さなくても、フランキーの加入とサウザンドサニー号の入手は上手くいきそうだ。

しかし、まあ、原作でもそうだったのだから当たり前ではあるのだが……アクア・ラグナが近く、俺がトムとの約束のために対応するタイミングとバツチり重なっている。

……とりあえず、アクア・ラグナに対処する時にはいつも以上に周囲に気を配るか……偶然巻き込んだりすると、俺が運命を改変できることを考えると、ルフィたちが巻き添えで死ぬ可能性すらある。

そうなるとワンピースは自分で探すしかないので、俺の中の優先順位が低い以上、正体を知るのはかなり後回しになってしまう。

まあ、とりあえずは海賊連合の動きに注意する形でいいか……しかし、ふむ、ならいつそ……。

「……ポチ」

「はいっ？」

「久しぶりに水水肉でも食べに行くか……」

トナカイも歩けば魔犬に出会う

偶然知り合ったフランキーの案内を受け、ウォーターセブンに行くルフィたち。船を完全に留守にするわけにもいかず、また最終的にはトムに船まで出向いてもらう予定なのでそれまでは一部を除き自由行動となった。

黄金の換金のための荷物持ちとしてナミに同行し、フランキーと共にガレーラカンパニーに向かうルフィとウソップ。船番をするゾロ。食材や医療品などの物資を補充するサンジ、チョッパー、ロビンという形で分かれることになった。

「……ずいぶん賑やかね」

「ああ、もうすぐアクア・ラグナだからな」

「アクア・ラグナ?」

「年に一度起こるとんでもねえ高潮だ。時には市街地すら飲み込むほどの災害で、下町の一部は過去のアクア・ラグナで沈んだところもある。このウォーターセブンは元々地盤沈下やアクア・ラグナによる水害で大きな影響を受けるわけさ」

街に詳しいフランキーによりブルを借りて水路を移動しつつ、街の賑やかな雰囲気を感じて尋ねるナミにフランキーが軽く答える。

するとその話を聞いて、ナミは不思議そうに首を傾げる。

「……そんな化け物じみた高潮が来るのに、なんだってこんなお祭りみたいな雰囲気なの?」

「ここ数年は世界政府によって水害は防がれてるからな。アクア・ラグナが運んでくるこの辺じや獲れねえ魚や、特別な塩なんかがある、アクア・ラグナの直後はちよつとした祭り状態だ……いけすかねえ野郎だが、約束はキツチリ守るんだよなあ……」

「うん?… なんか言ったか?」

「ああ、いや、なんでもねえ。ほら、あの水門エレベーターで上にいけば中心街だ。まずは換金だったな」

どこか苦虫を噛み潰したような表情で告げるフランキーに首を傾

げる一同だが、その疑問に答えることは無くフランキーは案内を続ける。

「ええ、どうせ船を見てもらいに戻るわけだし、先に換金して予算とかも把握しておいた方がいいでしょ？」

「しかし、すげえ黄金だな。お前らが略奪をするような奴じゃねえつてのは分かるが、どこでこんなもん見つけてきたんだ？」

「ああ、空島だ」

「ほうそりやまあ、スーパーな場所で見つけたもんだ」

気のいい性格のフランキーはルフィたちと相性が良いようで、短い期間に親しくなり会話も弾むようになっていた。

そのまま一同はフランキーの案内で換金を行い3億ベリーという大金を手にした上でガレーラカンパニーへと向かった。

ブルから降りて、ガレーラカンパニーの1番ドック付近にある本社の方向に向かっていると、そこに1番ドックの職長のパウリーが通りがかった。

「フランキーじゃねえか、なにしに來やがった？」

「あん？ パウリーか、なんでテメエがここに……さては、大方また借金取りから逃げてたのか」

「……うるせえ」

「テメエら、紹介しとくぜ。コイツは1番ドックの職長のひとりであるパウリーつって、腕は確かだがギャンブル狂いで借金まみれの馬鹿だ。コイツに金を見せんじゃねえぞ、盗られるからな」

「盗らねえよ!!」

どこか呆れた様子でフランキーがパウリーを紹介し、モズやキウイがパウリーのギャンブル狂いっぷりをルフィたちに説明したりと、少し賑やかになる。

すると、規則正しい足音が聞こえ、続いてどこか呆れたような声が聞こえてきた。

「ンマー……騒がしいと思えば、やっぱりお前か馬鹿ンキー。相も変わらず珍プレーな恰好しやがって」

「馬鹿バードじゃねえか、俺の1張羅にケチ付けてんじやねえよ。こ

れが俺の正装だ」

「シマー！ テメエのところにはウチからも仕事回してるんだぞ！
その棟梁のお前が、海パン姿でチョロチョロしてたら、ウチの品位
にも関わるだろうが!!」

「なにが品位だ、そんなお上品な商売なんざしてねえだろうが！ だ
いたいなんだそのネズミは？」

「さつき拾った。名前は……ティラノサウルスだ」

「恐竜じゃねえか!?!」

いきなり喧嘩を始めるふたりにルファイたちが唾然としているが、声
を聞いて寄ってきた他の職人やパウリーは、「またか」というような表
情を浮かべており、このやり取りはいつものことのようなだった。

その後落ち着いたアイスバーグは、ルファイたちと軽く自己紹介を
行つたあとで尋ねる。

「それで、今日はどうした？」

「お前には用はねえよ。トムさんにちよつとコイツ等の船を見てもら
おうと思つてな」

「トムさんに？」

「ああ、コイツ等の船はかなり古い型……キャラベルなんだが、いい面
構えの船なんだよ」

「ほう、お前がそこまで言うほどか……」

「ああ、だが、竜骨に大きな亀裂がある。俺の見立てでは修理は不可能
だが、トムさんならなんか方法を知ってるかもしれないねえと思つてな」

そう言つて説明するフランキーの言葉を聞き、アイスバーグは胸ポ
ケットに入れたネズミを撫でながら少し考えてから口を開く。

「……シマー……お前が見て駄目だと判断したなら、誰が見ても同じ
だとは思うが」

「そう簡単に割り切れるもんでもねえんだよ。一度見りゃ分かるが、
コイツらにとつてあの船は、ただの船じゃなくて共に旅をしてきた仲
間なんだよ。僅かな可能性でも縋りてえって、思つちまうぐらいに大
切な……」

「……そんな船なら俺も一目見てみてえもんだな。話は分かつた。ト

ムさんなら、3番ドックで若い連中を指導してる」

「そうか、分かったぜ。それじゃ、邪魔したな。よし行くぞ」

アイスバーグからトムの居場所を聞いて、そちらに向かって移動を始めるフランキー。その背に向かって、アイスバーグは、静かに問いかけた。

「……お前は、まだ、船は作らねえのか、フランキー」

「……」

「お前のところの連中にも造船技術は教えたりしてるんだろ？」

「まあ、解体するにしても技術があるにこしたことはねえからな。テメエが余計なお節介するせいで、仕事も多くて雑な作業も出来ねえしな」

「だが、自分で船は作らないと……いい加減、自分を許してやってもいいんじゃないか？」

「トムさんもそう言うってくれてるがな……だが、まだ、そういう気にはなれねえよ」

「……そうか」

ルフィたちを連れて立ち去るフランキーの背中を、アイスバーグは少し寂し気な表情で見つめていた。

・***

一方その頃、食材の買い出しに出たサンジ、チョッパー、ロビンの3人は様々な食材を吟味しつつ、店員に話を聞いていた。

「……アクア・ラグナ？　なんだそりや、それと食材が関係あるのか？」

「間接的にな。この島は以前までアクア・ラグナって高潮の水害に悩まされていたんだが、世界政府の新技术とやらで対策してくれたみたいで、去年も一昨年もこの街にアクア・ラグナは届いてねえ」

「街に届くような高潮をなんとかしちゃうのか？　すげえな！」

「……けど、いったいどうやって？　高潮なんてどうこうできるものなのかしら？」

訪れた店の店員に珍しい食材や、この島独自のものが無いか尋ねてみたところ、アクア・ラグナの話になり3人は不思議そうに首を傾げる。

「いや、俺も聞いた程度の話だが……『海の大穴』が出来るらしい」

「海の大穴？」

「ああ、海に馬鹿でかい穴が開いてな。そこにアクア・ラグナの海水が流れ込むことで、ここまで高潮が届かねえらしいんだ。その海の大穴がいくつも出来るってんで、アクア・ラグナの来る夜は海に出ることが禁じられてる」

「海に穴をあける？ いったいどうすりやそんなことができるんだ」

「さあ？ そいつは俺にも分からねえが、とにかくおかげでこの街は水害の影響を受けずに済んで助かってるわけだ……それで、どうしてそれが食材に繋がるかって言うと、その海の大穴がアクア・ラグナの海水で塞がった後、一時その海域では普段は見たこともねえような魚が獲れるようになる。アクア・ラグナが遠い海の魚たちを運んできてるんじゃないかって噂だ。それと特別な塩だな」

高潮を防ぐような大穴を開ける方法など分らないと、早々に店員は海の大穴に関する説明を終え、続けて最初の質問である珍しい食材についての話に移行した。

サンジたちも気にはなるものの、尋ねたところで答えが得られるとも思えないので、そのまま店主の話聞くことにした。

「……珍しい魚に、特別な塩？」

「ああ、塩に関してはバンバン爺って、料理屋をやってるじいさんが広めたらしいが、アクア・ラグナで運ばれてくる海水から作った塩は、他の塩とは旨味が全然違うのさ。おかげでアクア・ラグナ後に採れる塩はこの島の特産品のひとつになった」

「へえ、そのバンバン爺ってのは腕のいい料理人なのか？」

「ああ、酔いどれ爺さんに見えるが、腕は確かさ……興味があるなら店の場所を教えてやるから、一度行ってみるといい。アクア・ラグナの塩に関しては、ここじゃなくて調味料を取り扱ってる店に行きな」

その後もいくつかの食材に関して話を聞いたが、やはりアクア・ラ

グナの後の方が珍しい食材は手に入りやすいとのことで、いまは最低限の食材の買い出しだけをして、本格的に買い込むのはアクア・ラグナ後にしようということに決まった。

いろいろ教えてくれた店員に礼を言ったあと、サンジたちは再び街を歩きます。

「教えてもらった店には、またあとで行くとして……食材に関しては大量に買う必要は無くなったから、ロビンちゃんやチョツパーが買いたいものがあるなら、そつちも見てみるか?」

「それなら俺、医学書が買いたいぞ!」

「いいんじゃないかしら、私もよい本があれば買いたいし、本屋に行ってみましようか」

結果的に本格的な食材の調達が後日となったことで少し余裕ができたため、3人は本屋を目指すことに決めた。新しい医学書を読むのが楽しみ中の、チョツパーははしゃいだ様子でトナカイの姿で早足で進む。

「おいおい、チョツパーあんまり急ぐとあぶねえぞ」

「ふふ……船医さんは、元気ね」

「ああ、ロビンちゃん。あの大将の言葉なんざ気にすることはねえつて、呼び方なんて自由で構やしねえんだ」

「……ええ、ありがとう」

はしゃぐチョツパーに微笑みつつ、船医さんと呼ぶ際に少し迷うような表情を浮かべたロビンに気付き、サンジがさりげなくフオローを入れる。

その気遣いに嬉しそうに笑みを浮かべながら、ロビンが前方に行くチョツパーに視線を向けると……。

「早く! 早く本屋に行こう!」

「ツ!? 船医さん! 前っ! 水路が!!」

「えっ、あつ……」

チョツパーの進む先は水路の影響か、少し道が狭くなっていたのだが、後ろを振り返りながら早足で進んでいたチョツパーは気付かず、足を滑らせる。

チョッパ―は悪魔の實の能力者であり、そのまま水路に落ちてしまつては大変だ。ロビンが咄嗟に悪魔の實の能力で助けようと構えたが、それより早くスツと伸びてきた手が水路に落ちかけていたチョッパ―を掴み、その体を引き上げた。

「……大丈夫ですか、喋るトナカイさん。前を見て歩いてないと危ないですよ」

「あ、ああ、ありがとう……助かった」

「怪我がなかったようなら、なによりです」

「チョッパ―！　大丈夫か……悪いな、チョッパ―を助けてくれて礼を言うよ、お嬢さん」

「いえいえ、どうぞお気になさらず」

チョッパ―を助けてくれた女性は優し気に微笑みながら気にするなど告げて、チラリとロビンの方に視線を向ける。

サンジとチョッパ―も釣られてロビンの方を振り返ると、ロビンは目を見開き明らかに動揺した表情を浮かべていた。

「……ロビンちゃん、どうした？」

「……その恰好……貴女……世界政府の……」

「ええ、確かに私は世界政府の役人ですが、別に貴女を捕える気はありませんのでご心配なく……隊長からは特に指示を受けていませんので」

そう言つてロビンに微笑む女性……チエルシーから感じるただならぬ気配に、サンジも表情を硬くするが、本当に戦闘などをする気は無いようで、戦意等は感じなかった。

だが、その身から感じる力は凄まじく、先ほどまではチョッパ―のことが気がかりですぐには気付かなかつたサンジも思わず息を飲む。

「……麗しのレディ。アンタ、いったい何者だ……」

「私ですか、私はポーラ・チエルシー……司法の島工ニエスロビーの長官補佐を務めているものです。さて、それでは隊長を待たせてありますので、私はこれで失礼します。縁があれば、またどこかで……」

そう言つて優し気な笑みを浮かべたあと、チエルシーは悠然と歩いて3人の前から去つていった。そしてその背が完全に見えなくなつ

その後で、サンジは深く息を吐いた。

「……おいおい、マジかよ。あんなに可愛らしいレディだったのに……とんでもねえ気配だ。もしかして、あの大将より強いんじゃないかねえか……」

「そ、そんなになのか……確かに、なんか凄い感じがしたぞ」

「……まさか……彼女は……噂に聞く……魔^{ヘルハウンド}犬……だとしたら……来ているの？ この街に……」

「お、おい、ロビン!? 大丈夫か、顔が真っ青だぞ!」

「え、ええ、ごめんなさい。大丈夫よ」

青ざめた表情を浮かべていたロビンだったが、心配そうにチョッパーが話しかけてきたことで、安心させるように微笑みを浮かべた。

水の都での思わぬ遭遇

フランキーの案内でトムの元を訪れ、事情を説明するとトムは快く応じてくれ、岬に移動してゴーイングメリー号の様子を見てくれることになった。

食材を買いに行っていたサンジたちも戻り、麦わらの一味全員が固唾をのんで見守る中、トムは難しい表情で首を横に振った。

「……残念だが、ワシもフランキーと同じ意見だ。この船の修理は不可能だ」

『……』

一同に重い沈黙が訪れる。覚悟はしていた。事前にフランキーもまず間違いなく同じ結論だと語っていたし、こういわれる可能性が高いことは理解していたつもりだった。

だが、理解していたからといって納得して受け入れられるかどうかは別問題だ。特にゴーイングメリー号に思い入れの強いウソップは、拳を握り締め唇を強く噛み、絞り出すように告げる。

「……そんなわけがねえ、メリー号がこんなところで駄目になるはずがねえ！」

「ウソップ……」

「信じるもんか！ お前らが無理だっていうなら、俺が自分で直す。いままでだってそうやって……」

認められないと叫ぶウソップに対し、トムはどこか堂々とした表情で口を開く。

「……なあ、お前さん。もっと前から、気付いてたんじゃねえか？ この船が限界だって」

「ッ!？」

トムの言葉を聞き、ウソップは驚愕したような表情で一步後ずさる。そんなウソップを見て、トムはフツと微笑む。そしてゴーイングメリー号に軽く触れながら言葉を続けた。

「フランキーの言う通り、この船はドンといい船だ。造りや歴史の話

じゃねえ、誰を乗せてどんな旅をしてきたか……それが船の面構えを作る。ここまで立派な面のいい船はワシも数えるぐらいにしか目にすることが無いほどだ。修理はたしかに素人仕事だが、船への愛情をドンと感じる。コレをやったのはお前さんだろ？」

「……ああ」

「お前さんたちはこの船を愛し、この船もお前さんたちを愛している。その中でも一番この船への思いが強いお前さんが、たとえ船大工じゃなくとも、船の限界に気付いてねえわけがねえ」

見透かすようなトムという言葉を聞き、ウソツプはガツクリと力を抜いたように項垂れて地面に座り込んだ。

「……ウソツプ、アンタ……」

「……ああ、分かった。分かったんだ……もう、メリー号が限界だつて……」

呟くナミや仲間たちに対し、ウソツプはポツポツと語り始めた。空島にてウソツプが見た謎の存在について、その時に聞いた声について……。

そして、トムやフランキーの口からそれがクラブウターマンと呼ばれる船の化身であり、本当に大切に乘られた船にのみ宿る存在であると教えられた。

「……船を見た上でのワシの推測だがな。この船はお前さんたちの手に渡るまでは、あまり航海に出ることも少なかったんじゃないかと思う。だからこそ、お前さんたちに全力で乗ってもらえて、いろんな航海を経験できて……一緒に冒険が出来て、この船は本当に幸せだったんだろうさ」

「……メリー」

「だがな、そんな幸せな船をお前さんたち、最後の最後に不幸にしちまうつもりか？」

「俺たちが、メリーを不幸に？」

「ああ、この船はもう航海には耐えられねえ。奇跡が起きれば次の島にくらいはたどり着けるかもしれねえが、それ以上は絶対に無理だ。クラブウターマンとして現れるほど、お前さんたちを愛しとるこの船

がお前さんたちを次の岸まで運べなかった時……どれだけ無念か、考えてやれ」

優しく語り掛けるように話すトムの言葉を聞き、ウソツプはしばらく俯いたままで沈黙した。そしてしばしの時のあとで目を開き、真剣な表情でトムに告げた。

「……トムさん、教えてくれ。この先、メリー号を……限界を迎えた俺たちの仲間を、どうしてやればいい？」

「そうだな、ワシが提示できるのは3つ……まず、保管。幸いこの街には船を保管するような場所はいくらでもある。金さえ積みばどうにでもなる。だが、これはオススメしねえ。お前さんたちが旅を続けるなら、結局別れることには変わらねえし、航海も出来ずただ閉じ込められると考えりや、船にとっても不憫だ」

覚悟を決めた目で尋ねてくるウソツプに対し、トムは考え付く方法をいくつか提案する。

「次に解体。この方法の利点としては、無事な木材なんかは新しい船に利用できるってことだな。ここに居るフランキーは腕がいいし、頼めば綺麗に解体してくれるだろう。そして最後に、最近はあんまりやらなくなったが……昔の船乗りは、大事な船が寿命を迎えた時、海に帰し弔うってことをやったんだ。いままで世話になった船に感謝と別れを伝える儀式だな。それをやる方法もある」

そこで一度言葉を区切った後、トムは麦わらの一味の面々を見渡しながら口を開く。

「全員で話し合って決めるといい。幸いこの船も、次の航海には耐えられねえが、浮かべてるだけで今日明日に壊れるってわけじゃねえかな。話し合う時間はある。ただし、いまは話し合うんじゃない」

「どうしてだ？」

「全員ワシの話を聞いて少なからずショックを受けている。思考が後ろ向きになっている状態で話し合ってもいい結果にはならん。街に出たり、無理やりにも気分転換して気持ちを切り替えてから相談することだ」

いまのままの状態では話し合えば意見の違いで激しい喧嘩になった

りする可能性もあり、トムは一度それぞれが思考を纏めるための時間を取るべきだと説明した。

一同もそれには納得して、最低でも1日は置いてから話し合いをするという方向で決まった。すると、そんな面々に対し、フランキーが努めて明るい声で告げる。

「まあ、アクア・ラグナの対処のため、政府からの通達で今日明日は出航禁止になるしな。街は賑やかだから、気分転換もしやすいだろうさ」

「アクア・ラグナの対処……ああ、海に大穴が空くとか」

「大穴？ 青い流星じゃなくて？」

アクア・ラグナと聞き、食材の調達の際にその話を聞いていたサンジが呟くが、それに対してナミが不思議そうに首を傾げながら告げた。

「うん？ ナミさん、青い流星って何の話だ？ 俺たちが聞いた話だと、海に大穴が空いて海水が流れ込むって話だったけど……」

「換金所で少し聞いたんだけど、アクア・ラグナの来る日の夜には海から雲を貫いてのぼる青い流星が現れて、それを見られたら幸せになれるって話があるって聞いたけど？」

どうにもサンジたちとナミが聞いた話が違い首を傾げていたが、それでナミはふとトムとフランキーがなんとも言えない複雑な表情を浮かべているのを見た。

「……なんでふたりは、そんな複雑そうな顔を？」

「ああ、いや、ちよつと嫌なことを思い出してな……そつちの兄ちゃんに聞いた話も、お前が聞いた話もどつちもここ数年広まつてる話だ。まあ、実際に夜に海を見たら、運が良ければ流星が見えるかもしれないねえな……」

「たつはつはつ、まあ、ウォーターセブンにはいろんなもんがあるから、楽しんでみるといい。海列車で繋がってる島で仮装パーティをしていたりと、なにかとこの時期は賑やかだからな」

ナミの質問にフランキーが少々曖昧に答えたあと、トムが話を締めくくる。

「それじゃ、ワシは造船所に戻るとする」

「ああ、トムさん、送ってくぜ……お前たちも、まずはトムさんの言う通りしつかり気分転換をしろ。俺の家……フランキーハウスの場所を覚えておいてやるから、なにか困ったら訪ねてこい」

「ああ、いろいろありがとうな、フランキー」

「なに、気にすんな。俺がお前らを気に入ったから世話を焼いただけさ……じゃあな！」

お礼をいうルフィにグッとサムズアップをしたあと、トムとフランキーは去っていき、残された麦わらの一味は今後の方針を少し決めることにした。

とりあえずトムの言うように気分転換をすることに決め、ナミが各自にお小遣いを渡し、一味はそれぞれ思い思いにウォーターセブンの街へ向かった。

そして、ゴーイングメリー号の停泊している岬からガレーラカンパニーに向けて移動しつつ、フランキーは頭をかきながら呟く。

「しつかし、青い流星ねえ……」

「たっはっはっ！ 豪快なことをするもんだ！」

「本当に聞きたびに複雑な気持ちになるぜ。誰が信じるってんだ……流星の正体が、あのバケモノが『ぶん投げた海水』だって……」

「ありや、魚人柔術や人魚柔術の技だな。規模はまるで違うが……なにせ、海に大穴が開くほどの海水を、雲を貫くほど遠方に投げてるわけだからな」

「アレだろ？ 予め指定した周囲に島とかがない海域に投げてるんだろ？ 何百キロあるんだよ……」

「ああ、事前にその周囲には政府によって立ち入り禁止の布告もされるらしいが……その場所にピンポイントで飛ばすんだから、とんでもねえ」

フランキーの言葉にトムも同意する。以前トムが海列車を増やす見返りに要求したアクアラグナの対処に関して、スパンダムは超遠方に大量の海水を投げ飛ばすという凄まじい力技で解決してしまった。

原理としては魚人柔術の水心・海流一本背負いに近いのだが、とに

かくスパンダム能力が異常すぎるため規模が凄まじく、海には大穴が空き、空には青い流星が飛ぶといった光景になる。

「……マジである野郎、古代兵器要らねえじゃねえか。あの量の海水をピンポイントで超遠距離に落とせるってだけで、十分兵器みたいなもんだぞ」

「たっはっは……確かに」

もちろんそれを住民たちは知らず、事実を知るふたりとアイスバーグも、相手が相手だけに迂闊に口外もできないので、その話を聞くと毎回なんとも言えない表情になるのだった。

・***

開けたスペースに設置した金網の上でジャケットを脱いでエプロンを身に着けたポチが肉を焼いており、俺はジャケットを椅子にかけて肉が焼けるのを待っていた。

この場所はバーベキューを行う設備を提供してくれる場所で、食材を持ち込むことでバーベキューを楽しむことができる。せつかなので水水肉以外にもいろいろな食材を買って、こうしてバーベキューを楽しんでいる最中というわけだ。

水の都だけあって景色がいいし、なかなかどうして悪くない。とりあえず明日にはアクアラグナへの対処があるが、今日に関しては休暇なので気楽なものである。

そんなことを考えていると……不意に見聞色の未来視が面白い光景を映した。なるほど、これはなかなか面白いことになりそうだ。

思わず口元に笑みが浮かぶのを実感しながら、俺はポチに声をかける。

「ポチ、悪いが肉を追加で大量に買ってきてくれ。金網の上はそのままでもいい」

「了解しました」

そう指示を出して、ポチが追加の肉を買うためにエプロンを脱いで姿を消した直後、元気な声が聞こえてきた。

「すごいいい匂いだ！　ここが、飯屋か!!」

「……いや、残念ながらここは設備は提供してくれるが、食材は持ち込みだ」

「ええ!?　そ、そうなのか……」

俺の座っていた場所のすぐ近くに現れたその存在に対し、俺は椅子に座ったままで声をかける。

「だが、こうして会えたのもなにかの縁だ。よければ、食べていくか？」

まさかの遭遇ではあるが、これはこれで……楽しくなってきたものだ。

「なあ……『モンキー・D・ルフィ』」

目の前に立つ麦わら帽子を被った男に向けて、俺は穏やかに微笑みかけた。

ルフィと共にバーベキュー

偶然の遭遇、そして当たり前のように名前を呼んだ俺に対し、ルフィは首を傾げる。

「……誰だお前？　なんで俺の名前を知ってるんだ？」

「ああ、知り合いから聞いてな。それ以上にお前は手配書が回ってるお尋ね者なんだから、知っていても不思議じゃないだろう。まあ、その辺りは食べながら話そう。座るといい。ほら、この辺りの肉なんか食べごろだぞ」

「食っていいのか!?　お前、いいやつだな！」

基本的に肉が大好きなルフィは俺の言葉に従って対面の席に座る。そんなルフィの前に金網の上から、焼き加減のいい肉を取って皿に載せた上で渡してやる。

もちろんルフィが大食いなのも分かった上で多めに載せ、新しい肉を金網の上に載せるのも忘れない。

ルフィがその肉を美味そうに食べ始めると、そのタイミングでポチが大量の肉を持って戻ってきた。流星に仕事が早い。

「ああ、紹介しておく。彼女はチエルシー、俺の補佐だ」

「そうか、よろしくな」

「ええ、こちらこそ」

「追加の肉を買ってこさせたからな、好きなだけ食べるといい」

「なに!?　腹一杯食ってもいいのか？」

「ああ、もちろんだ」

「お前、本当にいいやつだな！　ありがとう!!」

微笑みを浮かべつつポチに目配せをして、ポチが肉を焼き始めるのを横目に見ながら、肉を食べるルフィに声をかける。

「それで、話を戻すが、お前のことを聞いた知り合いというのが複数いてな。まずは、海軍のガープ中将」

「げっ!?　じ、じーちゃんの知り合い……海兵なのか？」

「いや、同じ世界政府所属ではあるが海兵じゃない。ガープ中将とも

以前少し話した程度で、それほどよく会うわけでもないしな」

やはりガープに対する恐れはあるようで、一瞬表情を硬くしたルフィだったがすぐに安心した様子で肉を食べ始めた。

まあ、別に祖父を嫌っているとかではないのだろうが、なんだかんだで苦手意識があるのだろうか。

「次に、赤髪のシャンクスだな」

「シャンクス？ お前、シャンクスのこと知ってんのか？」

「ああ、とはいえシャンクスともそれほど頻繁に会うわけでは無い。お前の話をよく聞くのはもうひとり……ウタからだな」

「……ウタ」

おや？ これは少し想像とは違った反応だ。ガープやシャンクスと違い、ウタの名前を聞いた時の反応に若干ではあるが「会いたい」という気持ちが見え隠れしていた。

本人から聞いた話だが、ウタはフリーシャ村のルフィ宛に手紙とTDを送ったらしく、それが影響しているのかもしれないがFILMRE Dで描かれていたよりも、少しウタに対して関心が強いように思える。

「ウタの方はたまに会う知り合いだが、お前の手配書が出た時なんかは嬉しそうに話してたよ。幼馴染であることとか、自分が183連勝していることとかな」

「違う！ 俺が183連勝中だ！」

「それを俺に言っても仕方ないだろう……まあ、ウタは現在エレジアという国がある島で歌手活動をしている。もし航海の途中で立ち寄ることがあれば会いに行くといい。きつと喜ぶ」

「ああ」

しかし、ウタのこともそうではあるが、それ以上に少しルフィの様子で気になる部分があった。だが、それにツッコむのはいまではない。何事もタイミングというのは重要だ。

そのまましばらく、肉を食べながらルフィと雑談をした。シャンクスやウタの話も含めて、会話はそれなりに弾み、場の空気がよくなってきたタイミングで後回しにしておいた話題に触れることにした。

「ところで、肉は美味しいか？」

「ああ、すげえうめえ！ この水水肉つてのも滅茶苦茶うめえな！」

「そうか、気に入ったならなによりだ。だが、その美味しい肉を食べている割に……時々なにか浮かない顔をしているが？」

「……」

ルフィは基本的に前向きで切り替えも早い人物であり、ひとつのことに深く思い悩むということは少ない。だがもちろん例外も存在する。

原作においても兄であるエースが死んだときにはすぐには立ち直れないほどの精神的なダメージを受けていたし、それ以外でも少ないとはいえ思い悩む場面はあった。

そして、このウォーターセブンにおいても、珍しく深く悩み、仲間との絆に亀裂が入るほどの事態に発展した出来事があった。おそらくそれが関係しているのだろう。

「……話してみるといい。そういう悩みというのは、時にまったくの第三者に話すと解決の糸口が見つかったりするものだ」

ここまでのやり取りで俺をある程度信用していたこともあって、俺の言葉を聞いたルフィはポツポツと話し始めた。

ゴイングメリー号が限界であること、船をどうするかを明日仲間たちと話し合うこと、自分が船長としてしっかり決断をしなければならぬことなどを……そしてなにより、深く悲しむウソップにどう接していいかという悩み。

一通りの話を聞き終えた俺は、一度頷いてから口を開く。

「……なるほどな。船長として責任をもつて決断する。仲間を気遣う……それ自体は立派なことだ。だが、時にそういう気遣いが逆効果になる場合もある」

「……そうなのか？」

「ああ、もちろんそのウソップという仲間も辛いだろうが、お前だって最初からその船と一緒に旅をしてきたんだろ？ 同じぐらい辛い筈だし、いろいろと後悔もあるだろう。あの時ああしていれば、もっと丁寧に扱っていればと……」

俺の言葉に思うところがあつたのか、ルフィは少し顔を俯かせる。俺は軽くドリンドリンドリで喉を潤わしてから、言葉が続ける。

「……船のことは全て決め、強引にでも仲間を引っ張っていく、なにもかも己のコントロール下に置こうとする船長も確かに存在するし、別にそれが間違いとは言わない。だが、お前はひとりでアレコレするタイプの船長ではないだろうか？」

「ああ、俺は仲間が居ねえとなんもできねえ」

「なら、お前がすべきことは単純だ。お前がすべきなのは、そのウソップを気遣つて気丈に振舞うことじゃなくて……『一緒に泣いてやる』ことだ」

「一緒に……泣く？」

「ああ、そのウソップはいま不安なんだろう。こんな気持ちなのは自分だけじゃないのかとか、仲間たちは既に新しい船に乗り換えることしか考えてないんじゃないかとか、そうではないと頭では理解しつつも感情を制御できていないはずだ」

これもおそらく間違いは無いだろう。原作においてもウソップはゴイングメリー号の限界に気付いていながら、それでも受け入れることができなかった。

だがそれ以上に、ルフィが早々に新しい船に乗り換えるという決断をしたことに怒っているような雰囲気だつた。もちろんルフィの判断は正しいし、辛いであろうウソップのために努めて明るく振舞おうとしていたのは理解できる。

だが、ルフィはそこで船長として感情を抑えるべきではなかつた。「だからウソップに必要なのは、気遣いではなく共感だ。お前だつて本当は船を乗り換えたくない、悲しく悔しいって気持ちを話してやれ。仲間を、ウソップを大切に思うのなら、お前の弱さを見せてやるべきだ。難しく考える必要はない。じっくり仲間たちと思ひ出話でもすればいい。その船での旅を思い返して、語り合えば……自然と弱さも顔を出さうだろう」

「……」

俺の言葉を聞いてルフィは真剣な表情で考え込む。ルフィは単純

な思考をしてこそはいるが、決して考えられない人物ではない。考えるべき時はしつかり考え、最善を選ぶことも出来る。

なによりもルフイは己が間違っているということを受け入れられる人物であり、こうした他者からのアドバイスを認められる強さもある。

少し考えたあとでルフイはスツと椅子から立ち上がった。その目にはもう迷いの感情は見えなくなっている。

「……ありがとな。おかげで、どうすればいいか分かった」

「そうか、それならなによりだ……ポチ、余った肉を渡してやれ」

「はい」

「貰っていいのか？」

「ああ、かなりの量があるし、仲間たちと一緒に食べるといい。海賊が過去を語るなら、宴ぐらいの場は必要だろう。仲間内で宴でも開いて思い出話に花を咲かせるといい」

「ししし、お前、本当にいいやつだな……ありがとう、貰っていく」

ポチが用意した大量の肉……俺が大量と指示を出したせいで、相当の量を買ってきていたので、麦わらの一味全員で食べても余るぐらいの量の肉を大きな袋に入れてルフイに渡す。

巨大な袋を担ぐように持ちながら、ルフイは明るい表情でお礼を口にしたあとで、ふと思いついたように告げた。

「……あつ、そういえばお前の名前をまだ聞いてねえ」

「そういえば、名乗ってなかったな。俺の名前はスパンダムだ」

「スパンダ……うん？ あれ？ どつかで聞いたことがあるような

……うん」

「呼びにくいならパンダでもいいぞ、そう呼ぶ奴もいるからな」

「なんだそれ、面白れえな！ パンダ……うん？ あつ、思い出した

!？」

「うん？」

突然なにかに気付いたように叫んだルフイの言葉に首を傾げる。

パンダという言葉聞いて思い出す？ なにをだ？

「アレだ！ 空島で噂になってた伝説の魔獣パンダって、お前のこと

だろ！」

「空島で噂？ 伝説の魔獣？ なんの話だ？」

「空島で青海に伝説の魔獣パンダが居るって噂があったし、それ以外にもゾロやロビンが言ってたんだ。エネルって奴がいたんだけど、そいつが滅茶苦茶怖がつてるつええパンダが居るって。それお前のことじゃねえか？」

「……ふむ。たしかに以前空島には行ったし、エネル……かどうかはわからないが、神と名乗るやつには会ったな。少し話した程度だが」
……空島で魔獣として伝説になっている？ エネルが恐れているというのはまだ分かるとして、魔獣パンダの噂とはいったい。

そこまで考えたところでふと思いついた。そういえば、空島に行つた際に俺はエネルに対して名乗っていなかったが、一緒に居たりリスが俺をパンダと呼んでいた。

だから、エネルはそのパンダというのが俺の名前だと思つたわけだ。そして配下の神官たちに警戒するように伝えたりした。

だがパンダと聞いて普通に連想するのは動物の方で、それが変な伝わり方をしたせいで青海にはそういう魔獣が住むつてことになったのかもしれない……うん、まあ……ちゃんと名乗らなかった俺が悪い。リリスを責めたりするのはお門違いだ。

「やつぱりなあ。けど、お前なら伝説になるのも納得だ」

「そう思うか？」

「ああ、お前すつげえ強そうだし……前に会った海軍大将よりも、じいちゃんよりも、もつとずつとつええ……こんな滅茶苦茶につええ奴は初めて見た」

そう言つて笑うルフィに悪感情は見えず、単純にこちらを賞賛している感じだった。おそらくここまでやり取りで「いい奴」判定を受けたためだろう。ルフィはあまり海兵だとか役人だとかは関係なく、好きなやつは好き、嫌いなやつは嫌いってスタンスだしな。

「それじゃ、いろいろありがとうな、パンダ」

「ああ、気にするな。また縁があればどこかで会おう」

「おう！ それじゃ、またな〜！」

大きな荷物を担いで人好きのする明るい笑顔で手を振って去っていくルフィを、俺も軽く手を振って見送った。そしてルフィが完全に見えなくなってから、深く笑みを浮かべる。

「……隊長、楽しそうですね？」

「ああ、適当に振ったサイコロが、思わぬいい目を出してくれたから……さて、仕切り直した。ポチ、お前も座れ」

「はいー」

ああ、本当に思わぬ収穫だった。ここで、このタイミングでルフィに会えたのはかなり素晴らしい偶然だった。しかも、他の要素も最高と言つていい。

本当に……魂の情報を見て行う能力再現。直接触れて魔力を込めれば早いのだが、触れずに行うとなると俺からかなり近く、それこそ数メートル以内の距離に長い時間留まっておいてもらわなければできない。

だから、今回の状況は最高だった。バーベキューという肉を焼いて食べるという性質上、ある程度時間がかかる食事方法。さらに共通の知り合いの話題での雑談。ルフィが珍しく悩みを抱えていたことこちらに相談してアドバイスを受ける。

あまり落ち着きがあるとは言えないルフィが、至近距離にジツと長時間留まっついてくれるシチュエーションなど、そうそうない。

おかげで直接触れて違和感などを持たれることもなく、能力をコピーすることができた。戦闘面ではそれほど意味はないが、主人公の持つ能力なので今度どこかの場面で、有益に働く可能性は十分にあるし、持つておいて損はない。

できれば神に関わる類の能力は、一通りコピーしておきたいところではあるが……不明な部分も多いし、とりあえずいまは二カの能力を魔力で再現できるようになったという、棚ぼたともいえる結果に素直に喜んでおこう。

怪物は気ままに傍観する

ワンピースの世界において神の名が付いている能力は、考えるまでもなく重要な要素だと思う。ルフィの太陽神ニカの他に、黒ひげの能力やバギーの能力がそうなんじゃないかと考察されていたりもした。

バギーの能力に関しては諸説あるが、大きな要因はインペルダウン編でのモノローグだ。インペルダウン編では、一部の能力者に関してモノローグで能力説明を行っていた。

その説明において、ボン・クレーヤクロコダイルはそれぞれ「マネマネの実」「スナスナの実」の能力解説と書かれていたが、バギーの能力解説の部分だけは「バラバラ」の能力解説と「実」の一文字が入っておらず、ルフィのゴムゴムの実と同じくフェイクネームではないかと考察されていたりした。

まあ、気になりはするがバギーとの接点は本当にはないし、インペルダウン編が発生しなければ檻の中にいたままだろうし、機会があれば秘密裏に面会でもして能力をコピーするのもいいかもしれない。

そんなことをぼんやりと考えつつ、とある建物の屋根の上で棒付きキャンディーを啜えながら見聞色の覇気を広げる。

俺と話したあとでルフィはアドバイスを実行し、仲間と涙ながらにゴーイングメリー号の思い出について語り合った様子で、ウソツプが一時離脱するようなことは無かった。

だが、運命の補填となり得る戦いはやはり発生する様子で、翌日チョッパーとロビンが街に出ている際に海賊連合の襲撃を受けた。

応戦するチョッパーとロビンではあったが、なんの能力かはわからないが、相手をキューブ状にして捕らえる悪魔の実の能力によってロビンが捕らえられてしまう。

チョッパーが必死に救出しようとするも逃げられ、ロビンを連れ去られてしまう。チョッパーはすぐに麦わらの一味の元に戻って涙ながらにロビンが攫われたことを伝えた。

もちろんルフィたちが動かないわけがなく、ロビンを救出に向かう

ことになるのだが……相手がどこにいるか分からない。そこで、フランキーを頼ることになり、フランキーの案内で街の情報屋を当たった結果、海賊連合という存在について聞かされることになった。

海賊連合はウォーターセブンからカーニバルの町サン・ファルドに向かう途中にある島を拠点としている情報を掴み、そこに乗り込むことになった。

だが今晚はアクアラグナにより出航が禁じられており、海賊連合の面々は海列車の最終便でウォーターセブンを出ている。サン・ファルドに向かうためのログもなく、追う方法が無いという状況だったが、フランキーの子分より話を聞いたトムが線路試験走行用の海列車を貸してくれることになり、その海列車によって後を追うことになった。

ルフィたちを気に入っていたフランキーも協力を申し出て、フランキーを慕う子分たちも参戦することになって、先行する海列車を追って試験走行用車両が発射したという状況だ。

流石運命の補填だけあって、原作の状況に似通っている部分も多い。だが、差となる部分も多い。ウソップが離脱せずに一味と共に居ること、サンジやフランキーもルフィたちと同じ車両で追っていること、使う車両がロケットマンではなくここ2年で作られた試験走行用の車両であることなど、違いはある。

「……さて、ポチ。とりあえずアクアラグナの対応に行くか」

「はい。了解しました。じゃあ、私は小型船を持っていきますね」

「ああ、では、先に行っておく」

ポチと軽く打ち合わせをしたあとで、俺は剃刀で空を駆けて海列車を追い越して、予め予定していた地点に到着する。

海列車の線路からは十分に距離があるため、巻き込まれるようなことは無いだろう。風の強さや空気の状態を肌で感じ、目的となる場所まで海水を飛ばすための角度と力加減を頭の中で計算してから海の中に入る。

軽く覇気を放つことで周囲の海洋生物などを逃げさせたあとで、水心を用いて海水を掴み、海流一本背負いの要領で海水を空に放り投げ

る。

周囲の海水が空に飛んでいったことで、一時海に巨大な穴が開く。飛んでいく海水の角度が問題ないことを確認して、次の地点に向かう。

それを何度か繰り返し返せば、今年のアクアラグナへの対策は終了だ。丁度そのタイミングでポチが小型船を担いで持ってきたので、そこに降りる。

「隊長、お疲れ様です。タオルを……着替えも用意してあります」

「ああ、悪いな。海流などの動きは問題ないか？」

「はい。問題ないです。海水の流れ込みも安定してます」

今回はアクアラグナの規模が大きめだったので、例年より少し穴の数を増やした。事前にちゃんと計算して行っているが念のため少し様子を確認してから、着替えるために船室に入る。

着替えを終えて甲板に出る。空は曇っているが雨は降ったりしていない。あと、一部の雲は吹き飛んだので多少晴れ間もある。未来視でもしばらくは雨が降る様子はないので、このまま甲板に居てもいいだろう。

そう思っているとポチがコーヒーを用意してくれたのでそれを受け取り、同じくポチが用意した椅子に座る。例年ならこのままエニエスロビーに戻るところではあるが、今回は海賊連合との戦いを見届け帰るつもりだ。

ある程度拠点となる島が近づいたら、月歩で上空から見るともりではあるが……麦わらの一味が敵の拠点に着くまではのんびりしておく。

そんなことを考えていると、不意に遠方からこちらに向かってくる気配を感じた。

「……ポチ、コーヒーをもうひとつ用意してやれ、タマが来てる」

「タマさんが？ 分かりました」

ちなみにはあるがタマに関しても、なかなかの狂気だったこともあってルツチと同じタイプの改造を施しており、剃刀で島から島への移動もお手の物だ。

最初に施した際には、ポチと同じような狂信的な目を向けてきていたので、もしかしたらいずれは細胞式にも耐えられる可能性もあるが、その辺りは様子見だな。

「……来たな、タマ」

「どもども、貴方のタマですよ」

「こんにちは、タマさん。コーヒーをどうぞ」

「ありがと。んくやっぱり、チエルシーちゃんのコーヒーは美味しいなあ」

甲板に降り立ったタマはニコニコと笑顔を浮かべながら、ポチが用意したコーヒーを飲む。相変わらざるのほほんとしているというか、気楽な感じの奴ではあるが極めて優秀ではある。

「……それで？」

「はい。報告です。海軍本部が海賊連合の動きに感づいて、本部から近いこともあって中将2名と艦隊の派遣を決定しました」

「なるほど、確かに本部から近いな……」

つまり、麦わらの一味、海賊連合、海軍の三つ巴の戦いになる可能性も高い。ただ、タイミング的に考えると海軍側の到着がやや遅くなりそうだ。

原作のバスターコールに比べれば少ない戦力ではあるが、海賊連合も居るので合わせれば原作に近い規模になるかもしれない。

「派遣される中将与船、海賊連合の拠点の情報や周辺の海図、後ついでに海賊連合の情報もこちらに」

こちらが欲しいと思っている情報を、予めしっかり仕入れてきているあたり相変わらず有能なやつである。しかも、タイミング的に少し前に決定したであろう緊急出動の要因も即把握するほどの情報網。本当にポチやリリスとは別の面で極めて有益な存在である。

「そうか、ご苦労。お前も、時間があるなら見学していくか？」

「はい。楽しそうですし、ご一緒しますよ」

・***

ロビンを連れ去った海賊連合の下に向かう麦わらの一味とフランキー一家。試験走行用の海列車をフランキーが運転し、目的となる場所まで向かっている最中、周囲を観測していたウソツプが叫びを上げる。

「なな、なんじやありやああ!?!」

「……え? なにあれ……海流が空に……ノックアップストリームの亜種? いえ、あんな角度で飛ぶなんてありえない」

遙か遠方で分厚い空の雲を吹き飛ばして天へと昇る海流が見えた。それはまるで天に向けてのぼる龍のようでもあり、ウソツプの声で視線を向けたナミも大きく目を見開いて眩く。

他の面々もその凄まじい光景に唾然としていたが、ひとり運転席のフランキーだけはその正体を知っており、説明するように口を開く。

「……アレが街で言われてる青い流星の正体だ。アレはなあ……あるバケモノが、海水を放り投げてるんだよ」

「放り投げるって……どこに?」

「数百キロは離れた遙か遠方の海域だな。結局のところ、政府の言う新技術ってのは嘘で、アクアラグナに関してはひとりのバケモノがなんとかしてるんだよ。いちおう公言するなって言われてるから、おめえらも広めねえように気を付けろ」

「嘘でしょ……あの規模の海水を数百キロ以上? ど、どんな力で投げればそんなことが……」

フランキーの説明を受けて、ナミがより驚愕した表情を浮かべる。まるで理解できないと言いたげなその表情に、フランキーも頷きつつ告げる。

「信じられねえ気持ちは分かるが、考えるだけ無駄だ。エニエスロビーの長官のスパンダムってやつが、やってんだが……アレは理解の外側のバケモノだ」

「え? あれ、パンダがやってんのか! やっぱアイツすげえなあ……」

「おい待て、クソ船長……その名前には俺たちも聞き覚えがある。青雉の奴が、さんざん忠告していた相手だ。だけど、なんでテメエが、顔

見知りみたいな反応してやがる」

「ああ、昨日会ったからな！ アイツすげえ強そうだったし、空島の伝説のパンダってアイツのことみたいだったぞ」

アツサリとそう告げるルフィの言葉を聞き、麦わらの一味は頭を抱えた。

「アイツいい奴だったぞ。肉食べさせてくれたし、お土産に肉もくれたしな！」

「……お前が貰ったって帰ってきた肉の出どころはそこだったのか……どうりで、やたら品質のいい高級肉ばかりだと思った」

「……いい、いい奴なのか？ すげえ怖いんじゃないのか？」

「チョッパー無駄だ。ルフィにとって肉をくれる奴はいい奴なんだよ……」

呆れつつも納得するサンジ、不安げに尋ねるチョッパーと呆れた表情でつつこむウソップ。これから大規模な海賊連合と戦おうという状況にはとても見えず、フランキーの子分たちは麦わらの一味に大物の雰囲気を感じていた。

「せっかくだ。目的地に着くまで暇だし、そのバケモノの話を聞かせてくれ。特にすげえ強そうって辺りを詳しくな……」

ゾロが刀の確認をしながらそう告げると、ルフィが領き一日前にスパンダムと知り合った時のことを話し始めた。

ひとつの終わりと、次の終わり

運命とは数奇で面白いものというべきか、本来は俺がエニエスロビー編を潰した影響により、ロビンにとつてはトラウマであるバスターコールもなく、麦わらの一味から離れようとする理由は無いはずだった。

本人から聞いた話ではあるがクザンとの遭遇時、原作と違ってクザンがロビンを氷漬けにすることは無く、ロビンは意識を保つたままだった。

故に大将という巨大な相手であっても、自分を守るために立ち向かおうとするルフィたちの姿を見ており、原作よりも強くルフィたちに仲間意識を持ち始めていた。

早い話がウオーターセブンに着いた時点で、ロビンはルフィたちをサウロが語っていたいつか巡り合える仲間であると認識しはじめ、少しずつ心を開きかけていた。呼び方を変えようかと悩むほどに……。

だが、そこでロビンは偶然ポチに遭遇した。ポチは本当に通りがかっただけであり、ロビンや麦わらの一味に対しての敵意など一切向けてはいない。

だが、現在のポチはCP9長官に就任したばかりの頃の俺ぐらいの能力を有しており、そのあまりにも巨大な力にロビンは恐れ慄いた。

クザンに続き、単騎で一味を壊滅させられる存在との遭遇は強いストレスになったみたいで、思考がマイナス方向に傾く。

さらにここに来て、海賊連合の介入。結果、ロビンの心にこれ以上自分のせいで仲間たちを危険に晒したくないという思いが芽生え、経過こそ違えど原作と同じように死を受け入れようとしているような精神状態になり、一度は助けに来たルフィたちを拒絶した。

だがもちろん、そんなことで退くような麦わらの一味ではなく、規模も戦力も圧倒的に違う海賊連合にも臆すことなく戦いを挑んだ。

麦わらの一味にフランキー一家を加えても、海賊連合との人数差は10倍以上であり、三つの海賊団の船長や幹部はルフィたちより格上

……と語れば凄そうには思えるが、観戦していた感想としては、実際はそうたいしたものではなかった。

たしかにレッドマリーンの異名を持つ海賊連合の実質的な中心ともいえる元海軍少将は、ルフィより格上であり、海賊連合の能力者が作り出した即席砦のような建物を舞台に激しい戦いを繰り広げていた。

だが、原作におけるルッチと比べるとやや格が落ちる印象だった。平時のルフィよりは確かに上だが、ギア2を発動されれば完全に押されておろし、部下たちに援護させてようやく互角といったところだ。

まあ、この時点ではルフィもギア2を使いこなせているとは言えない状態なので、なんだかんだでいい勝負にはなっている。

しかもこの元海軍少将がかつてのオハラのパスターコールに赤犬の部下として参加していたようで、ロビンの事情も知っていて原作のスパンダムのような煽りもしており、原作を知る身としては「便利な補填キャラだな」という感想だった。

ゾロやサンジもそれぞれ別の海賊団の船長を相手取り、激しい戦いの末に勝利を掴み、仲間たちとの絆で吹っ切れたロビンも戦線に加わり、規模に差がありながらも麦わらの一味が優勢に戦いを進めていった。

しかしそこでイレギュラーが発生。海軍本部より派遣された艦隊が到着し、戦いは一気に三つ巴へと変わった。麦わらの一味は、激しい戦いの末に海賊連合の幹部をほぼ壊滅させることができたが、満身創痍と言つていい状態であり、ここで海軍の艦隊を相手取る余力はない。

絶体絶命のピンチともいえる状況で駆け付けたのは、やはりというべきかゴeingメリー号だった。アイスバークか、あるいはトムか……即席の修理を施された無人のゴeingメリー号により、麦わらの一味はその場を離脱して逃げおおせた。

海軍も当然麦わらの一味を追いたるところではあるが、海賊連合を放置するわけにもいかず艦隊を分けるしかなく、さらに神風と言わんばかりに天候が荒れ始める。

その状態で航海士ナミを有し、小回りの利くゴーイングメリー号を捕えることはできず、麦わらの一味は脱出に成功。その混乱の隙を突いてフランキー一家も海列車にて離脱した。

その後は、海賊連合も甚大な被害を出しつつも海軍から逃走。ルフィたちに関しては、おそらく原作のようなメリー号との涙の別れをしていることだろう。

なんだかんだで、無難な結果に落ち着いたといえる感じだ。ロビンとの絆も深まり、フランキーとも共闘したことで加入の条件は整っているし、ゴーイングメリー号も限界を迎えたとみていい。

これなら問題なく原作のようにスリラーバークなども進行していつてくれるのではないかと思う。期待しているので、是非ワンピースまで辿り着いて欲しいものである。

そんなことを考えつつ、俺は眼下の海賊船に視線を向ける。命を懸けて仲間を守った麦わらの一味とは逆で、部下を多数見捨てることで海軍から逃げた海賊連合の残党たちだ。船長などの主要人物も軒並み生き残ってはいるが……もう、不要だろう。

『海軍への伝達も終了した。そもそもあちらは逮捕に失敗しているからな、文句は無いだろう』

「なるほど……では？」

『ああ……使用を、許可する』
「了解」

五老星との通信を終えて通信機を懐にしまったあと、すぐ近くに月歩で滞空しているポチに声をかける。

「ポチ、許可がでた……始める」

「はいー」

俺の言葉に頷いたあと、ポチは強く両手を握りそこに覇気を込め始める。なにをしているかといえば、ポチへの指導の一環だ。規模が規模だけに、エニエスロビーの訓練場で行うわけにもいかないの、こういう機会はありがたいものだ。

そのまましばらくの時間をかけ、ポチの両手に膨大な覇気が収束したのを確認してから告げる。

「……撃て」

「了解！……十二真衝！」

ポチが振るった腕から覇気を纏った衝撃が放たれ、ぶつかり、膨れ上がった漆黒の衝撃が海賊連合を呑み込み、消し飛ばした。

その光景を見ていたタマが、どこか感心したような表情で呟く。

「おくチエルシーちゃん。十二真衝が撃てるようになったんだね」

「最近ようやく……けど、覇気を大量に消費しますし、溜め時間も長くて……隊長のようにはいきませんね」

そう、ポチも六王覇銃をそれなりに使いこなせるようになってきたので、十二真衝に関しても教えてみた。とはいえ、訓練場では撃てないので、実際に撃たせてやるタイミングを探していた。今回は丁度いい機会だったといえる。

「……威力は及第点だ。だが、やはりまだ溜めに時間がかかり過ぎているな。実戦で使うなら、溜め時間は最低1分以内にするようにしろ」

「はい！ 頑張ります」

「ん〜いや、5分ほどの溜めでこの威力を撃てるなら、十分すぎるほど実戦レベルな気がしますけどねえ……ちなみにスパندانダムさんは、溜め無しで撃てたりするんですか？」

「いや、さすがに十二真衝は溜めが必要だ。威力や範囲を調整したりせずに撃つだけなら、0.5秒ほど溜めがいるな」

六王覇銃であれば溜め無しでも撃てるが、十二真衝に関しては若干の溜めは必要だ。

「……それほぼ溜め無しみたいなもんなんですが……連発できるんですか？」

「ああ、問題なくな」

「……覇気の消費はどうですか？」

「仮に100発撃ったとしても1割も減らん」

「うわ〜い、やっぱり最高に理不尽でカッコいい」

俺の返答に苦笑を浮かべつつも、どこかタマは楽しそうである。そのうちコイツにも教えることもあるだろうが……やっぱり気軽に

撃って練習できないのがネックだな。

今回は運が良かった。ポチも感覚をしつかり覚えただろうし、溜め時間の短縮も進むだろう。

さて、それじゃあエニエスロビーに戻るとするか……。

・***

海賊連合と麦わらの一味の戦いを見て戻った後も、情報収集は行っていた。やはりというべきか、今回の一件でルフィたちのことを心から気に入ったフランキーは、ルフィたちに夢の船を託すため再び船を作る決意を固めた。

そしてルフィたちにそのことを伝え、材料である宝樹アダムを購入するために2億ベリーを預かった。これもまた都合がよく、宝樹アダムが出品されるオークションの時期もズレており問題なく購入できてさっそく船作りに取り掛かる模様だった。

これに関しては、原作通りに進むと考えて少し手を回してやることにした。まあ、当人たちのやる気次第だが、満更でもなさそうだったので船作りに協力するんじゃないかと思う。

そして、こちらはまだ確定ではないがルフィたちの懸賞金の額についても、タマが情報入手してきた。確認してみたところ原作通りの金額になっており、一味全員が賞金首になっているのだが……微妙に違和感を覚えた。

原作のルフィの2億アップや他の面々の手配は、世界政府三大機関であるエニエスロビーを落としたという要因が強く、それが危険視された結果だったはずだ。

海賊連合はたしかに億越えの船長たちを始めとして名は知れていたが、それを倒したぐらいでここまで上がるものだろうか？

そう思いつつ報告書を見ていると……「一味7人と協力者1名という少数で、海賊連合を打ち破り船ごと中核となるメンバーを消し去った危険性を考慮」という一文があった。

ああ、なるほど……ポチが十二真衝で消し飛ばした件も、麦わらの

一味の仕業として処理した結果か……海軍に対する建前的な部分もあるのだろう。

あと細かい部分で言えば、ウソツプもそげキングとしてではなく素顔で手配されているので違いはある。だが、サンジの手配書は似顔絵で、チョッパは50ベリーというのも変わらない。

この似顔絵は哀れ過ぎるが、しかしこのおかげでジェルマに気付かれるのが遅れるという要因もあるわけだし、難しいものである。

そんなことを考えていると、突如通信が入った。相手は……五老星か。

『……先日派遣した軍の艦隊を破り、赤髪と白ひげの直接接触がほぼ確実となった』

「それで？」

『同盟という可能性は低いだろうが、目的を知りたい。流石に四皇2人相手となれば、CPOを迂闊に動かすのも難しい。お前に調査を頼みたいのだが……』

「了解。すぐに調べます」

『ああ、助かる』

原作における接触……黒ひげに関しての忠告か、原作知識のおかげで内容を知っているので報告は容易だが、いちおう別の話をしている可能性もあるし……念のために現地には向かうとするか……そしてタイミング的に丁度エースと黒ひげが戦う時期なので、帰りに黒ひげを始末するでしょう。

闇を呑む漆黒の太陽

ウォーターセブンにある廃船島では、フランキーが麦わらの一味のための船を造っていた。かつてフランキーが思い描き、造船からは離れつつも何年も温めてきた夢の船。それを託すに相応しい相手と巡り合えたからこそ、全力で作業を行っていた。

そこに兄弟子アイスバーグ、ゴインングメリー号の生き様に惚れ込んだ職人たちの後押しを受けたパウリー、ルル、タイルストーンも加わり、作業が進んでいく。

フランキーの子分たちも一通り造船技術は教わっているので手伝いたがっていたが、海賊連合との戦いで負った怪我也多く、フランキーが許可しなかったので5人の体制で造船作業は行われていた。

ブランクをまったく感じさせないフランキーとアイスバーグの技量は凄まじく、ガレーラカンパニーの1番ドックで腕を振るう3人でも付いていくのがやつと……いや、少し遅れていると言っている状況だった。できればもう少し人手が欲しいと、そんな考えが頭をよぎった時、タイミングよく3人にとって懐かしい声が聞こえてきた。

『ポッポー。ガレーラの職長たちが、揃いも揃って作業で後れを取っているとは、情けないな』

「いや、さすがにあのペースは厳しいじやろ。アイスバーグさんはこちらろんじやが、フランキーも大した腕じや」

「ルツチ!? カク!? お前ら、どうしてここに……」

そこに居たのはかつて1番ドックで共に働いていて、現在は退職して故郷に帰ったはずのふたりの職人だった。

「久々に顔を見に来てな、なんとも奇遇なことに駅でルツチと鉢合わせてのう」

『ガレーラに行ってみたら、ここで船を造っているという話を聞いたわけだ。クルッポー』

そう言っただけはパウリーたちの下に近付き、どこか不敵に微笑みを浮かべた。

『ポップー。ガレーラの仕事というわけでないのなら、退職した俺たちが参加しても問題ないだろう?』

「そういうことじゃ、報酬は仕事が終わった後の打ち上げってことで、どうじゃ?」

「テメエら……へっ、腕は鈍ってねえだろうな!」

手伝いを申し出るふたりに、パウリーは微かに目を潤ませながらも笑みを浮かべる。そして2人を追加で加えて、7人体制で作業は進行していった。

ルツチとカクもかつては職長候補とまで言われており、数年経ったいまも腕は衰えてはいなかった。ふたりのおかげで、パウリーたちもフランキーとアイスバーグの作業スピードについていくことができるようになり、船の制作は順調に進行していった。

その光景を離れた場所から眺めていたトムに、かつてトムズワーカーズの秘書だったココロが問いかける。

「トムさんは、加わらなくていいのかい?」

「たっはっ! ああ、これからの時代を作ってく若い連中が集まってるんだ。年寄りの出る幕はねえよ」

「そうかい。フランキーも吹っ切れたようで、よかったね」

「ああ、ドンといい顔をしてやがる」

弟子たちが協力して船を造っている光景を見て、トムは心の底から嬉しそうな笑顔を浮かべていた。

・***

新世界の一角にて接触した白ひげエドワード・ニューゲートと赤髪のシャンクス。新世界に君臨する四皇のふたりの話し合いは、エースを止めるように進言するシャンクスの言葉をニューゲートが突っ撥ねる形で決裂した。

覇王色同士がぶつかり合って空が割れる。だが、どちらもそれ以上戦いを続ける気は無く、一撃打ち合ったあとは武器を収めた。

話は終わったとばかりに背を向けて去ろうとするシャンクスに対

し、ニューゲートは静かに口を開いた。

「……お前は、エニエスロビーの司令長官のことは知っているか？」

「……スパンダムのことか？」

「なんだ、知ってやがんのか」

「ちよつと、大きな恩があつてな」

「ほう……」

シャンクスの言葉を聞いてニューゲートは興味深そうな表情を浮かべる。そして少し考えるような表情を浮かべたあとで静かに告げた。

「なら、テメエの方が詳しそうだな。俺が最後に遭遇したのは何年も前のことだ……だが、いまだにあの野郎の強烈な覇気は覚えている。いま、あの怪物はどこまで強くなつてやがる？」

「……仮に、全盛期のアンタとロジャー船長が5人ずつ居たとしても、相手にもならないだろうってレベルだ」

「グララララ、それほどか……だが、派手な噂を聞かねえつてことは、暴れまわるような奴じゃねえつてことか……」

「底知れない存在ではあるが、敵対しない限りはそうそう力に訴えてくるような奴じゃないな」

白ひげにとつて、スパンダムは過去に2度遭遇した相手であり、3度目は逃げを打つしかないと考えるほどに警戒していた相手だった。

しかし、2度目以降遭遇する機会はなく、これといった大きな噂は聞こえてこなかった。ただエニエスロビーで不夜の怪物と呼ばれているという話もあり、想定通りに手の付けられない怪物となっているのだろうとは思っていた。

「……そうか。そういや、テメエさつき大きな恩があるって言つてたな」

「ああ、まあ、人に話すようなことじゃねえ」

「……」

シャンクスの言葉にニューゲートはそれ以上問うことは無く、去つていくシャンクスの背を見送った。そして、世界最高峰の実力者であるふたりであつても、気付かなかつた。

その話題の怪物が、遙か上空でふたりの会話を覗き見ていたとは……。

■***■

グランドラインの島のひとつであるバナロ島にて町はおろか島そのものすら消し飛ばすのではないかと思える戦いが繰り広げられた。そして倒れ伏す背に白ひげのマークを刻んだ男……ポートガス・D・エースと、その前に立ち高笑いを浮かべる大男……マーシャル・D・ティーチ。

両者の激しい戦いはティーチの勝利という形で幕を閉じた。最後にエースが放った炎帝により荒野となり果てた島の中心部で、ティーチは勝利を噛みしめるように笑う。

「ゼハハハハ！……これが闇の力だ！……ハア、とはいえさすがの強さだった……予定とは違ったが、麦わらじやなくエースの首を手土産に計画を進めるとするか……おいテメエら！エースを船に運べ！」
王下七武海入りのために、麦わらのルフィの首を狙っていたティーチだが、それ以上の大物を捕らえることに成功したため、エースの首と引き換えに七武海入りを行うつもりだった。

そして、七武海の地位を利用してインペルダウンに入り込み、過去の凶悪な犯罪者たちを手下に加えて一気に成り上がる計画。

そしてあわよくば、エースを奪還しようとするニューゲートと海軍をぶつけることで、正面からでは勝つのが難しいニューゲートを消耗させ、グラグラの力を奪い取る。そんな凶悪な計画を考えていた。

そしてそれは、本来の原作においては上手くいき、結果ティーチは四皇に上り詰めることとなるのだが……それはあくまで、本来ならの話である。

「……おいっ！なにやってやる？聞こえてねえのか？まったく……いったい何処まで離れて——」

「距離の問題じゃない」

「——なっ!？」

突如聞こえてきた声にティーチが振り返ると、そこには左目が×の形の仮面と竜の意匠の帽子を身に着け、マントで体を隠した男が佇んでいた。

まったくなんの気配も感じず、本当に唐突に現れたその存在にティーチが驚愕していると、仮面の男……スパンダムは言葉を続ける。

「お前のところの船員なら一足先に旅立った。もう返事をする事は無いだろう。だが、心配することは無い……すぐに会える」

「ッ!? 闇水!!」

スパンダムから放たれた凄まじい気配に、ティーチは即座に片腕の前に突き出しヤマヤマの実の引力を発動した。

だが、スパンダムはその場に立ったままでピクリとも動くことは無い。

「ば、馬鹿な……闇の引力は全てを引きずり込む筈だっ! なぜ動かねえ……くそっ! 闇穴道!!」

全てを引き寄せる筈の引力で微動だにしないスパンダムを信じられないといった表情で見たあと、ティーチは焦った様子で地面に手を付き闇を広げ周囲全てのものを根こそぎ引き込もうとした。

だが、直後にスパンダムが軽く足踏みをする、風船が割れるような音と共に広がっていた闇が消え失せた。

「……は? な、なんだ……能力が、強制的に解除され……ど、どうなってやがる。なにをしゃがった!」

「わざわざそんなことに答えてやる気はない。俺がお前に言えるのは一言……闇の正義を執行する」

瞬間、視界全てが黒く染まるほどの凄まじい覇気が放たれた。あまりにも次元が違うその力は、ティーチが本能的に死を覚悟するのに十分すぎるほどだった。

「……うっ……あつ……ッ……なんだ、これは……う、歌? どこから——うおおお!!」

気圧されるティーチの耳に、突然響くように聞こえてきた不気味な歌声に導かれて視線を動かすと、いつの間にかティーチの周囲には黒

い炎に包まれたおびただしい数の骸骨が浮かんでおり、それが歌を歌っていた。

「いい歌だろ？ よかったな、俺の相棒がお前のために鎮魂歌レクイエムを歌ってくれるらしい」

「やめろ……く、くるな……くるなあああ！」

逃げようと必死に体を動かそうとするが、まるで押しつぶされるような凄まじい圧に、体が言うことを聞かない。ティーチの表情が恐怖に染まっていく中、スパンダムは淡々と告げる。

「……人の夢は終わらないらしいが、お前の夢はここで終わりだ。ああいや、そういえばお前は眠らないんだったな。なら、夢を見るのはむしろこれからか……」

「お、俺は……ここ、こんなところで……」

「それじゃあ、おやすみ——『死獣しじゆう』」

その日、バナロ島にて、漆黒の太陽が闇すらもすべて呑み込み……滅ぼした。

・***

音が消えていたバナロ島にて、気を失っていたエースがゆつくりと目を覚ます。

「ここは……ぐう!? いてえ……あ、ああ、そうだ。俺はティーチに……あれから、どうなった？」

体中に走る痛み顔に顔を歪めながらも、エースは痛みをこらえて体を起こす。たしかにエースはティーチに敗北したはずだった。

だが目を覚ましてみれば、体が拘束されている様子もない。倒した相手を見逃すような甘い性格をしていない筈だと、周囲の様子を確認したエースは直後に目を見開いた。

「なっ!? ……なんだこれ……いったい……なにがあつたんだ？」

エースの視線の先には、ティーチを始めとした黒ひげ海賊団全員の首がずらりと並べられており、その異様な光景に心の底から驚愕した。

エースはたしかにティーチに敗れた。いや、仮に相打ちだったとしても、ティーチはともかく他の船員まで死体となっている理由が分からない。

エースは痛む体を抑えながら立ち上がり、ティーチの死体に近付いたあと、その頭を抱えるように持ちながら口を開いた。

「……なあ、ティーチ。お前は、いつたいなにを見た？ なにを見たらそんな、心の底から恐怖したような面で死んじまうんだ……」

当然ながらティーチの首がその問いに答えることは無く、仲間殺しの大罪を犯したティーチを追うエースの旅は、異様な不気味さを残して終わることになった。

・***

律儀に黒ひげ海賊団全員の遺体を埋葬して弔い、ティーチが腰に付けていたアクセサリをひとつ、形見代わりに持って島を去っていくエースを見送る。

ティーチを始末しても、最悪ここでエースが偶然海軍に捕らえられという結果になってしまえば、結局インペルダウン編と頂上戦争編まで発展してしまう可能性があるのです、とりあえずは、白ひげの元に戻るまでは様子を見るつもりだ。

トットムジカの力で作り出した骸骨……これにエースを監視させるつもりだ。パチンと指を弾くと、宙に浮かぶ骸骨が再現したドアドアの実の力を発動し、亜空間に消えた状態でエースの後を追う。

これで、エースになにかあれば俺に分かるので、海軍などに捕らえられそうになった場合は対処するでしょう。

さて、当初予定していた通りにティーチは始末して、インペルダウン編と頂上戦争編の発生条件は消えた。バナロ島の住人は黒ひげ海賊団を始末する前に、初手に対象を指定した霸王色で意識を奪っている、俺の姿を見たのはティーチのみであり、そのティーチも始末したので情報が他に漏れることは無い。

ティーチの遺体からヤミヤミの実の能力もコピーした。あとは、

元々魔力で炎は作っていたので必要ではなかったが、せっかく近くで
気絶していたのでメラメラの実もコピーしておいた。

これでウオーターセブン、インペルダウン、頂上戦争と俺が関わる
可能性のある件は全て対処済み。あとはまあ、状況がどう転がってい
くか……だな。

とりあえず、エニエスロビーに帰って、五老星に白ひげと赤髪の話
について報告するでしょう。

エースの帰還と歌姫の手紙

新世界の海、四皇白ひげの船として知られるモビー・ディック号。そこにいるニューゲートの下に、黒ひげを追って船を出ていたエースが帰還した。

多くの船員たちに迎えられつつも、どこか浮かない表情のエースはニューゲートの前まで歩いてきた。

「……オヤジ、俺は——いっ!?!」

なにかを言いかけたエースだったが、ソレよりも早くニューゲートの拳がエースの頭に叩き下ろされた。その凄まじい衝撃にエースが頭を押さええて蹲る。

殴られる理由に心当たりはあった。エースはニューゲートや他の船員が止めるのも無視して、強引にティーチを追った。そしてその結果は返り討ち……何者かの仕業によってティーチが死ななければ、ニューゲートたちが危惧していた通りの結果になっていたのは言うまでもない。

勝手をしたことを自覚しているエースはニューゲートに謝罪しようとするが、口を開きかけたが、その前に巨大な手によって抱き寄せられた。

「……心配させやがって、バカ息子が」

「オヤジ……すまねえ、アンタたちが止めたのに俺は……」

「かまやしねえ。無事に生きて帰ってきたなら、それで十分だ」
「っ……!?!」

心の底から安堵したような白ひげの言葉を聞いて、エースの目に涙が浮かぶ。彼はロジャーの、鬼の子として生まれ、長らく思い悩んでいた。己が生きていることを、望まれていないのではと……。

だからこそ、他のなにもなく「エースが生きて帰ってきたこと」を喜んでくれるニューゲートの言葉や仲間たちの温かな眼差しが、どうしようもなく嬉しくて……エースはしばし、声押し殺して涙を流した。

間を空けて落ち着いたことで、エースはこの経緯をニューゲートに説明した。ティーチにバナ口島にて追いつき戦ったこと、力及ばず敗れたが、目が覚めるとティーチが死んでいたことなどを詳しく話す。

「……どのぐらい気絶していたかは、分かるか？」

「いや、正確には……だが、日の感じからして、長い時間じゃねえはずだ」

「つまりティーチを殺った奴は、お前と戦った後とはいえ、お前を倒すほどの実力を持つティーチとその部下を短時間で皆殺しにして、なんの痕跡も残さず消えたってことか……」

ニューゲートも一度は追おうとするエースを直感的に止めるほどティーチの実力は危険視していた。事実ティーチは、2番隊隊長であるエースでも後れを取るほどの強さを得ていた。

それを痕跡も残さず容易く殺すというのは、並の実力では不可能であり、ニューゲートの頭には一瞬先日シャンクスとの会話に出てきたスパンダムのことか思い浮かぶ。

しかし、すぐにそれは無いだろうと結論付けた。

まず、そもそも現時点ではさほど名が売れているわけでもないティーチを、わざわざ殺しに来る理由がなく、仮に殺しに来たとしてもエースを見逃す理由は無いはずだと、そう考えたからだった。

さすがのニューゲートも、スパンダムが原作という未来の知識からティーチの企みを知っており、それを阻止するために殺害したという考えに辿り着くことはできない。

結果として、それ以上考えても答えは出ず、警戒はしつつも気にし過ぎないという結論に落ち着いた。

・***

エースの帰還を祝って開催された宴、途中で賑わう甲板からひとり船の裏手に移動したエースは、手に持ったアクセサリー……ティーチの形見を複雑な表情で眺める。

「……主役がこんなところで、なにしてんだよい」

「……マルコ……いや、なんか、いろいろ考えちゃまってな」

「ティーチのことか？」

「ああ、アイツは鉄の掟を破った。サッチを殺したことは許せねえし、俺自身アイツを殺すつもりだった。結果、俺が殺せたわけじゃねえが、ひとつの形としてけじめは付いたと思ってる」

「そこまで呟いたあとで、エースは手に持ったアクセサリーを握り締めながら……絞り出すように告げた。

「……けど、だからって、ティーチが死んでスッキリしたとは……言えねえよ」

「アイツは2番隊だったからな、お前は話すことが多かった相手だろうし、すぐには割り切れねえだろうよい」

「古株だったからな、いろいろ教えてもらったこともあったし、助けられたこともあった……アイツは、言ってたんだ。運が無ければ諦めたって……考えてもしようがねえことかもしれないけど、どうしても思っちゃうんだ。もしヤマヤマの実が見つからないままだったら……つてな」

「……そうだな。アイツが鉄の掟を破ってサッチを殺したのは事実だ。だけど、そこまでの時間、アイツが仲間だったってことも……たぶん、事実だよい」

「……アイツのうるせえ笑い声も、嫌いじゃなかった」

「静かに告げるマルコの言葉に、エースも頷く。許すことはできない……だが、それでも心底嫌うことも出来ない。」

「憎しみはあったが、死者をこれ以上貶める気もなく、せめて安らかに眠れとそんなことを考えて、エースは少しの間祈るように目を閉じた。」

「……まあ、湿っぽい話ばかりじゃなくて、明るい話もしようぜ」

「明るい話？」

「ああ、例えば……お前の弟の活躍なんて、どうだよい？」

「これは……ルフィか!? 懸賞金が上がったのか! 3億ベリ……ははっ、いっぱしの海賊顔になりやがって……」

マルコが手渡した手配書を見て、エースはそこに写っていたルフィを見て顔をほころばせた。

「しかし、いつきに2億も上がるとは……アイツなにやったんだ？」
「海賊連合って大規模な海賊団とやりあったらしい。それを壊滅させた上で、途中で現れた海軍の艦隊も掻い潜って、見事逃げおおせたつてちよつとしたニュースになつてるよい」

「へえ、派手にやるじゃねえか……さすが俺の弟だ」

実はマルコはあえてエースに伝えなかったことがあった。というのも今回の麦わらの一味と海賊連合の戦いにて、ルフィたちの懸賞金が大幅に上がったのはある要因もあるからだだった。

少数の海賊団が戦力差にして10倍以上の海賊連合を打ち破り、海軍艦隊まで現れて不利になるものの、突如発生した嵐を味方につけて逃走を成功する。

それが昔を知る者たちにはある戦いを思い起こさせた。そう、いまも伝説として語られるロジャー海賊団と金獅子海賊団の「エッド・ウォーの海戦」である。

そのせいもあつてか、当時を知る古い海賊たちのごく一部では、ルフィは「ロジャーの再来」と噂され始めているが……実の父親を嫌うエースには、あまりいい情報ではないので伝えないことにした。

「……お前の弟も、そろそろ新世界が近くなつてきたよい」

「ああ、そうか……確かにそろそろ……だが、早すぎる。いまのルフィじゃ、まだ……」

「うん？ どうかしたか？」

「いや、なんでもねえ……さて、甲板に戻ろうぜ！ 腹減つちまつた！」

マルコの問いかけに明るい笑顔を浮かべたあとで、エースは賑やかな甲板に向かって移動していった。

・***

エレジアにあるウタとゴードンの住む家で、俺は出された紅茶を飲

みながら先日のお出来事を話す。今回訪れたのは、ウタに新しく発行されたルファイたちの手配書を持って来るついでに、様子を見に来たという感じだ。

「え!?! スパندانダムさん、ルファイと会ったの!?!」

「ああ、偶然会って少し話をした」

ルファイと偶然会ってバーベキューを食べながら話をしたことを伝えると、ウタは驚いたような表情を浮かべた。そして、少ししてもじもじと自分の髪を指でいじりながら、少し明後日の方向へ視線を逸らしつつ口を開く。

「……ち、ちなみに、ルファイは、私のことなにか言っていたりとか……そういうのは……」

「自分が183連勝中だと主張していたな」

「あつ、出た。ルファイの負け惜しみ」

ウタはFILMREDとは大きく環境が違うこともあって、劇場版に比べて性格もかなり明るく、いまのように異性の幼馴染を意識するような言動も見取れる。

それはFILMREDに比べて、ウタに精神的に余裕があることの証明でもあり、彼女にトットムジカの件で恩を感じている俺にとって嬉ばしいことでもある。

「あとはそうだな。シヤンクスやガープの名前を出した時とは違って、お前の名前を聞いた時は、少し会いたそうな顔をしていたな」

「え? ルファイが……へ、へえくそうなんだ。まあ、ルファイってああ見えて寂しがりなところあるし……えへへ、そっかあ……」

「あくまで俺が見た印象という話で、直接ルファイがなにかを言っていたわけでは無いがな」

「でも、スパندانダムさん凄いなあ、きつと当たってるよね……ふふ……」

どうやらウタの方も精神的に余裕があるせいか、劇場版よりもルファイに強い関心がある様子で、微かに頬を赤らめ嬉しそうな様子だった。なんともまあ、分かりやすい反応だ。

「まあ、あちこちの島を旅しながら航海しているわけだし、そのうちエ

レジアを訪れることもあるだろう」

「うん！ 楽しみ……あつ、えつと……」

「どうした？」

「……いや、そのお……もし、可能ならでいいんだけど……スパンダムさんにひとつお願いしちゃ……駄目かな？」

「なにをだ？」

「えつと、その……ルフィに……手紙を一通届けてもらうとか……」

もしも遠慮気味に告げるウタの様子を見て、俺は軽く苦笑を浮かべた。

「政府の役人相手に頼む内容じゃないな」

「うつ、そうだよね……ごめんなさい」

「だが、まあ、いいだろう。一通だけだぞ、次に来る時まで用意しておけ」

「ホント!? ありがとう、спанダムさん!!」

飛びあがるように喜ぶウタを見て再び苦笑したタイミングで、ゴードンがアップルパイを焼いて持ってきた。元国王がずいぶんと料理上手になったものである。

「……それにしても、エレジアの復興は順調そうだな」

「うん。まだまだ、時間はかかるけど少しずつでも確実に進んでる。なんていうか、人の力って凄いよね。私とゴードンだけじゃどうにもならなかったけど、いろんな人が手伝ってくれて、廃墟だった街がどんどん変わっていったる」

「コンサート会場も新しくしたんだっただか？」

「私は後回しでいいって言ったんだけど、皆がここを真っ先にするべきだろってね」

「いやはや、街のあちこちから音楽が聞こえ始めて、私も感慨深い」
「うんうん。歩いてるだけでも楽しくなるよね！」

エレジアは世界政府が正式に協力していることもあって、かなりのペースで復興が進んでいる。移住者もそれなりに増え、廃墟だった街にも活気が蘇ってきている。

このペースなら5年から10年ほどあれば国としての機能を取り

戻せるのではないかと、そんな風に感じながら、ウタとゴードンの会話を耳を傾けた。

麦わらの一味との対面

巨大海賊船スリラーバークにて、王下七武海のひとりゲッコウ・モリアを激しい戦いの末に打ち破り、新たに音楽家ブルックを仲間に加えた麦わらの一味は、海底の楽園魚人島を目指して進んでいた。

重傷を負っていたゾロもチョッパーの治療あつてかすっかり回復し、ブルックの加入を改めて祝いながら楽しく海を進んでいた。

「げえ、海王類だ!!? でけえぞー!」

「ほう、コイツはスーパードライサイズだ。昔俺が仕留めたのよりでけえな、150mはありそうだな」

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょ! 逃げるのよ!!」

航海の途中で現れた海王類を見てウソップが叫び、フランキーが感心した様子で呟き、ナミが叱りつけて逃げるように告げる。

よくある流れではあった。だが、その時ばかりは少し様子が違っていた。いまにも船に襲い掛かりそうだった海王類が突如動きを止め、傍目にも分かるほど震え出した。

「なんだ、様子がおかしいぞ……震えて、そのまま海に潜って逃げやがった」

「……なんででしょう? なにかに怯えていたようにも見えましたが」
突如震え出したかと思えば、海に潜って逃げていった海王類の様子にサンジが首を傾げ、ブルックも不思議そうな様子で呟いた。

その直後、ストンとまるで意識の隙間を縫うように、船の甲板にひとつの影が着地した。

「邪魔するぞ」

『ッ!?!』

一瞬で一味の表情が驚愕に染まる。その存在が船に着地するまで誰も接近に気付けなかったこともそうだが、それ以上にその存在感が異質だった。

白のシャツの上にこげ茶色のジャケットを羽織った鼻と目の周りが黒い男……私服姿のスパンダムの登場に、大半は戸惑いの表情を浮

かべ、知り合いである2名だけ別の反応を見せた。

「てめえ、スパンダム!? なにしに来やがった……」

「おお、パンダじゃねえか! ウォーターセブン以来だなあ〜!」

驚きつつ警戒したような表情のフランキーと、逆に嬉しそうに笑顔を浮かべるルフィ。

「少しお前たちに用があつてな……ああ、初めて会う相手には自己紹介をしておこう。スパンダムだ。世界政府の役人ではあるが、服装を見て分かる通り休暇中だから、気にしなくていい」

淡々と告げるスパンダムの言葉。普通の自己紹介ではあつたが、一味の半数以上が思わず一步後ずさつた。

「……どうやら、青雉の野郎の言葉は吹かしじゃなかつたみてえだな」
「なんですか、この人……私が言えることじゃないですが、本当に人間ですか?」

スパンダムの次元の違う力を感じ取り、サンジとブルックは思わず息を飲む。サンジはかつての青雉の忠告を思い出し、どこか納得していた。なるほど、大将があれほど真剣に忠告するだけあると……。

「やや、やべえ、きつとモリアを倒した俺たちを消しに……」

「うう、嘘でしょ? こんなに早く!」

「……安心しろ、ウソップ、ナミ……コイツがその気なら、俺たちはもう全員死んでる。まだ俺たちが生きてるってことは、別に俺たちを殺しに来たわけじゃないだろうよ」

「いや、なにも安心できないけど!」

ゾロもまた動揺するウソップとナミに告げつつも、驚愕していたし心の中は穏やかではなかつた。

(なんだ、コイツ……なにをどうしても、戦えばこっちが死ぬ未来しか見えねえ。まるで生物としての格自体が違うような、信じられねえほどの存在感だ)

とにかく混乱している一味だが、中でも一番尋常ではないのはロビンだった。ロビンにとって世界政府は己を狙う敵と呼べる存在であり、特にクロコダイルから聞いた話もあつてスパンダムのことは恐れていた。

そして実際に会ったスパンダムの実力は、推定を遥かに上回っており、ゾロの言葉通りその気になれば一味を皆殺しにするなど一瞬というレベルだった。

「だ、大丈夫か、ロビン。顔が真っ青だぞ……」

「え、ええ、ありがとう、チョッパー」

「……ニコ・ロビンか」

「ひっ……」

スパンダムが名前を呟いたことで、ロビンは思わず小さく悲鳴を上げてしまったが……続けられた言葉は予想とは違うものだった。

「オハラでは、俺の馬鹿親父が迷惑をかけたみたいだな……まあ、それはいいとして、怯えなくとも俺はお前に興味などないし、捕らえる気もない。今回の用件にもお前はなんの関係もない」

「……え？」

「他の連中も警戒しなくていい。任務で来たわけじゃないし、戦闘の意思もない」

スパンダムはそう言うが、だからと言ってすぐに警戒が解けるわけでもなく、船の甲板にはどうするべきかという困惑と警戒が入り混じったような空気が流れる。

ただ、そういったものを一切気にしない者も存在する。

「パンダ、この前はありがとうな。肉もすげえ美味かった！」

「ああ、無事に解決したようならなによりだ……それで、今回はお前に用があつて来たんだ」

「俺に？」

「お前の幼馴染から手紙を預かってきている」

ルフィにとってスパンダムは肉をくれて相談に乗ってくれたいい奴であり、警戒するような相手ではなくむしろ歓迎していた。

笑顔で話しかけてくるルフィに軽く微笑んだあとで、スパンダムは懐から手紙とTDを取り出してルフィに渡す。

「そっちのTDは新曲らしい。タイトルは『麦わら帽子』だとか」

「……そっか……アイツ、元気だったか？」

「ああ、お前に会いたそうにしていた」

手紙とTD、そして幼馴染という言葉で中を見なくともウタからのものと察したルフィは、少し穏やかな笑みを浮かべていた。懐かしい幼馴染を思い出すように……。

そして、ルフィが手紙を見ようと封を開け始めると、スパンダムは手紙を気にしている一味の面々の方を振り返る。

「……ああ、そうだ。ついでに、他の用件も済ませておこう。黒足のサンジ、お前にこれを……」

「……なんだ？　この紙？」

スパンダムがいきなり声をかけてきたことに警戒心を強くしつつ、サンジが差し出された紙を受け取って内容を見ると……そこには手紙の宛先らしきものが書かれていた。

サンジが手に持つ紙を覗き込んで見ていた面々も、その意図が分からず首を傾げる。

「その宛先に、自分で写真を撮って送ってこい。あの手配書は哀れ過ぎる……今回のものはもう無理だが、次の更新の際にでも写真を差し替えるように俺から伝えておいてやる」

「なっ……お前……いい奴じゃねえか……」

スパンダムが告げた言葉に、サンジは感極まったような表情を浮かべた。なにせ相手は世界三大機関のひとつであるエニエスロビーのトップであり、実際にその通りに動いてくれる可能性は高い。

次の更新の際ということなので、次回に額が上がった時に差し替えてくれると言ってるようなものであり、似顔絵の手配書に真剣に落ち込んでいたサンジにとっては救いの神のように見えた。

なお、スパンダム側としては原作知識でサンジの額更新がまだ先……2年後になることを知っており、なおかつこのタイミングではシャボンディ諸島以外で撮影の機会はないため、すぐにくまに飛ばされて写真を送るのも難しいと分かった上で言っていた。もちろん、手配書を哀れんでいるのは事実だが……。

「はい！　はい！　だったら、俺も、俺も!!」

「うん？」

「俺も勇敢に戦ったんだぞ！　なのにこれっ！　50ベリーって

……」

「いや、別に俺が額を決めているわけでは無いのだが……」

50ベリーと書かれた自分の手配書を掲げて何とかしてほしいと訴えるチョッパーに対して、スパンダムは少し考えるような表情を浮かべてから口を開く。

「……分かった。たしかに、俺もお前には2000万は付けるべきだと思うし、一応話はしておこう」

「本当か!? お前……いい奴だな!」

「だが、代わりとってはなんだが……ランブルボールというのをひとつ譲ってもらいたい」

「ランブルボールを? それはいいけど、アレは俺に合わせて作ってるから、他の人が使っても意味はないぞ?」

ランブルボールが欲しいというスパンダムに対し、チョッパーは不思議そうに首を傾げつつ、自分以外の能力者が食べても効果は無いと説明する。

それに対して、スパンダムは穏やかな笑みを浮かべる。

「ああ、かまわない。単純に興味本位だ。俺もこう見えてそれなりに薬学には精通していて、少し興味があったんだ」

「そうなのか? お前、医者なのか?」

「いや、医者ではないが、薬学に少し詳しいだけだ」

嘘はついていない。スパンダムは肉体改造の際に様々な秘薬を使っており、それに伴い薬学の知識もかなり高い。そして、スパンダムとしても実は流れは別にして、チョッパーとはある程度親しくして、ランブルボールを手に入れたと思っていた。なので、チョッパーの機嫌を取れる品を懐に忍ばせていたりもする。

「そうなのか……じゃあ、はい。これがランブルボールだ」

「ありがとう。ついでに、せっかくこうして知り合えたのだから……この本を贈ろう。珍しい薬などについて書かれている」

「え? す、すげえ……俺の知らない薬がいっぱい載ってる。こ、これ、貰っていいのか!」

「ああ、俺はもう内容は記憶しているから問題ない」

「ありがとう！ お前、ルフィのいう通り本当にいい奴だな!!」

珍しい薬学書を貰ったことで、チョッパーは完全にスパンダムを信頼したのか、最初の警戒はどこへ行ったのか、明るい笑顔を浮かべていた。

すると、そのタイミングでルフィは手紙を読み終わったらしく、どこか楽し気な笑みを浮かべていた。

「……返事か伝言があるなら預かるが?」

「そうだな……じゃあ、『そのうち顔を見に行く』って言っといてくれ」「分かった、そう伝えておこう。それじゃ、これで用件は全て済んだから、俺はそろそろ失礼しよう」

「えくもう行っちゃまうのか!? せっかくなんだしゆっくりしていきやあ、いいのに……」

「政府の役人が長々と海賊の船に居るわけにもいかないだろう。まあ、また縁があれば会うこともあるさ……」

「そっか……分かった。本当に、いろいろありがとうな」

用事は終わって帰るといふスパンダムに対し、ルフィは残念そうな表情を浮かべたが、強く引き留めることはせずにお礼の言葉を口にした。

それに軽く微笑んだあとで、軽い動作で跳躍して、そのまま剃刀で一瞬で視界から消え去った。

「うおっ、すごいなパンダ。空も飛べるのか!」

「……うくん、確かにとんでもない相手だったけど、ルフィの言う通り悪い人ではないのかしら?」

「いきなり襲い掛かってくるような奴じゃなくて、本当に良かったぜ」
楽し気にスパンダムを見送ったルフィの後ろで、ナミとウソップがどこか安堵したような表情で呟いた。

「……おい、ロビン。大丈夫か? 信じられねえとは思いますが、アイツはマジで古代兵器には興味がねえから、ある程度は安心していいと思うぜ」

「ええ、ありがとう、フランキー。流石にあそこまで眼中にないって態度を取られたら、気持ちも落ち着くわ。どうやら嘘や冗談ではなく、

本当に興味がないという感じだったしね」

最初こそ恐怖に青ざめていたロビンだったが、スパンダムは最初に宣言した通りロビンに一切興味は無いのか、気にする素振りすらなかった。

それが逆にロビンにとっては安心できる態度であり、少なくとも最初に言った通り積極的にロビンを捕らえようとしたりとか、そういうことは考えていないと理解することができた。

「……海は広いな、あんな化け物も居るとは……」

「なんだマリモ、ビビったのか？」

「はっ、いいように懐柔されてた面白眉毛がなに言ってるやがる」

「……なんだとテメエ、下ろすぞ」

「……やってみろ」

いつも通りの調子で喧嘩を始めるゾロとサンジを横目に、少し離れた場所ではブルックが呟くように告げる。

「いやはや、とんでもない方ですね。私、見ているだけで背筋が凍る思いでした……私、凍る筋無いんですけどね！ ヨホホホ！」

「俺は、すげえいい奴だと思っぞ。だって本くれたし！」

「確かに、少なくとも攻撃的な方という感じでは無かったですね」

スパンダムから貰った本を両手で抱えながら喜ぶチョッパーに対し、ブルックも骨の顔で苦笑を浮かべた。

猫の成長

麦わらの一味との遭遇は当たり前前ではあるが、無事に終わった。そもそも、俺の方に敵対する気がないので敵対する結果にはなり得ない。

麦わらの一味は基本善人であるし、そもそも世界政府に積極的に喧嘩を売るような者たちでもない。

ウタの手紙も無事に渡したし、ついでに欲しいと思っていたランブルボールも手に入れた。原作においてはコミカルな面や可愛らしさが強調されているが、チョッパーは掛け値なしに天才だと思っている。

唯一6段階の変身を可能とするランブルボールを自力で作りに出したのもそうだが、2年後に至ってはランブルボール無しで6段階に変身するどころか、それぞれ目的に合わせてカスタマイズまでしている。

それだけではなく、スリラーバークでアレだけ血をまき散らしていたゾロを一日で酒が飲めるほどに回復させる。未知のウイルスにその場に持ち合わせたものでワクチンを作る。カイドウにやられて瀕死だったゾロを、短時間でキングと戦えるまでに回復させると……言い出したらキリがないレベルだ。

まあ、ランブルボールを譲ってもらおう代わりにチョッパーの懸賞金についてどうにかすることになったが、これも問題はない。

チョッパーの懸賞金が低い理由は諸説あるし、俺は手配書の発行は部署が完全に違うので細かい理由までは知らないが、俺としては一番有力なのはただの動物を偽って差し出してくる可能性を危惧して、低くしているというものだ。

実際ベポも500ベリーという懸賞金だったので、信憑性は高いとは思いますが……チョッパーに関しては大丈夫だ。

ベポはまだ分かる。アレは見た目も体躯もほぼ白熊と言っているし、高額な懸賞金を付けたらベポと偽って白熊の死体を持つてくる可

能性もありえるだろう。

だが、チョツパーの手配書に関して、あの写真を見てトナカイかタヌキを狩って持つてくる奴がいたら、俺はソイツの目と頭を疑う。写真がトナカイの形態ならともかく、あの形態ではただ「奇妙な見た目の生物」としか思わない。

初見でアレをトナカイと判断できる奴はまあ居ないだろうし、たぬき呼ばわりされることもあるが……たぬきとも別に似ていない。

なので懸賞金を高くしても、似た動物を連れてくるというのはほぼ不可能だろうし、問題ない筈だ。どうしても問題なら、人間サイズの形態や後のモンスターポイントの形態の写真を使えばいい……あと立場的に、ごり押したとしても懸賞金ぐらい変更できるとは思う。

そんなことを考えつつ、目の前に鎮座する巨大な物体を見てため息を吐いた。

「……それで、これはなんだ？」

「新型パシフィスタ。『PX—PE』じゃ！」

「PE？」

「パンダエディションじゃ——あだだだだ!」

リスにアイアンクローをかましつつ、バーソロミューくまにそっくりなパシフィスタ……の、カラーリングがパンダっぽくなっているものを見る。

くまなのにパンダとは……呆れて言葉もないが、それ以上に気になることがひとつ。

「それで、そのPX—PEとやらが、俺の家の地下に置いてある理由は？」

「えええ、その前に手を離してほし——いだだ。分かった！ このまま言う！ いや……別に大した理由じゃないぞ、エッグヘッドに帰らずにここで研究をしていたら、正がまあ、うるさくてな。勝手なことをし過ぎだとか、せめて同期しに戻れとか、もう、連絡のたびにネチネチとな」

「……どうしようもないほどの正論じゃないか」

「まあ、それであんまりにうるさいから、戻りはせんが研究はちゃんと

進めるから、わしが進めていた研究の品をこっちに送れと言って、届いたから作ってた感じじゃな！」

俺に頭を掴まれたままドヤ顔を浮かべるリリスを見てため息を吐く。そう、コイツは以前の肉体改造の方法を教え、俺とポチの細胞を少し提供したあと、一度もエッグヘッドには帰らずここに居続けたいる。

ベガパンクの猫は日に一度、体験などを同期するのだが……さすがに個人の一日の体験などという膨大なデータの送受信には、距離の限界があるみたいで少なくともエニエスロビーからでは行えない。

なのでコイツはずっと他の猫とも同期せずに、ここに居座っている感じであり、シャカの苦勞が窺える。

「それで、その研究がこのPX—PEというわけか……」

「その通り！ このPX—PEは、従来のパシフィスタを強化改良したもので、その戦闘力は通常のパシフィスタの5倍以上！ まあ、製作費は7倍かかるから、パシフィスタで対処できない強敵用という感じじゃな」

「……なるほど、コンセプト的には納得できる」

「徹底的に強度とパワーを上げて、レーザー兵器なんかを搭載せずに近接戦に特化させた。まあ、遠距離攻撃は他のパシフィスタに援護させればいいからな」

たしかに、通常のパシフィスタを破壊できるレベルの相手に対して、強化型を当てて通常機で援護するというのはコンセプトとして正しいし、実際に有効だろう。

カラーリングがパンダなのだけ、納得はできないが……まあ、いいだろう。

「それをここで作っていたのか？」

「いや、元々ほぼ完成はしていたんじやが、最後の仕上げに時間がかかってな」

「仕上げ？」

「……黒と白の配色の割合に悩んでいてな」

「相変わらず訳の分からん完璧主義だな。まあ、それはいいとして、コ

レを見せるためだけにわざわざ呼んだのか?」

リリスが妙なところで完璧主義なのは知っているので、パンダカラーの配色を悩んでいたと聞いても納得できる。だが、それはそれとして、今回俺にコレを見せた理由はなんだろうか?

パシフィスタはCPではなく海軍に配備される兵器であり、俺にプレゼンする意味はない。

「いや、ちよつと強度実験に付き合っただけでな……あつ、これじゃないぞ!? コレ、マジで高いからな! 壊さないでくれ!!」

頭を掴んでいたリリスの手を離すと、リリスは研究室にあるモニターに近付きながら操作する。すると壁がスライドして、いくつかのプレートのようなものが出てきた。

……本当にコイツ、人の家の地下を好き勝手に改造してやがるな。

「……このプレート……まあ、新型装甲に使うと思ってるものなんじゃが、いろいろデータが欲しくてな。まず一枚目は壊してみたい。二枚目はへこませる程度、三枚目は壊れない程度……パンダは力加減も完璧じゃし、できるじゃろ?」

「ふむ……まあ、いいだろう」

リリスがエニスロビーに居座っているのをいいことに、いろいろと研究もさせているので、このぐらいの要望は聞いてやっても問題はない。

まず最初に一枚目のプレートの前に立つ。プレートはかなり分厚く、軽く触れてみたがかなりの硬さだ。

「壊し方に指定はあるか?」

「跡形もなくなるとか、そういうのは止めて欲しいな。それ以外は特にない」

「そうか、ならこれでいいか……死獣^{しじゆう}」

俺が呟いて腕を振るった瞬間、目の前のプレートに大きな円状の穴が開いた。

「……パンダ、なんじゃその凄いの? 新技か!」

「いや、六王覇銃は規模が大きく対単体には向かない。指銃は暗殺には適しているが、急所を正確に撃ち抜かないと決定打になりにくい。

これは正面切って、雑にかつ確実に相手を処理する時のための技だ」
「詳しく、説明たのむ！」

「大した原理は無いぞ？ 指銃を応用して撃つパンチでジユゴンというものがある。これは、そのジユゴンに回転を加えて貫通力を高めたものだ」

「あくオチが読めてきたんじやが、それはつまり……」

「早い話が、ただのコークスクリューパンチだ」

「……お前ただのパンチでこんなことできるの？ マジで、全身兵器じゃないか……」

呆れたようなことを言いつつも、嬉しそうにデータを取っているリリスを横目に、ある程度要望に応えつつしばらく実験に付き合った。

・***

実験が終わり、モニターに向かうリリスを眺めていると、リリスの通信機が着信を知らせ、リリスはデータ入力しながら通信を始めた。

「なんじや、正！^{シヤカ} 何度言われようとわしは戻らんぞ。わしの頭はいまパンダ一色じやからな！ 研究成果は送ってやつとるし、資料も送ったじやろうが……なに？ 想が？^{エンジン} うるさい、ハイエナめ！ わしのパンダじやぞ!! 資料だけで満足しとれ！ だいたい——あつ、パンダ、なにをする!？」

……どういふ会話だ。通信機に怒鳴るリリスに呆れつつ、俺はリリスの手から通信機を取って耳に当てる。

「シヤカ、聞こえるか？ 俺だ」

『ああ、スパンダムか……悪が迷惑をかけてすまないな』

「いや、それは構わないが……同期が必要ななら、強制的にそちらに連れて行こうか？」

『……月に1度で構わないので、同期だけしに連れてきてくれると助かる』

「わかった。そうしよう。なかなか、手を焼いているみたいだな」

俺はパンクハザードに足を運んだりもしていたので、シャカとも面識はある。主に話すのはリリスではあるし、他の猫サテライトと直接会ったことは無いが……。

『たしかに手は焼いているが、我らの中で一番面白い変化を遂げているのが悪リリスであるのは否定できない』

「ふむ」

『お前と接することによって、かなり思考に変化が起きているみたいでな。以前より勝手な行動が増えたが、他の猫サテライトに比べ、発想力や開発力も飛びぬけて成長しているな。研究成果も悪リリスが圧倒的だから、文句も言い辛い。なんというか、猫サテライトの悪ではなく、リリスというひとりの科学者として完成しつつあるのは非常に興味深い。立場上好き勝手しろとは言えないが、私も本体ステラも悪リリスの今後には期待している』

少し小声だったのは、近くにいるリリスに聞こえないようにするためだろう。リリスが聞けば、これ幸いと好き勝手しまくと分かっているのだろう。

なんというか視点が親のような……まあ、ある意味ではベガパンクはリリスの親と言ってもいいかもしれないが……。

そんなことを考えていると、通信機の先のシャカが、静かな声で告げた。

『……スパンダム。私は願う……君が世界を敵と定める日が来ないことを……』

「願うのは自由だ。好きにしろ」

『ああ、それでは、悪リリスを頼む』

そう言っつて、通信は終了した。世界を敵と定める日か……俺に訪れるであろう二通りの未来のうちのひとつではあるが……さて、どうなることやら。

時代の移り変わり

エニエスロビーの長官室で、俺は一枚の報告書を見ながら考え込んでいた。コレはいったいどういう状況だと、頭に湧き上がってくるのは疑問が多い。

まず前提としてシャボンディ諸島にて、ルフィによる天竜人殴打事件は発生した。それは問題ない。原作通りの展開だし、くまが現れて麦わらの一味を逃がしたという報告もあるので、原作通りに進んでいくはずだ。

しかし、黒ひげを始末したことによりエースは海軍に捕らえられてはいない。そしてエースが捕らえられていないのであれば、インペルダウン編も発生しない。

なので、予想として海賊連合のような補填となるイベントが発生するのではないかと予想はしていたが……まさか、ルフィが黄猿と再び戦うことになるとは思わなかった。

場所的にはアマゾンリリーからシャボンディ諸島の間にある場所なので、ルフィが飛ばされたのは原作と同じようにアマゾンリリーだろう。だが、その後の流れが大きく違う。

場所的に考えて、エースの件がないため真っ直ぐシャボンディ諸島に向かおうとしていたのだろうが、その途中で天竜人にも通じていると思われる闇のブローカーと戦ったらしい。ボア・ハンコックが居たという情報はないので、はぐれた先で戦いに発展したと考えるべきか……。

しかも、その戦闘においてルフィの援護としてエースとジンベエが加わった。タマの集めた情報によると、どうもそのブローカーは過去にフィッシュタイガーが天竜人の奴隷となった件に関わっていたようで、ジンベエにも戦う理由が存在した。

だが天竜人に通じているブローカーであるなら、当然海軍にも伝手があり、更にルフィは天竜人を殴り飛ばす事件を起こしているため、その場に黄猿が現れた。シャボンディに続いて、黄猿も忙しいこと

だ。

ルフィ、エース、ジンベエの3人と黄猿の戦いとなったが、少なくともそのメンバーの中では覇気が使えないルフィは一步劣ると言っ
てよく、劣勢に追い込まれたようだ。

そこへ、くまより情報を得ていたレイリーが現れたことで形勢は逆
転、闇ブローカーは壊滅し、黄猿は撤退することとなった。

この件でおそらくジンベエは七武海の地位を追われることとなる
だろうが、本人も覚悟の上だろう。

まあ、その流れはいいとして……問題は、これがインペルダウンや
頂上戦争の代わりになっているかといえは……なっていない。

ただ、要点は抑えている印象だ。ジンベエが七武海を抜けること、
ルフィが己の力不足を実感することによる修行フラグ、師匠となるレ
イリー到着……2年後に向けての準備という意味では、最低限必要な
ものは揃っている。

この報告を見て、俺が思ったのは……いよいよ運命の修正力をもつ
てしても、修正が不可能になってきたかというものだった。

エニエスロビー編はまだなんとかなった。ロビンとの絆、フラン
キーの加入、サウザンドサニー号の入手……ここさえどうにかなれ
ば、敵はCP9である必要は無かった。

だが、俺がティーチを始末したことでインペルダウン編と頂上戦争
編の条件は消失した。さらに、俺はエースにトットムジカの力で作っ
た監視を付けており、もしエースが海軍に捕らえられるような展開に
なりそうであれば介入するつもりだった。

結果として運命でも修正することは不可能であり、最低限必要な条
件だけを満たす形になったわけか……この感じであれば、頂上戦争が
発生することは無く白ひげも生存したままだ。

おそらくここからは、原作と大きく展開が変わってくる可能性が高
い。なぜなら、ここで原作通りに2年間の修業期間ができたとして
も、魚人島編はともかく、パンクハザード編は発生しない。

「……隊長、クザンさんが隊長に相談したいことがあるみたいで、明日
時間があるか尋ねてきました」

「クザンが？ 分かった。明日の午後時間に時間を作る」

「了解です。詳細な時刻は後ほど連絡すると伝えておきます」

「ああ、頼む」

コーヒーを用意しながら告げるポチの言葉に返答する。話の感じから正式な依頼とかではなく個人的な相談である可能性が高い。

そんなことを考えながら新聞を広げると、そこにはルフィの写真が載っていた。とある国の大規模慰霊式の会場に現れて、会場を荒らしたりするわけでもなくただ黙祷をして去っていったと、その際の写真が掲載されている。

その場に死んだと思われていた冥王レイリーや白ひげ海賊団2番隊長のエース、そして海侠のジンベエがいたことで、大きなニュースとして取り上げられており一面になっている。

ルフィの腕には原作と同じ、3Dにバツが入った3D2Yの文字が書かれており、予想通り2年間の修業は挟むようだ。

「……見た顔ですね」

「なかなか、世間を騒がせているらしい。まあ、そもそも天竜人を殴った件で一躍有名人にはなっていたがな」

「天竜人も危機感が足りませんね。相手が大将や海軍を恐れないなら、海軍大将を脅しに使っても効果は無いと思います……」

「そもそも仮に銃を突きつけられたとして、死ぬか抵抗するかであれば抵抗する奴もいるだろう」

むしろ自棄になった市民や海賊、奴隷などが天竜人を害した過去が無いというのが意外ではある。奴隷にしても首輪が爆発するにしても、命を捨てる覚悟なら自爆特攻くらいは出来そうではある。

いつそ革命軍が天竜人を消すのなら、ワザと奴隷を送り込んで巻き込み自爆とか特攻という手段の方がよさそうではある。

そんなことを考えつつ、長官室にやってきたCP9メンバーたちに任務の割り振りを行う。世間は騒ぎになっていても、こちらとしては割と暇なものである。

・***

翌日クザンとの約束の時間に応接室に行くと、そこにはクザンともうひとり……スモーカーの姿があった。

「待たせたか？」

「いやいや、無理に時間作ってもらったのはこつちなんで……あく紹介しとく、こいつはアレだ。えっと、まあ、なんか、部下的なアレでスモーカー、階級は准将」

「知っている。白猫のスモーカーだろ。ローグタウンから本部に移って精力的に活動しているらしいな。知っているかもしれないが、スパンダムだ」

「よろしくお願いします」

「ああ、こういった場であれば敬語はいい。必要な場面では使ってもらうが……それで？」

ふたりの対面の席に座りながら問いかける。なぜここにスモーカーを連れてきたのか、ある程度予想は出来る。クザンは元々スモーカーには目をかけている印象だった。そして、タイミング的に新世界のG1支部に所属を移したいとスモーカーが言ってきた辺りなのだろう。

それらを考えてみると、おのずと理由は分かってくる。

「いやね、コイツは結構将来性のある海兵で、俺も期待してるんだけど……ちよつと因縁の相手が居るらしくて、今後新世界を拠点に活動したいみたいなんだよ。ただ、残念ながら俺の目から見ると実力不足なのは否めない……とここで、スパンダムさんさえよければ鍛えてやってくれないかなあつて思ったわけだ」

「……そちらのスモーカーの意思としてはどうなんだ？」

「アンタが化け物みたいに強えのは分かってる。それに最近どんどん強くなってるクザン大将を鍛えてるのもアンタだって話だ。是非、教わりてえ」

「覚悟は？」

「ある」

真つ直ぐにこちらの目を見て告げるスモーカー。信念の籠ったい

い目をしている。原作においては2年後に満を持して登場するもののローに心臓を抜かれたり、ヴェルゴやドフラミンゴ相手にやられたりと、扱いはどうも不遇だった。

そんなことを考えつつ、俺は抑えていた気配を解放する。そして軽く覇気を混ぜてスモーカーに向けてやると、スモーカーは歯を食いしばり必死に堪えるような表情に変わる。

「もう一度聞いておこう……覚悟は？」

「……ある!!」

本当に僅かとはいえ覇王色を込めた俺の気配の中でもしつかりと宣言したスモーカーを見て、俺は軽く笑みを浮かべつつ気配を抑える。

「いいだろう。時間があるときに顔を出せ、こちらも手が空いていれば鍛えてやろう。ただし翌日には休みを取っておくことだ」

「スモーカー、これマジだぞ。絶対、翌日は休み入れとけよ……ボッコボコにされるからな」

まあ、どのみちパンクハザード編は発生しない可能性が高いので、スモーカーがヴェルゴやドフラミンゴとやり合うかは分からないが……まあ、この際なので、ドフラミンゴとやりあっても完勝できるぐらいいまでは鍛えるか……2年もあるわけだし、覇気の指導もCP9メンバーで慣れたので効率的に行えるだろう。

悪魔の実に関しては、モクモクの実はガスガスの実の下位互換などとも言われるが、ポテンシャル自体は中々に高い。

特にスモーカーの煙は、煙の状態のままに相手を拘束出来たりと物理的な力を発揮しているので、そこに強力な覇気を纏わせられることになれば面白い。

あと、ホワイトブローなど単純に手足を伸ばして攻撃できるものもあるんで、身体能力を鍛えればそれだけ強くなれるポテンシャルはあるだろう。

「あくそっういや、スパンダムさんは、センゴクさんが元帥を辞めるつもりって話は聞いたか？」

「ああ、以前からそろそろ世代交代すべきだと考えていたみたいで、1

年以内ぐらいを目処に後続に譲るつもりらしいな」

そう、実はセンゴクに関しては以前より元帥を退くことを考えている様子だった。頂上戦争が発生しなくとも、そろそろ次の世代にバトンを渡す気の様子で、己は後進の育成などを考えていると合同訓練の際に話していた。

原作通りに大目付になるかどうかまではわからないが、少なくともそう遠くないうちに元帥を退くとのことだ。

「次の元帥は大将の誰かか？」

「ああ、んでまあ、現状は俺かサカズキって話になってる。ボルサリーノの奴が早々に柄じゃないって拒否したからな」

「その言い方だと、お前はやる気があるように聞こえるな」

「あくまあ、いろいろあつて少しだけ昔の情熱とか取り戻したりしたんで……やつてみようかなって気持ちはあるな。どう転ぶかは、まだ分かんねえが」

「なるほどな……まあ、せいぜい頑張ることだ」

実際どうなるか……原作通りであれば赤犬が次期元帥だが、クザンは珍しくやる気になってるみたいだ。それも、赤犬を元帥にさせる気は無いという感じではなく、自分もやりたいことがあるから元帥になりたいと、意欲的な印象……これは、原作とは結果も変わってくるかもしれない。

……いい加減、俺の原作知識も役に立たなくなる日も近いかもしれないな。

この世界で得たもの

朝起きて自分の部屋から一階に降り、洗面所で顔を洗ってからリビングに向かうと、絶妙なタイミングでポチが朝食を用意していた。

「おはようございます、隊長」

「ああ、コーヒーも頼む」

「はいー」

俺の好みにピッタリと合った朝食を食べつつ、コーヒーを飲んでみると、完全に住み着いているリリスがやってくる。こちらは結構眠そうである。

「相変わらず、眠そうな顔だな」

「ううむ、^{ヨク}欲と同期できんので、睡眠や食事が必要なのは若干不便じゃな。まあ、美味しい食事を食べられると思えば利点でもあるが……」

リリスはすっかりこつちで生活して、月に一度同期のためにエッグヘッドに戻るとい生活に慣れた感じだ。まあ、もう1年も住み着いているので、それは慣れるだろう。

おかげで、地下の研究所はどんどん拡大しているが……相変わらずの様子のリリスに若干呆れつつも、食事を終わらせ俺とポチは司法の塔へと向かう。

司法の塔の長官室に辿り着くと、いつものように書類のタワーが迎えてくれる。最近は海軍の元帥が交代したりと、いろいろあったので書類の量も普段の1.5倍ほどあるように見える。

まあ、それでも大した時間がかかるわけでもないのでさっさと処理をしてしまうことにする。

現在は原作においてはルフイたちが修業を始めて折り返しの1年付近であり、世界的な話で言えば割と平和と言ってもいい。

もちろん新世界での最悪の世代の活動などもあるが、革命軍の行動は大人しくあまりCP9として介入するような件は少ない。まあ、それでもちよくちよくと大きい目の任務もあるので、諦めたりしたという

わけでは無いのだろうか……。

海軍に関しては、かねてからの予定通りセンゴクが元帥を辞して、後継にはクザンを推薦。赤犬……サカズキも多くの支持を得て、対抗候補として名乗りを上げた。

両者の支持層は真つ二つと言っている割合であり、話し合いだけでは新元帥は決まらず。最終的には原作と同じように両者の決闘にまで発展した。

そしてその決闘において……『クザンが圧勝』したため、新元帥はクザンに決定した。

しかし、だからと言って赤犬が海軍を抜けたりということもなく、まるでガープとセンゴクの関係のように元帥であるクザンを叱咤しつつもサポートしていたりしており、ダラけるクザンをサカズキが怒鳴りつけ、ボルサリーノが宥めるというのが定番になりつつある様子だった。

そのことに関してクザンは「まあ、合わない部分はあるけど、向いてる方向が同じなら協力はできるってことで」と語っており、なんだからでサカズキとの仲も悪くはない感じだった。

「ははは、まあ、そう落ち込むなジャブラ」

「て、てめえ、フィズ……嬉しそうなツラしやがって……」

「なんだアレは？」

「チャパパパ、ジャブラがギャサリンに告白して振られた話に関してだ」

長官室に集まってきたいたCP9メンバーたちが、なにやら楽しそうに話している。内容的には、原作からは少し時期がズレたが、ジャブラがギャサリンに告白して振られるという出来事があり、以前に既に振られているフィズはジャブラを慰めつつも、どこか仲間ができたといった感じの嬉しそうな顔をしている。

それを見てブルーノが呆れた表情を浮かべており、エニエスロビー中に話を広げた犯人であるフクロウが笑っている。

「むしろ、まだ告白してなかったのかと驚いたぐらいじゃ」

「初めから勝算は皆無に等しかったとはいえ、本当に長く引つ張った

ものよね」

「あくよよいっ！ たしかにくあく予想されていた結果!!」

「うるせえぞテメェら!!」

カク、カリファ、クマドリも当然ジャブラの顛末はフクロウから聞いて知っており、こちらはどこか呆れた様子だった。

まあ、ギャサリンは普段から面食いでありルッチが好きだと公言しており、ジャブラに可能性が無いことは多くの者が知っていたわけだが……。

「……くそう、俺の一体なになが駄目なんだ」

「鏡を見ろ、そこにすべての答えが詰まっている」

「てめえ、ルッチ……いまの俺に喧嘩を売るなんていい度胸じゃねえか、ぶっ飛ばすぞー!」

「フツ、やれもしないことを口に出すなよ。滑稽だぞ」

「なんだと、ちよつと先に覚醒しやがったからって偉そうに……見てろよ、俺もすぐに覚醒してやるからな!」

ルッチは少し前に悪魔の実の能力が覚醒しており、その戦闘力を大幅に上げている。他のCP9メンバーも、リリスの協力によって効果を下げつつもリスクを大幅に抑えることに成功した肉体改造によって、相当に強くなっているのだが……やはりルッチは、頭ひとつ以上抜けている。

しかしそれにしても、最近暇なせいで全員集合していることも多くなったな。定期的に行う合同訓練や情報交換によって海軍や政府の全体的なレベル自体が上がっていることもあり、あまりCP9メンバーが動くような事態になること自体も減っている。

平和なのはいいことではあるが、暇すぎるのも考えものだと、そう思いながら書類を処理していると、ふと一枚の指令書が目にとまった。

「……お前ら、よかったな。久々に大きめの任務だ」

「それはいい。いい加減、退屈を持て余していたところだ」

俺の言葉に、真つ先に反応したルッチがニヤリと笑みを浮かべる。久々に大きな国の反乱軍を潰す任務であり、話を聞いたCP9メン

バーたちも嬉しそうな様子だった。

まあ、あと1年経って麦わらの一味が再稼働し始めれば、事件も増えてくるのではないかと思うが……。

「……とりあえず、夜間の任務になるからな。お前たちは12時から20時は休みとする。21時に集合して任務に向かう。しつかり体を休めておけ」

『了解』

・***

集合時間までまだ少しあるタイミングで、俺はなんとなく司法の塔の屋上に来ていた。ポケットから棒付きキャンディーを取り出し、ひとつを後方のポチに投げ、包装を破って啜える。

エニエスロビーに夜は無いので、20時を過ぎていても空は明るい。エニエスロビーの改修も問題なく終わり、海列車も以前より遙かに多い本数が行き来している。少なくとも原作のエニエスロビーとは全く違う。

なんというか、クザンが元帥になったこともそうだが、もう新世界編においては俺の原作知識は役に立たないと言っただろう。

まあ、そもそも俺はワンピースが完結する前に死んだので、最終的な結末がどうなるかを知らないのだから、仮に原作通りに進んだとしても、分からない部分も多いのだが……別に俺の目的が変わるわけでは無いので、そこまで重要ではない。

以前トットムジカと融合した際にも考えたが、俺に訪れる結果は二通り……世界に絶望するか、この世界で希望を得るか……俺の願いが叶うという未来は、無い。

ああ、分かっている。仮に別世界、上位世界……転生前に俺がいた世界に戻ることができたとしても、スパンダムの姿のまま戻っても、俺の欲しいものは手にはいかない。

では、仮にかつての世界に戻り、姿なども以前のものに戻ったとしたらどうだろうか？ この世界で何十年と生き、価値観や思考も大き

く変わった状態であつてのよゝうな生活に戻れるかといへば、不可能だろゝ。

ならばもつと極端に、全てが巻き戻りあの時の場所に元の姿で戻り、この世界での記憶もすべて消えたとする。そうしたら俺は求めているものを得られるかといへば……答えは否だ。

なぜなら、俺はそれがどれだけ大切で尊かつたのかに気付いたのは、失つたからであり……すべてがあゝの頃に戻つたとしても、いまの俺が渴望している失つたことで大切だと気付いた、奪われたと感じている幸福を再び得る結末にはならない。

それがどれだけ儂く大切なものであるかに気付かないまま、同じよゝうな日々を過ごすことだろう。

そう……結局どのパターンであつても、俺が求めているものを得られることは無い。俺が進み続ける道の先にゴールはない。そんな事にはずつと前から気付いていた。ただそれでも、止まることができないだけだ。

渴望が突き動かす。諦め切ることができない……我ながら、なんとも困つたものだ。

そんなことを考えながらなんとなく後ろを振り返ると、ポチがなんとも緩い笑顔で餌を舐めているのが見えた。

思い返してみれば、コイツとの付き合いも長くなつたものだ。初めの感覚としては、扱いやすい駒が手に入ったといった感じだった。

こちらに対して信仰を捧げている相手は扱いやすくて便利だった。育ててみれば、思つた以上に優秀でありいい拾い物をしたと感じた。

ただ、いつからか……コイツは俺の領域の内側に入つていた。自分さえよければどうでもいい、己が幸福なら他者がどうなろうと構わ無い。そう思い続けていたし、いまもそう思っている。

だが、ポチはもう俺にとつて必要な存在という認識であり、ポチを手放す気は無い。仮にポチに危害を加えようとする者が居たとするなら、俺はそれを俺への敵対と認識するだろう。

……得るつもりは無かつた。自分以外の大切なものなど……どうせ、俺の目的はこの世界には無いのだ。この世界で、己以外に大切だ

と思うものを得ることなど枷にしかならないと……だが、思うようにはいかないものだ。そして、俺自身それを不快とは感じず、受け入れている。

「……分らないものだな」

「はえ？」

呟くように告げた俺の言葉に、ポチはコテンと首を傾げる。昔から変わらないその様子に、思わず苦笑がこぼれたのを感じて……同時に、少し驚愕した。

俺はいま……『振り返った』のか？

物理的な話ではない。精神的な話だ。俺はいまポチを見て、過去の思い出を振り返った。懐かしいと感じながら……自分でも止まることが出来ず、ただ暴走するように前だけを見て進み続けていたはずの俺が、一時的とはいえ立ち止まって己が歩いてきた過去を振り返った。

一時的なものではあるだろう。俺の心の渴望は癒えていないし、まだ俺の中で一番の望みは変わっていない。だが、それでも……確かにいま、俺は自分が一時でも立ち止まったと、そう感じた。

「ふ、ふふふ……ははは」

「隊長？」

「いや、なんでもない」

「わ、わわっ!？」

思わず笑みがこぼれて、ポチの頭を少し雑に撫でる。突然のことに驚きつつも、ポチは後ろ髪を振っており、嬉しそうな様子だった。

なにかが変わったわけでは無い。俺に訪れる結末は二通りのままで、俺が求めているものも変わってはいない。

ただ、そうだな……どうやら、ひとまず……世界に絶望するという心配はしなくても、よさそうだと……そう思えた。

「……さて、そろそろ集合時間だな。行くぞ、ポチ」

「はいー」

俺の感情の変化を読み取ったのか、魂の中のトットムジカも喜んでいるのを感じた。どうやら俺の相棒も、ひとまずは俺と同じように、

世界に絶望ではなく希望を感じ始めているようだ。

これからどうなっていくのか分からないが……少し、楽しみではある。心境が変われば世界の見え方も変わる。これから先は、いままでよりもう少し……この世界を楽しむことが出来そうな気がした。

ポチと共に移動して、CP9メンバーがいる待機室に到着すると、全員が綺麗に整列して俺の前に立った。先のことを……未来を考えるのは、なかなかどうして楽しいものではあるが、そういうのはウイスキーでも傾けながら行うべきだろう。

とりあえずいまは、CPとしての仕事をしつかりこなすとするか……。

再び歩き出す。渴望を胸に、失った過去を未来の先へ見据えて……現在、この道の行きつく先は全て行き止まりではあるが、いつか目指す先が変わると……そんな確信を感じながら。

「集まっているな。それでは行くとするか——闇の正義を、執行する」

『了解』

番外編・忠犬の一日

CP9司令補佐官ポーラ・チエルシーの朝は早い。彼女は早朝に目を覚ますと、洗面所などで身だしなみを整えたあと朝食の用意に取り掛かる。

彼女はスパンダムの家の家事を一手に任されており、スパンダムを心の底から敬愛する彼女にとっては非常にやりがいのある仕事といえる。

……実際のところは、任されたというよりは勝手にやっってるうちに定着したというのが正しいのだが……そもそも、チエルシーは勝手にスパンダムの家に引っ越してきて住み着いている状態である。

尤も、いまとなってはリリスも似たように勝手に住み着いている上、最近ではタマもちよくちよく泊りに来ているので、勝手に住み着いているのはチエルシーに限った話ではない。もちろん、家主であるスパンダムはたいして気にしておらず、己にとって有益な相手なら余っている部屋は好きに使えばいいというようなスタンスだ。

スパンダムはコーヒーを好むため、朝食もコーヒーと共に食べることを想定して作る。まずは、前日に仕込んで冷蔵庫で低温長時間発酵させていたパン生地を取り出し、常温に戻したあとで整形してオーブンに入れる。

パンを焼いている間に材料を用意して下ごしらえも済ませてしまおうが、すぐに調理には取り掛からない。いま作り出すと、スパンダムが朝食を食べる時間に冷めてしまうのでタイミングが重要だ。

スパンダムは時間にはかなり正確でありいつも決まった時間に起床するので、長い付き合いのチエルシーにとってはどのタイミングで調理を始めればいいのかは簡単に分かる。

下ごしらえを終えたあとはコーヒーの準備である。まずはコーヒー豆を選ぶ。焙煎しておいた何種類もの豆から、いくつかを選びブレンドする。

朝食に合わせるコーヒーなので後味がスッキリしたものを選択し、

豆を挽く。スパンドムは濃い目の味わいを好むので、挽き方はやや細挽きになるようにコーヒーミルを調整する。どのぐらい細挽きにするかは、その日によって違いチエルシーの経験が生かされる場面だ。そうして、コーヒーを淹れる準備が整えば、手早く調理を開始する。自家製ハムを数枚カットし、スクランブルエッグを添え、ミニサラダと焼きたてのパンを用意すれば完成だ。

スパンドムはシンプルなお朝食が好みなので、具材の数はこのぐらいが理想である。そうして、朝食の用意が出来て、コーヒーの用意ができるタイミングで、スパンドムが姿を現す。

「おはようございます、隊長！」

「ああ、おはよう。ポチ、コーヒーを頼む」

「はい！」

軽く挨拶を交わしたあとで、コーヒーをスパンドムの前に置き、続けて朝食をテーブルに並べていく。そして自分の分の朝食も用意、飲み物としてカフェオレも用意して、スパンドムの向かいの席に座る。すると、それを待っていたかのようにスパンドムが朝食を食べ始めた。

「……今日のパンはいい出来だな」

「少し小麦粉を変えてみたんですが、いかがですか？」

「いい味だ。俺としては好みの味だな」

スパンドムはいつものように、チエルシーの料理を簡潔に褒めてくれることが多い。そしてそれはチエルシーにとっても嬉しい言葉であり、彼女の後ろ髪がブンブンと左右に揺れていたのは言うまでもない。

朝食を食べ終えて食器の片づけを終えると、出勤の時間になる。現在この家にもうひとり住み着いているリリスは、起きる時間はまちなちなのであり、今日はどうやら遅くなりそうだったのでリリスの分の朝食は用意して冷蔵庫に入れておく。

居住区画から職場である司法の塔までの歩きながら、スパンドムと軽く雑談を行うこの通勤時間はチエルシーにとって非常に幸せな時間だ。

「そういえば、小麦粉を新しく取り寄せる際にパスタも取り寄せたんですが、お昼にいかがでしょう？」

「悪くないな。今日は……カルボナーラにしてくれ」

「はいー」

司法の塔にも食堂はあるのだが、スパンダムの食事に関してはチエルシーが3食とも作っている。こうして朝の通勤中に、チエルシーが食材や料理の提案をすればスパンダムは「なんでもいい」と言ったりせず、希望を伝えてくれるのでチエルシーとしては非常にやりやすい。

嬉しそうに後ろ髪を振りながらチエルシーは、司法の塔に着くまでの間スパンダムとの会話を心から楽しんだ。

司法の塔について長官室に着くと、まずスパンダムが始めるのは書類仕事だ。エニエスロビーの長であり、CPの実質的なトップでもあるスパンダムの仕事は非常に多く、当然ながら補佐を務めるチエルシーの仕事も多い。

スパンダムが凄まじい速度で処理する書類を、種類ごとに振り分けて部署に届けたり、必要な手配を行ったりと、その仕事は多岐に渡るのだが、チエルシーは慣れたものである。

ちなみに、異常と言つていいレベルであるスパンダムの書類処理速度についていけるのは、CP内でもチエルシーぐらいである。

「それじゃあ、こちらの書類は各部署に届けておきますね」

「ああ、頼む」

ある程度書類が進むと、チエルシーは各部署に書類を届けてから、長官室の隣にある補佐官室に移動する。尤も補佐官室と名は付いているが、実質キッチンの様な部屋であり、リリスの協力を得てチエルシー専用改装しているのだから凝った料理でもここで作ることができるだけの設備はある。

スパンダムは書類仕事が終わると、新聞を読みながらコーヒーを飲むのが日課なので、コーヒーを用意する。今回は書類仕事のあとなのでリラックスできるように、香りの良い豆を選んで準備しておく。

「ポチ、コーヒーを頼む」

「はい。」

この言葉は書類仕事が終わったという合図でもあるので、チエルシーはコーヒーをスパンダムデスクに置き、処理の終わった書類を回収する。

部署などに持っていく必要のある書類ではなく、送付する書類ばかりだったので、それぞれ封筒に入れて郵送物を纏めている箱に入れる。

「チエルシー、私もコーヒーを貰っていいかしら？」

「はい。他にも飲む人は居ますか？」

カリファを始めとして、長官室に集まっているCP9メンバーに尋ねると全員の手が上がったので、全員分のコーヒーを用意して運ぶ。

もちろん自分用のカフェオレも用意し、スパンダムのデスクと隣接しているチエルシー用のデスクの椅子に座って飲む。

今日は他に急ぐ仕事もないので、午後までは暇な時間が続いたため、CP9メンバーたちと他愛のない雑談をしつつ過ごす。

そして、ある程度昼が近づいたタイミングで立ち上がりつつ、CP9メンバーに声をかける。

「カルボナーラの予定ですが？」

その一言を聞いて、何人かの手が上がる。チエルシーがスパンダムの昼食を作ることは全員が知っており、CP9メンバーたちの中では、献立を聞いて同じものを希望するなら手を上げる。食堂に行ったり、買い物に行ったりするのであれば手を上げないという暗黙のルールがある。

「俺は買いに出るつもりだが？」

「……なら、ついでに豆を買ってきてくれ、少量でいい」

「ああ、ハットリ用のだな。わかった」

CP9メンバーたちは基本的になんだかんだで仲がいいので、買い物に行く者は宣言してついでに買って来てほしいものがあれば頼むという流れがある。

今回はフィズが買い物に出るとのことと、ルッチがハットリのおやつを頼んでいた。

・***

昼食を食べ終えたあとは、午後からは特に任務等がない場合は鍛錬を行うことが多い。スパンダムの予定が空いている場合は、CP9メンバー全員対スパンダムという形で最初に模擬戦を行う。

もちろんスパンダムはかなり手加減しているが、それでも未だに全員がかりでもまともに一撃を当てたこともない。

「ルッチ、動きが直線的だ。フェイントを入れる。ジャブラ、体幹をフェイクでズラしても視線の動きが分かりやすすぎる。カク、そこは多少の反撃を覚悟でもう一步踏み込め……フィズ、いまの動きはいい。死角を上手く狙えている」

「振り返りもせずにあっさり防いでおいて、よく言うぜ……」

戦闘力上位であるルッチ、ジャブラ、カク、フィズの4人が連携して攻め、他のメンバーがサポートに回る形で攻め立てる。スパンダムが訓練のため動かず防御に徹しているが、どの攻撃もあっさりと捌かれる。

とはいえ、CP9メンバーたちもその程度は分かっている。あくまでこの攻撃は本命を生かすためのものだ。

チエルシーを除いた全員で戦い、なんとかスパンダムに微かでも隙を作り、そこをチエルシーが攻める作戦だ。力を溜め、覇気を研ぎ澄ましつつチエルシーは攻撃のチャンスを見極める。

ほんの僅かゼロコンマ数秒の隙を見逃さないために……そして、しばらくタイミングを伺っていたチエルシーは霸王色の覇気をコントロールして見聞殺しを使い、スツと気配と音を消してスパンダムの死角に回り込み、渾身の拳を放つ。

「……動きは悪くないが、見聞殺しを使うならもっと前からやっておくべきだ。これから死角から攻めますと教えているようなものだぞ」「でしようね——あっ!？」

「そして防がれることも想定済みで、本命は嵐脚。発想はいいが、攻撃の入りの気配を完全には消せてないな」

全力の拳を囫にして、本命は高速の嵐脚……だったが、スパンダムにはそれもお見通しで、振り返らないままで簡単に防がれてしまった。

渾身の攻めを捌かれて本来はショックを受ける場面ではあるが、チエルシーとしてはスパンダムの凄さを再確認できるのは嬉しさしかないのです、心は歓喜に包まれていた。

とはいえ、さすがに訓練中に表情を緩めたりはしないが、後ろ髪は小さく左右に揺れていた。

模擬戦が終わるとそれぞれに改善点や課題などをスパンダムが伝え、そこからはそれぞれ個人や少数で鍛錬を行う。

その際にチエルシーはスパンダムに付いて一緒に鍛錬を行うことが多い。既に世界最強と誰もが認めるほどの力を持ちながらも、スパンダムはストイックに己を鍛え続ける。肉体改造もそうだが、技術の習得にも余念がない。

魚人空手や魚人柔術を始めとした武術や気功術などもそうだが、基本的に徒手空拳での戦闘スタイルではあるが武器も一通り扱えるように鍛錬をしている。

「……少し休憩するか」

「はい。ドリンクを持ってきますね」

「ああ」

休憩する時はこうしてスパンダムが提案して休憩するのだが……長い付き合いのチエルシーは気付いている。スパンダム自身はこの程度の鍛錬では欠片も疲弊しない。

スパンダムが休憩と口にするのは、圧倒的格上であるスパンダムの訓練に付き合っているチエルシーに疲労の色が見えた時だ。

「やっぱり隊長は優しいなあ」とそんなことを考えつつ、チエルシーは上機嫌でドリンクを用意してスパンダムに差し出した。

・***

スパンダムは時間に正確な人間であり、理由がない限り仕事は定時

でキッチリ終わらせる。もちろん急な任務等が入って残業をすることもたまにはあるが、よほどのことが無い限りは定時に上がる。

基本的には部下に残業もさせない。スパンダム曰く「残業しなければ片付かないのであれば、仕事を割り振った上司のミスだ」とのこと。で、エニエスロビーに勤める者たちもスパンダムと同じように基本的に定時上がりである。

スパンダムが司令長官となる前は、勤務時間も割と曖昧で無給だったオイモとカーシーを含め、サービス残業などといったものも横行していたが、着任して数年で駆逐された。

「さて、ポチ。帰るぞ」

「はいー」

仕事が終わった後のスパンダムの行動はまちまちではある。部下を飲みにつれて行ったりすることもあるが、一番多いのはチエルシーと共に買い物をして帰るパターンだ。

ここで買うのは夕食の材料であり、スパンダムとふたりで買い物ができる時間は、チエルシーにとつてとても幸せなものであるのは言うまでもなく、後ろ髪も大きく揺れていた。

「おつ、長官にチエルシーさん。今日はいいい白身魚があるけど、どうだい？」

「確かに、いいですね……ムニエルとかにするのが良さそうです」

「ムニエルか、悪くないな。夕食はそれにするか」

「はい！ それじゃあ、この魚と……付け合わせ用に……」

ふたりがこうして買い物に訪れるのは定番であり、エニエスロビー内で店舗などが並ぶエリアの人たちにとつてもよく見る光景だ。

そもそもとして、長官であるスパンダムはエニエスロビー内を視察して、修繕や要望を聞くことも多いので、エニエスロビーに勤める者でスパンダムの顔を知らないものは存在しない。必然的に、いつもスパンダムに付き従っているチエルシーの顔を知らない者も居ない。

家に戻って、夕食の準備をしていると来客があった。

「お邪魔します」

「タマさん、いらっしやい。夕食はムニエルの予定ですが？」

「あつ、じゃあ、大丈夫なら私も食べたいなく魚好きだし」

「そうなんですか？」

「猫ですから……にゃんにゃん」

どこか胡散臭い笑顔でおどけるタマに苦笑しつつ、チエルシーは多目に買っておいいた魚を使ってタマの分も作り始める。

タマは気まぐれにふらつと訪れる。チエルシーにとつて好みも気も合う相手であり、非常に仲よくしている。

しばらくすると地下で研究をしていたリリスも現れ、4人で夕食を食べることになった。

「……そういえば、リリスちゃん。あの訓練用具、うちにもうちよつと回して欲しいなく」

「ちゃん付けは止めてほしいんじやが……まあ、いくつか余りがあるから好きに持っていけばいい。新しいのを作るのは手間じゃから、嫌じゃ……パンダが作れというなら作るがな」

例によってスパンダム以外は勝手に住み着いているだけではあるのだが、スパンダム本人はまったく気にしない。

当たり前のようにいるリリスやタマに関しても、空いている部屋を好きに使わせている。

夕食を食べ、風呂に入ったあとで、日によってはスパンダムは晩酌を行う。不定期ではあるが、翌日が休みの日は確実に晩酌を行う。

この晩酌にリリスやタマが付き合うかはその時々である。リリスはほぼ酒を飲まず、タマは気まぐれという理由もあるが……それ以上にスパンダムの邪魔をしないようにという気遣いもある。

基本的にスパンダムは静かに酒を楽しむ飲み方を好み、晩酌の時間を邪魔されることを嫌う。それを知っているふたりは、スパンダム側から声をかけてくる場合を除き参加せずに自室や研究室に戻る。リリスに関しては、時折愚痴るために同席したりして、アイアンクローを喰らっているが……。

スパンダムが飲むのはほぼ確実にウイスキーであり、スパンダムにしては珍しくかなり細かな拘りがある。肉体を改造している影響もあって、スパンダムはアルコールで酔うことは無いため量を飲んだり

はせず、ゆつくりと純粹に味を楽しむ飲み方をする。

チエルシーはスパンダムが晩酌の準備を始めると、つまみの用意を始める。スパンダムの好みや飲み方に合わせたつまみを何種類か作った後で、自分用にカクテルを用意する。

本来ならスパンダムと同じくウイスキーを飲みたいところだが、子供舌のチエルシーはどうにもウイスキーの味が苦手で、無理して飲んでもスパンダムにはバレバレなので、諦めて甘いカクテルを飲む。

スパンダムの晩酌の際に、チエルシーは必ずソファアに座っているスパンダムの隣に座る。本来チエルシーは、スパンダムの傍に控えてさえいればいいので、場所や席に拘りはなく、食事などの際にも隣や対面でなければだめというようなことは無い。

だが、この晩酌の際だけは必ず隣に座る。理由としては単純で、そこに座っているとチエルシーにとって幸せな出来事が起こるからである。

晩酌をしている時のスパンダムは基本的に上機嫌であり、隣にチエルシーが座っていると時折手を伸ばして頭を撫でることがある。

そう、チエルシーが晩酌の際にスパンダムの隣に座るのは、頭を撫でて欲しいからと、そういう理由だった。

「ポチ、明日の休暇だが、久しぶりに釣りにでも行くか」

「はい！ 時期的にはセント・ポプラがいいかもしれませんね」

「ああ、そうだな。確かにこの時期は、プッチよりセント・ポプラの方が旬の魚が美味しいな」

「釣った魚を食べるとなると、魚料理が続いてしまうので、ハムかなにか肉系も持つていくのがいいかもしれません」

「確かにな……まあ、セント・ポプラの店で食事してもいいが、鶏肉の美味しい店があったらどう」

「前に行ったお店ですね。確か……」

他愛のない雑談を交わしながらゆつくりと流れるようなこの時間が、チエルシーはすごく好きだった。そして、いつものことではあるが、スパンダムはチエルシーも同行するものとして予定を立てる。

もちろんチエルシーは待機を命じられない限りスパンダムに付い

ていくので、結果としては変わらないのだが……やはり、傍にいとを許されているように感じられるのはとても幸せだった。

CP5時代にその圧倒的な力に焦がれ、傍に仕えるようになってその人柄にも惚れ込み、いまもこうして近くに居たいと願った漆黒の太陽の傍にいとを許されている。

チエルシーが日々こなしている仕事の量は膨大ではあるが、彼女はそれを苦に感じたことは一度もない。というか、チエルシーにとってスパンダムのために働くことはご褒美のようなもので、彼女にしてみれば毎日ほとんどの時間は好きなことだけをしていればいいので、もの凄く充実していた。

そんなことを考えていると、スパンダムはウイスキーを飲み終わり片づけを始めたので、チエルシーも食器などを片付ける。

スパンダムはあまり夜更かしをすることは無い。時間にキツチリしているからか……それとも、自分が寝なければチエルシーが寝ないからかは、分からない。

ただ、眠る前に一言、その日の締めくくるとなる言葉を口にする。

「それじゃ、おやすみ、ポチ」

「はい。おやすみなさい、隊長」

今日も幸せいっぱいの日だったと、チエルシーは心からの笑顔を浮かべて言葉を返した。